大正八年九月廿七日印刷
大正八年九月三十日發行

（豫約出版）

著作者　故　島村抱月

發行者　東京市麴町區飯田町一丁目二番地
株式會社　天佑社
代表者　小林政治

印刷者　東京市神田區三崎町三丁目一番地
楢山定吉

印刷所　東京市神田區三崎町三丁目一番地
友文社

發行所　東京市麴町區飯田町一丁目二番地
株式會社　天佑社
電話番町（長）一一七九番
振替口座東京一〇二二八番

抱月全集第四卷終

れを主張し説明し研究して遂に文藝思潮全面に亘つた一大運動となり、此處に始めて、三十年來の懸案であつた人生と藝術との間の空虛が取り除かれて眞に吾々の生活に密着して、卽ち深い意義のある文藝に行く第一步が確められた。それと共に文壇の趨勢も一變して所謂新しい人がだん〳〵中心に立つやうになり、顏ぶれの上から先づ面目を一新して來た。小說には夏目漱石氏正宗白鳥氏永井荷風氏其の他續々として新しい人が現はれ、今は却つて此等の新しい人々が中心勢力となるに至つてゐる。評論、劇界、詩界、亦た之と同樣である。之等は現に世人の見る所であるから玆に一々其の名を數へることを省く。

但し之等の中には初めから自然主義とは違つた方向へ趨いてゐたのもあり、また最近一二年更らに自然主義以外の、違つた方向に趣かんとする人々も含まれて居る、神祕主義、象徵主義、享樂主義等の名が漸く一般に唱へられ、又前記以外更に若い幾多の作家を出して、明治四十五年は終つたのである。

思ふに自然主義が其の描寫方法の如何に關はらず、現實の生活を基礎とする點に於ては今後永久の最有力た者るべきと共に其の人生觀に於いて捉へ得たと考へた點が、絕望となり、あきらめとなり、利那的生活となつたのには幾多の不滿足がある。此の人生觀の立ち場から自然主義は變ず可き理由を有してゐる。其の捉へんとして居た人生觀が果して神祕であるか、神であるか、宗敎であるか、それとももつと手近かな所にでも落ち着き得るものかは今後の問題として、兎に角其の捉へ得た神祕なり神なりを如何にして現實と切り放さずに吾々に與へ得るかの點に、今後の藝術問題は懸つて居る。今日又は今日後の藝術は捉へ得た何物かを最も密接に現實の生活に附着せしめて吾に々與へる者の支配に歸するであらう。

るものは新派から發動して居る。即ち現在では晶子調以外更に新しい人の種々な調、たとへば極平板な日常語の調子に返つたり、官能派、唯美派など目し得べきものとなつたりして明星脈以後の分脈を示してゐる。

俳句は彼の正岡子規が明治二十三四年に於いて始めて新機運を作つて所謂日本派が天下を風靡して內藤鳴雪氏、高濱虛子氏、河東碧梧桐氏等の人々が今日猶ほ活動を續けて居る。中では虛子氏は近時小說に付き、碧梧桐氏は更に子規以後の諸變化を通過した後の新しい句風を起こすと稱へて居る。子規は客觀の印象と云ふことを力說したが、最近の新傾向を說く人々は更に氣分を詠むと云ふことを唱へて居る。其の他紅葉、小波氏、岡野知十氏、角田竹冷氏等の秋聲會派は日本派に對して溫和な雅典的な句風を保つて一派をなして居る。

（六）

明治四十年から四十五年に亙る時代は一括して自然主義期と言つて可い。詳しく云へば日露戰爭以後思想界が前に述べた如く何等かの深き意義を吾々の現實生活に密着せしめて摑み得たい、さう云ふものを文藝の中から見出したいと云ふ要求の續きとして、本能主義に行かうか、見神主義に行かうといつた結果遂に自然主義に到達したのである。自然主義は云ふ迄もなく現實の生活を基礎として、なるたけ吾々の知識の屆く範圍で最後の眞に到達しやうとする傾向に外ならぬ。それが文藝の上に現はれて客觀的描寫とか獸性的描寫とか個人主義とか本能主義とか、印象主義とか刹那主義とか、あきらめとか絕望とか懷疑とか現實暴露とか無解決とか云ふ提唱になつたのである。『破戒』を書いた島崎藤村氏、『蒲團』を書いた田山花袋氏、『運命』其の他の作を書いた國木田獨步。又評論家として岩野泡鳴氏、長谷川天溪氏、中澤臨川氏、島村抱月などの人々は之

現はれて出た。それに對した舊歌舞伎劇をば夢幻劇と名付けて其の荒唐を指摘した。又一方に所謂壯士劇と呼ばれたものが川上音二郎等に依つて起こされて今日の所謂新派劇を成すと共に、それに應ずる脚本も現はれたけれど文藝上から見て論ずべきものを持つて居ない。只幾何かの飜譯及び飜案劇と、小說の書き直しとが多少の硏究的意義を有して居るのみである。尙ほ坪內氏等の舞踊劇運動も忘るべからざるものである。

最後に詩に就いて見ると、それは外山正一等の新體詩等以後舊來の短歌にあらず、俳句にあらず、漢詩にあらざるものゝ必要と云ふことが明かにされて、彼の山田美妙齋等の言文一致を應用した新體詩の試みとなり、先づ形式上に於いて革新が行はれんとするに當り、一方は落合直文等の國學復興運動に伴ひ同人以下鹽井雨江氏、武島羽衣氏等の優雅な古調を主とするものが一時勢力を得、引き續いては土井晚翠氏等の漢語脈に助けを求めることの多いものが行はれなどして、さまぐの變遷を經た、それと共に音律の上でも多くは七五調、五七調等の古い形が保存せられ、唯僅かに外山正一の朗讀體と稱する無韻律の破格なるものが些つと顏を出した許りで中絕して終つた。內容の上から見れば、之等は比較的古いもので槪して思想感情も不十分であつた、これを一方から補ふたものは島崎藤村氏等の一派の洋詩から得た感化、引き續いては繁野天來氏等の俗謠から思い付いた詩風、それから薄田泣菫氏等の古語復活及びそれに新しい人生觀を託しやうとした詩風等があつて、上田敏、蒲原有明氏等の所謂象徵詩に及ぶ迄が丁度明治四十年期の前後になつて居る。其の他には與謝野鐵幹氏等の詩風、岩野泡鳴氏等の韻律改造運動等も注目すべき詩壇の現象であつた。

短詩としては和歌に落合直文以後の新傾向を追うて遂に鐵幹氏、晶子氏等の明星派と呼ばれたものが新しい傾向の中心となつた、傍ら佐々木信綱氏等の溫和な折衷的歌風、御歌所一派の舊歌風等も行はれて居るが、要するに和歌にも眞に生命あ

遙、紅葉等の俗文的傾向と相結して一時は雅俗折衷體と云ふ如きものが文章の中心文體になつて居たけれどもだん〲言文一致に最後の勝利を占められて、今日では日本の文體の基礎は言文一致、若しくは口語文と呼ばれるものになつたと言つて差し支へない。此の言文一致の變遷は始め專ら語尾の工夫であつて美妙齋等の「です」調、二葉亭等の「だ」調、紅葉等の「である」調、今日と雖も場合に依りて色々に用ゐられ、試みられて居る。その中何れが最も文章にするに適して居るかと云ふ事は猶ほ多くの研究を要することである。始めの中小說のみに用ゐられて居たのが過去十年來論文にも用ゐられ、時に多少の反動的現象はあるに關はらず、大體の趨勢は今後幾年かの後に日本のあらゆる文章を舉げて此の體にする日のあることは疑ひがない。

第二には通俗小說と呼ばれるもの、家庭小說と呼ばれるものにい就て一言するとそれは思軒門下であつた村上浪六氏の「三日月」が明治二十四年頃出た。同じく村井弦齋の「小猫」其の他も之れと前後して出た、次では黑岩涙香氏等の探偵小說、德富蘆花氏、中村春雨氏、菊地幽芳氏等を先鋒とし田口掬汀氏、草村北星氏其の他諸家を數へる家庭小說、塚原澁柿園氏、渡邊霞亭氏其の他の人の歷史小說等到底明白に分類することの出來ない幾多の作品及び作家がある。

第三には脚本、これは彼の古河默阿彌が唯一の過去から現代への橋渡しであつて、寧ろ明治以前の最後の代表者と云へば可い。それでも矢張り二十二三年前後迄中心に立つて左團次、菊五郎等の爲めに「村井長庵」以下幾多の白波物などに江戸時代の世話寫實を見せ、團十郎等の爲めには所謂活歷物を書いて一種の歷史的寫實を見せやうとした。つまり默阿彌にも時代の要求で寫實的精神は入つて居たのである。それが「吉野拾遺名歌譽」を書いた依田學海、「春日局」其の他を書いた福地櫻痴等を通じて益々活歷史的寫實に趨いた。(傍ら坪內逍遙氏の史劇「桐一葉」「牧の方」等は此等の中に一層深い精神を出さうとして

其の中紅葉の『金色夜叉』は紅葉自らの上に見ると彼れが前期の外形的寫實から時世の聲に呼び覺されて何物をか求めんとした最後の解決の作であつて他の作に較ぶれば意義を含ませたものである。けれども是れを廣い文藝の立ち場より見れば其の中に含ませ得た深さと云ふものは未だ淺いものであつて觀念小說の域を幾何も脫して居らぬ。而已ならず其の描寫法に於いても從來の外形的寫實主義、空想的寫實主義の混合と云ふことを多く脫し得なかつた。寧ろ其の前の大作たる『多情多恨』單が純な現實味を基礎として居るだけに其の平坦なる中に深い意義を感ぜしめる點に於いて彼れの最傑作と認められる。けれども紅葉自らとしては『金色夜叉』に其の最後の解決を示したものと見て宜い。即ち此の期で人の注目を呼んだ作品の上では此の時代は遂に深き意義あるものに行き合はずして終つた。

評論の上でも或は理想主義と云ひ、光明主義と云ひ、日本主義と云ひ、時代精神と云ひさまぐ〵の解決を提出したけれども結局ニーチエ等の個人主義、本能主義と宗教家等の見神主義とが其の最上の力となつて次の時代に移つた趣きがある。併し乍ら次の時代即ち四十年期以後の文壇に於いても此の個人主義、本能主義、見神主義が直ちに深き意義として當時の文壇を滿足させる譯には行かなくして稍々躊躇の末、遂に彼の自然主義に往つたのである。

（五）

此の時代以後明治の文藝壇は殆んど面目を一新するのであるから、今此處に入るに先つて前來述べ漏した過去二十餘年の間の文壇の主なる事項を一見して置く必要がある。

第一は文章のことである。これは前にも云つた如く美妙齋、二葉亭等の言文一致と、蘇峰、鷗外、思軒等の飜譯的傾向と、道

風を追うて居た爲めに硯友社一派の作家よりも長い生命を持つて居るやうに見られた。其の他には早く已に當時の所謂新進作家が現はれて紅葉門下には泉鏡花の他小栗風葉、德田秋聲、柳川春葉氏等の諸氏が出で、所謂早稻田派には後藤宙外氏、水谷不倒氏、伊原青々園氏、五十嵐巳千氏、金子筑水氏、綱島梁川氏、島村抱月等が出て、赤門派と呼ばれた方面には高山樗牛氏、姉崎嘲風氏、大町桂月氏、佐々醒雪氏、武島羽衣氏、鹽井雨江氏、土井晩翠氏、上田敏氏、笹川臨風氏、登張竹風氏、樋口龍峽氏等の人々が相次いで出で其の他小杉天外氏、田村松魚氏などが出た。又赤門派の人々は特に『帝國文學』を起こし、早稻田派の人々では『新著月刊』を起し、博文館で『太陽』を出したのは此の前後三四年である。而已ならず、もつと遡つては明治二十六七年頃は北村透谷氏、平田禿木氏、島崎藤村氏、馬場孤蝶氏、戸川秋骨氏等の諸人を主とした雜誌『文學界』現はれて、最も多く此の意義ある文學、深さある文學を要求する聲を專ら感情的哲學的方面から代表して居た。

要するに明治三十年前後の三四年は已に次の時代を呼び起こす動搖の時期に入つたものと見る可きである。而して今述べた觀念小說其の他の諸現象は一括して云へば此の動搖期、過渡期を示して居るものである。猶ほ丁度此の次に彼の日清戰爭がつたことも忘れてはならぬ。而して次の明治三十年から四十年期に入るのである。

（四）

此の期は大體にい於て今迄言つた意義ある深さある何物をか樣々に探し求めた時代であつて、觀念小說其の他の解釋にも滿足し得ず、段々探り求めて遂に到達し得た最も重要な現象は二三を數へ得る。卽ち小說に於いて紅葉の『金色夜叉』、評論に於いて高山樗牛等がニーチエから得て來た個人主義本能主義、綱島梁川等の宗教的に得た見神論此の三つがそれである。

『早稻田文學』及び『しがらみ草紙』に於ける沒理想論などであつた。之等の諸評論は皆當時の創作と互に相呼び應へて文壇を賑はして居た。

（三）

今それ等寫實期に於ける文壇の大體の形勢を考へて見ると其の所謂寫實主義は兎もすれば淺薄な客觀主義、外形主義に流れて部分的な寫實はあつても全體の上に技巧派空想派の形跡が著るしく現はれ、眞の近世的現實主義の生命には遠いものであつた。言はゞ外形的寫實主義に空想主義を加へた樣なものであつた。

此處に於いてか、早くも之れに對する不滿足の聲が一方に起こらざるを得なかつた。即ち其の空想的なものに對しては、もつと正確な寫實が欲しいと云ふ要求が起こり、其の淺薄な外形的寫實に對しては、深い、ある物が欲しいと云ふ要求になつて、譬へばもつと意義ある小說、もつと哲學的な深さのある小說と云ふ樣なものを要求して來た。それと共に今一つは此の期の文學に猶ほ其の跟跡を殘して居た所の不眞面目な遊戲的戲作的空氣、言ひ換へれば人生と文藝との間に空隙のあることが、之等の不滿足の一理由となつてもつと直接に實生活を動す作品が欲しいと云ふ要求ともなつた。而してそれ等の諸要求が生み出した現象は即ち觀念小說、深刻小說、社會小說と云ふ如きものであつた。泉鏡花氏が作つた『夜行巡査』廣津柳浪氏が作つた『今戶心中』內田不知庵氏の『暮れの二十八日』等が、其の例である。之等は何れも明治二十八九年から次の三十年三十一二年に渡つた事柄であつて、其の他には樋口一葉等の感傷的作風及び後藤宙外氏等の心理的作品等も皆此の意義ある、深さある作品の要求に應じて現はれたものと見て宜い。猶ほ前期の作者としては幸田露伴氏の如きは稍々此の後期の要求に近い作

實と云ふ精神の在る所を面白く感じたのであらう、結局は寫實の大勢に合するものとして西鶴は勢力を得たのである。

斯樣にして歐洲的傾向と西鶴趣味との結合した所へ種々な新しい作家が出た。其の中心は尾崎紅葉を主とした硯友社一派である。又それと相對して幸田露伴氏も同じ經脈を辿つて出て來た人と見てよい。其の傍には今言つた西鶴の影響から放れて純粹に歐洲文藝の感化の下に立つて居た人に例へば、『初戀』を書いた矢崎嵯峨廼屋氏『歸省』を書いた宮崎湖處子氏『細君』を書いた坪内逍遙氏、『胡蝶』を書いた山田美妙齋氏、『舞姫』を書いた森鷗外氏及び同じ鷗外氏、長谷川二葉亭、森田思軒氏等の飜譯物等がある之れ等は總括して歐洲文藝の脈に屬するものと見て宜い。

硯友社中心のものでは彼の月刊小說集『新著百種』が主となつて石橋思案、江見水蔭、巖谷小波、廣津柳浪、川上眉山、大橋乙羽等の諸文人が競ひ起つた。紅葉の『色懺悔』其の他の有名な作も此の中から出たし、露伴氏及び之等の作家と全く系統を異にして寧ろ德川期末の系脈を傳へた如き觀ある饗庭篁村氏の作も亦此の中に收められた。それと『都の花』及び『國民之友』は新文學の主な舞臺であつた。それから引き續いて森鷗外氏の『しがらみ草紙』坪内逍遙氏の『早稻田文學』等が純粹の文藝評論の雜誌として現はれた。

一方に於いて斯くの如く種々の作が現はれ、又舞臺が廣まると共に當然其の反影と云ふ可き評壇も面目を新にし來らざるを得ない。明治文壇に於ける新批評の端緒は『小說神髓』及び今日では全く文學とは相關せざる高田早苗氏の『書生氣質評』等で、それが稍々定着した文壇時事評の體をなすに至つたのは『國民の友』『しがらみ草紙』『早稻田文學』の出てから以後である。此の前後から雜誌の他『讀賣新聞』其の他の新聞紙でも亦文藝評論を出すやうになり、遂に今日の盛況を呈するに至つた。其の初期の批評家としては石橋忍月、内田不知庵、齋藤綠雨等の人々があつたけれどもその最高頂は坪内逍遙對森鷗外の

發端期に於いて唱へられた主張がさまぐ〜の過程を經て遂に一變せんとする迄の時代である。而して此の期の始めに於いて最も注目すべき事實は彼の德富蘇峰氏等の民友社の創立である。之れが一面には同氏の他の著書と相俟つて當時の青年に一種の自覺、若しくは刺戟を與へ青年の精神活動の端緒をなすと共に雜誌『國民之友』がそれ等の青年と離る可らざる基礎に立つ所の新文學の舞臺を供給した。そして之れ等の一團の思想の傾向は要するに歐洲を主とするものであつて單に思想のみならず文章迄も歐文直譯の脈を多分に取り入れて來た。此の民友社一派の歐洲的傾向の背後には彼の新島襄氏等の同志社及キリスト教の影響が大なる力となつて横はつて居たことは云ふ迄もない。

斯樣にして民友社の一團と云ひ坪内氏等の新文學運動と云ひ自ら根柢を歐洲の思潮に託してゐる。而已ならず當時の世間も政治上、社交上種々の方面に歐風の摸倣が盛んに行はれた。世人が呼んで歐化時代と言つたのは卽ちそれである。所謂鹿鳴館時代、夜會時代である。而して之れ等寧ろ外形的な歐化主義は一方には又反動を呼び起こして三宅雪嶺氏等の政教社一派、其の他から國粹保存主義が唱へ出された。併し當時の國粹保存主義は直接文藝上の新運動を左右するには至らずして寧ろ政治上、社會上の問題に止つた形がある。

けれども文藝の方面に於いても必ずしも歐洲の思潮のみが永く其の源ではなく、此の頃からして元祿文學の復興と云ふことが唱へられて來た。殊に最初に其の中心となつたものは西鶴で、後には近松が之れに繼いだ。此の西鶴熱勃興に關しては淡島寒月など云ふ人が最も與つて力があつたと聞く。併しそれが新文學の源を之れに開かんとするゝいふ明かな自覺から來たものであつたか、否かは知らない。兎に角、西鶴を埋れた趣味の中から掘り起こした爲に、明治の新文學は色どりを變へて來た。勿論其の西鶴も一面には德川末の馬琴以下の拾收す可らざる空想文學に飽きた目には自ら『小說神髓』が唱へた、寫

居た。其の機運が坪内氏の之れ等の作に至つて最も明白な叫び聲となつて現はれたものと見てよい。其の他之れと前後して末廣鐵腸の政治小說『雪中梅』が明治十九年に出た。又山田美妙齋の言文一致運動が其の以前から端緒を追うて出現したり、又後の硯友社の萠芽となつた人々が『我樂多文庫』を編纂したりしたのは、或は前からの世間一般の文藝的機運にそだてられ、或は坪内氏の發聲に動されて同じく此の明治文學の發生期を賑はしたものである。

それが明治二十年、長谷川二葉亭が小說『浮雲』を出すに及んで、さきの坪内氏の著作と共に最も有意義、有力の基礎を据ゑるに至つた。坪内氏は當時最も多く英文學の感化を受けた人で其の『小說神髓』に於いて寫實主義を主唱し『書生氣質』に於いて之れを實例に示した。この根本的な新運動は要するに源は英吉利文學から來て居るものと見て差し支へあるまい。之れに對して、二葉亭は一面ロシア文學の影響を受け、一面に坪内氏の主張に刺戟せられて現はれたものである。即ち當時の新文學の發端には英文學と露文學との對立があつたのである。此の點にい於て明治文學の始めはわが特發と云ふよりも矢張歐洲文藝の刺戟に俟つ所が多かつた。而して此の明治二十年期以後の文壇の諸現象は其の時代相應の程度に於いて皆それ〴〵に自覺の作つた新文藝運動であると云つてよい。

（二）

明治の新文學は中心を小說及び評論の交互作用に置いて觀察するのが便利である。前に述べた發端期から既に『小說神髓』の評論と『書生氣質』の小說とは互に相呼應して其の效果を現はしたものである。以後と雖も大體の形勢は是れと相似てゐる

今假りに明治二十年以前を明治文學の發端期と名付くれば二十年から三十年迄の十年間を大體に於て寫實期と呼び得る。

明治文學略史

（一）

過去四十五年の中眞に明治文學と名のつくものゝ存在したのは、この三十年足らずである。彼の西南戰爭で維新以來の兵亂が一段落を告げると共に、明治十年以後の日本は始めて稍々安堵した狀態に入つて此處にボツ〳〵と平和文明の準備をし始めた。結局此の頃を以て日本は兵亂期を通過し、眞の平和期に入りたるものと見てよい。而して其の明治十年から二十年に及ぶ迄の十年間の後半期即ち十五六年頃から始めて新文藝の準備時代が始つたやうである。

それ迄は要するに僅かに徳川期の文學餘脈が益々堕落して續いてゐた。それが彼の外山正一、井上哲次郎等諸家の新體詩、坪内春廼屋、織田純一郎、藤田鳴鶴等諸家の飜譯などを背景として、漠然たる形で明治文學の運動が萌しかけて來た。それが始めて自覺を伴つた革新運動になつたのは即ち坪内春廼屋の『小說神髓』『書生氣質』の出た明治十八年である。

蓋し此の頃迄に一部の讀書社會に何か新しい文學藝術が欲しいと云ふ茫然たる要求は萌して居たものと察せられる。よし新しいと云ふ意味なそれ程明白でないとしても兎に角今迄閑却して居た文藝と云ふものに對する要求が世間の一部に動いて

明治文學略史

て、一は端的に標象によつて靈を顯らさんと力め、一は仔細に客觀の事實に筆を染めて徐ろに生の暗示を與へんとする。謂はゞ標象主義は自然主義に比して、人生に對する嚴肅なる態度が一層主觀的となり端的となつたのである。端的相卽的、直入的の結果は神秘的となる。此の意味で又標象主義は神秘主義である。卽ち自然主義の文藝も、標象主義の文藝も、各々共に極まるところは、人をして宗教の門にまで導く。宗教的といふ所まで接續させるといふことが出來る。要するに、其等は、標象主義は自然主義の反動として起こつたものでもなく、却つて其の根本に於いては兩者相通ずるところあり、また共に切なる人心の要求に應じて起こつた文藝であると思ふ。而して今後に於ても、自然主義と標象主義とは相害ふことなく、共同して文壇に其の地歩を占め得るものと信ずる。

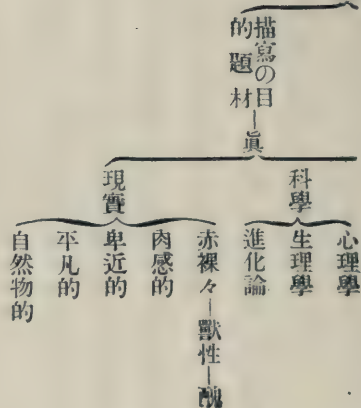
文學概論畢

更に以上の理を言ひかへると十九世紀も半ばを過ぎて、文明は物質界、精神界、ともにいやが上にも擴張し進歩した。かくて吾等が心的生活は幾多の悪戰苦鬪を經驗した。かゝる間に得たる吾等が人生觀乃至世界觀は、貧しき文辭に託するには、餘りに深刻である、あまりに幽玄である。所謂言語道斷である。さればせめては此等深刻幽玄なる人生觀、世界觀が刹那刹那に生むところの情緒、たゞこの情緒の匂ひ若しくは味を傳へるより外は無い。卽ち標象を雇ひ來たつて、この縹渺の情緒を託する。この場合に於いて、標象と、これに依つて代表せらるゝ情緒との間には離るべからざる聯鎖が生ずる。標象は手段であつてまた同時に目的となるのである。こゝに於いて標象に生命あり、精神あり、物心の一致を見、現實裡に理想を見、靈肉の合體を見る。この意味に於いて、標象主義は神祕的である。また理想的である。これが標象主義の骨子となる主張である。

然らば標象主義と自然主義との交渉如何。或は神祕主義と言はれ、或は新理想主義と稱せらるゝ標象主義は、全然自然主義と違つた運動であるか。標象主義を主張する人々は、自ら此の主義を以て自然主義に對する反動であると唱へてゐる。成るほど、彼等が靈肉一致と唱へ、或は神祕的である、理想的であると言ふところから見ると、或はさうとも考へられないではない。然るに事實は必ずしも之れに證左を與へてゐない。既に前にも說いて置ひた通り、自然主義は生の眞（トルース）を抽くを以て目的とする。而してこの爲には嚴肅なる態度を以て、醜となく、美となく、現實ありのまゝを寫すといふのであつた。標象主義はといふに、其の抽かんと欲する所は事實の眞相である精神である、靈である。然らば眞といひ靈といふも結局は同じ事を意味するのではないか。畢竟唯生を味はんとする吾等の努力の標的となつた同じものが違つた名を負ふて現はれ來たつたに過ぎないではないか。卽ち、標象主義も自然主義も、其の根本に於いては相通ずるのであつて、唯其の手段方法に於い

立つ人々は佛蘭西に最も多く、其の外には、オーストリアにヘルマン、バアルあり、ベルギーにマアテルリンク現はれ、また露西亞にはメレジュコーフスキー等あつて、露國標象派を代表してゐると稱せられる。

抑もこの標象（シムボル）といふものを用ふる本來の意義は、眼に見ゆる卑近なる物體によつて、何等か眼に見えぬ高尙なるものを暗示するといふところにある。早くヘーゲルが用ひたシムボリズムの標象と、今日吾等が用ひてゐる標象とは其の意義を異にする。ヘーゲルの所謂標象とは譬喩（アレゴリー）の意義であつて、象標其のものと、之れによつて標象せられるものとの懸隔が餘りに廣きに過ぎてゐる、其の爲に標象は標象、標象せられたものは標象せられたものといふ風に離ればなれになつてゐて、渾然たる一體をなしてゐない。卽ち外形と內容とが相卽してゐない。それが今日用ふる標象の意義になると、此の外形、內容の間隔を取り拂つて、標象と標象せられたものとは相卽し相離れてゐない。標象は直ちに其の內容である。外形と內容とは相卽して渾然一致する。從つて外形と內容とに價値の高下を附けることが出來なくなる。外形はやがて內容を意味し、內容は直ちに外形に現はれるのである。語を換えて言へば、今日の標象主義の三昧境は靈と肉との一致といふところにある。眼に見ゆる物質を假り來つて端的に何等かの精神を現はさんとするのである。例へば一日々々赤くなり行く紅葉を取り來たつて、人間の老い衰へ行くさまを標象する。この場合に於いて紅葉は單に人間老衰の譬喩であつてはならぬ。それでは舊式の寓意標象になる。それが直下に吾等の衰滅をひし〳〵と思ひ起さしむるものでなくてはならぬ。否、吾等の衰滅と木の葉の衰滅とが二つでなくならねばならぬ。紅葉は吾等に緣なきたゞの物ではない、紅葉はやがて吾等と連なつた運命であると思はしむるに至つて標象主義がなり立つ。又同じ理窟で、我等の感覺と思想とが一致する所にも標象が成り立つ。暑い寒いの感覺が直に或る思想上精神上の意義を暗示するのも標象である。

- 構成論
  - 描寫の目的題材—眞
    - 科學
      - 心理學
      - 生理學
      - 進化論
    - 現實
      - 赤裸々—獸性—醜
      - 肉感的
      - 卑近的
      - 平凡的
      - 自然物的

眞といふ最後の目的が手の屆く所に來れば、碎けてさま〴〵の形になる。作家は手に〳〵之れを拾ひ取つて作の題材とする。或は其の一を援いて題材とし、或は其の二三を兼有して題材とする。固より是等は、自然主義のみが題材とするものとは限らぬが、最も多く自然主義と聯結するものである。言はゞ是れによつて彼等の注視點を定めんとする。湧き來たる一切の思念の据えどころ、氣の集めどころを此所に求める。從つて斯かる目的は眞面目でなくてはならぬ。飽くまで眞實でなくてはならぬ、何時までも人の心を占有するの力あるものでなくてはならぬ。

さて最後のシムボリズム、卽ち標象主義は、最近に現はれた文藝史上の一運動である。其の源は既に十九世紀の前半に於いて、晩近思潮の種々なる流れと同じやうに、フランスの文壇に現はれた。ジェラール、ヅ、ネルヷールがその最も早き代表とせられてゐるが、この主義が確固として標榜せらるゝに至つたのは詩人マラルメに依つてゞある。從つて此の主義の下に

持になる。積極的態度である。消極的態度が勝つときは純客觀の自然主義を産し、積極的態度が勝つときは主觀挿入の自然主義を産する。けれども極致は二者の調和にある。既に自然主義に積極的態度を許せば、其の積極的思念の行止りは何であらうかといふ問題が、必ず起こらざるを得ない。則ち第二の問題、自然主義の目的論が生ずる。思ふに自然主義が寫實主義乃至理想主義と違ふ根本は實にこゝに存する。寫實主義は現實を寫すを目的とするといひ、理想主義は理想を寫すを目的とするといふ。然るに自然主義はひとり眞(Truth)を寫すといふ。眞といふ語は自然主義の生命でありモットーである。自然主義から言はすれば、理想といひ現實といふ語はまだ淺い、第二義の役にしか立たぬ。なまなか理想といふが爲に、狹隘な個人の選擇技巧を自然に加へて、厭惡輕蔑の念を生ぜしめる。なまなか現實といふが爲に、外形に拘泥して深奧な自然の味に觸れ得ない。此の等上に立つて、第一義の標的となるものは眞に外ならぬ。文藝の目的は眞を寫すにある。吾人が積極的態度で何物をか惝怳する、其の惝怳の目的は眞といふことにあつたのである。

然らば斯やうな第一義の眞は、たゞ深い、高いといふだけで、明かに手に取ることは出來ぬであらうか。是れと第二義の理想、現實などいふものとの干繫は如何。此れに對する答がやがて自然主義の題材論である。たゞ自然の眞といふのみでは物足らぬ、不滿足である。そこで之れを割り碎いて、現に手に觸れ得る第二義のものに化し、以て製作上の實用に供せんとする。こゝに至つて自然主義は種々の變態を生じて來る。其の圖は略々下の如きものであらう。

描寫の方法態度 { 純客觀的－寫實的－本來自然主義 ／ 主觀挿入的－說明的－印象派自然主義 } { 消極的態度 ／ 積極的態度 } 統一目的－眞

社會問題－個人解放－根本道德問題

第一、描寫の方法、態度から自然主義を分解する時は、純客觀的と主觀挿入的との二つになる。言ひ換へれば、寫實的と説明的、若しくは本來自然主義と印象派的自然主義に外ならぬ。自然を寫すにあたつて、出來るだけ客觀のまゝを眞寫し細寫しやう、此の時の描寫方法は明鏡の事象を射映するが如きものでなくてはならぬ。卽ち純客觀的、純寫實的であるを要する。是れが本來の自然主義であるといふのが一方である。蓋し最も普通な解釋である。他の一方、印象派的自然主義の主張は、結一旦斥けた作家の主觀を或る方式で再び挿入しやうといふのである。作家が一旦自然の事象を感受して、自分の印象に纏めてそつくり再現しやうといふに歸する。前に擧げたシュタイン氏の情趣說の如きが卽ち此の論に該當する。尙ほこの二方法を對比して說いたものでは、英吉利のベアリング氏が、第九版の『エンサイクロピデヂア、ブリタニカ』に述べた所などが最も參考になる。其の意、自然派には二派あつて一は印象派(Impressionists)といふ、自然を說明するを目的とし、自然から受けた印象を以て自家の人格を表はす手段とする。他は本來自然主義(Naturalism Proper)といふ、絕對に客觀的なる現實を得るを目的とする。ゴンクール兄弟等の作は前者に屬し、ゾラ、モーパッサン等の作は後者に屬すると。

斯くの如き自然主義の兩面は作者が筆を濡し、刷毛を染めて紙面に臨むときの態度卽ち覺悟、卽ち氣持によつて統一せられるものである。一は偏に外來の自然を歪まず、曲らず、映寫し出ださんとするが故に、其の態度氣持は消極的となる。出來ることなら無念無想全く謙虛な心で其の事物を迎へ且つ送り出したい。こゝから排技巧、排主觀の傾向が生ずる。併し事實に於いて是れは或る度以上行はれるものでない。空虛な心には必ず何等かの思念が湧いて來る。そこで此の思念を邪道に入らしめぬため、知慧細巧に墮ちないで而も純粹無垢な或る物を拈出せんとするが如き態度で、客觀の事象に差し向ける。又は謙虛にして鏡のやうな我が心の中に事象を映して、映したまゝじつと息を殺して其の事象の展開するのを待つが如き氣

止まぬ。技巧細工の痕迹を全然消し去らうといふに落ちつく。つまり理想主義に最も多く人爲があつて、其の漸次逓減し行く度合に從つて寫實主義となり、自然主義となるといふのである。最後に第三の自然主義と寫實主義とは性質の差であるといふ說によると、寫實主義が自然の模寫たるに反して、自然主義は單に自然といふ以上に或る條件を加へたものを、單に模寫といふ以上の或る方法で寫すものである。ドイツのシュタイン氏の美學は以爲へらく、現實から受けた印銘を增減する所なく再現せんとする試みは、寫實主義の新たなる轉化に外ならず。自然主義は自然を一全圓として描出する、其の方法は客觀から刺戟せられた主觀の傾向卽ち情趣によつて其の自然を全圓の形に充實せしむるにある。部分の細寫の如きは自然主義の本來でなくして、たゞ伴起現象たるに過ぎぬと。一全圓體の自然を寫す、主觀の情趣で大體を寫す、細寫を要せぬ。是れが自然主義の寫實主義と違ふ所である。全圓といふことが加はり、主趣といふ事が加はつて性質を變じたものになるではないか。

自然主義と寫實主義との相違は、以上の如く種々に解するを得るとして、其の第一說、兩者を全然同一と見る論は、少なくも近代文藝の活きた事實を目睹するものゝ首肯し得ざる所であらう。第二第三の程度說と性質說とは、事實雙方とも眞理でとある。十九世紀後半の自然主義は佛蘭西を中心とする。併しながら其の何年を始めとし何年を終りとするかは明らかでない。殊に其の終結に關しては、或は已に反動期に入つて自然主義は過去のものと成り了つた如くいふものもあれば、事實に於いて今なほ歐洲文藝の生命である如く見るものもある。要するに自然主義の眞の運命は歐洲に於いてすら、寧ろ今後に決せらるべきものでは無いかと思ふ。

さて、自然主義の構成は二點から見られる。第一は描寫の方法態度、第二は描寫の目的題材である。

た。而して「自然的」は自ら分家した、他からの來援を得て遂に自然主義といふいかめしい看板を上げ、本家を横領するに至つた。此の主義の生ずる次第である。

さてロマンチシズムの中から分立した自然主義は、直ちに世間から新らしい應援者を得て、之れと結合せんとする、其の第一に來たのが文藝上の寫實主義である。自然主義がロマンチシズムから分解することは寫實主義と化合することであつた。啻に寫實主義のみでない、之れを手始めに、文藝以外の思想界から、およそ己れに便宜な要素をば幾ばくとなく吸引し來たつて自然主義の成分にした。實驗科學然り、進化論然り、社會問題然り、新らしい自我、新らしい理想、凡て獨立後の自然主義が周圍の大氣中から吸集する化合元素である。近代自然主義の複雜な所以は實にこゝに存する。

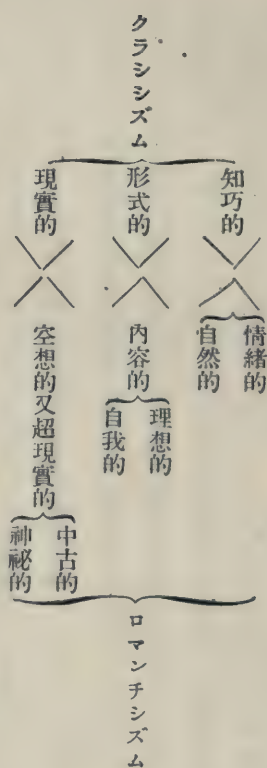
寫實主義は元來理想主義と對應して、美學上に一群をなすべき文藝原理である。ロマンチシズム、ナチュラリズム等はおのづから是れと別の一群と見られる。されば兩者は互に相交錯して存するを得べく、之れを文藝史上の傾向若しくは分類として見るときは、寫實主義の包容する所は自然主義よりも更らに廣く、自然主義は寫實主義の一部とも見られる。また之れを哲理の上から言へば、一面に於いて相違したものであると共に、一面たとへば外に現はれた所を寫すといふが如き點に於いて一致する二原理である。

自然主義と寫實主義との哲理上の干繋は、凡そ三様の見解に歸する。第一は兩者を全然同一と見なすもの、卽ち外形の模寫、自然の模寫を中心とする點に於いて、兩者は合致すると見るものである。第二の自然主義と寫實主義とを程度の差とする見解は、描寫法を如何に多く客觀化するかといふ論に歸する。此の說では、寫實主義は猶ほ全く自然のまゝを寫す度が足らず、私意巧僞の跡が多い。自然主義は一層之れを客觀化して、寫眞の種板が事象の影を其のまゝ印するやうにならなければ

に出たルソーの自然主義は此の意に外ならなかつた。自然を愛し自然の狀態に近づく。是れが十八世紀の末出たにワーヅワスの自然主義である。更に此の意を押し及ぼすときは、所謂英吉利自然主義の種々なる名目となる。

さて以上の如きルソー、ワーヅワース等が自然主義は、同時にまたロマンチシズムである。ルソーが佛蘭西革命乃至ユーゴー等のロマンチシズムに根本の刺戟を與へたことは言ふまでも無く、今日佛蘭西のロマンチシズムを說くものは必ず其の淵源を此の人に置く。ワーヅワースの場合また之れと同じく、英吉利の十九世紀文學はロマンチシズムで幕を開く、而して其の第一登場者はワーヅワースに外ならぬ。ルソー、ワーヅワースの自然主義はロマンチシズムの根本である。ロマンチシズムの中には初めから自然主義を含蓄してゐた。但し之れはロマンチシズムの主要なる一面に過ぎずして、ロマンチシズム其のものには他の要素も、結合してゐる。前に掲げた六要素中の自然的といふこと、卽ち人間の巧僞に反して自然の醇樸に還るといふ傾向が、やがて此の自然主義であると共に、情緒的といひ、理想的といひ、中古的といふが如き諸要素も同時に存在してゐるのがロマンチシズムの特色である。斯くの如くして吾等は實に明白なる自然主義の端緒をロマンチシズムの中に見出だす。ルソー、ワーヅワースは自然主義の先達であると同時にロマンチシズムの先達である。

然るに降つて十九世紀後半の自然主義に及べば、或は之れを以てロマンチシズムの反動と見るもの、或は之れを以てロマンチシズムの連續と見るもの、全く矛盾した見解をすら生ずるに至つた。十九世紀初頭の自然主義と、十九世紀後半の自然主義との間には、如何なる曲折を藏するか。吾等の見るところを以てすれば、此の曲折はやがて自然主義がロマンチシズムの中から分家して本家を領するに至る經過である。ロマンチシズムを一家に譬ふれば、「自然的」、「情緒的」以下五六の兄弟が同じ屋の下に同居してゐた。然るに此等の兄弟中「自然的」と名のつくものと他の兄弟等とは性來が違ふ。彼等は不和であつ

諸細目に至つては、すべて以上の大綱に攝せらるべきものと信ずる。

併しながら此等の諸特質は究竟何を生命として發動してゐるか、此等の背後にはさらに〳〵奥深く或る一物の熱い息が力となつて、之れを活かしてゐるのでは無いか。何等かの一物が、希臘の昔から二十世紀の今日に至るまで、子となり孫となるもの〻努力向上の底に傳はり横はつて、已れを大白晝の下に露呈し來たらんともがく。之れを對境にしては何物かの形に於いて之れを探し出さんとする氣持、之れを我れにしてはたゞ突出し展開せんとする無方の焦燥心。ロマンチシズムも畢竟は此の一物がクラシシズムの乾枯した殻を蟬脫せんとする息吹に外ならぬ。さて此の一物を何と名づくるか。ロマンチシズムの文藝が、斯くの如き途を辿り盡くさんとしてある時、忽ち行く手に一路を展開し來たつたものが自然主義(ナチュラリズム)である。文藝史上に自然主義の名を最も明白に掲げたものは、所謂佛蘭西自然主義であるが、主義と名のつかぬ自然主義は早く英吉利のワーヅワースに端を發し、更に溯つては佛蘭西のルソーに芽ぐんだ。此の場合に於ける自然主義の意味は、單に人間の對照として自然に還り、自然を師とするといふに歸する。一切人間の技巧を去り、文明を忘れて自然の本に還れ。十八世紀の半ば

る思想、卽ち中古主義がロマンチシズムの本義であると。而してビーアス氏は此の主義が包括する諸概念を數へて、情緒の強烈、綺樣なるものに感じ易き事、自然の景を愛する事、隔たりたる時代場所に對する興味、不思議、神祕に對する好奇心、主觀的なる事、抒情的なる事、自我の挿入、熱心なる新藝術の實驗等とした。以て其の內容の雜多なことが推せられる。今若し此等を前掲クラシシズムの根本要件と相干繫せしめて、幾何かの重要元素に統括する時は、クラシシズムの知巧的といふことから、直ちに一翻して知識に對する情緒の反動、巧僞に對する自然の反動が生ずる。冷かな知量に反撥して熱烈なる情緒の反動を欲し、煩瑣なる人巧に反撥して醇樸自然の源に還らうとする。情緒的、自然的、是れが先づ認められるロマンチシズムの的確な特性である。續いてはクラシシズムの形式的といふことから直ちに內容的といふことに反り來たつて、之れを客觀の對境に求めれば理想的となり、之れを主觀の我れに求めれば自我的となる。外形の空虛なるを去つて一指直ちに充實した中心の骨髓に觸れんとする。其の骨髓を向ふに求めれば理想に行かざるを得ず、我れに求めれば自己の個性に行かざるを得ぬ。ロマンチシズムに事物の中身を取り出さんとする二傾向、卽ち理想的と自我的との特性あるは此の理に外ならぬ。最後にクラシシズムの特質、現實的といふことの反動は空想的または超現實的といふことになる。現實平明の境の無味なるに飽いて、大に空想の欲を逞しうせんとする。必然の結果は、時代に於いても、場所に於いても、現實を超越するに如くは無いこととなる。時代に於いて現實を超越すれば、過去就中暗澹として人の想像をそゝのかす中古こそ其の恰好の時代となる。また場所に於いて現實を超越すれば、人間以上の神祕界こそ其の恰好の舞臺となる。斯くしてロマンチシズムには更らに中古的、神祕的といふが如き特性を生ずる。情緒的、自然的、理想的、自我的、中古的、神祕的、吾人は此の六項目の何れかと幷存し、若しくは獨存して其の中心動力となり居るものをロマンチシズムと定義せんとするのである。其の他の

る。然るに近世の評論家が、之れに近世の文藝に應用するに及んで、其の意義と場合とに變化を來たした。近時の用語例によ
る時は、十七八世紀に亘つた歐洲の文藝は大勢に於いて佛蘭西を中心として、希臘羅甸の古風格に基づいて一種の體を形づくつた。之れを總稱してクラシシズムと呼ぶ。彼等はあらゆる作品に均整、統一、規律、明晰等の知巧的條件を要求する。知巧的といつてよからう。また此等の條件は事物の形式に宿るものであるから、彼等が形式に特種の執着心を有して居たことも察せられる。形式的といつてよからう。また彼等に抽象的概念としての外、多くは現實平明の事物に其の形似の美を求める傾を持した。現實的といつてよからう。知巧的、形式的、現實的、此等の特色を總括してクラシシズムと呼んだ十七八世紀の文藝は、十八世紀の末、十九世紀の始めにかけて、夫の佛蘭西革命を中心として大廻轉を遂げた。十九世紀初頭の新藝文は、あらゆる意味に於いてクラシシズムの反動であつた。此の傾向が卽ちロマンチシズムに外ならぬ。

ロマンチシズムといふ語の内容は今以て不確定である。十九世紀當初の精神界に見えた新機運は凡て之れをロマンチシズムと呼ぶ。或る者は之れをメディーヷリズム（Mediaevalism）卽ち中古主義と解して、スコット等が歷史小說の如きを其の例とする。また或る者は之れを神祕的なるコールリッヂの長詩の如きものに代表せしむる。また或は之れを理想的なるミラー等が作の如きに求め、或は之れをワーヅワース等が自然と宗とする傾向に求める。何れも其の一端に觸れて全斑を逸した見解である。今試みに西人が漫然數へ上げたロマンチシズム諸解釋中最も一見に便宜な例として『十九世紀英國ロマンチシズム史』の著者ビーアス氏の說を引くと、其の意に曰はく、佛蘭西の批評家ブルンチエールは其の文學史で女文豪マダム、ド、シュテールの說、異敎主義に對する基督敎主義、上古主義に對する中世主義卽ちクラシックに對するロマンチックといふ解釋を是認して、ロマンチシズムは抒情主義なり、自我の發射なりとしてゐるが、要するに歐洲の諸國民が、過去卽ち中世に回顧す

といふと、皐陶が

元首明哉、股肱良哉、庶事康哉。

元首叢脞哉、股肱惰哉、萬事墮哉。

といつた。これが支那の最古の詩であつて、これによつて詩が散文學に先だつて生じたことを證明する。

我が國の文學も支那、西洋の例に漏れず、多少の律呂を具へた歌を以て其の緒を開いた。卽ち須佐之男命が天より降りまして出雲の國簸の川上である須賀の地に來られて、其の妃稻田姫と一緒に住む料にとて、其の地に宮室を作られたとき、雲の立騰つたのを見給ふて

彌雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣つくるその八重垣を

と詠まれたのが、やがて短歌の嚆矢となつたといふのが一般の說である。

第十四　クラシシズム、(古典主義)ロマンチシズム、(傳奇主義)ナチユラリズム(自然主義)及びシムボリズム、(標象主義)

以上吾等は概略ながら文學の何ものなるかを說き得たと思ふ。最後に近時の文藝史家が歐洲の近世文藝思潮を論ずるに於いて略々一致する分類法に從ふて、クラシシズム(Classicism)ロマンチシズム(Romanticism)ナチユラリズム(Naturalism)及びシムボリズム(Symbolism)の如何なるものであるかを見て此の稿を終らうと思ふ。シムボリズム、クラシシズム、ロマンチシズムの三名目が、哲學者ヘーゲルの美術論に於いて、始めて最も明瞭に文藝發類の對照語としてもちひられたことは人の知る所であ

取るに至つたことである。而して現代の傾向も孰れかといへば益々散文學に利あるが如き有様である。

翻つて支那の文學史を見るに、吾等はいさゝか危ぶみながらも猶詩は散文よりも早く發生したといふことを許さねばならぬ。さて今日に傳つてゐる支那の最古の文獻は『書』『易』『詩』の三經である。この中『易』は哲學を說いたものであるから別として吾等は『書』と『詩』とに就いて考へる。『詩』はもとより純然たる文學的作品ではあるが、年代からといふと『書經』は方が古い。『書經』は夏の史官の綴つたもの、『詩經』は商頌を除く外は殘らず周の世の作である。

まづ『書』を見ると既に前にも引用した通り、その舜典に『詩言志、歌永言、聲依永、律和聲』とあるから、當時既に詩歌の何ものであるかを認めてゐたやうで、堯舜の前に於いて何等か詩らしいものがあつたに違ひない。また當時既に樂器があつたところを見ると、それに應ずる歌章も必ず存在してゐたことゝ考へられる。東西を問はず、上古に於いては詩歌と音樂とが極めて親密な關係を持つてゐた者で、この點から見ても詩歌の早く發生するものであるといふことは理のあることであることがわかる。斯くの如き次第ではあるが、支那上古の歌章は、之れを書きつける文字が揃はなかつたためでもあるか、湮滅して殘つて居ない。『禮記』に伊耆氏蜡辭といふ詩がある。これは堯の時のものであるといふが伊耆氏は始めて蜡を作つた人であるといへば炎帝かも知れない。但しこの詩は歴史的價値に乏しいものではあるが、唯堯舜以前即ち『書經』の出來る前に、散文よりも先きに極めて單純な詩があつたといふ傍證になる。それから擊壤歌、康衢謠、堯戒、卿雲歌、八伯歌、帝載歌、南風歌などいふものがあるけれども出所に疑はしい點がある。其の歴史的證左を有つてゐる詩は『書經』の益稷に出てゐる舜と皐陶との唱和である。舜が第一に歌つて

股肱喜哉、元首起哉、百工熙哉。

にあつてはラプソヂスト（Rhapsodist）の生活に現はれ、古代英國では漂浪の伶人等が手に琴を抱いて、衣食の爲め又人の娛樂にとて、こゝの人家、かしこの朝廷へと歌ひ巡つた時に既に詩の萠芽は見えたのであつた。英文學であると其の國民詩とその國民的散文との間隔は殆んど二世紀の差がある、即ちチョーサーの『カンタベリー物語』以來約二百年を經てベーコンの評論が現はれたのを見ても、如何に詩が其の起原に於いて散文より早いかといふことを知ることが出來る。

而してこれは皆人心おのづからの性質、言語の歷史、周圍の影響及び文明の進步などに本づくのである。文明が進步すると共に詩は衰へる、高尙なる詩の出づるには或る度までは人心の未熟樸茂を必要とするといふたマコーレーの極端な說には裏書することは出來ないまでも、未開自然の人心は、その初期にあつては、まづ想ひを律語に託して言ひ現はすことを選んだものであるといふことだけは確言し得る。また其の外に文學の方便としての言語はまづ詩といふ比較的鍛錬を要しないおのづからの形を取つたといふこと、及び天や地や山や海などゝいふ自然界は直ちに人の情を突き動かして律語によつてその想を抒べしめたといふこと、さては幼稚樸茂なる文化の程度にあつては詩によつて己が自然の情を洩らすことに障礙の少なかつたといふことなどもその理由と見て差つかへない。

散文は之れに反して一層思を凝し、字窯句錬の餘になる發達をした形式であつて、隨つて比較的後れた比較的複雜な社會狀態の下に發展した。散文は詩に比べると文學のより多く知的方面を充分に現はすものである。散文は言語が一層定まつた性質を帶ぶるに至つてそれに表現を託する。また周圍の物質界に影響せられることが少なく、發達進步した複雜な文明狀態と一層親しい關係を有つものであるといへる。散文學の發展を考ふるに當つて面白いことは、散文がイギリスのエリザベス朝時代に於いては全然從的地位を取つてゐたものが、それが後のアン女皇やヂョーヂ一世の頃になると遙かに優れた形勢を

へるものでない、人と事件との眞相を吾等に示し、かくて生の印象を吾等に與へるものである。これと同時に一面歴史は歴史としての務を忘れてはならぬ。即ち記實の正確と精細と及び不偏とを要するのである。傳記類もこれと同樣の理を適用することが出來る。ボズエルの『ジョンソン』傳などは、文學といはるゝ傳記物の一例である。

日記類はその折々の出來事に對する作者の感想を記錄したもので一層多く主觀的、又紀行文は旅行中の見聞若しくは遭遇した出來事を寫したものである。古くは兩者を混有してゐたものが多かつた。『紫式部日記』『和泉式部日記』『讃岐典侍日記』等は前者に屬するものゝ例で、『十六夜日記』『土佐日記』若しくは源光行の『海道記』其の子親行の『東關紀行』などは後者の例である。

隨筆若しくは漫錄、漫筆などゝ呼ぶ類のものは、昔にあつては、公衆に示す目的で書いたものではなく、唯作者が見るまま聞くまゝ又は感ずるまゝに書き下した私の筆ずさみをいふのである。『枕草子』『方丈記』『徒然草』などは其の例である。

第十三　文學の起原

文學の起原加何。語を換えて言ふと、詩と散文とは如何なる狀態の下に發生進化をなしたか、其の起原に於いて詩と散文と孰れが早きといふ問題になる。

之れを西洋各國の文學史に考ふるに、常に詩は散文に先んじて現はれた。詩は種族的生活の初期にあつて既にその發現を見ることが出來る。かのイギリスでバード(bard)といはるゝ騷人或は旅廻りの樂人等が樂器に伴れて歌ひあるいた歌謠の類は、その現はれた最も早き形である。斯くの如くして南歐にありてはトルーバドーア(Troubadour)の歌となり、古代ギリシア

客として描くに反して、ノヹルは人物を主とし事件を客として寫すといふ點に於いて違つてゐる。而して現代の小說の傾向は全然ノヹルの方にあるといつてよい、また此の方の小說は全文學界の最大域を占むるの趨勢を現はしてゐる。殊に最近匆忙の時勢にあつては所謂短篇の流行が盛んになつた。蓋し生の極めて小なる一局部を描いて、以て生そのものゝ全局面を味はゝしめんとするものである。

散文で書いた主觀的の文學は種々の形をなした抒情文、美文など及び評論文の一部である。而して知力に訴へるよりも先づ感情に訴へるのを主としてものした評論の如きものが茲でいはゆる主觀的散文文學としての評論文である。併しながらかくの如き評論文が抒情詩などに比べるとどうしても思想に重きを置いて、感情に重きを置くことが少ないため、純文學と見做すには稍々堅くろしきに過ぐることは當然である。

次に散文上の客觀兼主觀の文學の如何は、便宜上前の詩の條下で律語になつたものは戲曲で、散文で書いたものは所謂脚本であるとして說いて置いたから茲では省いて置く。

以上小說、抒情文、脚本を散文の種類として擧げて來たが、猶ほこれら等の中に入れることの出來ないもので散文の文學がある。在來普通の用語例で、詩歌、小說、戲曲等を純文學と稱するに對して、こゝには雜文學として、一部の歷史、傳記その他我が邦でいふ、日記及び紀行文、隨筆物などを含めてよい。

歷史及び傳記は、それが文學の主素要である情の成分を加味して始めて文學と成り得る。例へば文學として許されてゐるイギリスのマコーレーの「英國史」を取つて、之れをたゞの年代記と比べて見るに年代記にはその歷史中に含まれてゐる事實は殘らず記してあるけれども、而もこれは歷史の組材たるに過ぎないものである。文學である歷史は單に事實のみを我等に與

右に依つても意の轉ずる所即ち解の轉ずる所であることがわかる。但し漢詩の解は、英詩に於ける如く詩形上顯著なる地位を有しない。和歌にあつては一句一解のものが多く、長歌等では、意義の上から解を立て得る場合もないではないが、本來よりいふと寧ろ解なしといふのを至當とする。近時の新體詩には大抵洋詩の體を學んで解を設けてある。洋詩とても、短いものには解のないものもあるは勿論のことである。

第十二　散文

散文とは其の外形の表現を律語に託さゞる情の文學を總稱した名であると定めて、さて其の種類は如何。

詩の場合に說いて置いた如く、文學の縱の分類法を散文に適用して見ると、散文を以て書いた客觀の文學は小說を以て其の代表とする。元來吾等が今日普通にいふ小說即ちフィクション(fiction)といふ語の意義は隨分漠然として甚だ廣い意義を含んでゐるけれども、クローショー氏に倣ふて大凡之れを分類して(一)敍事詩風の小說、例へば『八犬傳』とか、『西遊記』とか、『三國誌』とか、『水滸傳』とか、自笑、其磧の作とか、『ユートピア』とか『天路歷程』とか、『ロビンソン、クルーソー』とか、『ラセラス』とかいふ類のもの、(二)劇詩風の小說例へば近く紅葉、露伴、柳浪、天外等の作、遠くは英國でいへば十八紀世のリチャードソン、フィールヂング、スモーレット等の作乃至サッカレー、ディッケンス、エリオット、メレヂスなどの作のやうなものとの二つにすることが出來る。敍事詩風の小說は昔風のもので、劇詩風の小說は近世に至つて始めて盛んに起こつたものである。クローショー氏は前者を散文のローマンス(Romance)と總稱し、後者をノヹル(Novel)と總稱してゐる。要するに所謂ローマンスとノヹルとは共に生卽ち人事を敍寫する小說といふ點は同じであるけれども、ローマンスは殊に事件を主とし、人物を

(Pentameter)六步句(Hexameter)七步句(Heptameter)八步句(Octometer)等がある。(三)、句脚に韻を押すを要する。韻の事は前に述べた。

偶法とは韻の相諧つた句を總稱するもので、洋詩の押韻法が大抵二句又は三句諧韻であるところから生じた名である。漢詩に之れを求めると、「遺却珊瑚鞭、白馬驕不行、章臺折揚柳、春日路傍情」の「白馬驕不行」と「春日路傍情」とは二句の偶(Couplet)である。「北風吹白雲、萬里度河汾、心緒逢搖落、秋聲不可聞」の起、承、結は三句の偶(Triplet)である。

解法とは、句の二つ以上集まつて一團を成せるもので、一篇の詩中最も大なる段落法である。洋詩で最も多いのは四句一解であるが、之れとて必ずしも一定したものでなく、詩人の好みに應じて分けることが出來る。畢竟一の大なる讀法と見てよい。たゞ一旦、解の様式を定めた上は全篇之れに則るのを法とする。且つ大抵解と共に意義にも段落あるのを通例とする。漢詩では、前にいつた古の詩韻を轉ずる場合が解である。また一韻到底なものでは、杜甫が玉華宮の詩、四句一解で、四解一篇を成してゐる。

溪回松風長　蒼鼠竄古瓦　不知何王殿
遺構絕壁下」　陰房鬼火靑　壞道哀湍瀉
萬籟眞笙竽　秋色正蕭灑」　美人爲黃土
況乃粉黛假　當時侍金輿　故物獨石馬」
憂來藉艸坐　浩歌淚盈把　冉々征途間
誰是長年者」

重線は大讀法を示す、單線は小讀法を示す。小讀法は大讀法よりも一層多く隨時的なることが分かる。我が國では五言といひ七言といふものゝ中更に五言を二音と三音に讀み切り、七言を三音と四音に讀み切るたぐひとも見られる。漢詩についていふときは、其の五言といひ七言といふものは直ちに句であつて、兼ねて每句末に讀法あるものである。句の中間では、七言は四音と三音と、五言は二音と三音とにおのづから讀あるを普通の場合とする。

句法とは步の若干相寄つて成つたものである。英詩では必ず一句每に一行に書き分けてある。句をまた行（line）といふのも此の故である。漢詩では五言といひ七言といふものが是れに當る。「趙氏連城璧、由來天下傳、送君還舊府、明月滿前川」。これは二音步と三音步とを有する句四より成つた詩である。和歌では七音五音の中に別に步があるものとして七音五音等を直ちに句と見做す者もあるが、之れを直ちに步と見るときは、句は此の外にある。卽ち和歌では五七五の三步を一句とし、七七の二步を一句とする、所謂上の句、下の句之れである。此の意義からいふと短歌は僅かに二句より成れる詩である。最も短いものは發句で、五七五の三步一句から成る。洋の詩句法としては(一)、一句は必ず同一格の步から成りたゝねばならぬ、揚抑格ならば全句すべて揚抑格の步を用ひなければならぬ。漢詩、和歌などはさうでなく「平々」「仄々」「仄平々」又は五七五とやうに雜多の步法を一句中に混用することが出來る。洋詩でも句の單調に流れるのを恐れて或る定則の下に他格を混じ又は變格を用ひ得ることはある。(二)、每句の步數は無規律であつてはならぬ、猶漢詩に於て七言は常に二、二、三の三より成るやうなものである。但し全章皆同一步數の句でなければならぬとはいはぬ、或は二句づゝ同步數であるもよく、三句づゝ同步數であるもよいといふ差があるばかり。而して句を其の步數によつて分けると一句一步のを一步句（Monometer）といひ、一句二步なるを二步句（Dimeter）といひ、一句三步なるを三步句（Trimeter）といひ、その他四步句（Texrameter）五步句

He turns upon his foes, ‖ that soon have him enclosed."

の如きは十二音句を折半して六音ごとに讀を置いたもの。

"Two principles ‖ in human nature reign;
Self-love to urge, ‖ and reason to restrain;"

といふのは、十音句を四六に分けたものである。其の他全く無定則なるものもある。たとへば

"The quality of mercy ‖ is not strained, ‖
It droppeth, ‖ as the gentle rain from heav'n
Upon the place beneath, ‖ It is twice bless'd ; ‖"

の如きは、第一行を七音と三音とに分け、第二行を三音に分け取つた後次の行に讀みつゞけ、第三行を六音と四音とに分けたものである。而して斯く格を破つたところに却つて絶妙の詩があるといはれる點から見ると、彼の國の讀法は、我が五七といひ七五といふやうなものよりも一層臨時的のものらしい。我が邦の詩歌にあつては、七五七五などいふ音數律は殆んど唯一の律格で、若しこれを漫にするときは、詩形は亡びて了ふ結果を生ずる。

また西洋の讀法には大讀法と小讀法の別があつて、上に掲げたのは何れも大讀法の例であるが、小讀法とは、更にこの中に幾多の小句讀を立てるものをいふ。前例の句について言へば

"Two principles ‖ in human nature | reign;
Self-love | to urge, ‖ and reason | to restrain;"

讀とは詩の讀み切り法である。この讀法を步法と比べて見るに、步法とは同一音數團を規律的に節奏的に反覆するものをいひ、二音步法とは二音一團の步を反覆し、三音步法とは三音一團の步を反覆するものである。讀法は之れに反していろ〳〵な音團を旋律的に巧に調和させるものであるから、本來からいへば、其の際に音團の形式を定める必要はない理窟であるが、全く無定格であるときは律格たる性を失ふことになる。かるが故に通例幾種かの音步を限つて之れを規律的に相ついで交錯させる。卽ち讀法は其の異種なる音團を調和する點に於いては變化を主とするけれども、其の上に更に幾種かの類を限る點に於いては、統一を主とし、結局或る度以上は同一句法の反覆せらるゝことになる。斯やうに同一句法の反覆せられる所は、また直ちに節奏法の原理である。例へば

君をはじめて、見るときは、千代もへぬべし姬小松、お前の池なる龜岡に、鶴こそむれゐて、あそぶめれ。（平家物語）

といふときは、其の「君をはじめて」といふ七音步と「見るときは」といふ五音步との續きあひが滑かで、おのづから調諧する趣きがあるのは、讀法の本意である。されど其の五七の關係を全篇に反覆するのは節奏的である所以である。

英詩では一讀の含む音數に定格がないけれど、通例一行の終りには必ず之れがあるのは自然の勢である。一行中では、十音の行を四音と六音とに讀み切り、十二音の行を六音づゝに讀み切るが如きものは、多く見る例で、一篇一解すべて同一讀法であるもの或は二三句每に之れを變ずるものなど形式は一樣でない。

"The cruel raoenous, hounds ‖ and bloody hunters neer,
This noblest beast of chase, ‖ that vainly doth but fear,
Some bank or quick-set finds; ‖ to which his haunch opposel,

夫の歩といひ句といふたぐひは畢竟他の抑揚押韻等の律法に數の律法を交へたものといへるし、むしろ音數律によつて音位律、音質律等を調じたものといつてよい。之れを名づけて造句法といふ。

まづ英詩について造句法の次第を見るに大體之れを歩(Feet)讀(Pause)句(Verse)偶(Couplet)解(Stanza)の五段に分かつことが出來る。

歩とは平仄法によつて一團となつた音の高も小さいもので、例へば｜When｜they｜ride in｜State｜といふとき、先づ「ホエン」で揚げ「ゼー」で抑へ、此の揚抑二音を一歩とし、次も「ライド」で揚げ「イン」で抑へて一歩とし、次は「スチート」と揚げて一音一歩とする。これによつて見ても歩には幾類かの區別のあることが分かる。即ち一綴音で成るものを單音歩(Monosyllabic foot)といひ、二綴音のを二音歩(Dissyllabic)といひ、三綴音から出來るものを三音歩(Trisyllabic)といふ。其の他稀れには四音歩もあれど、之れと單音歩とはむしろ例外であつて、普通は二音歩三音歩を英詩の格とする。之れを支那の詩に引きあてゝ見るとき、單詩歩は雜言體の詩などにある。

酒、酒、酌來、飲取、君莫辭、時難久、偏樂少年能娛老叟對月不可無看花必須有千兕一醉一石劉伶解酲五斗臨行強戰三五場、酩酊更能相憶否。（亡名氏「詠酒」）

此の詩の起頭の二句は即ち單音歩で而かも一歩一句の體である。二音歩は其の第三句第四句、乃至通例の五七言詩に於ける前半句、三音歩は前例の第五句第六句乃至通例の五七言詩に於ける後半句などである。國歌では平仄法の作用するものがないから、五音七音等を直ちに歩であると見てよい。されば我が邦に最も多くあるは五音歩、七音歩で、稀れには三音歩、四音歩、六音歩、八音歩などもある。

韻を諧へる法も、西洋では句脚の語の最終の母音が同一であるか、または近似してゐることゝ、之れに續いた子音が同一であることゝを韻の要件とし、全く同一音の語を反覆することを弊とするけれども、支那では全く同一音の語を韻とすることを妨げない、たゞ同語を嫌ふばかりである。此れに主として支那の言語が本來一語一音で、語中の音の變化が少ないため同音語を避ける餘地がないところから來た現象であらう。例へば英詩で Child と wild とは其の句尾である ild の子母音が共に相諧ふ點で完全な押韻法である。Join と divine とは句尾の母音が必らずしも全く相一致しないけれど、或る度まで近似してゐるし、且つ其の次に來たるべき子音は全く相合してゐるから不完全ながらも韻たることが出來る。併しながら若し aught と fault を相諧へやうとしても、其の母音は同じであるけれども、次の子音が違つてゐるため韻を成さない。また全然同一の語を諧韻させるやうなことも、或る特殊の目的ある場合以外には望ましいことでないのは、勿論のこと、たとひ、語は違つてゐても、全く同音の語をも忌み嫌ふのである。例へば night と knight のやうなものである。此等は畢竟、音が相諧ふうちにも成るべく變化を豐かにしやうとする、微妙な音調の趣味から生じた現象に外ならないのである。

以上の外、別に英詩には沒韻法(Blank verse)といふのがある。全く韻脚を用ひない法で、最も高妙、隨つて困難な律格法の一であると言はれる。かのミルトンが「失樂園」の詩の如きは此の句法によつた好例である。

さて第三の造句法如何と見るに、專ら音の數を以て律格の基礎とした例は、手近く我が國にある。「年たけて、また越ゆべしと、思ひきや、命なりけり、小夜の中山、」といふときは五七五七七音に一種の律格が出來て口調がよい。又「山路きて、何やらゆかし、菫艸」といへば五七五音が律を成す。此等はすべて音數上の律格である。西洋では單に此の種の律格を主とする詩は少ないけれど日本の詩歌は總じて律格の根柢を之れに託してゐる。但し西洋の詩とても音數の律を輕んずるのではない、

She is a living Child;
That you may see sweet Lucy Gray
Upon the lonesome wild.

毎句脚で「デー」と「グレー」と、「チャイルド」と「ワイルド」と相諧ふのが即ち韻である。

韻脚に色々の形がある。洋詩では、隔句に諧韻するもの、續けて諧韻するもの、二句一韻であるもの、三句一韻であるものの等、其の場合が一でない。支那では、律、絶、古詩みな押韻の法が違つてゐて、隔句であるのもあり、隣接してゐるのもある。律、絶は全篇一韻古詩には、解に從ふて轉韻するのもあり、また一韻到底のものなどもある。されば支那の詩と英詩と、押韻の法が違つてゐるのは、英詩にあつては二句の諧韻を普通とし、稀れには三句のものはあるけれども、其の以上同一韻を諧へることは殆んど無い。支那は之れに反して絶句、律體ともに全篇同一韻である。古詩に於いては、大抵二三句以上に上るから、西洋に比べると同音反覆の度が多くて變化が少ない。太白の「懷張子房」の辭

子房未虎嘯　破產不爲家　滄海得壯士　椎秦博浪沙（以上第一解）　報韓雖不成　天地皆震動　潛匿遊下邳　豈曰非智勇（以上第二解）　我來圯橋上　懷古欽英風　唯見碧水流　曾無黃石公　嘆息此人去　蕭條徐泗空（以上第三解）

第一解四句の中、隔句に二句を麻の韻に諧へ、第二解四句の中、隔句に二句を董の韻と腫の韻と相通ぜしめた仄韻に諧へ、第三解六句の中、隔句に三句を東の韻に諧へた。支那の詩で韻の變化の多いのは此の種の作例である。

また斯くの如く比較的變化に富んだ押韻法も、其の隔句間にて常に無韻の句を挿んでゐる即ち踏み落としがあるから、結局諧韻の範圍は狭い。第一句と第三句、第五句と第七句などすべて其の例である。

揚抑揚格（Amphimacer）—◡—, Windig sheet.

抑揚々格（Bacchius）◡——, The dark night.

揚々抑格（Antibacchius）——◡, Eye-servant.

揚々々格（Molossus）———, Long dark night.

抑々々格（Tribrach）◡◡◡, Insuperable.

以上併せて十二格を生ずる、但しこのうち最も普通に用ひらるゝは、抑揚格、揚抑格、抑々揚格、揚抑々格等で、他は多く此等の格が單調に流れる場合に、之れに混じて變化を添ゑる爲に用ひる。故にまた以上の諸格によつた平仄法中、一格の到底してゐるものと、二格以上混合してゐるものとある。

第二の韻脚法とは、同一又は近似した音を一定の間隔によつて反覆する律格である。こは詩形中比較的に變化の乏しいもので、支那と西洋とにはあるけれども、日本の歌には、之れもまた一定の格となつたものがない。支那では

朝辭白帝彩雲間。
千里江陵一日還。
兩岸猿聲啼不住。
輕舟已過萬重山。

といふとき其の間、還、山は皆韻脚である。英詩にあつては

Yet some maintain that to this day

○●　○○　●」又は「●○　○○　●●　○」といふやうに、一首の絶句中にすら或は「平仄」或は「仄平」或は「平々」或は「仄々」の步法を混用する。若しこの間に全く統整せられる所がなければ、律格といふ性質は亡びて了ふ。何故ならば單に一步內に同質音を偶し、又は異質音を對しただけでは、何の規律をもなさない、同一步法を反覆するに及んで、始めて變化裡に統一ある形式美の原則に合するのである。此の點から見て、支那の平仄法は、每步の二音目即ち尾音を平仄交互にする所ばかりが嚴格にいふ律格を成してゐる。之れに反して英詩の平仄法は、每步或は抑揚或は揚抑、或は揚々、或は抑々、何れかの一を定めて到底せしめるのが普通である。前例の。"◡—　◡—　◡—　◡—　◡—" の如くである。隨つて每步中首尾兩音ともに重要な律格の成分となつて、支那の平仄法よりも一層多く規律的である。

洋詩には色々の平仄法の規定がある。二綴音を一步とするもの四種、

抑揚格(Iambus) ◡ —, The rul-ling pas-sion con-quers rea-son still.

揚抑格(Trochee) — ◡, In her lonely silken murmur.

揚々格(Spondee) — —, Dark night.

抑々格(Pyrrhic) ◡ ◡. Hap-pily.

三綴音を一步とするもの八種

抑々揚格(Anapest) ◡ ◡ —, I have read in an old and a mar-vellous tale.

揚抑々格(Dactyl) — ◡ ◡, Jupiter, great and om-nipotent.

抑揚抑格(Amphibrach) ◡ — ◡, Redundant

のことである。

平仄法は律格中最も微妙で、且つ其の自在なる變化はよく人心の音樂的活動を表出し得るものである。而して平仄といふ中には音の度卽ち抑揚と、音の長さ卽ち長短との二理あることが出來る。此の兩者は古來東西共に混用してゐて、支那で平仄を或は音の開閉であるといひ、或は音の長短であるといふのや、また西洋で希臘の平仄は專ら長短に基づき、近世の英詩などの平仄は多く抑揚を用ひてゐるのなどは皆この事實を證明してゐる。我が國の歌には、あらはに之れを用ひたものは無く、唯自然の情に從つて、朗詠の際に抑揚長短が生ずることが出來る。

雲想衣裳花想容　春風拂檻露華濃　若非群玉山頭見　會向瑤臺月下逢　（李白）

江碧鳥逾白　山青花欲然　今春看又過　何日是歸年　（杜甫）

白點は平聲をあらはし、黑點は仄聲を現はす。支那に於ける平仄律の一斑はこれによつて見ることが出來る。英詩では

Hŏnōr ănd Shāme frŏm nŏ cŏndītiŏn rīse.

または

Hōnŏr's būt ăn ēmytў būbblĕ.

直線によつて揚聲を示し彎線によつて抑聲を示した。

今此等の詩句について平仄法の構造を見るに、支那では二字目、四字目、六字目に平仄の中心を定めて、之れを一句中平仄交互に用ひるのを主とする。所謂二四不同二六對の法は此の理の證明となる。されば音步はおのづから二音づゝに分かれて、其の尾音を定格とし、首音は必ずしも之れを定めない。「○● ○○ ○● ○」又は「○○ ●● ●○ ○」又は「●○

戲曲若しくは脚本の體裁を帶んでゐる文學といへば、例へばギリシヤのイヽスキラス、ソフォクリーズ、フランスのラシーヌ、コルネーユ、モリエール、イギリスのシェークスピヤ、ドイツのゲーテ、シルレルから近年の作家イブセン、ビネロ、サルドウ、ズーダーマン、ハウプトマン等の作も、日本の淨瑠璃、謠曲、狂言、竝びに芝居の臺帳なども皆それであつて、戲曲風の多くの文學のうちには體裁は戲曲でも、實は敍事詩に近いものもあり、抒情詩に近いものもあり、圓滿なものもあり、不具なものもあり、甚だ單純なものもあり、甚だ複雜なものもあり、最も上乘といふべき戲曲を標準として、あらゆる戲曲風の文學を等級別にして見たらば幾十等にも分けられやう。尚ほ悲劇、喜劇其の他現に美學者の爲して居るやうな細密な分類法などに依つてあらゆる戲曲風の文學の性質を種類別にして見たらば、又甚だ多くの種類に別けられやう。凡て西洋の古い戲曲は律語で書いたものが多いが、散文のも決して尠なくはない。我が邦の芝居の臺帳にも五七調の律格を用ひて書いた部分が尠なくないとともに、また全くの散文を以て書いた部分も多い。

第十一　律格

詩を散文より區別する律格とはいはゆる詩形である。これは語音を音樂的に利用する方法の最も進歩したもので、音位、音度、音長、音數の四を形式美の原理に基づいて種々に組み合はせたものである。

律格の種類は、言語の異なるに從つて各國必ずしも同じでない。今、日本、支那及び西洋諸國、就中英國の文學にわたつて、現在存してゐる限りの主なる律格を擧げると、音度若しくは音長に基づいたもの卽ち音性律、音位に基づいたもの卽ち音位律、音數に基づいたもの卽ち音數律の三となる。音性律とは平仄法のこと、音位律とは韻脚法のこと、音數律とは造句法

情詩と見なすとしても、是れは作家自身の私の感想を言ひ現はしたものではなくて、作中の人物の各自の感想を言ひ現はしたものであるから、彼の作家自身の私の感想を言ひ現はすことを主とする純然たる抒情詩とは性質の違つたものである。但し戲曲のうちの個々の人物の白が支離滅裂な斷片ではなくて、おのおの互に相密着し、且つ前の白は後の白と、恰も有機體の各部分が互に分離すべからざる關係を有つてゐると同じやうに聯絡し又因緣してゐるもので、作中の白を綜緞して全體から見ると首尾一貫して一人物の品性を現はし得て餘蘊なき所は一大抒情詩といつても差しつかへない。さて敍事詩に似た方面はと見るに、敍事詩は事件を主として個々の人物の性質の如きは寧ろ客として描くものであるのに反して、戲曲は事件を描くとともに個々の人物の特性を最も生々と描くことを主とするものであつて、隨つて上乘の戲曲に於いては、人生の事相を最も圓滿に最も自然に現はすことが出來、一篇の作は卽ち一幅の人生の眞縮圖と見倣し得らるゝことが出來るのである。例へばシェークスピヤの作『リヤ王』を見るに、斯くの如く崇高壯大な事件を按排した勇々しい敍事詩は他に類例が少ないと同時に、また此の悲劇に於けるほど情緖感想の表現の烈しく力あるものは、他の普通の抒情詩には見ることが出來ない。

戲曲は實にかゝる兩面を打つて一丸となさねばならぬ。種々の獨立した一團の人物を案出しなければならぬ、而も極めて明確に生けるが如く作り出さねばならぬ。また大なる動作を工夫せねばならぬ。勿論此等の事は小說家と雖もなさねばならぬことではあるが、戲曲家はかゝる動作の發展を此等人物相互の關例によつて進めて行かねばならぬ。その上に彼れは其の人物自らの言葉によつて其の動作を語らせなければならぬ、かりにも作家自身は一言の註釋、說明、または分析の語を加ふることを許されない。而してまた實際演技の數時間中に此等の人物を寫し、其の動作を發展せしめて、首尾の到底したものとなさなければならないのである。

言へる。またなる抒情文字の示す如く、情の高調、痛切なることをその特色とする抒情詩は、勢ひその形式に於ても最も音樂的たらざるを得ない。我等は抒情詩に於て律格の最も微妙なる表現を見る。其の上に個々の人々の情想の表現であるから、抒情詩はありとある人の多樣なる變化ある情緒感想を現はすものである。近世になつては他の種類の詩は、殆んど抒情詩のために其の位地をも奪はれんとするやうな有樣である。まこと此の百年が程の大かたの勝れた詩人の作物は、其の性質が皆抒情詩的である、また抒情詩に其の傑作が多い。そしてまた文學中の叙事的分子は、大かた小說に限られたやうに見ゆるのが今日の趨勢である。

客觀兼主觀の文學を代表するものは戲曲である。こゝで戲曲といふは西洋のドラマ(Drama)のことで、その形式が律語になつたのも指す。そして散文によつて出來たものは便宜上之れを脚本と名づける。其の分るゝところは唯律語になると、散文なるとの形式の點にあるのみであるから、この所に併せ說くことにする。

戲曲は地の文といふものがなく、全篇悉く人物の詞のみで成るのが其の本體である。地の文のない點こそ違ふが、作家自身の愛憎、好惡、主義、信仰等を現はさないで、自身以外の人間や人情を描くといふ點は、戲曲が一面に於いて頗る叙事詩に似てゐるところである。又他の一面では戲曲の中の個々の人物の白は、之れを引離して見れば個々の人物の各自の愛憎、好惡、主義、信仰等を言ひ現はしてゐる抒情詩とも見做すことが出來る。よつて戲曲は「抒情詩の集まつて成れる叙事詩」とも又は客觀兼主觀の文學であるとも稱する所以である。隨つて戲曲は詩の中で最も高尙な最もむつかしい種類であつて、廣く高く且つ豐富なる詩才を要することは、他の種の詩に見られないところである。

併し戲曲其のものゝ性質は、抒情詩や叙事詩などの性質と違つてゐるところのあることは勿論である。戲曲の中の白を抒

の性質として大かた回顧的のものが多い。何故といふに、叙事詩を作るには、或る方法によつて幾多の紛糾した些細な事件或は行爲の中から、一つ或る偉大だとか若しくは目ざましいとかいはれる行爲乃至は事件を取り出して、それを向ふに突き出して打ち眺める必要がある。そしてこれを行ふに同時代の事件若しくは行爲からすることは至難の事である。蓋し複雑な現代の生活狀態中にあつては、すべて事件などの前景が餘りに雜糅混亂してゐる。其の上に現代社會に於ける個人間相互の關係は一層多きを加へ一層複雜の度を增して來た。かゝる境に沒身埋頭してゐる人々は何人と雖もこの間から叙事詩に適當した題材を抽き來たるほどの餘裕を有たぬ譯である。

また一面から觀察すると英雄時代は既に已に過ぎ去つたと言つてもよい。今は萬民平等の時、秩序規則の世である。むしろ平凡の代である。けれども勿論叙事詩そのものが近代には跡を絕つたといふ譯ではない。只漸時減少して行くのが事實である。スコットの作の如き歷史的叙事詩も現にある。

主觀の文學とは作家自身の感情主義、信仰等をあらはに諷詠叙寫の間に現はしてゐるものをいふ。尤も嚴密にいへば如何な文學も其の實は作者の特殊な情緒感想を現はしてゐるに相違ないけれど、たゞ物の區分を明らかにする必要上こゝには其の特色を取りたて大概を一括して、主觀の文學とは作家自身の感情主義、信仰等をあらはに現はしているものを指すと定める。さて其の律語で綴つたものを抒情詩と總稱することゝすれば、和漢の詩歌の大半は皆この部類に入るべきもの、英國でいふオード(ode)ソンネット(Sonnet)ソング(Song)を始めとして、諷刺、教訓、愛國、宗教、宴遊の抒情詩若しくは軍歌、戀歌、挽歌、頌偈等いづれもこの部類に入るべきものとなる。さて此等の抒情詩はまた早く世に現はれて、時代と共にあらゆる社會を通じて、絕えず發展進步を續けて來た。蓋し詩の中で最も醇粹な代表的模型であることを思へば又當然のことゝも

學に比べて情の要素が極めて重大な意義のあるもので、この點から情の一言一句悉く情の言葉に成ると言つてよい。而してこの律語の形式を取るといふことは決して人爲的のものでなくて、實に内面必至の要あつて出來たものである。凡そ情の切なるや何等かの節奏(リズム)ある形を取つて現はれねば止まぬ。これを事實に徵して見ても哄笑や、歔欷や、憤怒や、喜悅や、皆多少著しい節奏を持たないものはない。かくて文學に現はれた幾多切なる情の表現は我等が意識の俎上にのせて形式の美を與へたもので、從つて律格(ミーター)と呼ぶ明かな節奏を成すに至つたのである。殊に我等は音樂に徵してこの理を確めることが出來る、蓋し音樂は律格の最も完全にして最も復雜なる種類のものである。

以上の如くして、詩とは外形の表現を律格に託する情の文學の一種であるとして、さて其の詩の種類如何。文學の縱の分類法卽ち客觀の文學、主觀の文學及び客觀兼主觀の文學といふ分類法を詩に當てはめると、客觀詩卽ち敍事詩、主觀詩卽ち抒情詩、客觀兼主觀詩卽ち戲曲となる。

客觀の文學とは作家自身の感想を現はすことを主としないで、自身以外の事物を主として寫し出したものを謂ふ。其の律語で書いたものを通例總稱して敍事詩といふ。一例をいふとギリシアの『イリアッド』『オデッセイ』伊太利の『エイネイド』獨逸の『ニーベルンゲンリード』英吉利の『ビオウルフ』など、又我が『平家物語』の如きも敍事詩に屬するものと見てよい。敍事詩は論理上からいつても、又實際年代の點から言つても、すべて詩の初めをなすものである。蓋し人は自己心内の情緒に眼を向ける前既に早く外界の出來事に對して其の情を動かされるものである。されば何れの國にあつても最初の詩は敍事的のものである、そしてこの幼稚な敍事詩は通例作者の何人なるかを詳らかにしないものが多い。謂はゞ一個人の作と見るよりもその種族全體の作で、その種族或はその時代の精神を現はしてゐる者である。而して其の發達した階段にある敍事詩は其

在心爲志、發言爲詩、詩情動于中、而形于言」。といつてゐる。前者を補つてゐるものと見られる。また我が邦の歌の意義を按ずるに于多(うた)は于多布(うたふ)の體であるといひまた一説に于都多布(うつたふ)の意であるといひ、要するに咨嗟咏嘆の餘に發するものを告げ訴ふる義である。されば支那の詩とその意義が同じく些も違つてゐない。「于多はもの丶あはれを知るよりいでくるものなり」といひ、又古今集の序に「やまと歌は一つ心を種として萬の言の葉とぞなれりける。世の中にある人ことわざ繁きものなれば心に思ふことを見るもの聞くものにつけ云ひ出だせるなり」とあるもこの理に外ならぬ。

さて西洋に於ける詩の定義如何といふに、區々として何れをそれと定め難い。アリストートルは作る者の方面より見て詩人は發明するもの、或は想像するもの、即ち創造者(メーカー)であると定義した。かくてベン、ヂョンソン及チャプマン等はアリストートルに從ひ、創意と律格とを詩の特色とした。ゲーテやランダーを始め近世の多くの作家(ライター)等は、先づ詩を一の藝術(アート)と見て特に其の形式を取り立て丶重しとした。之れに反して外形よりも詩の情緒、想像等の内容に重きを置いたものも少なくない、殊に詩人側にはこの説を持するものが多數であつた。就中ワーズワースは此の見解を代表するものと見てもよい。曰はく「詩とは情熱の力によつて人の心に生けるが如く齎らされたる眞(トルース)である」。又曰はく「詩は平靜に思ひめぐらされたる情緒(エモーション)にその源を發した力ある情の自然の溢れである」と。近くステッドマン氏は其の著『詩の性質』中に「詩とは律語になつた想像の言葉で、創意や趣味や、思想や、情熱や、人間靈性の洞察などを表現するものである」といつた。

以上の諸説によつて其の一致する所を撮ると、詩とは主として情によつて成立ち、而して其の外形を律語に託するものであるといふことに定まる。若しこの二要素の中、後の外形に律格を缺いだならば我等はこ丶に散文を有することになり、又假令外形に間然するところがないとしても、全然知的要素で詩を作り上げることは出來ない。殊に詩にあつては其の他の文

類法に反對のものもないではない。例へばマッソン氏の如きは、コルリッヂの分類法に從つて、文學を詩と科學との二つに分類してゐるが、これは今日の傾向では全然採らぬ方法である。又デクヰンシーは其の「ポープ論」の中で、力（パワー）の文學と知識（ナレッヂ）の文學との二に分類してゐる。かの文章家ウォルター、ペーターは善き文學（グードリテラチエア）と大なる文學（グレートリテラチユア）とに分ける。卽ち實用の文學と美の文學ともいへやう、この二つの說は何れも內容より見てその論を立てたものである。其の他或は創造的（クリエーチーヴ）と批判的（クリチカル）とに分け、或は物語的（ナレチーヴ）、主觀的（サブゼクチーヴ）、戲曲的（ドラマチック）、記述的（デスクリプチーヴ）との四つに區別するものなどもある。要するに文學の種類を劃然と區分することは極めて困難なることで、細かに分ければ分ける程却つて互に牴觸もする點なども出來て、曖昧になる恐れがある。よつて玆では今日多くの人々の一致する說を採り、外形の上より橫に大まかに二つに分けて、文學を詩と散文とし、內容卽ち事物を描く作家の態度が如何なる風に表現せられてゐるかといふ點から縱に三つに分けて、客觀の文學、主觀の文學及び客觀兼主觀の文學とする。而して詩とは何ぞや、散文とは何ぞやと問ふ。

第十　詩

詩を英語でポエトリー(poetry)といひ、佛語でポエジー(poesie)といふのも皆同語原から來てゐる。卽ちその語原はラテン語のポエタ(poeta)にある。ポエタとは製作の義である。支那に於ても詩の語義は殆んど同じことで、「書」の舜典には「詩言志、歌永言、聲依永、律和聲、八音克諧、無相奪倫、神人相和」とある。之れによつて見ると、詩は人の胸中にある志を音律の助をかりて外部に表現するものである、卽ちこの「詩言志」なる三語の中には內容卽ち志と外形卽ち律語との二要素が相寄つて詩が成立するといふことを明かにしてゐる。詩の定義と見て差しつかへない。子夏はまた「詩」の序に、「詩者志之所之也、

聲、執着煩勞の情が稍〻朦朧となり、靜な觀照の態度にはいる。行ふ態度から味ふ態度にかはるのである。手や足の活動からは引き退くかも知れぬが、それだけ心の活動に突つ込んで行く。實生活で經驗することの出來なかつた別意識の香りがさして來る。所謂生の味に到達するのである。廣くいへば快感だが、狹くいへば其の事柄に對して今まで知らなかつた不思議を見るやうな、成程さうもあるかといふやうな、懐しいやうな忘れがたいやうな氣持を起こす。之れを反面から說明すると、今まで右でも左でも自己の利害といふ岩石にぶつかつては激してゐた感情の浪が、其の岩石から距てられて、始めて過去經驗の一切を含蓄する自己內の人生圖の海に平衡を得た意識で、つまり一局部に跼蹐してゐた種々の心生活がそのまゝ全關的に暢達する所に生ずる氣持である。今までは其の局部々々の嬉しい悲しいの情緖にくらまされて、氣づかなつた我が心內の諸觀念諸情意の活動卽ち天地一切を包含する我が生の營みの味若しくは意義を感得するのである。生そのものゝ味にまで覺到した生活である。此處に至つて藝術活動は實生活と異なる條件を完成する。藝術と實生活とは實に局部我より脫して全我の生の意義卽ち價値に味到するといふ一線によつて區界せられる。

第九　文學の種類

以上で文學の內容、目的の概略を說き得たと思ふ。さて次いで來るべき問題は、文學の構成如何といふことである。而して第一に考ふべきことは文學の種類如何である。

文學の分類法に關しては古來幾多の提供されたものを見るに、其の分類の基礎となるべきものは文學の外形であるか、或は其の內容であるか、乃至は外形、內容の兩側面より見て論を立てたものか、この三者の孰れかである。併しながら此の分

を直ちに文字なり繪畫なりに訴へて作る藝術に何の批點も無いことは論を待たない。此の意味で近代の藝術は實感の藝術である。而も猶ほそれが瞬間たりとも我れの利害から遊離して、第三者にならなければ決して藝術化する氣遣ひは無い。そもそも筆を執つて紙に書いてゐる餘裕が無い。文學藝術は必ず此の自己を第三者化する所に發出の罅隙を求めるものである。然らば元來實行の上に痛切なる喜憂哀樂の感を懷くものが、何の必要あつてこれをまどろつこい藝術に託するか。何故に手つ取り早くこれを實行の上に追究しないか。こゝで藝術發生の動機卽ち本能問題に立ち戻るが、それが卽ち自己表現の已みがたい本能とも言へやう。我が三寸の胸に蓄積する感情は切に表現をもとめる。情緒の表現そのものが本來其の情緒を放散し疏通せしむる一種の慰藉作用を有して生じたものである。例へば悲しい想ひが内に鬱結する。聲を上げて號叫すると幾らか慰められる、是れも自己の表現である。また其の鬱結した想ひを人に物語つて自ら發散する。是れも自己の表現である。けれどもこゝまではまだ藝術となる深遠性も必然性も有して居らぬ。更に一歩を跨いで、其の鬱結した想ひそのまゝを、第三者の地に据ゑ、之れに自己の經驗が牽ひ來たる人生の背景を被らせて、自由に、心靜かに、其の情想の味を味ふときは、始めて其の心内の光景がそのまゝ消して了ふに忍びない心地になる。卽ち單に自己の慰安の爲め、滿足のために泣いたり叫んだりする域から、生の味ひの妙境を保留し表現したいといふ域に進む。同じ自己表現といひながら、自己の内容が違つて來るのである。前者の一部が主觀的文藝を成し得るに對して、後者の客觀的文藝は必然で深遠の作を備へると信ずる。所謂觀照の藝術である。

藝術が消極的に實生活と異なるのは、其の我的情緒から離れ、局部的快苦から離れるにあることと以上の如しとして、其の積極的方面を見ると、これ最早或度まで前來の說で言ひ及んだ氣味であるが、謂ふ所實生活から離れると同時に、換々の

文學は生を活現するものであるとすれば、當然次いで來るべき問題は、所謂現實生活と文學との交渉如何といふ問題である。更に之れを縮めて言へば、人生は何の爲に藝術を所有するかといふことになる。但し玆にいふ實生活とは人生の諸活動の中から、特に一つ藝術活動を取り除いた名であることは言ふまでもない。

凡そ藝術を作る上及び之れを鑑賞する上に於いて、醇藝術的になつた刹那の心境は、表裏若しくは消積兩極面から說くことが出來やう。先づ之れを實生活と呼ぶべき方面から見るに、日常吾人が營んで行く感覺、思想、情意の諸活動は、人生の實行方面とも解すべく、一切自己の保存及び擴張を目的とし、之れを成就し若しくは守護せんが爲に營まれる。而して斯やうな實行的活動は、當然の性質として一局部的である。實行して實際的效果に達しやうと全力を之れに集中する結果、その部面乃至之れと密接の關係ある部面だけが意識の眼界に入つて來る。そして一局部から一局部へと結果の階段を逐うて移動して行く。而して自己の欲する所を成就せんが爲めの活動であるから、其の一段々々毎に自己の利害干繫に照準して快苦の價値を判定する。卽ち利なるものは快となり、害なるものは苦となる。又る或場合には利害とも著るしくない爲め無快苦の中性狀態になる。例へば砂糖を嘗めれば味覺を當局にした快があり、名譽を得れば虛榮心を當局にした快がある。實生活とは之れに外ならない。之れに對して藝術活動は消極的には、自己の利害感と距たり、從つて其の一局部から來る快苦感と距たる。一向的でなく、執着的でない。此の方面はカント以來幾多の思索家の頭を支配した所謂無關心、沒利害の思想で代表せられる。この思想は決して反對論者のいふ如く全然無意義では無く、眞の藝術境を成すべき必須條件として消極的には是れあるを要する性質である。而して之れを成すには前述の如く、我等の感情の四段作用中、我的から他的同情に移るを常とする。自己の利害といふ意識が退いて、其の觀念中の主格の利害感情が其の跡に入れ換はるのである。作家が自己の痛切に實感する所

用する。實地に於いても、理論に於ていも、これが古來の事實である。のみならず兩者は往々調和せずして、反動的に相消長することとすらある。又或時は名稱を更へ、形を變じて互に知らず〳〵相抱合してゐることもある。

　文學の目的が人生の眞を具現するにありとすれば、其の所謂眞が含む道德的意義も右の意に於いて是認せられる。茲では畢竟實際的意義が眞といふ名を被つて快樂と相擁し以て美の要求を全うせんとするものである。然るに今若し見地を一轉して考へると、文藝を有價ならしめ嚴肅ならしめんが爲めに眞を加へるのでなくして、逆に此等の眞が發揮したくてたまらない。それが發して此の種の文藝となつたとも解せられる。此の場合には美は從になつて、眞が主任につく。美は唯眞を發揮する爲めの方便に過ぎない。思ふに此の兩面は雙方とも事實であり。また眞理である。恐らく同一の人にあつても、兩者が交互に若しくは同時に存し得やう。かくて人生の眞を寫す文學は現實の形を忘れることが出來ないと同時に、其の奧に更に最後絕對のものを求めて直接之れを描寫せんと力める。書いてある事實が直ちに書いてない全體としての人生といふやうなものを暗示する。固より全體の人生であるから、明瞭にそれを捉らへることは出來ぬが、成程斯んな人生もあるかと思ふと共に、それが直ちに人生全體の運命問題を提起して限りなく之れを想ひ廻らさしめる。讀み終つて卷を伏せると共に、一種の瞑想的情趣は我れを驅つて樣々の人生問題に囘顧せざるを得ざらしめる。而して色々に想ひ得てしかも何れにも滿足することを得ず無限に欣求の情を恣にする時は、心の活動につれて無限の快味を感ずる。所謂生の味は是れである。之れを文藝の末尾として宗教的情趣とも名づけ得やう。是れが解決に一轉すれば其處から新宗教なり新道德なりになるのである。

第八　文學と實生活

の情が其のまゝ點綴せられ且つ節奏に乘つて流れ出たのである。其の他抒情的な詩歌、乃至散文中の抒情句等が皆同じ例である。

第七　文學の目的――生

文學の目的如何。答は極めて簡單である。曰はく、生の活現、若しくは生の味ひ、これが其の目的である。所謂「自然に明鏡を揭ぐる」ものといふは、啻に文學に於いてのみならず、すべての藝術の極致は皆茲に到らねばならぬものであると思ふ。

古來文藝の目的には常に二つの極があつて互に相動搖してゐる。一は快樂で、一は實際的意義である。併しながら之れを總括していふ時は、文藝の歸趣はたゞ美にあること勿論であらう。卽ち快樂といひ實際的意義といふものは、畢竟美の成分として文藝に入る。されば若し斯やうな統一目的から離れて實際的意義のみ傑れた作品があつたら、それは文藝としては價値の無いものになる。道德を說くものであつたら修身書になり、教義を說く者であつたら說教集になり了するであらう。之れに反して快樂のみある作であつたら、やがて講談、落語、遊戲、飲食の樂みと徑庭がなくなる。此の二つは必ず並存するを要する。されぱと言つて二つのものが漫然同居したばかりでも藝術とはならぬ。兩者は是非とも溶解して一になつてゐなくてはならぬ。快樂である、併しながらそれが他の快樂と違つて一種の意義を含んだものでなくてはならぬ。また實際的意義である、併しながらそれが其のまゝ快樂であり、懷しく忘れ難いものでなくてはならぬ。此の境を先づ大まかに美と名づける。されば美は一體であるが、其の判斷評價を分解する時は、常に二元的傾向を有する。一方には快樂の度で藝術に高下の品等をつけやうとする、他方には其の所含の實際的意義の深淺で高下を定めやうとする。二つの標準が絕えず交錯して作

し來たる。またそれにつれて其の種々茫漠の情を的確にせんと雜多連續の知的要素が意識の表面に浮びかける。玆に一種捕捉し難い一般的な感情を經驗するに至る。此の一般的な情、言はゞ事後感情、全體感情、混合感情とでも解すべき一種の印象を玆で美的情趣(Aesthetic mood)と呼ぶ。印象的情緒である。第四段境と見てもよい。

斯やうに見地を定めて見ると、第一第二の境にある情は美的とはならない。何故ならばまだ客觀化されて突き出されてゐないからである。勿論是れは舊來の美學の實感假感の別ではない。現實に對して痛切に同感してゐる、其の同感で差つかへないが、たゞ同感といふ形に是非ならなければ、藝術は產れぬといふのである。行倒れに對して驚く、惘む、直ちに筆を拔いて之れを描く。而も若しそれが藝術になつたら、必ず作の成る瞬間の氣持は知らず／＼驚く惘むを通り越して悲しいといふ境に入つてゐるか、乃至其の驚く惘むが直ちに自分でありながら自分に打眺められ同感せられるといふ二重の形になつてゐるに相違ない。此の意味から言へば、凡て藝術は客觀的でなくてはならぬ、客觀化せざる主觀は斥けらるべきものである。卽ち藝術の世界から全く遮斷せらるべき主觀とは、第一境第二境の情である。强いて遮斷しなくとも、是れに滯る間は、藝術的取扱をする餘裕は無い。違つて之れに形を與へても、藝術では無いものになる。第三境以上は、自ら實地に切に感じながら同時に之れを描くことが出來るが、第一第二の境地では初めから藝術は出來ぬといふのである。されば非藝術的な此の主觀的情緒を藝術に入れるには一步を轉じて第三境の情緒に變性さすか、然らずんば一種特殊の方法を用ひて强いて之れを誘ひ出す外は無い。其の方法とは節奏統一などいふ人心本然の活動形式に擬した技巧の力で其の途を滑かにするとか、又は客觀化した事象の中に感嘆、批判、判斷、意見等の形で點綴し附着せしめるとかいふ工風である。例へば夫の「萬葉」の行倒れを哀む歌に「家ならば、妹が手まかん、草枕、旅に臥せる此の旅人あはれ」とある。末句を哀れむといふ意に取れば、主觀

れに集める反應である。而してそれが行倒れであつたと知れると共に、自分に不利の繋累が來たりはすまいかと思へば、すたすたと急いで其の場を去る。又自分に掛り合ひは無いと思へば好奇心で立ち止まつて見る。玆までは第一段の情で、我的と名づけてよい。我れを中心として直下に感ずる情である。而して好奇心で立ち止まるなり、急ぎ行き過ぎるなりしながら、さてつくづく其の行倒れの身の上を思ひやると、哀れになる、又何か深い遺恨でもあるものなら善い氣味と思はぬとも限らぬ、つまり同感(シムパシー)若しくは反感(アンチパシー)が起こる。之れは第二段の情で半我的とも名づけられやう。卽ち半ば我れを基本としながら半ば先方の情に同じで、彼我對立の狀となり、可哀さうとか、憎いとか、善い氣味とかいふ批判的態度を取る。從つて可哀さうなら救濟の方を考へてやる、また憎ければ其の狀態を續けさせたいといふ氣持になる。凡て直ちに我が意のまゝに實行せんとする階段に移つて行く。道德的同感又は反感とも呼び得やう。それが第三段になると審美的同情になる。卽ち他的とも稱すべく、全く、我れを離れて先方と同じ情が我れに起こる。妻子もありながら零落して到頭路傍の行倒れとなつた。當人の心の中は無限の悲哀であらうと普通に察せられる。此の悲哀が傍觀してゐる我等の胸に迫る。此の時我れと行倒れの人とは一になつて、一つの情で結合せられて了つてゐる。主客の兩觀は溶けて意識の一燒點に合體する。我れの情で向ふの物を生かす。向ふからは物が來、我れからは情が往つて、ぴたりと行き逢つて一つになる。之れを美意識の本來と名づけてよいのであらう。而して此の第三段境は更に二つに分かれる。情緒的と情趣的ともいはう。情緒的とは前來の說の如く普通種々の情緒が其のまゝ客觀に合した場合が美的情緒(Aesthetic emotion)あるが、情趣的とは、斯くの如き情緒的事象が幾何づゝでも起こつた後または切れ目に、其の中心事象がちよつと意識の上に薄らぐと同時にそれに伴つてゐた明白な情が水に繪具汁を點したやうに、はつと散つて一面の漠とした情になり、且つ連續した數多の情が朧げに或る一調子を連環として周圍に浮動

事實で、また其の上に、この兩者は意識內に在つて一つに合體して働き得るけれども、それが相互に助長し合ひ、また相互の勢力を增進させる因となることは出來ないものである。要するに一方の精神を修練することが、必ずしもそれと並行して他方の精神の發達を伴はないといふのである。

以上によつて文學の內容となるものは知の外に情の要素の必用であることが分る。殊に情的分子が其の主要素であるといふことは、藝術中の藝術ともいふべき音樂が、殆んど情の要素のみで成り立つて、また對者の情のみに訴ふるもので殆んど知識の容喙を許さないのを見ても思ひ半ばに過ぐることであらう。而して科學と文學との分域は、各々この知的現象と、情的現象とを主と立てゝ、一方に立て籠るところに存するのである。されば文學研究の上で最も注目すべきものは情である。文學の內容は知情二つであるが知の事は別に論ずるをも要せぬ程であつて、ひとり情を主として論ずれば餘はおのづから明になる。

第六　文學と情

文學の內容の主要素は情であるとして、然らば果たして如何なる情も皆文學の中に取り容れてよいか、凡て情は皆美的となり得るかといふ問題が殘る。卽ち情の種類如何ともいふことになる。

前節に於いては、吾人の意識內の知的現象は凡て客觀であるとし、情的現象は凡て主觀であると假定して、論を進めて來た。而して斯くの如き客觀の知的現象が我等の意識內に生起した時、之れに主觀の情意が反應作用を呈する狀態に凡そ三段若しくは四段の境遇があり得る。例へば路傍に性の知れない異體のものが橫はつてゐる。先づ斯やうな知的現象が意識の鏡に映じた時、我等ははつと思つて驚き見つめる。我れの是れに對する態度を定めるため先方の正體を見極めんと注意を一時に之

の人格或は主觀の現はれ初めた時である。而して感情はその性質上斯くの如く主觀的のものであるから、到底各人によつて區々たるを免がれない。吾等は皆等しく同一物を知り得るけれども、決してそれに對して等しき感情を惹き起こすことは出來ぬ物一たび情の力に觸れた時は、そが對者に於ける結果は到底いろ〳〵であつて全然同一であることは出來ぬ。隨つて個性の表現もこゝに其の機會を見出すのである。この點は一般普通の客觀的な知識を取扱ふ科學には見ることの出來ない現象で、文學が一面個性の表現であるといはれるのも、一に情の力によるのである。斯くの如くにして文學は單に事實を事實として眞理を眞理としてのみ表現せずして、事實或は眞理プラス感情、或は知プラス情といふ態を取る。而して訴ふるところもまた讀む者の知識を通じて情に訴ふるのである。語を換えて言へば、科學的精神がすべて事物を觀察するのは、其の存在の態狀、その相互間關係及び其の周圍に對する關係などを發見せんためである。これに反して文學的精神の觀るところは、そが人の情性に對する關係如何を明かにせん爲めである。例へば植物學者は、一草を取つて其の如何なる部分によつて組織せらるゝか、又その各部の機能は如何、そは成長と共に如何なる變化を受けるものであるか、さては他の草木との異同の點は如何などゝ、その形體組織に就いて精査する。而してこの方法たるや飽くまでも知的であつて、求むるところはまた事實である、法則である。然るに文學者に取つては、これ等の事は皆第二段に屬することで、彼れはこれよりも寧ろこの一草一木の生命を味はんとする。かくて言語文辭に現はれては、一は科學となり、一は文學となる。併しながら初めには科學たらしめんと企てられた書も、偶然情の分子を加味して文學的性質を帶ぶるものと成り得ないこともないと同時に、情に成れる文學も猶ほ事實や眞理に其の土臺を据えることの必要な場合が多い。蓋し文學的といひ、科學的といふ二個の精神狀態は、決して全く兩立し得ないものではない。けれども實際は多く人によつて其の一が他を壓する程に勝れて發達してゐることのあるのは爭はれぬ

概して「文字に上らざる文學」といふ條件附の意味を含めて言ふのであるから、玆では言語といふことを更に狭めて、文字に記したる言語すなはち文辭といふ制限の下に、文學を定義しやうと思ふ。蓋し文辭と言語とは、たゞ言語の口から出て消え行くものを記號で定着したに過ぎぬといふのが根本の性質であるから、兩者いづれとしても大なる影響はない。

斯くの如くして文學は其の外形の表現を文辭に託するものであるとしてさて其の次の特質は如何。

第五　文學と其の内容——知情

文學は其の外形の表現を文辭に託するものであるとすれば、來るべき考察は、其の内容の問題である。前に舉けた文學の定義で見ると、マシュー・アーノルドが文學を廣義に解して「凡て書册より來たる知識は文學也」と言つてゐるのを見ても、先づ文學には知識の分子があることだけは明かである。然らば法律書も數學書も文學であるかといふに、吾等は通例之れを文學とは言はぬといつて置いた。さて問題はこゝにあつて、せめて文學といひ得べきものには、數學書或は法律書の如き全然知識的分子のみで成れるものとは違つて、他に何等かの分子が加味されてゐるのではないか。今假りに文學に對して科學を立てゝ見るに、科學はすべて知的現象を取扱ふものであつて、又知識に訴ふるもの、而して知識は客觀的、且つ多く抽象的のもので普遍性を具へてゐる。數學の如きは其の尤も純粋なる代表的模型である。例へば「直線は二點間の最近距離である」といふことは、或る程度の知識に達した人々には皆一樣に理解され得る眞理である、そして吾等は之れを理解すると共に何等感情を動かさるゝこともない。かくの如く科學にあつては、之れを書く人も、之れを學ぶ人も目指すところは知識にあつて、その間一點情の加はる餘地がない。さて翻つて考ふるに、言語學辭に情の分子が入り來たつた瞬間は、既に之れを書くもの

イギリスの文章家ペーターは「單なる事實でなく之れを人間が選擇したる形式によりて變形したる雜多の事實の記錄」を文學とした。現代のイギリスの學者では、評傳家として有名なるジョン、モーレー氏は「文學は凡て道德的眞理と人間の感情とが餘りに偏狹ならざること、健全なること、形式の人心を惹くことなどいふ諸條件を具したる書籍より成る」といひ、文學史家として有名なるブルーク氏は文學を「聰明なる男女の思想感情の記錄にして讀者に快感を與ふるやうに按排せられたるもの」といひ、前に引いたボスネット氏は「散文たると韻文たるとに拘らず、考察よりもむしろ想像の作物で敎訓乃至實用よりもむしろ國民の最多數の快感を與ふるを目的とし、一部特殊の知識よりもむしろ一般に訴ふるが如き著作より成る」といふ。

第四　文學と言語文辭

以上の諸說で見ると、先づ文學の最底邊をなしてゐる一番廣い分界は言語に見はれたものといふ事である。頭の中に蓄へてゐる感想や身振手眞似で表はした動作や、線條色彩で描いた圖畫やは、文學でない。ひとり言語に上つたものが文學である。是れで先づ、文學といふものゝ本領が稍々明確になる。

次に言語といへば直ちに之れを文字に記した文辭といふものとの關係が問題になつて來る。單に言語に上つた許りで文學は完成するであらうか。口で歌つてゐる唄や語つてゐる話やは、それが何ほど立派でも文學ではないといふ恐れはないが。此の疑問には否と答へるものと然りと答へるものとがあり得る。然し西洋のリテラチュラといふ語源、支那の文學といふ語源、みな寧ろ文字と密接の關係を有して居り、また口で歌つてゐる歌を聞いて我々が之れを「立派な文學だ」など評する場合には

定の意味は無かつたといつてよい。ボスネット氏の「比較文學」と題する書によると、ラテン語の本元たるローマ時代に於いては、タシタスは此の語を單に文字といふ意に用ひ、クヰンチリアンは文典といふ意に用ひ、シセロは學問といふ意に用ひた。それが紀元十四五世紀の學問復興期になつてもまだ一向に定つた今日の文學といふ義にはならなかつた。僅かに十八世紀前後イギリス、フランスなどの國民文學が勃興してから始めて是れが確定しかけて來た。畢竟ギリシア、ローマの昔では、詩は詩、戲曲は戲曲と別個の稱で用が足りて、此等を總括した名は必要が無かつたものらしい。ボスネット氏の解する所では、此等の國そのものが統一せられた國民といふ形を取らず、ギリシアは都市の大なるもの丶集合、ローマは一躍して天下唯一と考へられた帝國となるといふ有樣で、近世の所謂列國民といふ狀態が無く、隨つて國民文學といふ如き區別が生じなかつた爲めである。一國々々で國内のあらゆる詩歌戲曲等を總括した名を用ひ、ギリシア文學、イタリー文學などいふ名目を造るの必要がなかつたのである。要するに國の統一對立といふこと丶其の文學的産物の總名とは相伴ふものであるといふのがボスネット氏の說である。併し之れは尙ほ研究を要する點で、果たして國民といふ觀念が生じなければ文學といふ總括的觀念も生じないか否かは十分考察に値する。兎に角ボスネット氏の論は一說として聞くべきであらう。我々はこ丶で上古は文學といふ語義が甚だ曖昧であつたといふ事例だけを見て置けばよい。

　近代でも文學の定義といふものは依然として、區々たるを免かれぬが、之れを何れにか定義せんとする要求は明かになつて來た。事實今日でも是れが文學の動かぬ定義だといふものは無い。下に其の重なるものを擧げて見るとイギリスに於ける近代の大批評家たるマシュー、アーノルドは寧ろ之れを極ひろく解して「凡て書册より來たる知識は文學也」といつてゐる。併し是れは狹義にいふ文學とは別のものになる。書物に書いてさへあれば、法律文でも數學問題でも文學だとは言はれぬ。同じく

知識上の議論を主とした論文でも文學になり得ることがある。支那の韓非子や孟子の文、西洋のカーライルやマコーレーの文の如きは皆其の例である。此等の論文は、今日では立派な文學である。さうかと思へば同じやうな論文でも、今日の多くの新聞論說や經濟書法律書などの文章を文學とは言はぬ。文學と非文學との區界が甚だ不明瞭になつて來る。

第一文學といふ言葉から穿鑿して見ても、日本で今日これ程まで通になつてゐる此の言葉の起原は無論支那にあつて、夫の『論語』先進第十一の中に孔子の言として門下生の特長を評した句「文學子游子夏」とあるのなどが最も古い例であらう。註釋家は此の文學といふ語を解して「文學所以載道」など言て居る。是れは勿論道すなはち道德を基本にした支那一流の說であるが、兎に角道德と混合しながらも他の德行、政事、言語など別けて並列した所に其の一種特殊のものと考へられた趣意はよく見える。其の他『史記』には「獄官文學」などいふ語があつて、是は更に廣く一般文字書册に記載したものといふ意に近づく。さうかとすれば他方には『後漢書』に「少有大志不好文學」などあつて、ちやうど今日文學が一部の人には他の政治道德實業などいふ實際方面と異なつて、寧ろ遊戯に近いものと考へられるのと同じ意味も見える。降つて六朝頃になると支那とも文學といふ語がます〳〵明かになつて他と劃然違つたものとせられ、殆ど今日我々の使用すると同義に用ひられた趣がある。

第三　西洋に於ける文學の定義

次に西洋では文學を英語でリテラチュア(Literature)といひ佛語も獨語も同語原から來てゐる。さて此の語の發端如何といふに、語原はラテン語のリテラチュラ(Literatura)にある。リテラチュラとは凡て文字に記錄したものといふ義で、ちやうど前に擧げた支那の『史記』の用例などゝ通ずる語である。而して西洋の用語例も場合によつて種々であり、近世までは、到底一

す。而して此の知識慾が人間に存する所以のものは、畢竟之れによつて其の事物の性質を明かにし、以て我が其の事物に對する關係若しくは態度覺悟を定めんとするが爲めである。從つて之れを小にして、例へば暗夜に燐火が燃える。其の性質を研究して我れに無害であるか、否かゞ分かるまでは不安心でたまらなかつたが、謂はれを聞いて見ればもう怖しくも無くなつて我れの之れに對する態度覺悟が定まつて來たといふ。是れは知識の恩德でまた知識慾が人間必至のものであることを證する。更に之れを大にして例へば詩歌小說の如き、動々もすれば遊戲三昧の無用物と誤解せられる憂がある。此の場合に結局文學が天地人生の間に如何の地位を占むるかを明かにして、天地人生全體の原理と文學との關係を定め得たなら、我等は少なからず安心して之れを取るとも捨てるともし得るであらう。是等は所謂哲學慾である。燐火の例が科學に達して滿足する知識なら、後の方は哲學に達して滿足する知識である。前者は其の部分だけの構成現存の狀態を研究するもの、後者は更に之れを宇宙全體の系統に連絡せしめて其の價値品等を研究するものである。

研究といひ知識といふことが斯やうな意味を有するとすれば文學の研究といふことも、おのづから不思議は無い次第となる。文學研究は之れを文學として味はんがためといふよりも、之れが構成狀態若しくは之れが價値品等を知つて我れの疑惧を解き、我れの趣味の根柢を牢固にせん爲めといつてよい。恰も星學者が星を研究の材料とする如く、文學研究は文學を研究の材料とするに過ぎぬ。文學の構成如何、文學の價値如何。我等の研究は此の二問を解釋せんとするに外ならぬ。

第二　文學の語義

文學とは元來何であるか、單に詩歌小說の類といつてそれで滿足すれば論は無いが、事實さう行かぬ場合がある。例へば

文學概論

第一　緒言

文學を研究するといふことは、一見矛盾のやうである。研究といへば知識で其の理を說明せんとする事であるが、文學は本來情を主とするものである。例へば詩歌小說の類は最も著るしい文學の種類である。併し此等の文學はもと〳〵讀誦して趣味上の滿足を得べきもので、決して之れを理窟に訴へる性質のものではない。文學に通ずるといへば多く詩歌小說を讀むといふことで、理窟の上から硏究すらといふことではない。されば文學の研究といふことは何のために必要で、また如何にして成さるゝか。

蓋し文學を味ふといふのと文學を研究するといふのとは、全然領分が別である。文學が文學みづからとして生じた理由は言ふまでもなく趣味に訴へるためであるが、之れを研究する場合には、其の目的が違つて居る。研究といふことは飽くまでも知識上の仕事であるから、研究して行くといふ望は矢張り知識上の望でなくてはならぬ。人の趣味に訴へるのが本來だとしても、併したゞそれを趣味のものだといつては居られぬ場合がある。卽ち我等は生れながらにして「知りたい」といふ根本の慾望を持つてゐる。所謂知識慾が之れである。此の知識慾は何ものに對しても其の性質理合が知りたいといふ研究心を起こ

文學概論

表面はなしにではないけれども、作者の内生命、即ち感じの上に一種の形式がある。換言すれば、作者心内の感じをもつて、散漫なる文字以外に、その文章を統一してゐる點があるのだ。されば、この意味より云へば、この種の寫生文は、形式もあり、完成されてもゐると、いつてよいのである。

▲兎に角、凡て渾然たる一藝術品たらんとは、必ず一の中心點（フォーカス）がなければならぬ。しからずして、唯だ、散漫の描寫たるに止つて、中心點がなければ、其處に吾人は快感（プレジュア）を感ずることが出來るものではない。中心點は、必ずしも形式の上に現はれてゐなくともよいが、是非共なくてはならぬものである。もし全く無ければ、それは藝術品たる約束に違つてゐるものである。

▲この意味から、現今の寫生文に、自ら二種の別あるといふことがいへる。一は全然無形式で、未完成のもの、他は内生命即ち感じの上に一種の形式のあるものである。（明治四十年三月）

の發端は起こつて來るのだが、まだその前、渠等が市外に去らぬ前に、市民が疫病の襲ふ所となつて悶え苦しむ有様、續々と枕を竝べて死んで行く慘鼻の様から、片附けるものもない死屍を餓えた犬が貪り食つて、忽ち病毒に感染して、その儘斃れて行く様なぞを歴然と目の前に浮ぶやうに描き出した所は、疑ひもなき寫生文である。

▲然し、これは古い寫生文だといふだけで、それが今の我が國の寫生文と、どういふ關係があるといふのでもない。

▲今の所謂寫生文は未完成(アンフイニッシェド)のもの、無形式(フオームレッス)のもので、それだけで、完成したものと見ることは出來なからう。いはゞ寫生文は、手習ひにいゝ、他日完成したものを作るべき準備として、筆ならしをするにいゝ、筆力を養ふにいゝ。それのみで滿足して、進まなかつたならば、或は何の役にも立たぬかも知れぬ。

▲尤も、未完成のものが、すべて必ず興味がないとは限らぬ。レンブラントのスケッチは、雪舟の畫稿にも比較すべきものであるが、その下書きである所にまた一種の興味がある。先頃物故した獨逸のメニッツエルのスケッチなども、矢張り同様である。寫生文もこれと同様の意味に於いて、一種の興味は無論あるが、然し、スケッチでいゝものは、それが完成せられればなほいゝ如く、未完成(アンフイニッシュド)の寫生文も、それが完成(フイニッシュ)すればなほいゝものとなる譯である。

▲少なくとも、寫生文は、これから小説を書かうとか劇を書かうとかいふ若い人々が、先づ手習ひとしてやるには、最もよいものであらう。

▲寫生文の興味は、下繪の興味と同じであるといつたが、或は現に今の寫生文の中にも、渾然とした興味を與ふるものがあるといふかも知れぬ。自分が前にいつたのは、所謂寫生文なるもの全體についてのことで說者の言の如きものも實際あるに違ひない。けれども、これについては、自ら異つた解釋をしなければならぬ。即ち、文學の上には、初中終の形式がなく、

今の寫生文

▲英國現代の文學者に、ホワイトといふ人がある。わが國ではまだ知られてゐない、英國の讀書界、殊に家庭の間には、非常に持て囃されてゐる。その人の作に、『セルボーンの博物學』と云ふ書物がある。全編書翰體で、セルボーンから寄せたやうになつてゐる。今日は森に入つて、こんな珍らしい草花を發見したとか、今日はかういふ樹木を見たとか、今日はかういふ鳥を見たとか、日ごと〳〵の出來事を書いたものだが、その筆法がいかにも寫生的か、讀者はさながらその境にあつて、親しくその物に接してゐるやうな感じがある。

▲けれども、この書物は、わが國の寫生文とは違ふ。わが國の寫生文は文學であるが、この書物は文學ではない。博物學の說明を、趣味あらしめる爲めに、姑らく文學の形を借りて書いたのに過ぎぬ。趣意が全然違ふから、列べて比較する譯には行かぬ。

▲西洋で、寫生文として最も古いものは、ボカチオの作デカメロンの緒言(イントロダイシヨン)であらう。殊にその前半がさうである。千三百四十八年から九年に涉つて、フロレンスの町に惡疫が猖獗を極めた。七人の宮女と三人の紳士とが、それを數哩の市外に避けて、どうせ長くは生きぬのだから、生ある中、出來るだけ氣儘に暮らして、逸樂を縱にしようといふ所から、百物語

がら行くといふ要求を充たしてゐる以外には、特に名文として舉ぐべき點はないと思ふ。あの「金色夜叉」の文章を讀んだ人は何人も思ひ當る如く、あの通りのまわりくどい文章で、仲々讀むにおつくうがらせるけれど、どことなく面白く心を惹かれて、道草を喰ひながら知らず〱讀み行かすのである。これ蓋し作者狡猾の存するところであらう。文章の大家たる作者の技倆の一面は、この處にも見えてゐる。

在來の修辭學で、種々修辭上の法則を舉げるけれども、これを科學の一部として、已に成れる文學、已に成れる文章に就いて歸納したる原則としては、かゝる修辭上の法則も必要ではあるが、卽ち一のデータとしては必要であるが、文學の上にとつては、左樣な修辭法は直接多大の利益を與へやうとも思はれぬ、寧ろ文章を書く人の氣持ち、心の持やうといふやうなところに修辭上の要件を舉げて來れば、文章を書く上にも直接役に立つこととなり、おもしろいことであらう。(明治三十九年六月)

を揮灑した文章を書いても、あだかも鉋をかけぬ板のやうなもので、これを辷りよく滑らかにする必要がある、これは極めて平凡な事で何人も知つてゐる、併しこの法は或る程度までは必要であるが、その度を過ぐれば却つて文章を拙くする虞がある、幼稚なる文章は論外であるが多くの悪文は所謂辷り過ぎる文章である。道具は揃うてゐて、無難でもあるが、コンエニショナムズムに過ぎ辷り過ぎる文章、添削するに最も困るのは此の種の悪文である。かゝる文章は普通の場合と反對の方向に行つた悪文である。何故といふに文學は感情を中心としてゐるもので、感情には注意力の消費といふ事が肝要である、注意力の消費が減ずれば感情の力は減ずるのである、卽ち知識的となつて胸に應へるやうな趣きはなくなる、これは明白なる心理上の事實であるが、辷り過ぎる文章も丁度此處へ落ちて來る、餘りつるくく辷つて行つて注意力の消費を要求しない、從つて人を動かす感情の力に乏しくなる。故に辷りよく鉋をかけるといふ修辭上もこの要件の外に、三の要件としては文章を引つかゝるやうにすることである。たとへば斬新な文法を用ひて、理解せらるゝ範圍内に於て、一句一句に讀む人の注意力を惹き著けるやうにするのもその一方法であらう。卽ち新語句を造り出して用ひるといふことである。又今一つは句法を廻りくどくすることである。勿論乾燥無味に陷り、遲徐に過ぎて、文の勢力をだれさすといふのではないが、唯すらくと走つて了はないで、ゆるりくと讀ましむるやうな工夫をせねばならぬといふことである。道草を喰ひながら、一つところの眺めを飽かず樂しみながら、徐ろに前んで行くやうに、ところぐに讀者の心を惹き寄せる工夫を要するのである。而してその中に新語句を挾んで、讀者の興味を補つて行かば更に妙であらう。かくの如くゆつくりと味ひ樂しみながら、讀み行かしむる工夫をして成功せる近代の例は、故尾崎紅葉が『金色夜叉』の文章である。『金色夜叉』の文章に就いては、世間でもいろくの方面からこれを賞讃して、それぐ異つた理由を擧げたが、右にいふ道草を喰ひながら、ゆるりくと味ひ樂しみな

常口にする如く朗吟し去つても、これは俗談平語である野卑である威嚴がないといふ意識は起らぬので、最も適切にその感想をいひ表はし得るのであると思ふ。英國の詩文を見ても覺えず朗吟して口調と感想との極めてよく調和せるを思ふのである。然るに日本の言文一致體の文章は、感想を表はす上に於ては雅文に優れてゐるが、それを朗誦するとなると前に云つた吊詞の場合と同樣の遺憾を感ずるのである。この一境をだに通り越さば、言文一致は詩に入り來るを得るであらう。而して、詩がこの境に達してこそ、初めて世間の人の詩に對して懷ける不滿足、卽ち詩の音樂的方面の要求も充たされるであらう。斯くて在來の民謠が何そのまゝに耳に快き響をなして、その感想もこれに伴ひ、朗誦の下自から胸に融け入るかと覺ゆる如く、複雜なる今代の言文一致によつて歌はるゝに至るであらう。今日の詩も進んでこの境に達せざれば到底滿足することは出來ぬのである。

修辭法三章

前にもいつた如く言文一致は雅文の舊形式を破つたものであるが、而も其の內容は自然に新たなる形式との調和を要求するのである。これは言文一致に限らず雅文に於いても同樣のことであるが、先づ修辭法の順序として、第一に、最も適切に感想を表はさねばならぬ。就中文學的の文章に在つては、感情の方面を痛切に表はす工夫をしなければならぬ。或は感情を中心にしてこれを把まりとのみすれば自然道理を疎かにするといふかも知れぬが、文章として論ずる上は、それは多く顧みるに及ばぬ。眞によく情の中心を摑まば論理は疎になつても感情の方面から自然全體の感想は明白に表はるゝであらう。斯樣な事は規則を設けて律すべきものではないが、その人の心持によつて、己れの胸になりかへつて見て感情の灸所を把み出さうとするのが恐らく最良の修辭法であらう。更にまた下つて修辭法の二要件がある。上の如く痛切に感情を摑み出してこれ

斯くして言文一致を互に聽いても野卑であるとか威嚴がないとかいふ非難の起こらぬやうにならば、こゝで初めて言文一致は日本の詩の中に安全に入り得るのではあるまいか。言文一致の新體詩に就いては今までに已に註文も出で、實際これを試みた人もあつたが、それとても極めて稀れで、成功したものは無論ないらしい。昔の民謠の中には言文一致のもので而も優に詩の領域に入り得るものがあるが、それは、一つは語法も今のに比べては大分古くて自然典雅なところもあり、又さうでなくともその謠つてゐる感想そのものが一本調子であつて、普通に考へらるゝやうな言文一致の調子と合致してゐて、文體の威嚴といふやうな事をいはずとも差支のないやうな調子の感想を謠つてゐるからであらう。今の詩に見ゆる感想の如くモーラル、トーンが入つては昔の民謠も決してあのやうに成功はしなかつたであらう。それ故言文一致の詩に成功したものは、今日までのところ殆んどないといつてもよい。畢竟これは、いかに近世の詩が朗吟せられず默誦せられるものであるといつても、さすがに散文に比してはより多く耳に愬ふるが故である。たとひ朗吟はしないまでも微吟する位には行かねばならぬといふ點から、散文よりも多く鼓膜や聲音帶を刺戟し、從つて在來の習慣性に反きやすい。故に言文一致を安全に詩の中に入れるやうになるは、それを耳の官能に塑へても尙ほ吾等の習慣性を刺戟しないやうになつた上の事で、一方に文學者の努力を要すると同時に、又時勢の來るを待つ外はない。

西洋の詩歌文章または日用の言語には英語に就て見るも、到底日本語にはかゝる思想をいひ表はし得ないと思はれる極めて適切な語句がある。これには勿論種々の理由があるであらうが、結局西洋の文章は言文一致式に發達したもので、詩歌文章の文體と日用の言語との差は、唯修辭の分量の差に過ぎず、體そのものゝ上には差別がない、從つて詩歌文章の語句を日

成してゐるのは、依然として自然派たる點である。併しながら彼れが能く世界に大を致したる所以は、是れではない。即ちイプセンが作品の中に沸發したる社會的哀憐こそは、彼をして全歐洲の精神界に活きたる處たらしめた理由であらう。

◎彼れが『死より覺めたるとき』を初めて讀んだ歐洲の男女等は、如何に深く藝術と人生、本然の自由と現實社會との矛盾に囘顧の情を寄せたであらう。はた彼れが『ノラ』の始めて獨逸に演ぜられしとき、獨逸の女子等は、如何に自家の運命の奇なるに驚いて、今更の如く左右を見廻はしたであらう。

◎イプセンの大作たゞに彼れ自からの作に於てのみでは無い。むしろ彼れに源を發して獨逸、英吉利、佛蘭西に其の追隨者を生じた其の追隨者によつて更に大を加へたのである。獨の現代戲曲の大家ズーダーマン等、英の現代戲曲の大家ピネロ等、乃至佛の小說家ゾラ等の如きすら、其の後中に於てイプセンの影響は認められたといふではないか。歐洲の近代文藝に感化を與へた點においては露の聖人トルストイよりも更に顯著の功を有する、歐洲近代の所謂問題的文學は要するにイプセン的である。

◎而して歐洲の思想界は、今や社會的哀憐より轉じて、其の奧に横はる所の、神祕にして寥落無方なる大天地に眼を移さんとするに非ずやと見ゆるとき、社會的哀憐の權化イプセンは逝去した。噫これ何の意味であらう。

もとより立派な例だとは思はねど、弔詞の威嚴を損じてはゐないと思ふ。唯、默讀してはさまで不十分と思はぬながら、これを公開の式場などで讀み上げるほどの勇氣は足らぬ。これは多分は在來の習慣のために過ぎぬであらうから、時勢の移るにつれて平氣で公開の式場に讀み上げ得るに至るであらう。これで見ても言文一致の文章を音讀するには、尚何かこれ以上のものが添はらねばなるまい。思ふに、聲を出して讀んで、蓄音器に換へるとなると、在來の習慣性が一層烈しくそれに依つて刺戟せられて邪魔をするのであらう。併し時勢とともに左樣な事もなくなるであらう。

内容が外形の覊絆を脱して赤裸々に己れ自からを現はさんとする、ロマンティックな氣運に依つて、其の地歩を占め來つたものであるとはいひながら、而も其の赤裸々の感想そのもの自からが文學的、裝飾的のものであるならば、何等か外形の裝飾を要することは勿論である。卽ち舊來の形式はこれを脱して、新らしき裝飾を着けねばならぬ、新らしい赤裸々の感想と合致するやうな外形をとらねばならぬ、數年前までは言文一致に疑ひを懐くもの多く、言文一致で手紙の文が書けるであらうか、莊嚴な文章たとへば弔詞の如きが書けるであらうかと危んだものであるが、時勢は賢明なる判斷者であつて、今日は、手紙の文章も言文一致で書いて差支へないことになつた。卽ち數年前に人の危んだところは杞憂に過ぎなかつたので、人々の工夫や習慣によつて言文一致を以て十分に感想を表はし得るに至つたのである。又弔詞の如きも思つたほどの事はない、自分も以前は何となく氣がひけて書けなかつたが、近頃は言文一致で弔詞を書くやうになつた、先達「日々」に揭げたイブセンの死を弔ふた文も其の一例である。

◎諾威の大戲曲家イブセンも到頭死んだ。十九世紀の後半をさしも鮮かに彩つた文藝星等が、今や、我が時去るゝ觀じてか、一つ〳〵に消えて行くさまは、心細くもまた莊嚴である。定めて天國紫薇の門外には、月桂樹冠を捧げた天つ少女が列を造つて待つてゐるであらう。黃金の門扉は押し開かれて、奥には天人の樂瀏喨と、人の世の勇士が引き揚げ際の偉大さを嘆美してゐる。噫、斯くの如くして逝くものは眞に偉大である。

◎英語で之をソーシアル、ピチーといふ。現社會の不備缺陷より生ずる樣々の不幸に對して、我等が發する哀憐悲痛の情は、近代の歐洲思想界に於ける一の特色である。イブセンは實に此の社會的哀憐の權化であつた。彼れは文藝の方式の上では所謂自然派に屬した。晩年僅かに夫のシムボリズムに脚を投じかけたとは、言はるゝが、それはさして確乎たる轉歩では無かつた、彼れが技巧の上に一家を

一夕文話

言文一致と莊重の文章

日本將來の文體が言文一致であるといふことは、今日に於て、最早何人も疑はぬところであらう。抑〻舊來の雅文と言文一致との差は、一言にして被へばクラシカルとロマンティックとの差である。卽ち雅文はクラシカルで、言文一致はロマンティックである。ロマンティックな言文一致がクラシカルな雅文に代らんとするものである。これを外國にたとへば英吉利に於て見るも、クラシカルとロマンティックとの交替は詩の上に在つて、散文の上にはない。ワーヅワースが所謂詩句法(ポエーテツク・ディクション)を排して感情の自然の流れを溢るゝまゝに表はせと呼ばはつた如きがそれである。然るに日本に於いてはこの現象が散文界に著るしく現はれた。卽ち在來の雅文の散文法ともいふべきものを排して、言文一致を以てそれに更へんとするのである。詩の上に於いてはワーヅワースのいふ如くに全然詩句法を破るといふ事は出來ぬが、散文の上に於てはかゝる流勢は當然のことであらう。要するに雅文と言文一致との差は語法上の差異、修辭法の差異であつて、修辭の有無を以て兩者を區別せんとするは誤りである。卽ち言文一致には修辭なく雅文には修辭ありといふは誤りである。「云々なり」と「云々である」とは、意味は略〻同一であつて、其の差は單に修辭上の法則に在るに過ぎぬ。言文一致は俗談平語でない。演說筆記でない。言文一致は、

學乃至は之れに多分の根據を有した文學に圍繞せられた頃の人々には、其の久しいあひだの薫染の結果で、丁々といふ二字の字づらだけでも、山更に幽なりの趣が油然として胸に湧く。此の場合には、丁々の二字は「ちやう〳〵」と讀んでも、「とうとう」と讀んでも、そんなことには關係なく、たゞ素養習慣の結果で、幽山の背景が譯もなく伴なつて來る。併し今の人にはさうは行かぬ。此に於いてか彼等は斯かる既成の形式を破りすてゝ、何かもつと適切な表白法がありはすまいかと工風する。其の時來たつて師表となるものは、常に對境の自然そのものである。彼等は自然に還り、自然を直接の師とせんとする。事物に革命の起こらんとするとき、呼び出だされるものは何時でも自然である。文章の革命期に於いてもまたさうである。此の意味で新代の文章はずつと自然的に、寫實的に、印象的になつて來る。

伐木丁々といふ句でも、昔は自然的であつたらう、また本國支那人の語音では今なほ自然的かも知れぬ。併し海を渡つて變じ、代を更へて變じた今日の日本では、もはや之れを自然的とは言へなくなつた。「トン、トンと木を伐る音、あとは森となる」とでも言はねば「伐木丁々山さらに幽なり」の情は痛切に出ないと感ずるのが今の趣味である。

要するに支那傳來の價値の減少といふことゝ、文明の急激の變化といふことが重なる理由となつて、我が邦の文脈は、日に日に移りつゝある。但し斯やうに言へばとて、古天才の文が價値を失ふといふのでは固よりない。天才の文は常に匠々たる形式を超越して趣味の不盡の源を有してゐる。また凡ての支那文學から來た措辭が新代の感想に適せぬとも思はぬ。要は舊語も之れを新文脈に活かすにある。文藻の荒廢してゐる點からいへば、新代の多數の々人は、一たび更に大いに支那文學に味ひ入るの必要があらう。而してのち之れを征服する所に新しくして而も熟したる文章が出やう。(明治三十九年九月)

現代の文脈

日本の文章は今や急速の勢を以て變じつゝある。文に志すものは、此の動いてゐる事實を觀過してはならぬ。就中其の叙說法に於いて、在來の體は、漸く過去のものにならんとしてゐる。新代の人に取つては、もはや此等の文章が有してゐた背景は消え失せてしまつた。意味だけは無論通ずる、又口には成程熟してゐるだけによく滑る。しかし其の意味が率ゐ來たるところの情趣、風情といふものが薄くなつた。背景が無くなるとは此の謂である。勿論微妙なる趣味判斷の上のことであるから、舊い文味を喜ぶ人、新しい文意を喜ぶ人と、好尚の區々たるは免れない所であらうが、傾き行く方向は言ふまでもなく新しいものにある。

文體の上に於いても、用語の上に於いても在來のものでは胸にこたへなくなつた。何だか古い型を使つてゐるに過ぎないやうで、痛切清新の味がない。物の上つ面を撫でゝゐるやうで、中身から隔たつてゐる。是れは一方から言へば、讀者の感受神經が鈍いから、刺戟の強いものでなくては感じないのだとも見られる。併し今の場合はむしろ物が陳りて、新代に向かなくなつたと見るのを至當とする。社會の急な變遷と共にまるで素養閲歷の異なつた人々が出て來るのだから、昔の文脈では一向に活きた血が通つてゐるやうに思はれない。同じく木を伐る音を形容しても、伐木丁々では更におもしろくない。支那文

と「云々だ」とを兼ねた普遍的のものに相當する。此の場合が俗語格には缺乏してゐる。

此に一つの案といふのは、多分紅葉氏あたりが流行りはじめであつたか、「云々である」といふ辭法を工風する人があつて、目今廣く行はれるやうになつた。これが畢竟「云々でござります」と「云々だ」との中間を行くのものに外ならぬ、併しこれとてもまだ十分獨坐放言の口氣を脱したものとは言はれぬ。外になければ是非もないと、工風はまだ〱大に凝らす必要があらう。

其の他「彼れが言つた」「彼れがした」といふ獨語の格は、まづ「同氏は言はれた」「同氏がせられた」と迂曲法を用ふるのが至當の敬語かと思はれるが、これとてもなまなか敬語といふ特別の意味あるだけに、「同氏は言へり」「同氏が爲せり」といふほどにあつさりとは聞こえず、何となく態とらしく、氣取つたやうに感ずるを免れぬ。所詮普遍的、平等的な敬語の缺乏といふことが、言文一致に伴ふ第一の困難と見られる。論より證據は世間の言文一致、斯くいふ我等の此の文を始めとし、およそ言文一致で書いてある文章を、少し注意して讀んで見られよ、敬語を用ひたものは、多くは個人若しくは團體の聽衆を目のあたりに控へて、それにアドレスするばかりの演説口調になつてゐる、然もないものは、全くあぐらをかき酒を被ッて獨り氣焔を吐くといふ氣味になつてゐる。此の缺を補ふの策は、普遍的な敬語の工風か、獨語的の辭法を緩和するかの外にあるまいと思ふ。（明治三十三年二月）

ふ方式に取つて、都合のよい所だけ雅文の語法を殘し、あとは俗語體に從つて、兩者を唯折衷しただけのもの、隨つて若し雅俗折衷體によつて國語法を制定しやうとする日には、雅文の語法と、俗語法と、雙方とも活きて獨立してゐるものを折衷する譯になつて、非常に煩雜なるものになるが、惡くすると一貫しない雜駁のものになつてしまふ。中にも雅俗折衷體が主として雅文の體を棄て得る點は、語尾にあるのであるから、是れだけのことに折角の、新文體を何方(どつち)つかずのものにするよりも、こゝに一つ思ひ切つて、一旦今日の言文一致にまで引き下げ、語法の領分よりも、寧ろ修辭の領分で新に其の風格を高め磨く工風をするのが、至當の順序であらうと、我等に信ずる。

さて言文一致に伴ふ辭法語法の工風は、一々數へれば隨分煩瑣な點もあるが、此所には其の中の一つ、敬語の事を取り出して見やう。敬語といつても、單に廻りくどくいふとか、別に敬意を表する言葉を加へるとかの辭法ならば、西洋にも無論あつて、日本に限つた譯ではないが、其の外に於いて、大體に日本の言葉は階級的に發達して居る分子が多い。隨つて相手を前に控へた、極私交的個人的の談話には、相手次第で高下自在に適當の敬語を用ひることも出來るが、文章などの如く、誰れを當てともなく、寧ろ天下公衆を相手のものになると、何うも適當な敬語、若しくは品格ある語に缺乏を感ずる。全く私交的であるか、左もなければ全く獨語的になつて、天下公衆に對する平等的公共的な文章を書くことが極めて困難である。例へば「云々です」「云々であります」「云々でござりまする」のたひは、すべて私交的の敬語に傾いて、之れを其のまゝ文章にすれば、何うも敬語に過ぎたやうに感ずる。それかと言ッて、「云々だ」と言ひ放てば、獨語的、すなはち橫座辨慶(ようざべんけい)の獨りで、氣焰を吐く格に聞こえて、おもしろくない。此の中間の、一層普遍的な辭法がどうしてもなくは納まらぬ、英國でイツト、イズ云々といへば、上下公私に通じて、普遍的に用ゐられ、雅文格で「云々あり」といふのか、丁度俗語の「云々でござります」

言文一致と敬語

漢字は早晩廢せらるゝもの、縦し今すぐに漢字全廢とか、漢字制限とかいふ角芽(つのめ)だつたことは行はれぬとしても、自然の大勢が先づ漢字を簡易なものばかりに制限して、其の後に來るのが、假名にせよ、羅馬字にせよ、はた新字にせよ、兎に角音符的なものであらうとは、蓋し國字論の最も見易い前途である、國文學界に百年の計をなさんとするものは、此の一事を見おとさぬやうせずばなるまい。

それは第一の急務は、文體の工風であることも、これまた識者の疾くに承知する所であらう、就中言文一致が國字改良の前途に伴ふ殆んど唯一の文體であるといふことは、多數の同意する所と謂つてよい。されば、今後文章として最も工風の凝らし甲斐あり、また實際其必要あるは、言文一致に如くはない、若し天才あつて、國文界に新流行を作り出だすの機會が到來するとすれば、其れは恐らく此の方面に於てするであらう。今日の言文一致がまだ十分物になッて居ぬことは、勿論誰れの目にもつく事實であるが、さて之れを何ういふ風にしたらば、落ちつくであらうかといふ段になると、ちよつと案の立ちかねるのが普通である。從來の雅文と俗語と歩み寄ッた所に基礎を置いたらば、とまでは何人も思ひつく、けれども實の所其の歩み寄る具合がむづかしいので、論も畢竟之れから生ずるものである。所謂雅俗折衷體は、此の歩み寄りの標準を折衷とい

文章雜考

る。之れを最低額の節奏とし、此の以上はそれを合に應じて千種萬樣に組み合はせ以て無限なる感想の變化に應ぜしむるの外はない。所謂思想律も畢竟之れに外ならず、また之れを言語の音數、音性、音位の上に應用すれば、新しい自由な律格もそこに成り立ち得る。韻文の節奏とはたゞそれだけの意義でなくてはならぬ。

韻文と散韻との根本論は大略以上の如くであるが、尙ほ之れから出發して現在及び將來の我が散文と韻文とを論じようと思ふうちに今年も暮れて了つた。いづれ他日別に論ずる機會があらうと思ふ。（明治三十四年）

ゐる」といふ複雜な意味を籠めたのは緊縮である。また「つわ者どもが夢の跡に夏草生ひたり」といふべきを、「夏草や」と先づ眼に入るものを初めに點出して印象を強くすると共に、言語の主客排列の順序などは顚倒しても厭はない。それが倒錯である而して凡ての韻文は此等の三條件を必ず具備してゐるとは限らない。其の何れの一つでも現れゝば、其の文章は韻文的といふ調子を帶びて來る。韻文的文章と散文的文章との區別は主として此の點から觀察せられる。

たゞ玆に最後の要點として注意すべきは、右の三件の內、節奏といふ事の意義である。古來の韻文には東西ともに一定の形式があつて、五七言句、平仄、抑揚韻脚等いづれも豫め言葉の上に規律を設け、それに種々の感情思想を當てはめるのが例であつた。併し斯やうな人巧的な規律や形式を豫定することが多ければ多いだけ、其の中に強いて嵌入せられる感想は不自由なものになり、不自然なものになる。元來吾々の感想は一面全く不羈自在であつて、聊かも人巧的に豫定した形式で縛せられ得るものではない。此の點から言へば、舊來の節奏韻律はすべて無意義なものである。されば、近代に及んで、ヨーロッパでも全然此等の舊律格を撤廢して、韻文と散文と、形の上には何等の區別もないものにしやうとする企が起こつた。日本でも、現に近年の新體詩などには此の傾向が著るしいと共に、散文詩などいふ名辭が漸次廣く用ひられるやうになつた。けれ共之れが直ちに韻文を亡すものだと思つてはならない。韻文と散文との別は、前來の說で知られる如く、根柢を動かすべからざる感想の自然性に發してゐる。たゞ其の中で、節奏といふ事の意義が變ずるだけである。何う變ずるかと言へば、或者はこれを思想律(thought metre)即ち感想の自然な自由な節奏にのみ止めて、言語の形式には何等の制限をも附すまいとする。併し思想律といふことは、頗る不明瞭な說明である。思ふに節奏の最後の根柢は、やはり前に述べた生理的狀態から發する心臟鼓動の律に基づくものである。たゞ二個の斷續運動が一張一縮といふ如き關係で交互に連續するだけのものであ

して節奏的運動を伴ふが、冷靜な感情にはそれが少ないからである。恐らく如何なる稀薄の感情でも、感情となれば多少の節奏的運動を催促しないものは無いのであらう。たゞそれが少なくなれば殆んど感知されなくなる。されば節奏的運動の伴ふ感情と伴はぬ感情、卽ち熱烈にして韻文的な感情と冷靜で散文的な感情との區別は、決して明確に境界を豫劃し得る性質のものでない。たゞ其の場〳〵に臨んで之れを感別し得るのみである。而も區別は必ず存する。此の區別のおのづからにして現れたのが文學上の韻文と散文とである。要するに韻文と散文との差別は感情の分量の差別に外ならない。

感情の強烈なものに何ぜ節がつくかといふことはおのづから別の問題であるが、吾々は之れをたゞ事實として承認して置けばよい。一歩を進めて言へば感情の發動には最も多く血液の運動が響應する。何ちらか先きに動くのだかは知れないとしても、兩者が密に相接して離るべからざるものであることは否み難い。而して血液の運動乃至心臟の鼓動には亂すべからざる一定の拍子がある。是等の生理的事情から察しても、感情の強い發動が節奏的であるのは怪しむに足らぬ事である。また吾吾が強い感情を動作なり言語なりに表出する場合にも、自然な放肆なまゝに任せて置けば節がつく。野蠻人などが悅びに興奮して、歌を唄ひ拍子を取つて踊るのが其の實例である。韻文とは要するに是れを文章にしたものに外ならない。

であるから散文には殆ど全く內容の根本から發する特殊の形式といふものは在り得ない。全く無條件である。之れに反して韻文には以上の理由から發する特殊の條件があり得る。例へば第一に言葉に節がつく。第二に言葉が內容に比して短く緊縮せられる。第三に言葉の順序や理路が亂れて來る。卽ち少なくとも節奏、緊縮、倒錯の三要件は韻文の必然性である。「夏草やつわもの共が夢のあと」といへば、其の五七五言句たるは節奏であるし、此の少數字句の中に一往時は此の邊で勇士が戰場の草枕かたしいて故鄕の夢、功名の夢など見たであらう、其の跡に右の武道榮華の影はなくて、たゞ夏草のみが茂つて

文章論と關係させた文學の變遷論は大體以上の如くである。次には斯やうな文學から見た文章の研究を述べる。

第七

近代の文章が既に文學上の變遷と一致した方向を取つて、内容の赤裸々な自然の發露を目的とし、而して斯やうの發露に熱烈な傳奇的(ロマンチック)なものと、冷靜な自然的なものとあり得るとすれば、それが文章の上に如何なる結果を生ずるか。私は之れを以て直に韻文を散文、又は韻文的文章と散文的文章との對照と見てよいと思ふ。

勿論韻文と散文との區別は古にも存して、決して近代に始まつた譯ではないが、一層多く外形を重んじた古の文章にあつては、此の區別もまた主として形式の上のみから見られた。韻文とは節奏のある文で、散文とはそれの無い文であつた。併し文章の見方が一たび外形を離れて、内容に向ふと共に、斯やうな區別は無意義に近いと考へられて來た。人間の思想感情に初めから韻文的と散文的との區別は無い。それを區別したのはたゞ言葉の上の技巧に過ぎない。といふ風に論ずるものが出た。問題はすなはち玆にあるのである。内容から見た文章には果たして韻文と散文とを別かつ根據は無いであらうか。昔から詩といひ歌といふ類の韻文が散文から離れて存立した事實をば凡て手先の技巧だと斷じ去るを得るであらうか。

答は其の反對である。我々の感情そのものが本來韻文的と散文的との區別を有してゐる。文章上の此の兩形式も、矢張り中身たる感想の自然の發現に外ならない。さらば感情の韻文的と散文的とは如何なることを意味するか。此の點に關しては科學的な細かい說明の餘地が大分あるやうであるが、私はこゝで簡單に之れを感情の分量から生ずる特徵と認めて置きたい。卽ち感情の力が強まつて、密度が加はり、所謂熱烈な感情になると、それが直ちに韻文的感情である。從つて其の反對に密度が薄く、冷靜な感情になればなる程散文的感情と名づけ得る狀態に近づく。何ぜかといふに、熱烈な感情は必ず其の特徵と

ら割り出したのだから、或る度までの眞理は含んでゐる。併し何もそれが無ければ文學にならぬといふ法はない。俳句で切字の無いもの、和歌で三句切になつたもの、漢文で波瀾も照應も無いものを作つて、それが文學たる目的を達すれば其の方が豪いのである、強ひて此等の定格に篏めやうとすれば却つて形式的な、空虚な文章になる。中身と背離したものになる。イギリスのセークスピヤはギリシャ以來の劇の法則たる三統一（スリー、ユニチース）（事柄の統一、時の統一、所の統一）を破つて奔放自在な劇を作つた。彼れの力はそこにある。けれ共古典時代のフランスの文學者は之れを罵つて、三統一を破つた作は野蠻人の文學だと言つた。此んな事例は何れの國にもあるものである。要するに古典的文學は長處も短處も其の形式を重んじた所にある。形式が華麗にならざるを得なかつた。丁度文章の修飾體と同じ心持である。

此の古典派が十八世紀の末、彼のフランス革命を中心として凡ての方面に起つこた形式打破、新生命發動の傾向に刺戟せられて破れ去り、中身を赤裸々に摑み出さんとする熱烈な傾向が文學の上に生じて來た。ルソーが「自然に還れ」と叫んだのを發足點として、在來の窮屈な形式から遁れ出でやうとする傾向である。其の熱烈な間の此の派を傳奇的と名づける。又十九世紀の中ごろから熱力が冷め、むしろ冷靜に同じ「自然に還れ」の方向を辿つた以後の傾向を自然的と呼ぶ。所謂自然主義の傾向である。尙は此の二派に就いては種々の議論もあるが。要するに中身を打ちまけて了はう、形式に囚はれまい、といふ精神に於いては同脈である。此の點が即ち文章の自然體と名づけ來たつたものと相通ずる所以である。たゞ文學の上では、前半即ち傳奇的傾向は偏へに熱烈を欲する結果、熱烈で無いものをまで熱烈にしやうとして誇張的修飾に陷り元の古典的形式と似るものになる弊が生じた。此の弊を脫するために後半の冷靜な傾向が出て來たとも解せられる。而して此の方はまた冷靜を欲する結果、餘りに枯淡無修飾に過ぎるの弊に陷ゐる恐れがある。此等の點が文章上の自然體と相通ずる特徵である。

さへあれば文學的だと呼ぶ併し此の意味での文學は淺薄のものである。本當には其の手紙なり論文なりが、各自の目的とする感想を最も有力に言ひ現はしてゐる場合、之れを當事者としてよりも傍觀者として、又は當事者でも少しく時を隔てゝ、實用の目的から離れて眺めると其の言表の有力な所が一種の美しさとなつて、立派な文學だといふ感想を起こす。支那の韓退之が宰相に送つた奉職口の依賴狀はいふに及ばず、徳川の荒くれ武士が戰場から、「おさん泣かすな、馬肥せ」と書き送つた一片の手紙ですら、今日から見れば一種の文學である。其の他政治論や史傳類が立派な文學になつてゐるのは人の知る通りである。此等の點から言へば、文章を中身と密着させて見るとき、之れを總括して文學と名づけ、中でも最も文學的な純粹文學を中心として文章を研究するのが最も適當であると思ふ。眞の文章論は要するに廣い意味で文學論である、

文章を論ずる爲の文學論としては、日本のよりは矢張り西洋の文學を材料とする方が明瞭である。西洋では、ギリシャのアリストートルの修辭學及詩學、乃至それから脈を引いて發達した修辭學的文學論を金科玉條として、それで文學を支配してゐたのが十七八世紀であつて、フランスを中心として、ヨーロッパに及んだ傾向である。所謂古典的傾向とは之れに外ならない。古典とはイタリアで十五六世紀の文藝復興以後ギリシヤ、ローマの古典を研究し崇拜する傾向が盛んになりそれが古典語即ちラテン語の復活、古典文物の模倣を生み、傳へ〳〵てフランスに入つたからの名であつて結局舊いギリシアのアリストートル、而も其の外形論が主である修辭學などを祖述する所から、漸次形式的に流れて來た傾向である。例へば明晰であるとか、優雅であるとか、規律であるとかいふ形式的な修辭原理を文學に當てはめて、此れに合しないものは文學でないやうに論ずることがはやつた。丁度漢文で波瀾とか照應とか伏線とかいふ事の外に文學の標準は無いやうに說くのと同じである。和歌で三句切れだとか、俳句で切れ字だとか言ふのも同じ性質のものである。勿論此等の法則も初めは永年の經驗か

する。而して其の緊張充實の結果として見はれる現象は、其の感想が獨りでに表白を迫つて來るといふ事である。言ひ換へれば、其の感想がおのづから文章欲ともいふべき力を伴うて來る。表白が必要む已べからざるものに思はれて來る。即ち必要な感想の必要な表現が最上な文章の母である。

文章が既に內容と分離して見るべきものでないとすれば、文章論の大部分はまた其の內容の論でなくてはならぬ。而して文章の內容の論は、一面直ちに文學論である。此の講話は文學を論ずるほど大仕掛のものでは固よりないが、文章に最も密接の關係ある範圍で之れをも述べる。

第六

廣く趣味の變遷する原理、及び其れを文章に當てはめた順序を前回に述べたから、こゝでは文章論が內容論になつて文學論と關係して來る次第を話さう。實用體文章の事は殆んど論ずるに及ばぬとして差し措き、眞の文章らしい文章は修飾體以後の事であるとすれば、此の修飾體文章の過程が丁度文學の古典的傾向に相當する。また次の自然體文章の過程は文學上の傳奇的（ロマンチック）傾向及び自然的傾向を合併したものに相當する。

元來文章を單なる外形のみとして取扱はず、密に感想と附着せしめやうとすると、人間の感想は千差萬別であるから、何れを主にして研究してよいか分らなくなる。私用の手紙も感想の表白であるし、政治の論文も、歷史も新聞の記事も、乃至小說詩歌等の純文學も、皆感想である。所が玆に注意すべき事は、此等種々の感想も、一旦文章の形を取つた以上、すべて眺み方一つで文學と名づけ得るといふ事實である。私用の手紙にせよ、政治の論文にせよ、一方にはそれ〴〵の目的を持つた實用的のものであるが、それを文學だと言ひ得る場合が通例二つある。一は其の文章がたゞ何でも彼でも華やかに修飾して

はしばくある、殆んど誤謬と知らずして之れに陷つてゐる。自然體の文章では此の意味の修辭を嚴に區別して斥ける。つまり修辭といひ、技巧といひ、修飾といふ意味が違つて來る。內容たる感情の行くがまゝに適應せんとする柔軟性、此の柔軟を最も自在に發揮する工風が卽ち修辭であり、技巧である。

斯やうな相違の實際の結果は何うであるかといふに文章を書く時の用意態度がまるで異なつて來る。修飾體の場合では、紙を展べる時まづ自分の胸中の感想よりも、文句の方を先に工風して、其の文句の用ゐたいために感想を色々とあやつゝて見たり、または胸中の感想はさうでも無いものを、文句の力で強く明に言ひ足さうといふやうな氣持で筆を執つたりする。之れに反して、自然體の場合では、胸中の感想を主と立てゝ、之れを文句に附しない前に先づ強く明かに思ひ浮べやうとする、而して後それを成るべく筆の先きで增したり減じたりしないで書き現さうとする。言ひ足りない恐のれないやうにと苦心すると共に、言ひ過ぎないやうにと苦心する。殊に此の後の方法すなはち筆先で書き過ぎまいといふ苦心が、眞に文章に經驗を積んだものゝ苦心である。此に至れば、在來の修辭學が敎へることなどは、殆どん其の用をなさなくなる。

以上、文章の工風は、如何にして其の內容を圓具のまゝに表白すべきかといふ一點に歸する。たゞ其の內容たる感想は、活きて緊張したものでなくてはならぬ。なぜならば、弛緩な感想は、動々もすれば、其の當然帶有すべき感情を冷却せしめて、智識思想のみの勝つたものになり易い。つまり其の感想の力となり精彩となる部分が衰退し行くからである。而して斯やうな感想を感想全部と思ひ誤まつて、其のまゝ圓現したとすれば、其の結果は弱い文章、力の無い文章になつて了ふ。さらば如何にして斯やうな感想を常に緊張せしめ充實せしめ得るかといふに、それは到底學理や法則で說明すべき事でない。其の人、其の場合によつて種々であるべきである。が、之れを概括して言へば其の瞬間に於いて最も必要な感想が最も緊張

たり降しりきるといふ所を繽紛たりと言つたりして言葉を飾つてあるのが却つてうるさく厭味になつて來る。今一たび此等の修飾を脫して了つて雪の降つてゐる光景に對する思想感情の眞に圓具した心持を赤裸々に言ひ現はしたいといふことになる。徒らに外形の華麗絢爛なものよりも、素直で、質實で而も情景兼ね到るといふ風の文章を喜ぶやうになる。思想感情の自然の流れに從つて少しも無理な修飾技巧を加へない文體の要求である。

此所まで來ると、要するに文章の眞の目的は其の內容たる感情の如何に應じて、華麗なものは華麗に、單純なものは單純に、凡てを出來るだけ眞實に如實に運び出すのが極意であつて、決して筆の先で五十のものを百に言ひ足したり、灰色のものを純白に言ひ直したりするのでない。發達した文章は日常の用をたす唯言とは違ふから、決して修飾や技巧が無用ではない。此の點は實に文章と唯言とを區分する唯一の特徵である。一言にして言へば、修辭といふことの有無が文章と然らざる言葉との相違點である。極端な論者の言ふ如く、唯言が最上の文章だとは決して言へない。同じ言葉の中でも何等かの形で修辭的現象の加はつたものは文章と言つてよいが、是れの無いものは文章とは言へない。卽ち意識して再訂三訂を經て、一層適切に其の文章の目的を達し得るやうになれば、其れが一層文章的である。

併し此の場合、修辭が若し單に修辭其のものを主とし、それを面白く讀ませやうといふ如き氣持を伴へば、其の瞬間から眞の修辭でなくなる。眞の修辭はそれみづから獨立した目的をも力をも有するものでなくして、單に內容の方便であり、奴僕である。此等の事は、少しく事理を辨へたものには、知れきつた話であるが、而も實際に臨むと、往々にして其れを忘れてしまふ。餘程幼稚な文章家でない限りは、まさか修辭ばかりを獨立した目的とするものもあるまいが、之れによつて、內容が所有し居らざる何等かの力を增加し得るくらゐは、習慣的に思ひ誤ることが多い、修飾體の文章を書くものには、此の誤謬

つまり之れは人心の自然の展開であつて、文章に經驗あるもの〻誰れしも通過する境地である。蓋し吾々の心が事物を思念する場合には何時でも其の思想の背面に相應の感情が絡みついてゐる。此の感情の度合によつて、或思念はたゞ正面の思想のみを言ひ現はし書き現はしたゞけで滿足し、或思念は此の背面の感情までも表現せねば滿足されない。背面の感情までも言ひ表はしたくなつた時が卽ち修飾の欲しくなつた時である。此の理から言へば、修飾體の文章は其の根本に於いて人心の進步を意味すると共に、極めて自然な現象である。結局人心の全部を正面からも背面からも書かうとするものに外ならない。古今を貫いた文章の眞目的は此の外にない。

けれ共茲に注目すべき事は吾々の感情といふもの〻性質である。感情は常に吾々の生活に取つて最も好愛せらるべきものである。如何なる感情でも、感情そのものは人を魅する力のあるものである。文章を作るものが感情を表はさうとしてゐる内に、何時かその感情の甘さに魅せられて、感情のために感情を弄ぶやうになれば、修飾體の弊がそこから始まる。或る時は少量の感情が誇張せられて、空疏な修飾となつて見はれる。或る時は無い感情を有るが如くせんとして、他人の感情の脫殼たる成句成語などの美しいものを借用し摸倣する。さうなると、病は段々募つて來て、終に他人の語句を多く知つて居ること、またそれを自在に適應することの技巧を誇示する心まで添ふやうになる。斯くして全く修飾のための修飾、技巧のための技巧の、空な形式的文章と墮落して了ふ。

支那人の所謂絢爛の境に入つた修飾體の文章が、終に形式的技巧的に墮して了ると、第三の自然體の文章に對する要求がおのづから發して來る。『六花繽紛たり』と言へば、成程文字の表面は美しいが、場合によつては之れが却つて實景と遠ざかる結果になる。一向に、雪が霏々として降りしきつてゐるといふ感じを傳へない。さうなると雪といふ所をわざ〳〵六花と言つ

度文章と感想とを密着せしめて研究する必要が生ずる。斯ういふ順序で文章の研究は變遷してゐる。

第五

凡て趣味に關した事に大略三段の變遷があると見てよい。最初は極めて實物向きに、其の用を足しさへすればよい。衣服ならば寒暑が凌げればそれで十分だといふ程度である。之れは初發の萠芽の狀態であるから其の實まだ趣味といふ名のつけられない時代である。次には右の實用趣味に段々餘裕が生じて、寒暑を凌ぐ以外に多少の修飾を加へ、外形に綺麗を裝ひたくなる時代が來る。修飾趣味の程度である。此所に至つて眞の意味で趣味と名づけてよい狀態に達する。併し此の修飾趣味が段々嵩じて行くと形式的にばかり綺麗なものになつて空虛を感じ、厭味を感ずるに至るのも免れ難い順序である。そこで今度は形式の修飾よりも內容に適合した自然な趣味が望ましくなるむしろ修飾を避けやうとする點では初期の狀態と似た結果なる。併し實用趣味の無修飾なのは、素樸不完全から來る結果であるし、自然趣味の無修飾なのは、其の實修飾が無いのでなく、完全に內容に適應したものを求めやうとする結果である。斯やうにして趣味は實用的、修飾的、自然的と凡そ三段の展開をなして行く、之れは人生のあらゆる事物に附隨して見はれる現象である。

今之れを文章の上に徵して見ても、同じ理が行はれる。一個人の文章の趣味は、其の未だ趣味をなさゞる最初期に於いては、實用體の文を以て滿足する。が用足りさへすればそれでよい。併し之れはまだ文章といふ程度のものでない。少しづゝでも文章に對する趣味が動いて來ると、何等かの修飾を之れに加へたくなる。如何に幼稚でもちよつとした修辭が加はつて居ると面白く感ぜられ、自分も下手々々と修飾を施した文章が書いて見たくなる。『雪降る』といつてよい所まで『六花繽紛たり』などゝ氣取つて見たくなる。眞の文章は此の時代から始まると言つてよい。

ぜられるやうになつた。されば修辭學の研究も之れに應じて變遷すべきが當然である。殊に近代に於いて、技巧の形式よりも感想の內容の重大な事を明白に自覺するやうになつてからは、文章の研究もたゞ辭句の修飾法などを研究する舊式の修辭學では物足りない。新しい立場からの文章研究が必要な所以である。

前にも言つた如く昔の修辭學は專ら雄辯學で、而して昔の雄辯は主として法廷の辯論や、公衆の前での理非辯難等であつた爲め、雄辯はやがて眞理闡明の方法であり、雄辯の學はすなはち眞理正義の學であるといふ風に考へられて來た。從つて雄辯學は非常に重大なるものとせられ、諸學の根本學といふやうにも取り扱はれた。是れは一方から言へば雄辯といふ形式と眞理正義といふ內容思想とが合一に見られたのであるから、其の通りに行はれゝば、たしかに雄辯の爲め仕合せな事であつたが、事實は必ずしもさうではなかつた。即ち眞理正義であらうがあるまいが、言ひ勝てば即ち眞理にも正義にもなるのが當然の結果であるため段々其の弊が大きくなつて、一方所謂詭辯家(Sophists)などいふ名稱が起るとともに、雄辯乃至雄辯學までが非難の眼で迎へられるやうになつた。それから色々の論難を經て、結局近世に及んでは雄辯なり修辭なりは思想發表の外形、手段であるから如何なる內容をも自由に取り扱ひ得るもの、眞妄邪正あらゆる感想を巧に發表するものといふ事になつた。間違つた感想でも巧に言ひ現はせば、雄辯となり妙文となるを妨げぬといふ事になつた。同時に其の學問たる修辭學は專ら外形を取り扱ふものになつた。以前のやうに雄辯學修辭學は直ちに眞理正義の學といふやうな誤解は無くなつた。つまり修辭學の範圍が廣くなり自由になつたのである。

これで又修辭學は一時榮えたが、併し此の方もまだ根柢に足りない所がある。廣くなり自由になると共に、內容が空虛になり過ぎて、文章の死んだ形骸のみの研究になつたのが此の種の修辭學の弊である。即ち更に新しい文章學が興つて、今一

それが時代の遷ると共に、社會の狀態が變じて行き人間の數も殖えたり、其の分布する區域も廣まつたりした結果、到底以前のやうに多人數を一緒に集めて雄辯で一感想を他に傳へるといふ事は出來なくなつた。此に於いてかそれに代るものとして是非とも書いて傳へる所の文章が興らざるを得ない。また一方それと同時に印刷術といふ如きものが發達して、文章の弘布には非常の便宜が生じて來た。また文章が發達して見ると、雄辯のやうに其の場限り消えて了はないから、之れを發表する前に先づ自分の眼の前に据ゑて、推敲したり修正したりして一層完全のものにする便宜も多いし永く留めて置く便宜も多いし此等の理由で段々、文章の方が感想の一層主要な發表機關と見なされるに至つた。延いてそれを研究する學問も、雄辯學よりは文章學が主となつた。それが卽ち在來の修辭學である。

然るに玆に注意すべきは、修辭學といふものゝ來歴である。支那や日本では纏まつた修辭學は發達しなかつたに反し、西洋では二千餘年の昔、ギリシヤのアリストートルに既に立派な修辭學が成立して今日に傳はつてゐる、之れが西洋に於ける斯學の祖であつて、年代が早いだけに、自然、雄辯學と文章學とに共通する性質を多分に持つてゐる。むしろまだ雄辯學と呼ぶのが適當な位である。アリストートルの此の著書を祖として、爾後ヨーロッパには無數の雄辯學修辭學が見はれると共に、此の學問も非常に重要のものと見らるゝに至つた。併し不思議な事には、此等無數の修辭學は、大體に於いて遂に元祖アリストートルの書いた事以外には殆んど出なかつた。勿論多少の細かい研究や、實例の蒐集やは完備して來たが、根本の諸點は依然としてアリストートルが一册の著書に盡きるといふ有樣であつた。

所が實際の文章そのものは、殊に近世に及んで長足の進歩を遂げると共に、益々雄辯とは隔絶した特殊のものになつた。のみならず、文章そのものゝ範圍内ですら時代によつて樣々の變遷を經、或る時は形式が重んぜられ、或る時は内容が重ん

修辭研究になり、學問そのものまでが空虚なものにならんとした。例へば、夏の空に綿のやうな雲が山の如く層をなして漂つてゐると、少しゆとりのある場合には「白雲峯の如し」などゝいふ。之れは正面から直接に似たものを借りて説明したのだから直喩と名づける。また一層迫つた場合には「峯の如し」などゝ説明してゐる餘地がないから、説明を隠して了ひ、たゞ「雲の峯」といふ此の方は前のに比べれば一層複雑な發達した喩であつて、之れを隠喩と名づける。總じて此等の譬喩は此の他にも二十種三十種と雑多な場合があり得て、其の種類は云々、其の目的は云々、といふ風の事を研究するのが舊來の修辭學の趣旨であつた。

本來この修辭學(Rhetoric)は人も知る如く、西洋では元は雄辯學(Oratory)と同一であつた。今日でも之れと共通した分子は多分に存してゐる。蓋し雄辯と文章とは、人間が感想を發表する二大機關であつて、今日議會なり演説會なり、また會話や講演やで世を動かして行く力は即ち雄辯であり、新聞雑誌や書籍やで世を動かして行く力は即ち文章である。中にも文章の力は近代に及んで益々其の及ぶ範圍を大にし、西洋ではプレッス、エンド、マネー(Press and money)と言つて、社會の最大勢力は印刷物(こゝでは特に新聞紙などを指す)と金なりと稱する。而して刊行物の中心は言ふまでもなく文章である。文章は單に文字の遊戯や文學のみの事でなく、大は社會の經營から小は一個人の消息々通までを支配する最大有力の機關と言つてよい。

昔は雄辯の方が勢力であつた。西洋ではギリシャ時代、東洋では支那の春秋戰國、かの蘇秦張儀の徒の遊説時代、いづれもまだ文章よりは雄辯の方が主要機關となつてゐた。從つて此の時代、乃至其の脈を追うてゐる時代の、此の方面の研究は、文章學よりも寧ろ雄辯學たらざるを得なかつた。

快樂的又は感情的又は美化的ともいふべき臭味が此の期の文章の空氣である。ヘドニズムか、センチメンタリズムか、然らずんばイーツセチシズムか、之れが此の期の文章に漲つた氣分であつた。

次に第三期は明治三十二三年頃から萠して、明治四十年前後に及んで、明瞭に一時代を形づくつた。このたびは、新文章の赴く所が第一期以來の傍系たりし、內容の自由自然の發露といふことに一直線に突進した。從つて其の求むる所の據りどころも、西鶴でなく、歐文でなく、古文でなく、直ちに內容そのもの丶文體となつた。文章の典型はたゞ內容からのみ發すべきものと、明白に自覺するに至つた。更に適切に言へば、內容たる感想の持主、すなはち作者の自己そのものが唯一の基礎である。自己に文章の根據を求める。是れが第三期の新文章の特徵である。從つて此の期の文章を包む空氣は、素直な、謙遜な、正直な、地味なものとなつた。而して之れに伴ふ著るしい現象としては、文章の大部分が言文一致體に化し、言文一致といふ名すら既に累せられる所があるとして、口語體といふ名を之れに代へんとするまでに至つた。之れが現代の文章である。

第四

文章は其の內容たる感想と全く合一するに及んで始めて生きる。更に進んで言へば其の感想が必要といふ張りつめた力を帶びるに及んで、始めて眞に生きる。廣い意味に於いて、其の瞬間の最強必要力を帶びた感想が、其のまゝ圓全に表現せられゝば、それが最上の文章である。隨つて文章の研究も、此のあはひを捕へ得るものでなければ、空疎である。舊い文章論や修辭學と新しい文章學との區別は主として此の點にありたいと思ふ。

在來の修辭學は、主として文章の修飾の仕方を研究したものである、其の結果として段々文章のための文章、修辭の爲の

ことは論を俟たぬ。但し此の文章界に於ける中央の流は依然として西鶴脈等、歐文脈が一段廣い雅俗折衷體や新しく若やいだ和漢混合體やに展開して、所謂文章體の文に大勢を歸してゐたことを忘れてはならぬ。言文一致は傍系たるに過ぎなかつた。第二期にあつては此の文體はまだ不遇の裡にあつたと言つてよい。是れが小說其の他の美文類に先づ用ゐられ、次で論文記事文等に用ゐられるに至つたのは最近十一二年來、文學上の評論が之れに依るやうになつてからの事である。

顋が尖つて頰骨が露はれ、非道く瘦れてゐる故か顏の造作がとげ〳〵してゐて、愛嬌氣といつたら微塵もなし。醜くはないが、何處ともなくケンがある、脊はすらりとしてゐるばかりで、さのみ高いといふ程でもないが、瘦肉ゆゑ、半鐘何とやらいふ人聞の惡い譯名に縁がありさうで、年數物ながら摺疊皺の存した霜降スコッチの服を身に纏つて、組紐を盤帶にした帽檐廣な黑羅紗の帽子を戴いてゐる。

『浮雲』の主人公の形容で、直ちに今日の口語體の文章と相接したものである。たゞ文體の背景に潜んでゐる氣分が今日のとは多少違つてゐるかも知れない、『胡蝶』になると

夕日の紅を解かして揉碎いて居る波の色、その餘光を味はふといふ有樣で反射の綾模樣を浮織にして居る苫屋の板びさし、しかも昨夜過ぎた春雨の足跡をば銀象嵌とも見立てられる蝸牛のぬめりに見せて居ながら、それで尙は水際立つて見える工合の美しさ餘情は以心傳心です。

同じ言文一致でも、今日のとは餘程調子が違ふ。而も『浮雲』のと相ん竝で新文章の父母たるべき地步を占めてゐるのは勿論である。

更に以上第二期の諸文章が有する背景の氣分を言へば、前期の教誨的、老成人的なのに對して、總じて若い調子がある。

文體は、主として源を西鶴に發し、紅葉等の此等の文章を通じて基礎を立てたのである。

『嗟呼改革の健兒たる諸氏は、或は煩惱の夢に驚かされざる幽靜なる黄泉に於いて安眠し、或は禁殿に於て顧問官となり、元老院に於いて評議官となり、或は世襲の爵を給ひて貴族に列し、皆天恩の降渥なるに浴し、優游殘年を樂み、以て安息することを得たり。然らば則ち改革彼れ自身も亦た安息することを得べき乎、曰はく否、改革よ、改革よ、汝は決して安息することを得ざるなり。

是れは前に言つた『國民之友』の文例である。其の冒頭に『嗟呼國民の友生れたり、何が故に生れたるか現今日本の時勢其の必要を感ずればなり』といふ文句があつて、維新の大變革『其の運動の新鮮快活なる火の如く、花の如く、雷の如く、電の如く』といふ風に今日では何でもない句を列べられても、當時の我々は、恍惚として面ほてりを覺える程の、幼稚にして鋭敏な感納を得たものである。又此所に引いた文例なども『改革彼自身』と言つた所で、今日の讀者には最早何等の新味も無いが、當時は此等の句法だけでも優に若い人の夢をそゝり、老いた人の反感を招く價値があつた。

但し此の頃の文章の特徴として、一方には感情の自然の發露といふ要求も流石に閑却せられることなく、それに應ずるものとして玆に夫の言文一致體が初めて基礎を据ゑた、長谷川二葉亭の『浮雲』山田美妙齋の『胡蝶』等の文章は、何れも此の方面に於いて新文章の夜明の鐘をついたものと見られる。眞に新しい明治の文體は此の曉の鐘と共に始めて日本の文壇に芽ぐんだ。

言文一致の形は古くからある。古語の事は暫く措き、近世語の言文一致でも、中古の祕傳口授物の文章や、心學道話式のものには是れが用ゐられた。併し眞の文壇的文章としての言文一致は此の期が初めであつて、やがて文章上の大事件である

今一つ、此の時代の文章には、一種のダイダクチックな、教訓的な、老成人的な氣分が何處ともなく漂つてゐる。是れは一つは德川期末の文壇の空氣を直ちに其の文脈と共に傳襲したにもよるであらうが、一には背景たる當時の文明の性質がさう言ふ調子を帶びてゐたのであらう。それが其の期の文章の臭味となつて現はれたのである。

第三

明治二十年前後からして、明治の新文章は一變して第二期に這入つた。ちやうど文壇全體の廻轉期と一致する。夫の紅葉、露伴、鷗外、二葉亭、美妙、魯庵、綠雨その他の面々が崛起した時代である。此の時代の文章は前期と異なつて、明に新しい別なものを求めた。而もそれは文章が示してゐた新傾向すなはち內容の自然の發露といふことよりも、寧ろ內容の一層強い感情的又は美的發露といふことであつた。此に於いてか、彼等は德川末葉の文脈を傳襲するよりも、遙かにかけ離れた所に其の據りどころを求めやうとした。卽ち或るものは西鶴に之いて其の流を酌み、或るものは歐文に之いて所謂歐文直譯體に新しい滿足を求め、また或るものはことさらに古文に之いて之れに根據を得ようとした。尾崎紅葉が「色懺悔」其の他の文章、德富蘇峰が「國民の友」第一號に揭げた「嗟呼國民の友生れたり」其の他の文章等は、當時に於ける西鶴脈及び歐文脈の文體の好例である。

蕭寂はそもいかならむ、片山里の時雨あと、晨より夕まで、昨日も今日も風の烈しく、あるほどの木々の葉――峰の松のみ殘して――大方吹落しぬれば、山は面瘠せて哀に、森は骨立ちて凄じ。

「色懺悔」の發端の文句で、當時の讀書界を騷したものである。私等も名文句として書拔帖に寫し取つて、感情的な甘い味を忘れ難く懷しんだことを記憶してゐる。第二期の美文界を支配した雅俗折衷體の、感情的な美的技巧的な、テニヲハ拔の

鐵道馬車ゴウ〳〵と輾り去つて、和合社の乘合馬車ガラ〳〵と馳せ來る、路狹く人多く往來雜沓す。忽ち見る橫巷の入口に高く數帳の表榜を揭ぐ。曰はく來る廿八日不論晴雨書畫雅集、席上諸先生揮毫、會主蝌字園再拜。曰はく今廿日(日曜日)午後一時より井生村樓に於いて正義社政談演說會、出席辯士某々と。……

是れも『雪中梅』の主人公國野基が大演說をやる有名な章の發端である。前回に抄した『花月新誌』の漢文と同脈に屬するもので、それを只俗語を交へて國文體に書き直したまゝのものである。武骨漢がことさらに俗に碎けた事を言つたり、ことさらに細かい事に氣をつけたりするやうな所に、在來のいかめしい一遍の漢文から一步新しい方へ脫出しやうとしてゐる所はあるが、それが十分に物になつてゐない。多分古い傳襲によつた漢文直譯の文體である。

此の外には後の言文一致を豫想させるやうな當時の新聞紙の或るものゝ文章、及び之れと脈を同じくして而も洗錬せられた立派な一體をなしてゐる福澤諭吉の文章等があつた。前段に擧たものが文壇的文章の例なら此等後段のものは世間的文章の例とも見られよう。而して此等の世間的文章は、其の世間的といふことが一方動々もすれば文體をして粗笨ならしめると共に、一方には、それが却つて典型に囚へられないで自由に實際の必要と密着して進轉し行かんとする活氣の源ともなつてゐる。併し結局文章界の大勢を標示するものは此れでなくして、彼の文壇的文章であつた。

そこで此等の文壇的文章乃至世間的文章に通じて、種々の程度で見はれてゐる時代の形とは如何なるものであるかと言ふと、要するに文章が其の內容たる感想の自然の發露を妨げざらんが爲め、一步々々既成文體の典型を捨て威嚴を捨てゝ、謙遜な現實的なものにならうとする傾向に外ならない。たゞ此の傾向は、未だ明確な自覺となり潮流となるに及ばずして、次の時代に移つたのである。

明治の新文章は凡そ三大變遷をしたと見られる。文章と言つても範圍の廣いことであるから、論文もあれば物語文もあり、手紙の文章、官府の文章、新聞紙の文章と皆それ〴〵に趣を異にしてゐて、何れを標準にすると明白には定め難いのであるが、而も其の中におのづから大體の潮流といふものは存してゐる。而して此の潮流は物語類にしろ、論文類にしろ、概して文學方面の上に最もよく現はれて來る。一國の文章の潮勢を導く標準は、やはり文學にあると言つてよい。斯やうな觀察點から見て、明治の文章が三遷したといふ、其の第一は明治二十年代前後である。

明治二十年期以前の日本の新文章は、大體に於いて一層多く傳襲的祖述的であつた。すなはち徳川期末葉の文章が其のまま本流となつて、之れに多少の新要素が加味せられたに過ぎない。馬琴、種彥、乃至八文字屋物、黃表紙物等の文體が主要な源になるか、さもなければ漢文をそのまゝ書き崩したやうな在來の漢文直譯體を基礎とするか、此の兩途の外に文學的價値のある文章を作る道は無かつた。坪内春のやの『當世書生氣質』、饗庭篁村の『むら竹』に收められた初篇、乃至末廣鐵腸の『雪中梅』等に此の時代の文章は代表せられる。

さま〴〵に移れば換る浮世かな、幕府榮えし時勢には、武士のみ時に大江戸の、都もいつか東京と、名もあらたまの年毎に、開け行く世の餘澤なれや、貴賤上下の差別もなく、才あるものは用ひられ、名を擧げ家もたちまちに、黑塗馬車にのり賣の、息子も髭を貯ふれば、何の小路といかめしき、名前ながらに大通路を、走る公家衆の車夫あり……。

是れは『書生氣質』の有名な書出しの文章である。本文には固より言葉の寫實もあれば、外國語も用ゐてあるし、此等を統一した上に作者一流の滑かな、そして何處かに新時代の曉を思はせる箇所のある文體は成り立つてゐるが、而も右の書出し、其の他全篇にわたつて、文體の基本となつてゐるものは矢張り徳川期末葉の文脈である。

一致體又は口語體の文章の盛行から、極めて自由に內容たる思想感情を露出することを旨としたものが多い。語句や文體の上で若い讀者の摸倣心を誘ふやうな際やかなものでなく、概して平坦に實用的になつてゐる、絹布や珠玉をちりばめたものの代りに、たゞの木綿服を着たといふ姿である。斯ういふものに感化せられる初心者の文章は、言ふまでもなく昔と心持が違つて來る。如何にすれば最もよく自分の思つて居ることを赤裸々に十分に表白し得るかといふ事を、初めから文章の要義として考へるやうに慣らされる。少なくともさう慣され易い便宜を有してゐる。昔のやうに外型の美しいのに誘惑せられて、型から先へ眞似てかゝるといふ氣持ではなくなる。たゞ此處でも彼等は、表白の必要に迫られた思想といふが如きものを初めから所有してゐる譯でないから、其の點で矢張り眞似事たるをば免れぬ。從つて動々もすれば、其の平坦といふ外型のみを誤り模して、すべての感想を平坦化しなければ文章にならないやうに思ふ。强いアクセンのある感想に應ずる文章たとへば檄文であるとか、論難攻擊の文であるとかいふ如きものは書けなくなる。やはり結局は一種の平坦、微弱等の型に陷るのである。此の場合此の型を破つて、空虛ならざる文章を作るには、前と同じく表白の「必要」といふ事を基礎として修練するのが最高方法たるは論を俟たぬ。種々の程度に於いて何等か表白の「必要」ある感想を文章にする癖をつけるのが文章習得の一祕訣である。

斯んな風で、初心者が文章を學ぶ方向に昔と今との差がある。其の二者ともに根柢に何等かの意味での必要といふ動機を缺けば、似たやうな弊に陷るのも上述の通りであるが、而もなほ兩者の何れが文章の眞の道に近いかといへば、後段の方であると斷言して差支ない。而して其の斯くの如くなつた變遷にはおのづから文章論上の意義がある。

第二

必要緊切な文を書く機會である。此の機會に遭遇しない内は、外形から覺え込んだ文章家は知らず識らずの間に自分の思想の方を其の型に合ふやうにして異しまない。其の型に合ふやうな事しか考へ得なくなる、考へても言ひ得なくなる。是れは人間の感覺の自由を殺すものであつて、恐るべき結果である。文章の型や外形は時として個人を精神的に殺すものである。私自身が此の機會を切に感じたのは餘程後の事で、學校卒業の間際、卒業論文を書いてゐる時の事である。其の後も實地には種々の事情から再び別の型に囚へられたり、舊來の型が第二の性を成して混じたりして、文章の自己性を確立する上に困難を覺えたが、斯くして文章の自己性確立の必要を眞に自覺したのは右のやうな事情である。之れを要するに必要緊切といふ事が、文章を空虚ならざるものにする最大要件である。自己の眞實又は自己の全部を表白するの必要に本づいた文章を書くことが、文章を充實したものにし、若しくは充實せしむべき自覺を起こすに最もよい道である。此の意味で『必要なる表白』といふ事が眞文章の母である。

以上の如く語句の爲、文體の爲に文章を玩んだのは、寧ろ舊い初心者の事であるが、近時の少青年が文章を學ぶ樣子は餘程違つてゐる。彼等も無論新式な種々の『記事論說文例』的『作詩便覽』的な參考書を所有するであらうが、それ等よりも寧ろ最も多く彼等の文章を支配するものは新聞雜誌類である。今日多數の少青年の文章が最も多く受けてゐる影響は新聞雜誌のそれである。就中雜誌類の影響が大きい。是れは其の内容の性質乃至餘弊の上から種々非難もあるやうであるが、私は例外の場合の外、强ひて非難する理由はないと思ふ、むしろ結構の事であると信ずる。のみならず今日之れを禁遏しやうと言つた所で、出來るものではない。

そこで此等の雜誌新聞類の文章は如何なるものであるかといふと、一は必要上から一は文壇の趨勢上から、また一は言文

ある妙句佳語といふやうなものや、故事、譬喩の面白いものやを用ひて見たさの文章であつた。語句の爲に文章を作るといふ態度であつた。從つて其の文章は、此等の語句の繼ぎ合はされたもので、古人のいはゆる釘飣補綴の文になる。もとく語句の形式の方から逆に內容を作り上げやうとするのだから、何うか斯うか纒まつた文章にはなつても、其れが別に新しいもので緊切なものでもない、言はゞ空虛の文章になる。

語句の氣に入つたものを見つける範圍が讀書範圍の擴張と共に段々廣がつて行き、必ずしも『記事論說文例』や『作詩便覽』のみでなく『平家物語』の中からも謠曲文の中から『雨月物語』の中からもといふ風になると、何時か其等の中で特に氣に入つたものゝ文體全部が眞似て見たくなる。さうすると、語句の爲の文章が文體の爲の文章になり、たゞ漫然あんな風の文章で書いて見たいとか、斯んな風の文章で書いて見たいとかいふ事になる。併し內容の空虛な點に於いては依然として同一である。外形の補綴摸倣を事とした時代である。是れは一方からいへば、柔術や擊劍で型を習ふのと同じて、中身の眞劍でない、空虛な外形から馴らしてかゝるのが道理のやうでもある。けれども、文章の上では、此の型を使つてゐる間は、それが眞劍勝負の邪魔をする。型は空虛な眞似事だから、其の中へ眞劍の中身を充實さすれば立派なものになりさうであるが事實はさうでない。思想上の事は微妙であるから、さう容易に機械的には行かない。なまなか型を持つて居れば、それに盛るべき中身の思想が其の型の恰好に變形せらる。表面は變じなくとも、其の香ひ、調子、感じといふやうな微妙な、そして極めて重大な方面が變じて了ふ。型を利用しながらそれに盛る內容の特色を失ふまいとするのは容易の業でない。

是れは何でもない事のやうだが、文章の初步に於いて、眞に此の點を自覺するには機會がいる。それは實際自己の地位なり、名譽なり、利害なり、生命なりに切迫した關係のある、眞劍の文章を要する場合に出會ふことである。自己に取つて眞に

ものであつた、今日でこそ、流石に書籍や雜誌類は直接に東京のものが日本全國に分布せられるやうだが、以前はさうでなかつた、而して大阪本といへば、內容は兎も角、製本が例の臭草紙式で、灰色がゝつた、ほて〳〵した、淺草紙よろしくの漉返し返に、銅版の文字の線が二本にも三本にもなつたのを、灰墨のやうな惡インキで刷つたものであつた。それに、手に粘りつくやうな安物の黃表紙、紫表紙をつけて、白い絹糸で糸目正しく綴ぢてある。そして其の書名はと言へば、記事論說文例とか作詩便覽とかいふ種類のものが最も多かつた。今日でも圖書館の目錄などに此ういふ書名を見出だすと、一種のなつかしみを覺える。

誂へてから三月なり半年なり立つて、やつと其の書物が手に入ると、持つて歸つてまづ表紙に折目を入れて、目次から繰つて行く時の愉快さは實にたとへやうがない。あのインキや紙の惡臭そのものが、一種新鮮な忘れ難いものゝやうな印象を殘す。

同時に、一方には『慘風悲雨世路日記』といふやうな小說や、人から貰つた成島柳北の『花月新誌』の合本やが種々の意味で當時の田舍青年の夢をそゝる。『花月新誌』の小西湖佳話に、

盃觴二盃洗一丁東有レ響。酒到肴排二杯杓數回一。頃刻一妓上來。徐開二隔障一。跪拜一拜道。今夕各位萬福。銀燭光下照映視來。妙齡可二十七八一。晩後更衣。極是淡裝。藍褐間條縐紗衣。樹屯餘レ蹤。帥齋黑八絲帶。緋餘下垂二尺。透明瑞玥。淡紅珊瑚。燦彩斂光與二銀燭一相映燦煥。

など、ある所は、天下の妙文として諳誦したものである。

斯ういふ空氣の中に文章の初步を習つた私等は、當時どういふ文章を書いたかといふに、要するに記事論說文例の糟粕に

新文章論

第一

私は先づ此の講話を自分の經驗の回顧から始めようと思ふ。私などは、今日では世の所謂中年ものである。從つて我々が文章の眞似事を初めたのは、今から彼れ是れ二十四五年前になる。考へて見れば古い事であると共に、其の間の文章界の變遷も亦た驚くべきものである。

明治二十年前後といへば、日本の文章界はまだ全く夜の明けない狀態であつた。今日では、少なくとも文章の天下を兩分して其の一を保つといふ勢の口語體乃至言文一致體なども、其の頃は未だ世の中に存在せず、ちやうど是れから其等の革新運動が芽ぐまれやうといふ潮界であつた。

自分は當時まだ十六七歲の若年で、日本で最も東京文明の波及の遲い山陰道の底の片田舍に居たのだから、固より文壇の新機運などいふものに感觸し得る筈もなかつたが、詩とか文章とかいふものに漠然たる好愛を持つてゐる結果、土地の本屋に賴んで大阪あたりから詩や文章の書物などを取り寄せて、寶珠の玉のやうに大事にして喜んだものである。關西の邊鄙では、今日でもあらゆる新文明の問屋は大阪であつて、此の問屋から何もかも仕入れて來る。書物の如きも當時は多數、大阪

新文章論

第六章　結論

理想說――假感說――天才說

美とは如上の過程を具するものなり。在來諸學者の美の論は皆これによりて批評するを得べし。就中理想說、假感說、天才說等は、上來の說が破し得べき最大題案なり。一言以て悉さば、理想の美とは美の快樂の絕對的なる事實を認めて、別なる解釋に入れるものなり。美感の假性とは絕對的なるが爲めに道德を超し利害の打算を超せるの事實を認めて別なる解釋に入れるものなり。天才の神祕とは、情の力の强烈にして擴充せられ持續せられ易き習性を有するものあるの事實を認めて、別なる解釋に入れるものなり。此等の說畢竟把攬に適して學理の精確に缺けたり。事實の表面に觸れて、事實の分解に逸せり。

新美辭學　終

を言はず。何となれば、苦なる想念といへども能く快樂的情緒を催起し得ればなり。

又内容美卽ち情緒的快苦は前者卽ち形式美に比すれば、其の情緒を材とするだけ快樂絶對の保證多きの理なれば、從つて美たるの價値も高かるべきなり。

さて斯くの如き情緒的快樂の絶對性は如何にして得らるべきか。これはた直接には之れを荷ふの情緒をして絶えず意識の燒點に立たしむるにあり。情緒をして意識の燒點に立たしむるは、之れをして力めて旺盛ならしむるに如くはなし。情力盛んならざれば、退きて想念に墮し易く、想念に還れば種々なる聯想によりて忽ち矛盾あり苦痛ある想念を伴ひ來たり、こゝに取捨商量の道德的生活に入るべし。

詮ずる所情の旺盛を期するの道、これ高等なる美術の生命なり。而して是れに下より順に上るものと、上より逆に下るものとあり。下より上るとは、先づ情緒の基礎たる想念の快苦を顯著にするの工夫をなし、之れによりて大なる情を刺戟せんとするなり。其の過程は世に謂ふ寫實の本意に外ならず。吾人が思想の現實的發展といひ、美術の素材の面といへるもの、此の結論に照應す。

次に上より下るとは、一旦情に入りたるものが、其の情緒的態度を保持し、之れより返照したる想念を具現せんとするなり。情前の想念を取らずして、情後の想念を取るなり。情緒の光輝を被れるまゝの想念を扶持するなり。吾人が思想の結體といひ、思想の理想的發展といひ、美術の技巧の面といへるは、此の結論に照應す。美辭學の論ずるところは實に此の技巧の一部なり。

めに注意を惹くこと大を致すと同理により、苦痛が單に快樂の刺戟者となるなり、利用せらるゝだけ方便なり。形式美すなはち想念的知力的なるものゝ上のみに成立する美術の原則は此の外にあらず。

他に想念の快なると苦なるとを問はず、皆一樣に之れを用ふる場合あり。これ卽ち一段高等なる情緒の上の美にして、情緒的快樂を其の地步とす。此の場合に於ける想念は單に門戶として、又は內容の一部として用ひらる。要するに形式的と內容的、是れ美の二大別なり。

形式美の基礎すでに想念的快樂の上に成立したりとせば、之れを美の制限條件たる絕對的すなはち擴充的といふ性に入らしむるの道如何。他なし、其の快なる想念をして、絕えず我が心力注射の焼點たらしめ、倦怠し解體して散漫の狀となるの弊なからしめんのみ。而して一想念を永く心力注射の焼點たらしめんとせば、其の成分を複雜にし、一團一脈といふ統一の中にも、つとめて變化多からしめ、心力をして絕えず是等の變化に刺戟せられ是等の變化の上に遊歷するの餘地あらしむべし。單調なるものは疲れ易く消え易し。所謂統一裡の變化をして豐富ならしむるを要す。されば變化の豐富なると否とによりて、美術の價値に等差を生ず。刹那美として我れに與ふる感銘は一なるも、美を荷ふことの保證多きと少なきとによりて、美術に高下あるなり。

內容美は情緒的快樂を基礎とす。されば是れまた直接の材料たる情緒としては、快樂的なるをのみ要すべし。稀れに苦痛の情を挿むことあらば、其は其の快樂に變化あらしめて之れを刺戟したりといふのみにして、情緒の連續の上に形式美の理を加へたるに過ぎず。形式美が本來想念の快樂的なるものゝみを選ぶと同じく、內容美は必ず情緒の快樂的すなはち過不及なき活動を有するの情緒を選ぶ。たゞ其の選ぶところ情緒にあり、故に更に其が材料となるの想念には、必ずしも快苦の選

第五章　美の科學的方面

絶對と持久——美術の二大別——內容美と形式美——想念を材とする場合——想念の快苦を問はざるは情を主とすれば也——形式美の二件——內容美の二件——寫實的と情化的

美は絶對的快樂なり。絶對的快樂とは、心理上、傍らに苦痛なく、苦痛の豫期なき狀態なり。之れを快樂の擴充ともいふべし。

されば快樂の絶對とは哲理的說明なり。快樂の擴充とは科學的說明なり。されば之れを得るの道如何。

第一は先づあらゆる意味に於いての快樂に入るにあり。快樂の世界を作るはやがて美の世界の地盤を作るなり。美術の基礎こゝにあり。さて快樂に情緒的と想念的とあるは前に述べたる所の如し。美術が此の兩種の快樂中一を選ぶと他を選ぶとにより、美術若しくは美に二大區別を生ず。想念的快樂を直ちに美とせんとするものは所謂形式美なり。智力的にたゞ想念が告ぐる所の事象を認むるのみにて、直ちに快樂を生じ、この快樂に停住して絶對的態度に入るもの、たとへば美なる模樣などに對せし場合の如き、是れに外ならず。而して是れが結撰の方法に、初めより快樂的想念のみを選出して材とするものあり。快適なる色のみを材とせる彩色、心的活動を助くるに好都合なるが如き形式のみを材とせる模樣又は論理式等の如しまた本來は苦痛たるべき想念を利用して、他の快樂的想念に補給をなすことあり。たとへば調諧せる音團の中に突然粗音を挿みて却りて味あるが如き又は論理數學等の一見不理にして而も結局理ある問題の興味是れ等なり是れは苦痛の想念そのものが快となるに非ずして、或は流るゝ水を一時せき止むるために却りて流勢を盛んにすると同觀、或は事物の對照あるがた

の上に絕對快樂を傳彩するものなり。隨つて道德の標準よりいふときは矛盾多くして道德上の意義多き材料を用ふるものは一層高き美術なり。何となれば高き道德心をも滿足せしめ美化せしむればなり。其の他單に美術として見るも、一層複雜の道德的葛藤あるものは、情味一層濃かなり。而して此等の次第を研究するは美の科學的方面に外ならず。

り。無智のものをして進歩せざるの狀態に留まらしめんとするも亦た同理のみ。是等はすべて美の世界に至るの道と見るべきものならず。

現實の世に於いて、道德を超したる絕對快樂の境に入らんとせば、其の途上下に別かれて二つあるべし。一は上方に道德の標準と乖背せずしてしかも道德を超するなり。他は下方に道德とさかりて其の外に出づるなり。前者にありては、夫の己れの欲する所に循ひて矩を超えずといふの本意が果たして是れに近きか否かは知るべからずとするも、貧なる親が己れの苦痛を忍びて食を分かちながら、愛兒の滿足に同感して打ち笑む瞬間の快樂、母が乳兒の頰に己れの頰を打ち重ねて愛に耽れる刹那の快樂、造化の外に主なき自然の景に飽く間の快樂、是等みな上方に向かへる絕對的快樂の例とすべきものたり。後者にありては、身をも世をも忘れ果て、何の矛盾をも感ぜずして種々の肉慾に耽溺せる際の快樂の如き其の適例たり。現實界に於いて善と美との相合する例若しくは善といひ美といふ名を絕して無上無差別の世界に入れる例は是れなり。

されど是等は以て常態とすべからず。上方に向かるものといふも、或は其の範圍狹く、或は其の場合稀れに、或は其の事瞬間的たるを免れず。下方に向かへるものに至りては、之れを恣まゝにするときは、忽ち一層大なる矛盾を喚びて、自滅するの外なきものなり。

斯くの如く見來たるときは現社會に於て安全に絕對的快樂に住するの餘地は極めて狹少なりといふべし。花鳥風露の如き自然美が人間と隔絕して其の點に美術の性を分取し人をして我れを忘れて安全に之れを享樂せしむる類を最とするに止まる。此に於いてか、之れを補ふもの、美術あり。實際にありては道德の世界に入るべきものをも、美術の力によりて美の世界に繫留し、人をして安んじて之れを樂しむを得せしむ。美術は現實の世界を假りに絕對の世界とするものなり。相對快樂

故に若し理想よりいふときは、道德的生活は未だ至極せざるものなり。道德は實に自家の無用となる日あらんを期して發生せるもの、理想の世界には矛盾なくして、爲すこと凡て滿足、到る所凡て快樂、人は常に怡悅として神の如く、笑聲歡語天地に滿つべし。吾人は之れを以て美の世界と名づけんとす。美とは矛盾を絕したる快樂なり。道德を以て苦を豫想するの快樂、すなはち相對的快樂なりとせば、審美は絕對的快樂なり。然れども斯くの如きは果たして實世間に現じ得べきの理想なるか。現在の吾人が道德的生活は能く之れに向かふの方針なるべきか。哲學宗教は此の際如何の地に立つべきか。是等は茲に論ずるを得ざる所なれども、吾人の結論は、此等の諸點に對して、多く肯定的積極的ならんとするものなり。美が絕對的快樂なるの理は、美と稱せらるゝもの〻多く耽溺的なるを見るも明かなり、浮世を離れたりといひ、恍惚自失といひ、我れを沒すといひ、對境に沒入すといひ、我れも無く物も無しといひ、小天地に入るといふたぐひ、總べて道德的羈絆的ならざるの意をいへるなり。

美すでに絕對的快なる上は、醜とは其が反對なり。醜とは絕對的苦痛のみ。絕對的快樂と絕對的苦痛と、即ち美と醜とを兩端として、中間の過程を道德といふ。道德は美醜の外なり。

第四節　絕對的快樂

人智の進步と道德――現實界に於ける審美の困難――善美契合の例――美術の起端

人智の進步はあらゆる方面に於いて細密を意味し複雜を意味して、矛盾の方面いよ〳〵繁く、人をしてます〳〵道德的ならしむ。智識進むに從ひて、快樂の矛盾は減じ來たるの理なり。然れども減じつくして全く矛盾なきに至らんことは望むべくもあらず。否、既に進步せるものをして無智の初めに還らしめんとするが如きは、有るべからず、爲すべからざるの事た

ふ消極的のものとなるなり。さればまた道德は標準の正しからんことを要す。善の意識こゝに生ず。善とは矛盾せる性の何れが眞に人生の目的に合して、何れが之れに背くかを定むるの名なり。換言すれば人生の眞目的、若しくは是れに合するもの、善なり。善の標準によりて快樂の矛盾を調攝するを道德といふ。

然らば人生の眞の目的は何なるか。吾人は玆に之れを細論するの餘地と必要とを有せずと雖も、大概に於いて、人間の野蠻より文明に、小兒より大人に進むと共に展發し來たる性の、後なるものが常に前なるものよりも一步善に近づけるを見る。最劣等のものは唯眼前五官の局部的滿足のみを知りて、未だ其の以上の性を展開せず。僅かに無意識なる本能によりて矛盾ある場合の危難を免れ得るのみ。次てやゝ進めるものは、其の上に自家全體の保存といふが如き、一段高尙の目的を意識し來たる。この際に於いて局部の官能慾よりも自家全體の保存の一層善に近きは、恐らく何人も自明とする所なるべし。つゞきては、種族慾となり、同類慾となり、所謂社會性に向かひて漸次に自家の目的を展開し來たる。されば善の最高なるものは斯くの如き傾向の極所にあるか。古往今來穩健といはるゝ道德が此の方針を追ひ來たれるは事實なり。

第三節　道德と審美

道德の本意——道德は自滅を目的とす——美は道德を絕したる狀態也——美卽ち絕對的快樂

道德とは善の標準によりて快樂の矛盾を調へんとするもの也。隨つて道德は、必ず苦痛と努力とを豫想す。何とならば、壓せらるゝものに取りては、常に不滿足あると共に、既に壓抑すといふことは、性の向かふ所に逆行すといふの意を含みて努力を要すること勿論なればなり。吾人が日常の生活は、此の苦痛と努力との下に精神して、善なる快樂に沒入せんとする、一大過程に外ならず。人生若し絕えて矛盾なくば、道德は生ぜざるべし。矛盾あるがために、人間の生活は道德的となる。

足するときは、快樂の感を生ず。別言すれば、快樂とは一活動が造化の計畫、人生の目的に合するの際に發する火光なり、天地の理想が成就せられたる刹那の意識なり。されば快樂が本來有するの價値は極めて重大且つ單一なり。標準によりて之れに差等を附するの困難なるを見る。されども論はこれに盡きざるなり。

第二節　快樂の矛盾と道德

差別世界——性の種々——差錯矛盾——標準の必要——道德——善の意識——矛盾せる快樂の調攝

蓋し何の時よりか、天地に差別といふことあり。人間の性また別かれて種々となれり。種々となれるはやがて矛盾あるの始めにして、圓滿なるべき造化の計畫は、こゝに差錯を生じ、一部の性と他部の性と、歸するところ必ずしも相合せざるに至る。言ひ換ふれば性と性との間に矛盾あるがため、一を眞とすれば他は妄とならざるを得ず。甲の快樂を眞の價値なりとすれば、乙の快樂は妄の價値となり了はるといふの變態を呈せり。口に快きものゝ胃に害あり、我れに快きものゝ他人に苦しきが如き、其の例なり。此に於いてか吾人は安んじて自家の性の求むる所に從ふを得ず、扞格に惱み取捨に惑ふの結果を生ず。道德の端緒こゝにあり。

道德とは性の求むるところに矛盾あるがため、一を抑へて、一を立たせんとするの過程なり。口に快くして生命に害あるの食物ありとせよ。味覺の慾は盛んに之れを得んとすれども、生命の慾は之れを避けんことを念ふ。我れすなはち或る標準によりて生命の慾を重しとし、之れに從ひて味覺の慾を壓す。斯くの如きは道德の部に入るべきものたり。

されども其の所謂一を立てし一を抑ふるの標準は何なるか。若し前例の場合に味覺の慾を助けて生命の慾を壓することあらば、等しく一を立して一を抑へたるものなるに拘らず、以て道德といふべからず。道德界の事たるをば得るも、不道德とい

第四章　美の哲理的方面

第一節　快樂の意義

快樂の標準――心理的と哲理的――性の滿足

快樂に美なるものと美ならざるものありといふ。卽ち快樂に種類あるなり。そもそも斯くの如きはいづれより生ずるか之れに、答ふるの道二に出でざるが如し。一は快樂を荷ふの材料に之れを求むるなり。他は快樂といふ判斷を下すの標準に之れを求むるなり。快樂の材料とは、想念若しくは情緒をいふ。想念の種類、情緒の種類によりて、美なる快樂と美ならざる快樂との別は生ずるか。これ一問なり。快樂の標準とは、何故に快樂なるかの根據に溯るなり。これまた一問なり。

之れを事實に徵するに、快樂の美なると美ならざるとは、其の材料に關すること無し。香水の香ひを嗅ぐの快樂は美の快樂といひがたきも、薔薇の花の香を嗅ぐは美中のものたるを得ることあり。みづから復讐的の行爲を成就せる快樂は美といひがたきも、義士の復讐の喜びに同感したる快樂は美なるを得べし。同一材料の快樂が場合によりて美とも醜ともなるの理見るべし。

さらば快樂の標準によりて種類を異にするか。先づ究むべきは快樂の標準といふ意義なり。之れを心理的、生理的にいふときは、精力需給の關係、生活經營の增進なること前にいへるが如し。されども哲理上より見たる快樂の眞の標準は何れにあるぞ。曰はく性の滿足是れなり。性とは吾人が造化の計畫に導かれて、何物をか要求するの狀態なり、如何なる方面にか活動し行かんとするの狀態なり。心理學者の衝動といふが如きもの、恐らくはこれに近からん。而して要求すなはち性が滿

ど苦痛が美の必至條件にあらざるは多く辯ずるを須たずして明かならん。美の主要狀態は實に快樂なり。如何なる美といへども、其の中に快樂といふ一件を含まざるはなし。この理書に事實が之れを證するのみならず、古來美の學を研究せる人々が、等しく認めて美に離るべからざる一現象とせる所なり。たゞ之れを美の生命とすると否と、及び之れが性質の分解に異說多かりしのみ。

美は快樂なりといふ。然るに快樂の成立事情は限り無し。吾人はこの無限種の快樂中、特に某々のたぐひを美なりとして、之れに違ふもの、たとへば飮酒家の酒を味ふが如き快樂をば、美といはず。是れ何の故ぞ。若し一切の快樂を美なりと言はゞ事實はこれを否定すべし。此に於いてか論はおのづから美の哲理的研究に入る。

稱するはこの現象界なり。更に之れを心理的にいへば、現象界を代表するところの想念（感覺をも合せて、廣く知性の方面に屬するものをいふ）は直ちに客觀なり。之れに對して我れの判斷と態度とを表するの感情は主觀にあらずや。想念は直ちに外界にして、感情は直ちに我れなり。外界と我れとの聯結はやがて客觀と主觀の聯結に外ならず。

主觀すでに感情なりとせば、美は感情以內の現象ならざるべからず。然れども、感情といふには、快苦と情緒と、すなはち感と情とあること前にいへるが如し。美は感なりや、情なりや。吾人の見るところに從へば、美は感にして情に非ず。美は所謂快樂なり。

第三節　美の快樂なる所以

美は情緒に非ず――想念のみにても美たるを得――美の必至條件は快樂也

美は主觀の現象にして、吾人の之れを感ずるとき、始めて生起し來たる。而して主觀に快苦と情緒とありとせば、吾人は美の快樂なることを證せんがために、先づ其の情緒にあらざることを示さゞるべからず。情緒は固より美に入るを得べし。されども其の美に入るはたゞ材としてなり、美の必至條件にあらず。何となれば、情緒なきも亦た美たるを得ればなり。たとへば美なる模樣のたぐひに對する時の美感は、決して情緒を待たず、之れを見たる想念のまゝにて一種の感を生ず。而して其の感は情緒といふものと異なりて、むしろ單に快適の氣すなはち快樂といふに合す。固より之れを繼續すれば、必然の勢として、件の快適の感を把持し若しくは獲得せんとする喜悅、好愛等の情に接すべしといへども、是れなくしてなほ美たるを失はず。また情ある場合といへども、其の情にして苦しく厭はしきまでに劇甚なるもの、たとへば驚愕、慟哭等の多くは以て美といふべからず。所詮情そのものは美の必至條件にあらざるを見る。されば剩すところは、快苦の感なり。され

妙なりとたゝふる音樂も、邦人の耳には殆んど何の美をも成さゞることあり。はた世の文學美術の批評といふが如きに見るも、其の結論の反對し矛盾せる事例極めて多し。要するに美の判斷の時により人によりて一致せざるは事實なり。

されど他の一方には、これが相合致する場合も尠なからず。或る度までは、同一國人の同一闋樂に對する美醜觀は相合するが如き、其の例たり。しかのみならず。吾人は一面に美の判斷の不一致を意識すると共に、他面此等はたゞ或る事情にけらるゝの結果にして眞の判斷は必ず合致すべきものなりとの漠然たる信念をも有す。

美の判斷すでに一致する場合と一致せざる場合とありとせば、結局如何に解釋すべきか。答へて曰はく、これ美の主觀的なることを證するものなりと。何となれば、如上の矛盾せる二面を併せ有するものは、ひとり主觀的現象のみなればなり。人性と境遇との或る點まで類同を有する結果は、主觀をして其の程度までは同一態度に立たしむるを得るの理、以て美の判斷の一致といふ事實を說明すべく、之れに反して到底個人特殊の性と境遇とを具せざるを得ざるの範圍には、美の判斷の不一致といふ事實を宿せしむべし。これ客觀的現象の關し得ざる所にして、美の判斷の主觀的なる所以なり。

第二節　主觀と感情

主觀の意義――主客の心理的區別――感情卽ち主觀

美は主觀的現象なりといふ。されども主觀とは如何なる意義なるか。凡そ吾人が經驗し意識するの範圍に於いて、全然の主觀すなはち些も外界に關係を有せざるの主觀と、全然の客觀、すなはち些も我れに交渉せずして存立するの客觀とは、あるを得ず。山といひ川といひ甲といひ乙といふもの、すべて純粹なる主觀と純粹なる客觀との觸接せる結果にあらざるは無し。これ哲學上いふところの現象說の立脚地なり。天地間の現象は、皆斯くの如くして成立す。而して吾人のこゝに客觀と

第三章　快樂と美

第一節　美の主觀的

第一事實——美判斷の不一致——美判斷の一致——主觀なる所以

美とは何ぞといふの問題を解釋せんには、先づ審美上の事實に就かざるべからず。審美上の事實とは何ぞ。美なる泉石の景ありといふ。されども泉石を分析すれば、たゞ尋常一般の自然物のみ。はた美なる繪畫ありといふ。されども繪畫を分析すればたゞ尋常一樣の色彩のみ。形似のみ。吾人が稱して美といふものは、假りに我が眼を閉づるもなほ物の上に存立すと想像すべきか。我れをば全く離脱し得ずとするも、我れと物との交渉するところには必ず成立すべきものなるか。所謂主觀と客觀と、如何なる邊に美といふ現象ありや。美とは物の屬性なるか、我れの感應を待ちて生ずるものなるか。

美の主觀にあるか客觀にあるかを判定すべき唯一の事證は、美の判斷の萬人一致するか否かといふにあり。客觀の現象はすべて或る病的事情を除くの外、人により場合によりて相異するを許さず。山は何時何人が之れを見るも山ならざるを得ず。赤きものは如何なる場合にも赤きを妨げず。これ客觀的現象の特徵なり。然るに主觀的現象は、觀る人の狀態にしたがひて、甲者と乙者と、はた昨の甲と今の甲と、必ずしも其の結果の一なるを保せず。甲者の聞きて快しとし慕はしとする樂音も、乙者は却りて苦しと聞き厭はしと聞くことあり。主觀的現象の特徵は是れなり。美の判斷は其のいづれにあるぞ。

事實はこれに對して矛盾せる兩樣の解答をなす。一方には、美の判斷の、人により場合によりて一ならざること、爭ふべからざるの經驗たり。吾人が見て美なりとする墨畫の山水を、無智の蠻人は見て何の美もあらずとすべし。歐人の聞きて絕

想念の活動と情緒の活動と、等しく快苦の調子を帶び得るは前來の論の如くなれど、情緒の活動は一層多く快樂的なり。蓋し想念にありては或は注意の燒點の散漫不明瞭なるが爲めに活動力の代謝、常態以下に降り、或は過度に心力を要するため之れが消費、常態以上に昇る等のことあり易く、しかも此等の事情は半面客觀の條件に屬するが故に、任意之れを變轉して過不及を制するの自由少なけれど、情緒にありては、比較的容易に其の活動を上下するを得、隨つて欲するまゝに快樂の狀態に留まり易し。これ情緒には自ら媚びて耽り易けれど、想念には快ならざるものを快にして耽るの餘地少なき所以なり。

されば快樂を欲するものは、此の理に基づきて、想念の上に必ずしも快樂のみを苛求することをせず。想念的過程は快苦の何れに向かふも、期するところ其の活動だに大ならば可なりとし、むしろ之れによりて次に來たるべき情緒的過程の適度に盛大ならんことを圖る。別言すれば想念として苦なりしものも、情緒に達して快となり得るの理を應用せんとするなり。美術が情の刺戟を重要の方便とする一大根據は此にあるに似たり。

要すれども憤怒そのものは快樂なるを得べし。好んで憤怒するものゝ心には、憤怒は一の樂しみなり。是れ畢竟憤怒の原因となりし苦痛が、其の前行者たる想念の伴生狀態にして、後列なる情緒の伴生狀態にあらざるに由る。

而して情はまた一種の獨立せる活動なり。既に活動あらば、其のところ必ず活力の需給の關係はこゝに快苦を生ず。卽ち情は情みづからに附屬するの快苦を有すといふべきなり。しかも其の快苦が初めの快苦と一とならざるは言ふまでもなし。憤怒も適度の心性活動なるときは快樂となり、喜悅も適度又は不足の心性活動なるときは苦痛となる。是れを情緒的快苦といふべし。

情緒的快苦すでに想念的乃至、感覺的快苦と別なりとせば、兩者の關係は如何。思ふにこの點は直ちに想念と情緒との關係によりて解答せらるべし。吾人の經驗に回顧するときは、想念的活動とは、同時なるが如くして實は同時ならず。意識の燒點を想念の過程に差し向くるときは、情緒の過程閑却せられ、情緒の過程を意識の中心に持ち來たるときは、想念の過程閑却せらるゝの趣きあり。以て其の同一意識內に全く同住するを得るものに非ざるを知るべし。此に於いてか想念的過程と同伴するの快苦は、勢情緒的過程と同伴するの快苦と同住する能はず。固より其の間密に相接し、且つ刻々遷轉して微妙に相交錯するがゆゑに、こゝに論ずる如く明瞭に分別して存することは稀れなるべしと雖も、仔細に觀察するときは、決して兩者の同住的のものにあらざるを見る。卽ち想念的快苦(又は感覺的快苦)の狀にあるときは情緒的快苦を忘れ、情緒的快苦の狀にあるときは、想念的快苦を忘る。想念に耽るといひ、情緒に耽るといふことは文字のまゝに事實と認むべきなり。

第八節　情の活動は一層快樂的也

想念活動には苦の聯絡多し――情は概して快樂に留り易し

の持續せんといふの願ひは即ち貪著の情なり。されば感と情との關係は、快なるが故にといふと、持續せんとすといふと、因果の地位にあり。情が常に理由を具すと感ぜらるゝは此の故なり。また其の持續せんとするものが同じく快に外ならざるよりいへば情は感を目標として之れに達せんとする行程の地にあるものなり。情が概して實行に移らんとするの傾向を有すと感ぜらるゝは、此の故なり。其の所謂意志の形を成すは此の故なり。情は常に將欲なり。

之れを生理的にいふときは、情とは腦中樞に生じたる活動の反響なり。其の想念の性質にしたがひ、腦に於いて活力の需給よく平均するときは、當該の局部に之れに應ずるの反響あり。喜悦といひ愛慕といひ貪著といふが如き、快感に起因する情はすべて此の部類に屬す。さらに腦の需給もし亂るゝときは、之れに反應すべき當該局部の活動を喚起して、悲哀、憤怒、失望、恐怖等の情となる。此の理は夫の情の發相といふものによりて能く知らる。怒るといふ情は、面上に血液潮し、眼瞼張り、手腕の筋肉怒張する等の生理的過程に應ずる心的過程なり。また夫の本能といふものも、情の無意識的境地にあるものと見るべし。眼前に危害の來たるときなり。されども本能を意識の面より見るときは、情ならざるべからず。之れを要するに情とは快苦に應じて内より發する反響的活動なり、若しくは觀念的活動なり。快苦を我れの判斷とすれば、情は判斷に續ける我れの態度なり。

第七節　情緒的快苦

情自ら快苦を有す――之れと想念的快苦とは別也

論じてこゝに至れば、情と快苦との關係はおのづから明かなるべし。我が面上に唾せらるゝといふの想念あり。苦痛なり。故に憤怒の情となる。苦痛なるが故に憤怒するなり。憤怒するが故に苦痛なるには非ず。されば憤怒の原因としては苦痛を

ける他諸心念との關係によりて變ぜる活動量によりて快苦を決するは想念的なり。吾人の此の見はかの充實(Integration)說と適應(Adjustment)說との兩端を其の生出點に尋ね歸りて相攝するの生出的見狀に近づくものとも見らるべし。而して吾人の意識に全く單立せる心念の罕れなると同じく、眞の感覺的快苦は、各感覺の始めに於ける刹那の閃發の外、殆んど之れを持續するを得ず。心念の複雜となり行くにつれ、一感覺は他の感覺または想念と相合して玆に一の想念團を成し、而して後其の想念團中の各部は種々なる關係によりて、何れかに之れを支配すべき優越の感力あるものを生じ、以て遂に其の一調子に歸着するに至る。換言すれば想念團が一體としての快苦常に其の成分たる各個單獨の感覺的快苦の上に化成し來たらんとするなり。故に以下便宜のため感覺的と想念的とを併せて單に想念的と呼ばんとす。

第六節　情の性質

廣狹二義――感情と情緖――情は快苦の結果也――情と本能――情と發相――判斷と態度

情といふ語の意義には廣狹の二義あり。上に所謂快苦の感をも加ふるときは、廣き意義にての感情となり之れを除きていふときは、狹き意義にての情緖となる。現時勢力ある心理學說にては、快苦と情緖とはたゞ單複の差に過ぎずとせらるれども、吾人の觀る所を以てすれば、情緖の單純なるもの、卽ち感覺的感情と快苦とは一ならず。情の元素は初めより情として存すべく、之れと快苦とは決して同一にあらざるなり。今便宜のため快苦を感といひ情緖を情といはゞ、兩者は密に相接すれども、しかも同一過程にあらず。感すなはち快苦が心的活動の量の減增に由來するは前來の論の如し。情は是れに續きて生ずるの現象なり。快苦の感を先驅として之れに隨ふもの情なり。精しくいへば、快苦を原因とし目標として、之れが結果となり行程となるもの、これ情のみ。甘味といふ感覺あり。其の感、快なり。此に於いてか之れを持續せんことを願ふ。こ

なり。また何百以上に昇る場合も、其の人の精力涸渇して、疲勞の極、無活動と同一の狀態に陷り、生活沮止の結果を來たすべし。究まる所、あらゆる意味に於いて生活の衰微は苦痛なり。苦痛は否認の意識なり、「不可」と斷ずる判斷の聲なり。詮ずるところ快苦は心的生活の活力の需給關係に由るものにして、隨つて同一の活動も、我が精力の强弱によりては、或は快となるべく、或は苦となるべし、心力の量的關係なり、主觀と客觀との比例的關係なり。

また想念には再現ありと見て、必ずしも不可なき事情あれど、快苦には絕えて再現といふものあるべからざるの理も、是れより生ず。其の時々の彼此の比例に基づく限りは、前回の比例を再びせざるべからずといふの保證なければなり。

第五節　感覺的快苦と想念的快苦

感覺的と想念的とは單複の名也——快苦因の二說——生出觀

快苦に感覺的と想念的とあり。されども此の區別の意義は、從來の例と多少異なる所あり。感覺的と想念的とは、直現と再現との差にあらずして、單立と對立との差なり。感覺的快苦は當の活動みづからの量の大小に基づくなり。想念的快苦は、當の活動が他の活動と相對するの地位に基づく。こゝに甘味を嘗めて快なりといふは其の甘味といふ活動が單立して大なる精力を流通すればなり。されど若し件の甘味は生活を害すべしと想ふより、苦痛の之れを嘗むるに伴ふことあらば、其は對立的なり。何となれば、甘味そのものゝ活動が腦中樞に於いて先在の地の諸活動、たとへば嘗て同一甘味を嘗めて生命を危くしたりといふが如き再現想念と聯絡し、こゝに胃の生活、內臟の生活等相對立するの狀態を現じて、彼此相矛盾し制限するものあるより、其の單立且つ盛大なりし活動も、遂に阻礙せられて、衰微に傾かんとすればなり。要するに各個の活動すなはち心念が、直現たると再現たるとに論なく、自家單獨の活動量によりて快苦を決するは感覺的なり、是れが腦中樞に於

が人生の目的に合すといふことなり。生活の增進とは、身の面よりいふも心の面よりいふも、すべて盛大なる活動に外ならず。盛んに活動して何事をか成す。人生の意味は此の簡單なる一命題の中に求むるを得べし。たゞ其の何事をなすべきかといふに別なる哲學上の問題を惹起し之れに向かひて盛んなる活動をなし得ざるの妨碍ある場合に、如何にして之れを廻避し疏通すべきかといふに道德上の問題を提起するのみ。此等の問題に觸れざる限り、人生の目的は直接に活動の盛大にありといふべく、活動の盛大はやがて生活の增進なり、生活の增進は精力需給の活潑なり。

是れに因りて觀るときは、精力需給の活潑といふこと、是れ人生の望みにして、この望み達せらるゝときは、滿足の聲を發す。快樂とは畢竟この滿足の聲に外ならず。舌に甘味を嘗む。我れ之れを快しといふは、少なくとも舌の末端神經より腦中樞に及ぶ一局部の活動の、之れによりて催進せらるればなり。其の部面に於いて一層盛大の生活を營み得ればなり。一切の快樂この理に由る。されば快樂の價値また知るを得べし。快樂とは吾人が種々の事物に對する是認の意識なり、判斷して「可也」といふの聲なり。

快樂の理すでに知るを得べしとせば、苦痛の理もまた明かなり。苦痛には二樣の生起狀態あり。一は心生活の一層盛んなる狀態より、一層微弱なる狀態に墮するの際に生ず。此は關係的なり。大なる快樂に對するときは、小なる快樂は苦痛に變ずといふの義なり。他の一は、心生快の度に一定の常態(Normality)ありて、之れより逸するものは苦痛となるといふにあり、單獨的なり。而して心的活動に一定の常態あることは、實驗學者の夙に立證せるところ、人の精力の強弱により其の度は一ならずといへども、上下兩方に精力の堪え得べき制限あるなり。たとへば何百以上の活動、何十以下の活動は苦痛なりといふが如し。是れ畢竟何十以下に降れば、其の人に取りては無活動と同一の狀態に陷りて、生活の阻礙といふ結果を生ずれば

泣いて快しとすることあるに非ずや。また實世間に於ても、泣いて自ら慰むることあるに非ずや。悲哀に耽りて以て心やりとするの事實あるに非ずや。是等は皆悲哀泣涕の中に快感あるなり。悲哀其の事、泣涕其の事の快き場合なり。また喜びといふとも、吾人は大歡喜の爲めに却りて胸苦しさを感ずるの事例を有するに非ずや。其の他憤怒といひ嫉妬といひ愛慕といひ、一切の情緒は、情緒そのものに固有の快苦あること無し。時としては樂しき嫉妬あり。時としては苦しき嫉妬あり。要するに快苦は其の場合により一ならず。是れ何の故ぞや。

第四節　快苦の性質

生活の意義――快苦と生活――精力の需給――快苦に再現なし

吾人の心内に快樂苦痛の二大現象あるは事實なり。此は如何にして生起するか、如何なる價値を有するか。吾人の考ふるところによれば、かの精力需給の說以て其の全斑を盡くすを得べし。之れを身體の側よりいへば、吾人の身體は、腦中樞に於いて、或は其の他の諸機關に於いて、常に何等かの活動をなし以て生活を營み行く。而して斯くの如く生活を營み行くはやがて我が身體の絕えず營養せられては消費せられ行く活力需給の一大市場たるに外ならず。更に之れを心性の側よりいふときは、吾人の生活は斷えざる意識の流れなり。一感覺一想念はた一情緒も、すべて心精力の消費に非ざるはなく、消費あるが故に補給あり。活力常に流通して、腦中樞を需給平均の市場となす。生活とは詮ずるに精力の消費せられては且つ補力せられ行く一大活動なり。

此に於いてか快苦の理生ず。精力需給の活動盛なるは快樂なり、精力需給の活動衰へたるは苦痛なり。何となれば、給精の需給は直ちに生活にして精力需給の活潑は生活の增進を意味すればなり。但し此の際に要する必然の前提は、生活の增進

想念は感覺的なりといふを得べし。別に何ものかの標準を挿まざる限りは、其の間に高下の價値を附するの理由なし。たゞ異なるところは、感覺にありては常に末端神經より始まり、再現感覺以上にありては單に中樞部のみにて活動するの別のみ。しかも是れ却りて感覺的なるものゝ活動の範圍大なるを證す所以にして、此の標準よりいふときは、感覺の價値は再現感覺の價値よりも高し。啻に末端神經に始まるのみならず、感覺は直ちに我れをして其の外物と連續せしむ。太陽の光を眼に感覺したりとせば、其の刹那太陽が有する活動は灝氣の連鎖によりて眼中の末端神經に聯なり、末端神經より直ちに走りて腦中樞に結合す。卽ち此の場合に於ける光りといふ感覺は、我が腦と太陽との間に流るゝ一大活動となるなり。此の理よりいふときは、吾人の智識は及ばん限り多く感覺的ならんを要す。感覺的なること多き智識は、事實に切なること一層大なればなり。

第三節　情と快苦

快苦は情に非ず――其の例――根本的誤謬

情とは何ぞといひ、快苦とは何ぞといふは、心理上最も困難にしてまた最も重要なる問題なり。この二問だに滯りなく解釋せらるゝを得ば、世上幾多の雜事件、殊に美學上の疑義の如きは、おのづからにして解決せらるゝを得ん。美學の半面は直ちに此の二問の解釋なりといふべし。

在來諸家の心理說に見るも、情の性質乃至情と快苦との關係を遺憾なく說明したるもの殆んど之れあらず。吾人の見るところを以てすれば、情と快苦とは全く別なる事實に屬す。情に固有の快苦ありと見るは、世人が動もすれば陥る根本の謬說なり。悲しいといふ情は常に苦しく、喜ばしといふ情は常に快しと見て疑はざるが如きは事實に非ず。吾人は現に演劇を観て、

されば今日の心理學が生理的方面の研究に步を進むるは、歸するところ心界の理象を肉身の方面に見證せんとするに外ならず。身より心を動かし若しくは心より身を動かすの關係を之れによりて見んといふが如きは、世人の往々にして陷り易き誤謬なりとす。凡そ如何なる心界の活動といへども、肉身に之れと相呼應し相幷行するの活動あらざるなく、凡そ如何なる肉身の活動といへども、心界に之れと相呼應し幷行するの活動あらざるはなし。たゞ所謂無意識的活動に於いてのみ、肉身の活動ありて心界の之れに幷行せざることあれど、是れしも事情を變ずるときは意識的となり得ざるに非ず。一般の原理としては、心身必ず幷行すといふの外なきなり。

第二節　一切の智識は感覺的也

感覺の意義——感覺の價値

心身すでに前後の關係にあらずとすれば肉體的乃至官能的といふことゝ、精神的乃至心靈的といふこととは、同一物を語をかへて言へるに過ぎずして、其の間いさゝかも褒貶の義あることなし。肉體についていふときは、或は末端神經の活動よりして中樞神經の活動に及ぶものあり、或は單に中樞部のみの活動に止まるものあり。兩樣幾多の活動はさらに聯合して複雜なる活動をもなす。或は外より内に向かふもの、或は内より外に向かふもの、腦の作用あり、心臟の作用あり、筋肉の作用あり、一切身體の活動は一大系統をなし一大組織をなして、吾人の生活を成就す。人生はたゞ斯くの如き範圍に於て完結す。此の意味よりいへば、人間を一大機械と見るもの、決して偶然にあらず。更に之れを心の方面よりいへば、感覺あり、再現感覺あり、智識の要素は是れに盡きて、兩者のさまぐ\に結合するところ雜多の想念を生ず。はた想念の外界を代表するあり、感情の自家を代表するあり、以て心生活を完結す。されば感覺ひとり官能に關し肉體に關するに非ずして、一切の智識

第二章　情の活動と快樂

第一節　心身并行の意義

心身交渉に非ず――一體兩面――其の眞意義

吾人は論緒の簡ならんを欲して、こゝに先づ必要なる心理上の諸前提を概擧せんとす。其の第一は心身の關係なり。心身の關係に就いては、吾人は并行說を取らんとす。蓋し心界と肉身と一體兩面の關係なりとは人の言ふところなれども、其の本意は、往々にして混亂に終はるが如し。肉身と見るときは我れは常に肉身以內に活動して、一步たりとも其の以外に出づること無し。また心界と見るときは、我れは長へに心界以內に活動して、いさゝかも其の外に逸することなし。心界の活動は心界に於いて終始し、肉身の活動は肉身に於いて始終す。身より心を動かすといふことなく、心より身を動かすといふことなし。心身は相交渉するものにあらず。交渉の有無をいふは、そも〳〵既に思想の混亂を表せるものなり。兩者は本來一なるが故に彼れより此れに及び此れより彼れに及ぶといふが如きことあるを得ず。二面と見るときは始終長へに二面、一體と見るときは、始終長へに一體ならざるべからず。心を以て身の活動より生ずる結果と見、若しくは身を以て心の活動の爲めに動作するものと見るが如きは、心身の間に前後因果の關係を立つるもの、根底に於いて心身并行說若しくは一體兩面說と矛盾するの觀方たり。假りに吾人の身體が造化の手によりて意識の方面を閉鎖せらるゝことありとせんも、當初の組織にして舊のまゝならば、吾人は依然として意識あると異ならざるの活動をなして進步し行くべし。意識といひ心といふは、たゞ吾人が肉身に於いて營むの活動を、開眼して一々自覺するの狀態に過ぎざるなり。

り。修辭の結局は情の撥撫にあり。然らば情を揺かすは何ゆゑに美なりや。曰はく快樂なればなり。答へてこゝに至れば、吾人は三箇の題目を得、曰はく情の撥撫、曰はく美、曰はく快樂。而してこの三者の間に必然生じ来たる二箇の大なる疑案あり。一は曰はく、情の撥撫は何故に快樂なりや。他は曰はく、快樂は何故に美なりや。

情の撥撫は何故に快樂なるか。思ふに是れが答案は直ちに美學の心理的根據をなすものなり。吾人はこれよりして先づ心理上の觀察點を定めんとす。而してのち快樂は何故に美なりやと問はゞ、美の哲理的根據を得べし。美の哲理的根據によりて美の構成を尋ぬるときは、爰に再び美の心理的解剖に入りて、美術の成立條件たる修辭の理に合するを得べし。是れ吾人が下に於いて試みんとする美論の計畫なり。

によりて分析研究せらるべきものなり。しかのみならず、是等の美術は、さらに二大部面に分ちて觀察するを得ん、一は素材として、一は技巧として、是れ前に一言せしところ。

今假りに詩文といへる一箇の美術を、素材と技巧との兩部に分かつときは、素材の方面は詩文の脚色なり、條理なり、趣意なり。技巧の方面は則ち修辭に外ならず。美術としての詩文以外夫の實用文と稱するものゝ多くは、素材に實用を標して、是れが表白の術に技巧の理を兼ねんとするものなり。

是れに因りて觀るときは、修辭の研究は直ちに美術研究の一面にして、美術の研究は美の客觀的解釋なり、資して以て美學の科學的研究を全くすべし。美辭學の本意こゝにあり。今若し其の他を言はゞ、更に詩文の素材が上にも別なる研究を要すべし。はたまた音樂といひ、舞踏といひ、他のすべての美術も同樣の順序を以て素材技巧の二面より仔細の分析を求め得べし。斯くの如くして各種の部面より歸納し來たる原理は、美の構成條件となりて、此等の條件の宿する所には、如何なる場合にも美現象を生ずべし。美の成立すでに明かなるを得ば、其が人生に於けるの地步もおのづから知るべきなり。

第二節　美辭學の結論

情の刺戟――二大疑案――美論の順序

吾人が前編に於いて得んと試みたる美辭學の結論は、一切の修辭現象が情を刺戟して思想の結體を助けんとするものなるの理なり。情を刺戟して思想を結體せしむるには、是れ美術の本意にして、結體したる思想は、さらに逆に觀者の情を搖かすこと切なるべし。約言すれば、情の活動せるまゝを結晶せしめて、他の胸に挿み、彼處に再び溶解して活動せしめんがために技巧を要す。思想の結體とは、手に取りがたき情をしばらく想念の上に凝固せしむるの謂なり、情を移植するの方便な

まれり。甚しきに至りては、一切の思想を包容すといふを以て、學問の總名とすら見たりといへども、是れたまノ＼其の無本領なりしを證するに過ぎずして、遂に美辭學の生氣は内より衰へたり。思ふに文辭は決して空なる器にあらず、修辭現象は獨立して自家の標的を有す。是れ吾人が前編に於いて論ぜしところ、一切の思想に關すといふは事實なれども、文辭として見るときは、此等の思想はたゞ材料たるに過ぎずして、文辭は此等の材料を處理し、其が上に或る文辭みづからの目的を成せんとす。平常の語を以てするも、強くといひ、有力にといひ、感動的にといひ、人を動かすが如くといふ、總べて思想そのものゝ目的以外に、文辭が有するの標的たり。修辭現象の歸趨するところは、此の一點にあり。而して人を動かすといひ、人を感ぜしむといふは、直ちに美の原理に合するものなり。然り、人を感動せしむといふ語の中には、複雜なる美の要件を含蓄す。吾人は主としてこの一斷を論證せんがために以下の説をなす。

既に美辭學の標的、美にありとせば、こゝに斯の學は正當の立脚地を得たるものなり。美辭學は美學の一部として始めて、其の研究に生命あり、活氣あるを得べし。蓋し美の研究に二面あり。一は哲理の方面にして、一は科學の方面なり。美といふ一種の現象の、世に存在するは何のためなるか。美が人生に對する關係如何。斯くの如く問ひ來たりて、美の理想を知り、美の價値を知らんとするは、哲理的美學の本意なり。美といふ現象の成立する狀態を解析して、主觀に或る特殊の約束を得、客觀に或る特殊の條件を得るは、科學的美學の結論なり。

客觀に美を成すの條件あり。之れを知らんとするは、直ちに其の客觀を分解するに如くは無し。美現象を成立せしむるの客體は自然なり、美術なり。就中美術を分解するときは、之れによりて容易に美現象を結撰するの科學的條件を見出だし得べし。而して美術に詩文あり、音樂あり、繪畫あり、彫刻あり、建築あり、舞踏あり。是等はすべて各別に、しかも同一標的

第三編　美論

第一章　美論の計畫

第一節　美辭學と美學

美辭学の標的――美術論――美の研究に歸す

振はざるものは今日の美辭學なり。夫れ文辭の世に於ける效用彼れが如く大にして、人の之れを見るまた決して輕しとせず。しかも其の理を考ふるの美辭學に於いて、ひとり今の古に及ばざるは何ぞや。文辭はたゞ外形に過ぎざるが故にといふか。若し外形といふを以て論ぜば斥けらるゝもの何ぞ文辭に限らん。斯の學の振はざるは、畢竟研究の標的明かならざればなり、科學として獨立すべき當然の地歩を占め得ざればなり。

古は美辭學を以て論理學に屬すと見たり。然れども修辭は必ずしも論理にあらず、たゞ論理を寓するの器といふに過ぎざるがゆゑに、論理學の漸く獨立して發達するや美辭學は則ち死殼となりて殘りたり。また或は美辭學を以て倫理學に隸すとせりき。されども修辭は必ずしも道德に非ず。此に於いてか倫理學の別なる地歩を占むるや、美辭學は則ち死殼となりて留

しならん。吾人が今日之れを雅語とするは、古典的價値にもとづくなり。雅といひ俗といふことの眞意見るべきのみ。

すべての事末となりては必ずひがみもてゆきてわろかめるならはしも出くる物なれば、よくそのまことの正しき筋をもとめて、古に立かへらでやはあらん何業も皆しかるならひぞかし(村田春海の『歌かたり』の一節)

人々御口に水を掬ひ入れ奉る、辛うじて息出で給へるにまた鼎の上より手とり足とりしてさげおろし奉る辛うじて御心地いかゞおぼさるゝと問へば息の下にて、物は少し覺ゆれど腰なん動かれぬされど子安貝をふと握り持たれば嬉しく覺ゆるなりまづ紙燭さして來此の子安貝顔見んと御ぐしもたげて御手をひろげ給へるに燕のまり置ける古糞を握り給へるなりけり是れを見たまひて、あなかひなの業やとのたまひけるよりぞ思ふに違ふことをばかひなしとは云ひける云々

(『竹取物語』)

八月十五日夜隈なき月かげ隙多かるいたや殘りなく漏り來て、見ならひ給はぬ住居のさまも珍らしきに、曉ちかくなりにけるなるべし隣の家々あやしき賤の男の聲々めさまして、あはれいと寒しや今年こそなりはひにも賴むところなく田舍の通ひ思ひかけねばいと心ぼそけれ、北どのこそ聞き給へやなど言ひかはすも聞こゆ、いと哀なるおのがじゝの營に起き出でゝそゞめき騒ぐも程なきを、女いとはづかしく思ひたり、えんだち氣色ばまん人は消えも入りぬべき住まひのさまなめりかし、されどのどかにつらきも憂きもかたはらいたきことも思ひ入れたる樣ならで我がもてなしありさまはいとあてはかにこめかしくて、又なくらうがはしき隣のよういなさを如何なる事とも聞き知りたるさまならねば、なかなか恥ぢかゝやかんよりは罪ゆるされてぞ見えける、こほ〳〵と鳴る神よりもおどろ〳〵しく踏み轟かす碓の音枕がみと覺ゆ、あな耳かしがましと之れにぞ思さる、(『源氏物語』)

こゝに至りて　文の最も雅なるものに達す。しかも『竹取』の文例の如き恐らく當時にありては俗語格の著るしきものたり

引、浮き沈むとせし程に春の夜の浪より明けて、かたきと見えしは群れ居る鷗、鬨の聲と聞こえしは浦風なりけり高松の浦風なりけり高松の朝嵐とぞなりにける、(謠曲『八島』)

そもく事ふりにたれど松島は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖に恥ぢず、東南より海を入て江の中三里浙江の潮をたゝふ七十二峯、數百の島々、欹つものは天を指し、ふすものは波にはらばふ、あるは二重にかさなり三重にたゝみて、左にわかれ右につらなる、負へるあり、抱けるあり、兒孫愛するが如し、内ふたご外ふたご、鐙島、かぶと島、牛島、叱しま、内裏島、屛風島、笆が島は、あまの小舟漕ぎつれて肴わかつ聲々に、つなでかなしむと讀みけん僞を幾し、野田の玉川、沖の石、宮城野の萩、武隈の松、猶ほ此の境に名をならべたり、しほがまの浦には鹽がまの明神あり、神前の金燈籠、文治三年泉の三郎寄進と記す、雄島が磯は地つゞきにて、雲居禪師の別室のあとに、坐禪石、瑞岩寺は相模守時頼入道の建立、當時三十二世のむかし、眞壁平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す、其の後伊達政宗再興して、七堂伽藍となれりける、法蓮寺は海岸に峙ち、老杉影をひたし、花鯨波にひゞく、松の緣こまやかに、枝葉潮風に吹たわめて、屈曲おのづからためたるが如し、其の氣色窅然として美人の顏を粧ふ、ちはや振神のむかし、大山すみのなせるわざにや、造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を盡さむ(芭蕉の『松島賦』)

此は雅文體のうち近體ともいふべきものたり。

或人のいはく、歌は世々の姿あるものなれば、その世にては其の世の姿にしたがふべきものなり、末の世にありて古の姿をまなばんとするは、誠ならぬわざなりといへり、こはおのづからなる理のやうなれど、物の善惡を辨へぬわざになむ

て、世のあはれ春吹く風に名を殘しおくれ櫻のけふ散りし身は、と吟じけるを、聞く人一しほ痛ましく、其の姿を見送りけるに、限りある命のうさ、入あひの鐘撞く頃品かはりたる道芝のほとりにして其の身はうき烟となりぬ、人みないづれの道にも烟はのがれず、殊に不便はこれにぞありける、其れはきのふ、今朝見れば塵も灰もなくて鈴の森松風ばかり殘りて、旅人も聞きつたへて只は通らず回向して其のあとを弔ひける、されば其の日の小袖郡内じまのきれぐまでも世の人拾ひ求めて末々の物語の種とぞおもひける云々(井原西鶴作『五人女』)

九重の花の昔か夕べの月か、雲井に殘る俤も、ちりほひそふる袖の露、極樂の内ならばこそ悪しけめ、此の世はかりの夢の花うつゝに散りて百とせに、一とせ足らぬ九十九髮、かゝる思ひのあればにや、羅綾の袂ひきかへて苦にあかづけるやれ衣、うきふし繁きくれ竹の、杖にすがりてよろ〳〵と立ち出で見れば逢阪の關の淸水に影うつる、老の姿は淺ましや、哀れはかなき身のゆくへうつし心と、世の人の、何とよ人を狂はする(俗謠)

雅俗折衷體はこゝに至りて漸く雅文の域に入らんとす。

信乃はこの朝涼に心いそぎのせらるれど一言半句も辭せずして出でゝ行かんはさすがにて其が臥戸に立ちよりつ御目を覺ましたまへりや只今發足仕れば御暇乞をまをす也信乃にて候さめ給へりやと聲高やかに呼さませば蟇六は夢ごゝろに行きね〳〵といらへにけり。信乃は再び聲ふり立てゝ伯母御はいまだ覺め給はずや信乃が發足の暇乞にまゐり候ふと呼び立つれば龜篠寢惚れし聲ざまにて行きねといらへけり云々(馬琴作『八犬傳』)

思ひぞ出づる壇の浦の其の船いくさ今は早閻浮にかへる生き死の海山一同に震動して舟よりは鬨の聲、陸には浪の楯、月に白むは劍のひかり、潮にうつるはかぶとの星かげ、水や空、空行くもまた雲の波の打合ひ差し違ふる船いくさの掛

でも此のやうにもう明日か今日行ふことゝは思はなんだに、はや時節が來たつて、死なねばならぬことかや（『古今集遠鏡』「遂にゆく道とはかねて聞きしかど、昨日けふとは思はざりしを」の歌の解）

これ等は今日の言文一致體の一部に合するものなり。

力彌は狂言にするやうなよわ〳〵しきものにあらず年十六歳にて身のたけ五尺何寸の大わかい衆色くつきりと黑く鼻の下に青ひげのある、でく〳〵とした前髪なり親は何時までも子供に思つて振袖をば着せては置けどさてよくお似合なさる風なり云々（三馬作『忠臣藏偏痴氣論』）

雅俗折衷體のうち最も俗文體に近きものなり。

野田の入江の水煙山の端白くほの〴〵と、あれ寺々の鐘の聲うか〳〵斯うして何時までか、とてもながらへ果へぬ身を最後急がん此方へと手に百八の魂の緒の涙を珠にくりまぜて南無阿彌陀の大長寺籔の外面のいさゝ川流れ漲る樋の上を最期處と着きにける云々（近松作『天の網島』）

冥道の旅へ寺入の師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、さいの河原で砂手本、いろはかく子をあへなくも、ちりぬる命是非もなや、あすの夜たれか添乳せん、らむ憂い目見る親心、つるぎと死出のやまけこへ、あさき夢見し心地して、跡は門火にゑひもせず、京は故郷と立別れ、鳥邊野さしてつれ歸る（竹田出雲等作『菅原傳授手習鑑』）

此の女、思ひ込みし事なれば身の窶るゝことなくて、毎日ありし昔の如く黑髮を結はせて麗はしき風情、おしや十七の春の花もちり〳〵に、杜鵑まで總鳴きに卯月のはじめすがた、最後ぞとすゝめけるに、心中更に違はず、夢まぼろしの中ぞと一念に佛國を願ひける心ざしさりとては傷はしく、手向花とて咲き後れし櫻を一もと持たせけるに、打ちながめ

雅語と俗語との別は前にも論ぜし如く、時代の上にては古語と今語との差なり。階級の上にては高尚語のと卑俗の語または文章語と、談話語、の差なり。されど高尚といひ卑俗といふことは（勿論談話語に粗野の音、訛誤の音の混じ易きは事實なりとするも）根柢の性質にあらざること、これまた嘗て言へる如くなれば、結局俗雅の別は直ちに文章と談話すなはち文と言との差に合すべく、而して其の文に專屬するものは古語古格に過ぎず、言に專屬するものは近代の言語格法に過ぎざるを見る。

要するに今日いふところの言文一致體の幾部は、文章を直ちに現時のまゝの言語に合せしめんとするものなるが故に、其の實まことの俗文體なり。これより漸次在來の文章格を混用するの度に從ひ、雅俗折衷體となり、近古文となり上世文となる。普通に雅文といふは、近古文以上の謂なり。今左に全くの俗文すなはち言文一致體より次第に雅文に上り行く例を示すべし。

善う聞いて下さりませ或人の發句に「手は突けど目は上に着く蛙かな」おもしろい發句でござります、ハイ〳〵畏りました左樣々々御もつともで御坐りますと口にはいへど、目は上に着く蛙かなで、おれが〳〵の向ふ見ず、これを放二其心一而不レ知レ求と申します、なんぼおれが〳〵で物をやりつけようとしても中々おのれが細工では出來ませぬ、斯樣に申せば、おれが軀でおれが働きおれが錢を儲けておれが物を喰ふのじや人さまの御世話にはなるまいし、おれがでなうて何うして世間が渡られるものじやと、滅多におれがを言ふ人があるものじや、之れはきつい了簡違い、御上樣の御政道がなかつたら一日もおれがでは居られぬ云々（「鳩翁道話」）

死んで行く道は誰れでも何時ぞは是非に行く道ぢやと云ふことはかね〴〵聞いて居て、よう合點して居たれども、それ

國歌にはさらに幾類かの小文體あり。一々擧げんは煩なれど長歌體、短歌體、今樣體、旋頭體、謠曲體、淨瑠璃體、長唄體、端歌體、箏曲體、發句體、新體詩體等、みな詩形を異にせるものなり。また目的によりて抒詩、田園詩、教訓詩、諷刺詩、俳諧詩等をも分かつべく、根本の性質に立ち入りて主觀詩、客觀詩、主客觀詩とやらに分かつをも得べく、泰西在來の區別法にならひて、叙事詩、(Epic)抒情詩(Lyric)劇詩(Drama)ともなすを得べし。

(參照) 英詩にてもソングス(Songs)オーヅ(Odes)エレジース(Elegies)ソンネッツ(Sonnets)等の判別なほ多し。支那には四言古詩、楚辭、賦、樂府、五言古詩、七言古詩、近體歌行、近體律詩(五言律七言律)五言排律、七言排律、五言絶句、七言絶句、六言詩、雜言詩、和韻詩、聯句詩等あり。

また『讀書作文譜』に「登自琴曲之外、其放情長言、雜而無方、曰歌。步驟馳騁、疏而不滯、曰行。兼之曰歌行。述事本末、先後有序、以抽其意者、曰引。高下短長、委曲盡情、以道其微者、曰曲。吁嗟慨嘆、悲憂深思、以伸其鬱者、曰吟。因其措辭之意、曰詞。本其命篇之意、曰篇。發歌、曰唱。條理、曰調。憤而不怒、曰怨。感而發言、曰嘆。」といへり。

第七節　言語に基づける文體

言語の特徴を國土的、時代的、階級的とするときは、國土的特徴の上に組成せらるゝ文體は、漢文體、國文體、洋文體等なるべし。此に漢文、國文、洋文といへるは、前に漢文直譯體、和文體、歐文直譯體といへると異なりて、支那、日本、歐米等の異なる國語によりて作られしものといふ義なり。次に時代的特徴たとへば古語と今語といふが如き差違と、階級的特徴すなはち上流語と下流語、女性語と男性語、文章語と談話語といふが如き差違とは、相合して雅語俗語等の別を生じ、雅こゝに文體、俗文體、雅俗折衷體、言文一致體、候文體等を成せり。

云々（下略）

誥、伯晉曰はく『字書』に云はく誥は告なりと『書』に大誥、洛誥、仲虺之誥あり周禮には誥を用ひて以て會同し衆に諭せり云々（下略）

詔、伯晉曰はく劉勰云はく古は王の言を命と稱し誓と稱せり秦天下を幷して命を改めて制と曰ひ今は詔と曰ふ是に於て詔興れりと夫れ詔は昭なり告なり古詔は溫厚の情典雅の致每に散文體中之れを見たれど六朝よりしては下は文偶儷を倘び多く四六を用ひ亦祗貴と稱したり近代は卽ち二體恒に之れを兼用す

敕、伯晉曰はく『字書』に曰はく敕は戒敕なり之をして警飭せしめて敢て廢慢せざるなり劉勰云はく戒敕、文を爲す實に詔の切なる者云々（下略）

檄、伯晉曰はく『說文』に云はく木簡を以て書と爲す長さ尺二寸用ひて以て號召とす若し急あれば卽ち鷄羽を挿みて之れを遣はす故に之れを羽檄と謂へり飛ぶことの疾きが如きを言ふなり云々其の他報答諭告及び邦州徵吏亦た檄と稱する者あり蓋し明速の義に取れるなり

露布、伯晉曰はく露布は軍中捷を奏するの詞なり詞を帛に書し諸れを漆竿の上に建つ劉勰の所謂露板封せず諸れを視聽に布く者是れなりと劉勰が移檄篇に云はく檄或は露布と稱す蓋露布の初めは告伐告捷、檄と通用し而して後始めて專ら奏捷を以てせるか云々

規、伯晉曰はく規とは其の闕失を規するを言ふ敢て越さゞらしむること木の規に就くが若きなり古は君の過を箴するを箴と曰ひ臣下自相規戒するを規と曰へり云々（下略）

戒、伯晉曰はく『字書』に云はく戒は警敕の辭なり字本と誡に作る『淮南子』に『堯誡』を載せたり曰はく戰々慄々日謹一日、人莫蹟于山、蹟于垤云々

以て支那に於ける諸文體の一斑を知るべし

問對、伯啓曰はく按ずるに問對は文人假設の詞なり名と實と皆問なる者は屈平の『天問』江淹の『邃古篇』、是れなり名は問にして實は對なる者は柳宗元の『晉問』の類是れなり云々（下略）

題、跋、書、讀　伯啓曰はく按ずるに題跋は簡編の後語なり凡そ經傳子史詩文圖書の類、前に序引あり後に後序あり盡くせりと謂ふ可し其の後覽者或は人の請求に因り或は感じて而して得るあるに因り即ち復た詞を撰して以て簡末に綴る其の名即ち四あり曰はく題曰はく跋曰はく書某、曰はく讀某、夫れ題は諦なり其の意を審に諦むるなり跋は本なり文に因りて見るなり、書は其の語を書するなり讀は讀めるに因くなり其の詞は古を考へ今を證し疑を釋し謬を訂し善を褒し惡を貶し法を立て戒を垂れ各々爲にする所ありて專ら簡勁を以て主となす故に序引と同じからず又題詞あり其の書の本原と其の文詞の佳なるものとを題號する所以なり漢の趙岐孟子の題詞を作れるが若きは其の文稍々繁、宋の朱子之れに倣ひ『小學』題詞を作り更に韻語となせり亦一體なり然して題跋は後に書し題詞は前に冠す此又其の辨のみ

引、唐以後始めて此の體あり大約　の如くして稍々簡短なり蓋し序の濫觴なり其の引と名くる義の若きは妄りに臆説し難し云々

雜著、伯啓曰はく按ずるに雜著は詞人著す所の雜文なり其の事に隨ひ名を命じ體格に落らざるを以ての故に之れを雜著と謂ふ

公移、伯啓曰はく公移は諸司相移すの詞なり其の名一ならず故に公移を以て之れを括る唐の世凡そ下上に達するに其の制、狀あり牒あり辭あり百官其の長に干むるは狀を用ひ庶人官府に呈するは辭を用ひ職官階級稍々上なるものは牒を用ひ對職なるものも亦牒を用ふ諸司自ら相質問するに至りては其の用三あり曰はく關、其の事を關通するの謂なり曰はく刺、之れを刺擧するの謂なり曰はく移、其の事を他司に移すの謂なり云々（下略）

贊、伯啓曰はく劉勰云はく贊は表なり其の情を讚表するなり云々（下略）

制、伯啓曰はく顏師古云はく天子の言一に制書と曰ふ唐宋之れを用ふ制度の命を謂ふなり其の詞宜しく庭に讀む可く皆儷語を用ふ

するより手簡小簡尺牘の別名のみ狀は書陳なり疏は言布なり啓は其の意を開陳するなり以上五者は多く親知往來問答の間に用ひらる而して書、啓、狀、疏は亦た以て進御とす書簡は多く散文を用ひ啓狀は皆儷語を用ひ疏は卽ち散文儷語通じて用ふ世俗尊者に施くに多く儷語を用ふ恭敏を表する所以なり云々

書、伯晉曰はく人臣進御の書を上書となす親友上下往來の書を書となす二端の外復た書する者あり乃ち別に議論を出だして以て書成すなり云々

箴、伯晉曰はく按ずるに說文に云はく箴は誡なりと蓋し醫は石を以て病を刺す故に諷刺する所ありて其の失を救ふ者之れを箴と謂ふは箴石に喩ふるなり云々（下略）

銘、伯晉曰はく其の體二あり曰はく警戒、曰はく祝頌云々

頌、伯晉曰はく按ずるに詩に六義あり其の六を頌と曰ふ頌は容なり盛德の形容を美にし其の成功を以て神明に告ぐるものなり（下略）

贊、伯晉曰はく按ずるに『字書』に云はく贊は稱美なり其の體二あり一に曰く雜贊、意は褒美を事とす云々二に曰く哀贊、人の歿を哀みて其の德を述べて以て之れを贊するもの是れなり三に曰はく史贊、詞褒貶を兼ぬ云々（下略）

祭文、唐彪曰はく祭文の體に韻語あり儷語あり散文ありて其の用四あり雨暘を祈禱し邪魅を驅逐し福澤を求む此の三者は辭務にして意懇なるを貴ぶ亢ぶらず浮ばざるを體を得たるものとす祭奠の辭の若きは哀切を貴ぶ其の生平の行誼を寫して其の死亡の過速なりしを哀む此の如きのみ

文、伯晉曰はく弔文は死弔ふの辭なり古は生を弔するを唁と曰ひ死を弔するを弔と曰へり或は貴に驕りて身を殞し或は憤怨して道に乖き或は志ありて時無く或は美才にして累を兼ねしに他人之れを慰め之れを惜むは幷に名づけて弔と爲せり其の祭文と稱するものあるも實は亦た弔なり云々

傳、伯眷曰はく『字書』に云はく傳は傳なり事迹を記載して以て後世に傳ふるなり漢の司馬遷史記を作りてより創めて列傳を爲くり以て一人の始終を記す（中略）其の間又史傳家傳托傳假傳の四者の分あり

碑文、劉勰云はく之れを埤碑に考ふるに門に入り碑に當たりて揖すと註に云はく古は宮室に碑あり以て日影を識し早晩を知りきと祭義に曰はく牲入碑よりも麗なりと註に云はく古は宗廟碑を立て以て牲犧を繋けり後人斷獲漸開けて以て其の功德を紀する無きに因り故に石を以て金に代へ其の上に紀して以て不朽に垂る故に碑實は銘の類、銘實は碑の文、其の序は卽ち傳、其文は卽ち銘、此れ碑の體なり云々

行狀、伯眷曰はく行狀とは死者生平の言語行事世系名字爵里壽年後裔の詳著を取りて行狀と爲す云々（下略）

墓誌銘、唐彪曰はく誌は記なり銘は名なり古の人德善功烈の世に名すべきあれば器を鑄て以し銘しぬ故に葬時に於いて其の人の世系名字爵里行治壽言卒葬月日と其の子孫の大略とを述べ石に勒して蓋を加へ壙前三尺の地に埋めて以て異時陵谷變遷の防とせり夫の末流に逮びては乃ち手を文士に假るあり以謂らく以て今を信じ後に傳ふべしと而して潤飾太だ過ぎたるもの亦た往々之あり然して正人なして筆を乘らしめば必ず肯て人に殉ふに情を以てせざるなり云々（下略）

墓碑文、墓碣文、伯眷曰はく神道碑は墓の前に樹て、死者の功業を其の上に刻す云々（中略）碣の制は方趺圓首五品以下の官に之れを用ふ云々古は碑碣と本と相通用せり後世乃ち官級の故をもて其の名を別かてとも其の實大異なきなり（下略）

墓表、伯眷曰く墓表の文體は碑碣と同じ有官無官皆用ふべし碑碣の等級限制あるが若きに非ざるなり云々

賦、伯銘曰はく賦は古詩の流なり漢より盛なるに甚し賈誼相如楊雄皆命世の才を以て俯して騷律に就けり故に情意俱に工なり盛なりと謂ふべし云々（下略）

書、簡、狀、疏、啓、伯眷曰はく書は舒なり其の言を舒布して之れを簡牘に陳するなり辭令議論の二體あり簡は略なり其の大要を言陳

みな以上の分類の何れにか入るべきものたり。

（參照）　唐彪の『讀書作文譜』に諸文體式を擧げ曰く

記、記とは記事の文也單に事を叙する者あり議論を純とする者あり中叙事にして中議論なる者あり又物に託して以て意を寓する者あり之れを着むるに序を以てし而して韻語を以て記を爲くる者あり篇末に系くるに詩歌を以てする者あり皆別體たり其の區域は某記と曰ひ或は某を記すと曰ふ今題は同じからずと雖ども而も體は未だ嘗て異ならざるなり論辯序題以て類推すべし（下略）

志、伯昝曰はく『字書』に云ふ志は記也と字も亦た誌に作くれり其の名『漢書』の十志に起こりて後人之れに因る大抵記事の作なりと

記事、伯昝曰はく記事は記志の別名にして野史流なり云々（下略）

序小序、唐彪曰はく『爾雅』に云はく其の事理を發きて次第に叙するなりと（中略）小序は其の篇章の由りて作ころ所を序す大叙に對して之れに名づけしなり（下略）

說、昝伯曰はく說は解說なり原と經史に本づきて更に佐くるに己が見を以てし縱横抑揚詳贍を以て上となすと大異なき也

原、伯昝曰はく原は其の本原を推して其の委末曲折抑揚を窮め以て其の理を明にす亦論の流別なり

議、伯昝曰はく議は經に據り理を折き時を審にし勢を度るを貴ぶ確切を以て工と爲し繁縟を以て巧となさず明敷を以て美となし深隱を以て奇となさずんば乃ち體の正を得たるなり

辨、伯昝曰はく辨は判別なり大概孟子を祖述し至當不易の理を以てして反覆曲折の詞を以て之れを發する時なり

解、伯昝曰はく『字書』に云はく解は釋なり人の疑あるに因りて之れを釋するなり辨疑釋難は論說原議辨と蓋し相通ず云々（下略）

文、伯昝曰はく凡そ篇章みな之れを文と謂ふ而して此れに獨り之を以て名づくるは蓋し文中の一體なり或は以て神に盟ひ或は以て人を譏し或は韻語となし或は散文となし或は楚詞に倣ひ或は四六となす其の體同じからず其の用亦た異なり

客觀的文體とは、思想の性質、言語の特徵によりて定着せらるゝ方面の文體なること、前に論ぜし所の如し。而して思想の性質は大體之を知的と情的とに分かち、其のうち更に目的にしたがひて細綱を擧げ得べし。實用文美文等の如きこれなり。言語の特徵といふ中には、時代語の特徵、國土語の特徵、階級語の特徵等を含む。此等のもの相作用して、雅文體となり、俗文體となり、古文體となり、今文體となる。下に之れを別論すべし。

第六節　思想に基づける文體

思想の性質を知的と情的との二大別とするときは、知を主とするものはおのづから實用的に近づき、情を主とするものは娛樂的に傾くを常とす。卽ち目的よりいふときは、知の文は實用文にして、情の文は美文なり。されど美文にして直接に知を主とすることは無きと共に實用文は往々にして情をも目的とすることあり。此に於いてか中間さらに實用的美文といふが如きものを生ず。此等の目的にしたがひて、一切の文辭は其の詞藻を統一し取捨せざるべからず。知を主とするもの實用を主とするものは、概して詞藻を用ふること少なく、情を主とするもの娛樂を主とするものは、之れを用ふること多し。隨つて美文體にありては、常に詞藻あり修飾なることが價値なれども、實用文體に取りては、却りて修飾を消したる平叙文が最もよく其の思想の目的に合すといふ點に、適合の快感を覺ゆるなり。修辭無きの修辭はこの理によれり。

さて實用文體、美文體、實用的美文體の三について更にこまかにいふときは、記錄文、說明文等は專ら實用文體に屬するものなり。詩歌、小說、戯文のたぐひは言ふまでもなく美文たり。議論文、勸誡文、慶弔文等は概して實用的美文と見るべし。何とならば、此等は一面實用を目的とし、隨つて確實の智識に訴ふるものなると共に、他面また情に訴へて、美文と同一の效果を得んとすればなり、實用文に美文の利を合せんとすればなり。其の他、記といひ、序といひ、銘といふが如きも

し玉海に頼朝廣元に委ぬるに腹心を以てす恐らくは獅子身中の虫なりとのたまひしこと先見の明ありといふべし云々（新井白石の『讀史餘論』）

之れに依つて大塔の二品親王は時の貫首にておはせしかども今は行學共に捨てはてさせ給ひて朝暮たゞ武勇の御嗜の外は他事なし御好ある故にやよりけん早業は江都が勁捷にも超えたれば七尺の屏風未だ必ずしも奔しとせず打物は子房が兵法を得給へば一卷の祕書盡されずと云ふ事なし天台座主始まつて義眞和尚よりこのかた一百餘代、未だ斯かる不思議の門主はおはしまさず後に思ひ合するにこそ東夷征伐の爲めに御身を習されける武藝の道とは知られたれ（『太平記』）

此れらは皆和に偏せず、漢に失せず、和文の格を失ばずして、しかも漢文格の長所を巧みに取り入れたるものなり。

歐文直譯體とは

彼の女は其を凡べて彼の女みづから爲しぬ。彼の女は一の召使をも有せざりき。

などいふの類にして、國文格ならば『彼れは其を凡べてみづから爲しぬ。召使とては一人もあらざりき』などあるべきなり。

（參照）英國にもサクソン體（Saxon style）ラチン體（Latine style）等の名あり。支那にては『滄浪詩話』に建安體、黄初體、正始體、太康體、元嘉體、永明體、齊梁體、南北朝體、唐初體、盛唐體、大歷體、元和體、晩唐體、宋朝體、元祐體等を數へ時の上よりしたるの詩體とせり。

第五節　客觀的文體

客觀的文體の二面――思想上知的と情的――言語上國土的、時代的、階級的

此等其の一例なり。但し漢文直譯體も既に和文を和格に譯したる以上は、純粹の漢文體にあらずして和文體の加味せるものなるは言ふまでもなけれど、是れのみにては未だ全く和文格と漢文格とを和合調理したりと言はれず。即ち漢文體にありては漢文本來の風格を存せんためには往々和文上の法規を破りて顧みず主とする所彼れにありて我れにあらざるなり。此に於いてか更に此等の調格を竝存して調和渾融せしめんとするものあり。和漢折衷體ともいふべし。其の文例下の如し。

洛に須藤健十郎といふ人あり温厚篤實の儒者なり予が東山に寓居せしころ醒が井に住みけるが門前を通行することはなくて用あるときは五條三條をまはれり遊里芝居などの道はさけて通らざりけり常に儉約を守ることを專人に敎[illegible]してみづからは木に鯛の形を彫ませ常に膳部のかたはらに置きて、一肉の美味須臾の香四に在り大丈夫何ぞ飲食に心を用ふことをせんやといへり(柳澤淇園の『雲萍雜誌』)

蟻の如くに集まりて東西にいそぎ南北に走る高きあり賤しきあり老いたるあり弱きあり行く所あり歸る家あり夕に寢ねて朝に起く、營む所何事ぞや生を貪り利を求めて止む時なし身を養ひて何事をか待つ期する所たゞ老と死とにあり其の來たること速にして念々の間にとゞまらず之れを待つ間何のたのしみかあらん惑へるものは之れをおそれず名利に溺れて先途の近きことを顧みねばなり、愚なる人はまた是れをかなしむ常住ならん事を思ひて變化の理を知らねばなり(兼好の『徒然草』)

按ずるに廣元累世王家の臣として頼朝を助け六十州をして其の掌握に歸せしめ義時を助けて永久の謀主たりこの人當時の望ありしかば時政が一幡を殺しゝ時も彼れを借りてみづからをなしたりおよそ義時が奸詐を恣にする常に彼れをかりて私を營みき、されば此の人ひとり朝家に背きしのみにあらず頼朝にそむきたり其の[illegible]これまた義時が黨なるべ

體、盧仝體、白樂天體、元白體、杜牧之體、張籍王建體、賈浪仙體、孟東野體、杜荀鶴體、東坡體、山谷體、后山體、王荊公體、邵康節體、陳簡齋體、楊誠齋體あり。また著書に因めるもの即ち選體には、柏梁臺の聯句に基づける柏梁體、徐陵が『玉臺集』に基づける玉臺體、李商隱が西崑體、韓偓が『香奩集』に基づける香奩體、梁の簡文帝等が宮體等あり。

第四節　時處より見たる文體

時代に因みて文體を分類するときは、西鶴等の流れを主とする元祿體、鎌倉、室町時代に於ける富贍にして而も一種厭世の調を帶べる中世體、日記物語類を以て代表する王朝體等あり。國土に因みて文體を分かつときは、漢文の文格を主とする漢文直譯體、日本の文格を主とする和文體、及び西洋の文格を主とせる歐文直譯體等あり。

宣命、祝詞、歌謠の類は別とするも『竹取物語』『土佐日記』以下近世學者の文に至るまで和文體の例は極めて多し。

いとわかき時なりけん國をはなれて五條あたりのふせやに隱れ住みて物まなびしてありけるを聞きつけてふるさとなる友のもとより、さてあるべきかは早く歸りきてなどいひこしける時よめる「わびて世にふるやの軒の繩すだれ朽ち果つるまでかゝるべしやは」(香川景樹)

漢文直譯體としては

之れを水と謂はんと欲すれば則ち漢女にして紛を施する鏡淸瑩たり、之れを花と謂はんと欲すれば亦た蜀人にして文を濯ふの錦燦爛たり。

予嘗て經國懷風諸篇を讀む喟然として歎じて曰はく是れあるかな何ぞ其れ寥々たるや千歲而上唯晁衡藤萬里野篁及び吾家の納言能く唐たり亦惟僅々たる晨星是れ曷ぞ日出の邦と稱すべけんや云々。

圓體、蕪村體、等特異のものあり。

馬琴體に關聯して、七五體といふものあり、此は支那に於ける六朝の四六駢儷體などと等しく、讀誦に善からしめん目的にて生じたるものなるべく、淨瑠璃謠曲などの謠物に最も多く之れを用ふれど謠曲淨瑠璃のたぐひは本と詩歌の部に屬するものと見らるべければ言はず。散文の中七五體を近世の文壇に行はれしめしは馬琴なり。其の文例

信乃は思はず嘆息し、人木石にあらざれば、さすがに情を知りつゝも、嫌忌の中に身を措く故に、口を開きて告ぐるによしなし、おん身が誠は我れ知れり、我が胸中をばおん身知るらん、許我は僅かに十六里、三日四日にはゆきゝすなるに、歸りくる日を待ち給へ云々

大體は七言句五言句〳〵とやうに調子づき居れど、或は字餘りとなり或は七七となりて必ずしも一律に縛せられず。但し馬琴の文體とても常に七五なるにはあらず、極めて調子高くして淨瑠璃中の道行と稱する一段にも相當する箇所には概して六五體を用ふれど、此は文勢の自然なるべく、其の他には七五調以上に超越したる鏘鏗の調ありて、おのづから馬琴一家の文體を成せるもの多し。彼れが文體を單に七五の單調子なるもののみとするは未だ馬琴を盡くせるものといふべからず。

支那には、四六體、八股體、演義體、傳奇體などを始めとし、文には左氏體、孟子體、莊子體、史記體、韓愈體、東坡體、語錄體等あるべく、詩には楚辭體、相如體、淵明體、太白體、少陵體、樂天體、昌黎體、東坡體、放翁體、青邱體等あるを得べし。

（參照）　嚴羽が『滄浪詩話』に詩體を數へたる中、人を以て論ずるものには、蘇李體、曹劉體、陶體、謝體、徐庾體、沈宋體、陳拾遺體、王楊盧駱體、張曲江體、少陵體、太白體、高達夫體、孟浩然體、岑嘉州體、王右丞體、韋蘇州體、韓昌黎體、柳子厚體、韋柳體、李長吉體、李商隱

土記類の外未だ殆んど一家の體を發揮する作者あらず。和歌にては人麿、赤人あれども此等また相寄りて僅かに『萬葉集』に一體を成せるに過ぎず。即ち萬葉體はこれあるも人麿赤人體は未だ獨立するの價値なきなり。

降りて平安朝に及べば、和歌にありては業平、貫之が徒ありと雖も、これまた未だ個人的感化を世に及ぼすことの大ならずして、『古今集』に古今體を成すに過ぎざること萬葉體と大差なきも、散文にありては、貫之の土佐日記體、紫式部の源氏物語體等すでに儼たる個人的文體を成して、模範を示せり。たゞ其の世に布くや、貫之紫式部の名によらず著書そのものとして體を成せるのみ。故に嚴にいふときは。これ以て未だ人物の上より名づくべきものにはあらず。其の他『枕草子』『竹取物語』『伊勢物語』等も一體の源となれるものなり。外に漢詩漢文には『文選』『白氏文集』等の影響を受けたる一種の文體、たとへば『本朝文粹』『和漢朗咏集』などに見るが如き文體を存せり。

鎌倉期に入りては、和歌に『新古今集』以下を統ぶる新古今體ともいふべきものあると共に、作家の個性漸く發揚せられ來て、最も特色あるもの、定家、實朝、西行の如きには、優に一體の模型となれるものあるに至れり。散文にては『平家物語』を中心とせる平家體を第一とす。鴨長明が『方丈記』の如きまた殆んど一體の源たり。

室町期にありては、詩歌散文の兩界にわたりて謠曲體と呼ぶべきもの明かに存す。他には『太平記』『徒然草』等も一文體として地歩を占む。

江戸時代はすなはち百花爛漫の期にして、俳諧に檀林體と正風體との對照あり。漢詩に格調體、性靈體と名づくべき風脈あり。漢學者體とも呼ぶべき漢文の幼穉なる直譯、國學者體ともいふべき、古文復興家の擬古、白石、鳩巢等の渾然たる和漢調和體、其の他俳文體、草雙紙體、讀本體、淨瑠璃體、道話體等を始めとし、人物としては近松體、西鶴體、馬琴體、桂

ありては粧飾をも用ふ唯餘りに高調子なるもの輝かしきものを避けて大膽に仰々しからんよりも寧ろ穩當なるもの正的なる者を擇ぶべし云々（下略）。更に進みて文雅體に至れば粧飾が添へ得ん限の美を領してしかも粧飾の妄用濫用より來たる瑕疵一もあることなし文雅體は文體の完全なるものと見做すを得べし云々（下略）。華麗體とは粧飾を用ひて到らぬ限なきを謂ふ而して華麗體といふに二義あり一は其の粧飾が溢るゝ如き「想像より出で來たりて想の上に固帶を托するものなり他はしばしばある如く單に詞の上の粧飾にして想像に源せざるものなり」されど斯くの如き意味にての文雅體は此の際無用なるべし眞に完全なる文體は題に應じて啻に粧飾の多寡のみならず凡ての條件を適度に具備せるものならざるべからず、特に乾燥體華麗體の間に之れを標出するの要を見ざるなり。乾燥體と華麗體との別は決して是非の價値に關するものならず。

（參照）　以上の外平明體と佶倔體、素撲體と巧緻體等の目をも立つるを得べし。されど此等は前來の三項中いづれかの複合せるもの若しくは、言語の性質などの混ぜるものにして、こゝに別項として論ずるを要せざるなり。西洋の修辭學者が數ふる文體の名目を集むれば乾燥體(Dry style)平明體(Plain style)淡泊體(Neat style)文雅體(Elegant style)華麗體(Florid style)素撲體(Simple style)巧緻體(Labored style)簡潔體(Concise style)蔓衍體(Diffuse style)雄健體(Nervous style)優柔體(Feeble style)佶倔體(Abrupt style)流暢體(Flowing style)軟柔體(Loose style)句讀體(Periodic style)俗句體(Idiomatic style)學者體(Scholastic style)論理體(Logical style)頓智體(Witty style)等あり。

第三節　人物著書より見たる文體

人物及び著書より見るときは、古來國文體を左右するの勢力を有せし文人著書決して一二のみならず。之れを數へんは本書の能くすべきならねど、其の最もいちじるしきものに就いて言はゞ、奈良朝文學にありては、散文の方面には「古事記」風

懐に、枕を疊む夢たゝむ、千里を胸にたゝみ込む、女心の强弓も男ゆゑにぞ引かれ行く、我れは故郷を出づる旅、君は故郷へ戻る旅、二葉に見せて栴檀女、小むつが諫め力にて、大明國へと思ひ立つ、心の内こそはるかなれ云々（近松作『國性爺合戰』）

此れらは華麗體の好標本にして、主意は僅かに「小むつ栴檀女の二人が初旅に大明國へ向かふ心の中こそ遙かなれ」といふにあれど修飾を用ひたる爲め一篇綺麗の妙文と成れるものなり。之れを次なる

令及び義解をかうかふれば、位田賜田及び口分田墾田の類を私田といふ、其の外は公田なり、公田を耕すは良家にして私田を耕すは奴婢とはことわりなき事なり、良家とは官人の家門によりていふ、良人の事にあらず、良人は今の世にいふ平民なり民戸に良人雜戸宮戸陵戸家人のたぐひの別あり奴婢をばみな使ふなり、良人はみな武士なるにあらずや云々（『南留部志辨』）

などの乾燥なる文體に比するときは其の差ます〳〵明かなるべし。乾燥體は多く考證家、法律家、理學家などの用ふる所たり。

學者によりては詞藻修飾を用ふるの多寡に由りて乾燥體と華麗體との間に更に平板體、淡泊體、文雅體の三階級を設け、而して文雅體を其の最好適度にあるものとせり。クワクケンボス氏の如きこれなり。其の意に曰はく「上に擧げたる五文體（乾燥、平板、淡泊、文雅、華麗）間の差別は重に之れを用ひたる粧飾の多寡に由來す。乾燥體はすべて粧飾を排斥し唯々知解に訴ふるを目的とす想像を喜ばし耳を喜ばすが如きことなし云々（下略）。平板體は之れより一級進みて啻に知解せしめんとするのみならず并せて讀者の嫌惡を避けんと努む而も未だ粧飾を以て之れを喜ばせんとせざるなり云々（下略）。次に淡泊體に

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し、しきるもたゆみ、たゆむも又しきる、雁がねの聲の砧を誘ふにやあらん、砧の音の雁がねに通ふにやあらん、あなあやし、あなあやし、そも〳〵このおとの悲しきか、住む里の寂びしきか、打つ折の憂き故か、みなあらず、聞く人の心のさびしきなり(清水濱臣の『泊々舍集』)

予夫の巴陵の勝狀を觀るに、洞庭の一湖に在り、遠山を銜み長江を呑み浩々蕩々橫に際涯なく、朝暉夕陰、氣象萬千、此れ則ち岳陽樓の大觀也前人の述備れり然らば則ち、北は巫峽に通じ南は瀟湘を極め遷客騷人多く此に會す、物を覽るの情異なる無きを得んや、若し夫れ霪雨霏々として連月開かず陰風怒號して濁浪空を排し日星曜を隱し山岳形を潛め商旅行かず檣傾き檝摧け薄暮冥々虎嘯き猿啼くに斯の樓に登れば則ち國を去り鄕を懷ひ讒を憂ひ譏を畏れ、滿目蕭然感極りて悲しきものあり云々(『岳陽樓記』譯)

此の如きは或は蔓衍に近きも尙は剛健體たるを失はざるなり。

第三項　乾燥體と華麗體

乾燥體と華麗體との別は、思想の乾燥なると華麗なるとに應ず。隨ひて兩者の外形は多く詞藻の修飾を用ふると否とによりて區別せらる。詞藻を用ひて修飾を施せるは之れを華麗體といふべく、些も修飾を施さゞるは之れを乾燥體といふべし。又は詞藻の修飾多きを華麗體といひ少なきを乾燥體といふ。

乾燥體は大抵說明敎示を主とする場合に用ひられ、華麗體は感情を主とする場合に用ひらる。是れ一は雜飾を斥け他は雜飾を專とするより來たる自然の結果なり。例へば

唐子髷には鉢摩櫛、島田髷には唐櫛と、大和唐土うちまぜて、さしも習はぬ旅立や、舟と陸とを行く道は、笈捨られず

頓して緩舒の態をなす、「諸子」といひてさて暫らく休止するもさまで急速に下句に連續せんとせざるなり。此の點より見るときは文體の柔剛と語句の配置と關係あるを知るべし。

すべて春は雨こそ長閑なれ、軒端より霞わたりていとこまやかに降れるが、衣濕ほせども降るとは見えず、軒の玉水も間遠に音して棲み捨てし蜘の巣に玉ぬく景色、庭のおものかれふの底に綠やゝ添ひ行くも柳の糸の動きもやらで露添ふも、共にいとのどかなり燈火かゝげても何となく光しめりたるに鐘の音のほのかに響き來るも、心澄みわたりぬるものぞかし云々（松平樂翁の『花月草紙』）

そもく今の世に題詠のみもはらとなりにたるは末の世のならはしにて古へにはそむくに似たれど、今にありては得もすてがたきに一つの故あり、其はいかにぞと言はんに、古へは人のことゝひも歌の詞もそのけぢめあることなくて、よろづのことわざ凡てみやびやかなれば見るもの聞くものに就けてみな歌にいふべからぬはなし、かゝれば折に觸れ事にあひてよみ出づること易かるべく、さて設けてよまん事は稀にぞありぬべき、今の世には人の物いひ里びて舌だみたる口つきのみ多ければ、歌よまんとするには先づ横なまりを正し僻めるを改むるにあらざれば爲しがたく、よろづの事わざも古へとは異になり來ぬれば、歌によみ入るべき事はた少なし、善く其のみやびやかならむを擇ぶにあらずしては爲し難し、之れをみだりに取りなさばいかでか歌とはなるべき、さるは見るもの聞くものにつけて唯によみ出てんことは難き方にて設けたる題によりなんは爲し易くておだやかなるべし、今の世の人題詠みもはら爲すことゝなりぬるは、おのづからなる勢になんありける云々（村田春海）

此等は優柔體に屬すべき文例なり。語も句も皆なだらかにして優長なるを見る。次に

て、和語を用ふること多きものは柔なり。

されば剛健とは文の格調のおのづから壯大、剛强、激越なるもの、優柔とは之れに反して優美、可憐、長閑なるものなり。「おぼつかなおぼろ／＼と我妹子か垣根も見えぬ春の夜の月」と打ち吟ずるときは、人を動かすの力は十分籠りながらも、一首の格調何處となく意と共に優なり、柔なり。優柔體とは此の點より見たるの名に外ならず。また「武士の矢なみつくらふこての上に霰たばしる那須のしの原」といへる歌の「あられたばしる」の一句に活きたるが如き其の他「撫ㇾ頂弄二盤古一推ㇾ車轉二天輪一」「巨刃磨ㇾ天揚乾坤擺礣硠」などの、莊嚴高大の音は前者の優美なるに比して剛健體といふべし。而して其の人を動かす力の强弱に至りては彼れ此れ異なる所なきなり。詮ずるに剛健體は雄放剛健の方に人を動かし優柔體は優美細柔の方に人を動かすの別と知るべし。隨つて一切の詞藻は、此の方針によりて取捨せらるべきなり。要するに剛健體は概して崇高を叙するに適し優柔體は優美を描くに適す。前者の要件は聲音の堅硬なること、强拗なること、重濁なること、調子の急促なること、句の短なること、語句の配置を逆にすること等なり。後者の要件は聲音の柔なること、平なること、淸なること、調の緩紓なること、句の長きこと、語句の配置の順なること等なり。されども此等は外部の要件たるに過ぎざれば、短句硬音に富める文を以て優美柔順の文を作り、長句柔音多き和文を以て剛健雄放の文を作ることもなきにあらず。

＊エートレーは句讀と文の柔軟との關係を論じて「句讀は文の單複に論なく文の終末まで意を切れ／＼に終結せしめず一意を支へて尾に到らしむ柔軟なる文は之れに反して句讀を借ることなく終局に達せざるも一節々々にて意味休止す」といへり。我が國にても「勉めよや諸子」といふときは「勉めよや」の句に意休せず、喩へば圓石を峻坂の中途に支へたる如き趣あり、急轉直下して下なる「諸子」の句に連續し以て意を全うせんとす。然るに配置を轉倒して「諸子勉めよや」といふ時は、文勢一

ず過度の冗長より生ずる軟弱の弊は注意力を鈍からしむ而して注意不完全なるときは縦ひ其の物自身は明晰なるも終に不完全の了解を來たすを免れざるなり。故に文を作るものは單に注意だにせば何人にも了解せらるべしといふを標準とし其れにて自ら滿足するが如きことなく幷せて如何にせば之れに注意せしめ得べきかをも考ふべし。若し心なき聽者に對し餘りに僅少なる語句中に多量の意義を含ましめ又は冗漫に失して倦怠の念を生ぜしむるが如きことあるときは注意を與ふること能はず。また解剖學者のいへる如く食物は啻に榮養品として必要なるのみならず胃を充分に働かしめんため之れを一定の度まで擴大せしむるの料として必要なり馬を養ふに穀物を用ふる外嵩を充たさんため枯草、藁のたぐひを用ふるも此の理に基づく。人心の上にも幾分か此れに似たることあり提供せられたる事柄の明瞭は極めて明瞭ながら容積の小に過ぎたるため全く之れを消化し同化するを得ざるの類之れなり。小論文にては何程明確にして理解に要すべき條件備はらざるなきものといへども尙ほ之れにより會得するを得ず然るに之れを相應に大なる書冊に書き延ばすときは却りて容易く會得することあるは每々見る所なり。要は一定時間注意を一題目に保續せしむるにあり理に疎き人は設令讀み若しくは聽く所の事柄に注意し得ることあるも之れを繼續して默想に移ることに不得手なりとす」("Elements of Rhetoric"—Whately)

第二項　剛健體と優柔體

剛健優柔の別は直ちに作家の氣象の强健を以て勝れると柔和を以て勝れるとに應ず。而して其の外言よりいへば、簡潔蔓衍の別は前にもいへる如く語句の繁簡に基すれど剛健優柔の別は主として語音の强弱短長等に職由す。漢語は人も知る如く一語一音にして極めて短促且つ强き音に富めり。和語は之れに反して一語數音且つ優柔なる性とす。今此の二國語を合して文を作らんとするに當たりては、上の差異點最も著るしく見らるべし。すなはち漢語を用ふること多きものは概して剛にし

ずき人は人ずき我れは我れずきより外はなし云々(許六の「蕎麥論」)

此の文の如きは如何樣にも緊縮せしめ得べく「それより人物山川草木鳥獸まで己が一筋にすき入つて人は人ずき我れは我れずきより外はなし」といふも可、さらに「それより人物山川草木鳥獸まで、己が一筋にすき入るの外はなし」といふも意は達すべし。

簡潔體、蔓衍體と他の剛健體、優柔體、乾燥體、華麗體、素樸體、巧緻體等との關係を案ずるに本と相融通して妨げすることなし簡潔體中にも剛健なるもの優柔なるもの素樸なるもの巧緻なるもの樣々あるべく、蔓衍體とても同樣たり。たゞ簡約なる文體の動もすれば剛健一邊に流れ、蔓衍體の毎に華麗巧緻に傾くは屢々見る所なり。簡約體と蔓衍體との別は主として語の多寡にあり。さればこれと言語の剛柔といふが如き性質によりて文體を分かつものとは一致せざることあり。和語はおほむね音長く、漢語はこれに反して極めて短促なれど、此の故をもて漢文は簡潔にして和文は蔓衍なりとは言はれず。

暮れかゝるほど清見が關を過ぐ、岩こす波の白き衣を打ち着するやうに見ゆるいとおかし

といへるは語こそ柔なれ、荒磯の所見を叙して、簡潔極まりなし。之れに反して

溢流雷の如く吼え電の如く激し駭浪暴瀧し驚波飛薄し迅洄增は澆ぎ洶湍疊々躍り巖に跡りて鼓を作す、湍瀉たり㶁濟たり瀧瀬たり潰漫たり滅漻たり滿溢たた澎湃たり潾洞たり濁[illegible]たり激[illegible]たり湃[illegible]たり[illegible]溫たり[illegible]澤たり漫滅たり瀟[illegible]たり

云々

などいへるは、文勢音調は強けれど、前者に比して冗漫なり。

（參照）　此の種の文體に對して在來の修辭家が與へし技術的方面の注意と見るべきもの、ホエートリーの說に曰く「しかのみなら

此の文を將りて秋成が『雨月物語』の

まのあたりに見奉りしは紫宸清涼の御座に朝政きこしめさせ給ふを、百の官人はかく賢き君ぞとて詔かしこみて仕へまつりし近衛の院にましても藐姑射の山の瓊の林にしめさせ給ふを、思ひきや麋鹿のかよふ跡のみ見えて詣づる人もなき深山の荆の下に神かくれ給はんとは、萬乘の君にてわたらせ給ふさへ宿世の業といふものゝ、おそろしくも添ひ奉りて罪を遁れさせ給はざりしよと世のはかなさを思ひつゞけて涙湧き出づるが如し云々

といへる一節に比ぶるときは、繁簡の別おのづから明かなるべし。勿論前者も全く蔓衍の文體なりとはいひがたく、後者はた簡潔體の模範なりとは言ひがたけれど二者を幷せ觀るときは、後者の簡潔にして前者の蔓衍なるを見るべし。

古文は概して簡潔なれど往々其の極に走りて辭足らざる粗硬の文となれるものなきにあらず。例へば『伊勢物語』に「其の里の最なまめいたる女はらから住みけり此の男垣間見てけり思ほへず古里に最はしたなくてありければ心地惑ひにけり」とあるは、一は語の今人に耳馴れざるにも由るべけれど、一は文體の簡約に過ぎたるため、到底今日より見れば辭足らざる文といふの外なきものとなれるなり。若し之れを今日の進歩したる標準により、冗漫ならずしてしかも達意に十分なる文意を引き直さば「其の里に最なまめいたる女はらから住みけり此の男其を垣間見てけり思ほへず古里に斯かる女のあらんこと最はしたなくありければ哀れと心地惑ひにけり」など言ふべし。また又後世靡浮の文には蔓衍の度を過ごして冗漫に陷れるもの多し。

それより人物山川草木鳥獸まで己が一筋にすき入ッて、外の物ずきは更に無し、雨は雨ずき風は風ずき夏は暑ずき冬は寒ずき、されば櫻に梅も咲かず鶯が郭公を鳴きたるためしなし、聖人は聖人ずき阿方は阿方ずき鬼は地獄ずき佛は極樂

語句の繁なるを厭はざるなり。簡潔と蔓衍との別は詮ずる所語句の多寡繁簡にありとす。簡潔體にありては、成し得る限り冗語を省きて、極めて約なる詞に極めて多量の意義を荷はしめんと工夫すれど、蔓衍體にありては、此の點に心を用ひず、唯意を達し情を明かにせんをのみ目的とし、此のために千言萬語を重ぬるも累とせざるなり。

例へば「吾れ人の畏れてもまた懼るべきは實に天の大命なりけり」といふの蔓衍なるを嫌はゞ、之れを約して「畏るべきは實に天命也」といふの簡潔なるに就くべく「前に某山聳え後に某嶽峙ち右は云々の峯にして左はしかく〳〵の嶺なり」など詳説するの要なき時は「四面みな山なり」の數語にても事足るべし。簡潔體は飽くまでも語簡にして意のます〳〵充實せんを主とし、蔓衍は感想を強めんために語句を敷衍し瀰漫せしむるを要す。

まのあたり見奉りし事ぞかし、淸凉紫宸の間にやすみし給ひて、百官にかしづかれさせ、後宮後房のうてなには三千の美翠のかんざしあざやかにて御まなじりにかゝらんとのみしあはせ給ひしぞかし、萬機の政を掌に握らせ給ふのみにあらず、春は花の宴を專にし秋は月の前の興つきせず侍りき、豈おもひきや今かゝるべしとは、別けてもはかなきや他國邊土の岸の荊の下に朽ちたまふべしとは、貝鐘の聲もせず、法華三昧つとむる僧一人もなき所に唯峯の松風のはげしきのみにて、鳥だにも通はぬ有樣、行奉るにそゞろに涙を落とし侍りき、始めあるものは終ありとは聞きはべりしかども、未だかゝる例をば承り侍らず、されば思をとむまじきは此の世なり、一天の君萬乘のあるじもしかの如く苦を離れましまし侍らねば、せつりもしゆだも變らず、宮も藁屋も共にはてしなきものなれば高位も願はしきにあらず、我等も幾度か彼の國王ともなり給ひけんなれども濁生卽忘して具て覺え侍らず、唯行いてとまり果つべき佛果圓滿の位のみぞゆかしく侍る兎にも角にも思ひつゞくるまゝに涙の洩れ出で侍りしかば云々（西行の「撰集抄」）

第三章　文體論

第一節　主觀的文體

主觀的文體の三面――文體の外形――人物著書――時處の別

主觀的文體とは、既に述べたる如く、作家の風格を表すものなり。これに三樣の觀方を立つるを得べし。第一は直ちに其の作家が風格發して外形となれるものを數へて體とするなり。簡約體といひ蔓衍體といふが如きはこれに外ならず。第二は其の作者のまたは著書特色が或る度まで模範となれるものなり。西鶴體といひ馬琴體といひ太平記體といふが如し。第三は作者の風格が一層廣き時代性、國民性等にあらはれたる場合なり。元祿體といひ王朝體といふが如し。以下此等を順に略說すべし。

但し既に作家の性格といふ限りは、本來全く個々にして、百人の作家あれば必ず百樣の文體あるべきこと、これまた前に論ぜるが如し。こゝにはたゞ其の類的なる點につきて、幾種かの模型を得るをもて足れりとす。

第二節　外形より見たる文體

第一項　簡潔體と蔓衍體

此はおのづから其の作家の多辯的なると寡言的なるとに配せらるゝものにして、兩者もとより是非の外たり。皆以て其の人の風格とすべし。而して是れが文章としてあらはれたるものより言へば、簡潔體とは勉めて語句を簡にし、寧ろ一辭に多意を含ましむるも、一意を強くせんために文辭を繰り返して用ふるが如きことなき文體を謂ふ。蔓衍體は乃ち之れに反して、

「言ふ」とあるべきを「言ふの外なし」「言はざるを得ず」として、語勢和かきを賢賞にするもの等あり。

（參照）　彼の上の修辭家がライトーチーズ(Liotes)と呼ぶもの、曲言法の一部に相當すべし。

詳略法とは、一想念を表出する狀態のことさらに詳密なる描寫によるものとことさらに疎略なる描寫によるものとの別なり。またこゝに詳密といふ中には主として『讀書作文譜』に「文章最忌敷衍。而文章佳處、又有在敷衍者。其理何居、曰應實發處、不能實發、謂之敷衍。地位不可實發處、虛々布置、謂之虛衍」といへるたぐひを含む。賦陳の法これなり。略言法と見るべきものには、「このあたり目に見ゆるもの皆涼し」といひて、其の景を細叙するに代ふるが如き、若しくは「喜左衞門」といふ名を「喜左」といひ「横濱」といふ名を「濱」といふが如きあり。いづれも省筆の法なり。『讀書作文譜』に「有省文省句之不同。如其他彷此、餘可類推之類、乃省文法也。舜亦以命禹、河東凶亦然之類、省句法也」といへる、亦た省筆法の例に資にすべし。

（參照）　以上の外支那の修辭論者がしば〳〵數ふる修辭法の重なるは、賓主、虛實、襯貼等なり。『讀書作文譜』によるに虛實とは「文章非實不足以闡發義理、非虛不足以摛寫神情」といふにあり。襯貼とは「凡文之有襯如佃玉之用雕鏤、綾綺之襲花錦」といひ「襯之理不一、或以目之所見襯、或以耳之所聞襯、或以經史襯、或以古人往事襯、或以對面襯、或以旁敲襯、或乘引上文襯、或預取下意襯、皆襯貼也」といふにあり。賓主とは「凡借一理一事一說形出本題正意者無非賓主也」といふにあり。此等は、要するに各別なる修辭法といふよりも、むしろ詞藻の異名、若しくは譬喩法、喩義と本義との別等に近きものなり。

反語法は其の性質の示す如く他の缺點を攻撃し嘲弄するに最も效力ある詞藻なり。蓋し自然の結果として反語法には大抵みな嘲弄の意加はるが故に之れに對する者に取りては、正面より其の瑕疵を指摘せらるゝよりも一層の痛手と感ずべし。又は攻撃せらるゝ瑕疵の反語法によりて誇張せらるゝ氣味あるため、對手をして不快の念を強からしむることあるべし、反語の效用は主として此に基く。

(參照)　反語法は英語のアイロニー(Irony)なり。之れに關する修辭學者の規則中著きものを擧ぐればヘーヴン氏の書に「(一)之をして題と場合とに適應せしむべし輕快滑稽を主とするものなるときは嚴格の文または熱情の言に連想して不折合なりとの感を起こさしむるが如きことあるべからず、眞面目にして冷罵的なるを主とするときは當然之れに反す。(二)演說の類にありては其の語調常に反語の意を示すを要す又文辭の類にありては其の本意を知らしむるだけの說明を附するかまたは句讀などに依りて讀者に本意を曉らしむるかの注意肝要なり以て讀者をして文字通りの意味と反語の意味とを取り違へざらしむべし但し立言の趣意初より此の點を含糊ならしめ又は讀者の才能を檢するにあるときは此の限にあらず。(三)斯く有力なる武器を用ふるの修練を怠るなかれされど反語を用ふるの頻繁に過ぐるは進歩したる趣味を有するものに取りては却りて不愉快なることあるべければ心すべし。」("Rhetoric"—Haven) などいへるもの、其の例なり。

第六項　曲言法、詳略法

曲言法とは語勢を緩和せんため、または語勢を強くせんため、斷言すべき所を斷言せず、直言すべき所を直言せざるの法なり。「從ふべし」といふべきを「違背せざるべし」といひ「彼れ勇なり」といふべきを「彼れ怯ならず」といふが如く直接に道破するを已めてわざと言を迂曲せしめ語勢の張れるを斂むるもの、又は「行くべし」といふべきを「行かざるべからず」といひ

馬作「浮世床」の序）

此の文はた、はじめに「されどこれにも考へたがる癖あり云々」の語あるため國學者輩の牽強附會なる穿鑿癖を嘲けるの意あらはになれるもの、即ち顯なる反語といふべし。されど其の以下の本文のみに就きて言ふときは略々完全なる反語と見るを得べく、滑稽の意もこもりて且つ文致の上に文字以外の本意すなはち諷刺の義あらはれたり。

義經はるかに見下したまひ、「三郎がすゝめし軍師五斗とは彼れが事な、いにしへ漢の韓信を高祖初めて見し時、得たる諸藝を尋ね給ふ、其の例あれば尋ねて見ん、ソレ〳〵兄弟聞て見よと仰に出しやばる錦戸太郎、「コレ〳〵五斗殿、六韜三略を暗んぜしか明白にのべ聞かされよ「何じや六韜三略、我等ずんと存ぜぬでゐすは「何じや、知らぬ、ホイ見事な軍師の、コレ然らば武藝か、「武藝か、コリャ又武士の表道具まづと、弓槍鐵砲馬乘り事、劍術、體術ひつくるめすつきりと知らぬでゐすは、「ナントきついものか、「まづ一體根が嫌ひでゐす、右の通りの仕合ゆゐ何をさせても埒明かぬ、兎角好きなはコレ〳〵れこさじやと、又た引かゝへ呑む酒を、手に汗握る泉三郎、胸を痛むる許りなり「中略」錦戸兄弟笑顏に入り「あのやうなごくどうを軍師じやの何のと目利なされたお方が見事、やう合點の行くやうに誰れかあるあの醉どれ叩き出してお目にかけよ云々（「景竹越前少掾作「義經腰越狀」）

ある俳諧師無筆無學にて付合する人あり、そなたは如何なる事が種となつて此の作の出る事と尋ねしに、我れ拔けまいりいたせし時伊勢の望一とひとつの紙帳に寢て其れよりおのづから身が俳諧になつたといふ、各々をかしく、さては違ひの間は海終程の違ひなり、宗祇と同じ蚊帳に寢た人連歌とすれば望一が同じ紙帳に寢て俳諧せらるゝこと是れ奇特なり、迚もの事に望一同じ癖を病み給はゞ座頭になり給はんものを目が見えて殘念と笑ひける云々（「西鶴名殘之友」）

侍らしく聞ゆれども夫れは血臭ひ時節の事にて、かく治まれる時世にそんなけびらいがあるや否や、とんだ目にあふ故に今時の浪人は紙子羽織に破編笠、御子孫も御繁昌猶ほいつまでか活き延るほど耻の上ぬり、但し浪人のみにあらず、春さきの華臙魚と目出度御代の侍は段々直が下り、工農商の三民に養はれる素餐の様に思はれまさかの時は侍でなければ世は治まらず、日本は小國でも唐高麗から指もさゝせぬは皆武德なりといふことを思ひ出す者もなきは是ぞ誠に太平の世の御恩澤、井を鑿りて飮み、耕して食ふ、提燈かりた禮はいへども月日に禮いはざるに等し云々）平賀鳩溪作『放屁論後編』）

此れらは諷刺の意露に過ぎて反語法の上乘なるものといひ難し。但し修辭家によりては反語法を分かちて隱なるもの即ち諷刺の意の言語の表にあらはれざるものと、顯なるもの即ち明らさまに諷刺の語を挾めるものとの二となす。而して隱なる反語法にありては、其の諷刺の本意たゞ文の句調、文體等によりては又は音聲の抑揚、說者の態度等によりて曉らるべきのみ。今若し上の文例を此の區別にしたがひて分類するときは寧ろ顯なる反語と云ふべきなり。

されどこれにも考へたがる癖ありて國學大人示していへらく、かみいどんとは髮結殿の訛れるにて、これをしもひつじと呼べるを羊のかみをすくといふなり稱へ來たるとおぼえたるは、例の漢籍に泥める說か、今按ずるに、ひは日なり、日髮に結ふに據る物ぞ、つは月の下略こは月究に留めおく故なり、偖又じとはこれ如何、其の時先生些も騷がず、チト假字は違へども月髮月究の客多くて朝から晩まで立續けに結うて居る故、痔のない者も痔持になる、これによりてひつぢなるべし、又一說に業のしの字といへり、油だらけになるを思へば、穢れるは是れ濁るなり、其の濁りをヒヨトと打てじの字なんぞはどでごんすと、意味深長なるお考へ、御一人前三十二孔、各々一癖ある所が浮世の人情云々（式亭三

の多少によりて、往々種々の形を成すことあり。之れに由りて反語法を三類に分かつときは、第一類、上に擧けたる文辭上と腹中と意義の異なる點を主とせるもの、此は修辭家により或は反語と別と見做す。いはゆる暗述法之れなり。「世の中に人の來ることうるさけれとはいひながらお前ではなし」などいふときは、あながち好笑の意にあらず、また嘲笑の意のみとも見えず、其の本意はむしろ餘事にことよせて諷し勸むる方にあるべし。第二類、上の三要件中語句滑稽的の所あるを主とせるもの、卽ち戲謔、勸告等よりもむしろおもしろく可笑しきを旨とせる反語法。第三類、上の三件中の最要部たる他の不條理を指摘し嘲弄することを主とせるもの、此は反語法の本領といふべきものにして、之れに他の二件を具備するに及びて始めて圓滿なる反語法といふを得べし。換言すれば他の不條理を全く別なる語氣を以て可笑しく嘲謔するが反語の全本領なり。

次に反語の文例を示すべし

其の上甲斐信濃の源氏等案内は知りたる、富士の裾より搦手にや廻り候はんすらん、かやうに申せば大將軍の御心を憶させ參らせんとて申すとや思し召され候はん、其の儀にては候はず、但し軍は勢の多少に依り候はず大將軍の謀によるとこそ申し傳へて候へと申しければ、是れを聞く兵共皆震ひわなゝきあへりけり云々（「平家物語」）

此は第一類の反語法に屬すべきものにて齋藤實盛が當時此の言をなせしは、敵の强盛なるさまを說き示して、暗に大將軍惟盛を諷せんの意なりしものと見るべし。卽ち「斯やうに申せば大將軍の御心を憶させ參らせんとて申すとや思し召され候はん、其の儀にては候はず」といへる所反對の意味を含みて、反語法の要件にかなへるものなり。

世の隷に剪逕するも浪人の習ひと御所櫻の伊勢三郎、風俗太平記の日本左右衞門なんど淨瑠璃本にある時はさも手强よ

みゆる三日月のあなしらぐ〱し人のいつはり」「これは〱とばかり花の吉野山」など、又は句尾に「かな」といふ嘆詞を附したるもの例へば「冬來ては案山子にとまる鳥かな」「梅が香にのつと日の出る山路かな」「負うた子に髮なぶらるゝ暑さかな」「忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命のをしくもあるかな」「皆人のしり顏にして知らぬかな必ず死ぬるならひありとは」等枚擧に遑あらず。

（參照）　詠嘆法は英語のエキスクラメーション(Exclamation)なり。之れに關するベイン氏の分類に曰く「(一)嘆詞の目的が或る激切なる情を表白するにあるもの(下略)。(二)意味ある語を嘆詞として用ふることあり即ち常の感情の原因たる事物をあらはす語句を全文章に組み立てずして用ふるなり(下略)。(三)感情を特標するの嘆詞と共に其目的物を指示するの恰好なることあり(下略)。(四)語句を省略してわざと文法上の完全を缺き以て感嘆の結果を收むるもの(下略)。(五)「如何に」「何ぜ」等の語を用ひ文の組織を轉倒し驚愕、嘆稱の意をあらはすもの(下略)」。("English Composition and Rhetoric"—Bain)

第五項　反語法

文字の上にあらはれたる意義と裡面に潛める意義と異なるが如き句法を反語法といふ。陽に譽めて陰に毀り、又は陽に說明して陰に勸說する等みな是れなり。例へば天下の治明かならざる代に處して「斯かる昇天文明の盛代に生れて百年を春臺に送り候は人の常なるに」などいふは、其のうらに全く反對の意味すなはち世を罵り武士を罵るこゝろの含まれたるものなるの類なり。

反語を成すには、第一文辭上の意義と言者の眞意と相違すること、第二其の言ひざまの可笑味あること第三他の不條理を指摘するを主とすることの三件を要す、此の三者具足するときは完全なる嘲弄的反語となるべし。されど此の三要素の分量

今はの時の人知らぬ心の中さへ思ひやりぬ、現の境も千々の思ひを碎き娘の生ひさき其の子の母の行末、いかに覺束なく見果つらん、あゝ悲哉、松本山の僧が身まかりぬる時は此の秋我れに誄せらるべしとはよも思ひよるまじ、今我れ辭を作りて彼れを痛む、此の次必ず我が番にあたらむも又哀なるべし、あゝ悲哉や(森田許六の「去來が誄」)

よそのつらねも我が命も一よぎりなる憂きふしや、憂き身の果ては主觀のばちにかゝりし三味線の廿二三の糸きれて、殘る一期もしばしぞや、いかに今年のから露も哀れ袂のさみだれに、心は今も皐月闇、木の下闇にどまぐれて、覺えし道も幾度か同じ所にまひ戻る、跡にたづぬる願立てに神や佛の控へ綱、延ばす命と知らばこそ、あゝ是れ又冗の道なるわ、是れも今來た道ぞかし、此の世からさへ踏み迷ふ、六道の辻覺束な、迷ふまいぞや、迷ふなと泣くぞ迷ひの種なりし云々(近松作「心中刃は氷の朔日」)

世界の人のいひけるは、大伴の大納言は龍の玉や取りておはしたる、否さもあらず、御眼二つに李のやうなる玉をぞ添へていましたるといひければ、あな堪へがたといひけるよりぞ、世に合はぬ事をばあなたへがたとはいひはじめける云云(「竹取物語」)

なつかしやいにしへを忍ぶににほふわが袖、濡れてほすこすの戸に、あわれなれしつばくらめ(箏の歌)

あらはづかしの松蟲の聲や、聲きくたびにおりん戀しや(俗歌)

げに〱健氣なる事を仰せ候ふ物かな、所詮何と仰せ候とも一まづ落し申うするにて候ふや何と申すぞ、又御使の立ちたると申すか、あら笑止や、さて何と仕り候ふべき、げにや何事も報ありける憂き世かな云々(謠曲「仲光」)

此の他和歌發句の類に咏嘆句法多し。「契りおきしさせもが露を命にてあはれことしの秋もいぬめり」「山の端にくるれば

すなはち是れなり。咏嘆法の造句は種々あれど、句頭に噫、嗚呼等の感嘆詞を冠するもの、句尾に「かな」「か」「や」「よ」等の語を附するものなど其の重なるものなるべし。又語句の配置を轉倒せしめて咏嘆の意をあらはすことあるは倒裝法の理に連なれるなり。

咏嘆法の文例多し。

大梵王宮の深禪定の樂おもへば程なし、況や電光朝露の下界の命に於てをや、忉利天の億千歳只夢の如し、三十九年を過させ給ひけんも僅かに一時の間なり、誰れか嘗めたりし不老不死の藥誰れか保ちたりけん東父西母が命、秦の始皇の驕奢を極め給ひしも終には驪山の塚に埋もれ、漢の武帝の命を惜み給ひけんも空しく杜陵の苔に朽ちにき、生あるものは必ず滅す、釋尊未だ栴檀の烟を免れ給はず、樂盡きて悲來たる、天人猶ほ五衰の日にあへりとこそ承れ、されば佛は我心空自罪福無種觀じん無心豐富重寶とて善も惡も空なりと觀ずるが正しく佛の御心に相叶ふ事にて候なり、如何なれば彌陀如來は五劫が間思惟して起こしがたき願を發しましますに、如何なる我等なれば億々萬劫が間生死に臨會して寶の山に入りて手を空しくせん事、怨の中の怨、愚なるが中の口惜しきことにては候はずや云々(『平家物語』)

悲しきかなや無常の春の風忽に花の御姿を散らし、痛ましきかなぶんだんの荒き浪玉體を沈め奉る云々(同上)

あらはづかしやさらばとて羽衣をかへし與ふれば、少女は衣を着しつゝ霓裳羽衣の曲をなし天の羽衣風に和し雨にうるほふ花の袖一曲をかなて舞ふとかや東遊の駿河舞、此のときや初めなるらん(謠曲『羽衣』)

物語せし末を聞くにさてこそ我が事申し出し、さても〳〵茂右衛門めは幷なき美人を盜み、をしからぬ命死んでも果報といへばいかにも〳〵一生のおもひ出といふもあり云々(西鶴作『五人女』)

何と心得居る、若き主人を預かること器財の類の輕きにあらず、往古周公旦成王を輔佐し給ひ、清和の朝に良房の忠人臣たるもの丶鏡たり、義綱の心亂れ行跡正しからざるは預人の罪誰にか讓らん、返答いかに直勝と、水を流せる詞の楷板、暗きを照す明察はけに日本のかためなり云々(松貫四等作『伽羅先代萩』)

設疑法は後に擧ぐる婉曲法と相接す。蓋し設疑法の他の一利は、之れによりて自家の疑を表するため、我が臆斷を人に強ゐずといふ謙遜の意を寓し得ておのづから言辭を緩和すればなり。またわが國の語法にては設疑法と咏嘆法とも其の形相似たる點ありて混じ易し。例へば「舜何人ぞや我れ何人ぞや」といふは設疑法なれど「我れ豈舜の何人たるを知らざらんや」といふときは咏嘆法なり。二句共に「や」の字を以て終れども、前の「や」は疑問詞にして後の「や」は反撥して直接に感嘆を意味する詞なるの差別あり。勿論西洋語にも感嘆の意を見すため語の按排を轉倒して疑問のときと同じくするものなきにあらねど、我が國の場合とひとしなみに見るべからず。

設疑法は極めて自然なる詞藻の一にして、我々が日常の談話にも、少しく力を籠めたる箇所には知らず識らず用ふるを例とす。「斯く〳〵の道理ならずや然にあらずや」などいふ語法は人の善く談話中に挾む所にしてみな設疑の法則にかなへるものなり。

(參照)　設疑法は英語のインタ－ロゲ－ション(Interrogation)なり。

第四項　咏嘆法

文に勢力あらしめんため又は我が情の極めて激切なりしため、語句の間に咏嘆の聲を漏らすことあり、之れを咏嘆法といふ。「必ず四年ありて人其れ流離せん嗚呼噫々時か命か古より斯くの如し之れを悔むる奈何せん四患に在り」などいふの類

此にあり。又一には我より云々なりと說明せず、たゞ聽者に說明の材料を與へ、聽者をしてみづから之れが解を作らしめ以て其の感を一段深切ならしむるの效あり。其の他眞に不明晰なる事柄を半信半疑のまゝ揭示する場合に設疑句法を用ふることあり。此は固より立言の主旨に於いて多少上の設疑法と異なる所あれど、兎に角其の一種と見て可なるべし。例へば

汝今吾有なるによりて汝が無を守るとも、吾又汝が無によりて吾有を守るところを知らず、そも〳〵なんぢは吾影なるか又人の影なるか（柳澤淇園の『雲萍雜誌』）など

いへるも、全く不審なるが故に疑を揭げて知者の解を待つといふ數學問題等と同性質なるにあらずして、只設疑法によりて語尾に餘韻を籠めたるものゝみ。

設疑の文例

主客の座定まりて其のひきつけの書翰を問へば、頭陀答へて否其の書翰は候はず翁はいまだ知らざるものゝ、只名を慕ふて訪ひまつるに、相識の紹介なければ面し給はずといはるゝにより、且つ是れを僞るのみといふを主人は聞あへず、丌は亦調戲に過たるならずや、浮居家の五戒に妄語を一戒とす、和僧は旣に破戒の罪あり、吾何をか聞何をかいはん、已みね〳〵と窘めて立たまくするを頭陀推禁めて云々（馬琴が『八犬傳回外剩筆』）

夫三尺童子至無知也、指犬豕而使之拜則怫然怒、今醜虜則犬豕也、堂々天朝率而拜犬豕、曾童孺之所羞、而陛下忍爲之邪、云々（胡澹菴の『上高宗封事』）

ヤア詞多し貝川直勝、汝富樓那の辯をふるひ役人共を云ひかすめんと思ふや、譬へば其の方、主人の家に大切なる重寶有て、汝が方へ預る時、盜賊の爲に奪ひ取られ、イヤ某は存じ申さず盜賊の業なりと油斷の言譯立つべきか、サ其の方

子貢曰、貧而無レ諂、富而無レ驕何如。子曰、可也、未レ若二貧而樂、富而好一レ禮者上也。子貢曰、詩云、如レ切如レ磋、如レ琢如レ磨、其斯之謂與。子曰、賜也始可二與言一レ詩已矣、告二諸往一而知レ來者（論語）

罔兩問レ景曰、曩子行、今子止、曩子坐、今子起、何其無二特操一與。景曰、吾有レ待而然者邪、吾所レ待又有レ待而然者邪、惡識レ所二以然一、惡識レ所三以不二然、昔者、莊周夢爲二蝴蝶一、栩々然蝴蝶也、自喩二適志一與、不レ知レ周也、俄而覺則蘧々然周也、不レ知周之夢爲二蝴蝶一與、蝴蝶之夢爲レ周與、周與二蝴蝶一則必有レ分矣、此之謂二物化一（莊子）

まだ其の上にこれ此の一通、鶴が岡の神木の本に埋めて有つた釘付の箱、内に込めたる願書の文言、若君を調伏し我が子を出世させたい望、願主松ヶ枝節之助、乳母政岡とあり〱と書いたが慥な證據、サ何と遁ひはあるまいがの。イヤイヤそれも眞赤な似せ筆、さら〱此の身に覺はない、無實をいひかけ跡で後悔なさるゝな。ムゝこれほど慥な證據が出てもまだ潔白なあらがひだて、シテ又覺ないといふサ證據があるかな。サアそれはサア〱何と（松貫四等作「伽羅先代萩」）

（参照）問答法とは英語のダイアローグ(Dialogue)に相當するものなり。

第三項　設疑法

設疑とはわざと疑問を提起して答を讀者の心に求むるの謂なり。而して其の疑問を提起するの意は、固より我れの解し得ざるものに就きて教を受けんとするにあらず、我れの豫め期したる解を讀者の心におのづと生ぜしめんとするにあり。故に設疑法の側面として妙なるを得るは、之れによりて特別の注意を惹くに由る。即ち先づ問を設くるときは之れを聽くものおのづから解答を求めらるゝが如き心地して空に聞き流すを得ず、注意してこれに對するに至るべし。設疑法の基づく所

の場合に於けるが如きもの、或は空想上の人物を單に烏有先生、空々道人等の記號により點出して對問せしむるもの、或は歷史上の人物を假りて問答せしむるもの、或は現代の人物を假りて問答せしむるもの等あり。

問答法の文例は極めて多し蓋し小說、物語、戲曲、謠曲等すべて問答體の長篇と見るを得べければなり。

如何に誰れかある。御前に候ふ。あの山陰にあたつて山影の見え候ふは如何なる者ぞ名を尋ねて來たり候へ。畏つて候ふ。名を尋ねて候へはやごとなき上臈の、幕うちまはし屛風をたて酒宴なかばと見えて候ふほどに、懇にたづねて候へば、名をば申さず只さる御方とばかり申し候ふ。あらふしぎや此のあたりにさやうの人は思ひもよらず候ふ、よし誰れにてもあれ上臈の道のほとりの紅葉狩、ことさら酒宴の半ならばかた〴〵乘りうち叶ふまじ。と馬より下りて沓をぬぎ路をへだてゝ山陰の岩のかけを過ぎ給ふ心づかひぞたぐひなき(謠曲『紅葉狩』)

抑々夕顏の玉樓金殿にさがりたる由緒を知らず、たゞ喰物とぼしき五條あたりに徘徊して、貧乏神の神木はこれなるべし。隱士が曰はく、汝宇治の物語を知らずや。答へて曰はく、其の拾遺の瓢も咎なき隣人が一命をたてり、これ全く瓢の罪といはんむ、かゝる目出度ひさごに何の罪かあらん、かれ佛緣深きゆゑ空也上人には携へられ鉢たゝきの祖師とはなりける、かのさゞ波やかたゝの海士か海老すくひも佛緣の內か、とぞいひける。隱士大きに打腹立て、汝か言ひ分みなみなの理窟の論なり、曾て風雅を知らず、古人生前一瓢の樂は身後の金よりはましたりといへり。草苅が云はく、其の樂といへば上戶の情也、瓢のかたちをいはむ、腹便々と肥えふとりて口の狹きは何ぞや、狹くて餠の入らざるは下戶のなげきなりと、大笑して歌つて云はく、滄海の水すめらばつけて泳ぐべし、濁らば鯰を押ゆべしといひて、去つて共に物いはず(許六が『瓢辭』)

（並既）警句法は英語のエピグラム（Epigram）に相當す。

第二項　問答法

二人以上の人物を假りて互に問答應對せしむるの辭法を問答法と名づく。「いかに申し候ふ、何とやらん似合はぬ所望にて候へども、いにしへ此の所は源平の合戰のちまたと承りて候ふ、よもすがら語つて御聞かせ候へ。やすき間の事、かたつて聞かせ申し候ふべし、いで其の頃は元曆元年三月十八日の事なりしに、平家は海のおもて一町ばかりに舟を浮べ、源氏は此の汀にうち出で給ふ」の如き是れなり。問答法は種々に分類するを得べし先づ之れを大別するときは言者自身と聽者との間に於ける問答及び言者以外の人々相互の間に於ける問答の二となる。例へば蘇東坡が『後赤壁賦』に「已而歎曰、有レ客無レ酒、有レ酒無レ肴、月白風淸如二此良夜何一。客曰、今者薄暮、擧レ網得レ魚、巨口細鱗、狀似二松江之鱸一。顧安所レ得レ酒乎。歸而謀二諸婦一。婦曰、我有二斗酒一、藏レ之久矣、以待二子不時之需一。於レ是携二酒與一レ魚復遊二於赤壁之下一云々」といへるが如きは說者すなはち蘇東坡自らと客もしくは婦との間に於ける問答體なり。「ナント北八、あいつらにからかふが面倒だからいつそのこと問屋へかゝつて越さう、手めへの脇指を貸しや。なぜどうする。侍になるは。と北八が脇指を取つてさし、己れが脇指のひきはだを後の方へばゝ長くして大小差したやうに見せかけて。ナント出來合の御侍よく似合たらう此の風呂敷包を手前一所に持て供になつて來や。こいつは大笑ひだハ、、、」などの類は說者以外の人物を舞臺に登して之れをして對話問答せしむるものなり。以上は問答の人物の種類につきて分かちたるものなれど更に問答の文體によりては物語體に說者が各人物に代りて且つ敍し且つ問答するもの、客觀的に各人物をして相互に對話せしめ說者の口氣を其の間に挾まざるもの等あり。問答中の人物の性質にしたがひては或は無生物を活かして問答に參せしむるもの、或は空想上の人物を實らしく裝ひて問答せしむること小說など

警句法の文例下の如し

ことわりなきがことわりの誠なり、ことわりのこと行はるゝ物ならば何のかたきこともあらじを、さも知らで人とあらそひ政をそしりなどしてたかぶるものは、ことはりの誠を知らぬとやいふらむ(松平樂翁の『花月草紙』)

吾翁色と義の道をしらしめ給へる詞にも『色をおもふ事はうどんを見るがごとく義を守ることは唐がらしの辛きに類せよ』と云々(森川許六が『飲食欲色箴』)

子曰、由、誨㆓女知㆒之乎、知ㇾ之爲ㇾ知ㇾ之、不ㇾ知爲ㇾ不ㇾ知、是知也、(『論語』)

此の他發句川柳等には警句法といはるべきもの多し。夫の秀句奇句などいふは大抵此の種に屬せり。

盗人をとらへて見れば我が子なり(山崎宗鑑)

大晦日定めなき世の定めかな(井原西鶴)

いなづまに悟らぬ人の貴さよ(松尾芭蕉)

我が事と泥鰌の逃げし根芹かな(僧丈草)

または「居候三杯目にはそつと出し」「町内で知らぬは亭主ばかりなり」等の如きすなはち是れなり、蓋し情よりもむしろ理に於いて優れる秀句の警語めきたるものとなるは自然の勢なるべし。また格言ことわざなどにも警語多し此は一方より見るときは警語なりしがために傳唱せられて格言となり諺となれるものといふを得べし。「千羊の革は一狐の腋にしかず」「鷄口となるも牛尾となる勿れ」「鷄を割くになんぞ牛刀を用ひん」「論語よみの論語しらず」「世の中は目くら千人目あき千人」等擧げつくすべくもあらず。

る妙味を有する所以に外ならず。また「雪ほど黑いものはなし」「盲者の垣のぞき」などいふは言すでに尋常ならず、一見人をして矛盾なりとの感を起こさしむ。されど深く味ふときは、其の裡に動かすべからざる眞理を含み、人をして實にもとうなづかしむるなり。要するに警句法の妙味は如何にして斯く簡單なる語句中に斯くの多大の理を含蓄せしめ得るかと、且つ驚き且つ歎稱する所にあり。又は全く撞着と見え無意味と見ゆる語句中に意外にも無量の眞理潛めるを發見する所にあり。思想表出の態度を奇にして非凡にするを本意とす。

警句法は分かちて四とするを得べし。一は言簡にして意の深長なるものなり「上の好む所下之れより甚しきものあり」などいふが如し。前にもいへる如く此等の言必ずしも奇ならずといへども、簡單の語句を以て能く世間の眞相を發揮したる所に妙味あり。二は言に矛盾ありてしかも意の順なるものなり。「善く泳ぐ者は溺る」といふときは何人も善く泳ぐことゝ溺るゝことの相反するものなるを知るが故に、一見矛盾の言となす。されど仔細に考ふるときは決して然らず。「善く泳ぐものは溺る」とは人の己れの長ずる所に馴れて却りて輕躁身を誤る事多き由を道破せるの名言たるを見出だすに至らん。三は言語の表にては極めて平明なる事柄を繰り返せるが如くなるも、裡面に多量の意義の籠れるものなり。「雪のふる日は寒くこそあれ花のふる日は浮かれこそすれ」などいふときは表面たゞ雪に寒く花に浮かるゝ明々白々の理を言ひたるが如くなれど、此のうちに「如何なる大悟の人といへども世にある限りは差別界の欲は到底禁じ難し」との眞理を含むが故に妙なるを得。四は表面上にては全く無關係なる二事物を相關せしめ、人をして一見無意味の言と思はしめながら、其の他面に眞理を含蓄するものなり「夕すゞみよくぞ男に生れける」といふときは夕涼と男子に生れたることゝ何の因緣もなきやうなれど、一歩進みて此の句の作者が當時の感懷を想ひ來たれば、其の間おのづから融通する所あるを認むべし。

矣。巧人一轉灣、便反別是一番境界、可以生出許多議論、理境無窮。若欲更進未嘗不可再轉也」といひ「折則有廻環反復之致焉。從東而折西或又從西折東也」といへるもの、要するに言語を他に求めて、別の方面より論を伸べんとするに外ならず。「夫れ」「そも〳〵」「遮莫」等の語を用ひて轉折法を助くるは普通の例なり。また夫の頓挫法といふが如きものも「用一二語頓之以作起勢、或用一二語挫之以作止勢、而後可施開拓轉折之意」といふの意に於いては、轉折法に合するを得べし。

抑揚法とは同一事物に對し、相反せる兩様の情を刺戟して、其の一より他に移る所に趣を生ずるなり。其の情の推移する狀態によりて或は抑揚平均せりとの快感を伴ひ、或は抑へられしがために揚げらるゝの情一層強き對照の結果を伴ふ。『讀書作文譜』に「凡文欲發揚先以數語束抑、令其氣收斂、筆情屈曲、故謂之抑。抑後隨以數語振發、乃謂之揚、使文章有氣有勢、光焰迫人」といへるもの歸するところは此にあり。外に開闔法といふものあり。『開闔者乃於對待諸法中而兼抑揚之致、或兼反正之致者是也。如賓主、擒縱、虛實、淺深諸法、皆對待者也、』といひて、結局賓主、虛實等に抑揚法などの加はれるものといふに歸す。されど其の賓主といひ虛實といふものゝ性質さだかならざるは後に言ふところの如し。隨つて開闔といふが如きも抑揚法の一部と見て不可なし。

第十節　表出法

第一項　警句法

警句法とは語簡にして意味の深長なるもの、又は語奇にして意順なるものなり。「提燈につり鐘」「水淸ければ魚住まず」などいへるは言必ずしも奇なり逆なりといふにあらざるも、提燈と鐘との釣り合はざる所以、餘りに明白なる事物の却りて不利なる所以等が萬事に通ずるの眞理にして、此の眞理を僅々一二句の警喩を假りて言ひあらはせる所、やがて警句の警句た

聞くやいかに上の空なる風だにもまつに音する習ひありとは（宮内卿）

拂ひかねさこそは露のしげからめ宿るか月の袖のせばきに（雅經）

さらでもさがしき岨づたひを道しるべする山人の、笠は重し呉山の雪、靴は香し楚地の花、房上の笠には無影の月をかたぶけ擔頭の柴には不香の花を手折りつゝ歸る姿や山人の笠も薪もうづもれて、雪こそくだれ谷の道をたどり〳〵歸り來て柴の庵に著きにけり（謠曲『葛城』）

其の他調子高き文章若しくは一般の詩歌などに此の例多し、幾多の章を相寄りて成れる長文章にても、論理思想の普通の順序を逆にして、結論を冒頭に揭ぐるが如きは、倒裝法の理に依れるなり。また日本の文は常に一章の結尾に動詞を要する習ひなれど、倒裝法の結果としては、所謂名詞止、接續詞止、テニハ止等の變態を生ず。上に引ける和歌の場合の如きを始めとし「美なるかな山河」「行かん心もとなければ」など其の例なり。

第五項　照應法、轉折法、抑揚法

照應法とは、一段の文中間斷を隔てゝ意義の直接なる脈絡を點示する法なり。例へば韓退之が「伯夷頌」に於いて、始めに士の特立獨行といふことを論じ、中間他事に筆を轉じて而して後更に「予故曰若伯夷者特立獨行窮天地亘萬世而不顧者也」といひ、遙に冒頭と相照應するが如きこれなり。支那の修辭者論が重きを置ける辭法の一はこれにして、其の他草蛇灰線といひ、伏線の法といふが如きものも歸するところは照應法の原理にあり。而して照應法の基づくところは、思想が統同點を認めて滑かに暢達するにあれば、所謂形式美の理に合するものなるや論なし。

轉折法とは、文中思想の脈絡を一轉するの法なり。唐彪が「讀書作文譜」に「文章說到此理已盡、似難再說。拙筆到此技窮

の如きにいたりては、語こそさま〴〵なれど、意は一に歸して、反覆たるの條件を具へたり。其の他「大抵大概なみや通例の氣くばり氣兼あつかひであらうか」「ほんに〳〵凡夫凡人文珠でも叶はぬこと」などいへるは純然たる反覆なれど「子は子なりけりうつばりの契をかへすつばくらめ、歸るや嵐戻るや時雨亂れ〳〵て行く空の云々」「さはらで通る弓矢の情、助くるも道、殺すも道、さもあらばあれ選れ有王、お暇申すと禮義は身の上、殘る恨は主君の上、拳を握り牙を噛み、しどろ足にてかへる波、內には義理を立波の、音に聞こえし能登殿の弓ぜい勇力、學ばずして學問力も有王丸、ひかれて名をこそ傳へけれ」の如きは皆句拍子なり。總じて疊音法は口調の上の反覆ともいふべし。

又我が國には疊字とも名づくべき漢語傳來の一種の熟語法あり「堂々」「冥々」「赫々」等の如き是れなり。和語にては「あらあらしく」「なが〳〵」「おひ〳〵」など皆同句法たり、短き反覆ともいふべし。

（參照）反覆法は英の修辭書にリペチション Repetition といふものなり。

第四項　倒裝法

此は前に修辭上の消極條件として數へたる想念の論理的順序を修辭上の必要によりて轉倒するの辭法なり。例へば「乾元大いなる哉」といふべきを「大いなるかな乾元」といふが如し。此は修辭上頗る廣く用ひられ且つ極めて必要のものたり、其の理は緖論に述べし所に明かなれど、なほ其の順序の倒にして讀者の注意を惹き易きことなど、形式美の原理とつらなりてます〳〵詞の情味を助く。

武家繁昌の御威勢は我等が口にかけまくも、勿體波風治まりし、お江戸は貴賤群衆の中、御同朋をつれらるゝは、外に數なき類ひなきお家の是れがしるしなり。（近松作『薩摩歌』三）

ば御園生の〳〵あやめの郡の大領のまな女といへむすめとこそ稱はめ

などの催馬樂歌の如き是れなり。近世の俗歌には

山がらす誰れを怨みて墨染に、淺き契にあひ馴れ染めてなか〳〵今はなか〳〵に馴れ〳〵なすび背戸やのなすび、ならねば娵の、これの嫁の名の立つにこれの

わが戀は葛のうら葉のきり〳〵す、うらみては泣きうらみては泣く

向ふ通るは清十郎じやないか、笠がよう似た菅がさが

の如き其の一なり。

等あり。漢詩にては三百篇中の

山有樞、隰有楡、子有衣裳、弗曳弗婁、子有車馬、弗馳弗驅、宛其死矣、他人是愉

反覆法と疊音法とは密に相似たり。

めんない千鳥百千鳥、泣くは梅川川千鳥、水の流れと身の行くへ戀に沈みし浮名のみ浪花に殘し留まりし(近松作「冥途の飛脚」)

の如きは強ち同一義を異語によりて反覆せるものにあらねば、全く同一語句を繰りかへせるものにもあらず、一語中の幾分を變じて句の調子のみを存し、之れを重ねたるもの、即ち句拍子などいふものなり。さらに

槍の權三は伊達者でござる、油壺から出すような男しんとろとろりと見とれる男、どうでも權三はよい男、花の枝からこぼれる男、しんとろとろりと見とれる男、いとしい男(近松作「槍の權三重帷子」)

弟のいや若は、ほだしの足に抱きつき、痛いかや父上様、なう痛むかや、と撫で上げ撫で下げさすりあげ兄弟わつと叫びければ思ひ切つたる景清も不覺の涙はせきあへず云々（同上）

行けど〳〵限なきまでおもしろし小松が原の朧月夜は（香川景樹）

てふよ〳〵花といふ花のさくかぎり汝が到らざる所なきかな（同上）

こせ山のつら〳〵椿つら〳〵に見つゝ思ふなこせの春野を（『萬葉集』）

凡人之欲レ爲レ善者爲二性惡一也、夫薄願レ厚、惡願美、狹願レ廣、貧願レ富、賤願レ貴、苟無二之中一者必求二於外一、故富而不レ願レ財、貴而不レ願レ勢、苟有二之中一者必不レ及二於外一、用レ此觀レ之、人之欲レ爲レ善者爲二性惡一也（『荀子』）

反覆は詠嘆の意をあらはすに適當なる語法にして、東西洋ともに情を抒ぶるを主とする詩文には之れを用ふと多し〳〵と和歌にては『古今』以下よりも上代の長短歌に其の例あまた見えたり。『八雲たつ出雲八重垣妻ごめに八重垣つくるその八重垣を』のたぐひを始めとし

『出雲風土記』に

國の餘りありとのり給ひて、おめとの胸すき取らして、大魚のきだつけ別けて旗すゝきほふり分けて、三つよりの綱うちかけて、霜つゞらくるや〳〵に河船のもそろもそろに、くに來るこ、引き來ぬへる國は、こづちの打ちたえよりして、やほに杵築の岬なり

といへるが如き又は

我かかどに〳〵、上裳のすそぬれ下裳のすそぬれ、朝なつみ夕なつみ、朝なつみ、夕なつみ、我が名を知らまほしから

西洋にて漸層法の變形にアンチクライマックス(Anti-climax)と稱するものあり。漸層法の順序を轉倒して大なるもの、強きもの初めに置き、層を追ひて次第に文意を弱く少なくするの句法なり。例へば「天も醉へり山も醉へり客と我れとまた醉へり」などいふが如し。之れを倒にして「我れも醉ひ客も醉ひ山も天も皆醉へり」といふときは、小より大に及び低より高に就くの順序とゝのひて、眞の漸層となるなり。

（參照）　英語にクライマックス(Climax)といふもの即ち漸層法なり。

第三項　反復法

反復法とは文意を強め讀者をして一處に滯りて深く之れに注意せしめんため同義の語を繰り返すの法なり。たとへば「觚不レ觚觚哉觚哉」「松島やあゝ松島や〱」などの如し。

反復法には、異語によりて同一義を繰りかへすものと、同一語によりて同一義を繰りかへすものとあり。「うれしや喜ばしや」といふは、異語にて同義を反復するなり。「恐るべし〱」といふは、同語によりて同義を反復するなり。

反復法の文例

棟木おほふの柱をしてなんほの農夫よりも多く、梁にかすかの椽は起證のこうしやうよりも多く、釘頭の磷々たるは湯の垢の泡よりも多く、田甫の説法讃歎の聲は市塵の言よりも多からしむ。佛法繁昌四海鎭護の大伽藍、如意兩足の柱立てめでたし〱おゝめでたしと、手斧押つとりちやう〱、槌おつ取つてはしつてい〱、鉋取りのべさら〱えい、さら〱〱ちやう〱と、打ち始め取り始め、三々九度の御酒を捧げ、千度百度斷念して、重忠に式臺し棟梁座をぞ下りける（近松作「出世景清」）

今聖秀が年寄つて強弓ひかれず、行歩心に任せねば馬上の達者猶叶はず、何を見込に懇望せられん、是れ不審の第一、新田も數代の弓矢の家、聖秀ごときの武士は杷にて掃く程なるべし、事缺けがまひし頼みづかひ、是れ不審の二つ、よし又某北宮黝が勇力、孫子吳子が智謀あるにもせよ、御厚恩の鎌倉を捨て、旗大將が泰い大國がほしいなんどとて、義貞に降參し、挾間くゝりの名を取るべき安東と見られたか、左樣の腰拔義貞が味方に賴まんいはれなし、是れ又不審の三つ云々(近松作『千疋犬』)

天下の鏡となる賴光が心、おのれが知るべきか、案外なりと御諚ある、老人憚る色なく、イヽヤ弟を憎むを以て天下の鏡とは申されまじ、生まれ年こそ跡先なれ、弟も同じ親の血筋、兄も弟も心にかはりはなけれども、若き時は血氣内に強く兄親の心に叶はぬがち、其のたびごとに血脈を捨てば、日本國天地人倫の道絶えはつるを、鏡にしては、受けとられず、中には賴平どのは乙の若君、御母君の御愛子之れを殺しては御母への御不孝、不孝も天下の鏡か、其の上一代一度の訴訟は何ごとにても叶へんと堅き御契約の方もあり武將の御身に契約を違へ給ひてこれでも鏡か、愚老が、目にはわれ鏡、これ申し、鏡の曇りは研けば晴るゝ、いかな上手の鏡とぎも、破鏡はつぐにもつがれず、天下を照すは及びもないこと何處ぞ田舍の山寺の鏡鑄の奉加に入り給へと齗ばかりの大口あけけら〱とぞ笑ひける云々(近松作『關八州繫馬』)

楚襄王晉國を伐たんとす孫叔敖之れを諫め申して曰、園の楡の木の上に蟬の露を飲まんとするあり、後に蟷螂の犯さんとするをしらず、蟷螂また蟬をのみ守りて後に黃雀のおかさんとするを知らず、黃雀また蟷螂をのみ守りて木の下に弓を引て童子のおかさんとすゝをしらず、童子もまた前に深谷、後に堀株のあることをしらずして身をあやまり云々(橘成季の『古今著聞集』)

に大なるものを捉りて小なるものに對織せしむるに外ならず。されば漸層句法の成り立つには二個以上の事物あること及び之れに大小の分ありて相對織し、且つ其の對織に一定の順序あることの諸件を要す。

また「目は耳よりも聰く口よりも善くものをいふ」といふときは、目を耳又は口に對せしめて意味上の漸層を成せるのみならず、語路の上よりいふも「耳よりも聰く」と讀むと「口よりも善くものいふ」と讀むとは、句に長短緩急の次第ありて、おのづから音韻上の漸層をなせり。「一家之れを非とするも力め行ひて惑はざるものは小し一國一州之れを非とするも力め行ひて惑はざるものに至りては蓋し天下一人のみ若し世を舉げて之れを非とするも力め行ひて惑はざるものに至りては、則ち千百年にして乃ち一人のみ」などいへるも同樣なり。此は後に論ずべき長短法の、漸層法と相合せるに外ならず。

漸層法の文例下の如し

萬の事はたのむべからずおろかなる人は深くものをたのむゆゑにうらみ怒ることあり勢ありとてたのむべからずこはきものまづ亡ぶ財多しとてたのむべからず時の間失ひやすし才ありとてたのむべからず孔子も時にあはず德ありとてたのむべからず顏回も不幸なりき君の寵をもたのむべからず誅をうくること速なり奴したがへりとてたのむべからず背き走ることあり人の志をもたのむべからず必ず變ず約をもたのむべからず信あるすくなし身をも人をもたのまざれば是れなる時はよろこび非なる時は恨みず云々(吉田兼好の「徒然草」)

左右皆曰賢未可也、諸大夫皆曰賢未可也、國人皆曰賢然後察之見賢焉然後用之、左右皆曰不可勿聽、諸大夫皆曰不可勿聽、國人皆曰不可然後察之見不可焉然後去之、左右皆曰可殺勿聽、諸大夫皆曰可殺勿聽、國人皆曰可殺然後察之見可殺焉然後殺之、故曰國人殺之也云々(「孟子」)

といへるが如きは讀むものをしてさまでうるさしと感ぜしめず、蓋し文の至れるものなればなるべし。

また對偶法は諺、警句などに最も廣く用ひらる。殊に警語といはるべきほどのものは凡て對偶法より成れりといふも不可なきさまなり。

人の短をいふ事なかれ、己が長をとく事なかれ、銘に云くものいへばくちびる寒し秋の風(芭蕉の『座右銘』)

是を是とするは諂へるにちかし、非を非とするは謗るに近し云々(森川許六の『是非齋銘』)

小節を規るものは榮名をなすことなく、少き恥をにくむものは大功を立つることあたはずといへり云々(近松作『本朝三國誌』)

此等みな警句格言と見ゆる所は對偶に成れるを見る。其の他『帶に短し襷に長し』『魚心に水心』「借る時の蛭子顏濟す時の閻魔顏」等すべて對偶法によりて妙味をたもてるものにあらざるはなし。

蓋し對偶法の情趣に基づくところは、其の想念排列の方式が對照といひ竝行といふが如き形式等の原理にかなへるためにして、斯くの如き排列方式は、その方式みづからが種々の情味を帶着し來たるなり。其の理は次編に明かなるべし。

(參照)　對偶法の大部分は英語のアンチセシス(Antithesis)といふものに相當す。

第二項　漸層法

漸層法とは語句の按排をして淺より深に、弱より強に、低より高に、歩一歩其の調子を高めしめ、終に聽者の感を絶頂に導くの謂なり。「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」といふときは、先づ天時の戰爭に必要なる由をいひ、さて進みて更に必要なる地利を擧げ、最後に最も必要なる人和を擧げ、一より二、二より三、三より四といふがごとく遞次

ざるを待ちかねて催促しぬる事、神異妖怪は始めありて終なく出沒不可思議なる者也、さるを其の出處來歷を詳にせまほりし、其の消滅して終る所の定かならん事を求むるは惑のみ、作者の本意にあらざる事、大凡此の五禁を知りてよく吾戲墨を評するものあらば其は眞實の知音なるべし云々（馬琴が『八犬傳』の附言中の一節）

對偶法は文章中最も多く用ひらるゝ修辭法の一にして、初心者に取りては、最もまなび易きものゝ一なり。されば纖巧浮靡の文多くは對偶法濫用の病に坐せるものにあらざるはなし。對句駢儷は學び易くして而も多きに過ぐれば人の厭惡を惹くを常とす。名家の文といへど此の弊をば脫し得ざるものは尠なからず。對偶法を巧に用ひて文の趣味を損せざるを得るに至りて、始めて作文の門牆を窺へるものといふべし。

夫れ人陽の時に在れば則ち舒く陰の時に在れば則ち慘ふ此れ天に牽かれたるものなり沃土に處れば即ち逸く瘠土に處れば則ち勞す此れ地に繫かれるものなり慘ふれば卽ち歡尠なく勞すれば則ち惠褊し能く之れに違ふ者は寡し小も必ず之れあり大も亦然かるべし故に帝者は天地に因りて以て化を致し兆民は上の教を承けて以て俗を化す俗を化するの本は與に推し移るにあり何を以てか諸れを覈む秦は雍に據りて而して強く周は豫に卽きて而して弱し高祖西に都して而して泰く光武東に處りて而して約し云々（張衡が『西京賦』）

是れは六朝文の標本ともいふべき文體にして、今日より見れば煩瑣厭ふべし。而して其の弊の來たる所は言ふまでもなく對偶法の濫用に由れるなり。同じく對偶をしば〳〵用ひたるものにも蘇東坡が『前赤壁賦』中

況吾與子漁樵於江渚之上、侶魚蝦而友麋鹿、駕一葉之扁舟、擧匏樽以相屬、寄蜉蝣於天地、渺滄海之一粟、哀吾生之須臾、羨長江之無窮、挾飛仙以遨遊、抱明月而長終、知不可乎驟得、託遺響於悲風云々

ろがねの月輪を出だされたり、譬へばこれは長生殿の内には春秋をとゞめたり、不老門の前には日月遲しと云ふ心をまなばれたり云々（謠曲『邯鄲』）

三代の榮耀一睡の中にして大門の跡は一里こなたにあり、秀衡が跡は田野になりて金雞山のみ形を殘す、先高館にのほれば北上川は南部より流るゝ大河なり、衣川は泉が城をめぐりて高館の下にて大川に落入、康衡が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさしかため夷をふせぐと見えたり、扨も義臣すぐつて此の城にこもり功名一時の叢となる國破れては山河あり城春にしては草青みたりと、笠打ち舗きて時うつるまで涙を落し侍りぬ、「夏草や兵どものゆめのあと」（芭蕉の『弔古戰場文』）

悲しきかなや無常の春の風忽に花の御姿を散らし、いたましきかなぶんたんの荒き浪玉體を沈め奉る殿をば長生と名づけて長きすみかと定め門をば不老と號して老いせぬ關とは書きたれども、未十歲のうちにして底の水屑とならせおはします、十善帝位の御果報申すも中々愚なり、雲上の龍下りて海底の魚となり給ふ大梵高臺の閣の上、しやくだい喜見の宮の中、古は槐門棘路の間にきうそくをなびかし、今は船の内波の下にて御身一時に亡ぼし給ふこそ悲しけれ（『平家物語』）

夫れ隱れたるを求め怪しきを述べ作る小說野乘の果敢なきもの其の大筆に至りては必作者の隱微あり、是れを弄ぶ者は甚だ多く是れを悟る者の得易からぬは昔も今も同じかるべし、この故に吾常にいふ達者の戲墨を評するに五禁あり所謂假をもて眞となして備らんことを求むる事、評者只其の理論をもて好む所へ引つくる事、作者の深意を生索にして只其の年紀などの合はざるを見出さまくほりするは俗に云ふ穴搜の類なる事、前に約束ある事の久しくなるまで結び出ださ

第一項　對偶法

對偶法とは、二事を相對せしめて布置するの法にして、其の二事は成るべく正反對のものを對照するを妙とすれども、必すしも然らざるものあるを得るなり。「熱するときは火の如く、冷なるときは水の如し」などいふは對照なれども、「櫻の色に梅の香」といふときは、聯偶を主とするの味はひなり。

胡蝶の夢の中に百年の樂みを貪り、蝸牛の角の上に二國の諍ひを論ずよしといひあしといひたゞかりそめの事ぞかし、とに付けかくに付けてひとつ心をなやますこそおろかなれ、應仁の始め世の亂れしより此の方、花の都の故郷をはあらぬ空の月日のゆきめぐる思ひをなし、ならの葉の名におふ宿りにしても六がへりの春秋を送り迎へつゝ憂きふし繁き吳竹のはしにもなりぬる身を愁へ、こひぢに生ふるあやめ草のねをのみ添ふる比にもなりぬれば、山の東美濃の國に武藏野の草のゆかりをかこつべきゆゑあるのみならず、高砂の松の知る人なきにしもあらざれば、さみだれ髮のかきくもらぬ先にとのみ、しろ衣思の立つ事ありけり云々、（一條禪閤の『關藤河の記』の一節、關根氏の『歷代文學』より拔萃す）

此等は對偶文の絕頂にして此の時代（應仁）前後のなべての文脈は夫の支那に於ける六朝文とおなじく動々もすれば駢儷浮華に流れ易かりしなり。されば是の胡蝶の夢と蝸牛の角と、又は武藏野の草のゆかりと高砂の松の知る人との如きは、陳腐なるにせよ絕好の對偶にして、しかも隱喩法引喩法等をさへ言ひ籠めて、詞姿の優なるところ以て此の種の文の模範とするに足れり。其の他傍點を附せる箇所すべて複雜なる對偶をなせるを見る、若し此の文より對偶を引き去らば文なきに至らん。

東に三十餘丈にしろがねの山を築かせては、こがねの日輪を出だされたり、西に三十餘丈のこがねの山を築かせてはし

といふもの、ベイン氏の書に「一事物の性質甚しく吾人を喜ばしむるときは吾人は誇張の言を以て其の性質を說明し以て其の快樂を增さんとするの傾あり是れ文體中有力なる誇張喩法なり。之れが要件三あり、（一）其の快感を著るしく且つ確的ならしむること。（二）實を離れしために眞妄の感を動かすが如きことあるべからざること。（三）語句よく調ひて情緒的快味を保持するに適するものならざるべからざること是れなり（中略）中にも第三件は最も必要にして大詩人の特色は此にあり云々。（"English Composition and Rhetoric"—Bain）などいへるに其の一斑を推知すべし。

第五項　情化法

情化法とは一語句の意義を其のまゝ或る種の添詞によりて情のまゝに變ずるの法なり。西洋にてディミニューチーヴ（Diminutive）といへるは其の一種にして、我が文學中「さ」の字「を」の字等を加へて事物を小化し可憐化し純粹化するたぐひは是れに相當す。「さを鹿」「をゆるぎ」などの如し。また反對に之れを大化し野化するものあり。俚語にて「ぶつたゝく」の「ぶつ」、「どしやうぼね」「ど畜生」の「ど」「おつころぶ」「おんまける」の「お」等の如きこれなり。是等は其の初め多く固有の意義なる語なりしならんも、後にはたゞ一種の添詞として用ひらるゝに至れるなり。隨つて夫の語勢的音調と相似せり。

さよなかと夜はふけぬらしかりかねの聞こゆる空に月わたるを見ゆ（『萬葉』）

仲國寮の御馬たまはりて明月に鞭を上げ西をさしてぞ歩ませける。を鹿鳴く此の山里と詠じけん嵯峨のあたりの秋の頃さこそあはれにも覺えけれめ。片折戸したる家を見つけては此の内にもやおはすらんと控へ〳〵聞きけれども琴彈くところはなかりけり。（『平家物語』）

第九節　布置法

ことならず、朱さしの先をあらそひ若い衆の勢虎臥す竹の林と見え大帳雲を飜し十露盤あられを走らせ天秤二六時中鐘のひゞきにまさつて、其の家の風暖簾吹きかへしぬ云々(西鶴作「日本永代藏」)

瀧壺もひしけと雉子のほろゝ哉(向井去來)

一里はみな花守の子孫かや(松尾芭蕉)

うつせみの世にも似たるか櫻花咲くと見しまにかつ散りにけり(「古今集」よみ人しらず)

別れては昨日けふこそ隔てつれ千世しも經たる心ちのみする(謙德公)

王曰、天下佳人莫レ若二楚國一、楚國之麗者莫レ若二臣里一、臣里之美者莫レ若二臣東家之子一、臣東家之子、增二之一分一則太長、減二之一分一則太短、著レ粉則太白、施レ朱則太赤、眉如二翠羽一、肌如二白雪一、腰如レ束レ素、齒如レ含レ貝、嫣然一笑惑二陽城一迷二下蔡一云々(宋玉の「登徒子好色賦」)

誇張法はまた滑稽の意味にて用ひらるゝことあり。例へば

四十ぐらゐの横にふくれた女、乳のみ子を負ひ、罌粟坊子の手をひきながら三かゝへもある櫻尻をはるかあとに引きずり、額口から灰墨のまざりし汗を流してやう〳〵追ひ着云々(十返舍一九作「六あみだ詣」)

阿克將も今ははやのがるゝ方なく堤の影にうづくまり、怨めしの此の髭や拔いて捨てんと手にからまき、ぐつと拔きてあいたゝ、此の痛さでは首切らるゝも同然云々(近松作「國性爺後日合戰」)

等の如き是れなり。

(參照)　誇張法また强喩ともいふべし。英語にては之れをハイパーボリー(Hyperbole)といふ。之れに關する從來の修辭學者の規則

うするの句とせるもの、何れか誇張法の理に基づけるにあらざらん。

さて文例下の如し

秋の夜討の國性爺、乘つたる駒の轡蟲、月まつ蟲の聲すみ渡り、しん〳〵りん〳〵しづ〳〵〳〵と堀際近く攻め寄せて、百千の高燈灯一度にぱつと立てたるは千世界の千日月一度に見るが如くにて、城の兵寢耳に水のあわて騷いで、甲をすねあて鎧はさかさま馬をせなかにオヽ〳〵〳〵、大手の門をおしひらき、切て出づれば寄せ手の勢、貝鐘鳴らし時の聲、大將團扇追つ取りてひらり〳〵ひら〳〵ひらり、ひらめかし、日本流の軍の下知、攻め付けしぐは義經流、ゆるめて打つは楠流、くりから落とし阪落とし八島の浦の浦波も爰に寄せ手の勢強く、もみ立て〳〵切り立てられ城中押してぞ引いたりける云々（近松作『國性爺合戰』）

かゝる貧き荒神の氏子とうまれし身を持つて、其方も殺し我れも死ぬ、元はと問へば分別のあのいたいけな貝殼に一杯もなき蜆橋、短きものは我々が、此の世の住まひ秋の日よ、十九と廿八年の、今日の今宵を限りにて二人命の捨て處、爺と婆との末までもまめで添はんと契りしに、丸三年も馴染まいで、此の災難に大江橋、あれ見や浪花小橋から、舟入橋の濱づたひ、これまで來れば來るほどに冥途の道が近づくと、歎けば女も縋り寄りもう此の道が冥途かと、見かはす顏も見えぬほど、落つる泪は堀川の橋も水にや浸るらん云々（近松作『天の網島』）

空さだめなき雲をしるしの契約を違へず、其の日ぎりに損德をかまはず賣買せしは、扶桑第一の大商人の心も大腹中にして、それ程の世をわたるなる難波橋より西見渡しの百景、數千軒の問屋甍を幷べ、白土雪の曙をうばふ、杉ばへの俵物山もさながら動きて、人馬に付け、送れば、大道轟き地雷の如し、上荷茶船かぎりもなく川浪に浮びしは、秋の柳に

花とや見らむ白雲のかゝれる枝に鶯の鳴く」「野邊ちかく家居しをれば鶯の鳴くなる聲は朝な〳〵聞く」など一々擧けつくすべくもあらず。

（參照）現在法また現寫法ともいふべし。英辭にてはヴキジョン（Vision）といふ。

第四項　誇張法

誇張法とは總じて事物を其の實際よりも誇張して言表する謂なり。數千人といふべきを數萬人といひ、極めて小なるものを芥子粒といふが如きは、量を誇張せるものと見るべし。疾く走るものを韋駄天の如しといひ、善く晴れたる空を日本晴といふたぐひは、性を誇張せるものと見るべし。おもふに人は事物に對して深く感動するとき、其の激甚なる情を將りて直に事物の上に被らしめ、心百に動けば五十のものをも百と思ひ做すを常とす、誇張の基づく所此處にあり。要するに我が感情の甚の大となるにつれ想念の形また變化を呈するの謂なり。而して古來誇張法の最も多く用ひらるゝは詩歌、演說等にして語々理に近づき、謹嚴精密を要する文辭には用ひらるゝこと稀なりとす。往々心あるものゝ誇張法を惡み之れを排することあるは、蓋し情内に發せずして、漫に語句の末を誇大にし、爲めに眞意義を害するの弊あるに由るか。

誇張法は其の用極めて廣く、日常談話の際にも用ひらるゝことしば〳〵なり。水の極めて冷なるを形容して「切るやうな」といひ、驚きたる場合に「膽を潰す」といひ、よく虛言を吐くものを稱して「本當の事を言つたためしがない」といふ類は、皆誇張法に外ならず。誇張法はまた支那の文學たとへば詩などに見ること最も頻繁なり。「白髮三千丈、緣愁似箇長」「撫頂弄盤石、推車轉天輪」「一風三日吹倒山、白浪高於瓦官閣」「盪胸生層雲、決眥入歸鳥」「聲吹鬼神下、勢閲人代遷」「僻學詩奇險、石與厚地裂」「吳楚東南坼、乾坤日夜浮」「錦江春色來天地、玉壘浮雲變古今」等みな前人の推して古今を驚

とや露ぞ袂をうるほしける、時しあればと覺しく蟲の怨たえ〴〵に、草のとざしも枯れにけり、大將哀に心の澄みければ、庭上に立ちながら古詩を詠じ玉ふ、「霜草欲枯蟲思苦、風枝未定鳥栖難」と宣ひて夫れより御前に參り玉ひける、八月十八日の事なり、宮は居待の月を待ち詫びて御簾半ば卷きあげ御琵琶を遊ばして渡らせ玉ひけるが、山立ち出づる月影を尙や遲しと思ぼしげに御琵琶をさしおかせ玉ひつゝ御心を澄まさせ玉ひけり、源氏宇治の卷に、優婆塞の宮のおん娘、秋の名殘を慕ひかね、明月を待ち出で琵琶を調べてよもすがら心を澄まさせ玉へるに、雲隱れたる月影のやがて程なく出でけるを、尙堪えずや覺しけん撥に招かせ玉ひにき、其の夜の月の面影も、今こそ思し召しけれ、大將參りて大床に候はれけり、宮は琵琶をひきさして撥にでそれへと仰せけり、其の御有樣あたりを拂うて見え玉ふ、互に昔今の御物語あり、大將は福原の都の住みうき事語り申して泣かれければ、宮は平の宮の荒れ行く事仰せ出して共に御淚に咽ばせ玉ひけり、斯くて夜もいたくふけにければ、宮は御琵琶を搔きあはせ玉ひ秋風樂を引かせ玉ふに、侍從は琴を彈けり、大將は腰より笛を取り出だし平調に音とりつゝ遙に之れを吹き玉ふ、其の後故鄕の荒れ行く悲しさを今樣に作りて歌ひ玉ふ「古き都を來て見れば、淺茅が原とぞなりにける、月の光は隈なくて、秋風のみぞ身にはしむ」と三度歌ひ玉ひければ、宮を始め參らせて御所中にさふらひける女房達、折からあはれに覺えて袖をぞ絞りける(「源平盛衰記」)

此の文如きは叙事の筆として上乘のものなり。其の現在法を用ふる鹽梅の巧なるは、凡手の能くする所にあらず。勿論之れを現在法なりと知りて筆を下だせしものゝみにはあらざるべきも、過去動詞と現在動詞との配合おのづから度にかなひて、現在法を用ふるの好模範となれるものといふべし。以上の外、眼前の景によりて情を抒るの和歌俳句等には、現在法に循へるものいと多し。「初雪やまづ廐から消えそむる」「夕立や家を回りてあひる鳴く」「長松が親の名で來る御慶かな」「春立てば

をつくす、千變萬化の大刀風に、さしもの大勢亂れ騷ぎむら〱はつと引き退く、敵退けば杉倉は、士を斂めて徐々と、落るを更に跟けて來る端武者は遠箭に射て落し追つかへしつしもと原、三里が程を送られて、終には落る夕日の遠に十六日の月圓なり云々（馬琴作「八犬傳」）

わが國の文學にては、時に接續詞を略して現在動詞のまゝ下の句に連なることあり、此の際の語法と現在法とは混ずべからず。上の文例に就きて言ふときは「前にあるかとすれば忽然として後にあり奮擊突戰祕術をつくす」といへるうち、「其の後にあり」の一句若し下にかゝらざるときは、無論現在法と言ふを妨げずといへども、此處にては、「前にあるかとすれば後にあり斯の如くして奮擊突戰祕術をつくす」といふの義なるが故に、其の結尾なる「祕術をつくす」といふ語の如何によりて過去現在の何れとも定まるべきものたり。即ち「前にあるかとすれば後にあり斯くして奮擊突戰祕術をつくしぬ」といふときは過去の義となり「前にあるかとすれば後にあり斯くして奮擊突戰祕術を盡くす」といふに句を結ぶときは、現在の義すなはち現在法となるものと知るべし。

現在法も之れのみを濫に用ふる時は、不自然のものとなりて文致を害ふべし。殊に現在動詞を用ふるに當りては過去、將然等の動詞と錯落せしめて意匠の迹を露さゞらんと力むるを要す。上の例文中「落鞘谷」の場合の如きは、既に幾分か故意に現在法を用ひたるが如き迹見えたり。即ち二度三度讀み返す時は、總じて戰を叙するの筆は斯かるべきものぞといはぬ計りに現在法を用ひたるが如き感を生ずべし。

大將、南庭を回りて彼方此方を見玉ふにも、昔は二代の后に立ち玉ひ百敷の大宮人にかしづかれて明し暮し玉ひしに今はかすかなる御所の御有樣、軒につた繁り、庭に千草生ひかはす、言問ふ人もなき宿に萩吹く風も騷しく、昔を戀ふる涙

五月廿日の夜酒井左衛門尉忠次信長の軍兵を引具し、山路を傳うて鳶の巣にむかひ、明くれば廿一日の朝、かたきの要害を攻め落とす、忠世が弟治右衛門忠佐兄にむかひ、今日の戰は我等が爲には當の敵、信長の加勢に先をかけさせんは無念の次第なるべし、我等先にかゝりて戰はゞやといふ、忠世、いみじくも申たるものかなとて德川殿に參りてかくと申す、足輕の弓、鐵砲の達者引きすぐつて兄弟に附けられたり、馬に乘ては懸引自由なるまじとて、兄弟手勢も皆おりたゝせて先陣をすゝむ、石川、本多、鳥居、平岩が勢同じくつゞいて擊て先づ、兄弟先づ足輕を出し敵に向て鐵砲を放つ、武田方にても山縣三郎兵衛尉昌景、千五百人も同じくかりたつてしころをかたふけ面もふらず大鼓を打ち曳や聲を揚げて進み來る、兄弟が兵敵かゝればさつと引て鐵砲をはなつて打散し、かたき開けば取て歸し、おめいて切てかゝる。小菅、廣瀨、三科とて一人當千のかたきと忠世兄弟と、名乘かけ〳〵追つかへしつ九たび迄攻めたりければ、小菅、三科、手を負て引く大將、昌景鐵砲に當つて馬より落つ、織田殿の方にては佐久間左衛門尉信盛六千人、瀧川左近將監一益三千人、柵より外へうつて出で、馬場、内藤にかけたてられ、散々になりて引て入る、數萬騎の軍勢たゞ一處に集て柵より外に出もせず、唯遠矢に射取れやと三千挺の鐵砲を一面に立並へてぞ放つたる云々（新井白石の『藩翰譜』）

義實は些も疑議せず、あながまや雜兵原、敵をおそれて走るにあらねば、返すに難きことあらんやとて、馬をきりゝと立てなほし、大刀拔きかざして進み給ふ大將を擊たせじとて、杉倉堀内推並んで敵の矢面に立塞がり、鎗を捻つて突き崩す、義實は亦老黨を擊たせじとて馬を馳せよせ、前後を爭ふ、主從三騎、大勢の眞中へ十文字にかけ通つて、やがて巴字にとつて返し、鶴翼に連つて更に魚鱗にうち遶り、東に靡け西に當たり、北を擊ては南に走らせ、馬の足を立てさせず、三略の傳、八陣の法、共に知つたる道なれば、只今前にあるかとすれば、忽然として後にあり、衝擊突戰祕術

次に豫言的現在法とは歴史的現在法に反して、未來の事を今日のあたりに起こりたる如く言ひなし、以て聽者の感を動かすの語法なり。例へば「條約改正の成りたらん曉には内地雜居は許されん、外人は續々入り込まん、商業に工業に外人の競爭は始まらん此の際諸君は何を以て敵を制せんとするか」といふべきを「條約改正成るの曉には内地雜居は許さる外人は續々入り込む商業に工業に内外人の競爭は始まる諸君は此の際何を以て敵を制せんとするか」といふの類は、演説家などの好みて用ふる所とす。最後に想像的現在法とは時間の過去未來に論なく、全く空想上の事柄を現に在るが如く言ひあらはすの謂にして、詩歌などに最も多く用ひらる。

駟玉虬以乘鷖兮、溘埃風余上征、朝發軔於蒼梧兮夕余至乎縣圃、欲少留此靈地兮日匆々其將暮、吾令羲和弭節兮望崦嵫而勿迫、路漫々其脩遠兮吾將上下而求紫、飲余馬於咸池兮總余轡乎扶桑、折若木以拂日兮聊須臾以相羊、前望舒使先驅兮後飛廉使奔屬、鸞皇爲余先戒兮雷師告余以未具、吾令鳳皇飛騰兮又繼之以日夜、飄風屯其相離兮帥雲霓而來御、（屈原の「離騷」）

此れら全く想像裡の事なるが故に、過去にも屬せしむべからず、未來にも屬せしむべからず、現在法によりて描出するを最も當たれりとするなり。

現在法の造句は、語尾に現在動詞を用ふるを通例とす。卽ち「行けり」「行かんとす」「行かん」などいふべきをも、凡て直に「行く」といひて已むなり。されどまた間々現在動詞の外に現在といふことを説明する詞を添ふることあり、例へば「春雨や今のも昔の鏡でなし」の類之れなり。

現在法の文例下の如し。

く想像架空にして實際に存せざる事物等を、今現に目のあたりに在るが如く描寫するの詞法なり。されば現在法は頓呼法と相出入す。たゞ頓呼法は現にあらざるものを在るが如く見做すと共に、之れに向かひて對話風に呼びかけ話しかくるを本領とすれど、現在法は現に在らざるを在るが如く言ひなすのみ。たとへば「月傾きぬあはれ山の端避けよかし」といふは、目前にあらざる山の端を在るが如く呼びかけたる頓呼法なれど「月傾けども山の端心なければ避けんともせず」と云ふときは、一句の命脈單に山の端の動作を今現にあるが如く言ひあらはしたるのみにあるが故に、現在法なるの類なり。

現在法は分かちて三となすを得べし、歴史的、想像的、豫言的是れなり。歴史的現在法とは、凡て過去に屬せる事柄を現時目前にあるが如く書きあらはすの謂なり。此は現在法中最も廣く用ひらるゝものにして、歴史家殊に之れを慣用す。但し西洋にては、近世に至り、歴史と雖ども科學的精密を語句の間に保たざるべからずとの趣意によりて漸々かゝる詩歌的現在法の筆法を用ふるもの減じたりといふ。わが國にては、純粹なる古史には却りて現在法などを用ひたるもの尠なく、動詞の過現未の時別は殊に嚴なりき。之れ一には我が國語の性質の然らしめしに由るか。されどまた史家の筆致にも由るべければ、一概には言ひがたし。動詞に確たる文法上の時を限らずして、自在に現在法を用ふるは、漢文に如くなし。

三月越子伐レ吳、吳子禦二之笠澤一、夾レ水陣、越子爲二左右勾卒一、使三夜或左或右鼓譟而進一、吳師分以禦レ之、越子以二三軍一潛涉、當二吳中軍一而鼓レ之師吳大亂遂敗之、（春秋左氏傳）

是れ、左氏の叙戰法中最も簡にして勁なりと稱せらるゝもの、而して其の「伐吳」といひ「大亂」といひ「敗之」といふが如き、固より過去の事を叙するものなるが故に、文法上よりいふときは「吳を伐ちぬ」「大に亂れぬ」「之れを敗りたり」など讀むべきなれど、漢文の文致よりいふときは、却りて「吳を伐つ」「大に亂る」「之れを敗る」と訓するを本意とするの類也。

とり頓呼法のみは擬人法などゝ同じ系脈に屬しながら、和歌中に其の文例いと尠し。蓋し頓呼法は初まづ尋常の句法にて述べ來たり。層々情激して頂點に達するとき、突然轉じて當の事物に呼びかくるを本來とするが故に、僅々二三十字の短歌には、此の句法を充分に用ふるの餘地なかりしにも由るか。されば一首の和歌中やゝ頓呼法に近き句法あるものといへども、多くは初より擬人法もしくは現在法の意にて立言せるものを、單に語句を轉倒せしめたるに過ぎざるが如き觀あり。

谷川のうち出づる波も聲たてつ鶯さそへ春の山風(藤原家隆)

おもふどちそことも知らず行きくれぬ花のやどかせ野邊の鶯(同上)

此れらは猶幾分か頓呼法の性質を帶びたれど

いく年の春に心をつくしきぬあはれと思へみよし野の花(皇太后宮大夫俊成)

ちる花の忘れがたみの峯の雲そをだにのこせ春の山風(左近中將良平)

といふに至りては既に單に擬人法の語句を倒裝せるまでにて、頓呼法といふべき性質なし。何とならば頓に話頭を轉する所なければなり。さらに

昔おもふ草の庵のよるの雨に涙なそへそ山ほとゝぎす(皇太后宮大夫俊成)

などいへるは純然たる擬人法に外ならずとす。

(參照)　頓呼法とは英語にてアポストロフキー(Apostrophe)といふに相當す。

第三項　現在法

現在法とは現在に寫し出だすの義なり。卽ち過去に起こりし事物、將來に起こらんとする事物、眼前にあらざる事物、全

清見寺、鐘かう〳〵とほの聞こえ、猶も心ぞ急がるゝ、きらめく露の玉澤村、闇はあやなし梅澤村、ふた村過ぎて行き狂ふ、駒の蹴上けの鞠子川、衣紋流しのあゝ曲もなや、此の駒の道の街に行き泥み、打てどもあをれどもなど進まぬぞ、歩まぬぞ、哀一足に千里もがなと焦るゝとは思ひ知らぬか白月毛の、駒に恨の泥の鞭、うつに甲斐こそなかりけれ、云云(近松作『曾我會稽山』)

和女は藤屋の吾妻かの、與次兵衞に揉まれて色のわるさよいとしさよ、近い内には必ずと、請けて樂とさよ世帯して子供まうけてふたりが連れて、おちが肩ぐま、おてゝが日傘、肩で風きる山川に、親の御恩を振り捨てゝ、和女の世話になりふりも、昔には似ぬ男山、今では人も秋篠や、外山の松よ事問はん、まつがつらいか別れが憂いが、待つも別れもせぬやうに、親の許した女房は、義理と情の二おもて、かけて思へど甲斐もなく、今は野末の放れ駒、昨日は吾妻に戀を載せ今日の故郷の焦がれ泣き、我れから狂ふ荻の葉の、亂れて袖に置きもせず、寢もせで露のたま〳〵も、待たるゝとも待つ身になるな親の子の、便を凌ぐ山崎の、妻もさこそは亂れ髮、いふた詞が力ぞや云々(近松作『壽の門松』)

遠寺の鐘も埋もるゝ、雲より奥の山路の旅御いたはしや永曆帝、干戈せきよう相挾み、左輔右弼列を引く、御幸は昨日の昔にて、今は廿輝只一人、十善萬乘の御袖に、賤の菅簔被せまいらせ、龍の御馬の口を取り、轡の音よ心せよ、皆君が代の土も木も、今世をしのぶ御身には駒にも飼はぬ若草に何を咎めて水の音、谷の流れを慕ひ來て庵の扉に御馬をとどめ云々(近松作『國性爺後日合戰』)

東方半明大星沒　獨有太白配殘月　嗟爾殘月勿相疑　同光共影須臾期　殘月暉々　太白耿々　雞三號　更五點(韓愈)

又擬人法等の詞藻の片々たる作例は、わが國の文學、ことに抒情を旨とせる和歌に多し。これ當然の事ならん。然るにひ

れを現在法の濃くなれるものと見なすものあり。

頓呼法の文例

人買ひ舟がうらめしや、とても賣らるゝ身じや程に、靜に漕ぎやれ船頭どの（「枕まくり」）

名殘惜しさに出て見れば、庭の雪に跡あり、是れこそかたみよ雪消な〳〵、ばうのつの中のいもせは變るとも、君もかはらじ我れもかはらじ（同上）

文はやりたし我が身は書けず、ものを言へかし、白紙が〳〵（俗歌）

思ひ出す夜は枕と語ろ、枕もの言へ焦るゝに（俗歌）

うきを語らん友さへなくて、慰めかねつわが心、あゝうつゝなや過ぎしつたへの其の水茎の黒みしあとを見るにつらさのいやます涙は誰れゆゑ濡るゝあはれとも袖も訪へかし（英一蝶の「朝妻舟」）

力拔レ山兮氣蓋レ世、時不レ利兮騅不レ逝、騅不レ逝可二奈何一、虞兮虞兮奈レ若何（項羽が「垓下歌」）

對レ酒當レ歌、人生幾何、譬如二朝露一、去日無レ多、慨當二以慨一、憂思難忘、何以解レ憂、惟有二杜康一、青々子衿、悠々我心、呦々鹿鳴、食二野之苹一、云々（曹孟德の「對酒」）

けに〳〵村雨のふり來たつて花を散らし候ふよ、あら心なの村雨やな、春雨の降るは涙か櫻花、ちるを惜まぬ人やある云々（謠曲「熊野」）

雲より上の一聲や、又二聲や、三聲とだにも啼き捨てゝいづち行くらん、やよや待てなれよ冥土の鳥ならば、死出の山路に關据ゑて、先立つ我が子留めよかし、心覺の道程もゆんでは秩父の山おろし、松の響か磯打つ波か、晝なら三保が

の物語をなすが如きは、作家の慣手段なりしなり。

（參照）擬人法はまた活喩とも名づくべし。こゝには譬法喩と化成法とを分かつの理によりて、擬人法といふ名を採れり。英語にては之れをパーソニフヰケーション(Personification)といふ。

擬人法の一種とも見るべきものは、其の反對なる擬物法なり。人間を却りて非情化するの修辭法にして「人の子一つ通らぬ」といふときは、其の「一つ」といふに「人の子」を非物情の如く取り扱ふ意を示せり。他に面會せしことを俚語にて滑稽的に「お目にぶらさがつた」などいふも此の類なり。かゝる例はなほ多し。

第二項　頓呼法

頓呼法とは、平叙の文勢頓に變じて、現にあらざるものを在るが如く、生なきものを生あるが如く見立てゝ之れに呼びかけ、又は今まで話しかけたりし外のものに話頭を向けかふるの謂なり。「ながむれば濡るゝ袂に宿りけり月よ雲井の物語せよ」といふときは、上半句平叙の文體が「月よ」といふに至り、突然變じて對話の形となり、現に前にあらざる月、しかも無生物なる月を呼び出だすものにて、頓呼法の條件に合へり。

頓呼法は擬人法と同じく我れの心象極めて強くなり行き、ほと〳〵現實と想像との境を見極め得ざる場合に出で來る句法なり。換言すれば現にあらざるもの、生なきものを、我れの心にて現に在り、生ありと思ひ做し、而して此の思ひ做しを其のまゝ事物の上に被らしむるにあり。

頓呼法はまた後に論ずる現在法と密に連接す。頓呼法の最要條件は、目のあたりに在らざるものを在るが如く呼び出す點にあるが故に、現在法すなはち現になき事物をも現に在るが如く寫すの詞法と同一系に屬す。されば修辭家によりては、之

よろづたびかへり見すれどいや遠に郷はさかへぬいや高に山も越し來ぬ夏草のおもひ萎えて忍ぶらむ妹が門見ん靡け此の山(柿本人麿作「別妻上來時歌の一節」)

春のうぐひす何を着て寢やる、花を枕に葉をかけて(俗歌)

滑稽の意味にて態(わざ)と不釣合なる擬人法を用ふることあり「手をついて歌申し上ぐる蛙かな」の類はむしろ此の種の滑稽に屬するものといふべし。

摺小木に知らるな薹の花ざかり(山崎宗鑑)

かくばかり替る姿や干葉(青木鷺水)

腹筋をよりてや笑ふ絲櫻(北村季吟)

一の上座に座し居たる鯨ゆふ〳〵と立出で申しけるは、仰の通り御上の御大事此の時なり私儀は身不肖ながら家がらたるを以て代々大老職相勤め是れに竝み居る鱶(ふか)なんども家老の座に連なりしびまぐろなど用人を勤むれば彼等とも内内評議致せし處所詮人界の樣子委しく聞き屆けたる上ならでは謀は出まじく存じ付き、手下の者共の内にて才覺ある者どもを忍びに遣はし置きたれば定て樣子相知れなんと申す詞も終らぬ處へ御注進と呼はり〳〵眞黑になりてころ〳〵とかけ出るは本店邊に住居する業平蜆にてぞありける云々(平賀鳩溪の「根南志具佐」)

此等凡て極めて價値なき者を人間に比擬する滑稽の旨にかなへるものなり。擬人法を用ふる例の詩に多くして文に少なきは、當然の理なるべし。中にも低級なる擬人法は文にも少なからねど、上級なるものは主として調の高き詩歌類にのみ用ひらる。又我が國の文學には擬人法によらずして無生物を人間化せしめたるもの殊に多く、草木土石の靈の人間と現じて過去

いとはかなき云々(吉田兼行の『徒然草』)

垣根も折戸も青やかに、心地よげに這ひかゝれるかつらに、白き花のみぞ、己れひとり笑みの眉開きしは、何なるかと問はせたまへば、籠舁くをのこあれこそはからす瓜、その名は黒き鳥めきて花は白く實は赤く、かゝるいぶせき垣根にのみ咲き候と答ふるにぞ、實に此のわたりは小家がち打ちよろぼひし軒の褄はひまつはれるくちなしの花の契や、一ふさ折りて參れとのたまへば云々(柳亭種彥作『田舍源氏』)

わが國の文學には此の種の擬人法多し、短き語句をもて多量の感想を發揮し、又は景によりて情を寫すを主とせる和歌俳諧等殊に然るを見る。

擬人法の第三種無生物をして話說せしめ又は我れの說話を聽聞せしむるの例は

しはすの月の曇なく出でたるを簾をあげて見たまへば、向かひの寺の鐘の聲枕を欹てゝけふも暮れぬと幽なるを聞く云云(紫式部作『源氏物語』)

百舌問レ花花不レ語。低廻似レ恨橫塘雨。峯爭ニ紛蕋一蝶分レ香。不レ似垂楊惜ニ金樓一。願君留得長妖韶。莫レ逐東風還蕩搖。秦女含レ嚬向ニ烟月一。愁紅帶レ露空迢迢(唐の溫庭筠が『惜春詞』)

ほとゝぎすいかに鬼神もたしかに聞け(西山宗因)

閑呼鳥われも淋しいか飛んで行く(中川乙由)

我が涙もとめて袖に宿れ月さりとて人の影は見えねど(後京極攝政)

蝶よ〳〵花といふ花のさくかぎり汝が到らざる所なきかな(香川景樹)

歐文の影響を蒙りてより漸くしば〱用ひらるゝに至れり。西洋にては更に之れに男女の性をさへ附して一般に用ひらる。船といふときは之れを受くるに彼の女(She)といふ語を以てし、戰爭といふときは之れに代ふるに彼れ(He)といふ語を以てするの類是れなり。

次に擬人法の第二種無生物に動作を有たしむるの例

きり〲すの、つゞりさせとは人のために夜寒をおしへ、藻に住む蟲はわれからと只身の上をなげくらんを、蓑蟲の父よと呼ぶは宮守の妻を思ふには似ず、されど父のみ戀ひてなどかは母をしたはざるらん(横井也有の『百蟲譜』)

はれくもる影を都にさき立てゝしぐると告ぐる山のはの月(具親朝臣)

木の葉ちる宿にかたしく袖の色をありとも知らで行く嵐哉(前大僧正慈圓)

長持に春かくれ行く衣がへ(井原西鶴)

行く秋を道々こぼす紅葉かな(中川乙由)

雲折々人を休める月見かな(松尾芭蕉)

かゝれば伏姫末期に及びて、身のため又犬のために、提婆品を讀み給ふ、今を限りと思へばや音聲高く澄渡り、絶えず又吃まずして、蓮の絲を引く如く又水出の走るに似たり、峯の松風も之れに和し、谷の幽響もこれに應ふ。石を集めて聽衆とせし昔もかくぞありけんかし、いとめでたき道心なり(馬琴作『八犬傳』)

飛鳥川の淵瀨常ならぬ世にしあれば時うつり事去りたのしみかなしみ行きかひて、花やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり變らぬ住家は人改まりぬ桃李ものいはねば誰と共にか昔を語らん、況して見ぬ古のやんごとなかりけん跡のみぞ

種に屬すれど「春笑む」「天道は私せず」と言ひ換ふれば第二種に入るが如きものなり。只第三種の一部のみは別に之れに後の頓呼法の分子を加ふるの必要あり。「瓢兮瓢兮我愛汝」といふは啻に瓢を有情の物とするのみならず、又之れを面のあたりに呼び出だす頓呼の句法をも交ふるなり。

（參照）泰西の修辭家學者がプロソポピア（Prosopopoeia）と呼ぶものあり。こは擬人法と頓呼法とを合したらんが如きものにて無生物を活かし及び理に在らざるものを在るが如く呼びかくるの語法なり。上にいへる第三種の擬人法は此の類とも見るべく、結局擬人法の一種たるに過ぎず。

さて擬人法の第一種、非情を有情の如く形容せる例は下の如し。

何をか後世の土産とも、いざしら露のあだし野や、野邊よりあなたの友とては樒一枝一しづく是れぞ冥途の友となる、しるべとなれや此の言葉、形見ともなれ、回向となれ、迷ふな我れも迷はじ云々（近松作『夕霧阿波鳴渡』）

この頃の暑さも忘れぬるとて端近かう出づれば夕月の光さしわたりて草木の露の玉なすに、聲ふくれたる蛙の物待ち顔に空打ちにらみて、ふつゝかなる音になくもをかし云々（松平樂翁の『花月草紙』）

蒲團被て寢たる姿や東山（服部嵐雪）

片枝に脈や通ひて梅の花（各務支考）

籠の中の鸚鵡おばしまに循つて伏し仰ぎ牖を窺つて跼蹐す紺の足丹き觜、綠の衣、翠き衿、金精の妙質、火德の明輝、辨才聰明にして能くものいふ、靈鳥いかんぞ時のさかしきに遭へる云々（近松作『平家女護島』）

また無生物に人稱代名詞を用ふる場合も此の種の擬人法に數へらるべし。此は我が國本來の文脈には罕にある例なれど、

餘り或は人を待ち或は分別すべきものゝやうに言ひなしたるに外ならず。要するに擬人法とは無生物に生を附し無心物に心を附し、死物を開眼して活かし働かしむるの比喩と知るべし。

人しれず花とふたりの春なるを待たせても咲く山櫻かな(香川景樹)

中に一の大蛤、日かげに口を打ひらき、取る人ありとも白泡の、汐を吹いて盛りあげし實にや蛤よく氣を吐いて樓臺をなすと云ひしも斯くやと見とれ居る所に、磯の藻屑に飛びわたり漁る羽音おもしろく降り居る鴫の蛇と見つけ、嘴いからし只一つゝきと狙ひ寄るヤア云はれぬ鴫殿、看經もする身で之れがほんの殺生かい、蛤も蛤口をくわつと破戒むさん飛びついてかち〳〵啄く所を貝合にしつかと喰ひしめ動かせず、鴫は俄かに興さめ顏、引つゝしやくつゝ羽たゝきし頭を振つて岩根に寄せ、打くだかんず鳥の智慧、蛤は砂地の得物汐のたまりへ引き込まんと尻下りに引き入るゝ、鴫は翮を張つてぱつと立ち、一丈ばかりあがれど釣られ落ては又立上り、ぱつと立てばころりと落、鴫のはねがき百羽搔、毛を逆立てゝぞあらそひける云々(近松作「國性爺合戰」)

これらの外「春温萬物を育す」といひ「天道は盈てるを虧く」といひ「日月照臨」といひ「寒暑往來」といふが如き擬人法の例なり。

擬人法はまた分かちて三となすを得べし。第一は單に有情物のみの冠すべき形容詞を非情物に冠せしむるものにして擬人法の最下層に位す。第二は進て無生物を全く生物と見做し人間と同樣の動作をなさしむるものなり。第三は更に無生物をして人間の動作就中話說をなすを得しめ、若しくは他人の話說を聽き分くるを得しめ、以て人間と等しく對話せしむるにあり。勿論此等の區別は度の上よりせるものにて、根本は一なること、例へば「笑める春」「天道は正直なり」などいふときは第一

の如きは複雑なる隱喩とも見らるべきのにして類喩法の上乘なるものなり。「地金をへらす」といひ「たゝき直す」といひ「煮ても燒いても」といふ。此等すべて一面には本文なる主人公の來歴を叙するの文句たると共に他面には一々鍛冶道の術語卽ち類喩法たり。

類喩法と掛詞及び隱喩法換喩法等とは密接せり。類喩法とは全段の文につきていふものなれば其が一語々々の上には掛詞もあるべく、隱喩法換喩法もあるべく、彼れ此れ目的を異にして同在するを得べし。「先づ鉢植の作り松ずんど流しの一枝は太夫の威勢備はりて、悋氣の嵐手くだの雨、無理な口說の霜雪も騷がず痛まず彌增しに情の緣はびこりて、松の位と譽へられしも憎からず」といふときは全文松に緣ある語を用ひたる點にて類喩法といふべく「悋氣の嵐」「手管の雨」等句々比喩の語を以て遊女の事を叙せる點にて隱喩法といふべきたぐひなり。

第八節　化成法

第一項　擬人法

擬人法とは情の高まれる結果、非情の物をも我れと同等なる有情物の如く言ひ做すの法なり、情の力によりて死物が生物化せらるゝなり、無生物を表するの想念が活物を表するの想念に變ぜらるゝなり。例へば「狂瀾怒濤」「歳月人を待たず」「白露や無分別なる置きどころ」などの如し。精しくいはんに、上の例にて、狂す怒る等は、本來高等なる生物の動作に冠すべき名にして、瀾濤などの無生物にはあるまじきことなれど、大海原の暴れに暴れて大瀾巨濤の逆捲くさま、宛然悪鬼羅刹の狂ひ怒るが如く思ひ做さるゝより、さてこそ此の思ひ做しを直に實物の上に被らしめて、瀾狂ひ濤怒るとは言ひたるなれ。歳月はた心ありて人を待ち待たるゝが如きものにあらず、白露に分別なきは固よりの事なるべし、さるを何れも情の激せる

それのみならず呉服屋の手代半兵衞はかの池田屋の小菊にたんと金入れなれば心どんな者でもないに、身のしゆすこすに氣はちりめんの、見世の帳面皆ぬめりんず綸紗もないこと云はしやりんずのはや人魂も飛びさや拔いて、共に刄の路羽ぶたへの、をなじ枕にふしつむぎ、重ね井筒の戀の水むすび汲む手は多けれど色はさま／＼紺屋染め、胸はもえぎに紅ひはだ、さやけき色は此れぞ此の、とくさに染めてさしもげに、心中みがくゆかりかや、花紫に薄淺黄、情の花色ちしめがた紺屋ののりの道ひろく、到り先きだつ此の人々を今身の上に、智識ぞと云々（近松作「心中刄は氷の朔日」）

此はたゞ／＼呉服に緣ある語を臚列するのみの呉服づくしにあらずして、本文に必要なる事柄を陳ぶる傍類喩法によりたるもの、隨うて類喩として一層妙なるものなり。されど其の類語は多くみな本文の句尾を強いて呉服に緣ある語にいひかけたるものにして、地口の境を去ること遠からず、未だ以て類喩法の上乘なるものといふべからず。例へば「見世の帳面皆ぬめりんず」「おなじ枕にふしつむぎ」等の如き「見世の帳面皆ぬめり」又は「同じ枕に臥し」といはゞ足るべきを類語を用ひんためのみにわざ／＼「ぬめりんず」「ふしつむぎ」などゝ言ひ長めたるものにて「ぬめりんず」「ふしつむぎ」はたゞ綸子の名紬の名たる外には何の意味なし。更に同じ「心中刄は氷の朔日」の發端

さりとても戀は曲者みな人の、地金をへらす燒け釘は、たゝき直して、意見して、燒き直いても惡性の酒と色とのかすがひや、煮ても燒いても嚙まれぬは鐵橋あぶりこかな火箸其のくせ細工は器用にて、精さへ出せば二人前せねば釘ぬきぬいていく讀み書きかな文かなばさみ、兎角萬能一れん物、鐵槌こたへぬ鐵釘で後は吹きあけ鞴吹く、鍛冶屋のてこの業てつからりころり、てん／＼からり、ちんがらり、ちん／＼からりと打ちあけて帳面ばかり合ひに合ひ鎚、いかな打出の小槌なりとも、續くべきやうなかりけり云々。

一體の樂に二人對すは何事ぞ。陰陽二つあらざれば萬物調ふ事もなし。勝負はさていかに。人間の吉凶は勝の運にあらずや。さて白黑は。夜晝。手段はいかに、軍の法、切つて押さへて跳ねかけて、軍は花の亂れ碁や、飛かふ烏群れ居る鷺と譬へしも、白き黑きに夜晝も分かで昔の斧の柄もおのづからとは朽ちぬべし云々(近松作『國性爺合戰』)

此は類喩の下層にあるものにて、一題目を捉らへ來たり、其の道の諸事諸譯を一々列擧し講釋するに止まるの法なり。この文例につぎて言はゞ、圍碁道の講釋必ずしも『國性爺』の本文と至要の關係あるにあらざれど、其の場面を飾り賑はさんために圍碁といへる一題目に因みて、種々の類語を駢列するものといふべし。次に物の名づくしにて一文を成すことあり、類喩法のやゝ進めるものなり。例へば

數々めぐる盃の影にうつろふ燈籠の、色をかへ品をかへ、切子太鼓の鳴りもよし、籠に入れたる作り花、桔梗蓮葉、藤の花、風に揉まれて百合の花、あの奧山の一もとすゝき、いつ穗に出でゝみだれ葵の花あやめ、我れが想は深み草、誰れか哀れと白菊や、紫苑がんぴに罌粟しもつけの花桶に、しだれ櫻や糸柳、水なき空の釣舟も、焦るゝ色の紅椿、手まり山吹かきつばた、歌仙の姿おきあげに、文字を透しのすし燈籠、手際やさしき花かづら、振分髮をくらべ來し、井筒燈籠戶やかた、はひまつはるゝ朝顏の、花のうでなの輪々ごとに、ともす燈火きらくとさながら秋の螢飛びかふ宇治川の、網代燈籠文字燈籠、すはま團扇唐うちわ、扇車に水車、油煙につれてくるくと、廻り燈籠影燈籠、月もふけ行く夜嵐に、まはれく品よく廻れ風車、をぐるまの花見車に忍びの車、あゝく百夜の車、よそに主ある袖ひくな、袖ひくな女郎花、戀をすみれか美人草、四季に色ある作り花、手を盡くしてぞ飾りける云々(近松作『嫗山姥』)

の如し。此等は花づくし燈籠づくし團扇づくしともいふべきものなり。次に

り、源氏の物語に、云々の事を枕ごとゝしてと書るは古へごとを籍きもて今の思ひをいふ故の語也、此の冠辭はこを本として下の意をいふにあらず、たゞ歌の調のたらはぬをとゝのへるより起きて、かたへは詞を飾るものにていはれ異なり、かの枕ざうし歌枕などいふを思へばその頃にいへりし也、この冠辭はいと上つ代の物なるからは、かりにも流れたる代のこゝろことばをばいひも出まじきものか云々」といへり。之れに反するものは謂へらく枕とはあながら夜の具を指せるにあらず、頭にあてゝ常に傍を離さゞるものゝ謂なり。したがひて枕詞とは單に句頭に籍きて附屬せしむる詞といはんほどの義と知るべし。枕詞の名を用ふるも不可ならんやと。思ふにこれらは區々たる名目の論にして、冠辭、枕詞の何れと呼ぶも差つかへなきものなるべし。されば茲にはしばらく呼び馴れたる名稱にしたがひて、枕詞と記しぬ。

第十項　類喩法

類喩法とは、一事物と類を同じうする事柄のみを選出して、一段の文を成すの謂なり。全文の裏面に同類の事物といふ影を添ふるの修飾法なり、復言すれば月に緣ある事を叙するにあたりては月に關係せる名詞動詞等を選り用ひて文を成し橋に緣ある事には橋と關係せる語詩のみを用ひて文を成すたぐひなり。近松等の好み用ひたる貝づくし、橋づくし、碁づくし、鎧づくし、花づくしなどの文はすべて此の種の詞藻に屬す。左に其の文例を示すべし。

吳三桂興に乘じ、なう〳〵老人に物申さん、市中をはなれし座隱の遊び面白したりながら琴詩酒の三つの友をはなれ碁を打つて勝負を爭ひ給ふこと別に樂む所ばし候か。翁さして答なく、碁盤と見れば碁盤にて碁石と見る目は碁石なり、大地世界を以て一面の碁盤となすといへる本文あり、心上の須彌山是れにあり、大明一國の山河草木今玆より見るになどか發らん、一角九十目、四方に四季の九十目、合せて三百六十目、一日に一目を送ると知らぬ愚さよ。面白し〳〵天地

直接に關係せざるを本旨とす。而して題意は固より下句にありて、上句は贅餘の裝飾物たるに過ぎざるべし。但し贅句なりとはいへども、文字の裏面、句の音調等のおのづから題意と通ずる所ありて、一句の情趣を助くるものなるは言ふまでもなし。されば要するに枕詞は本文の事柄と直接に關係なき附贅の詞なる事及び意味の上又は音調の上にて下句本文の句頭の一語と聯接する事の二件を要す。

（參照）枕詞の起これる所以に就きてはこゝに詳論するを得ずといへども、上古よりありしものにて『冠辭考』にも「此の言は上の世の上より中つ世のくだちに至りて今に傳れる色は三百にあまり數は六百にも足りやしぬらん譬へば冠の品位も衣のくさ〴〵も代々を經て物さはになりたるが如し、又歌のみにもあらず文をあやすにも此の言を冠らしめたり「宵髮ふる櫛なだひめ青雲の白かたの津」などいへるたぐひなり云々」といへり。依りて思ふに上代にありては言文すべて調節を有したれば此の句調節奏を諧へんために句の足らざる所に贅語を冠せしが枕詞の起原なるか、將た上代の人は事物を比喩的に見るが常なるより、或は形狀の上にて或は音聲の上にて少しにても類似せるものをば直ちに連想し、自然之れを口にするに至れるが枕詞の起原なるか、二者の何れ是なるかは研究を要すべき事なるべし。すなはち「鳴る神の音にのみ聞く云々」といへるは「音にのみ聞く」といふより直ちに雷の事に連想して「鳴る神の」と冠せしものか、又は「音にのみ聞く云々」にては語足らずして調を成さゞるより單に此の缺を補はんために此の句に縁ある「鳴る神」を假り來れるものか、或はこの二事情相依りて成り出でしものか容易に定めがたしといふにあり。

また枕詞といへる名稱につきては古來異論あり。『冠辭考』には「これ或人はまくら詞といへるを荷田の大人はかうむりことばといひつ、げに枕詞とては古きみやび言とも聞えず、まくらは夜のものにてかたより冠りは日のものにてもはら也、物を上におくことを冠らすといふもいにしへ今に通へる語なれば是によれり、そもはた古へよりいはましかばさてもあるべきを公望が日本紀私記にかのいすゞにしちはやぶるなどやうのことをば發語と書て侍り、然ればば枕詞てふ語は延喜承平などの御時まではなく後にいひ出したりけ

わがせこが衣のすそを吹きかへしうら珍らしき秋の初風(「古今集」)

この歌の如き、更に妙なり、上三句は一方よりいふときは「うらめずらしき」の「裏」といふ語を引き出ださんために冠したる序詞なると共に他方よりいふときは此の序句あるために秋の初風の我がせこが初袷の衣の裙を吹きかへす樣眼に見ゆるやうにて清涼の情致全句に溢れたり。序詞を用ふるは此の邊を極所とすべきなり且つ斯かる境に至れば冠辭と掛詞とは殆んど別なきを見る。「新古今」時代以後の歌人が之れを襲用して細巧至らざるなき由は掛詞の條下に言へり。

道のべの小野の夕霧たちかへり見てこそ行かめ秋萩の花(實朝)

春日野のわか紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られず(業平)

みかの原分きて流るゝいづみ川いづ見きとてか戀しかるらん(兼輔)

此等はやゝ巧なる序詞の例なり。

總じて枕詞と掛詞との別は上句の意味と下句なる本文の意味との關係如何にあり。上句は上句にて一の意味を成し下句は下句にて一の意味を成したゞ上句の句尾と下句の句頭と同音調なるため重なりて一につゞまりたるまでなるは、掛詞なり。例へば、「今日別かれあすは近江と思へども夜や更けぬらし袖の露けき」といふが如し、「今日別かれ明日は逢ふ身」といふと「明日は近江」といふとを言ひ掛けたるが一句の作意にして、今日別かるゝと明日は近江路に着くとは共に題中の事柄なるが故に「今日別かれ明日は」の八言を序詞と見做すを得ざるなり。之れに反し「たちわかれいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば今歸り來ん」といへるは、上三句を序と見るべく之れに緣りて僅かに下句なる「まつ」の字を引き起こし來たるなり、(「立ちわかれ往なば」の句また本文に關係あるは勿論なり)即ち枕詞(無論序詞をも含む)は上句の表面の意味と下句本文の意と

みすゞかる信濃の眞弓わが引かばうま人さびて否といはんかも

之れを他の

梓弓ひかばまに〳〵よらめども、後の心を知りがてぬかも

といへるに比するときはます〳〵序詞と枕詞とのさしたる別なきを知り得べし。前者は「みすゞかるしなぬのまゆみ」と二十七言につゞき、後者は「あづさゆみ」と一句五言に終れるため一を序といひ他を枕詞といへど意は全く同一なるを見るなり。

其の他

梓弓手に取りもちて丈夫のさつ矢手挾み立ち向かふ高まと山に春野燒く野火と見るまで燃ゆる火をいかにと問へば、玉ぼこの道來る人の、泣く涙ひさ雨にふれば、白妙の衣ひづちて、立ち留まり吾れに語らく、何しかももとないへる聞けば音のみし泣かゆ、語れば心ぞいたき、すめろぎの神の子の、いでましの手火の光ぞこゝに照りたる。

初の二十九言はたゞ之れ「高まと山」の「まと」といふ語を引き出さんための序詞なるのみ。而して此の序詞中、或は多少高まと山に葬られたる志貴親王の武勇を讚するの意籠れりとするも、其は極めて薄微なるものにて、殆んど五句二十九言の序詞と其の以下の本文則ち志賀親王の薨去を痛める文意とは、關係なしとも見らるべし。到底序詞は枕詞の大端なるものに過ぎず。序詞の能く本文の意を助けて餘情を深からしめたる例は

足びきの山どりの尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寢ん(柿本人麿)

三句十七字の序詞別に深意あるにあらねど只調子何處ともなく長々しき心地して、夜の長々しきさまを形容し得たり。すなはち十七字は表面上下句の本意と關係せざるも調の上より間接に長々し夜の形容となれるものといふべし。また

いへども、春草の繁く生ひたる、霞たつ春日のきれる、もゝしきの大みやどころ見れば悲しも、(柿本人麿)

やゝ下りては枕詞を文にも用ひたり。

其のうへ自ら定め自らみがけることは遠くもろこしの文の道を尋ぬれば濱千鳥の跡ありといへども我が國やまと言の葉の始りてのち呉竹の世々にかゝる何なんなかりけり云々(「新古今集」の序)

文の林世々におとろへ言の葉の道日々にくだりゆきけるを賀茂の翁世に出て今を捨てゝ古へにかへり青雲の高き心しらひて求めしづ機のあやあるみやび事をたふとみいへれど云々(村田春海の「琴後御集」)

純然たる枕詞の外に和學者の序詞と稱するものあり。枕詞は通例五字より成れる句にして、序とは十二字十七字乃至二十字三十字續きたるものをいふ。されど此は形のみの差別にして語句の性質上よりいふときは、殆んど之れを分つの必要なし。たゞ序詞は枕詞の如く一句と限らず、幾句も續け得るが故に、之れによりて本文の意味を補ひ得べく、枕詞が本文の意と直接の關係を有せざるを本來とするとは、やゝ趣の異なれるを見るのみ。枕詞といふとも巧なるものに至りては本文の意を補ふの用をなすことあるは前にもいへる如し。或は時として一首の歌の七八分まで斯かる冠辭に成り、本文は僅かに餘の一二句に盡くるが如きこともあるより、之れを直に枕詞と呼ぶに忍びずして、別に序詞と稱するに至れるものか。上田秋成の「冠辭考續貂」に、「五言七言のみならず十二言十七言にもかゝむらすを誰れぞや序歌と呼びならはせしを、こもいかにぞや思ゆ、序とは文家次二第其事一列二卷首一と云義なる由には此の裝のみにあやなしつる言の名にふさはしくもあらぬ」といへるも道理なくはあらず。

さて此の種の序詞を用ひたる例は「萬葉」に

といふ語を以てし「しらま弓春にもなれば云々」とつゞけて「春」と「張る」とを通はしむるたぐひと意味相受けて一義を成し殆んど普通の形容詞と異なる所なきもの例へば「足びきの山又山」「膽向かふ心のまゝ」などのたぐひ是れなり。一は「しらま弓張る」の「はる」と「春にもなれば」の「はる」と單に同音なるのみにて意は全く別、且つ「白眞弓」と下句なる「春にも成れば云々」の事柄とも全く無關係なれど他は此の際音のみならず意も相通じて「膽向かふ心」といふときの「こゝろ」と「心のまゝ」といふときの「こゝろ」と同義なる差あるを見るべし。但し二者共に本文の事柄と冠辭とは直接に關係なきを枕詞の本來とす。「心のまゝに云々」といふ事柄と「膽向かふ」といふ事柄とは何の因緣もなくたゞ頭句なる心といふ一語の形容言たるに止まるの類なり。されど枕詞の上乘なるものに至りては往々本文の事柄とも關係を有して大に文の妙味を增すことなきにあらず。たとへば

朝髮の思亂れてかくばかりなねか戀ふれぞ夢に見えける(『萬葉集』)

此の歌に於ける「朝髮の」の一句の如き、本來は枕詞なれども留守の人を思ふて夢にまで見しぞといふ意に善く叶ひて「思ひ亂るゝ」と「朝髮の亂れたる」と相通ずるなり。以上の二種の外やゝ趣のかはれる一の枕詞あり。疊音法の理を應用して「霰打つあられ松原」などいへる類是れなり。されど此の例はさまで多からず。

枕詞の用例は『萬葉集』中の長短歌に極めて多し。

玉たすき畝火の山の、橿原のひじりの御代ゆ、荒れまし〻神のことぐ〻つがの木のいやつぎ〳〵に、天の下しろしめしゝを空見つやまとを置きて、あをによしなら山越えて、如何さまに思ほし召せか、天ざかる鄙にはあれど、岩ばしの近江の國のさゞ波の大津の宮に天の下しろしめしけむ、すめろぎの神のみことの、大宮は此處と聞けども、大殿は此處と

こゝは八島の浦づたひ海士の家居もかす〴〵に釣のいとまも波の上かすみわたりて沖ゆくや海士の小船のほの〴〵と、見えて殘る夕まぐれ浦風までものどかなる春や心をさそうらん云々(同「八島」)

これたゞ一例にすぎず。和歌にては「新古今」時代のひたすら言葉を弄べる歌風以下に此の例多し「新古今」の歌の如きは殆んど總べての掛詞に成れりといふも不可なかるべし。例へば

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたゝん名こそ惜けれ(周防内侍)

逢ふ事はいつといぶきの嶺に生ふるさしも絶えせぬ思なりけり(中宮大夫家房)

消えわびぬ移らふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露(藤原定家)

等一々數ふべくもあらず。

語路は地口と似たるものにて、專ら他句の語路のみを摸し全く別なる句を造るをいふ。「溫泉の保養」といひて、其の裏に「門前の小僧」といふ語路を髣髴せしむるの類是れなり。價値少なき修辭法たるを免れず。

枕詞は一種特別の詞藻にして、意味上、本文とはさまで重要の關係を有せざる語を單に修飾のために句頭に冠せしむるものなり。例へば「吳竹の代々」「言さへぐ百濟の原」等の如し。されば枕詞に依りて一句を飾れるさまは、官人の冠を着けて容を端せるに似たりといふべきか。加茂眞淵の「冠辭考」に「又この姿の事、歌はむにも言の足らぬ時は上にうるはしき言を冠らしめて調を成せりける、譬へばよそほしき冠を設けて頭に置くが如し卽ち高ゆくやはやぶさ別のみむすひかねと歌へるたぐひなり云々」といへるもの是れなり。

枕詞の造句法は大體二種とすべし音の似通へる語句を掛詞と同じ風に續くるもの例へば「春」といふ語に冠するに「白眞弓」

の道ふみの道文字も働く口ずさみ云々（近松作『國性爺合戰』）

親は他國の死目なりとも年のうちは廓の外へ一足にても踏みも通はぬ遠國波濤へ賣りて遣り手や姉女郎の掟背かず勤させもが露ほども奉公に如才なく客をば振らず心にかけて、まはる紋日を一日も怠らせ申すまじ、第一には間夫ぐるひ浮名ほぐるに入れ性根する男あつて、勤粗末にいたすに於ては看のまゝながらの橋におろされ、又は水仕の下女にせられてかまどの火を焚き湯殿の水くみ門掃き、背戸はき、庭の掃除の塵や芥や紙くずの葉のうらみと存じ候らふまじ、萬一此の者年のうち廓を逃げて走り井の水に身を投げ刃に伏し、心中して死たりとも、御難はかけじ何方までも、請人いでて捌き髮、油元結紅鼻紙、足駄せきだに至るまで仕着せの外は身の入れたてとの定なり云々（同『百日曾我』）

天滿に年ふる千早ふる神にはあらぬ紙樣と世の鰐口にのるばかり、小春に深く大幣の腐り合ふたる御しめ繩、今は結ぶの神無月、せかれて逢はれぬ身と成り果て、あはれ逢ふ瀬の首尾あらばそれを二人が最後日と名殘の文のいひかはし夜毎夜毎の死覺悟云々（同『天の網島』）

小春も脇差取り上げ洗いつ漉いつ撫で付けし、むごや惜氣もなげ島田、はらりと切つて投げ捨つる枯野の芒夜半の霜ともに亂るゝ哀れさよ云々（同上）

其の他『若紫の色も香も無常の風に縮緬の此の世あの世の二重まはり』。『心もせきに關の孫六』『何のいらへも涙ほろりの顏ふりあげ』等枚擧に遑あらず。また謠曲にも掛詞を用ひたるもの頗る多く往々五月蠅きほどなることあり。

何處とも定めぬ旅をしなのぢや月をとも寢の夢ばかり名殘を忍ぶ故さとの淺間の煙立ち迷ふ草の枕の夜寒なる旅寢の床のうき涙のもり山の宿に着きにけり（謠曲『望月』）

花を流すは芳野川、紅葉を流すは立田川、錦の緘のからくれなゐ、風に散り行く木の葉武者流すは須磨の浦浪云々（同上）

憂をば留めぬ相坂の關の清水に袖ぬれて、末は山路をうち出の濱、沖を遙かに見わたせば、鹽ならぬ海にこがれゆく身を浮船の浮き沈み、駒もとゞろと踏みならす勢多の長橋うち渡り、行きかふ人にあふみ路や世のうねの野に鳴く鶴も子を思ふかと哀れなり、時雨もいたく森山の木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見え分かず、物を思へば、夜の間にも老蘇の森の下草に駒を止めて顧みる古郷を雲や隔つらん、番馬醒が井柏原、不破の關屋は荒れ果てゝ、猶ほ漏るものは秋の雨の、いつか我が身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏し拜み、潮干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰れかあはれと夕暮の、いりあひ鳴れば今はとて池田の宿につき給ふ云々（太平記）

又も都を迷ひ出でいつかはめぐり逢阪の關路をあとに近江路やみのをはりさへ定めなき戀しく／＼に目を泣きつぶし、物のあいろも水鳥の陸にさまよふ悲しさはいつの世いかなる報ひにて重ね／＼の歎のかず憐み玉へとばかりにて聲を忍びて歎きける云々（山田案山子作「朝顏日記」）

これらは多く物の名に言ひかけたる掛詞にして、道行の文句などにしば／＼見る例なり。掛詞を最も巧に用ひしは近松門左衞門なるべく、彼れの淨瑠璃中には其の例極めて多し。

爰に帝の御妹術櫃皇女と申せしは、まだ御年も十六夜の月の都の宮人の鏡や此の世にふる露の玉を展べたる御姿、昔繪

より栗に連想し之れと阿波とを通はしめたり。地口の最も普通なる效果は可笑輕快の情を刺戟するにあれど、時としては他を嘲弄する意にて用ふることあり。是れはた語にをかしみを含むより來たるものには相違なけれど微に反語の氣味ある點にて別あり。他人に對して「恐れ入りたり」といふべきを「恐れ入り谷の鬼子母神」などいふは卽ち是れにて、俗にいはゆる人を茶かすの語法なり。是等は要するに極めて眞面目に鄭重なるべき言葉の句尾を正反對なる無意味浮淺の句にて受くるを法とす。また強ち嘲弄の意にもあらねば滑稽の意にもあらず、只語呂を滑にせんため又は語を簡にせんために地口を用ふるものあり。此は旣に純粹なる掛詞の部に入れるものにして、上に擧げたる「世の中や蝶とまれかくもあれ」の句の如きは「蝶々宿まれ」といふと「右まれ左もあれ」といふことにかゝりたる掛詞、其の內に可笑味あるにも拘らず殆んど旣に地口の範域を脫したるを見る。「世の中は兎まれ角もあれ」といふ超世的の觀念に「蝶々」の一句を加えて「とまれ」の語を活し莊周の夢以來斯かる觀念に緣深き一種の夢幻めきたる感情を言ひ盡くしたるかたはら語呂を流麗ならしめたる妙句なり。

純粹なる掛詞の文例

面白の賤が仕業や、さんろならねど吹く笛も、寢よげに見ゆる若草の花紫の藤袴紫苑りんどうわれもかう思ひの色はいは躑躅、言はで焦れてやまぶきや忍びくる〳〵風車姿たえなる姫百合に、いつか添寢の床夏や、名もゆかしきは美人草かほよ花こそ一しほに、色も匂もふかみ草、置く白露の玉椿身をせばめつゝ影やどす月見草こそやさしけれ云々（土佐淨瑠璃）

春も過ぎ夏もたちまち秋風に吹き替はりつゝ薄散り萩はこぼれて菊の花咲き出づる頃となりにける云々（柳亭種彥作『田舍源氏』）

地口は普に俗談平話に用ひらるゝのみならず、俳諧にも是れあり、殊に夫のをかしみを主とせる檀林には最も多し。

ながむとて花にもいたし首の骨（西山宗因）

世の中や蝶々とまれ斯くもあれ（同上）

そばに居て見ぬや吉野のはなのさき（池田正式）

春たつやにほん日出たき門の松（齋藤徳元）

海棠かいやさやうにはなしの花（野口立圃）

其の他俚諺童謠などにも地口を用ひたるもの多し。「追腹を切らう〳〵とまつだひら大隅いたむをばよくも切りてき」「世の中にかほどうるさきものはなしぶんぶというて夜も寐られず」「三度炊く飯さへ硬し柔し思ふまゝにはならぬ世の中」等は狂歌の類なり。

地口は何人もならひ易き語法なれど其の價値少なきため西洋にて之れをパン（Pun）又はパロノマシア（Paronomasia）と稱して賤めり。

地口の造句法は大抵上句と下句との間を同音異義の語を以てつなぐことゝ同音又は同口調の語を以て異義を言ひあらはすことゝにあれど時としては二者の間に更に他物を介し之れによりて同音調を保つものあり。例へば俗言の「七月の槍でほんやり」といふが如きまたは北村季吟の「女郎花腕はゝあはの内侍かな」の如きこれなり。「七月」といふことゝ「ほん」といふことゝ直接には類似せる所なきも「七月」といふより盆といふに連想し之れによりて「ほんやり」の「ほん」と接續をしたり「女郎花」といふと「阿波の内侍」と（詩歌的形容は別とし）いふとは言語上何の似たるふしもなけれど女郎花の形の粟粒に似たる

今はむかし地口好の伴頭見世に帳合をして居る、又地口ずきの按摩表を按摩針の療治といふて通るを呼びこんで、コレお坊は地口ずきか、おれも地口は好きだ、今夜は療治をしながら地口が聞きたい、之れは願ふ所左様なら御商賣の酒のくしでお前さまからおはじめ成されませ。ヲヽ其れならまづ劍びしが伊丹やす上から富士のあたりまで揉んで貰ひたい。ヲッと燒酎〳〵なんぼお前がふじ身でも、こうもんだら紙屋のきくかねへ。是れはありがた山々もつとぴんとするやうに九のあたりから七つ梅まで賴みます三洲ではない按州といへば。アイあい酒〳〵といひながら揉んで、もゝつとぴんと揉めといふ故、之れはもめんやの男山だといふと、伴頭むつとして。コレ錢を取りながらもめんやとはなんの事だ。ハイ御免酒〳〵。ヤア口巧者なべらぼうめだと取つてかゝる。勝手から大勢出て滿願寺しなせゑ〳〵（嶌馬の『開卷百笑』）

ハヽア角をお打ちなすつたか、飛車取らうと打つて爰へ成らうといふ腹か、ハテこれには『困つた飛車とり談合かい、イヤ斯う引いて呉れう。それでもお成のかば燒まづ香一枚有がたいと戴く。遣るさ遣つて指すッ、イヤかうしちやァどうする。かうしちやァどうすると、ハテナ取つてしまふ、ソコデ銀がうせる、桂で取る、ムヽまて〳〵飛車のござる氣づかひもなくと、先づ角をおも〳〵と元の所に御なほり候へ、と引く。ハヽア打つたな〳〵こゝへ角を打たれやうとは存じもつかぬ、イヤ取れ〳〵。こつちも取れ〳〵。さて象棋は亂軍となつたの、と後からのぞきながら、コウ〳〵三公、此處に妙といふ手があるぜ、コレサ〳〵爰へ香を打つて何になるものか、アレ〳〵向のけつッぱたへ銀を引いときねへ、たゞ取られる。ムヽ成りか。ホイ〳〵助言それでよしか、たとへ成らねへも角だァ、たゞとり薩摩の守。そこに手もあれば足もある、コウ三公、おめへの手に何がある。香桂、あとは步ばかり。香桂さきに立たず、サアどうする〳〵、下手の考へ休むに似たりだ云々（三馬作『古今百馬鹿』）

第九項　詞喩法

こゝに詞喩法といへるは、極めて廣き意にして、聲喩法の聲に基づきて喩を立て、字喩法の字に基づきて喩を立つると同じく、詞に基づきて喩を立つるをいふなり。「いらへもなくばかり」などいふときは、「無く」と「泣く」と單に詞の相似たるがために合して一となり「いらへも無く」かと見れば其の傍らに「泣く」といふ想念を附加し來たり「泣くばかり」かと見れば其の傍らに「無く」といふ想念を附加し來たるの類、すなはち是れ。されば詞喩法といふ中には、在來の掛詞、枕詞、地口、語路のすべてを包括す。掛詞とは同音異義の語を用ひて暗に或は明かに一語に二義を通はしたるの謂なり例へば

月も日も庭より出でゝ庭に入る、廓の内の武藏野や、半木の長が廣庭の、光琳風の築山を見わたす眼さへはる〳〵と谷の岩組つゝら折、筑波の山もはつかしの森と繁りし植込は、華麗を盡くす物ずきの、松の造り木造り枝、庭の松風三味線のてんじゆに通ふ細廊下、數寄屋が軒の南天に、珊瑚繋ぐ玉すだれ、萩は宮城野つゝじが岡、梅や櫻の花紅葉、天より四季の仕きせして、手形の外の色ずくめ、金ずくめなる身の榮花、金のかんむり被ぬばかり、しやくは持病にありとかや云々（近松作「傾城酒呑童子」）

此の文中「はつかし」の語は一面上の何なる「山も」に續きて「山も恥かし」といふ義を含み他面に「はつかしの森」といふ名詞となれるものにて一語に兩義を兼ねたり。又「てんじゆ」の語は「三味線の天柱」と「天守に通ふ」との二義を併せ示せり。是皆は掛詞の本領なり。「しやくは持病にあり」の「しやく」は癪と笏とを通はせたるものにて、地口語路などいふに近く「其のつらで鑿すきどころか嚙みつきそうだ馬士顏のうしろで麁きかへしての紙すきがいゝ」などは純然たる地口なり。

地口の論の上の戲れにして只其の場にて一見人の頤を解かしむれば足る。他の掛詞に比して價値劣少なり。

などいふがありたるも同理なり。

僞りの文字をわくれば人の爲身の爲ならず戀ならず心なけれど濡衣が、なきつまの名も勝頼に、伴ふ人も勝頼と、いふてよし有る簑作が、ちらしくばりて染賣り（近松半二等作『本朝二十四孝』）

僞の字につきて字喩を立てたるなり。また假名の排列順序を變更したる字喩法にては

なかきよのとおのねぶりのみなめざめなみのりぶねのおとのよきかな

といふ歌が上より讀むも下より讀むも同義なるの類、または英語にて Parliament 卽ち國會といふ字を二つに割き Partial men 卽ち黨派的の人といふ語とするの類あり。支那にて字謎と呼ぶものまた字喩法の一種なり。宋人の作に

頭如刀　尾如鉤　中央横廣　四角六抽　右面負兩刀　左邊屬雙牛

といひて龜といふ字を表したるが如き是れなり。離合體の詩と稱するものには

子山園靜憐齒木　公幹詞清詠華門　月上風微蕭灑甚　斗醪何惜置盆樽（唐の陸龜蒙）

といひて木公の二字に松の字を作り門月の二字に閒の字を作り甚斗の二字に斟の字を作り松閒斟といふ三字句を成すものあり。字の順序を轉倒して別の意味をなすものをば廻文體といふ。

春晩落花餘碧草　夜涼低月半枯桐　人隨鴈遠邊城暮　雨映疎簾繡閣空（宋の蘇東坡）

の如きは之れを倒さまに讀むも

空閣繡簾疎映雨　暮城邊遠鴈隨人　桐枯半月低涼夜　草碧餘花落晩春

といふ詩をなすの類、見るべし。

醉象の荒れたる勢、半時ばかり打合ひしが、永吉劍を受けはづし、左手の肩口切り込まれ、いぬるにどうと臥したりけり、鐵故山猪力を得秘術を盡くす後より、錦舍は劍提げちよこ〳〵と斷けよつて、股の根付をちよつと切り、脇へまはつてちよつ〳〵〳〵膝口をちよつと切り、後へまはつてちよこ〳〵〳〵、こぶら高股をちよつとちやつり、ちよつ切り、エ、間にも足らぬ蜻蜓め、邪魔な奴と睨んでも、拔けつ潛ッつ身は輕く、猴に恐れぬ荒駒を、蠅の惱ます如くなり云々

（近松作『國性爺後日合戰』）

此等はむしろ一層多く動作に關せる聲喩法とも見るべきなり。

（參照）　聲喩法は英語にてオノマトピーア（Onomatopoeia）といふ。漢語にて「丁々」といひ「堂々」といひ「颯々」といひ「斷蹤」といひ「錚鏦」といふたぐひも本來は聲喩法に屬するものなれど、邦人に取りては、其の語に一種固有の意義あるが如く思ひなされ、却りて音調法の部類に入ること多し。是れ一は漢語の原音と邦人が之れを輸入せし後の音と同一ならず、爲に邦語としては必ずしも聲喩の理にかなはずして、単に支那に典據あり用例あるが故にといふのみに由り之れを用ふるの結果なり。即ち「丁々」といへば「とう〳〵」といふ聲喩法としてよりも寧ろ木を伐る音といふ固有の字義として之れを解するの類なり。

第八項　字喩法

字喩法とは字形に基づきて比喩を立つるの修辭法なり。精しく言へば字形上の關係によりて想念を増殖し、以て其の思想の結體に資せんとするものなり。往時俗間に用ひし草體文字にて伊勢の伊の字を人偏に尹といふ字の如く書きなし、勢の字を生の圓に作る習ひありしため之れを分解して「人尹かに生まるゝは丸が力なり」と讀み伊勢の大神宮は產の事に與かりたまふといふ滑稽の意を附加したるが如き此の例と見るべし。また俚歌に「松といふ字を分析すればきみとぼくとの差し向かひ」

ア丶是れでも世繼が此の世にあれば戀のあだ、妬ましやつらや憎くやとすつくと立ッつどふと居つ、齒がみ齒たゝきかたかた〳〵、今の間に世繼めが死ねがな〳〵、天も落ちよ地もさけよ、山も崩れて落ちかゝり、世繼が五體碎けよかし、憎ッくしにくしの亂れ髪、かもじほどけて千早ふる悋氣の髪はなき世かの、庭の植込松杉も神木と觀念し、しんゐのかな釘心のかな槌、打ち殺したや殺したや、くしげ見れども刄物はなし、エ丶何とせん、是れよ〳〵、二面の鏡おもひ付いたりあらうれし、鏡は女の魂、武士の太刀かたな、本望遂げん銘のもの、得たりやうれしと走りよれば、柳の髪も我が涙も、共にばら〳〵ぱら〳〵〳〵、腹立ちや此の鏡、世繼御前が朝夕に、紅白粉の砥ぎ磨き粧ひ作つて主のある男を寢とる第一の憎いやつは此の鏡云々（近松作『艶狩劒本地』）

これまた文勢の迫りし場合を示して「かた〳〵」といひ「ばら〳〵」といふと前後の口調とよく調和せるものなり。

與一鏑を取りて番ひよつぴいてひやうと放つ、小兵といふ條、十二束三つぶせ、弓は強し、鏑は浦響くほどに長鳴して過たず扇の要ぎは一寸ばかり置きて、ひいふつとぞ射切りたる、鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける、春風に一もみ二もみ揉まれて海へさつとぞ散りたりける、皆紅の扇の、夕日の輝くに白波の上に漂ひ浮きぬ沈みぬゆられけるを沖には平家舷をたゝきて感じたり。陸には源氏箙をたゝきてどよめきけり（『平家物語』）

露とく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや（松尾芭蕉）

ほろ〳〵と山吹散るか瀧の音（同上）

「ひやう」「ひいふつ」「さつと」「とく〳〵」「ほろ〳〵」等皆然り。

鐵故山は聞こゆる大力、一丈あまりに石突なく兩方鏐のやうなる大の鋒提げ、二人を左右に見下して、輪鋒の岩を割り

必ずしも羞と爲さざる也」と曰へる、以て古人の苦心を窺ふべし。

第七項　聲喩法

聲喩法とは事物の音を其のまゝ借りて修飾とするの謂なり。琴の音を形容して「瑟々錚々」といひ、雷の響くさまを言ひあらはして「おどろ〳〵しく」といひ、鳥の鳴く聲を摸して「ちよ〳〵」といふが如きこれなり。蓋し聲喩法は、たゞ一筋に事物に心奪れたる刹那、覺えず識らず對境の音を我れの聲もて摸せるに起こり、之れを附加することによりて、其の事物を一層活現的ならしめんとするものに外ならず。されば彼の音調の條に論ぜる語勢法其の他聲音の表情を利用する諸修辭法と密に相聯絡す。相異なるは、彼れにありては、凡て既成の言語といふ範圍内に於ける聲音を、我れの情若しくは事物の音と應ぜしむるを本意とし此れにありては、未だ言語を成さゞる聲音を以て事物の音を摸するを本意とす。

聲喩法のうち強ゐて分類をなさば、事物の聲音そのまゝを摸するもの、例へば前掲の「おどろ〳〵しく」「ちよ〳〵」等の如きと、事物の動作を摸すと稱せらるゝもの、例へば「ゆう〳〵と立ち出づる」「ぐさと突き込む」等の如きとなり。されど第二者、事物の動作を摸すと思へるものも、實はかすかに其の動作より生ずる音を摸せるものに外ならねば、玆には無用の分類を成さゞるべし。さて聲喩法の例を舉げんに

うらめしの鈴蟲、松蟲、泣くべき原では泣きもせで、君様とわれとの間をきれんやきれあんれ、きれ〳〵ちんからころりと鳴くの、憎くさよ（一、總まくり）

「ちんからころり」は蟲の鳴く音の聲喩法なり。「きれんや、きれあんれ、きれ〳〵」はすなはち語にしておのづから聲喩の力をも有する音調法なり。此等相つらなりて妙辭をなす。

が俳句の如き、一は函谷關の故事を引きたるもの、他は「端正容貌若陽春」「槿花一朝榮」等の古句に因めるものにして、而も原文の語句をば些も假用せず。之れに反して「浮世はまことに塞翁が馬なり」などいふときは「塞翁馬」の事柄と語句とを併せ引けるものとなるべし。

（參照） 引喩法は英語にてアリュージョン（Allusion）と稱す。之れに關する規則ともいふべきもの、第一引喩法は力めて何人にも解し易きものを擇ぶべし。少數の學者專門家にあらざれば解せられざるが如きは詞藻の本意を失ふものなり。人既に己が思想を文字、言語にあらはす以上は其の意必ずや成るべく廣く永く人にも傳へんといふにあるべければ已むを得ざる場合の外は及ばん限り避けるといふことに注意するを至當とす。若し難解の故事故語を引かざるを得ざるときは之れに相當の說明を附すべきなり。第二引喩法を用ふるは他の比喩とひとしく自然なるべし。ことさらに博學を衒はんため又は人を迷はしめんため自家の記憶にもなき故事故語を探り求めて用ふるが如きは弊なり。されど此の一事は徹頭徹尾排すべきものといひがたき節あり。時としてはわざ〳〵探し得たる引喩が他に得難き好說明好裝飾となることなきにあらず。また古人には已れの記憶に熟せる故事故語をも之れを用ふるにあたりては孟浪にせず一々出所を討檢するものあり。津坂孝綽の『夜航詩話』に「事を用ふるに照管を失へば笑を貽すこと少なからず故に爛熟といへども亦須く檢看すべし。『四溟詩話』に曰はく事を用ひんには心目の間に了在すといふとも亦當に時に就きて討へ用ふべし卽ち記すること牢うして誤らずと。端に格言也。李義山詩文を爲るに座上の書册排比して前に滿ち以て考用に資したり時人之れを獺の魚を祭るなりと謂へり。楊大年文章を爲るに用ふる所の故事常に子弟諸生をして出處を檢討せしめ毎段小紙を用ひて之れを錄し文既に成れば卽ち錄せる所を粘綴して之れを蓄へたり時人之れを衲被と謂へり。歐陽永叔文を爲るに至熟の故事といへども亦出所を檢し然して後筆を下せり。黃魯直も亦自ら常に言へらく詩文を作る毎に檢閱を厭はずと。余嘗て以爲へらく名匠の製作は手を縱ちて揮霍す諸れを腹笥に取れるのみ我が輩の一詩文を作る毎に此の題の書籍を將りて捜さゞる所なきが如くならずと。四君子の勸を見るに及びて亦未だ

も網に入りぬ、獣ならずも狩場にあり、三寸息絶ゆれば絆みな休まん、脱れ果てじと見えたりける云々(同上)

エ、聞きわけなしと引き切つて、舟をふかみに漕ぎ出せば、詮方波に身をひたし、只手を上げて舟よなふ、舟よと呼べど出舟の、かいなき巖に駆け上り、足をつま立のび上り、見送る影も遠ざかる、唐土の望夫山わが朝のひれふる山、今の我が身の我が思石ともなれ、山ともなれ、動かじ去らじとかきくどき、涙限り聲限り互に寄れば招かれて姿を隠す沙ぐもり云々(近松作『國性爺合戰』)

太液の芙蓉未央の柳もけに通ひたりし形を、唐めいたる粧は麗しうこそありけめ、懐かしうらうたげなりしをおほし出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき羽をならべ枝をかはさむと契らせ給ひしに、かなはざりける命のほどぞ盡きせずうらめしき云々(紫式部作『源氏物語』)

誰やらが姿に似たり花の春(松尾芭蕉)

路傍の槿は馬に喰はれけり(同上)

夜をこめてとりの空音は謀るとも世に逢阪の關はゆるさじ(清少納言)

引喩法の例は詩歌文章ともに多し。其の淵源につきては、西洋にては聖書、希臘文學等を最とし、經文的引喩、古典的引喩等の分類すら生ぜり。我が國にては支那の文學に淵源せるもの最も多し。是れ往時のわが學源學風の然らしめし所ならん。また若し引喩法を分類せんとせば、其の顯に引喩せるものと隠に引喩せるものとを分かち、隠に引喩せるものゝ中にても事を取りて語を捨てたるものと、語をも併せ取れるものとを分かつ等のことあり。隠なる引喩と顯なる引喩との例は前に舉げたり。事のみ引けるものと語をも併せ引けるものとの例を示さんに上にいへる清少納言が「夜をこめて」の歌の如き又は芭蕉

意すべし。蓋し直喩法隱喩法等にありては、喩義の文中多少本義に關聯せる文字あるを常とすれど、諷喩法にありては全然本義を言外に退くるを目的とするがゆえに讀む人の心々にて如何樣にも解せらるゝことあるべければなり。

第六項　引喩法

引喩法とは古人の成語または故事を挿みて文を裝飾するの謂なり。而して引喩法の本來は隱喩法とひとしく本義と喩義との別を隱すにあれど、他に直喩法の如く明らさまに引喩法たることを示すものあり。後者は之れを引用法ともいふを得べし。人の隱れて出でざるを「岩戸がくれ」といひ「先づ己れよりせよ」といふべきを「請ふ隗より始めよ」といふが如きは前者なり。「衆口金を鑠かすと古人の金言宜なる哉」などいふは後者なり。

引喩法の文例下の如し。

されば愛想慈悲は遂多が五逆にすぐれ、方便の殺生は菩薩の六度にまされりとか、これを見、かれを聞き、他を是非知らぬ身のゆくへ、迷ふも悟るも心ぞや、されば心の師とはなり心を師とせざれど、古き詞に知られたり云々（謠曲『熊阪』）

伏姫はなか〱に見るも齊忌しく疎ましくて、絕て言葉もかけ給はず、石室の端にちかう居て、硯に墨をすり流し、殘りすくなくなりにける料紙の皺を引き延ばして、わがうへ、權者の示現まで、ことばみじかく義理ふかくいと哀にぞ書き給ふ、折しもあれ、水は瀨まくらに轟きて三閭太夫がうらみおもひやるべく、松はをのへに吟じて有馬皇子が無常を示せり云々（馬琴作『八犬傳』）

加旃とのかたは連綿として杳なる河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け膂力衰へず、よく見八に捷ち得るとも蜑氏が飛鳶を借らざれば虛空を翔るべくもあらず、魯般が雲のかけはしなければ地上に下るべくもあらず、渠れ鳥ならず

んと欲するものはまた此の二者とも別なり。予は進みて此等の區別を說明すべし。上にも定釋せる如く、隱喩法には想像上の作用より來たるものにして、一物を他物に比喩するなり。諷喩法にはかゝる作用を要せず。又は一物を他物に比喩するに及ばず。本題の性質事情等に類似せん他の題目を選み用ひて之れが裏面に本題の意を髣髴せしめ、而して本題の實形をば目のあたりより隱れしむるを主とす。斯くて讀者自ら本題の裏面に隱れたる本意を見出だすときは之れに對して快感を生ずべし。何となれば之れを見出せるは自己の働きなればなり云々。」("Elements of Criticism."—Kaimes)

諷喩法はまた後に論ずべき擬人法とも關係すべし。擬人法は劣等のものを高等のものに比し、諷喩は之れに反してむしろ高等のものを劣等物に比するの差別あり。すなはち等しく猿蟹に物言はしむるも、猿蟹の方を主とし、其を人に擬して物いはしむる點に重きを置くは擬人法なり。擬せられたる人を主とし、其の言動意味に重きを置くは諷喩法なり。例へば「猫の戀初手から鳴いて哀れなり」といへるは擬人法にて「鼠とる猫のうしろに犬の居てねらふものこそねらはれにけり」などいへるは諷喩法なるの類なり。

諷喩法はまた之れを繪畫彫刻等の上にも表はし得べし。古人が大黑天の像を畫きて「上を見れば限りなし」との意を寓せるなどは諷喩法の短きものと見るべきなり。所謂寓意畫といふもの皆此の類なり。

（參照）　諷喩法は英語のアレゴリー(Allegory)に相當す。之れに關する規則といふものゝ要、第一喩義の文みづから最も面白く趣味あるやうならんを要す。始より寓意をたどらされば何の妙もなきが如きもの、又は寓意の淺陋にして一見知れ易きが如きものは詞藻たるの價値なし。寶永落首の一に「犬はなき民は悅ぶ丑の年ながき返報に鷄を喰はせん」などいへるは寓意淺陋、大公方の末事を譏れるものといふことを取り除かば、文其のものゝ上にはなど何の妙味もなきなり。第二喩義の文と本意とは餘りに懸隔離れざるやう注

傳』の如きも其の立意の發端のみにつきて言へば仁義禮智忠信孝悌の八德を八犬士に假裝せしめたる諷喩法といふを得べし『夢想兵衞蝴蝶物語』などもまた色欲といひ貪婪といふが如き惡德を一鄕に權化せしめたるものなり。要するに諷喩法は話柄の作り物なると之れに話柄以外の深意の籠れると話柄の表には深意の些も直現せざるとを本面目とすべし。

或は話柄を人事に取れるものを諷喩法と見做さゞるあり即ち常に高尙なる事柄を劣等なる事柄に寓せしむるを諷喩法の本意とし一の人事を同等なる他の人事に寓せしむるが如きは之れを諷喩法とせざるなり。げに詞藻上の喩といへる點より見ば啻に事柄のみならず事柄を組織する物質までも全く懸け離れたる種類のものなるを妙とすることあるべし、人間の事柄をば鳥獸草木の上の事に比擬するの類之れなり。されどまた一方より見るときは諷喩法の諷喩法たる所は事柄其の物の上にありて事柄を組み立つる個々物の上にはあらず直喩法隱喩法などは、一句一物の比喩を主とすれども、諷喩法は事柄の比喩を主とするが故に、事柄だに隔離して而も相比するを得べき點だにあらば諷喩法たるを妨げざらんか。是れ本書が第二種の諷喩法を加へたる所以なり。

諷喩法と直喩法喩隱法との間には劃たる境界あり、詞形に於いては言ふまでもなし、本意に於いても直喩法隱喩法等は眞面目に其の事物に對する情の高まれるにつれて比喩の急調に進み行けるものなれど、諷喩法は之れと異なりて、わざと喩中の本義を晦くし、外見上喩義の外に寓意の端を示さゞるやう匠むものなり。勿論時としては餘りに本義の知れ難き場合には多少の說明詞を加へて之れをほのめかすことなきにあらざれど本來は飽くまでも喩義以外に本義の片影をも顯さゞるをもて諷喩法の妙なるものとす。即ち命意の當初に於て既に直喩法隱喩法等と諷喩法と相異すといふべし。

（參照） 諷喩法と隱喩法との關係については、ケームズの說穩當なり。曰はく「諷喩法と隱喩法とは別なり。而して予の詞姿と呼ば

れましたぞ、先生笑ふて鞍馬口は京へ出入の在口、往來は木こり山がつ百姓ばかりくわくらんと書いてはわからぬ、はくらんと書いてこそ通用はするなれ、眞實の事でもわからぬときは役にたゝぬ、たとひはくらんと書いても、藥さへ效能があれば能いではないかと仰せられました。(「鳩翁道話」)

鶴菊手に汗握りしが禿の時より善し惡しの事に揉まれて驚かず、しやんと立つて「申しお二人樣、顏を赤めて何ぞいの、たんと無念さうに見えるぞえ、里がよひなされしほどにもない、是れがなんの恥ぞいの、謂はれぬ差し出か知らねども、他事ない虎さま少將さん、鶴菊が一座に居て、うつかりと見ていたかと思はんすも氣の毒な、お侍の義に迫るも浮世の戀に身を碎くも、命懸けるは同じ事、たとへば酒の意趣ある中、二日心か公用か、醉うてはならぬ首尾もある、其の足元を見て張り合ひ懸けての手強ひ、得て是れに手を取るわいな、そこらを千疋繋いで恥をかくが手柄の基、さあ飲み伏せたと油斷させ、心をゆるす門立ちか思ひかけなき朝込み、ずつと仕かけ、差引ならぬ手詰の盃、腕を捻ぢ上げ首をおさへ、つぎかけ〳〵奈落の底まで飲み伏せ、引き起こして止めの盃一獻さいてしやんと取る、是れを本望本酒の手柄といふわいな、さりながら此の鶴菊も、いつぞや山下宿で三日三夜、和田さんの大よせに、朝比奈さんの無理酒には、習文どんといきついた」と笑ひて其の座をくつろげしは、物に馴れたる仕こなしなり云々(近松作「曾我會稽山」)

前者が「眞理にても迂濶にして實際に通ぜざれば何の效もなし」といふ意を寓し後者が酒に事よせて仇討の手管を敎ふる等是れなり。

外に人間全體の美德缺點等を個人に權化せしむる類の諷喩法あり彼の英國古代の詩人スペンサーが作れる「仙女王」(Fairy Queen)に人間の十二美德を十二人の武士に權化せしめたるもの、此の種の諷喩の大なるものと稱せらる。我が國にて「八犬

腹中の世界に入るといひ、心や耳目やが人間などの如く動作すといひて、其の裏面に人心の作用を說明せんとするなり。

住なれし御城の堀も氣味わろくせめては君のおはします近きあたりにたよらんと尾長、青首、赤頭、小鴨まじりにかひつふり、はたり〳〵と立出てゝ、不忍池へと心ざし北へ遙に登りては、めなれし護持院にしばらく翼を休めんと立出で見れば御堀端、今は賴も切れはてゝ、神田橋さしてぞ急ぎつゝ、土物店になりぬれば、ぬぎ賣る聲の冷しく、掛須田町に飛び行けば亦いつの日かいかならん人にさそはれて心うく、此所にや來らんと、泪ながらに行くほどに行くほどに池の端にぞつきたまふ（『寶永落書』）

鳥類の動作に事よせて何某の身の上を嘲れるなり。

龍噓氣成雲、雲固弗靈也。然龍乘此氣茫洋窮乎玄間、薄日月伏光景、感震電神變化、水下土、汨陵谷、雲亦靈怪矣哉。雲龍之所能使爲靈也。若龍之靈、則非雲之所能使爲靈也。然龍不得雲無以神其靈矣。失其所憑依信不可歟。異哉其所憑依乃其所自爲也。易曰、雲從龍、既曰龍雲從之矣。（韓退之の『雜說』）

人事の際會を龍と雲との上に寓言せるなり。

諷喩の第二種、話柄は作り物語なるも其の事柄あながち實際界に在り得べからざるにあらざるものたとへば全く別なる人事の上に諷意を寓する等の例は下の如し。

むかし京に今大路何某といふ名醫がござつて、名高い御人じや、或る時鞍馬口といふ處の人、霍亂の藥を製して賣弘めまするにつき、看板を今大路先生に御賴ひ申して書いてもらはれました、其の看板に、はくらんの藥と假名で御書きになされた、ソコデ賴んだ人がとがめました。先生是れはくわくらんの藥ではござりませぬか、何ゆゑはくらんとはなさ

と異なるは第一其の事柄の不都合にして必然架空の談たること、第二諷刺の如く文字通りの事柄と之れが裡面に籠れる寓意と多くの點にて類似するを要せず概して單一なる道德上の意味を含めるのみにて事足ることの二點にあり」("Rhetoric"—Haven)

諷喩法を分かちて下の二類となすを得。第一、全く架空にして到底人事にあるまじき話柄を假り之れに意を寓せるもの、第二、其の話柄は作り物語なるにもせよ實際に成し得られざるにあらざるもの是れなり。

諷喩法の第一種、到底人間にあるまじき話柄を材料とするもの、たとへば非常の物をして人間の如く動作せしめ、又は人間をして天道地獄など實際に無き境に出入せしむる等の例

善魂の通力にて京傳は無二郎が腹の中へはいりて見れば腹の中に一つの國あり、是れかの小天地のいひなり、名づけて無狀無象國といふ此の國の檀那はすなはち心なり、番頭は氣なり心と氣とはもと一體ぶんしんなり耳目鼻口の四のものは重手代にて役人なり足と手は手代より腰元、草履取、丁稚までを兼ねて務め中でもいそがしきつとめなり此のものどもの腰へ一條づゝの繩を着けあるじの心之れをしつかと締め括り居て手を動かさんとするときは手の繩をゆるめ歩まんとするときは足の繩をゆるめ皆々心の下知にしたがつて働くこと鵜つかひの如く猿まはしの如し、心のこまの手綱ゆるすとはこゝの事なり。無二郎が心かねてより正しければ善くおちつき居てみな〳〵に下知するゆゑ此の國よく治まりておだやかなり、されど憫むらくは無二郎年わかければ番頭株の氣は何かにつけており〳〵氣のかはる事ありてふら〳〵とした氣になれども心は退いてよく思案しなをし固く氣を戒めて靜しける足は手をおこす「これ〳〵手よ目をさませ〳〵檀那がさつきから繩を動かさつしやる。」手がいふ「ナアニ知らねへふりをして居るがいゝ大かたまた鼻に手ばなをかんでやれといふ事だらう恐れる檀那だ。」(京傳作黃表紙物)

あらば其は此の規則に背けるなり、何となれば筒袖の衣服を着する人種は他にも多くありて到底之れを以て支那人特有の記號と見做す能はざればなり。第二、原因を以て結果に代ふるには原因は主なるもの又直接のものならざるべからず。「夜明けぬ」といふべきを「日出でぬ」といふは正當なれど「時經ぬ」又は「大地轉じぬ」などいふは非なるが如き之れなり。第三、原料を以て作物に換ふるには原料は最も主要部分を占むるものなるべからず。「些の武器をも帶せず」といふべきを「寸鐵なし」といふは鐵が通常武器(殊に刀劍)の主なる原料なるが故にて隨うて正しき換喩なり。されど武器を作りあぐるには猶ほ他に種々の原料を要すべし、此の種々の原料を取り出でゝ一々武器といふ名に換用するが如きことあらば上の規則にたがひて不通のものとなるべし。

第五項　諷喩法

諷喩法とは一說話中に他義を含ましむるもの、就中意味なきものを假りて之れに意味ある事柄を影の如く寓せしむるの謂なり。言ひ換ふれば人事上の諷刺勸誨の意を無生物其の他劣等なる物の動作に寓せしむるの比喩といふべし。例へば「鳩を以て大鵬を咲ふ」「燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや」などいへるは何れも小人が君子の心を得知らざる由を鳥の上に寓言せるの類なり。故にまた寓言といふ名あり。されど嚴にいふときは、寓言はむしろ英語の fable 又は parable などに相當し、諷喩法とは多少差あるべし。此處には fable を寓言(詳しくは寓意物語)と譯し之れと諷喩法とを別かたんとす。また修辭家によりては、此の寓言と諷喩法との差異を單に喩の長短に歸し、長く續きたるを諷喩法といひ、短く切れ〴〵なるを寓言といふ。されど斯かる區別は實際上無用のものたるを免れず。

(參照)　此の點に關してやゝ精しき別を立てたるはヘーヴン氏の書なり其の意「寓言は架空の作り物語にして其の事柄が本來既に不都合なる上に大抵實在し得べからざるものなり。而も尙は能く或る種の訓誨又は思想を傳へ明かにするの用をなす。故に之れを諷喩

爭せり」といふべきを「彈丸に射貫かれたり」といひ「孟子」「莊子」「近松」「西鶴」などいづれも著者の名をいひて著書の稱とするたぐひは結果に換ふるに原因を以てせるなり。「八犬傳氏」といへば馬琴の事と知れ「古池の翁」といへば芭蕉の事と知らるるが如きは原因に換ふるに結果を以てせるなり「未來の英雄」「大政黨の卵」などいへるまた結果に因みたるの比喩なりとす。

換喩法の第四種、原料と作物との關係に基づけるものにも原料の名を以て作物に代ふるは多けれど作物の名を原料に冠せしむるは罕なり。例へば毛と筆との關係に就きていはんには、毛は原料なり筆は之れによりて製せられたる作物なり、而して此の原料すなはち毛を以て作物すなはち筆の名に換へ用ふることは毛穎、毛錐など之れあれど倒に毛を稱して筆といふためしは無きの類なり。其の他絹布をお蠶（かいこ）といひ身體を四大（地水火風）といひ「何々の文章」といふべきを「何々の文字」といふの類みな是れなり。

筆のすさみの跡たえず、傳はる家や畫工のほまれ、狩野四郎次郎元信丹青の器量古今に長じ、心ばへよき男ぶり、親の繪筆の彩色に生まれつきたる美男なり云々（近松作『傾城反魂香』一）

人と物語する序には昔の事共を言出して、或はなげき且は治れる御世に生れて干戈の昔をしらず、安くいね靜に起きて鳴き歌ひて明かし暮らす事をよろこび且つ事ありし時にあはずして猛虎も鼠となり寶劍も鉈となることをなげきどはる云々（太宰春臺の『獨語』）

（參照）換喩法は英語にてメトニミー（Metonymy）といふ。例によりて從來の著者の之れに關する規則といふものを要旨によりて擧げんに、第一、記號を以て實物に代ふるには其の記號眞によく實物を代表するに足り何人にも直にうなづかるゝものならんを要す。支那人を豚尾漢といひ洋人を紅毛兒といふたぐひ善く此の條件にかなへるものなり 之れに反し若し支那人を黄色人種などいふもの

換喩法の第一種は記號と實物との關係に基づけるものにして、記號を以て實物を代表せしむるを常とす。例へば「清國僵れぬ」といふべきを「黄龍斃れぬ」といひ書生を青衫といひ文職の人を長袖といふが如き之れなり。更に之れを逆にして實物を以て記號に換ふるの例はあること罕なり。

吉田通れば二階から招く、しかもかのこの振袖が（俗歌）

されどもそれは愚痴じやぞや、恰好こそは大ぐれなれ、昨日今日の前髪を姉といふても大事ない、きさめが酷や殺したと憎みはわが身一つにて云々（近松作『今宮の心中』）

振袖といひ前髪といふが如き婦女特有の記號を以て其の婦女子を代表せしむるなり。

換喩法の第二種、持主と持物との關係に基づけるものにても、持主をもて持物に換ふるの例は多けれど、持主を以て持主を代表せしむるは尠し。英、米といひて英人、米人といふの意に聞かせ「敵艦降りぬ」といひて「敵の海軍降りぬ」といふの義を表せしむる等何れも持主を持物に換へたるにて「英米」といひ「敵艦」といへるは持主なり「英米人」といひ「敵の海軍」といへるは其の持主なり。

先づやすらかなりといふ體は誰れもよき事といふべきを、其やまひはよわきに落つべし是はおもふに草庵集などのうはべのうつくしくおかしきをまねびて詠むか、草庵の歌は底に力を入れ、上を隠しくつゞけし物なり、玉葉風雅兩集の如き、風調ことざまに損じたるをためんとて、ことに詞がらをいたはられしなるべし云々（伴蒿溪の『閑田文草』）

「草庵集など」とは「草庵集の歌など」の意なり。「草庵の歌」は「草庵集の歌」または「草庵集作者の歌」の意なり。

換喩法の第三種、原因と結果との關係に基づけるものには結果を以て原因に換ふると原因を以て結果に換ふるとあり。『戰

凉條變我が髪忽ち種々として我が眼漸く　々たるに至らんとす此の時に及んでは月華明なりと雖ども花容嬌なりと雖ども復た爲す可らざるのみ云々(成島柳北の『促春遊檄文』)

寺多しとの意を四百八十と定着せる數にてあらはし、四方といふべきをあらはに東西南北といひ、風流といふべきを花月といひ老年といふべきを髪種々眼暗々といふが如きみな同じ。次ぎに

提喩法の第二種卽ち抽象的總稱的を以て具象的特稱的に代へたるの例、

さん候某世にありし時は、鉢の木を好き、數多木を集めもちて候ひしを、斯やうの體に罷りなりいや〳〵木ずきも無用と存じ皆人に參らせて候ふさりながら今も梅松櫻を持ちて候ふ、あの雪もちたる木にて候ふ、某が祕藏にて候へども今夜のおもてなしに之れを火に焚きあて申さうずるにて候ふ云々(謠曲『鉢木』)

これは〳〵とばかり花の吉野山(安原貞室)

我れといはずして漠然某といひ、榮ゆる代といはずして單に世にありし時といひ、植木といはずして廣く木といひ、他人といはずして人とのみいひ、櫻の花といはずして花とのみいへるが如き、却りて情に直截ならざるものを用ひて情を判然せんとするものなり。

第四項　換喩法

換喩法とは種類の相異相關を主とせる比喩なり。隨伴物を以て本名に換ふるものなり。之れを大別して四類とすべし。卽ち第一種、記號と實物との關係に基づけるもの。第二種、持主と持物との關係に基づけるもの。第三種、原因と結果との關係に基づけるもの。第四種、原料と作物との關係に基づけるものこれなり。以下例を引きて細說すべし。

のに關しては、ベイン氏が其の必要なる場合を數へたるもの、參看するに足る。其の意此の種の提喩は變則にして其の效果また特別の事情に由りて生ずるものたり。まづ總名は(特稱よりも)多樣の意味を含み又は繪畫的化粧的たるを得べし(中略)。また往々文を流麗ならしめんため之れを用ふることあり卽ち優雅を害すべき語句をば露に其れと指さずして言ひあらはし得るの類也。之れを成すには通常當の事物の屬する階級の名を代用す、さすれば其が含む所おのづから我れの指示せんとするものを指示すべし例へば「死す」といはずして「逝く」といふべきが如し(中略)。また抽象的名稱を用ふるときは主要の點のみを引き離して之れに重きを置くを得べし「青年」といふときは年わかき人を特に年わかしといふ點より云々するに恰好の呼び聲なるのたぐひなり(中略)。其の他語句を變化せしめ新鮮ならしめんには之れを用ふることあり(中略)。而して斯く感を深からしむべき一般の原理に背ける提喩法はもと〳〵例外にして隨ひて其の用多きを得ざるなり」("English Composition and Rhetoric"—Bain)

提喩の第一種すなはち具象的特稱的を以て抽象的總稱的に代へしものゝ例下の如し。

此の大道こそ道もなき法もなき手に足らぬ畜生國、軍兵を以て押し寄せ帝も后も一くるめ我が大王の履持にする事日を數へて待つべしと席を蹴立てゝ立ち歸る云々(近松作『國性爺合戰』)

奴隷從者といふべきを履持といひて一段具象にしたるなり。

春郊絲管日喧々。亦喜吾徒幽事繁。問レ字頻過楊子宅。送レ茶時叩玉川門。樓臺四百八十寺。花竹東西南北村。千重遊蹤一吹夢。病懶徒倚向レ進論。(菅茶山)

余が徒、幸に生を風流社會に託し濫りに花月の權を占有する者既に久し有司敢て我れを僣なりとせず法律敢て我れを縛する能はず優遊以て花前に吟嘯し月下に酣酌するを得る豈亦樂しからずや今にして遊ばずんば天公我れに年を假さず炎

喩法が種類に本づくの比喩を主とするものなるに對して、提喩法は分量を主とするものといふべし。俗に日用活計の料を總稱するに米薪といふが如き特殊の名を以てし、又はさらに進みて全く個々特殊なる小町、楊貴妃等の名を以て美人總體を代表せしむるが如きは、特種を以て總名に代へたるなり。花といへば櫻を意味し、常磐木といへば松を意味するが如きは、總名を以て特稱に代へたるなり。夫の俗に「太閤は秀吉に奪はれ祖師は日蓮に奪はれ」などいふも此の理をいへるものと見るべし。姦黨邪人を姦邪といふは抽象的名稱を以て具象的名稱に代へたるなり、冷熱を增氷熾火といふは具象的名稱を以て抽象的名稱に代へたるなり。

提喩法の由來する所を案ずるに、人間の情はすべて特殊具象の事物に近づくに從ひ其の度を強むるものなるが故に、抽象的總稱的のものよりも直截なる具象的特稱的のものを以てする方、措辭の目的を達するに一層有力なればなり、例へば「必ず云々なるべし」といふは「九分九厘云々なるべし」といふの人心に入ること更に深きに如かざるの類なり。されば本來提喩法は抽象的特稱的の代りに具象的特稱的を以てするの一邊に盡くといふべし。然れども場合によりては此の理に背きて反りて文を有力ならしむることあり「日本國民の意志なり」といはんよりも「日本帝國の意志なり」といふかた重大に聞こえ「馬鹿者」といはんよりも主なる點のみ抽き出して「馬鹿」といふかた鋭く響く等之れなり。其の他「糞尿」といふべきを「不淨物」といひ「死す」といふべきを「復た起たず」といふが如き、或は語を婉曲ならしめんがため、或は文に變化あらしめんため此の種の提喩法を用ふる例も尠からず。されば提喩法を分かちて特稱を以て總稱に代へ具象を以て抽象に代ふるものと之れに反せるものとの二種とすべし。

（參照）　提喩法は英語にてシネクドキー（Synecdoche）といふ。さて其の逆に抽象を以て具象に代ふるの提喩法すなはち變則なるし

といふ句の如き、すなはち其の例にして、「死に行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜」といふは直喩法なれども、之れに引きつゞきて「一足づゝに消えて行く」とあるは「霜の消ゆるが如く人の身も消えゆく」といふべきを前の句の說明辭に讓りて隱喩法に入れるなり。

（參照） 隱喩法を英語にてはメタフォル（Metaphor）といふ。從來の修辭家また之れに關して種々の規則を說けり。參考のため其の普通切要なるものを摘して示さんに

第一、隱喩の特處は文の緊縮簡約といふにあれば其の比喩は最も明瞭にして而も卓拔ならざるべからず、註をまちて始めて比喩の趣意を領するが如きことあるべからざるは勿論なり。「おもひの火を胸に焚く」といふときは必しも「煩惱愛着の情熱鎖しがたき苦しさ火の胸を焦すに異ならず」と斷るを須ひずして情趣十分也是れ隱喩の旨を得たるなり。

第二、隱喩は喩義と本義とを幷べ揭げずして本義を省き比喩を之れに代へ用ふるものなれば、一段の文中忽ち有義に循ひ忽ち喩義に循ふが如き句法あるべからず。始めに國家の大事を一身に荷ふ人を稱して「國の礎」といふときには、次ぎには「國の礎逝きぬ」といはずして「國の礎朽ちぬ」といふべきの類也。

第三、隱喩はまた同文中の一事物に數種を混用するを避くべし。或は「武士の鑑」といひ或は「武士の華」といひ彼れ此れ突出せしむるが如きは概して病なり。但し極めて文略の適りし場合等の例外はこの限りにあらず。

第三項　提喩法

提喩法とは全と分との關係によりて結構せられたる比喩の謂なり。換言すれば或は總名を以て特稱に代へ、或は特稱を以て總名に代へ、或は抽象語を以て具象語に代へ、或は具象語を以て抽象語に代へたるの比喩なり。故にまた後に論ずべき換

を至當とす。

科學上に隱喩を用ふるの例は解剖學、生理學等に多し、松果に似たるものを松果腺といひ喇叭に似たるものを喇叭管といひ臼に似たるを臼骨といひ窠に似たるを眼窠といふたぐひ是れなり。

直喩法と隱喩法とに就きていふときは、一般に隱喩法のかた其の價値高し。蓋し直喩法は何人も容易に之れを用ひ得れど、隱喩法を完全に用ひんには、幾分の熟練を要す、詞藻に乏しき作者の文には隱喩上の缺點多きを常とするなり。

(參照)　ホエートリーは比喩の本意を專ら說明にありとするものなれど、而もなほ比較的に隱喩法を用ふるを可とす。其の意にいはく「隱喩法と直喩法とにつきて何れを擇ぶべしやといはゞ、其の喩の單純にして解し易き限り前者を取るを普通の法とすと斷言すべし。されど隱喩法のために文章不明瞭となるが如きことあるときは、直喩法を取らざるべからざること固よりなり(中略)。たゞ喩の說明は文を明晰ならしむるためなれば、必して此の必要以外に奔るべからざるのみ。蓋し事物の類似點を他より指示せらるゝよりも、自ら之れを發見するを以て、一段深く滿足するは人心の自然なればなり。又大文章家は常に隱喩法のみを用ふるの困難なる場合には、直喩隱喩の混合せる比喩を擇ぶ。卽ち先づ直喩法によりて類似點を顯示し置きてのち隱喩法の語を續くるなり、又はこの順序を倒にして、先づ隱喩法を用ひ其の次ぎに比喩のむれを顯はすなり。」("Elements of Rhetoric"—Whately)

直喩隱喩を混用することあるはホエートリーの云へる如し。而して巧みに之れを用ふるときは、文情縈紆して妙文をなすことあり。近松の作などに此の例多し。彼の絶唱と稱せらるゝ

此の世の名殘夜も名殘、死に行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ(近松作「曾根崎心中」)

予又市中を去ること十年計りにして五十年やゝちかき身は簑蟲のみのを失ひ蝸牛家を離れて奥羽象潟を暑き日に面を焦し、高すなごあゆみ苦しき北海の荒磯に踵を破りて今歳湖水の波に漂ひ鳰の浮巣の流れとゞまるべき蘆の一もとの陰たのもしく、軒端の茨あらため垣根結添へなどして、卯月の初いとかりそめに入りし山のやがて出でじとさへおもひそみぬ云々（芭蕉作『幻住菴記』）

なふ頼平樣あんまり我づよい曲もない、今生に息の通ふうち將軍太郎に契約の詞を飜し、御兄弟和睦との御一言を聞かせてたべ、そのお詞を頼の糸烏帽子の掛緒につき合はせ、未來成佛の寶冠の紐として極樂淨土へ着せて遣りたいはいの云々（近松作『關八州繫馬』）

點を施せる箇所すべて喩義を本義の如く書き下せるところに隱喩法あるなり。

歲寒然後知松柏之後凋也（『論語』）

表面はたゞ松柏の事を言へるが如くして、實は其の裏に之れを節義の士に喩ふるの意籠れるなり。

隱喩法はまた分かちて單語より成れるものと複雜なるものとの二種とするを得べし。「法を破る」「志を立つ」等の類はそが單純なるものにして一派の修辭家が轉義（トロープ）と稱するものに屬す。「國運既に傾きぬ一木の能く支ふる所ならんや」などいへるは、二以上の喩を重ねて一章の喩を全ふせるなり。されど要するに此等はさして重きをなさゞる分類たり。また隱喩法と後に說くべき擬人法とは見わけがたき場合多し。例へば「濁浪空を排す」といふときは浪を生あるものに喩へ其が手を以て天を排すとの義にして所謂擬人法なれども、又他方より見るときは浪と活物とを一に言ひなしたる隱喩法の類、これらは其の特色むしろ浪と活人とを一に言ひ做したる邊よりも浪と活人と見立てたる處にあるべければ隱喩法に屬せしめずして擬人法とする

修飾なきに至るべし。隱喩法とは直喩に反して比喩の比喩たる處を埋沒したるものなり。「如し」「似たり」等の說明詞を藉らざるは勿論、喩義と本義との區別をさへ全く隱して、二事件を打ち混じ一に言ひ做すものなり。例へば「袖に露おく」「心に劍をふくんだる女」などいへる類正當には「露のおけるが如く淚袖を濡らす」「心に劍の如く人を害するの念をふくんだる女」などあるべきを斯くては尋常の直喩たるに終りて文勢弛むの恐あり、此をもて之れを引き約めて淚と露と又は劍と害心とを一に言ひ做したるなり。されば一方よりいふときは隱喩法はまた直喩法の緊縮せられ省略せられたるものといふべし緊縮省略は隱喩法の一特色なり。淚に關する思想に、かけ離れたる露といふ思想を加へたるは想念の增加に外なけれど隱喩法はさらに之れを緊紮して用ふるなり。さて隱喩法の例は

南帝入洛ましく〜て憑む樹下雨漏りしより心ならずも鎌倉なる足利家の招に隨ひ給ひし云々（馬琴作「八犬傳」）

「憑む木の下に雨漏りし如く、我が賴みとせし人の心變ぜしより」といふべきを、喩義を直ちに本義の如く言ひ做して「憑む樹の下雨漏りしより」とせる折に特殊の情味を加へしなり。本義を隱して喩義に兩意を緊紮せるものといふべし。

これを見る人殊勝さ增して傳へきく中將姬の再來なるべしと此の庵室に但馬屋も發心起こりて右の金子佛事供養して淸十郎を弔ひけるとや此の頃は上方の狂言になし遠國村々里々まで二人が名を流しける、是れぞ戀の新川舟をつくりて思を載せてうたかたの哀れなる世や（西鶴作「五人女」）

此は西鶴が文中、情趣高まりて殆んど律格を有するに至らんとせる作句の例なり。「名を流す」といへるは「名を傳ふること」と水の流るゝが如し」との義を縮めたるなり。「戀の新川」といふも戀のつゞきと川の流れとを兼ねたるもの、「思を載せて」も思ひと荷物とを兼ねたるもの、皆隱喩法たり。

また説明辭なき直喩の進みて殆んど譬喩の域を脱し、單なる對偶法とならんとして、而もなほ譬喩の味ある例は

義實急に呼びとゞめ、木曾介大人氣なし、麒麟も老ては駑馬に劣り鸞鳳も窮すれば蟻螻のために苦めらる、昨日は昨日、今日は今日、よるべなき身を忘れしか彼等は敵手に足らぬものなり（馬琴作『八犬傳』）

籠鳥の雲井を慕ふはその友をおもへばなり、丈夫の故郷を去るはその祿をおもへばなり（同上）

（參照）英語にては直喩法をシミリー(Simile)といふ。またこれに關して舊來の修辭書が種々の規則を立てたるを見るにヘーヴンの條件にいはく、「（一）比較すべき事物は或る點に於いて類似せると共に多くの他の點に於いて差はざるべからず、此の類似と差異との大なるにしたがひて其の妙益々大なり云々。（二）比較すべき事物は難解のものなるべからず若し註脚を要するが如きものなるときは其の註脚は長かるべからず然らずんば註脚の方重くなりゆきて本題の目的より注意を奪ひ去るの恐あり。また類似點の懸絕せるため之れを見出だすに多大の力を要する場合には動もすれば牽強附會に陷るべし此の非難を避けんとせば比喩をして最も有效ならしめ又は面白からしめざるべからず云々。（三）比喩はその目的の高尙と卑賤とによりて或は原意を高うし或は原意を卑うするものならざるべからず云々。（四）比喩を屢々用ひて人をして倦厭せしむるが如きことあるべからず蓋し如何にめでたきものといへども多量に過ぐれば不味となるの理なればなり。（五）比喩を須たずして既に言表せられ又は之れなきも有るに優さりて善く言表せらるべく此の上には解釋をも感動をも加ふることなき場合に單に習慣上より比喩を用ふるが如きことあるべからず」と。("Rhetoric"—Haven)以て他を類推すべし。

第二項　隱喩法

隱喩法は直喩法とともに詞藻中最も廣く用ひらるゝものにして譬喩法の本部たり。されば此の二喩を除かば殆んど文章の

其の他

髭引上げ掻首せんと刀逆手に取る所へ東西より綱、公時、陽陰の龍の雲を下るいきほひ一さんに驅け來たり、公時すかさず齋明をもんどりうたせ踏みつくれば綱は御臺の塵うち拂ひいたはり忍ばせ奉る（近松作『關八州繫馬』）

見る〳〵一だんの陰火君が膝下より燃え上りて山も谷も晝の如くあきらかなり、光の中につら〳〵御氣色を見たてまつるに朱をそゝぎたる龍顏に荊の髮膝にかゝるまで亂れ白き眼を吊りあげ熱き息をくるしげにつかせ給ふ御衣は柿色のいたく煤びたるに手足の爪は獸の如く生ひのびてさながら魔王の形あさましくもおそろし（上田秋成作『雨月物語』）

風雨ます〳〵つよく爛漫たる庭木の櫻を吹ちらして吹雪の如く散りかゝり手燭を颯と吹きけして忽ち眞の闇となる、嗚呼彼れが命の危さもげに風前の灯火なり、藤波進退を失ひて心たゆたひける所に、暗き裏に劍の光電光石火と閃きければ驚きて逃ゆかんとするを三八郎おどりかゝりて斬りつけたるが暗中なれば目當てちがひ空を斬る、これはと又捕る劍の下を潛りぬけて猶ほ逃去らんとしけれども餘りに驚き身うちわなゝき足なへぎて走ること能はず步路に迷ふごとくなり、三八郎は息をこらしあたりを探ぐりて立まはり、めつた斬にきりけるにぞ、藤波振袖の袂を斬り落とされ危く身は避けたれども目前に劍のひらめくたび〳〵胸冷へ魂きゑて、黑暗地獄の罪人が劍樹にのぼるにことならず（京傳の『昔話稻妻表紙』）

等、皆直喩の例なるが、末段に引ける京傳の文を他の諸家に比するときは、明かに其の文致の劣れるを見る。等しく喩を立つるも近松などの縱橫自在にしてしかも斬新警拔なると異なりて多くは前人のを踏襲せるに過ぎず、比喩のために全幅の氣運生動するが如き妙は絕えてなきなり。

蠑螺殼、春尻に鍔足、あるきぶりは家鴨のしよち入、物にして破鍋、あのやうな悪女と夫婦になる男はよく〳〵運のつき(近松作『日本振袖初』)

是れまた説明辭なき直喩の好例にして、近松が得意の滑稽を弄せし譬喩なり。

僧正遍照は歌のさまは得たれどもまことすくなし、たとへば繪にかける女を見ていたづらに心を動かすが如し。在原の業平はその心あまりて言葉足らず、しぼめる花の色なくてにほひのこれるが如し。文屋の康秀は言葉はたくみにてそのさま身におはず、言はゞあしき人の善き衣着たらんが如し。宇治山の僧喜撰は言かすかにしてはじめをはりたしかならず、言はゞ秋の月を見るに曉の雲にあへるが如し。よめる歌おほくきこえねば彼れ此れをかよはしてよく知らず。小野の小町は古の衣通姫のながれなり、あはれなるさまにて强からず。いはゞよき女の惱める所あるに似たり、强からぬ女の歌なればなるべし。大伴の黒主はそのさま賤しいはゞ薪負へる山びとの花のかげにやすめるが如し(紀貫之の『古今集序』)

此は有名なる『古今』の序の譬喩にして、直喩の文例としては、何人も熟知するところまた後世種々の文章に追撲せられ援助せられて人口に膾炙するものたり。蓋し譬喩の絶妙なるものといふべし。

一條表の物見の亭、氣のむすぼれも時津風、晴やかに見渡し給ひなか〳〵よい日和ではないかいの、うつくしい男が空色のうす物着てにこ〳〵笑ふやうな氣色、東山も一目にて惟茂様の吉田のお館手に取るやうに見ゆれども毎日遠目に見るばかり(近松作『栬狩劍本地』)

是も近松が妙手の譬喩として、東山あたりの春日和を、うつくしき男が空色のうす物着て打ち笑めるに譬ふるが如きは、極めて隔絶したるものを接近せしめて、而も牽强に墮せず、情致の委曲を盡くせる文なり。

尙はこれらの別は下の文例に就きて明らむべし。

この故に龍を名けて雨工といふ、亦これを雨師といふ、その形を辨ずるときは角は鹿に似て、頭は駝に似たり、眼は鬼に似て項は蛇に似たり、腹は蜃に似て鱗は魚に似たり、その爪は鷹のごとく掌は虎の如くその耳は牛に似たり（馬琴作『南總里見八犬傳』）

曾て實見せしことなきものを說明して目のあたりに見るが如く具現せしむるの方法として、一段吾人の感覺に切なるものを喩とせるなり。

神前にて其の心他念なく一筋に誠になれば、神も其の誠のなりに來格して、かたみに感動する程に、涙もこぼれつべし、たとへば淸くすめる水には其のまゝ月のうつりて互に光をますが如し。久しくなれば一つ誠に渾融して、神と人とを分かずたとへば水や空、空や水、ひとつにかよひてすめるがごとし。こゝに至ては洋々乎として其の上に在るがごとく其の左右に在るがごとくなるべし、是れ神のあらはゝなり、誠のおほふべからざるなり（室鳩巢の『駿臺雜話』）

是れまた空理を具現せしめて感に訴へんとせる妙比喩の一例なり。

さて文は義を本とし歌は感を要とす、譬へば文也華也歌は香也華は其の容語るべく香は其の芳說き得べからぬが如し云云（香川景樹の『新學意見』）

此は一句々々に「如し」「似たり」等の說明辭を挿まざるものゝ例を見るべく、文といふひ歌といふものゝ複雜なる性質を譬喩により結束して示し、思想の散漫煩瑣に陷らんとするを防けるものといふべし。

さりとは違うた御兄弟妹君は天下の美人、姉御の面は何に似た盥口に蓮切鼻、猿眼に鉢額、耳はきくらげ、おとがひは

ること、即ち無生物に關する想念を情のために生物化せる所に修辭の價値あるなり。
其の三は布置法なり。想念の組み合はせによりて之れを結體せしめんとす。「其の言哀しむべし」といふ平叙文を「哀しむべし其の言」と轉倒せるため、修飾ある文となれるが如き、または「老幼みな行く」といふを「老も行き幼も行く」と改むれば、對偶若しくは對照の理によりて一の趣致を生ずるが如き、此の例なり。
其の四は表出法なり。想念表出の態度に基づくものにして、「滿つれば却りて虧くるの恐れあり」といふべきを、殊さらに思想の態度を奇警にし「滿つるは虧くるなり」などいふときの修辭法これなり。此の如きは情のかたまれる結果おのづから想念が意義を變ずるの化成法と異なりて、むしろ同一想念が命題を組織するの形式を變ずるものといふべし。此に於いてか、一見その形式の尋常ならざるがために注意若しくは情を刺戟すること強く思想の結體に一層の利を加ふるなり。
以下順を追ひて細説すべし。

第七節　譬喩法

第一項　直喩法

直喩とは顯に一事物を他事物に比ぶるの謂にして、喩義と本義とを明かに區別し幷べ掲ぐるものなり。月光の白さを霜の白さに比して「月霜の如し」といふが如し。而して之れに「如し」「似たり」「たとへば」「さながら」等の説明詞を附したるものと、あらはに斯く斷らざるも比喩の義おのづから明瞭なるものとあり。例へば「其の疾きこと風の如く其の徐なること林の如く其の侵掠すること火の如く動かざること山の如く知り難きこと陰の如く動くこと雷霆の如し」などいへるは前者なり。「良藥は口ににがく諫言は耳にさかふ」といひて、良藥の口に苦きが如く諫言は耳に逆ふといふ意を知らしむるたぐひは後者なり。

ひ或は如といひ或は似といふ、灼然見る可し。孟子曰はく「猶緣木而求魚也」と。書に曰はく「若朽索之馭六馬」と。論語に曰はく「譬如北辰」と。莊子曰はく「凄然似秋」と。此の類是れ也。二に曰はく隱喩、其の文隱しと雖も義は即ち尋ぬ可し。禮記に曰はく「諸侯不下漁色」と。國語に曰はく「歿平公軍無秕政」と。又曰はく「雖蝎譖焉避之」と。左氏傳に曰はく「是豢吳也夫」と。公羊傳に曰はく「其諸爲其雙雙而俱至也」と。此の類是れ也。三に曰はく類喩、其の一類を取りて以て次々之を喩す。書の「王省惟歲、師尹惟日、卿士惟月」の歲日月は一類なり。賈誼新書に曰はく「天子如堂、群臣如陛、衆庶如地」と。堂陛地は一類なり。此の類是れ也。四に曰はく詰喩、喩たりといへども文、詰難を成すに似たり。論語に曰はく「虎兕出於柙、龜玉毀於櫝中、是誰之過歟」と左氏傳に曰はく「人之有牆以蔽惡也、牆之隙壞、誰之咎也」と。此の類是れ也。五に曰はく對喩、比を先にし體を後にし上下相符す。莊子曰はく「魚相忘乎江湖、人相忘乎道術」と。荀子曰はく「流丸止於甌臾、流言止於智者」と。此の類是れ也。六に曰はく博喩、取りて以て喩となすもの一にして足らず。書に曰はく「若金用汝作礪、若濟巨川用汝作舟楫、若歲大旱用汝作霖雨」と。荀子曰はく「猶以指測河也、猶以戈舂黍也、猶以錐飡壺也」と此の類是れ也。七に曰はく簡喩其の文は略なりといへども而も其の意甚だ明かなり。左氏傳に曰はく「名德之輿也」と。揚子曰はく「仁人之安宅也」と。此の類是れ也。八に曰はく詳喩、須らく多辭を假りて然る後義顯なるべし。子曰はく「夫觸蟬者、務在其明乎火振其木而已、火不明、雖振其木無益也、今人主有能明其德、則天下歸之、若蟬之歸明火也」と。此の類是れ也。九に曰はく引喩、前言を援取して以て其の事を證す。左氏傳に曰はく「諺所謂庇焉而縱尋斧焉者也」と。禮記に曰はく「蛾子時術之、其此之謂乎」と。此の類是れ也。十に曰はく虛喩、既に物を指さず亦事を指さず。論語に曰はく「其言似不足者」と。老子曰はく「飄乎似無所止」と。此の類是れ也」(和譯す)

其の二は化成法といふべし。想念の變形によりて其がを理想的發展を遂ぐるの用をなす。たとへば「風叫ぶ」といふときは「風、物を鳴らす」又は「風鳴る」といふべきを情の高まれる態度に應じて、さながら生あるものゝ荒れ狂ふが如く言ひ出だせ

しかのみならず、譬喩より來たる效果は、他にも之れあり。第一は適合の感より來たる快味なり。涙の繁きと雨の繁きと、比し得て恰適なりと、感ずるときは、形式的の原理により、適合といふことに一種の快感を生ず。第二には適合感の裏面また發見の快感を伴ふ。發見の快感とは、吾人が智識慾の滿足より來たるの情にして、新しき智識を得たるときの喜びなり。卽ち雨と涙とは、本來全く懸絶せるものなるがゆゑに、平生は二者の間に何の關係ありとも氣づかざりしものが、一朝文章家のために其の滴下することの繁き點に關係を示され、こゝに新關係發見の快味を覺ゆるの類なり。第三には心的活動の範圍を擴張し得たるの快感あり。すべて吾人の心は或る程限を超えざる限り、活動の盛大なるに從ひますます暢達して快活の感を伴ふものなり。されば初め原想念の涙といふ範圍のみなりしものが、後廣まりて雨といふ新想念を得せしめ、活動の量を增して、心的生活の盛大を感ずるに至る。以上は一切の譬喩法が修辭上に及ぼす效果の主なるものなり。

（參照）譬喩の妥當を欲し淸新を欲し奇拔を欲するの理も、以上によりて知らる。從來支那の文學にては、譬喩と典據とを混ずるの弊ありき。其は譬喩は成るべく古人の用ひ來たりしものを用ふるを妙とするの思想なり。畢竟初心の文章家にありては、其の喩の妥當なるか否かを判別するの識足らず、淸新を欲して却りて不熟に陷らんを恐れて、古人の創意にかゝる爛熟のものを用ふるの安全なるに就けるものなるべし。また一つには、想にも附屬の背景ありて、野卑なる聯想を生ずべきものを嚴肅を要する文に譬喩として用ふるの弊なからんため、偏に古典に式せんとせるもあるべし。但し同じき背景の理によりて、莊嚴を要するもの、例へば頌章墓碑銘等の如きには、却りて古例格式の典據あるものを用ふるの利も無きにはあらず。此等は例外なり。

『文則』に譬喩の種類を數へて曰はく、「易に象あり以て其の意を盡くし、詩に比あり以て其の情を達す。文を作るまた喩なかるべけんや。博く經傳を釆して、約して之れを論ぜん。喩を取るの法大槪十あり、略々後に條す。一に曰はく直喩或は猶といひ或は若とい

（參照） 命題の完備といふことが知力の根本的要求すなはち論理的のものなることは明かなれど、其の排列につきては、論理上必然の要求形式なしといふものあり。此の説に從ふときは、吾人が主部を前にし從部を後にするを自然の順序と考ふるはたゞ國語の習慣にして、語法上の事たるに過ぎず。事實果たして然りや。思ふに語法上にも叙次に關する習慣なきに非ず。外國語の多くは主辭の次ぎに繋辭を置き、其の後に賓辭を置けど、日本語は主辭の次ぎに賓辭を置き、而して繋辭に及ぶ。此等は國語の習慣に關する順序なり。語法學上の事たり。されど主部を先にして從部を後にすといふが如きは、東西を通じて論理上必然の形式たり。以て國語の習慣と見るべからず。吾人の知力は自然にまづ其の判斷の主題となる部分を提起して而していふ判斷せらるべき部分に移るの傾向あるものといふべし。

第六節　積極的想彩

其の四方面――譬喩法――化成法――布置法――表出法

積極的想彩すなはち想念の理想的發展の方式を四つに分かつたこと前に言へるが如し。其の一、譬喩法とは、想念が斯くの如き發展をなすにあたり、必要なる限り同一情趣の下に新想念を附加し來たるの謂にして、之れによりて原想念の情を豐富にし、種々の面より之れを結體せしめんとするの修辭法なり。此は修辭過程中最も有力且つ普通なるものにして、例へば「涙雨の如し」といふときは、單に「涙下る」といふ思想を强めんがため、其の滴下するさまの特徴として繁き點に類似を求め、此の點に於いてのみ情趣を同じくする雨といふ全く別種の想念を帶び來たり、涙の繁きさまに對する情に雨の繁きさまの情を附加したる譬喩法なり。これ吾人の經驗内にては、滴下するもの〻繁き情景は、降雨の際を以て最も切に、最も感覺を動かし易しとすればなり。最も感覺を動かし易きもの〻最も具象し活現し易きは論なし。

以上要するに命題の完備といふことは、其の成立要素の不足若しくは繁雜によりて破らる。主部從部等に不足あるとき、之れを補ふも命題の完備を得るの過程なり。主部從部等の結合亂雜無統一に流るゝとき之れを截解し統理するも命題完備の方法なり。

（參照） 在來の修辭書に文體の明晰を論じて、思想の簡潔、統一などいふことを其の條件とせるは、以上の理を別の方面より見たるに過ぎず。歸するところの命題の完備を欲する消極的修辭過程に外ならざるなり。また上の條件を破りて却りて詞藻を成す場合は、後の積極的想彩中、略言法長句法等に明かなり。

或は主部を省くといひ從部を略すといふは、皆言語應用の上のことにして、思想そのものには如何なる場合にも主部のみにして、從部なきもの、從部のみにして主部なきものといふが如き場合あることなしといふものあり。されど是の如きものは即ち思想の不完全なる狀態すなはち眞の思想なき狀態にして、意識の上に極めて不明瞭の想念たるなり。主部又は從部なきに非ざるも明かに意識に上らざるなりといはんか。是れやがて他に傳ふべき思想としては不完全のものたる所以にして、想念をして明かなる意識に上らざるは、初めより無きに等し。命題の完備を要するものは、此の意識に上らざる部分を意識に上さんと要するのみ。斯くの如く想念を發展せしめんとするのみ。

第二項　敍次の順正

敍次の順正とは、命題中の要部が論理的に排列せらるゝの謂にして、論理的排列とは必ず主部を前にし從部を後にするの約束に從ふなり。「降つた雪が」といふはこの順序を破れるものなれば、消極的條件よりいふときは改むるを要す。すなはち「雪が」といふ主部を前にして「雪が降つた」といふに至り、はじめて正しき排列式となるなり。されどこれまたことさらに之れを破りて、詞藻となることあり。積極的修辭過程より見たる倒裝法などいふもの是れなり。

第五節　消極的想彩

第一項　命題の完備

完備命題の意義——其の二面——補足——單一

命題とは論理學上の名にして、判斷を言語にあらはせるものなり。而してこれが成立要件を分かちて主部從部とするを得べし。命題の完備とは、一判斷ごとに必ず此等の諸要部を具備するの謂なり。「風梢を鳴らす」といふときは「風」といふ主部と「梢を鳴らす」といふ從部と皆完備せるなり。「火事が」といふときは「火事がある」といふ命題の從部を略せるなり。「歸らん」といふときは「我れ歸らん」といふ命題の主部を略せるなり。若し修辭の消極的條件といふときは、「火事が」といひ、「歸らん」といふが如きは、不完備の辭として斥けざるべからず。吾人の之れを是認することあるは、積極的條件より見るが爲のみ。「塞がざれば流れず、止めざれば行はれず」といふが如きも、「塞がざれば」「止めざれば」などいふ句に賓辭なく「流れず」「行はれず」などいふ從部に主部なきため、意義の曖昧を來たせるなり。若し命題を完備ならしめんとせば、「老佛の教を塞がざれば聖賢の教流れず、老佛の道を止めざれば聖賢の道行はれず」といはざるべからず。論語に「夷狄之有君、不如諸夏之亡也」といへるも、「不如諸夏之亡君也」といふべきを君といふ主格を略せるため、意義不明瞭となれるなり。

また命題の完備といふよりして、章句の單一といふことを生ず。すべての辭句を主部從部の關係によりて正すときは一主部と一從部とを有するもののみのものは最も單一の文章にして最も明晰なるものなり。されば文章は概して其の章句を單一にし、混文章または複文章となるを避くるだけ、ます／＼明晰の度を增すべし。畢竟思想をして一判斷每に自立し完備せしめんとするの傾向に外ならず。

思想の彩色に屬する修辭過程にも、消極的と積極的との二段あること、前に一言せるが如し。消極的想彩とは、思想をして明晰ならしめんとするの工夫なり、知力的に理解の充分ならんを主眼とするの修辭法なり。故に此の過程のみを履みたる文章あらば、其は未だ修辭上の積極的價値を生ぜざるものなり。無記の狀にあるものなり。また此の過程にだに上らざるものあらば、其は意義を傳ふることすら充分ならざるの文なるべし、言ひ換ふれば完全の辭を成すに足らざるものたり。若し夫れ進みて無記の狀態以上に、積極的修辭過程を經るに及べば、こゝに始めて人を感動せしむるの文辭を得ん。此の境にありては、却りてまた意義の明晰を主とする消極的條件を破ることあるべしといへども、これと初めより消極的條件を具へざるものとは、相似て非なり。彼れは爲に晦澁若しくは散漫の弊を感じ、此れは爲に一層心に會することの容易なるを覺ゆ。畢竟冷かなる理知以外、修辭的美術の力の有無によりて兩端相分かるゝなり。

消極的想彩は之れを兩項に分かちて論ずるを得べし。蓋し消極的想彩の原理は、思想の論理的發展の一部を援取して、其の最も理知を滿足せしめ易き形式的論理の要求に從ひ、思想の按排を修理するなり。形式的論理といふも、三段論法といふが如き推理式以上にあるものは、思想の性質によりて普く採用するを得ざる場合あれば、主とするところは判斷式にあり所謂命題の方式是れなり。形式的論理が命題を定むるの順序は、前に述べたる如く、主部從部の關係による。主部とは思想の發足點なり。從部とは其の到達點なり。此の二部完備せざれば全き思想といふべからず。之れを命題の完備といふ。また主部は必ず先にして、從部は必ず後たり。之れを敘次の順正といふ。

積極的想彩に於ける思想の發展は、想念の增殖に基づける譬喩法、想念の變形に基づける化成法、想念の排列式に基づける布置法、想念表出の態度に基づける表出法の四類に大別するを得べく、其のうち更に各數項を具するなり。

べたり。

偶法とは韻の相諧へる句を總稱するものにして、洋詩の押韻法が大抵二句又は三句諧韻なるより生ぜしゝなり。漢詩に之れを求めば、「遺却珊瑚鞭、白馬驕不行、章臺折楊柳、春日路傍情」の「白馬驕不行」と「春日路傍情」とは二句の偶(Couplet)なり。「北風吹白雲、萬里度河汾、心緒逢搖落、秋聲不可聞」の起、承、結は三句の偶(Triplet)なり。

解法とは、句の二つ以上集まりて一團を成せるものにして、一篇の詩中最も大なる段落法なり。洋詩にて最も多きは四句一解なれど、此は必ずしも一定せるものに非ず。詩人の好みに應じて分かつを得。畢竟一の大なる讀法と見るべし。たゞ一且解の樣式を定めたる上は全篇之れに則るを法とす。且つ大抵解と共に意義にも段落あるを例とせり。漢詩にては、前にいへる古詩の韻を轉ずる場合が解なり。また一韻到底なるものにては、杜甫が玉花宮の詩、四句一解にして四解一篇を成せり。

溪回松風長　蒼鼠竄古瓦　不知何王殿　遺構絕壁下」　陰房鬼火靑　壞道哀湍瀉　萬籟眞笙竽　秋色正瀟灑」　美人爲黃土　況乃粉黛假　當時侍金輿　故物獨石馬」　憂來藉艸坐　浩歌淚盈把　冉冉征途間　誰是長年者

意の轉ずる所すなはち解の轉ずる所なるを見るべし。但し漢詩の解は、英詩に於けるが如く詩形上顯著の地位を有せず。和歌にありては一句一解なるもの多く、長歌等にては、意義の上より解を立て得る場合もなきにあらねど、本來よりいふときは寧ろ解無しといふを至當とす。近時の新體には大抵洋詩の體を學びて解を設けたり。洋詩といへども、短きものには解なきこと勿論たり。

第四節　想　彩

想彩の二段――消極的想彩――其の二種――積極的想彩――其の四種

を望まずして五音句を望むところは、旋律の理あるに似たり。即ち五は七と最もよく調和し、七は五と最もよく調和すと見るの外なし。而して所謂五七と七五との差は、一は前短く後長きが故に終止の姿をなし、一は前長くして後短きが故に轉下の姿をなす。此は勢力消長の模樣より生ずる自然の態度にして、頭大尾小と頭小尾大と、一は重く一は輕く、一は圭角あり。一は圓滑なる文體の相違なり。

句法とは歩の若干相寄りて成れる者なり。英詩にては必ず一句毎に一行に書き分けたり。句をまた行（Line）といふは此の故なり。漢詩にては五言といひ七言といふもの是れに當れり。「趙氏連城壁、由來天下傳、送君還舊府、明月滿前川。」こは二音歩と三音歩とを有てる四句より成れる詩なり。和歌にありては七言五音の中に別に歩あるものとして七音五音等を直ちに句と見做す者もあれど、之れを直ちに歩と見るときは、句は此の外にあり、即ち和歌にては五七五の三歩を一句とし、七七の二歩を一句とす、所謂上の句下の句之れなり。此の意よりいへば短歌は僅かに二句より成れる詩なり。長歌は五七、又は七五を一句とするものと見るべく今の新詩體形は源を此に取れるものなり。最も短きは發句にして五七五の三歩一句より成る。洋詩の句法としては（一）、一句は必ず同一格の歩より成らざるべからず揚抑格ならば全句すべて抑揚格の歩を用ふべし。漢詩和歌は然らず「平々」「仄々」「仄平々」又は五七五、とやうに雜多の歩法を一句中に混用するを得。洋詩にても句の單調に流れんを恐れて或る定則の下に他格を混じ又は變格を用ひ得ることは之れあり。（二）毎句の歩數は無規律なるべからず、猶ほ漢詩に於て七言は常に二、二、三の三歩より成るが如し。但だ全章皆同一歩數の句なるべしとはいはず、或は二句づゝ同歩數なるも可、三句づゝ同歩數なるも可なるの差あるのみ。而して句を其の歩數によりて分かてば一句一歩なるを一歩句（Monometer）といひ、一句二歩なるを二歩句（Dimeter）といひ一句三歩なるを三歩句（Trimeter）といひ、四歩句（Tetrameter）五歩句（Pentameter））六歩句（Hexameter）七歩句（Heptameter）八歩句（Octometer）等あり。（三）句脚に韻を押すを要す。韻の事は前に述

にしたがひて小讀法に分かつは、無益の業たるを見る。此に於いてか歩法を發明するものは以爲へらく、五音句は二二一の形なり、七音句は二二二一の形なり。凡そ抑揚なき單音を連續するときは、節奏の自然の傾向によりて前なる一音は次ぎなる一音に對偶を求め、二音一團となりて、更に次ぎなる二音團に對偶を求む。卽ち偶數によりて或る度までは暗に音團を作り、而して同一音團の反覆せらるゝ所に單調ながらも一種の律を生ず。四音句、六音句、八音句の如きが、吟誦の際、二二又は二二二又は三三又は二二二二又は四四といふ同音反復の調をなすと見て、始めて律に入れりと爲するは此のゆゑなり。此の意味よりいふときは、此等は歩法なり。六音句は二二二といふ三つの音數團より成れる歩なり。四音句は二二といふ二つの音數團より成れる歩なり、六音句は二二二といふ三つの音數團より成れる歩なり。但し單に歩のみにては不十分なるが故に、其の末に更に讀法を表するの工夫を加へ、讀み切りの手段として餘れる力を一音に標したり。これ歩尾の一音なり。「アカサタナ」といへば、「アカ」「サタ」「ナ」の「ナ」に讀を標し、「いろはにほへと」といへば「いろ」「はに」「ほへ」「と」の「と」に讀を標するの類これのみ。而して普通七音に止まりて、九音十一音等の句を生ぜざるは、畢竟二二二二といふが如き同一音團を反覆する歩法にありては、反覆の度多きに過ぐれば、忽ち倦怠を生じ平板に流れて、解體し挫折せんとするの傾きあるがためなり。二二乃至二二二には、なほ終りの一音を加へて之れを區界するの要あれど、二二二二となれば既に之れを要せずしておのづから終止するの氣味あるなり。要するに五音といひ七音といふものゝ末の一音は讀を字音によりて標するもの、殘餘の四音六音は二音づゝの音團によりて歩を成すものといふに歸す。音の間斷より生ずる感情を音數の上に標出せる者なり。隨つて末の一音を省ける四音六音等の句も、別に讀すなはち間斷を終りに附したるにすれば、五音七音と同一の律たるを得べし。吾人が四音句六音句に接するとき、ことさらに句の續き合ひを切りて律を調ふるは、此のゆゑなり。

思ふに右の解釋は尙ほ未熟にして牽強にわたるの嫌ひなきにあらねど最も考ふべきものあるべし。

殊に五音と七音との關係につきては、五音句が既に同一音數の五音句を重ねずして却りて七音句を重ね、七音句が同じく七音句

を剩すの外、五音句七音句を說明するに足らざるなり。第三は之を歩よりもむしろ讀と見るの說なり。この說には中面の眞理あることと明けし。歩は概して章句の區界と相關することなく、一語の中にても隨意に之れを分かち得れど、讀は必ず章句の區界を破るべからず。語の界域はまた章句の界域なるを要す。然るに國歌の五音句といひ七音句といふものは、其の句界必ず章句の界域と一致せり。たとへば「ほとゝぎすの鳴きつるかた」といふが如きは、音數のみよりすれば五音と七音とに分かち得べきものなれど、章句上「ほととぎす」「の鳴きつるかた」といふが如き區界を許さゞるため、此れらは五音七音の句法となり得ざるの類これなり。知るべし五音句七音句の半面には、必ず章句の區界と伴ふべしといふ讀法の原理を攝取し居ることを。

されども單に讀法とのみ謂ひて已むときは、其の何故特に五たり七たるを要するかといふ問題は依然として解けざるなり。さらに第四の解釋法は五音句七音句を讀にして兼ねて歩の性あるものとするにあり。由來讀の根本とするところには、異なる音數または音團の繼續的に調和する所謂旋律にあること前にもいへるが如し。別言すれば二つ以上の異なるものが如何に續き行くかといふ、その續きかた卽ち關係に旋律あり讀法あるなり。單獨に五音を切り七音を切りたりとて、讀をばなさゞるの理なり。されば五音七音に讀ありといふは、其の五音の內部、七音の內部に更に小區分ありて、此等の調和するがためなるか、若しくは五音は次ぎなる七音に對し、七音は次ぎなる五音に對するの關係に調和あるがためなるかの理由ならざる可らず。例へば「うきわれを」といふに讀あるは、「うき」と「われを」と、二と三との調和あるがためか、若しくは次ぎの句なる「さびしがらせよ」に對して五と七との調和あるがためなるか。後者なりとせば、これ已に五音そのもの七音そのものゝ獨立して有する律とはいひがたきものたり。十二音の句は五と七、若しくは七と五とに讀み切るを可とすといふに止まるなり。また前者なりとせば、二と三との調和は五といふ旋律を成すとせんも、其の特に二と三との二つに限らるべき理を見ず。「菜つます兒」といへば、一三一といふ讀法となるべく、「うぐひすの」といへば四一といふ讀法となるべく、「ほとゝぎす」といへば五音の一團の讀法となるべく、讀法の原則全く亡ぶべし。すなはち五音句七音句を更に章句の別

し。此の五音句特有の調諧的態度は何れより來たるか。

第二の答を與ふるものは曰はく、五音といひ七音といふは、西洋の音歩に相當す。音歩の原理は、西洋にては二音または三音の一團中に、抑揚又は長短の變化を巧みたるものなること、上に述べしが如し。然るに我が五音句を歩と見るときは、其の中に如何なる變化ありや。音量の上に抑揚長短の變化に乏しきは我が國語の性質にして、所謂平仄律の作用あるにあらざるは明かなり。さりとて、全く無變化の五音を結束せしものと見ては、其の五音句が特に調子を有するの理、解すべからず。五といひ七といふ數に一種神祕の性質ありて、吾人の聽感と特殊の關係をなすと見ば、或は一解たらんも、これまた心理上生理上の法則を得ざる限りは、以て論となすに足らず。此に於いてか、或るものは、五音を二音と三音とに分かち、七音を四音と三音または二音二つと、三音とに分かち、平仄に代ふるに二といひ三といひ四といふが如き數を以てして、是等の配合上に變化を巧まんとせり。即ち二音三音の合して五音となれる句は、其の二音を短音と見、三音を長音と見、短長の配合によりて調子を成すとするなり。「われ行かん」は「われ」といふ二音團すなはち短音と、「行かん」といふ三音團すなはち長音との配合なり。また「いまわれ行かん」といふときは、「いま」「われ」「行かん」の短々長又は「いまわれ」「行かん」の長短より成ると見るなり。されど是れまた強ひて二三といふ數を短長といふ平仄律に比せんとするの嫌ひありて、韻語の兩項に長短の配合より生ずる律を感ずとはいふべからず。「われ行かん」は單句上には二音と三音との配合に相違なけれど、これが長短といふ關係にて調子を成すとは解せざるなり。且つ單に長短といふときは、一と二とも、一と三とも、乃至二と四とも、二と五とも、すべて短長の關係あらざるべからず。特に二と三と、又は三と四のみを短長音團とするの理、知るべからず。詮ずるところ五音と限り七音と限るの要なきに至るべし。若し必ず二と三又は三と四ならざるべからずといはゞ、これ長短の關係にあらずして、二といひ三といひ四といふ數の關係なり。此等の數の間に或る特殊の意義なかるべからず。

要するに以上の說にては五音と七音若しくは二音三音四音等の數と心理作用との間に必然なる音律的關係あるかといふ未了問題

之れに對する未了の答案は種々なり。第一、五といひ七といふ音數そのものには意味なしと見るを得べし。斯かる立脚地にあるものは、前掲第一案の根本的事實を否定するものにして、吾人が吟誦の際五音といひ七音といふに特殊の調あるが如く感ずるは、たゞ一の習慣たるに過ぎずとし、若しくは五と七との關係上に生ずる調子を誤り認めたるものとに外ならずとなす。されども此は吾人の與せざる所なり。げに初心の人が歌を作る際などに、其の口にするところの果して五音句七音句を成せりや否やを辨知し得ずして、指折り數へて僅かに其の音數をたしかめ得るが如きは往々見るところの事實にして、此の點よりいふときは、五音といひ七音といふものが、吾人の考ふる如く一讀下何人にも解せらるべき自然の調子を有するにあらずとも見られざるにあらねど、此は未だ深く事實を觀察せざるの論にして、初心の人が指折り數へて音數を辨ずるは、たゞ之れを確めんとするに止まり、之れに先だちて朧げながらも彼等の耳に五音七音の自然の調子は解せられ居るなり。たゞ其の道に熟せるものにありては、律格を聽くの耳一層精細明確なるがため、初めより一々算定するを待たざるのみ。此の事實を以て五音七音の中に含まるゝ一種の調子を否定するをば得ざるべし。且つ日本のみならず支那にありても、五音と七音とが殆んど唯一の句形となれる事實あり。之れを歷史的に見るも、日本の歌といひ支那の詩といひ、古へは種々の句ありしに拘はらず、言語の進むと共に、漸次五音七音の句が最も勢力を占むるに至りしは、五といひ七といふ數に何等かの意味あるに因らざらんや。或は五音に調ありと見るは、次ぎに來るべき七音を豫想したるが故なり、七音に調ありと見るは、次ぎに來たるべき五音を豫想したるが故なりといふ。卽ち五と七又は七と五といふが如き異なる數の關係に基づくとするなり。されど現に支那は五七又は七五といふが如き異なる數の配置を要せず、單獨に五言又は七言のみを排列して而も其の五といひ七といふ調を有するにあらずや。而して日本にては、五音句の次に五音句を重ね七音句の次ぎに七音句を重ぬるときは、五七又は七五に存するが如き調は亡ぶるに非ずや。斯くの如く五七、七五といふことゝ、五といひ七といふことゝは別の意義を有す。「われ行かん」といふと「われら行かん」といふとは、注意して之れを誦すれば、一は調諧的、一は散文的、おのづから我が態度を異にするを認むべ

とに分かてるなり。而して斯く格を破れるところに却りて絶妙の詩ありとせらるゝ點より見れば、彼の上の讀法は、我が五七といひ七五といふが如きものよりも一層隨時的なるに似たり。我が邦の詩歌にありては、五七七五などいふ音數律は殆んど唯一の律格にして、若し之れを漫にするときは、詩形は亡ぶるの結果を生ずべし。

また西洋の讀法には大讀法小讀法の別ありて、上に掲げしは何れも大讀法の例なれど、小讀法とは、さらにこの中に幾多の小句讀を立つるの謂なり。前例の句について言はゞ

Two principles || in human nature | reign;

Self-love | to urge, || and reason | to restrain;"

重線は大讀法を示し、單線は小讀法を示せるなり。小讀法は大讀法よりも一層多く隨時的なるを見るべし。我が邦にては五言といひて七言といふものゝ中さらに五言を二音と三音に讀み切り、七言を三音と四音に讀み切るたぐひとも見るべし。漢詩につきていふときは、其の五言といひ七音といふものは直ちに句にして、兼ねて毎句末に讀法あるものなり。句の中にては、七言は四音と三音と、五言は二音と三音とにおのづから讀あるを普通の場合とす。

（參照）　日本の五音七音に關しては、なほ研究すべき節多し。試みに其の研究點の大なるものをいはゞ、第一、五音といひ七音といふ其の一句々々に一種の調ありて、他の四音六音等の句とは異なるが如き感を生ず。これ何ゆゑなるか。第二、斯くの如き五音句七音句を連ぬるところにまた一種の調子を生ず。五音句の次ぎには七音句が最もよく調和し、七音句の次ぎには五音句が最もよく調和するが如く感ずるは何ゆゑなるか。以上二問は此の點に關する根本の疑にして、結局五といひ七といふ音數の中に存する律格、及び五と七、若しくは七と五との排列關係に存する律格の研究に關するなり。

るの趣きあるは、讀法の本意なり。されど其の七五の關係を全篇に反覆するは節奏的なる所以なり。

英詩にては一讀の含む音數に定格なけれど、通例一行の終りには必ず之れあること、自然の勢なり。一行中にては、十音の行を四音と六音とに讀み切り、十二音の行を六音づゝに讀み切るが如き、多く見る例にして、一篇一解すべて同一讀法なるもの、二三句毎に之れを變ずるものなど形式は一ならず。

"The cruel, ravenous, hounds || and bloody hunters near,

Thie noblest beast of chase, || that vainly doth but fear,

Some bank or quick-set finds; || to which his hounch opposed,

He turns upon his foes, || that soon have him enclosed."

の如きは十二音句を折半して、六音ごとに讀を置けるなり。

"Two principles || in human nature reign;

Self-love to urge, || and reason to restrain;"

といへるは、十音句を四六に分かてるなり。其の他全く無定則なるものあり。たとへば

"The quality of mercy || is not strained, ||

It dropeth, || as the gentle rain form heav'n

Upon the place beneath. || It is twice bless'd; ||"

の如きは、第一行を七音と三音とに分かち、第二行を三音に分かち取りたるのち次の行に讀みつゞけ、第三行を六音と四音

之れを専ら旋律の原理によりて調ふるもの、すなはち音數の幾何づゝかを一團として、恰かも一音の長短若しくは抑揚なるが如く見做し、其の大小の關係によりて旋律的に錯綜せしむるの法なり。一は統一的にして、一は變化的なり。前者は同種のものゝ反覆を主とする所に美あり。後者は異種のものゝ調和する所に美あり。四六體、七五體などいふものは、其の同一句法の反覆せらるゝ點に特色あれば前者の原理に基づける句讀法といふべし。之れに反してわざと長短錯落の句法を用ひて同一句法を反覆するを避けながら、しかも其の間に不調諧の感無きを得るは、後者の原理に屬せる句讀法なり。要するに音數によりて成れる節奏法(Rhythm)と旋律法(Melody)とは、一般にいふ句讀法、すなはち前に口調の條下に論ぜしものゝ根本則たり。唯彼れにありては、未だ明かなる定格を成さずして隨意的なるを本來とするのみ。

　されば是等のもの、進みて一定の律格を成すに至れば、節奏的なるものは步法となり、旋律的なるものは讀法となる。步法とは同一音數團を規律的に反覆するの謂にして、二音步法とは二音一團の步を反覆し、三音步法とは三音一團の步を反覆するものなり。讀法は之れに反して種々なる音團を巧に調和せしむるものなれば、本來よりいふときは、其の際に音團の形式を定むるの必要なき理なれど、全く無定格なるときは、律格たるの性を具へざるに至るべし。故に通例幾種かの音步を限りて、之れを規律的に相ついで交錯せしむ。卽ち讀法は其の異種なる音團を調和する點に於いては、變化を主とすれども、其の上に更らに幾種かの類を限る點に於いては、統一を主とし、結局或る度以上は同一句法の反覆せらるゝに至る。斯く同一句法の反覆せらるゝ所は、また直ちに節奏法の原理たり。例へば

　君をはじめて、見るときは、千代もへぬべし姬小松、お前の池なる龜岡に、鶴こそむれゐて、あそぶめれ。(「平家物語」)

といふときは、其の「君をはじめて」といふ七音步と「見るときは」といふ五音步との續きあひ滑かにして、おのづから調諧す

解五斗、臨レ行強戰三五場、酩酊更能相憶否。（亡名氏『咏酒』）

此の詩の起頭の二句は即ち單音步にして而かも一步一句の體なり。二音步は其の第三句四句、乃至通例の五七言詩に於ける前半句、たとへば「解釋春風無限恨」といふときの「解釋」「春風」等に相當す。三音步は前例の第五句第六句乃至通例の五七言詩に於ける後半句「無限恨」などなり。國歌にては平仄法の作用するものなければ五音七音等を直ちに步なりと見るを可とす。されば我が邦に最も多きは五音步七音步にして、

契りし宵の、たそがれ、しるべも深き、そらだき、とめ入る方のはぎのとを、開くや袖のうつり香（箏曲）

の如く四音步と見ゆるものも無きにはあらず。また三音步は『萬葉』の歌に「しば〳〵も、みさけむ山をこゝろなく、くもの、かくさうべしや」などいへるに見るべし。

六音の例は

風になびく、富士の煙の、そらに消えて、行くへも知らぬ我が思ひかな（西行）

八音步の例は

吉野山、櫻が枝に、雪ちりて、花おそげなる、としにもあるかな（西行）

秋さらば、今も見るごと、つまごひに、しか鳴かむ山ぞ、高のはらのうへ（『萬葉集』）

等なり。

讀とは詩の讀み切り法にして、前項、句讀法を論ずる條にいへるものゝ一部と相通ず。由來一般の句讀法には、二樣の原理あり。一は音數を專ら節奏の原理によりて調ふるものすなはち音數を或る限度內に於いて節奏的に等分する法なり。一は

夜の中山」といふときは「五七五七七音に一種の律格をなして口調よし。又「山路きて何やらゆかし、菫艸」といへば五七五音の律をなし「ふるき都を來て見れば、淺茅が原とぞなりにける、月の光は隈なくて、秋風のみぞ身には染む」といへば、七五七五の律をなす。此等すべて音數上の律格なり。西洋にては單に此の種の律格を主とする詩は少なけれど、日本の詩歌は總じて律格の根柢を之れに托せり。但し西洋の詩といふとも音數の律を輕んずるにはあらず。夫の步といひ句といふたぐひは畢竟他の抑揚押韻等の律法に數の律法を交へたるものといふべく、むしろ音數律によりて音位律、音質律等を調ずともいふべし。之れを造句法といふ。

まづ英詩について造句法の次第を見るに、大體之れを步(Feet)讀(Pause)句(Verse)偶(Couplet)解(Stanza)の五段に分かつを得べし。

步とは平仄法によりて一團となれる音の、最も小なるものなり。例へば—When they—ride in—state—といふとき、まづ「ホエン」にて揚げ「ゼー」にて抑へ、此の揚抑二音を一步とし、次も「ライド」に揚げ「イン」に抑へて一步とし、次は「ステート」と揚げて一音一步とす。卽ち此の句には揚抑二音の步二つと、揚一音の步一つとを含めるなり。說いて此に到れば、步に幾類かの別あることも自から知らるべし。すなはち一綴音より成るものを單音步(Monosyllabic feet)といひ、二綴音より成るものを二音步(Disyllabic)といひ、三音步より成るものを三音步といふ。揚抑々格抑々揚格などいふはやがて三音步なり。其の他まれには四音步もあれど、之れと單音步とはむしろ例外にして、普通は二音步三音步を英詩の格とす。之れを支那の詩に引きあつるときは單音步は雜言體の詩などにあり。

酒、酒、酌來、飲取、君莫ㇾ辭、時難ㇾ久、偏樂二少年一、能嬰二老叟一、對ㇾ月不ㇾ可ㇾ無、看ㇾ花必須ㇾ有、千兒一醉一石、劉伶

In utter darkness, and their portion set

As far removed from God and light of heaven,

As from the centre thrice to the utmost pole.

支那にても古詩には沒韻のものありと論ずるものあれど、其の類極めて稀れなるが如く、たま〳〵沒韻と見ゆるものも、たゞ後世の如く諧韻の精しからざるまでにして、大體は押韻せるものなるを認むること多し。宋の嚴羽が『滄浪詩話』に「有古詩今不押韻者」といひ、之れに註して「古採蓮曲是也」といへるに對し、明の馮班は「按、云、江南可採蓮、蓮葉何田田、魚戲蓮葉間。田蓮是韻。間字古韻通。何言全無韻也」と駁せり。

支那の古格にはまた句尾より一語前なるを韻とする例あり。此の場合には、最尾の語は多く助字にして且つ同一語たり。『三百編』。

陟彼砠矣　我馬瘏矣　我僕痡矣　云何吁矣

の如き、虞の韻を諧へたる末に、更に「矣」といふ助字を加へたるものなり。

韻といふにつきては單に響く音といひ、若しくは長めたる音といふが如き意に解して、詩句中いづこにあるも、また一音のみにても韻たるべしと考ふる者、往々ありしに似たれど、此は謬見なり。詩句中いづこにあるも可なりといふは、一定の間斷を隔つといふ定格を破るものにして、形式美の至れるものならず。一音のみにても長むる聲は韻なりといふは、全く韻の原理を知らざるの論にして、梁の劉勰が『文心彫龍』に「異音相從、謂之和。同音相應、謂之韻」といへるに韻の本意あり。

（三）　造句法

專ら音の數を以て律格の基礎とせる例は、手近く我が國にあり「年たけて、また越ゆべしと、思ひきや、命なりけり、小

句を諧ふるの法も、西洋にては句脚の語の最終の母音が同一または近似せることゝ之れに續ける子音の同一なることゝを韻の要件とし全く同一音の語を反覆することをば弊とすれども、支那にては全く同一音の語を韻とするを妨げずたゞ同語を嫌ふのみ。此は主として支那の言語が本來一語一音にして、語中の音の變化少なきため同音語を避くるの餘地なきより來たりし現象なるべし。例へば英語にて child と wild とは其の句尾なる ild の子母音共に相諧ふ點に於いて完全なる押語法なり。join と divine とは句尾の母音必ずしも全く相一致せざれど、或る度まで近似し、且つ其の次に來たるべき子音は全く相合したるが故に不完全ながらも韻たるを得べし。されど若し aught と fault とを相諧へんとするものあらば、其の母音は相同じきも、次なる子音の異なるため韻を成さゞるを見る。また全然同一の語を諧韻せしむるが如きも、或る特殊の目的ある場合以外には、望ましきものならざるは勿論、たとひ、語は異なるも、全く同音なる語をも忌むなり。たとへば、night と knight との如し。此等畢竟音の相諧ふが中にも成るべく變化の豐かならんを欲する、微妙なる音調の趣味より生ぜし現象に外ならず。

楊柳渡頭行客稀　罟師盪槳向臨圻　唯有相思似春色　江南北送江君歸（王維）

此の詩の韻が稀、圻、歸みな全く同音語なるの類は洋詩にては累とせらるべきものたり。

（參照）英詩に沒韻法(Blank verse)といふものあり。全く韻脚を用ひざるの法にして、最も高妙、隨つて最も困難なる律格法の一とせらる。かのミルトンが『失樂園』("Paradise Lost"—Milton)の詩の如き此の句法によれるもの、好例なり。

Such place eternal justice had prepared
For those rebellious; here their prison ordained

し。太白が「懷張子房」の詩

子房未虎嘯　破產不爲家。　滄海得壯士　椎秦博浪沙。（以上第一解）　報韓雖不成　天地皆震動。　潛匿遊下邳　豈曰非智勇。（以上第二解）　我來圯橋上　懷古欽英風。　唯見碧水流　曾無黃石公。　嘆息此人去　蕭條徐泗空。（以上第三解）

第一解四句の中、隔句に二句を麻の韻に諧へ、第二解四句の中、隔句に二句を董の韻と腫の韻と相通ぜしめたる仄韻に諧へ、第三解六句の中、隔句に三句を東の韻に諧へたり。支那の詩に於いて韻の變化多きは此の種の作例なり。

また斯く比較的變化に富める押韻法も、其が隔句間には無韻の句を挿むが故に、結局諧韻の範圍狹し。第一句と第三句、第五と第七等すべて、其の例たり。蓋し一句を隔てゝ斯くの如く無韻卽ち踏み落としあるは、五言といひ、七言といひ一句の音數極めて短少なる詩風の自然の必要より生ぜしものなるべく、若し每句に韻を踏むときは、煩に過ぎて却りて趣味を損するの恐れあるがためなるべし。

花近高樓傷客心。　萬方多難此登臨。　錦江春色來天地　玉壘浮雲變古今。　北極朝廷終不改　西山寇盜莫相侵。　可憐後主還祠廟　日暮聊爲梁甫吟。（杜甫）

近體なる七言律にありても、第一第二と續きて押韻せる外は、すべて隔句沒韻なるを見る。五言にては律もまた第一句が踏み落としに始まり、全篇隔句の押韻なるを常とす。句の短きにつれて、韻脚を疎にする必要のます〳〵大なるを知るべし。排律また同一の現象を呈し、絶句に於いても、七言は起承結の三句諧韻とし第三なる轉句のみ沒韻として變化を巧み、五言は始めより一句隔てに押韻して、歸するところ五言二句すなはち十音ごとに韻を置くと同一の效を收めんとせり。但し此等は最も普通なるものに就いていへるものなれば、種々の例外または變調あること勿論たり。

Upon the lonesome *wild.*

毎句脚に於いて「デー」と「グレー」と「チャイルド」と、「ワイルド」との相諧ふもの即ち韻なり。我が邦の歌にては例へば、「我のみや哀れと思はんきりぐ＼す、鳴く夕かげの大和なでしこ」といふも、上の句の末なる「きりぐ＼す」と下の句の末なる「なでしこ」と韻の諧へるものなきを見るべし。其の他長歌につきて見るも、今様、箏曲、俗曲等の稍々長きものにつきて見るも、同じく韻法なし。或は平仄と共に韻も我が國の歌にありと論ずる者あれど、到底牽強の説たるを免れず。例へば俗曲中の「坂はてるてる、鈴鹿は曇る、あひの土山、雨が降る」といへる小諸節、又は「あらなつかしの松蟲の聲や、聲聞くたびにおりん戀しや」といへる變り節の歌に見るに、此は如何にも毎　の末なる「る」「や」等の一音のみは韻とも見らるれど、公平に考ふるときは、恐らく偶然の產物なるべく、心して押韻したりとは見えざるなり。「いたこ出じまの、眞菰のなかで、あやめ咲くとは、しほらしや、しほらしや」の「ま」「か」「や」等を諧韻といふたぐひも、未だ以て我が邦の歌謠に韻脚法の成立せしことを證するに足らず。俳賦類にて、ことさらに押韻を試みしもの、也有の「鶉衣」などに見えたれど、これは文字上の遊戲たるに過ぎざるなり。

韻脚に種々の形あり。洋詩にては、隔句に諧韻するもの、續けて諧韻するもの、二句一韻なるもの、三句一韻なるもの等、其の揚句一ならず。支那にては、律、絶、古詩みな押韻の法を異にし、隔句なるあり。隣接せるあり。律、絶は全篇一韻、古詩には、解に從ひて轉韻するもの、一韻到底なるもの等あり。されば支那の詩と英詩と押韻の法の異なるは、彼れにては二句の諧韻を普通とし稀れに三句のものはあれども、其の以上同一韻を諧ふることは殆んど無し。支那は之れに反して絶句、律體ともに全篇同一韻たり。古詩にありても、大抵二三句以上には上るが故に、西洋よりも常に同音反覆の度多く變化少な

Mixed Iambic, Nŏ crīme | wăs thīne | ĭll fā | -tĕd fāir.

Mixed Trochaic, Triēmblĭng, | hōpĭng, | lĭngering | flyĭng,

Mixed Anapestic, Dē r, rē | -gīons of sī | -lĕnee ănd shade.

Mixed Dactylic, mīdnīght ăs | -sīst oŭr mōan.

即ち抑揚格に二個の揚々格を混じ、揚抑格に揚抑々格を混じ、抑々揚格に一の揚々格を混じ、揚抑々格に一の揚抑揚格を混ぜるなり。

（二）　韻脚法

同一又は近似せる音を一定の間隔によりて反覆する律格なり。詩形中比較的に變化乏しきものにして、支那と西洋とには存すれど、日本の歌には、之れまた一定の格となれるものあらず。支那にては

朝辭白帝彩雲間。
千里江陵一日還。
兩岸猿聲啼不住
輕舟已過萬重山。

といふとき、其の間、還、山は皆韻脚たり。英詩にては

Yet some maintain that to this *day*
She is a living *child*;
That you may see sweet Lucy *Gray*

明月何皎々(○●○●●)照我羅牀幃(●●○○○)憂愁不能寐(○○●○●)攬衣起徘徊(●○●○○)客行雖云樂(●○○○○)不如早旋歸(●○●○○)出戸獨彷徨(●●●○○)愁思當告誰(○○○●○)引領還入房(●●○●○)涙下沾裳衣(●●○○○)

固よりすべて今日を以て律せんは非なるべしといへども、何れの點にも律格といふに足るべき平仄法なきを見るべし。

英詩につきて諧格の例を假らば、

Iambus —, The rul | -ling pas | -sion con | -quers rea | —son still.

Trochee—◡, In her | lovely | silken | murmur.

Spondee— —, Dark night..

Pyrrhic ◡ ◡, Hap | -pily.

Anapest ◡ ◡—, I have read | in an old | and a mar | -vellous tale.

Dactyl—◡ ◡, Jupiter, | great and om | -nipotent.

Amphibrach ◡ — ◡, Redundant.

Amphimacer — ◡ —, Winding-sheet.

Bacchiut ◡ — —, The dark night.

Antibacchiut — — ◡, Eye-servant.

Molossus — — —, Long dark night.

Tribrach ◡ ◡ —, Insu | -perable.

また二格以上混合せる場合の例に

らしむる所にのみ、嚴にいふ律格の成立するを知る。英詩の平仄法は之れに反して、毎歩或は抑揚、或は揚抑、或は抑々、或は揚々、何れかの一を定めて到底せしむるを例とす。前例「⌣ー ⌣ー ⌣ー ⌣ー ⌣ー」かくの如くなりしを見て知るべし。隨つて毎歩中首尾兩音ともに重要なる律格の成分となり、支那の平仄法よりも一層多く規律的なるの趣きあり。

尙ほ支那の詩の音歩を二音づゝに分かつにつきては、後の音數律の條に言ふ所あるべし。洋詩には種々なる平仄法の規定あり。二綴音を一歩とするものには抑揚格(Iambus)揚抑格(Trochee)揚々格(Spondee)抑々格(Pyrrhic)の四種、三綴音を一歩とするものには抑々揚格(Anapest)揚抑々格(Dactyl)抑揚抑格(Amphibrach)揚抑揚格(Amphipacer)抑揚々格(Bacchius)揚々抑格(Antibacchius)揚々々格(Molossus)抑々々格(Tribrach)の八種、併せて十二格を生ず。但し此のうち最も普通に用ひらるゝは、抑揚格、揚抑格、抑々揚格、揚抑々格等にして、他は多く此等の格の單調に流るゝ場合に、之れに混じて變化を生ぜしめんとするに用ふといふ。故にまた以上の諸格によれる平仄法中、一格到底なるものと二格以上混合せるものとあり。

(參照) 支那の詩にても、平起、仄起、全仄、全平等の格式なきにあらねど、平仄法として細說すべきものならず。また詩の八病と稱して平頭病、上尾病、蜂腰病、鶴膝病、大韻病、小韻病、正紐病、旁紐病等の目を擧げ、詩中何字目と何字目とは平仄相犯すが故に同聲を避くべしなどいふ微細の關係を論じたるものあれど、未だ格法とはならず。

支那の詩に平仄が明かなる一定の律格として完備せるは夫の六朝の末、音韻の研究盛んにして、周顒沈約等の出でし後、唐の近體詩出づるに及べるよりの事たり。されば唐以後といへども、古詩は必ずしも平仄に拘せずして之れを作る。或は古詩にもまた平仄ありと論ずるものあれど、事實に於いて然らざるが如し。勿論すでに詩なる限りは、自然に平仄節奏の存することは之れあるべきも、未だ規定的性質をば有せず、隨つて眞の律格とはいふべからざるなり。例へば十八首のうち

には、あらはに之れを用ひるもの無く、たゞ自然の情にしたがひて、朗詠の際に抑揚長短を生ずるを得るのみ。

雲想衣裳花想容　春風拂檻露華濃　若非群玉山頭見　會向瑤臺月下逢（李白）
名花傾國兩相歡。常得君王帶笑看　解釋春風無限恨　沈香亭北倚欄干（同上）
江碧鳥逾白　山靑花欲然　今春看又過　何日是歸年（杜甫）

白點は平聲をあらはし黑點は仄聲をあらはす。支那における平仄律の一斑は之れによりて見るを得べし。英詩にては

Hŏnŏr and shāme frŏm nŏ cŏndĭtiŏn rīse.

または

Hŏnŏr's bŭt ăn ĕmptў bŭbblĕ.

直線によりて揚聲を標し彎線によりて抑聲を標したり。

今此等の詩句について平仄法の構造を見るに、支那にては二字目四字目六字目に平仄の中心を定め、之れを一句中平仄交互ならしむるを主とす。所謂二四不同二六對の法よく此の理を證せり。されば音歩はおのづから二音づゝに分かれ、其の尾音を定格として、首音は必ずしも之れを定めず、「○● ○○ ○● ○」又は「○○ ●● ●○ ○」又は「●○ ○● ○○ ●」又は「●● ○○ ●● ○」といふが如く、一首の絶句中にすら或は「平仄」或は「仄平」或乃「平々」或は「仄々」の步法を混用す。若しこの間に絕えて統整せらるゝ所なくんば、律格たるの性質は亡ぶべし。何となれば單に一步内に同質音を偶せしめ又は異質音を對せしめたるのみにては、何の規律をもなさず、其の同一步法を反覆するに及びて、始めて變化裡に統一ある形式美の原則に合すべければなり。此の點より見て、支那の平仄法は、毎步の二音目すなはち尾音を平仄交互な

等、見るべし。

後に反覆法と名づくる詞藻あり。前例「蹶る〳〵」の如きは即ちこれにして、其の趣意とするところ、同一語音を疊むにあらず、同一思想を重ぬるにあり。而かも外形上往々にして疊音法と近似するを免れず。混ずべからざるなり。

第六項　律格

律格即ち詩形――其の三原理――平仄法――韻脚法――造句法

律格とはいはゆる詩形なり。語音を音樂的に利用することの最も進めるものにして、前に擧げたる聲音の諸方面中、音位、音度、音長、音數の四を形式美の原理に基づき種々に組み合はせたるなり。

律格の種類につきては、言語の異なるに從ひて各國必ずしも一ならず。今、日本、支那及び西洋諸國、就中英國の文學にわたりて、現に存する限りの主なる律格を數ふれば、音度若しくは、音長に基づけるもの即ち音性律、音位に基づけるもの即ち音位律、音數に基づけるもの即ち音數律の三を得べし。音性律とは平仄法の謂なり。音位律とは韻脚法の謂なり。音數律とは造句法の謂なり。

（一）平仄法

律格中最も微妙にして、よく人心の音樂的活動を表出し得るものは、平仄法に如くなし。其は變化の自在なること音數律、音位律の及ぶ所にあらざればなり。而して平仄といふ中には音の度すなはち抑揚と、音の長さ即ち長短との二理あるを得べし。此の兩者は古來東西ともに混じて用ひられ、支那にて平仄を或は音の開閉なりといひ或は音の長短なりといへる、はた西洋にて希臘の平仄は專ら長短に基づき、近世英詩などの平仄は多く抑揚を用ひたる、皆この事實を證すべし。我が國の歌

給ふ（近松『出世景清』）

「恨めしや、腹立ちや、口惜しや、嫉ましや」と同一句法を重ね、「大切がり、いとしがり」「恨めしや、無念や」と同一句法を重ぬるところに疊音のおもしろみあり。

女房戸浪も身を固め、夫（をつと）は固より一生懸命、サア實検せよ見分といふ一言も命がけ、後は捕り手、向は曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰ぞ絶體絶命と思ふ内、早首桶引きよせ、蓋引きあけた首は小太郎、贋といふたら一撃と早拔かける、戸浪は斬順、天道樣、佛神樣、憐みたまへと女の念力、眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て、ムウこりや菅秀才の首うつたは紛がひなし、相違なし、といふにびつくり源藏夫婦、あたりきよろ／＼見合せり云々（竹田出雲『菅原傳授手習鑑』）

「天道樣、佛神樣」「念力、眼力」「ためす、すがめつ」「絶體、絶命」等また同一の理によりて疊音の修飾たり。

早町中が驅けつけ／＼、直ぐに引つ立て引き出だす、果ては千日千人聞き萬人聞けば十萬人、殘る方なく世のかゞみ、傳へて君が長き世に、清からぬ名や殘すらん（近松『女殺油地獄』）

五月雨ほど戀ひ慕はれて、今は秋田の落とし水、軒の玉水とく／＼ござれ、繁くござれば名の立つに（同上）

萬歳傾城の因縁知らずか、さむらひの足にかけて蹴らるゝる萬歳傾城と言ふぞや。誠に目出たうさむらひける。しかも足駄はいて蹴るやら、年立ちかへる足駄にて、誠に目出たうさむらひ蹴る。聞こえたか。さりながら何も身すぎ、あのやうなよい家には蹴られても損は行かぬ、戀を知らねば身が立たぬ、戀若に御萬歳や、年立ちかへるあしだにて、誠に目出たうさむらひける、町人も蹴る、伊左衛門も蹴る、蹴る／＼／＼と蹴散らかし（同『夕霧阿波鳴渡』）

こせ山のつら〳〵椿つら〳〵に見つゝ思ふなこせの春野を（『萬葉集』）

の如きは、「つら〳〵つばき」といひ「つら〳〵に」といひ「見つゝ」といふ「つ」音の重積に一種の音樂的效果を有するものにして句拍子なり。また

白珠は人に知らえず知らずともよし知らずとも我れし知れらば知らずともよし（『萬葉集』）

は「知る」といふ語を連鎖的に重複せる所に趣致あるものなれば疊み句といふべし。其の他「江上の舟となるなかれ、江上の月となるなかれ、月は人の離別を照し舟は人の離別を載す」「我が子は大事大事の我が子を殺しても」「篠原の土となつて影も形もなき跡の影も形も南無阿彌陀佛」「子もりうたうたふを聞けば」「山に對すれば山笑ひ水に臨めば水語る」の如きも疊み句の例たるべく、尻取り文句といふものまた疊み句の一種と見るを得べし。

青々河邊草　緜々思遠道　遠道不可思　夙昔夢見之　夢見在我傍　忽覺在他鄕　他鄕各異縣　展轉不可見　枯桑知天風
海水知天寒　入門各自媚　誰肯相爲言　客從遠方來　遺我雙鯉魚　呼兒烹鯉魚　中有尺素書　長跪讀素書　書中竟如何
上有加餐食　下有長相憶　（古樂府『飲馬長城窟行』）

遠道、夢見、他鄕、鯉魚、素書等またすべて同一たり。

其の他

阿古屋は讀みも果て給はず、はつと急きたる氣色にて、恨めしや、腹立ちや、口惜しや、嫉ましや、戀に隔ては無きものを、遊女とは何事ぞ、子のある中こそ誠の妻よ、かくとは知らで果敢なくも、大切がり、愛しがり、心を盡くせし悔やしさは、人に怨は無きものを、男畜生、いたづら者、あゝ恨めしや無念や」と文寸々に引き裂きて卿ちうらみて泣き

常とすれども、茲にいふ所の韻は、必ずしも一定の間隔あるを要せず、隨處隨意に之れを交へ用ふるものなり。押韻の法は種々あれど、假りに大別して頭韻、脚韻の二とすべし。頭韻と語句の頭に韻あるもの、脚韻とは其の脚に韻あるものなり。

「なれ〳〵て見しはなごりの春ぞとも、など白河の花の下露」の歌にては三つの「な」音が頭韻なり。

其の春夏のこの月は、祝ひ日とて物忌まひ、しの字をさへも嫌ひしが、死して死骸を知る人に其の死耻も包ましく、そなたの髮亂れずや（近松「卯月の潤色」）

にては「し」の音が頭韻なり。脚韻にては前に引ける西鶴が文の「心玉も沈みて、ながらへて長柄山、我が年の程もこゝにたとへて、都の富士はたちにも足らずして」などいへる「て」の音の如きあり。また「坂は照る照る、鈴鹿は曇る、あひの土山雨が降る。」の「る」音、「あらなつかしの松蟲の聲や、聲聞くたびにおりん戀しや。」の「や」音の如きも此の例たるべし。「天を脱み、大地を踏み、身を揉み齒がみの音高く」などいへる「み」音また然り。

而して押韻法が文の情致を助くるは、言ふ迄もなく其が中に音の統一といふ理の行はるればなり。

（三）　疊音法

疊音法の旨とするところは、同一若しくは類似の音ある語句を反覆重疊して、快感を惹かんとするにありて、前條なる押韻法と根本に於いて相通ず。たゞ押韻法は語句の頭部又は脚部に於いて一音の反覆せらるゝを主とし、疊音法は必ずしも其の音の句頭たり句尾たるを要せざるの差あるのみ。

疊音法といふ中には、句拍子、疊み句などを含む。句拍子とは、略々似たる句法を重疊するもの、疊み句とは、全く同一の語句を連續的に疊みて下句に續くるものなり。

人女」）

の如きは、拙なる文章家が却りて七五調などに書きつらぬべき道行きぶりの事柄を、わざと格を崩して、長短さま〴〵の句に變化あらしめ、そこに一種の味を出ださんとせるもの、調あるが如く調なきが如く、手に取りがたきに似て而かも情趣盡きず。我が文學にありては絶妙なる文例の一なり。

句讀法の目的を達する方法としては、言語の選擇及び其が排列に工夫を施す外、同一語句の音を或は短縮し、或は伸長することあり。「詩歌」を「しいか」と長め「四時」を「しいじ」と長め「從者」を「ずさ」と縮め「讀經」を「どきやう」と縮むる類より、所謂休め字、置き字等を加へて句音を増すもの、數語を合して句音を減ずるもの、例へば「深草の野べの櫻し心あらば今歳ばかりは墨染に咲け」の「櫻し」といへる「し」の音、「朝飲木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英」の「兮」の字、「心といふもの」を「心てふもの」とするときの「てふ」といふ句、「春は吉野に咲いたとさ〳〵、初花ざくら、それはえ」の「それはえ」といふ棄て言葉の如き、みな此の理なり。

（參照）音のために同一語句を伸縮ずるは、前に擧げたる音趣利用の場合にも之れありて、「憎き」を「につくき」とし、「きつと」を「きと」とする類は、多く語勢より來たるものにして同じく語音の伸縮なれども、口調のためにするものとは趣意を異にす。また次に述ぶべき押韻法、語路法等にも語音の伸縮あり。語音の伸縮といふことは、これのみを一類の修辭法とも見るを得べし。

また西詩にて my といふ語を「ミ」と發音し、lover を省きて o' er とするたぐひも此の部に入るべし。

（二）押韻法

韻とは同一若しくは類似の音を或る間隔毎に響き合はするの謂にして詩の律格としては、更に其の間隔をも均一にするを

ることも一なり。尙ほ此等のことに關しては、後の律格を論ずる條に述ぶべし。たゞこゝに擧げたるは、未だ規律を成さゞるものなれば、之れを或る規律に化成して、一定の模型とし律格とするに至れるものとは別なること前に言へるが如し。

句讀法にも形式美の原理の二面たる統一と變化とに應じて、句の音數を均整にせんとするものと、長短參差たらしめんとするものとあり。夫の馬琴が文の多く七五、七七などいふ統一の口調を貴びしは人の知るところなれど、あまりに規律に傾きて、殆んど造句法たるの資格を失ひ律格の範圍に入らんとせるを見るなり。

固より川の向ひには、さ霧時なく立ちこめて、水音おどろ〳〵しく、そことも見えずこなたなる、岸の茨に花は咲けども、針のむしろに居るこゝちして、身の毛いよたつのみなれば、縱てこゝより引きかへして、これらも本意を遂ぐることなく、只かく〳〵と告げ申せば、五十子はまたさらに、聞けば聞くとてなつかしき、姬の苦患はとやあらん、かくやあらんとむら肝の、こゝろ一つにおし量る、歎きの霧の籬には、忍ばれぬ身ぞあぢきなき。（馬琴「八犬傳」）

の類、音數の統一を以て口調上の修飾とせる例なり。これに反して

其のころおさんも茂右衞門つれて石山寺參り、花は命にたとへて、いつ散るべきも定めがたし、此の浦山をまた見ることの知れざれば、今日の思ひ出にと、勢田より手ぐり舟をかりて、長橋のたのみをかけても、短きは我々がたのしびと、浪は枕の床の山、あらはるゝまでの亂髮、物おもひせし貌ばせを、鏡の山も曇る世に、鰐の御崎ののがれがたく、堅田の舟よばひも、若しやは京よりの追手かと、心玉もしづみて、ながらへて長柄山、我が年の程も爰にたとへて、都の富士はたちにも足らずして、やがて消ゆべき雪ならばと、幾たび袖をぬらし、志賀の都はむかし語りと、我もなるべき身の果てぞと、一しほに悲しく、龍燈のあがる時、白髭の宮所につきて、神いのるにぞ、いとゞ身の上はかなし。（西鶴「五

(一) 句讀法

句讀法とは、句の長短によりて文句を修飾するもの、吾人が作るにあたりて最も多く依賴する詞藻法の一なり。文の口調善しといひ惡しといふは、專ら此の修辭現象の如何に基づく。

文に章句法といふものあり。句讀法と同じく文章の句を讀み切るの法にして、單に思想の明晰を保つが爲といふ消極條件としては、詞藻の一たるを得ること後に論ずる所の如しといへども、此は未だ以て文の情趣を助くるの用をなすに足らず却りて往々之れと背行することすらあるを免れざるなり。此に於いてか積極的修辭法としては、思想以外、想の音數上に生ずる一種の詞藻、卽ち造句法を說かざるを得ず。造句法とは章句法の上に形式美の原理の行はるゝ者に外ならざるなり。章句法には一定の格なしといへども、章の終り、句の終り等に之れを置くは、普通の例なり。此れは畢竟意義の明瞭ならんを欲するの必要より生ぜしものたり。隨つて同じく必要なる限りは、主部と從部との間、主辭と賓辭と動作辭との間、乃至形容詞、副詞、助動詞、接續詞等の區域をも句讀によりて分かつことあるべし。されど此等はすべて意義を主とする者なるが故に、之れにのみ從ふときは、他方に修飾上の不滿足を來たすことあり。所謂口調惡しとの感是れなり。此に於いてか此の不滿足を補はんが爲に或は意義上の句讀を變更し、或は同一句讀内に於ける語音の數を增減するの工夫をなす。句讀法とは此の謂なり。たとへば「朗々として、笛聞こゆ」といふよりも、「朗々として、笛の音聞こゆ」といふを口調善しと感ずとせば、其は「笛の音聞こゆ」といふ句に「笛」といふ語音を長むるの工夫をなせしがためなり。而して其の理由は、「朗々として」の七音句に對して「笛の音聞こゆ」といふも同じく七音句なるが爲めなること一なり。また「笛聞こゆ」はおのづから更に二音三音の聯合句をなせど、「笛の音聞こゆ」は四音三音の聯合句をなし、四三の綴音は二三の綴音よりも滑かに感ぜらるゝの理由あ

にも通じて存すれど、律格は狹義にいふところの詩にのみ存す。

口調と律格とは、啻に一般的と特殊的とによりて異なるのみならず、其の成立方法の隨時的なると規律的なるとによりて性質を異にす。口調は必ずしも規律として模型の一定を要すといふにあらず、所在隨意に種々なる方法を用ひて可なり。律格は之れに反して、形式美の原理を初めより幾様かの模型に造り置き、之れを規律として形式の到底する所あらんを期す。されば形式美の理よりいふときは規律的なる律格は隨時的なる口調の一段進みて、洗練せられたるものなり。根本に於いては一たり。

さらば形式美の原理とは如何なる者か。夫の古來の美學者美術家等が數ふる統一(Unity)均整(Symmetry)調和(Harmony)變化(Variety)對照(Contrast)といふが如き者は、何れも之れが條項たるを失はず。されども統一といひ調和といひ均整といふは、畢竟同一物の變形に過ぎざるが故に、之を統一といふ一原理に約するを得べし。又變化といひ對照といふも、歸する所變化といふ一原理を以て掩ふを得べし。卽ち形式美の原理は變化と統一との二件にして、此の二者がさまぐの形態を現はす者といふべし。而して變化が何故に美なるか、統一が何故に美なるか、及び形式美とは如何の意義なるかは、後の美論に於て研究すべき題なれど、要之、文章詩歌の語音に變化あり統一ある時は、之れによりて一種の快感を起こすといふの事實をば何人も承認すべし。口調といひ律格といふも、結局この理に基づける者に外ならず。

第五項　口調

句讀法——押韻法——疊音法——句讀法と章句法——押韻法の二種——句拍子疊み句等

口調には種々の現象あり。讀法、押韻法、疊音法等これなり。

値を高めたるに似たり。

捲きあぐるしのゝ簾のさら〳〵に思ひもかけぬ今朝の初雪（景樹）

「さら〳〵」といふを單に簾を捲く音とすれば、後に論ずべき譬喩法に入るものなれども、「さら〳〵に思ひもかけぬ」といふ實義ある語とすれば、音調法の例に入るべきものたり。而して一句の神韻は實に此の一語を中心とせる音趣の利用にあり。「しのゝ」といひ「すだれ」といひ「さら〳〵」といひ「けさ」といふ「さ」行の音か、初雪の淺くつもりて、竹の葉などよりすべり落つる音とつらなりていひがたき初雪の情趣を活現す。

又總じて古人が和歌に濁音促音を嫌へるの類も、和歌思想の傾向が概して優麗を主として豪壯を避けんとするにありし自然の結果といふべく、音趣の利用に外ならざるなり。

語の音便も同一理由より來たるもの多し。「無かりし」を「無かつし」とつめ「紫宸殿」を「しゝいでん」と讀み、「檢非違使」を「けびいし」と讀み、「朱雀」を「すさか」と讀み、「頼んだ」を、「頼うだ」と長め、「判官」を「はうぐわん」と長むるたぐひ是れなり。

第四項　形式的音調

一般的形式音は口調也――特殊的形式音は律格也――隨意的と規律的――形式美の原理

形式的音調とは、語勢的音調の直接の語義を補ふと異なりて、別に形式美の原理を文章の上に應用せるものなり。而して之れを一般的と特殊的との二つに分かつを得べし。一般的とは凡ての文辭に通じて存するものなり。特殊的とは文辭中の特別なるものに限りて存する理象なり。一般的形式音を口調といひ、特殊的形式音を律格といふ。口調は詩文のいかなるもの

音趣の利用といふべし。さらに「三五夜中」といひ「滿願眞如」といひ「御願圓滿」といひ「七寶充滿」といふ中には、固より「三五」といふに「三五の少女」などいふ「若し」「美なり」「艶なり」等の複雜なる語趣的背景あり、「滿願眞如」といふに佛敎、無常、極樂などいふ種々の語趣的背景あるは勿論なれど、此等のもの以外「さん」といひ「まん」といひ「ぐわん」といひ「しん」といひ「ゐん」といふ「ん」の音が、一種重濁の情を作ひて、謠曲が有する悲愴の調を助くるを見る。以上諸多の修辭現象が相寄りて此の文の情を切にするなり。

御諚ざふと呼びかけて、傘つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方杼の、左のかたより進み登りて、組まんとすれども寄せつけず、こゝろ得たりと鋭き太刀風、擊つを發矢と受け留めて、拂へばすかさずこむ切尖を、支へて流す一上一下、透る隙を踏みとめて、頻りに進む捕手の祕術、彼方も劣らぬ手練のはたらき、端よりおとす太刀筋を、あちこち外づす盧々實々、いまだ勝負を判かざれば、廣庭なる主從上卒は手に汗握らざるものなく、瞬もせず氣を籠めて見る目もいと ど遙なる(馬琴作八犬傳)

此の文また「一上一下」といひ「あちこちはづす」といひ「虛々實々」といふに、言語の選擇當を得て、太刀うちの音、言外に聞こゆるが如き感あらしむると共に、法を短促にして、「拂へばすかさず、こむ、切尖を」とし又は動詞接續詞、助辭等を省きて「鋭き太刀風」「捕手の祕術」「手練のはたらき」など、の末を名詞止めとするが如き、凡べて此の場合の思想を語勢によりて補助せんとせるものなり。

もののふの矢なみつくらふこての上に霰たばしる那須のしのはら(實朝)

は古今、雄健の調ある歌として人の稱するところなれども、其の思想以外「あられたばしる」の「た」の音が最も多く一句の價

のとは、おのづから方面を異にす。

(二) 音趣の利用

音趣すなはち語音の情趣を利用して語勢を助くるものには、前に論ぜし音の諸性質、たとへば音長、音位、音數などいふが如き條件によりて、其の效果の種々なることあれども、玆には便宜のため音性、音彙の二大別とせんに、各音の質若しくは量によりて牽聯し來たる種々の情を利用するは音性上のものなり。「怒髪冠を衝く」といへば、其の「ど」といふ音質が激しき情意に聯なりて「激しき怒り」といふ意義を補ふの類、若し之れを「怒れる髪冠を衝く」と改むれば、語勢の大半は亡び去るべし。又音彙上の情趣とは數多の音の配合によりて其の句の意義を補ふもの、例へば「齒がみ齒たゝき、がた〴〵〴〵」などいふとき「齒がみ齒たゝき」と似たる句を重ぬるため、がた〴〵と齒の鳴る情景を一層よく活現するたぐひなり。但しこゝにも斯く重積する音の質そのものが既に「が」といひ「き」といひ「た」といふ恰好の情趣ある音なるを見れば、結局音性上、音彙上の趣致は相合して作用することあるを知るべし。

東遊(あづまあそび)の舞の曲、あるひは天つみそらの緑の衣または春立つ霞の衣、色香も妙なり少女の裳、左右左、さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、なびくもかへすも舞の袖、東あそびの數々に、其の名も月のいろ人は、三五夜中のそらに又、滿願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶を降らし、國土に之れを施し給ふ。(謠曲「羽衣」)

「左右左、左右」とあるは、其の「さ」といひ「いう」といふ音に、立ち舞ふ少女が衣の袖の左右にひるがへるさまを現はすの情趣あると共に之れを重ねて一層の其の意を強むるを得たるの修辭法なり。其の他「なびくもかへすも」といひ「あるひは天つみそらの緑の衣または春たつ霞の衣」といふが如き、同じ 法を反覆して悠々翩翻の態をあらはせるも、音彙上に於ける

ておのづから笹の葉のさら〳〵とする音と融合せしむ。語勢を強むとは此の如きをいふなり、音調によりて言外の意義を補ふなり。また「衣裳は垢つき破れたれども、肌へは殘んの雪より白く」などいへば、八音句七音句を排列せるところに、一種耳に快き調子あり。此等は其の語義と相關することなく、單に音數按排の形式によりて音樂的結果を讀者に與ふるものなれば、形式的といふべし。以下之れを細說せん。

第三項　語勢的音調

擬聲語の利用——音の摸擬——形の摸擬——音趣の利用——音性上——音變上

語勢法を分かちて擬聲語の利用と音趣の利用との二つとす。擬聲語の利用とは「さゞ波」「とゞろく」「きらめく」「ひそめく」「ひらめく」などの如く、自然の聲または形を語音にて擬せる者が固定して言語となれるを利用し、其の語音によりて思想を一層切ならしむるの謂なり。音趣の利用とは、之れに反して其の音の表情が必ずしも一定の言語となれるに非ざるも、臨時隨意に種々の語を採擇するが中より、おのづから思想を補助するが如き音の表情を構成するをいふ。

（一）擬聲語の利用

擬聲語は更に之れを擬せるものと形若しくは形に應ずる情を擬せるものとの二つとすれば「陣には源氏、箙をたゝきてどよめきけり」などいふときの「どよめく」は、衆人のとつと揚ぐる聲を擬して、言語とせるものなり。「星の光ゆらぐ」といふときは、光芒の搖くさまに應ずる情を音に發表して、「ゆら〳〵す」などいふより、轉じて「ゆらぐ」といふ語となれるなり。此等みな他の普通の語よりも意義を活現するに一層の力あるものたり。尚ほ後に論ずべき聲喩法は、此等のものが未だ一定の語を成さゞるものとして、思想の隨意に附加し得べき聲音的形容を研究するものなれば、此に言語上の詞藻として論ずるも

趣に對する關係を見るに、兩者は往々にして矛盾することあり。「べらばうめ」といふ語を用ふるときは、言者の人物、狀勢等最もよく活現することあれども、文壇的語趣なきがため、野卑に聞こゆるの恐れなしとせず。されど之れを改めて「痴漢よ」などいふときは、文雅はこれあるも生趣を失ひて、適切ならざるの憾を遺すべし。斯くの如き場合に兩者の何れを取るべきかは、作文者の風格、思想の性質等によりて定まるべく、其の取捨によりて文體の種類、價値等に影響を來たすなり。

最後に滑稽的語趣とは、社會的語趣の逆用せらるゝ者にして、高貴の背景を要する場合に卑賤の背景を用ひ、男性の語趣を要する場合に女性の語趣を用ふるの類なり。前に例とせる『源氏物語』の一節の如きは、此の理を示すものに外ならず。小兒が大人びたる語句を用ひ、大人が小兒の口眞似などするとき、好笑の感を起こすも此のゆゑなり。尙ほ好笑といひ滑稽といふことについては、別に論ずるの要あり。こゝにはたゞ以上の如き語趣の逆用が滑稽を成すの事實を認むるをもて足れりとせん。

第二項　音調

音調の二面——語勢的——形式的

言語の音を利用して、其が特有の表情を文章に加效せしむるより生ずる現象を音調と名づく。文の音調また語趣と相幷びて修辭上重要の地位を占め、言語の選擇排列、大半は此の標準によりて定めらる。之れを別かちて語勢的、すなはち語の意義と適應して之れを補ひ、以て語勢を強めまたは和ぐるの用をなすものと、形式的、すなはち語の意義より離れて形式美の原理により音樂的情趣を附加するの用をなすものとの二となす。「笹の葉ずれ」といへば笹の葉の風などに相するゝ音と「ささ」といふ名詞と「するゝ」といふ動詞と相通ずる所ありて「さ」行の音多きことが最もよく此の場合の意義を助け、一句をし

り。此に於いてか「しやうがないと諦めやう」といふときには俗にして無味なるが如く、「是非なしと諦めん」といへば雅にして醇なるが如く聞こゆるの結果を生ず。語趣とは此の表情を利用するの謂に外ならず。

語趣は之れを細別するときは、前に消極的語彩の純正を論ずる條に舉げし諸項、たとへば科語といひ、俚語といひ、方言といひ、古語といふが如きもの皆其の種類たるを得べし。科語を用ふるときは、其の語の背景に專門家また專門の智識などいふ聯想を生じ、之れに對する嘆稱の感、其の他種々附屬の感が雜然踏至して、こゝに其の語を焼點とせる一團の情塊を生ず。斯くして其の語は最も容易に其が表出する思想を活きたるもの、結體せるものと化成するの力を有するなり。方言は其の地方、または粗樸の人、田舎漢などいふ背景を伴ひて、之れに連續する雜多の情趣により、其の思想を裝飾す。俚語の、下等社會などいふ聯想に伴ふの情趣に於ける、古語の、上代、歷史、文壇などいふ聯想に伴ふの情趣に於ける、すべて同一理なり。

さらに之れを別の方面より分かつときは、一切の情趣は、其の背景が與ふる效果によりて、文壇的、社會的、滑稽的の三とするを得べし。文壇的語趣とは、其の語　が文壇に用ひ慣れしものにして、文壇といふ背景を帶着し、讀むものをして文雅といふ感を起こさしむるをいふ。いはゆる雅俗の別を生ずるものこれなり。而して文雅の感は、粗野といふことに對して、我が好愛の念快樂の情を惹く。次に社會的語趣とは、其の語　がおのづから其の專屬する社會をあらはすの謂にして、科語を以て專門家をあらはし、方言を以て地方人をあらはし、俚語を以て下等社會をあらはし、古語を用ひて古代の人又は古代の趣味をあらはし、外國語を用ひて外國人、外國趣味、外國の智識と云ふが如き者をあらはすの類なり。而して之れが結果は其の語の情趣を豐富にして其の思想を活現するの助けとなること上にいへるが如し。また其の種社會的語趣の、文壇的語

第三節　積極的語彩

第一項　語趣

語趣の三面――文壇的――社會的――滑稽的――雅と俗

積極的語彩とは、言語採擇の效によりて情の補足をなさんとするものに外ならず。即ち言語が有する本來の趣致によりて、意義の足らざるを補はんとするなり。而して言語本來の趣致を分かちて、其の語の歴史すなはち用例が生ぜし色澤と、其の語の構成材料たる聲音が有する音樂的情趣とに大別することも既にいへり。語趣とは其の前者にして、其の後者をば音調といふ項目の下に論ぜんとす。

凡そ文章が語趣の助けを藉るの利は極めて多し。前節消極的語彩の條に弊として論ぜしものゝ、詞藻としてさらに文中に入り來たるは概してこの條件の下に於いてするなり。而して語趣とは其の語の品位用例なるが故に、大抵の言語みな之れを有せざるなく、背景となりて常に文章の情味を豐富にす。所謂雅文と俗文との別の如きも、多分は語趣の有無大小に關すと見るべし。例へば「しやうがない」と云へば全き俗談平話、如何なる無智の兒童もなほ且つ之れを用ふるを常とするの語なれば、其の背景にて俗間といふ情趣を最も多く伴ふ。されど之れを「是非がない」と改むれば、其の「是非」といふ語の漢語なるがため、當面の意義は同一ながら、之れを用ふるものは前者よりも一層高き社會なりといふ情趣を惹き、背景やゝ前者の場合と異なるを見る。更に之れを「是非なし」とするときは、俗談ならぬもの、文章にのみ用ふるもの、すなはち文壇といふ背景を荷ふものとなりて、情趣いよ〳〵異なり。知るべし、同一の意義を標すと思へる語句も、實は語趣によりて其の意義の包裝を異にしたるものなることを。恰も同じく三五の月光なれど、春夜の眺めと秋天の眺めとは其の趣を異にするの類な

に解せらるゝなども辭同異義の文に作ふ不精確の弊なり。其の他「莊子」に「物無非彼、物無非是、（中略）彼亦一是非、是亦一是非」などいへるも、是非の二字が種々の意義を有するの弊あり。

（三）曖昧の語句

曖昧の語句を用ひて不精確の病にかゝるの例は、理義を先にすべき文に最も著るしく見ゆ。詩歌美文の類には、却りてことさらに之れを一種の詞藻として用ふることもあれど、其は別論なり。夫の和文家が好んで用ふる「ものす」などいふ語の、意義極めて漠然として捉らへがたき、又は近時の論文にしば〳〵用ひらるゝ「或る意味にて」「或る度までは」「一方よりいへば」等の語の、往々茫漠として精確の意義を盡くしがたき、皆この例と見るべし。其の他迂曲したる句法のために不精確の弊に陥れるものも尠なからず。「言ふべけんや」といはゞ足るべきを「言はざるべからざらんや」とするが如きこれなり。

矣ハ幽界ノ心識ニテ、カヤウナルベシト定メテ云出ス辭ナリ。何ゴトニテモ當面ニナキコトニ、我ガ心ニテカク成テスミテアルコトヽ定メオキテ言フナリ。（三宅橘園の「助語審象」）

などいふ文も、語法の迂遠なるがために意義の不精確を來たせるの例なり。

代名詞は文の冗長に渉るを避くるに要ありて、通常作文家に重寶視せらるゝものなれど、濫用するときは文意を不精確のものとすること往々あり。「其の能を藏して其の愚に歸し其の光を和けて其の塵に同ず」といふ時の四の「其の」といふ代名詞の如き、其が意を穿鑿するときは「其の能」「其の光」の「其の」は「我れの」若しくは「此方の」の意にして「其の愚」「其の塵」の「其の」は「彼れの」または「彼方の」の意なれど原文のまゝにてはしか精確なることを知りがたし。

語句が文の精確を損するの條件は、以上の二に其の大要をつくすべし。

るが故に、後には同義を表すべき異辭を用ひて「扉」といひたるが如き之れなり。異辭同義の語は同語重複の弊を救ひて詞藻上に尠からざる效果あるべし。されど之れと共に亦た用語の精確を害すること往々にしてなくばあらず。夫の未熟の論文家等が說明のこゝろにて用ひし語句の、いたづらに同意反覆に止まりて、何の說明をもなさゞるが如き、此の例なり。「正とは義の謂なり邪とは不義の謂なり」などいはゞ「正」と「義」、「邪」と「不義」の間たゞ辭を異にするのみにして、義は相同じく、結局贅言たるに止まるの嫌あるを見るべし。是れ作文者が說かんとする所の意若くは說かざるべからざるの意を表出するに於いて遺憾あるもの、すなはち不精確のものにあらずや。而して不精確の辭が思想を十分に傳ふべき妥當のものならざるは言ふまでもなし。

（二）　同辭異義の語句

同辭異義の語も異辭同義の語と等しく文の精確を害することあり。「やがて」といふ語は、もと「卽」の字に相當したれど、後世の文には「間」の字の義にも用ひらる。されば「我が心はやがて神なり」といふも「我が心は卽ち神なり」との義なるか、又は「我が心の間(しばし)ののちは神なり」との義なるか確(たしか)ならざるべし。夫の唐詩界に有名なる「夜半鐘」と「夜半の鐘」との疑義の如きも同辭異義の弊に基ける者なり。張繼が楓橋夜泊の詩に「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船」といへる、其の結「夜半鐘聲到客船」といふときの上四字は果たして「夜半の鐘聲」卽ち夜半鐘と名のつきたる鐘の聲の義と訓すべきか。はた「夜半の鐘聲」すなはち夜半に撞きたる鐘の聲の義に讀み下すべきか（勿論後說が普通にしてまた實らしき解なれど）作者を九地の下より喚び起こすにあらざれば到底知るべからず。その他「國に亂臣なければ亡ぶ」といふときの亂臣の義が「亂逆の臣」又は「忠良の臣」の二義に解せられ「詞人離愁」といふときの離愁の意が「愁に離ふ」又は「離別の愁」等

文體的といひ識者社會の用語といふ標準により、あるひは純粹の國語として、あるひは雅馴の國語としての文章の價値を害すべき條件たり。

第二項　語句の精確

異辭同義――同辭異義――曖昧語

消極的語彩の第二の要件は精確といふことなり。純正は、文章をして國語の標準慣例に違ふがために通ぜざる所あるが如き憂なからしめんを主とし、精確は、之れをして本來の語義の晦澁曖昧に陷るが如き弊なからしめんを主とす。例へば「彼れを攻撃すべし」といふときは純正の文たるを失はず。されど人もし之れを難じて「彼れを攻撃すべし」とは「彼れを攻撃せんとす」との意かはた「彼れを攻撃するを要す」との意か曖昧なりといはゞ、我れは何の言を以てか答ふべき。即ち不精確の文たるを免れざるなり。我れの意前者にあらば寧ろ「すべし」の語を更めて「彼れを攻撃せんとす」と言ふべし。又「某々等相會して云々」といふときは「某と某との二人相會して云々」との義なるか「某々及び他の諸多の人相會して云々」との義なるか、精確ならず。之れ「等」の字が總括の意と餘分の意と二義を含めるの結果なり。文の精確とは此等の缺點を芟除せるものに外ならず。されば此の項また之れを裏面より見て、不精確が文の妥當を傷つくる所以を論ずべし。言語の不精確なるは通例下の三條件に因る。第一は異辭同義の語句なり、第二は同辭異義の語句なり、第三は漠然曖昧の語句なり。

（一）異辭同義の語句

異辭同義の語は世に多し。而して之れを善用するときは、文家唯一の裝飾として文を美ならしむるに足る。例へば「たゞ泊らんと柴の戸をさすが思へば猶はしごにさらば止まり給へとて扉を開き立ち出づる」といふときは、前に「柴の戸」といひ、

自他の誤謬より來たる不純正には「兄弟を怒る」「骨牌を遊ぶ」等、往々にして見る所なり。助語係結の誤謬も多し。「花あるに月さへ出でぬ」といふべきを「花あるに月だに出でぬ」といひ「もてなすべき粟飯だになし」といふべきを「もてなすべき粟飯さへなし」といふ類より、ゾル、コソレの破格はいふに及ばず。「謹んで臣良をして白璧一雙を奉じ再拜して大王の足下に獻ず」「家庭教育の特色已に以上の如し父母たる者願はくば此の特色を沒了することなきを心得たし」等は「謹んで臣良をして白璧一雙を奉じ再拜して大王の足下に獻ぜしむ」「父母たるもの願はくば此の特色を沒了することなきやう心得られよ」の誤なり。

斷續法の混雜もしばしば見る過失なり。「云々なるか」といふと「云々なりや」といふとを混じて「云々なるや」とするが如きは今は殆んど普通となれり。又は「云々なりといふ」とあるべきを「云々なるといふ」とし「行くを得しむ」とあるべきを「行くを得せしむ」とするたぐひも世間なべての訛語なり。假名遣にては、漢字音の混雜は言はずとするも、「笑ひて」の音便は「笑うて」ならざるべからざるを、「笑ふて」と誤り、「行いて」を「行ひて」と誤り、「をはり」を「おわり」と誤るが如き、皆其の例なり。

斯く數へ來たる時は際限なしといへども、此等しばらく今日の雅文を標準としていへる者なれば、語法の移動につれ、純駁の判斷もまた變ずべきは勿論なり。且つ此等の中には今日既に殆んど一般の語法となりて、不純正と見なし難きものもなきに非ず。要は當時の文章を支配する語法に依準すべきなり。

語法上の破格が純正を害ふの理は、これまた明白、慣例を破りて變則といふ念を人に與ふると共に、無學、卑賤等の背景を伴ふが故なり。

以上要するに他國語、方言、古語、濫造語、俚語、科語、訛語、誤用語等いづれも國民の活言語としての標準、及び其が

性マワプロプの用語に不正語多きより來たれる名稱なりといふ。

パーヂーン氏は不正語の由來を羅典語にありとし、隨つて古典的用語の文體の穩當を保つためには好ましからずとせり。又思へらく此等の語には概して長々しきが多し、之れ羅典の原語の多分に變化せる證にして、其の原意を曉まし人なし、誤用せしめ易きは此の故なり。縱ひ文家は之れを正當に用ひ得たりとせんも、斯かるむづかしき語にては、讀者が果たして正當に解し得るか知りがたしと。またこの意よりいふも語は成るべく短きを撰ぶべし、短き語は最好の語也、近時の好尙は一般に短音の語に向かへり、夫のジョンソン風の誇大な　文體のすたれしは既に久しき以前の事なること人の知る所なりと。

次に語法上の誤用は極めて多し。國文法中最も誤り易きものを擧ぐれば時、自他、助辭、係結、斷續、假名遣等ならん。わが國今日の語法は未だ確立せるものにあらざるが故に、之れに背けるもの必定破格なりとは言ひがたき事情あり。唯玆には、其の大概を擧ぐるのみ。

語法上の時卽ち過去、現在、未來の別を誤まれる文は極めて多し。漢文は元來文字上に時の變化の現れざる習なるに、國文之れに化せられて、過現未の分甚しく紊れたるを、近時幾分か此の邊に注意する者あるに至りたれど、猶ほ十分ならず。

日清事件は文明世界を混沌世界に推し戻せり。錙銖の利を爭ふたる世界は忽ちにして混沌茫漠の境に變す。政黨界に棲息する政治的動物たるもの豈に偶然として遂はざるものあらん哉。

此の文につきて見るも、「茫漠の境に變す」の句を現在法の詞藻として用ひたるにあらざる限りは、始めに「推し戻せり」といはゞ次に「錙銖の利を爭うたりし世界」と受け次に「混沌茫漠の境に變じぬ（又は變せり）」と續かざるべからず。此の破格あるがために不純正の文となりて拙更に拙を加へたるなり。

しむることあり。「有りがたし」といふ語は慣例上「感謝」の意に用ひられたれど、其は「斯かる仕合せの事は復たとは有りがたし」との意を略言したる者にて、單に「有りがたし」との一句のみに就きて見る時は何事にても「有ること難し」との義に過ぎず。されば人もし之れを「水の高き方に流るゝ事はありがたし」とやうに用ひんか、語義上には、むしろ誤謬なかるべし。されど通常「感謝」といふの義に用ひらるゝ例にしたがひて、何となく不折合の心地すべし。固より「有りがたし」の語を「感謝」といふ意に用ふるは談話の際を主とすれば、文章には入ること罕に、したがひて上文より讀み下すときは前掲の例の如きは「有るまじ」との義と解せられざるにあらねど、猶ほ暗に談話語の「有りがたし」すなはち「感謝」の意と連想して、一面他義に解せらるゝとともに、一面文章の不純正に陥れるが如き思あらしむ。又「無價の璧」といふときは「價格を絶したる璧」の義なれど、或は之れを文字通に解して「何の價も無き璧」とやうに使用することあらんか、是れはた舊用例をやぶりて、不穏當の弊に陥れるものなり。

或はまた、初めより語義を誤解し、若しくは他語を誤用せる例は、人のよくいふ「判然」と「慨然」と、「豫め」と「あらまし」、「枚擧」と「枚擧」等より、昔何某の學者の「抑」といふ語を發語と誤解せるため「そも〱の何某」と渾名せらるゝに至れりといふ話柄、乃至近時某の國學者が「汽車に乘り後ればやとて急ぎぬ」などいふ奇怪の文をものせりといふたぐひ、一々擧ぐべくもあらず。西洋にては、誤用語は大抵羅典語を本とする者に多しといひ、我が邦にては、漢語漢字使用の際に殊に此の弊多し。「則ち」と「卽ち」、「之れ」と「是れ」、「既に」と「業に」、「辨」と「辯」、「撰」と「選」等は最もしば〱人の誤まる所なれども、是等は半ば文字上の誤謬に屬して、深くは咎めがたき事情あるべし。

（參照）英語にて誤用語をマラプロポス(Malapropos)といふはシエリダンの喜劇『セ、ライヴルス』("The Rivals"—Sheridan)中の女

同じくバーザーン氏の書、科語を論ずるの條に、スペンサー氏が進化といふことを解して Evolution is a change from an indefinite, incoherent homogeneity to a definite, coherent heterogeneity, through continuous differentiations and integrations' といへる有名の定義をカークマン氏(Kirkman)が言ひかへたるものを擧げたり。曰はく 'Evolution in a change from a nohowish, untalkaboutable, all-alikeness, to a somehowish, and in-general-talkaboutable not-at-all-alikeness, by continuous somethingelseifications and sticktogetherations' と。在來の語を連結して一種の數語を作れるものとも見るべく、其の奇たる所に滑稽の趣を生ずるなり。

（七）訛語の混入

訛語とは一地方若しくは一階級の人々が誤謬の上より一語を他義に轉用して慣例となれる者、而も其の轉訛が未だ標準語として是認せられざるをいふ。隨つて其が文章中に混入し來たる時は、ほゞ俚語と同じく、文の純正を害す。「雲泥萬里」といへるが訛りて「うんてんばつてん」となり、「ふところ手」が訛りて「ふところぢう」となり、「茶釜」が「茶まが」となり、「短兵急に攻め寄せては困る」とあるべきが「短兵急では困る」となるの類は、すべて訛語といふべし。同じく轉訛せるものにても、既に國語の慣例となりて標準語の中に入れるものは此の限りにあらず。例へば、「迷惑」といふ語の「困却」といふ義に轉じ、「有りがたし」といふ語の「感謝」といふ義に轉じたるが如きこれなり。

（八）誤用語の混入

誤用語とは作文家が其の語句の意義又は用例を誤解して用ひし場合にして、其の不純正の感を惹くの理はいふまでもなし。之れに言語そのものゝ意義の誤用と語法上の誤用とあり。先づ言語の意義に關するものよりいはんに、或は必ずしも語句の意味を解し誤れりといふにあらざるも、從來の慣例にたがひて、別なる用例に循ひたるため、人をして不穩當の感を起こさ

の意に用ひたるが如き、若しくは上にいへる聖書中の、造語の、動詞より名詞に移れるが如き之れに外ならず。

さて斯く種々なる新語句は如何なる場合に於いて認可すべく如何なる場合に於いて濫造と見なすべきか。他なし、一は眞に新思想新事物ありて而して之れに適すべき語句絶えて無き場合、次は滑稽又は諷刺等の特別なる目的のため、故と新造語句を詞藻として用ふる場合にのみ、濫の譏を免るべし。英語のポエチカルといふ意を適當に表はす語なきより、新たに「詩的」といふ語を作りて之れに充て、メンタルといふ義を表はすに「心的」といふ語を作りて之れに充つる類は前者なり。何事にも的といふ字を附するの風あるを見て諷刺家がわざと「飲的」「食的」などいふ新語を使用することあらば、其は後者なり。此等は其の效のために新造語たるの缺點を補ひ得べし。

（參照）　新語の出で來たる事情に關しては、バーザーン氏の書に五件を數へたり。一に新事物新思想の新語を要する者あること、二に名家が適當なる新熟語を選定すること、三に特別なる目的例へば滑稽のために臨時之れを用ふること、四に偶然の事より戯に造りしものが廣く行はるゝに至ること、五に學者よりも寧ろ一般公衆の手によりて自然の必要上生じ來たること是れなりと。また同じ人の言に依るにホール氏(Hall)は新語の由來として下の五ヶ條を擧げたりと。即ち一、一般人の手に成るもの、此は自然に鼓吹せられたるものといふべし。次は二、學者の考案に出づるもの。次は、三、征服者の傳ふるもの。次は四、商業の途次他より輸入するもの。次は五、流行を追ひ又は必要に驅られて他より假用する者と。("Complete Rhetoric"—Bardeen)　漢字は西洋の音字と異なりて象形字なるが故に、之れを我が國に假用する時は、語と字と必ずしも并行せざることあり。語は新たならざるも、字のみ新たに造らるゝが如きは、此の例なり。「かみしも」といふにあてゝ「裃」の字を作り「たどる」といふ語に「辿」「さかき」といふ語に榊の字を充てたるなど、通常之れを俗字と呼ぶ。此等も漢字を使用する限りは一種の新語と見るを得べし。

古語が文の純正を害するの理は、これまた其の意義を晦澁にするの傾きあると、現時の標準に遠きとの故なり。

（六）濫造語の混入

濫造語すなはち新語句とは、昔より在り來たれる句を外にして新代の作文家が恣に語句文を變化し創始するの謂にして修辭上文章の純正を害すること大なり。西洋にて新たに語句を造るは大抵希臘語、羅典語を本とし、わが國にては多く漢語を本とす。例へば「哲學」「化學」「電信機」「催眠術」など皆近時の新造語なり。されど此等は今日既に使ひ馴れたれば人も怪まず、之れが爲に文の純正を毀ふの患なし。たゞ強ゐて新奇を求め「叱咤怒號」といふべきを合して「叱號」といひ「嶄新奇拔」といふべきを改めて「嶄奇」と熟するが如きあらば忽ち不純正のものとなるべし。また和語にて新たに造れる語句には、「和平を求むるものは稀なり」「沈淪に至る路」など聖書中に見ゆるもの多し。

新語句の生ずるに約そ四樣あり。一は全く新に造るものなり。上に擧げたる「化學」「催眠術」等の如し。又「死の手に迎へ取られぬ」などの句法も從來なかりし所なれば、新造といふを得べし、二は在來の語句を二個以上結合して、二意を一語に含ましめ又は語句を分割して二語句とするなり。「恐惶」と「謹惶」とを合して「恐謹」といふものあらば笑ふべきの頂上なるべし。若しくは「希望」ありと熟すべきを裂きて「希あり望あり」といふも、をこの沙汰なるべし。三は在來の語句が自然の必要によりて音數を緊縮し、新語の形となれるもの、及びこれに反して延びて新語となれるものなり。「云々にて御座あり申す」が約まりて「云々で御座ります」となり更に約まりて「云々です」となり「云々だ」となれる類は緊縮的新語といふべく、「詩歌」の音が延びて「しいか」となり「花散る」が延びて「花散らふ」となるたぐひは延長的新語といふべし。四は在り來たれる正當の語句に意味を增減し若しくは別義を附して新用例を作るものなり。支那の「理學」といへる語を借りて、別義なるフヰジツクス

曲『遊行柳』)

の如きは詞藻として科語を用ひたるの例なり。此等が文章上の累とならざるは、補ふ所あればなり。

(五) 古語の混入

古語の文章に入れるもの亦た概して不純正の感を起こす。古語といふにも、使用の稀れになれる者と、全く使用せられざる、所謂廢語との間には多少の差違あれど不純正の結果を來たすに於いては一たり。

年々にしぬびまつれば、故さとに在すが如く、常はしも、思ひてしものを、何しかも、もとな歸りて、逢ふ人に言とひぬれば、ちゝのみの父はゐまさず、はゝそはの母もゐまさず、然はあれど、わぎもなねの、頭には白髮生ひて、かなどより出づるを見れば、母とじはいましにけりと、立ち走り入りてし見れば、面には皺かき垂りて、よろぼへる吾をしも見て、いもなねは、父來ましぬと、訝しみ思ひたりけり、かたみに言をも問はず、しら玉の涙かきたり、向かひ居て昔へしぬぶ事ぞさね多き。(加茂眞淵)

の如きは、其の擬古の技倆と效能との外は、到底近世の文として價値あるを得ず、古語古句に滿ちて、殆んど普通の讀者には解せられざるべし。純粹なる學文としては取るに足らざるなり。たゞ眞淵の如き時勢境遇にありて、眞淵の如き人が作れるものといふ故をもて修辭以外の價値を有する事はあるべし。

其の他「何々といふものあり」といふべき故なくして「何々てふものあり」とし「云々のごとく」とすべきを「云々のごと」とするの類も、古語混入の弊と見るべし。此れら古語の詞藻として用ひらるゝことあるは、多く莊嚴を要する場合などにて、韓退之の墓碑銘等は、此の點に最も多くの特色を有せりと稱せらる。

に言語の性質を論ずるの條に述べたれば再び言はず。日常普通の談話中にすら、必要によりては文章語の混入せる例古くよりあり、「いらざる世話だ」「武士たるものがそれで濟むか」などいふ場合これなり。

（四）　科語の混入

科語すなはち特殊の學問技藝にのみ用ひらるゝ專門語を混入せるがため、文辭に不純正の弊を生ずることあり。專門の事を論述するものにありては固より已むを得ざるの詞藻法として時に之れを許すの外なけれど、一般よりいふときは是れまた普遍的といふべからざるなり。

抑も我等止觀明靜の窓の前に一心の如來藏を開き三千本覺の知に安住するこれ正しく本覺眞如の妙理なり（『七帖見聞』）

等の文に、不純正の嫌あるを見るべし。科語が不純正となるの理由は、主として平易に領會せらるゝを妨ぐるがためにして、カムペルは科語を以て殆んど國語たるの資格なきまでに偏狹なるものといへり。其の他「一定の日子を經たれば忌服も解けたり」といふべきを「則滿免除にて忌服も解けたり」といひ「腦を病みて」といひて事足るべきを「腦膜に炎を起こして」といふが如き、みな文章上不妥の感を生ず。たゞ科語といふ中にも其の用熟して、日常普通の語と別なきに至れる者、又は殊更に其の科語の背景が修飾として適當なる場合には、之れを詞藻として用ふること他と異ならず。哲學上の「相對」「絕對」、法律上の「權利」「義務」等は殆んど日常語に化せるの例なり。

此界一人念佛名、西方便有一蓮生、但使一生常不退、此の花かへつてこゝにむかひ、上品上生に至らん事ぞうれしき。釋迦すでに滅し彌勒いまだ生ぜず、彌陀の悲願を頼まずば、いかで佛果にいたるべき。南無や灌頂歸命頂禮本願いつはりましまさず、超世の悲願に身を任せて、他力の船にのりの道、すなはち彼岸に到らん事、一葉の船の力ならずや（謠

とが必ずしも雅と俗との別にあらざるは勿論の義にして、今日の所謂言文一致は、此の兩者間の障壁を除かんとするものに外ならず。事實に於いて概して今日の談話語が、卑俗といふ感を伴ふは、畢竟歴史の然らしむる所、主として文學上より來たる語趣背景が、文章語にのみ光澤を生じ、談話語には極めて此の補助を缺けるに由らずんばあらず。所謂雅俗折衷文榮え、言文一致説起こりてより、此の弊は漸く除去せられんとするの形勢に向ひたり。談話と文章と全く同一なるべしとはいふべからざること勿論なれど、其の相違は言語句法に於いてせずして、修辭上に於いてせざるべからず。

（參照） 會話そのまゝの語句を文章とするを英語にて Coloquialism といひて斥く。また英語を分かちて文壇的、會話的、方言的、時代的、詩歌的等とせる學者あり。我が今日の文章語と談話語とは文壇的と會話的との意味をも含み、時代的すなはち古語と今語との意味をも含み、雅語と俚語との意味をも含み、極めて複雜の關係を有するものたり。されど結局此等みな其の大部分は、正當の理由に基づかずして、或る歴史上の誤謬より生じたる區別なれば、到底除去せられんを要するものなり。而して文章語、談話語共に、一は文學的に、一は活世間的に、各々他の有せざる特點を有して進歩し來たれるの價値あれば、歸着するところは、兩者の長を合するにあるべしと雖も、其の方法は必ずしも一ならず。夫の言文一致と稱するものは、今日のまゝにてはなほ未だ多く談話語の域を脱せず。文學的に發達し來たりし文章語の價値を遺棄して顧みざるの傾きあり。言文一致は所詮談話語よりして文章語を招致するものならざるべからず。之れに對して、雅俗折衷文と稱するものは、文章語よりして談話語を招致せんとするものなり。今日にては、兩者ともに同一彼岸に達すべきもの、たゞ其の發足點を異にするのみ。

言文一致體の文に文章語を用ふるの程度は、結局作家により、また思想によりて一ならざるべく、また一ならざるも不可なく、之れによりて却りて修辭上の變化を生ずるの益あるべし。されば國語法として統一すべきものと並存すべきものとの標準の如きは、前

支那古代の文學にては、屈原等の楚辭を始めとし、楚の方言を詩中に交へたるものありて、夫の兮の字の如きは其の一例なりといふ。されど是等は後世に及びて文壇の標準語に入りたれば今日より之れを尤むべきにあらず。

（二）俚語の混入

俚語すなはち俚俗卑賤の際にのみ用ひられて、嘗て名家の文または上中流の識者社會に行はれしことなき語句は、これまた人をして不純正の感を起こさしむ。俚語といふに二種あり。一は始より俚語なるもの、二は當初文雅の語なりしも何時しか俚俗にのみ用ひられて遂に俚語となれるものとす。

されど清貧をたのしむ器にあらねば肱を枕の樂そのうちに居ることを嫌ひ花と月とに心を移せど孔佾（まるじるし）といふひやうきんものを連れざれば、今に其の足ることを知らず。故にかくありたらんにはと思ふ程を、春の日、秋の寐覺々々に書きちらしたる其の反古を八笑人とは名づけし也（八笑人）

の類は、固より戯文として却りて其の俚俗なる點が一の修飾とならざるにあらねど、之れを純正の文としては、「まるじるし」などいふ語が、其の純正を害するを見る。此等の俚語は初めより俚語の性ありしものなり。當初は雅語なりしものが、移りて俚語となれるにには「坊主」「夜郎」「色」などいふ語の、全く俚語のものと化し了せるたぐひあり。

俚語と俚語ならぬものとの分界もまた一定し難し。標準語の文壇的、すなはち名家の文に入れるもの、又は紳士的すなはち智識の水平以上にある上中流の社會に用ひらるゝことゝいふが如き條項を以て、僅かに之れを分かち得べきのみ。殊に我が國にては、文章語と談話語との懸隔甚しきため、文章語の文壇的標準語なりしものと、通例無雙の談話語との間さらに雅俗といふが如き差別を生じ、言文の相違は直ちに雅語と俚語との相違の如く思ひなさるゝに至れり。されど文章語と談話語

信州木曾の山家もの、でつかく冷ゆる寒國の、鼻につらゝの朝嵐

といへるは、「でつかく」といふ地方語を挿みて、一面に文の純正をば破れど、他面此の方言の背景によりて信州木曾の山奥地方を連想せしむるの用をなさしむるなり。また夫の『碁太平記白石噺』といふ淨瑠璃に

泣いては濟まぬ、サ何とぢやいのと問はれて妹はなほ涙、コレエたゞアは、五月田植の時、代官の志賀臺七といふ悪でくな侍に切られてお死にやり申したわいの

とあるは、「たゞア」といふ方言に「父」といふ意をあらはし「悪でく」「お死にやり申した」等みな同一筆法によりて、以て其の奥州といふ邊鄙の趣を讀者に會得せしめんとせし詞藻なり。されば是等は、詞藻と見るときは積極的の價値を生ずれど、單に斯くの如き文辭として見るときは、忽ち蕪雜不純正のものとなるべし。其の他所謂長崎の「ばつてん」京阪の「おますさかい」、關東在の「だんべい」など、すべて純正の文に入るべからざるものたるや論なし。

（參照）我が邦にては今日なほ標準語そのものすら不純正なるを免れざるの狀態なれば、地方語と標準語との混入といふが如きは、其の限界一層漠然たるを免れず。西洋の學者は方言といふの範圍を解して、文學的標準語を解し得るものには領解せられて、しかも標準語と異なるものなりとせり。而して方言の發生する原因を數へては第一地理のため、第二言語機官のため、第三民性風俗のため、第四移住者旅行者のため、第五其の前後の住民のため、第六征服者侵入者のため等とせり。また斯く方言の起こるには種々の原因あるがため、之れを以て必ずしも其の人種、其の地方を表するものとはなし難き場合あり。「言葉は國の手形なり」との諺が應用せらるるの範圍には制限ありと知るべし。雲州には奧州に似たる發音言語あれども、是は往昔藩主の移封等より起こりし變態なるべければ、之れを以て直ちに雲州人を奧州人とは判定すべからざるの類なり。

の橋は鐵だ」といふ。乃ち之れを直譯して「The bridge is iron」といふの類これなり。また邦人が漢文を作るにあたりても、同一の例はしばしばあらはる。殊に上古の漢文には、この事多し。『古事記』に「此三柱神者、並獨神成坐而隱身也」などあるは、殆んど漢文といふべからざるものなり。

（二）方言の混入

方言すなはち地方語の混入のために文の純正を損せる場合あり。但し文章語と談話語との間に甚しき懸隔ありし從來の我が文章には、此の種の例多からず。方言といへば概して談話語に關するものなれば、これが文章に及ぼすの影響は少なかりしなり。いはゆる言文一致に於いて、はじめて此の弊あらはれたり。其の他談話演說にはしばしば見るところの例にして、關西の人が東京語を用ふるにあたり、「かつたものは返さなくてはならない」「あんまりこはかつたら一休みしたのだ」「木履を買つて來て與れ」「堂島をはいて行かなくては」などいふは、皆これなり。蓋し「借つた」は「借りた」の方言、「こはい」は「疲れた」の方言、「木履」は「足駄」の方言、「堂島」は「駒下駄」の方言なり。此等の方言に對する標準語とは、こゝにも大體當時の文壇または勢力感化の中心地に於ける上中流社會の言語を主とするの外なければ、時代によりて必ずしも一定し難く、且つ種々の事情のため地方語が進みて全國の標準語となることもあれば、標準語が却りて地方語に墮することもあるべけれど、要するに當時の社會に於ける智識の水平線に最も廣く是認せらるゝ慣例と見ば大差なからん。其の間、人によりて標準に多少の差あるは免れざるの數なり。

また此の場合にも、知りてことさらにこれを用ひ、以て詞藻の用をなさしめんとする例は極めて多し。近松が世話淨瑠璃「膝學駄」に

とあるを凡て「あづかる」と譯せんとして「さばき(judgement)にあづかる」「集議(council)にあづかる」「地獄の火(hell fire)にあづかる」といふが如き直譯體のものを生ずるに至りしに外ならず。「さばきにあづからん(今日ならば、裁判を受けん裁判を受くるの災ひあらん、などいふべし)」「評議を受けん」「地獄の火に焼かれん」など言ひかへてこそ、始めて純正の國文格に合ふものとはいふべけれ。支那にて之れを「必當受判」「就當送到公堂裏」「就當下在地獄的火裏」など譯せるは、能く其の意を得たるものといふべし。また「兄弟を怒る」は英國の 'is angry with his brother' を譯せるものにして、支那の「向兄弟動怒」といへると同じく「兄弟に對して怒る」などいふを穩當とすべきなり。

(參照) クロッケンボス氏の書によるに、當時英米にては佛語を英語中に挿入するの風(Gallicism)盛んにして、中には已むを得ざるものもあれど、多くは衒耀的、したがつて不純正の弊に陥れるものなりとて、其の主なる例語十七八を擧げたり。Fashionable world といふべきを殊更に Beau monde といひ、Stroke of state policy といふべきを Coup d' etat といひ、People of fashion といふべきを Haut ton といひ、No matter といふべきを N'importe といふの類その一斑なり。されど此等の中にも恐らく今日にありては既に不純粋の域を脱したるものあらん。

我が邦にては、維新以來、いはゆる書生語の社會上下に行きわたりてより、俗談平語の上にまで漢語の混入が漸く人耳に慣るゝに至りたれど、然も尚は學問なき人が殊更らに漢語を衒はんとして用ふる場合、または婦人があまりに多くこれを用ふる場合などには、往々異様の感を起こすことあり。此等みな不純正といふ現象を呈せるの證なり。

同じく英語にて外國の句法の混入せる例には、'He knows how to sing' といふべきを 'He knows to sing' といひ 'I repent' と云ふべきを 'It repents me' といふの類を擧げたり。此は日本の學生にして英語に未熟なるものが英文を作るにあたり往々にして日本の句法そのまゝを英譯するの場合にも見らるゝ弊にして、「あの橋は鐵でこしらへたものだ」といふべきを、日本特有の古法にては「あ

得ず。たゞ進歩せる譯讀よりいふ時は、甚しき漢文直譯體などいふものは望ましき者にあらず。又洋文の句法を國文に亂用するの弊は今日の文章界に最も大なり。「死に就けり」といふべきを「死によりて迎へられたり」といひ「艦に載りて還らんと本國を立ち出でぬ」といふべきを「艦に載せられて還るべく本國を見棄てぬ」などいふは文品如何にも雜駁且つ幼穉にして見にくし。

是等みな吾人が之れを修辭上の弊と感ずるの理は、上に言へる所と同一なり。隨つて勢力ある人が之れを用ひしため、又は其の他の事情によりて遂に世に行はれ、人耳に熟するに至れば、其の不純正と見られしものもおのづから移りて純正と見らるゝに至るべし。此の際に於ける標準は時と共に遷轉すべきものたること勿論なり。上の例に於いても「死によりて迎へられたり」などいふ句法は、本來日本の句法中非情物、殊に無形なる「死」などいふものを人化してはたらかしむることの少なきと、「迎へらる」などいふ行動的描寫を用ふること少なきとによりて、當初こそ不調和にも聞こえたれど、今日にては早くすでに人耳に熟せんとするに至れり。歐文の句法を混じて往々不純正の病にかゝれるは、夫の基督教の聖書の文など其の一例なり。

古の人に告げて殺すこと勿れ、殺す者は審判に干らんといへることあるは、爾曹が聞きし所なり。されど我なんぢらに告げん。凡て故なくして其の兄弟を怒る者は審判に干らん。又その兄弟を愚者よといふものは集議に干らん。又狂妄よといふものは地獄の火に干るべし。（新約全書馬太傳）

などいへる、「さばきにあづからん」「集議にあづからん」等はなほ可なりとするも、「兄弟を怒る」「地獄の火にあづかる」等に至りては、明かに日本文の慣例にたがへる句法なるが爲め、雜駁の譏を生ぜしなり。是れ一は英語にて 'shall be in danger of

ふ感を刺戟せんとせるものなり。されど若し此等の事情を離れて、眞面目に此くの如き文辭を用ふるものありとせば、是れ文章中に國語的慣例の文脈と調和せざる外國語を挿入せる不純正の弊に陷れるものなり。

外國語といへども熟して標準語の中に入れるものなるときは、不妥の念消えて、穩當なる平叙文と見らるゝに至る。數學書生が零といふべき「ゼロ」といひ加減といふべきを「プラス、マイナス」といふが如き、又世間にて洋燈を「ランプ」といひ煙草を「タバコ」といふが如きは殆んど熟して國語の慣例內に入れるがため不純粹といふべからざることあり。「云々となり得るの素あり」といふべきを「云々のポッシビリチーあり」といふは繁を避けて簡に就けるの效によりて不純正の嫌を掩へるものなり。哲學上儀範、範疇、儀表などいはずしてカテゴリーといふの、其の社會には解し易きが如き、また適當なる譯語なき場に於ける同一の例たり。

其の他「極めて妙なり」といふべきを「極めて妙了」といひ「人間は神の子なり」といふべきを「人間はゴッドのサン」なりといふが如きは弊なり。たゞ我が國語と漢語とは歷史上特別の關係を有するが故に、一概に漢語混入を以て國文の純正を害する者とは言ひがたし。巧に漢語を國文格中に挿入して調和せしむるを得ば寧ろ之れを用ひて國文の缺點を補ふ可きなり。漢語と國文との關係は例へば英國文と羅典語佛語等との關係などゝ異なる所あるや勿論たり。

次には外國の句法文格によりて國文を綴りしが爲に不純正の弊に陷れるもの。但しこれまた現時のわが文壇にては全く批難し得ざる事情なきに非ず。蓋しわが國目下の文章は、正に衆美を集めて改善の途に上るべき潮境にある者なれば外國の文格も調和し得ん限りは之れを取り入るゝを妨げず。即ち慣例の未だ確定せざる狀態なり。殊に外國の句法といふうちにも、漢文格と國文とは別樣の關係あること猶ほ漢語の場合に於けるが如くなれば、今日の漢文體の如きは、必ずしも拒斥するを

害する所以なり。之れがために思想の表出の阻礙せらるゝを恐るゝなり。下に其の主なる條項を數へん。

（參照）カムベルの意にいはく、所謂純粹には三事を含む。故に三の殊なる方法によりて之れを害することあるべし。第一、用語の英國語ならぬ事あり。此の缺點を語法家は呼びて雜駁(Barbarism)といふ。第二、文章の組織が英國句法ならぬことあり。之れを破格(Solecism)と名づく。第三、語句を從來の精確なる意義に用ひざることあり。此は不妥(Impropriety)と稱はるゝと。又曰はく雜駁とは詞論を害せるの謂ひなり。破格とは文章論に背けるの謂なり。不妥とは辭義論を戻れるの謂なり云々と。而して雜駁の下には廢語を用ふる者、新語を用ふる者、新語例を作るものゝ三點を擧げ不妥の下には單語の不妥、章句の不妥の二點を擧げたり。又純粹以外に國語と用例との關係を論じ、國語の國語として一定の地位を有つは畢竟用例の結果に外ならずとせり。而して用例といふにも制限なかるべからずとて好用例、國民的用例、活用例の三を數へたり。("Philosophy of Rhetoric"—Campbell)

（一）他國語の混入

他國語の混入のために不純正となるの例は極めて多し。かの「源氏物語」中の名高き一節に、去る婦人の言として聲もはやりかにて言ふやう、月ごろ風病にて重きにたへかねて極熱の草藥をぶくして最と臭きによりてなん、得對面たまはらぬ。目のあたりならずともさるべからん雜事等は承はらんと、いと哀にうべ／＼しく言ひ侍り。などいへるたぐひは、日本語格の中に漢語を挿入せるより起こりし文章上の缺點なり。勿論作者は之れを滑稽の意にて描けるなれば、其の缺點あるところが文の妙なる所以なれども、さる場合と玆に論ずるところとは觀察點を異にす。「源氏物語」は之れを詞藻として用ひたるものなれば、夫の語趣に基づける詞彩法として、是等の漢語の背景たる、學者、莊重などいふ情趣を利用し、之れを前後の女性的凡俗的なる語格情態と對照せしめて、學者ぶる女、莊重なる女性、不釣合、不相當などい

るなり。之れを言語の表情といふ。言語みづからが有する種々の表情を利用するの法なり。而して之れに語趣すなはち言語の用例上より來たる趣致に基づくものと、音調すなはち言語の聲音に伴ふの情に基づくものとあること、既に言へるが如し。

第二節　消極的語彩

第一項　語句の純正

國語の標準——他國語——方言——俚語——科語——古語——濫造語——訛語——誤用語

こゝに純正といへる中には、從來の修辭書が文體の要素として說ける純粹、穩當、二條件の大半を包含す。蓋しこれら文體の要素といふ中には、啻に明白に思想をあらはすのみならず、之れをして醜といふ反感を起こさゞらしむるの用意をも包括す。されど所謂消極的語彩中には、醜といふ價値を含まず。醜は之れを零以下の積極的現象と見て積極的詞藻の下に論ぜんとす。消極的語彩はたゞ平叙文即ち零位についていふものなり。而して其の性質消極的なるが故に、文章に就いて直接に純粹そのものを指摘することは難し、他の積極條件のために蔽ひ飾らるゝを其の本來とすればなり。されば吾人はたゞ之れが反對たる不純正の場合にのみ、文章上の瑕疵として之れを識るを得。隨つて作文家の此の場合に於ける態度もまたひとへに之れを芟除せんとするの消極手段にあるべし。

さて語句の不純正とは、標準語に違ふの謂なり。標準といふにも一般の國語としての標準、文雅なる國語としての標準等の別ありて、其の何れに違ふも不純正たるを免れず。蓋し一般の國語たる標準に違ふものは、場合により同國內にありてすら通ぜざることあらんを憂ふ。文雅なる國語としての標準に違ふものは、例へば後代の人又は外國人などの文章語のみを學べるものありとするが如き場合に、之れに通ぜざるものとならんを憂ふ。これ不純正なる語句の文章たるべき根本の資格を

第二章　詞藻論

第一節　語彩

消極的語彩――語句の純正――語句の精確――積極的語彩――語趣――音調

語彩とは言語上の彩色といふ義にして外形的詞藻に屬す。修辭法に想念自からの發展に基づけるものと、言語の適用に基づけるものとあるの理は既にしば／＼論じたり。こゝに外形的といへるは、其の言語の適用法より生ずる修辭現象を指すものにして、之れに消極的すなはち修辭の最低標準として準備上必要なる現象と、積極的すなはち修辭の最高標準に向かへる經過として存する現象との二段あることも、前に述べたり。即ち消極的語彩とは言語の妥當ならんことを期するの修辭法にして、言語の妥當とは、最もよく其の思想に適應すべき言語を選擇するの謂なり。此の場合にありては、言語は思想の表出を阻礙せざると共に、之れを補足することも無し。たゞ忠實に無雜に其の思想のまゝを傳ふるを得れば足る。此に於いてか其の工風は常に消極的となり、作家は如何にして如實に之れを表出すべきかといふよりも、如何なる點が如實に表出を妨ぐるかといふに點注意するの態度に立つに至る。文中或は不通の語句、曖昧の語句のために其の意を妨げらるゝが如き恐れはなきか。是等を一々に檢討し除去するは言語の妥當を期する上の最要條件たり。而して消極的語彩を分かちて語句の純正語句の精確の二項より見るを得べし。

積極的語彩に至れば、作家の態度一變して、單に其の思想を完全に表出すといふより以上、如何にせば其の思想が最もよく讀者の情を刺戟すべきかといふの工風をなす。此の目的のためには、成し得ん限り言語が思想の變更をも要求するの權あ

り。稍々内容に渉れるものとしては、ホエートリーが明晰有力、文雅の三件を擧げて晴に人心の知情意の三面にあてたるを見る。而して明かに此の方面より論を進めたるものをバスコム氏とす。其の意おもへらく、文の表する所は何ぞといふの問題に答ふるものは明晰なり。文の之れに妥當せりや否やといふに答ふるものは文雅なり。文の人を動かすに足るや否やといふに答ふるものは有力なり。之れを人心の作用に比するに、明晰は知に相當し、文雅は情に相當し、有力は意に相當すと。("Philosophy of Rhetoric"—Bascom) 文體が必ず明晰を要するは、其の思想が知を主とする者なる時に限れること前に論ぜしが如し。また詞藻の消極條件としては必ず明晰を要すといふを得るの理も、既に言へり。此の二つの場合以外には、明晰を文體の必須條件と見るべき點なし。文雅とは種々の意義を有する語なれど美といふと同義なりとせば、げに最上の文體は此の要素を有せざるべからず。されども美といふ中には極めて複雜なる内容を有し、結局我が情を刺戟するものは凡て美なりといふを得べく、次の有力といふ條項と相合して、文章唯一の目的たるにも歸すべし。文雅と有力との關係につきてはホエートリーの説に「文雅すなはち美につきては多言するの要なし。蓋し此にいふ如き文體の最も妥當、最も顯著なる特所は上に論ぜし勢力なるが故に、又勢力の下に擧げたる諸多の規則は文雅にも應用するを得べきが故に、此の以上必ずしも文雅に就きては多説するに及ばざればなり。語の選擇、語の數、語の排列につきての用意は概して勢力と美との兩方に通ずべし。さは言へ此の二要素全く區別なしとはいふべからず。例へば隱喩が其の場合に恰好して妙なるために、全文章の勢力増大することあるに常たり、之れより生ずる新想像の、或は美を有せず或は不快のものなることもあるべければ也。斯かる場合には則ち勢力は文雅と逆行す。若しくは少なくとも文雅を生起することなし」といひて、全く兩者を別たんとしたれど、此はなほ幾多の論證を要す。假りに此の兩者別なりとするも、是等は本來文體に專屬せしむべきものにあらずして、一切の修辭的現象が等しく歸向するところの目標ならざるべからず。修辭論そのものゝ結着が直ちに是れならざるべからず。特に文體の要素といふ名の下に條擧すべきものにはあらざるなり。

りて、他人の文を師範とするの類に、たゞ自家が獨立して固有の特色を發揮するに至るまでの方便にして始めて可なり。また他人の文を添削修正するものも、其の文特有の文體を損殺せざる限りに於いてするに至りて、眞に文章添削の意を得たるものといふべし。徒らに自己の文體を以て他人の文體を抹殺するが如きは、これ修正に非ずして改作なり、文才を啓發するの道ならんや。

斯く一面よりいふときは、文體は全然個性的のものなれども、他面より見るときはこのうちまた類あること、恰も人の性質に概般の分類あるが如し。修辭論は此の類性に發見するをもて足れりとせん。且つ既に或る思想を定め言語を定限するときは、之れと同時に其の思想言語が作家の個性を離れて有する性質も何れにか類をなして現じ來たらざるを得す。こゝに於いてか、文體に種々の分類を生ずること前に說けるが如し。

舊來の修辭書には文體の種類の外、文體の要素といふことを說けり。されど其の意極めて不精確にして、文體の要素といふよりも、寧ろ詞藻中の要件と見るべきもの多し。由來文體の要素と稱せらるゝものは、其の項目すら不定にして、現代諸家の書に見るも、米のクワッケンボス氏は純粹(Purity)穩當(Propriety)精確(Precision)明晰(Clearness)有力(Strength)調諧(Harmony)統一(Unity)の七を舉げ、同じくバーナーン氏は右のうち調諧、統一に代ふるに圓滿(Perfection)といふ個條を以てし、ボイド氏の書は此等の中明晰を最も重き要素と見做し、他に文雅(Elegance)といふ一條を設けて之れと對せしめ、又明晰を語の選擇、語の排列との二面に分かちて、語の選擇に純粹、穩當、精確の三件ありとし、語の排列には長句短句、錯綜法ありとせり。其の他明白、純一、有力、調諧、圓滿、適用等は皆文體の要素と見るべき者にして之れ等を具備するときは文雅なるを得べしといへるなど、要するに在來の說を撰擇補綴したるものたるに過ぎず。思ふに是等の條件は、みな上乘なる文章中に見出だし得べき現象たるに相違なきも、而も内容を離れて文章の統一點たる文體の上にのみ言ひ得るものにはあらず、若し必ず文體は明晰なるを要すといはゞ、感情の文にして意義の明かならざるが如きは、排斥すべきものとならん。されど事實は然らざること多し。畢竟此の如きは文體の性質を思想の性質に關せしめて論究せざるの弊な

科學書に詩歌の如き詞藻を用ひ、日本文に外國語の語法を交ふるが如きは、文體上の弊たり。卽ち客觀的文體は其の標準を旣定の思想乃至言語に求むるがゆゑに、作家の自由を以て文體のみを變更するを得ざるもの、所謂必然明確のものたるを知るべし。夫の乾燥體といひ、富麗體といひ、剛健體といひ優柔體といふが如きは、皆主觀的文體なり、議論體といひ叙事體といひ雅文體といひ俗文體といふが如きは皆客觀的文體なり。

之れを要するに文體とは修辭的現象の歸趨なり。自々に目的を有する衆多の詞藻が、さらに他の究竟目的によりて統一調理せらるゝの謂なり。此に於いてか修辭的現象の全景は左圖の如くなるを見る。

詞藻 { 外形上——語彩 ／ 內容上——想彩 } 文體 { 主觀的——作家の風格 ／ 客觀的——{ 思想の性質 ／ 言語の特徴 } }

卽ち本編修辭的の組織は、詞藻論と文體論との二部に分かれ、さらに詞藻論は語彩論、想彩論となり文體論は主觀的、客觀的となるべし。

（參照） 文體の本意は最も作家の風格をあらはすにあり。此の意味よりいふ時は、文體は全く差別的個性的のものにして、百人の作家には百樣の文體あるべく、事實に於いても、甲乙、人によりて文體を異にするは、猶ほ其の面の如し。文體の價値は玆に至りて最も重し。文體の全く獨立すべきものたるは、其の人の性格の全く獨立特殊なるを要すると同理たり。ブレイアが「眞に天才あるものは必ず一種の文體を創して他と移ることなかるべし。天才なきものは之れに反して一家の作文たる特色異彩をたもつを得ず。吾人は敢て斷言するを得べし、曰はく天才の刺衝に由らずして單に模擬剽竊を事とするは賤むべき小作家なりと。」（"Lectures on Rhetoric"—Blair）といへるもの當たれり。夫の他人の文體を模するが如きは、未だ文の至れるものにあらざるや勿論。年少者が文を學ぶにあた

喩法はたゞ直喩法が能くする限りの效果を致さんとつとむべく、擬人法はたゞ擬人法が能くする限りの效果を致さんとつとむべし。換言すれば是等はみな部分的なり、割據的なり、各自獨立の權能を有して、隨意の方面に向かひ直接に感を動かさんと期す。されども實際にありては、此の以上さらに一の重要なる修辭的現象ありて之を統一す。所謂文體是れなり。文體とは、畢竟或る標準によりて雜多の修辭的現象を統一したる狀態に外ならず。

或る標準といふ。文體が依りて他の修辭的現象を統括するの規範は何なりや。個々の修辭的現象には、一様に情を刺戟すといふ目的なきにあらねど、此はたゞ概念上のことにして、實際は情の內容の異なるに從ひ、種々別々なるを免れず、隨つてこれによりて雜多の修辭的現象を統一するをば得ざるなり。此に於いてか文體は各個の修辭的現象が志すところ以外、別なるものによりて之れを統率せざるべからず。吾人の見るところを以てすれば、之れに客觀的と主觀的との兩面あり。主觀的なるものは卽ち作文者其の人の風格にして、客觀的なるものは修辭的技巧の材料たる思想と言語となり。換言すれば、作家の風格が修辭現象の上にあらはれて之れを統一したるものを主觀的文體といひ、思想の主題目的または言語の特徵が修辭現象の上にあらはれて之れを統一したるものを客觀的文體といふ。隨つて主觀的文體は自由なり、不定なり。客觀的文體は明確なり。例へば近松の文體は富麗にして西鶴の文體は洒脫なりといふ。是等は作家の風格に屬するものにして、其の富麗といひ洒脫といふことは必ずしも之れを必せざるべからずといふにあらず。作家みづから之れを變じ得と思はゞ自由に之れを破りて可なるもの、且つその富麗といひ洒脫といふが如きにも、幾様の階段ありて、不定なり。主觀的文體とは之れに外ならず。また科學上の思想を表すべき文體はすべて道理を貴びて情趣の多きを嫌ふといひ、日本の文體は日本語の語法によりて定まるといふが如きは、思想若しくは言語の性質特徵によりて一定動かすべからざるものたり。特別の場合を除きては、

く斯くの如き目を無用と見る。ホエートリーは、直喩法、隱喩法等殆んど凡ての詞藻を轉義と見做し、米のヘーヴン氏は「轉義とは一語の其が本義ならぬ譬喩の意味に用ひらるゝの謂なり」とし、之れを分かちて提喩法換喩法の二とせり。且つ謂へらく「轉義は採擷者のすべてが是非共闕くを得ざる材料の一なり。若し語義にして轉用せらるゝことなかりせば、到底人間の思想の萬分一をも言表するを得ざりしならん。若し一思想必ず一語を有したりとせば發達したる人の心内なるあらゆる思想を言表すべき材料は到底人間の記憶に納まるを得ざりしならん。一語の便に應じて續々他義を荷ひ得るは、猶ほ貨幣の極印を受け得るが如くならざるべからず。（中略）轉義の利は大なり（一）轉義は少許の語によりて多くの思想を表出するを得しむ。本來の字義と二三以上の轉義と、最良語は數義を兼ねざる可からず。在來の語に一の新轉義を附するはやがて一の新語を増すに同じ。且つ轉義にして本義と相聯なるときは爲に記憶を容易ならしめ想像を悦ばしむるを得ん。一思想毎に一新語を供せんには望むべからざる事なり。（二）轉義によりて詞に新なる力と美とを添加し得べし。轉義が表出せる感情は本義のよりも幾層が強く且つ美なりとす」と。（"Rhetoric"—Haven）ベイン氏は「總べて古代の修辭家は詞藻と轉義との間に區別をすれども、頗る精確なるものといひ難し。概して轉義とは隱喩法、換喩法、提喩法などの場合に於ける如く、一語を他義に用ふるの謂にして、詞藻とは語句の關係上又は全文章の應用上に於ける變化、たとへば對偶法、詠嘆法、頓呼法等の如きをもいふ也。其の區別の牽強にして、修辭學上些の必要なきを見るべし。（"English Composition and Rhetoric"—Bain）といへり。蓋し轉義とは語の意義が他義に轉じ用ひらるとの意にして、多數の詞藻の成立する狀態をいへるに過ぎざれば、ことさらに之れを詞藻の一種とするの要なし。むしろ詞藻の說明と見るべきものたり。

第三節　修辭的現象の統一

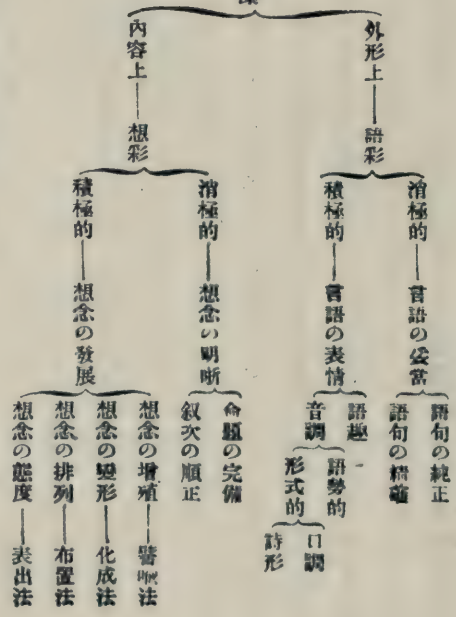
詞藻は部分的也——其の統一と文體——統一の標準——主觀的文體と客觀的文體——修辭論の組織——文體に關する諸說

上來列擧せる修辭的現象即ちいふ所の詞藻は皆各個特殊の領分を有して、別々に其の宰るところに向ふべきものなり。直

調の感。此は人心の靜より動に、寒より熱に、明より暗に、常に變化を追ふに基づける者にて、變化の度益々大に且つ唐突なるときは、其の效力益々強し。對照法と呼ばるゝ詞藻は此の事實に根原するなり。(二)統同力すなはち一致の感。此は吾人の相類似せる事物に對するとき類似せる心ざまとなるに由れり。例へば小兒の兩親に似たるを見る場合の如きこれなり。直喩法、隱喩法、諷喩法など名づけらるゝ詞藻はこの類似といへることより生ぜしものに外ならず。(三)保存力すなはち人心の重要なる一能力なり。通常これを記憶と呼ぶ。この能力の著しき效用は、例へば日出と日光との如く相伴ひて起こりし心象を互に連結せしめ、他日其の一の想起するときは、忽ち他を之れに隨はしむるにあり。日出をおもふときは、吾人は必ず直ちに日光及び他の曾て之れと共に起こりし事情を聯想せざるを得ざるなり。要するに一旦隣接したりし事柄の、心の上にて連合するは一大事實にして、其の結果吾人は毎々一物を表するに其の附屬物を以てするに至る。高御座(たかみくら)といへば帝王を意味し、金といへば財貨を意味するが如きこれなりと。("English Composition and Rhetoric"—Bain)

辨異の結果は對照となり、統同の結果は類似となり、保有の結果は隣接となり以て聯念律の三面に應ずるなり。されども吾人が一切の心生活は果して三種の聯念律のみにて說明しつくるべきか、疑問なり。

またホエートリーは先づ文體を論じ、文體中の一件として文の力を擧げたる中に詞藻を說き其の成立條件を數へて以爲へらく、文體をして最も有力ならしめ、活氣あらしめ、理の文は論理よく讀者の理心に徹底するを得、情の文は讀者の想像感情を興奮せしむるに足るを得んには、下の三件に注意せざるべからず。曰はく、詞の選擇、曰はく詞の數、曰はく詞の排列これなりと。("Elements of Rhetoric"—Whately) ホエートリーの詞藻の條件は主として、吾人が外形的修辭といへるものに關す。修辭の重要なる過程は此の外にもあるを得べし。

詞藻の中また轉義(Trope)といふものあり。修辭學者によりて、或は之れを詞藻と同義なりと見、或は之れを別なりと見、或は全

吾人が修辭的現象の研究は此の圖の順序によるべし、

(參照) 茲に語彩と想形とを分かてるは、從來の修辭書に無き所なれど、吾人は之れを以て一層科學的なるものと信ず。舊來多くは詞藻(Figures of speach) といふ名の下に此等の大部分を總括し、或は之を效果の上より分類して知力的(Intellectual)情緒的(Emotional)意志的(Volitional) 等とし、或は之れを成立の上より見て、隣接(Contiguity)に基づくもの、類似(Simirality)に基づくもの、對照(Contrast)に基づくものとせり。後者の分類法は心理的にして最も參考とすべきものなり。精しく之れを說けるは英のベトン氏にして、其の意に曰く。

主なる詞藻の分類は人間の理解力の三大部分に基かしむるを可とす。理解力の部分下の如し。(一)辨異力すなはち差別、對照、相

積極的修辭過程は、之れを內容的なるものよりいへば、想念の理想的發展にして、其の方式に想念の增殖、想念の變形、想念の排列、想念の態度等あり。想念の增殖とは、「雪白し」といふべきを、「雪鵞毛の如し」といひて、「白し」といふ想念の上に「鵞毛の如く」といふ想念を重ぬるの類なり。之れを譬喩法といふ。想念の變形とは、「雲晴し」といふべきを、「雲悠々」といひて、雲を有情物に化するの類なり。之れを化成法といふ。想念の排列とは、「仁鮮し」といふべきを「鮮し仁」といひて、順序を轉倒するの類なり。之を布置法といふ。想念の態度とは、「然らず」といふべきを「然らんや」といふの類なり。之れを表出法といふ

次に外形的なる積極の修辭過程は、言語の表情を利用するにありて、之れに慣用上の情趣を假るもの卽ち語趣的背景的なるものと、聲音の表情を假るもの卽ち音聲的音調的なるものとあり、音調的なるものには更に語聲的と形式的とありて形式的なるものにはまた口調と詩形とあり。

以上要するに一切の修辭的過程は、之れを消極的と積極的とに分かつを得べし。今表を以て示さんに

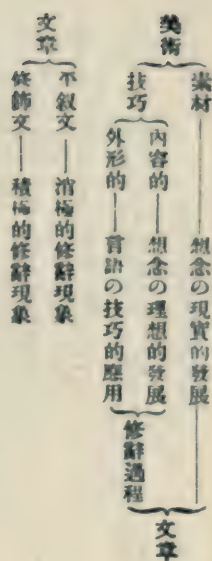
修辭過程
- 消極的
  - 外形上――言語の妥當
  - 內容上――想念の明晰
- 積極的
  - 外形上――言語の表情
  - 內容上――想念の發展

更に之れを別の方面より分類すれば、消極積極ともに外形的なるものを總稱して、彩語といふべく、語句そのものゝ選擇整理に基づきて生ずる修辭的現象すなはち語の彩色たり。之に對して內容的なるは、想彩と稱すべし。想念の選擇整理に基づきて生ずる修辭的現象すなはち想の彩色たり。而して之れを一括して詞藻といふべし。

用語の精確用語の純正といふが如き條件あるを得べし。これらの過程備はりて、始めて思想はありのまゝに表出せらるゝを得ん之れを修辭の消極的條件といふ。随つて消極的條件の缺けたる文章あらば、其は意義晦澁の者となりて、嘗に人を感動せしめざるのみならず、要領をすら理解せしめ得ざるべし。約言すれば、消極的條件の缺けたる者は未だ文章を成さゞるものなり。一切の文章は先づ消極的修辭過程の門を潜りて、而して後之れに積極的修辭過程を加ふべし。斯くの如くして始めて美なる文章を得べし。

（參照）　消極的修辭の目的は趣意を完全に理解せしむるにあり、積極的修辭の目的は之れを圓具にして人を感動せしむるにあり。されば一は知的といふべく一は情的といふべし。即ち凡ての文章は先づ知的過程を通じて、後ち情的過程に入るべきものたり。されど斯くの如くいふ時は、二個の反對論を生ずべし。一は實際吾人が文を作るの順序、必ずしも先づ知的次程を履みて、而してのち情的過程に入るといふが如きものに非ずといふ批難なり、他は文の至れる者に却りて知的明晰を缺けるが多しといふ批難なり。前者に對しては、吾人の心の作用は常に學理の説く如く明瞭に區分せられて纏まるゝものならずと答ふるを以て足れりとす。吾人が文を作る時の心の狀態は、一方に、如何にせば我が想ふ所を蔽はるゝなく明晰に言ひ出づるを得べきかと苦心すると共に、他方には、如何にして人を動かすやう之れを具現すべきかと苦心するを常とす。消極積極の兩過程は同時に履行せらる。之れを先後に配したるは理論上の事たり。また第二の批難に對しては、知の門を潜らざる以前の晦澁と、知の門を過ぎて情の堂奥に入れる以後の晦澁とを別かつをもて足れりとせん。情の至れる文が往々にして理知の明晰を蔽ふことあるは、修辭の力によりて理知を要せざるの域に達せるが爲めなり。初めより明晰無きに非ずして、有るところの明晰を情の力によりて深めるなり。若し初めより晦澁難解の思想なりせば、恐らく作文者は之れを完全の文章とするを得ざるべし。縱ひ文章とは成し得とも、讀者は之れに接して先づ其の趣意を理解せんと努力するの態度に立たざるを得ずして、或は倦厭となり、或は單に怪異の情、穿鑿の情となるの外、何の得るところもなかるべし。

者の一具有する文辭にして、他は思想に技巧的發展なく言語に技巧的應用なき文辭なり、今表を以て上來の論を一括すれば

文章
平叙文——消極的修辭現象
修飾文——積極的修辭現象

第二節　修辭的現象の大別

平叙文の目的——思想の明晰——言語の妥當——消極的修辭條件——知的と情的——修飾文と積極的修辭條件——修辭現象の分類——綱條と轉義

前節、平叙文は修辭的現象の消極即ち無記なることをいへり。されど既に具現して一個の文章たる限りは、其の具現の過程絶無なるに非ず。思想にありては其が兎も角も一團として言語に裝着せらるゝに足るの準備を要し、言語にありては、如實に其の思想を表出するほどの準備を要す。すなはち此の場合にありては、想を善く具現すといふよりも、寧ろ想をありのまゝに表出すといふを目的とす。思想はつとめて其の趣意の明晰ならんことを期し、言語はつとめて其の思想に妥當せんことを期す。しかも明晰なるが上、妥當なるが上に結體し圓具せんとはせず。此の點より見て、平叙文は修辭的現象の消極なるものなり。而してこれが過程としては、思想上すなはち内容的には、夫の從來の語法學が說ける文章論のうち、命題の完備、叙述の端正といふが如き論理上の諸條件あるを得べく、言語上すなはち外形的には、從來の修辭學が說ける文體論のうち、

と「花の如し」とは、單に言語の上の相違にあらずして、思想の相違となる。しかも斯くの如きは二つながら修辭過程たるを失はず。斯くして思想の一分は、技巧の中に削り入れらる。故に吾人は思想の生起し展開して遂に言語に定着せらるゝに至るまでを、すべて思想發展の經過なりと見、其の中に就いて、技巧に直接の關係を有する部分と、然らざるものとを分かち、一を理想的發展といひ他を現實的發展といへり（緒論、內容と外形の項）すなはち理想的發展は技巧的發展にして、修辭的現象の一半は之れより生ず。

修辭的現象に內容的と外形的との區別ある所以もおのづから知らるべし。外形的とは技巧中特に言語に關するものにして、內容的とは思想の發展に關するものなり。前の例にて「奇麗だ」「奇麗なり」「うるはし」の何れを取るべきかといふ工風の如きは、外形的修辭過程に屬し、「奇麗なり」を「花の如し」とする工風の如きは內容的修辭過程に屬す。

文章といふ一個の美術が成立する過程は思想の技巧的發展と言語の適用との二面にあること以上の如しと雖も、文章は必ず皆斯くの如くなるべしといふに非ず。想を辭とするの階段は種々なるを得べし。或る者は「顏が奇麗だ」といふ思想をそのまま言語に裝ひてのとなし、「顏が奇麗だ」といふ文章となすべく、或る者は此の想に技巧的發展を加へ且つ言語の適用にも工風を施して「顏ばせ花の如し」といふ文章となすべし。前者といへども、既に文章となれる限りは、其が一團の想となりて言語を裝着せることのみにても、技巧の範圍に入れるは勿論なれど、是れたゞ技巧の最低階段のみ。修辭の無記を示し、消極を示せる者、之れを修辭的現象の最低標準、若しくは修辭的現象の零位なる狀態といふべし。「顏ばせ花の如し」といふに至りて、始めて積極的なる修辭的現象を認むるを得るなり。斯く積極的修現的現象の具はれる文章をこゝには修飾文と呼び、消極的すなはち無記零位なる文章を平叙文と呼ばんとす。一は思想に技巧的發展あり言語に技巧的應用あり、乃至少なくも此の二

第二編　修辭論

第一章　修辭論の組織

第一節　文章と修辭的現象

美術の二面——修辭は技巧過的程也——其の消極、積極——平叙文と修飾文

吾人は文章を一の美術と見るものなり。夫れ美術の研究は多方面なるを得べしといへども、こゝに便宜なるもの〻一をいはゞ、素材と技巧とを分かつことなり。素材とは美術となれる内容の思想にして、技巧とは此の内容を具現せしむるの過程なり。而して文章にありては修辭方法を以て此の過程に相當するものとす。修辭論はすなはち文章といふ美術の技巧の方面を研究するものなり。されども前に修辭過程を分かちて、素材的と技巧的との二つとせる如く、修辭は一半素材の上にも渉れり。精しくいへば思想に言語を引き當つる、其の言語の撰擇工風も技巧なると共に、之れに應ずる思想そのもの〻修飾も技巧なり。「顔が奇麗だ」といふ思想を全く同一意義にて「顔が」といはずして「顔ばせ」といひ「奇麗だ」といはずして「奇麗なり」又はうるはしなど言ひ換ふるは、これ言語に屬する技巧なり。されど若し進みて「顔ばせ花の如し」といふときは、「奇麗なり」

し。立意、氣象、篇法、章法、句法、字法を文の六法とし、褒美、攻撃、評品、抑揚、追想、回護、推明、考詳を文の八格とせり。また其の序に曰はく「立起端以肇之、叙事以揄之、議論以廣之、引用以實之、譬喩以起之、含蓄以深之、形容以彰之、過接以維之、繳結以完之。九法擧而後文體具、體具而後用達」と。同じく明の徐師曾が『文體明辨』は、もと上世より唐宋に及ぶまでの詩文を纂集せるものなれど、其の分類法に於いて、變遷論に於いて、優に修辭學の域に入れる點あり。此の時代また詩話中に詩形を論ぜるものあり。清に入りては、唐彪が『讀書作文譜』最も修辭書の體裁を具ふ。書法、讀法、評論よりして、文章の體制、題法、辭法、種類、詩の體式等に及び、雜駁なれどもよく委曲を盡くせり。支那美辭學の最も完備せるものと謂ふべし。

以上は支那に於ける修辭學の大概なれど、何れも科學的體裁をなせるものに非ざるは勿論にして、西洋の書の條理透徹、考察緻密なるに比ぶべきにはあらず。且つ修辭的現象と一般の文學現象との區別立たず、批評と修辭論との混亂あるは免れざる所なれども、之れが補償として、前人が文章の美に感じたる直截の事實材料は、却りて支那の修辭學に多きを覺ゆ。且つ其の範圍の最も文學的方面にありし點も、西洋古代の修辭書の缺を補ふに足るものといふべし。要するに支那の修辭學は之れを未成の材料として見るべきなり。

（參照）日本の修辭學とも見るべきは、歌語、俳話、その他徂徠、拙堂、山陽等が譯文法、文話、批評等に散見する片々たるもの〻外、取り出でゝいふに足るものなし。

ふも不可なし。其の論ずる所は固より雜駁なれど、文體を數へて八とし以爲へらく「若總其歸塗、則數窮八。一曰典雅、二曰遠奧、三曰精約、四曰顯附、五曰繁縟、六曰壯麗、七曰新奇、八曰輕靡」と、また文の成立を三として曰はく「一曰形文、五色是也。二曰聲文、五音是也。三曰情文、五性是也。五色雜而成黼黻、五音比而成韶夏、五情發而爲辭章、神理之數也」と。其の他文の沿革、性質、體制、辭法等に就いて論ずるもの凡て十卷より成れり。由來齊梁は六朝中最も詩文の分解批評盛んなりし代にして、漢魏の後、彫琢の文ひとり世に行はれしと共に、詩文の形體に關する研究漸く興り來たり、批評また隨つて精を加へ、遂に文章論としては「文心彫龍」の如きものを出だせるなり。詩形論に於いても、齊の周顒が「四聲切韻」、梁の沈約が「四聲譜」など音韻の方面よりせる研究盛んなりといふ。

唐は創作全盛の時代と稱せられ、評論批評に關したる者には注目すべき節少なし。宋に及びて再び詩文の形體を研究する思想榮え、詩話類を始めとして、修辭若くは批評に關する書多く出でたり。就中修辭論として價値あるは陳騤の「文則」なるべし。詞藻法に意を注ぎて、曲折、對偶、倒言、病辭、疑辭等の目を立て、また喩法を數へて直喩、隱喩、類喩、詰喩、對喩、博喩、簡喩、詳喩、引喩、虛喩の十とせり。同じく宋の嚴羽が「滄浪詩話」中亦た詩形詩體について論ずること詳に、詩の五法、九品、三工などいふものを擧げ詩の體に、人によりて分かるゝもの時代によりて分かるゝもの等あることを說けるは、詩形論文體論にわたれるものといふべし。

元には陳繹曾の「文筌」あり、以て元代の修辭論を代表するに足る。全篇を古文譜、四六附說、楚漢唐賦譜、古文矜式、詩譜等に分かち、詩文の法、式、製、體、格等の諸方面を論じたり。結尾の九法、起端の八法、敍事の十一法、議論の七法、用事の十四法、養氣の八法などあり。明に及びては、高琦が「文章一貫」などあれど、他書より拔鈔せる條項多く、新見に乏

は『毛詩』の叙に「詩有六義、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」といへるものにして、『周禮』また六詩の目を立てたり。而して之れが解釋は漢の學者が下せる註と宋の朱子が上せる註と全く相違し、漢註はすべて之れを諷諫美刺に關せしむるの方針によりたれど、牽強信ずるに足らず。朱註によるに、風とは里巷歌謠の詩、雅とは周の朝會の樂歌、頌とは周の郊廟の樂歌の名なり。賦とは事を敷陳して直ちに言ふの謂ひ、比とは彼の物を以て此の物に比するの謂ひ、興とは先づ他物を謂ひて以つて詠ずる所の詞を起こすの謂なり。

是れによりて觀るときは六義の中風雅頌の三は、詩の種類にして賦比興の三は詩中の措辭法なり。古來支那の學者は、六義を以て作詩の標準なるが如く思惟し、從つて種々の曲解を加へて之れを莊嚴にせんと試みたれど、歸するところ幼稚粗笨なる詩の分類原理たり、措辭法たるに過ぎずして、却りて其の措辭法といふものに支那修辭思想の萠芽を認むるは奇といふべし。賦とは畢竟事を叙するに比喩を用ひずして敷衍するの謂なり、修辭上いふ所の直叙法とを合せるが如きものなり。比とはやがて比喩によりて事を叙するなり、修辭上の喩法なり。興とは別題より起こりて本題に入るもの、即ち修辭上の序言法なり。修辭上の項目固より之れに盡くべくもあらねど、早く重要なる此種の辭法を數へ出だせるは、當時の學者が功といふべし。

此の他經書中子詩文集類に散見する片々たる修辭論は一々擧ぐるを得ず。また實行の方面には、戰國の代、縱橫家といひ堅白同異の說といふが如きもの、おのづから當時の雄辯壇を代表して、希臘羅馬のソフヰスト等と似たる地位にありしものか。文章としても、孟、莊、韓、左等の諸名家輩出し修辭の一道は殆んど其の頂點に達せり。

降りて梁に及び、劉勰の『文心彫龍』出でゝ、始めて支那に於ける一部完全の修辭書あり。支那美辭學の祖は劉勰なりとい

第二は修辭學の性質に關して、古代は概して之れを技術とし近世に至りて學問たるの一面をも加へんとせるは、其の修辭哲學、修辭科學などいふ書名の見はれしに徴するも明かなり。されど多くは應用科學などいふものに傾へて、學と術との兩面を具せしめたること前にいへるが如し。而して既に術の一面を具する以上、修辭學者は必ず之れによりて能文家たらざるを得ざるの理なるに、事實の必ずしも然らざるは、修辭學の世に輕んぜられし一因たり。且つ術としては勢卑近ならざるを得ざるが故に、學としての一面がひとり深邃なるを得ず、これまた斯の學の甚だ重きをなさゞる所以なるべし。吾人の見るところを以てするときは、修辭學は純然たる科學として、美學の一部を成すべきものなり。此の方向に研究の歩を進めて、始めて生命あるを得べし。

第三は修辭學の標的に關して、古代は勸説法若しくは論證法の研究といふに重きを置きたれど、近代は鑑賞的すなはち美感の方面に重きを置くに至れり。固より論辯勸説をも全く之れを說かざるにはあらねど、標的とする所の中心おのづから遷移し、隨つて修辭學の態度も變じたり。約言すれば修辭學が美學に接近するの端をなせるものなり。

第四は修辭學の材料に關して、上代は演說、訟爭、議論等、口述のものを主とし、近代は殆んど全く文章詩歌のみを材料とするに至れり。これ固より當然の數にして、修辭學が主として文學の野に立つべき理を示せるものなり。修辭學を文章學といひて可なるの傾向を示せるものなり。

第二節　東洋美辭學

支那――六義――文心彫龍――文則――滄浪詩話――文筌――文體明辨――讀書作文譜――支那修辭學に材料乏

東洋といふも茲には支那を主とす。支那に於ける修辭學の思想の發端と見るべきは、夫の「詩」の六義說なるべし。六義と

方面に置かんとせるの特色あり。ホエートリーの說によるときは、當時カムベルの書がブレイアの書に比して聲價甚だ高からざりしは、書名の哲學と題せらしため、實地に濶れるものゝ如く誤解せられしに由るならんと。ブレイアの書は小册子なれども能く其の要をつくして、美學的批評的と評せらる。ホエートリーの書は最も論理的なる點に於いて勝り、修辭學と論理學と二致なきが如く說けるものなること前にも言へるが如し。其の他ケームズが『批評原理』("Elements of Criticism"—Kaimes)中の詞藻論、マルレーが『英語法』("English Grammar"—Murley)中の詩形論等も典據たるべきものなり。最近にてはベイン氏("English Composition and Rhetoric"—Bain)ヒル氏("Science of Rhetoric"—Hill)バスコム氏(Philosophy of Rhetoric"—Bascom)ヘーヴン氏("Rhetoric"—Haven)ケログ氏("Text-book of Rhetoric"—Kellog)等枚擧に遑あらず。されど要するに大同小異なりといふべし。今上代修辭學と近世修辭學との主なる變遷を察するに、第一、修辭學の本領に關して、希臘は全く形式論に立ち思想の眞妄善惡とは相わたらず、また如何なる部類の思想にも通ずるものと見たれど、羅馬は少しく其の意義を變じて、如何なる部類の思想にも通ずると共に、其の思想また眞ならざるべからず、善ならざるべからずとせり。此に於いてか、羅馬にありては、修辭學は直ちに一切の學術が其の眞を究め善を極めんとするの工風と相合し、形式的なりしものは一轉して內容的に、しかも一切種々の內容に關すべきものとなり。修辭といふ名の下には法律も哲學も倫理も來り投ずるを得るものとなれり。されど斯くの如きは固より一修辭學の能く堪ふる所にあらざるが故に、學術の發達と共に此等の諸學科みな獨立の本領を有して分離せんとするに至り、こゝに修辭學は空なる殘骸となりて衰廢せんとしたり。近世の修辭學はすなはち此の衰殘の後に立ちて、むしろ再び希臘の古に近づき、他の一切の學術を離れて、獨立せる形式的の一學科たるに至れり。是れやがて一面には辭の美が如何なる思想にも帶着せられ得ることを證するもの。

のなりとの義を有するに至れり。

第三期即ち中世紀に及びても、語法、論理と並びて、修辭は大學の必修課程とせられ、依然教育修身の上に重要の地位を保ちたり。これ蓋し羅馬の遺風によりしものにて、十八世紀頃までもオクスフォード。ケムブリッヂなどには修辭學の科ありしが、遂にやみたり。

次に第四期近世の始め文藝復興の後、十六世紀の中頃には英國にレオナルド、コックスの『修辭術』("Art of Rhetoric"—Leonard Cox)トーマス、ウォルソンの『修辭術』("Art of Rhetoric"—Thomas Willson)等出でたるが、後者は殆んど全くアリストートル。クヰンチーリアン等を祖述せるもの、前者は多少の新意あり。されど要するに全體に於いて學祖アリストートルを多く脱せしものにはあらず。たゞベーコン("Antitheta"—Bacon)の修辭論中多少注目すべきものあり。彼れ以爲へらく、「修辭の任務は想像に推理を加へて意志を動かすにあり。蓋し辯爭に於いて理の妨げらるゝは常に詭辯の累ひ、即ち論理に關する方面と、想像即ち修辭に關する方面と、感情即ち道德に關する方面との三に依るが如し」と。知情意の三面にわたるべしといふと共に、暗に情の一面想像の一面を修辭の本領とするの見を抱けるものといふべし。またおもへらく、アリストートルは修辭を論理と道德との間に立て、雙方に與かるものとしたるが、論理と修辭との差別は、論理にありては其の立證論理の方法が何人にも同一なるべきと、修辭にありては、立證勸說の方法が人によりて異なるべきとにありと。

最近一二世紀にありては斯學に關する書の出でたるもの極めて多し。英國にありては就中カムベルが『修辭哲學』("Philosophy of Rhetoric"—Campbell)ブレイアが『修辭學講義』("Lectures on Rhetoric"—Blair)ホエートリーが『修辭學原理』("Elements of Rhetoric"—Whately)の三を近世修辭學の先達とす。カムベルの書は稍々佗傑の嫌ひあれども、修辭學の本領を純粹なる文學の

し。其の修辭學の效用を論ずる趣意に曰はく、修智は人生必須の徳なるか、はた用不用隨意なるべきものか。アリストートルは徳を道德的と智識的との二とし修辭を其の智識的なるものに屬せしめ、眞理推闡の上に缺くべからざるものとしたれど吾人はむしろ進んで修辭を道德的のものと見んとす。吾人は善人としてに非ざれば存立し得ざる底の修辭家を出ださんことを期す。修辭家は完全なる辯說の才あると共に高き心ある人ならんことを要すと。されど修辭の材料を如何なるものにても可なりとするは他と異ならず。其の意に以爲へらく、或は修辭の材料となるべきものを演說なりといひ、勸說的論辯なりといひ、訴訟究問なりといひ、人世凡百に涉るの德なりといふ。思ふに凡そ辯說者の前に現はれ來たる事物は、悉く修辭の材料となすを得べしと。其の他修辭學の研究方法を說きては、第一に辯說者、第二に辯說術、第三に辯說そのものとすべしといひ、辯說術を定義しては、「如何にして巧みに話すべきかの智識」といひ、また其の最も普通なるものは「勸說の力」といふに歸すといひ、修辭學の性質を論じては、凡そ技術に三ありて、單に之れに關する智識を得れば足るもの、例へば天文學などの如きと、智識の上に實行を要するもの、例へば舞踏の如きと、智識實行の上に更に製作物を殘留するもの、例へば繪畫の如きとの中、修辭は第二者すなはち智識と實行とを要するものなりとせり。又修辭の手段には工風、整理、標現、記憶、發表ありて修辭の種類には聽者を滿足せしむれば足るものと、商量をなさしむるものと、裁斷をなさしむるものとありとせり。之れを要するに大體に於いては羅馬の修辭學と希臘の修辭學と相通じ、アリストートル以外に出でし點は少なし。たゞアリストートルにありては大に形式的なりしものが、シセロ、クヰンチーリアンに及びて、道德と著るしく接近し修辭學はやがて人格修養の學なるが如く解せられんとせしを、羅馬修辭學の特色とすべし。其の他、當時は修辭學の教師をソフヰスト（Sophist）と稱し、學者の尊稱とせりといふ。但し此の名後に及びては却りて輕侮の意を含みて詭辯家すなはち理を非に言ひ曲ぐるも

異にして相競ひたりといふ。其の詳細は知るを得ざれど、當時の修辭學におのづから實際派と理論派との二面ありしがごとくなれば、上の兩派の爭ひし所も多く此等の相違にありしか。ヘルマゴラス(Hermagoras)また實際的と理論的との兩面を折衷して、學者派ともいふべき一派を創したりと稱せらる。羅馬に傳はりし修辭學は、主として此の派なりきといふ。次に第二期すなはち羅馬時代となりて、始めて修辭の事を論ぜしは、ケートー(Cato)アントニアス(Marcus Antonius)等にして、次いで諸多の修辭家出でたるが、中について最も著名なるをシセロ(Cicero 西紀前一〇六――四三)クヰンチーリアン(Quintilian 西紀四二――一一八)の二人とす。羅馬の修辭學は此の二家を以て代表するを得べし。

シセロには「雄辯法」(“De oratore”)の著あり。彼れは寧ろ學說よりも、實行の上に秀でたる人にして、アリストートルの修辭學を實行したる人と稱せらる。其の書またアリストートル、アイソクラチーズ等の說を敷衍したるものといふべく、書中に「我が意にては、雄辯家たらんとするものは如何なる才能を有するに拘らず必ず凡百の重要なる智識學藝に通ずるものならざるべからず。然らずんば其の辯の華麗と富贍とは、得て望むべからざればなり。蓋し辯者の心に得たる所ありて、而して表面に之れを見はさゞるの準備ありて、始めて其の辯は空虛ならざるを得べし」などいへるに見るも、其の學說の新奇なるものに非ざりしは察せらる。

クヰンチーリンは羅馬隨一の修辭學者語法學者にして、其の著「雄辯家教育」(“Education of an Orator”)はアリストートル以後第一の修辭書といふべし。彼れは當時羅馬帝國の修辭學教師たりしが、修辭學といふ中には、哲學、法律、道德、政治學等を含めりといふ。其の書名と地位とに見るも、修辭學が如何に教育上の要地に立ちしかは察するを得べし。クヰンチーリアンの學說亦隨つて大半は教育論に入れりと稱せらる。蓋し彼れの學說が著く道德的傾向を有したりし自然の結果とも見るべ

辭學は其の辯說による勸說法にして、之れが方法に說者の性格に依るものと、聽者の感情に訴ふるものと、說そのものゝ力に基づくものと三あり。また辯說の種類にも、勸考的、判決的、論證的の三ありて、勸考的辯說は推奬と諫止とより成り、判決的辯說は告發と辯護とより成り、論證的辯說は賞揚と貶下とより成ると。其の他アリストートルは修辭學を以て論理學と相類したるものとし、兩者共に事件の内容には關することなく、如何なる題目にも適用せらるべき形式的のものとせり。此に於いてか、斯の學は全く思想の產出に影響なくまた善惡眞妄に關係なきものとなり、其の有用無用すら疑はしきものと考へらるゝに至れり。すなはち古代の修辭學者が好んで論議せし修辭學の效益如何といふ問題は是れより生ぜしなり。アリストートルは之れを有用なりとするの理由を數へて以爲へらく、眞理正義は本來謬論よりも强き筈なれば、修辭力を借らざるもよく勝利を制することはあるべけれど、斯くの如きは辯論家の無能を表すものたれば、必ずや辭を練りて之れを推闡するに力めざるべからず。また學問上の智識あるものに眞理を敎ふるは易けれども、此は多數の人に望み難きことなれば、衆人に對しては殊に修辭の力を借るの要あり。また三段論法と同じく、啻に眞理のみならず、其の反對なる妄論をも證するがために修辭の要あり、其は他が妄論をなす時これによりて其の妄論を破し以て自ら衞るの具たるべければなりと。また彼れは美辭學を演說作文の二部にわたりて論じ、前者には主として聲音の抑揚などを論じ、後者には語法、文體、文質等を論ぜり。

アリストートルの後には、セオデクチーズ(Theodectes)セオフラスタス(Theophrastus)等あり。此の頃より哲學者の修辭學に注意するもの益々多く、專門の修辭家よりも、却りて哲學者の方に之れが硏究盛んなりきといふ。隨つて修辭學者と哲學者とは同一視せられたり。つゞいてはアポロドラス(Apollodorus)とセオドラス(Theodorus)との二人相對峙して名あり。兩派學風を

の政を布けるに際し、さきに專制政府のために産を奪はれし共和黨の亡命者等が續々返り來たりて財産回復の訴訟を起こし、訟庭に辯論を鬪はすの風盛んなりしため、おのづから辯論を專門の技藝として研究するものあるに至りしなり。故に此の時代の修辭論は、構辯爭訟の術なりきといふを得べし。例へば弱者もし強者より毆打の訴を受くるときは、弱者は「弱者が強者を毆打すといふことは、事實あり得ざることならずや」と辯護するたぐひ、之れをコラクスの蓋然論法といへり。蓋し一種の詭辯なり。又コラクスは文辭を分かちて詩、物語、辯論、助詞、結語の五とせりといふ。

續いてはスラシマカス(Thrasymachus)プロヂカス(Prodicus)アンチホン(Antiphon 西紀前四八〇——四一一)等あり。アンチホン當時アッチカ雄辯家の隨一と稱せられ、始めて修辭論に理論上の研究を加へんとしたるものにして、其の著の趣意はコラクスの蓋然論法などに本づけるものなりきといふ。また始めて其の辯説を筆寫して賣り與へ法廷に出づるものゝ便に供したるも彼れなりきといふ。ついでアイソクラチーズ(Isocrates 西紀前四三六——三三八)出でゝ修辭學を教授せし頃より、修辭學は漸く教育上重要のものと見做さるゝに至れり。これ當時詭辯を弄して眞理を誣ひ信仰を破り社會を頽落に導かんとするものゝ日に多きを憂ひて、之れを救ふべき方便として辯析究理の術を必要なる教育の一科とするに至れるなり。これより後永く修辭學は教育上の要地を占むるに至りぬ。其の他アナキシメニース(Anaximenes)また修辭學の著ありといふ。

アイソクラチーズの後に出でしはアリストートル(西紀前三八五——三二二)なり。彼れは修辭學を毎日午後の教課として學徒に授けしが、常に「我等默々としてひとりアイソクラチーズをして言はしむるは耻辱なり」と唱へて學徒を勵ましきといふ。其の書「修辭學」("Rhetoric")が下せる斯學の定義は第二章第一節に引ける所の如し。即ち歸するところは勸説の術なりといふにあり。而して勸説の方法に實證を示して人を服せしむるものと、辯説によりて人を服せしむるものとの二あり。修

第三章　美辭學の變遷

第一節　西洋美辭學

西洋美辭學の四期――アリストートル――クヰンチーリアン――ベーコン――最近世の三家――古今美辭學の變遷四條――其の傾向

美辭學を一科の學として研究したるの祖は西洋なり。支那にも古くより之れに關する斷片の思想は發生したりしを見れど、系統ある一科の學は遂に生ずることなかりき。强いて求めば、後の文話文法書類の如きもの之れに近からん。我が邦に至りては、さらに多く之れを缺けり。

西洋に於ける美辭學の始めて學問たる價値を有するに至りしは、一切學問の祖と稱せらるゝ希臘のアリストートルが效なり。されど之れに先だちて種々なる斯學の萠芽發生したりし概略を、クヰンチーリアン等が記するところによりて一言すべし。由來西洋の美辭學史は、之れを四期に分かつを得べし。第一期は希臘時代なり。第二期は羅馬時代なり。第三期は中世なり。第四期は近世なり。希臘の美辭學はアリストートルを中心とすること勿論なれど、其の以前、初の修辭論者として知らるゝものは、哲學者として有名なる夫のエムペドクリーズ(Empedocles 西紀前四四〇頃)なり。彼れは當時「譬喩を用ふるに熟練なる語法家」とたゝへられきといふ。されど精しきことは知るべからず。其の他コラクス(Corax)チシアス(Tisias)などいふ人々は、修辭を一の術として、之れが規則を立てなどし、プロタゴラス(Protagoras)ゴージアス(Gorgias)また少しく後れて、他の多くの修辭家と共に、大哲ソクラテースと時を同じくして榮へたりといふ。此の中稍々注意すべきはコラクスなるべし。コラクス時代に修辭が一の術として榮へたりし由來を案ずるに、この頃サイラキューースの君主制度倒れて、新に共和

（參照）所謂純正哲學が智識論に止まるべきか、はた其の以外に本體論といふが如きものを要すべきかは別なる問題なり。また美學、倫理學、論理學が、さらに統一せらるべき別の學問たとへば極致論といふが如きものを其の上に要するか、或は智識論本體論が進みて此の統一の任をも負ふべきか。これまた論究を須つべき問題たり。

標準學といふを以てたゞちに實行術と解すべからざるは言ふまでもなし。蓋し前にもいへる如く、學問とは全く範圍を異にす。學の示すところは標準の理なり智識なり説明なり。智識によりて到達したるものは、また智識ならざるべからず。學問の力によりて美の標準、善の標準を知り得たるものが、必ずしも實行の上に於いて、美の巧みなる製作家にもあらねば、善の正しき操行家にもあらざるの理に、これに本づく。美學は美の標準の學なり。それたゞ學なり。こゝを以て美學は人に美感を喚起すべき必然の條件理法は云々なりといふことを知らしむるのみにして、進んで作の條件理法を作るべき規則をも能力をも授くることなし。倫理學、論理學の場合みな然り。學者と實行者とは、同一なるを得るも決して同理なるを得ず。學問の實際に及ぼす效果は、たゞ間接なるべきのみ。學問の威信はこれが爲に毫末をも損せざるなり。

學といふの意義すでに明かなりとせば、吾人はこゝに美辭學の第四の定義を得べし。曰はく美辭學とは辭の美なる所以を研究するの學也。辭とは思想に言語を裝着をせるもの也。辭の美なる所以とは、修辭的現象によりて情を刺戟するの謂なり。學とは科學的に之れが理法を推論するの謂也と。而して美辭學の定義はこゝに至りて略ぼ完全なりといふべし。

されば次篇に於いては、以上の意にしたがひて、辭中の修辭的現象に先づ分類解析を加へんとす。而して其の得たるところに美の標準の如何に關係するかを知らんため、次に美學上の結論を得んと試むべし。すなはち第二篇に修辭論を立て、第三篇に美論を立てゝ、標準科學たる美學の一端に觸れんとする所以なり。

は、むしろ人心の作用を一の自然的現象と見て、之れが自然必至の理法を發見せんとするものなれば、直ちに之れを人心科學といふべからず。人心科學に於いて、人間の心に關する研究をなすとは、吾人の意志によりて行動思辨する、其の行動思辨の則るところを研究せんとすとの意なり。約言すれば、人心科學は、人意より發する現象を對境とし、自然科學は、自然より發する現象を對境とす。斯くの如く解し來たれば、前に標準の學といひ理想の學といへるもの、やがて人心科學に相當し、説明の學、事實の學といへるものは自然科學に相當す。蓋し善といひ美といふが如きものは、歸するところ我れが其の事物に對して下すところの贊否の聲にして、我が心の態度を表せるものたり。隨つて美なり善なりといふ贊成の態度に立つと、醜なり惡なりといふ否認の態度に立つとは、繋りて我が心の標準如何にあり。所謂理想は我が心の標準なり。見るべし理想の學、標準の學とは所詮我が心の學なることを。之れに反して自然の現象は我が心の標準を以て恣まゝに左右すべからず、唯忠實に斯くの如しといふの説明を下すべきのみ。

要するに標準科學が示す所と説明科學が示す所と、事實より歸納したるの理に於いては擇ぶ所なけれど、前者の理は之れに我は心の判斷が必ず伴ふべき者、後者の理はたゞ事實たるに止まるといふ點を兩者根本の相違とす。標準科學の到達點には必ず是非の情を生ずべし。若し生ぜざるときは其の理に誤謬あるなり。吾人は以上の理によりて、標準科學に美學、倫理學、論理學の三を數へ、其の他一切の科學を説明科學に列せしむべし。美學、倫理學が標準の學たるは論なし。論理學また、極はまる所は、我が彼れを眞とし此れを妄とする最後の準的を定めんとするものにして、標準の學といふに不可なし。夫の形式的論理學は、知力活動の形式の上に此の標準を求めたるもの、近時の智識學的論理學は其の以上に此の標準を求めんとするものなり。

けたるの分類たり。すなはち其の學によりて得るところの原理が標準的なる場合と説明的なる場合との相違なり。換言すれば、標準的原理とは之れによりて吾人が或る事理の價値を判斷するものなるの謂なり。説明的原理とは、之れによりて或る事理を説明するものなるの謂なり。而して價値の判斷とは、例へば其の理は眞なりや妄なりや、某の事は善なりや惡なりや、某の物は美なりや醜なりやといふの評價にして、此の評價をなすにあたりては、必ずや我れに標準なかるべからず。然らずんば何によりて眞妄善惡美醜の區別を立つべきかを知らざればなり。標準科學はこの標準を研究するものに外ならず。また事理を説明するものとは現にあるがまゝの狀態を統括し抽象して記叙するに止まるの謂ひ、説明科學とは事實を理として記叙すとの義に過ぎざるなり。

標準科學はまた「云々ならざるべからず」といふの理を論ずるものなり。説明科學は「云々なり」といふの理を論ずるものなり。「云々ならざるべからず」とは事物に是非を與ふるの意にして、「斯くの如くなれば是なり」「斯くの如くならざれば非なり」「必ず斯くの如くならざるべからず」といふに歸す。更に言ひ換ふれば「云々の標準に近づけば是なり。之れに遠ざかるものは非なり」といふの義にして、結局或る標準を掲ぐるの謂なり。されば斯くの如き標準、すなはち吾人が之れに向かつて進まざるべからずと考ふる極致をば理想と稱し、標準科學をば理想の學とも稱す。之れに對して單に「云々なり」といふは、現實斯くの如しといふの意義に外ならざれば、斯くの如くならざるべからずと強ふるの權能なきものたり。是れを事實の學とも謂ふべし。

また科學を人心科學(Mental science)自然科學(Natural science)と分かつことあり。人心科學とは人間の心の作用に關するもの、自然科學とは外界の現象に關するものをいふ。但し精しくいふときは、人間の心に關すといふも、今日の心理學の如き

たいふに過ぎず、他の知といひ情といふものと相井びて意識現象の一階級たるべきものにはあらざるが如し。此の點に關しては、ヴント氏。キュルペ氏等の心理學を參看せば、得るところあらん。

倘ほ學問の間接的效用すなはち實行の上の規則と、直接的效用すなはち智識上の說明との區別は、美學倫理學等の、所謂標準學に於いて最も明かなり。例へば善の最高標準は最多數の最大幸福なりと說くの倫理學ありとせんに、此の倫理學が直接に人世に效益を及ぼすは、同じく智識學問の範圍に於ける效用なり。換言すれば、此の說によりて我等か理知上の疑惑を除き、觀念を純粹にし、正當にし、明瞭にするを以て學問應用の本領とす。而して已に標準學なる限りは我等が倫理上の觀念一旦之れによりて正され明らめらるゝと共に必然に善といふ感を伴ひ來たるべし。卽ち間接には學問が能く人に善といふ感を起こさしめ、延いて之れを行ふにも至らしむれど、直接には、學問の力の及ぶ所はたゞ件の智識を與ふるのみ、學問の用は此所に完了す。故に若し人ありて、倫理學が與ふる最高善の智識に對し、或は先入見のため、或は性癖習慣のため善の感を催起せずといふことあらば、學問は之れを如何ともすることなし。たゞ他の方法によりて其の先入見を除き、乃至其の性癖習慣を改むるの外なきなり。而して斯くの如きはすでに實行の範域に屬して智識學問の領分ならず。要するに學問は情意の域に直接の權能を及ぼすことなし。

第五項　科學の種類附美辭學の第四定義

科學の二種――標準科學と說明科學――自然科學と人心科學――理想の學と事實の學――標準科學の三對――美辭學の性質

近時の學者は、科學を分ちて標準科學(Normative Science)と說明科學(Expository Science)の二となす。標準科學とは、美學、倫理學等を指す者にして、說明科學とは物理學、心理學、數學などいふ普通の科學なり。而して是等は、推論の方法によりて立てたる區別にもあらず、研究の材料によりて立てたる區別にもあらず、ひとり研究して到達する原理の性質によりて設

非ずして、實に之れを以て我が人格を高くし大にするにあるなり。學問は智識の發展を主とし、智識の發展は人格の發展を意味す。蓋し吾人がこゝに謂ふところの人格は、たゞちに心理學のいはゆる情操(Sentiment)を主とす。情操とは生具の感情が情念(Passion)の域を脱して修養せられたるなり。吾人が理心の作用を加へて高尚にしたる感情なり。隨つて理心の作用複雜となり深遠となれば、之れに應ずるの情操またます〳〵聰明となり愼重となる。一切の實行は情操ありて而して後ち自由に其の中より發し來たるべし。冷かなる理知は或は人生に於いて最後の用をなさゞることあるべしといへども、理知を捉へて直ちに實用の規則たらしめんとするも、決して之れを善用する所以にあらず。要するに學問と技術と、理論的意識と實際的意識とは、情操の媒によりて聯絡すべきものたり。智識の實行に移るは本來たゞ間接たり。

(參照)　なほ此の點に關しては論ずべき節多けれども、詮ずる所學問は學問として價値あり、智識は智識として價値あり。若し強ゐて之れが價値の標準を求めば、人格に對するものといふべきのみ。實行も人格より發し來たらざるにあられど、直接に之れを智識の目標とすると否とは、學者の態度に大なる相違を生ず。由來眞の智識はたゞちに實の世界なり。凡人はたゞ日常經驗の世界にのみ住するがゆゑに、其の志操意度おのづから卑小なれども、學問ありて、日常以上に知識の發展したる人は、やがて其の發展したる智識だけ、凡人よりも廣き新天地新世界を自我の周邊に有するの理にして、其の志操態度したがつて高大ならざるを得ず。たゞ斯くの如くして智識が自我の周邊に展開し來たる新天地を、現實日常の天地と同一に見て、日常の事に對するゝ同じく公平に自己の之れに對する立脚地を表すること、すなはち公平の感情を之れに向かつて發すると、之れに反して偏へに其の智識を實行利用の上に引援し來らんとするとによりて、學者の品格に高下の別を生ずべし。所謂俗學とは、實に學問を直接なる利用の具とせんとするものなり。實行の意識にあらはるゝ主要狀態は、意力の活動なりといふ。されども意とはたゞ吾人の意識が運動神經に移らんとする傾斜の力

域に入れるものなり。學問と技術とは全く其の源頭を異にす。就中學問の應用的方面と技術とは混じ易くして而かも混ずべからざるものたり。

學問と技術との相違は、之れを客觀の方面すなはち學問技術其のものについていへば、學問は理を示すものなり、技術は規則を授くるものなり。理は智識作用に訴ふるを主眼とすれども、規則は必ずしも智識作用の滿足を要せず、理非を問ふことなくして、初めより吾人の情意を之れに熟練せしむる規則といふもの丶本意とす。さればまた之れを主觀の方面すなはち學問技術に對する吾人の心よりいふときは、學問は理論的意識(Theoretical consciousness)に屬し、技術は實際的意識(Practical consciousness)に屬す。理論的意識の目的とするところは眞理の認識にありて、實際的意識の目的とするところは利害善惡の實行にあり。また理論的意識が依るところの手段は主として知力の活動にありて、實際的意識が依るところの手段は專ら情意の習練にあり。兩者全く態度を別にす。語をかへて言へば、學問と實行との間には混ずべからざる區劃の存するを見るなり。夫の往々にして生ずる學問の批難の聲、たとへば、哲學を修むるも以て安立の地を得ること無しといひ、美學を修むるも以て美術家鑑賞家たるを得ずといひ、修辭學を學ぶも以て能文家雄辯家たるを得ずといひ、語法學を學ぶも以て正しき聲音言語を使用するに堪えずといふたぐひは、畢竟此の區劃を思はざるに坐するものならずや。はたまた此等の批難者は、學問の應用といふことを以て、直ちに實行の義のみと解し、其の中間に說明檢斷の、別なる應用的部面あることを忘れたるものにあらずや。

但し斯くの如く學問と實行とを分かつは、決して學問を無用のものとする所以にあらず。學問は直接なる技術實行以外に於いて、長へに其が高き天職を有し得べし。何ぞや。吾人が學を修し、眞理を追ふの目的は、直ちに之れを實用に供するに

的方面にして、構成的方面にあらず。構成的方面すなはち先づ最高原理を知らんとする上よりいふときは、最高原理そのものより發足するを要するの演繹的推論は殆んど其の任に堪えず。歸證推論にありても、此の方面にはむしろ其の歸納的なる點が用をなすに似たり。またこまかに言へば、哲學が最高原理によりて一切の他の原理を組織し、論證するを要すると同じく、科學にありても、其の應用の方面は其の下に屬する理若しくは現象を組織し論證するの要あり。哲學と科學とはたゞ度の差たるに止まりて、研究法の根本には相違なしといふべし。

第四項　學問と技術

學問の構成、應用、實行――學問と技術――理論的意識と實際的意識――學問の獨立――人格と情操――直接的效用、間接的效用、

おもふに一切の學問は之れを構成的方面的と應用的方面とに分かつを得べし。吾人が前項に述べしところは主として其の構成的方面に屬す。應用的方面は明かに之れと分かちて論ずべきもの、また通常技術といふものと學問の應用的方面とも區別なかるべからず。

學問の應用的方面は、之れが演繹的推論なり。凡て演繹的推論は、其の前提に普遍なる既知自明の原理あるを要す。推論はみな件の普遍なる原理以内に於いてせらる。而して前提を既知自明のものとするは歸納的推論の寄るところたり。別言すれば歸納的推論により得たる原理を、さらに演繹的推論によりて、種々特殊の事例に應用し、以て其の特殊の事例が理法上當然屬すべき地位を明かにす。學問が學問として應用せらるゝの原理はたゞ是れに止まるべし。物理學が示すところの理法は、たゞ之れによりて諸種の物理現象を說明するを得ば、其が應用的方面の用は完たからん。進みて其の理法を工藝、器用の上に適用するが如きは、之れに移ると同時に學問たるの性をば脫したるなり。學問としての應用にはあらず、所謂技術の

足らず。而して事實は之れと逆行して、前提の正否は結論の正否を證する（推論に誤謬なき限り）これあれども、結論の正否は決して前提の正否を證するに足らざるを演繹的推論の性質とす。例へば、「動物はもの言ふ、人は動物なり、故に人はもの言ふ」といふも、「人は言ふ」といふ正當の結論あるが爲に「動物は言ふ」といふ前提を正當のものとはすべからざるの類なり。然らば演繹的推論は遂に學問の範圍に屬するを得ざるか。曰はく、學問の應用的方面といふもの、實にこれに外ならず。最後最上にして他の論據を要せざる一原理を得たりとせば、之れに信賴して、之れよりも下層なる種々の理若しくは現象を論證し説明し整理するは、演繹的推論の本意なり。之れを學問の應用的方面といふべく、實際に於いては、諸種の學問みな此の兩面を混合して存立す。吾人は此の點について尙ほ論ずる所あるべし。

（參照）哲學研究法としては、夫のヘーゲル等が唱へし如く、辯證的(Dialectic)推論を唯一の方法とする説あり。辯證的推論とは、結局理と理との關係を尋ねては其が矛盾を發見して之れを排却し調理し行くものにして、演繹的推論に近きものなり。されどまた理と理とを相關係せしむるにありても、先づ要するものは之れが成分の分解なるべく、隨つて歸納演繹の兩作用は其の中に含有せらる。たゞ全體に於いて辯證的推論が演繹的たるを見ざるべきのみ。而して哲學が斯くの如く演繹的、辯證的なりとせらるゝは、主として其の天地間一切の理を統一せざるべからずといふ根本の性質より來たるものにして、最上の原理を先づ知り得たる後、之れによりて一切の他の諸原理を保證し以て此等の諸原理をして些の弱點なく推論し得しむる所に哲學の特色あればなり。卽ち最高の原理を知らんとするよりも、知りたるのち之れによりて他の諸原理を組織し、且つ最後の價値を與へて、歸納的推論が殘せる類推の弱點を補足するところに哲學の本意ありと見るなり。されども此の如きものもまた其の最高原理が獨斷乃至直觀なる限りは、歸納の頂上に殘れる缺點と同一の弱所を有し、結局は却りて歸納よりする缺點の安心多きに如かざるに至るべし。且つ此等は吾人の所謂哲學の應用

(參照)　哲學と科學との關係につきては、種々の論あり。まづ哲學を解して彼のデカルトがいへる如く、知り得べき一切の事物に關する最後最上の原理を求むるものなりとするもの、又は獨のフヰヒテ(Fichte)がいへる如く、單に智識の學なりとするもの、又は同じくヘーゲル(Hegel)がいへる如く、絶對の學と解するもの等種々なると共に、隨つて其が科學に對する地位にも多少の相違あれど、與ふるところ近時に於いて最も廣く是認せらるゝ哲學の定義は、獨のユーベルベヒ(Ueberveg)氏がいへる如く、諸原理の學(Science of Principles)といふにあり。すなはち哲學は科學が與ふる諸種の原理について、さらに其の根柢となれる大原理を研究せんとするものなり。科學に對しては其の根本に保證を與へんとするものといふべし。但し近時著るしき科學の進歩と共に、古來動もすれば哲學を本として、先づ之れを明めざれば科學の成立するを得ずと考へたる風一變して、むしろ科學の成りし後に、之れが補修部として立つを哲學の本領と見るに至れり。哲學を待ちて科學が成立するにあらずして、科學が待ちて哲學が成立するなり。("Introduction to Philosophy"—Külpe)

科學の研究方法が歸納的たるべきは勿論なれど、哲學もまた之れを構成するの推論法は一面に於いて歸納的ならざるべからず。何となれば、學問は常に假定に對して其の必然の論據を求むるものにして、必然の論據を供給するは、ひとり歸納的推論の能くするところなればなり。演繹的推論にありては、例へば三段論法の場合の如き、これによりて論證せらるゝものは常に結論にありて前提にあらざること勿論なるに、其の前提は概して結論よりも弘汎の性を有す。したがつて、哲學が追求するところの一層弘汎なる原理は、演繹的推論にありては、常に其の前提すなはち既知の部に置かれ、推論によりて得るところの論證は却りて之れよりも一位降れる原理、すなはち要求するところの價値に合せざるものとなるなり。されば、演繹的推論にありて、結論の正當なることが前提の正當なることを證するにあらざる限りは、以て哲學構成の推論法となすに

のなり」といふ中には、「今日までに經驗せる火は凡て熱かりき」といふことゝ「今後の火も凡て熱かるべし」といふことゝを含む。しかも其の「熱かりき」といふと「熱かるべし」といふとの間に必然の連鎖をなすものは何なりや。哲學者は之れを解して因果律なりといひ不變律なりといふ。即ち因果律不變律といふが如き、一層弘汎なる理法の存在を許すときは、はじめて今日までの火の凡て熱かりしことゝ、今後の火の凡て熱かるべきことゝを連結して、『火は凡て熱きものなり』といふを得べし。されど斯くの如き弘汎なる理法の存在を許すの論據は何なるか。若し此の以上をば問ふべきものならずとせば、是れ因果律不變律を先天的直觀とするなり。或はこれに止まらんとする學者もあるべし。されど尙ほ吾人はこの直觀的知識に滿足し得ずして、之れを臆斷的假定の地に引き下し、更に其の奥なる必然の論據を吟味せんとす。因果の關係は必然なり不變なりといふ中には、たとへば「我れ斯く信ず、故に必然なり」といふことを含む。別言すれば我が信ずるところは眞理なりといふにあり。果して我が信ずるところは凡て眞理なるか。そもそも「信ず」とは如何なる事なりや。直觀とは何をいふか。こゝに至れば科學が基礎とするところの經驗的直觀をも併せ論ずるを得べく、結局吾人が知識そのものゝ根柢を研究し、延いて知識が實と信じ眞と信ずるものゝ說明に及ばんとす。哲學は此れに達して始めて深邃となるべし。

是れに因りて觀れば、科學は經驗的直觀を脚とし、先天的直觀を冠とし、哲學は直ちに此の脚と冠との直觀を研究せんとす。而かも今日までの哲學の狀勢に徵するときは、到底直觀の一斷は何處にか沒するを得ずして、たゞ漸次に直觀の領域を減削し得るの趣きあるのみ。未開の世にありては、人知多くは直觀的なりしものが、漸く移りて推論的となり、文化の進步と共に推論的智識の領域の廣まり行けるを見るのみ。學問とは畢竟直觀の智識が如何なる程度まで推論の智識に變ぜらるべきかを檢證するの謂なり。

る限界を設くるを得ず、統一の廣狹によりては、一學科中にも更に幾多の小科目を生じ所謂專門的研究の方向にます／＼分裂し行くの趣きあり。學問の科目の分かるゝは、やがて知識の統一すべからざる點のます／＼判然し行く證にして、之れと同時に統一すべき方面もいよ／＼精を加ふるなり。

之れを要するに學問とは、一理若しくは數理を頂上として、之れを證すべき種々の知識を、論理的關係によりて其の下に組織したるものなり。而して其の論據の廣狹精粗、其の推論の當否は、以て其の學問の價値を定むべし。

さて組織的知識すなはち學問は、分かちて二種とするを得。哲學と科學と是れなり。科學とは、前にいはゆる下端の直觀、すなはち經驗的直觀を發足點として、之れを推論の知識に化すものにして、隨つて其の方法は全體の上よりいふところの歸納的たり。個々の現象を蒐めて、彙類し、解析し、統一するところに科學的理法を組織し來たる。科學の經驗的なるは此のゆゑなり、必然の論據は經驗的に歸着すればなり。

されど歸納的といふも、其の推論が一部の事相によりて全體の理を推す點に、一歩經驗的直觀を超越するの弊あるは前にいへるが如し。是れ實に經驗的根據を標榜とする一切の科學に通じて、補ひがたき一の缺陷たり。譬へば金龍の畫成りて最後の眼睛を點じ得ざるにも似たり。何によりて一部に通ずる理法を全體にも必ず通ずと斷定するか。この一問にして明かならざる限りは、科學は遂に未了のものたるを免れざるべし。こゝに於いてか、此の種の根本的疑問を解釋せんがため、科學以外に別種の學問を要し來たる所謂哲學これなり。

嚴にいふところの哲學は科學の仕上げをなすものなり、最後の補充なり。其の材料とするところは、先づ科學が提供する種々の理法にあり、吾人が一部の理を以て全體の理と斷定するは如何といふが如き事實問題にあり。蓋し「火は凡て熱きも

第三項　學問の領域

學問は推論的知識也――學問的知識と學問――理の組織――哲學と科學――構成と歸納――應用と演繹――哲學研究法

知識の類別以上の如しとせば、學問とは、要するに直觀的知識を推論的知識に移すの謂ひなり。而して直觀とは、其の以上の論據を問ふを要せざるものといふの義なれば、若し直觀的知識にして、疑ふべきものとなりし時は、旣に直觀の價値を失へるなり。斯くの如きものを臆斷的若しくは假定的といふべし。所謂科學的假定(Scientific hypotheses)とは、卽ち臆斷的知識に外ならず。其の根柢に、必然の論據(Sufficent reason)を要するものなり、假りに立てゝ以て學問上發足點若しくは到着點の標榜とするものなり。

學問は推論的知識を本とすること、前來の說によりて知るを得べし。されど單に推論的知識といふときは、範圍廣漠に失して、學問といふに足らざるものをも含蓄し來たる。蓋し是等はたゞ學問的知識といふべくして、未だ學問そのものに非ざるなり。學問的知識を學問となすには、更に他の條件を要す。通例之れを知識の組織的なることゝいふ。卽ち學問とは幾多の推論的知識を更に統一せるもの、若しくは一個の推論的知識を、出來得る限り廣き論據の上に立たしめたるものなり。但し知識は本來統一的のものにして、所謂統同辨異、すなはち綜合と分解とによりて、異を辨じたる後之れを同に統ぶるの作用は、知識の生命なり。之れを知識の統一作用といふ。隨つて、苟くも知識なる限りは、如何なるものが統一的ならざらん。こゝに學問的知識との區別條件として擧げたる統一は、之れと稍々意を異にして、一推論が完全なる組織を成すの程度に達せる統一なり。知識が無限に統一を追うて進む上よりいへば、統一の程度の差に過ぎず。而して完全なる程度とは結局推論者が力の及ぶ限りに於いて論據を確實にし得るの意のみ、比較的の稱のみ。されば學問と學問的知識との間には到底精確な

コン(Bacon)が論究法、論證法等の論、佛のデーカルト(Descartes)が直觀、綜合、分解等の論出づるに及びて歸納的の意義明白となり、而して後經驗派には英のロック(Locke)等哲理派には獨のライプニッツ(Leibnitz)等の論理說を生じ、カント(Kant)を通じて近時に及ぶまで論理學の大勢は多く變ぜざりきといふを得べし。演繹法就中三段論法の價値については論多し。經驗論者は之れを目して全く既知以内に止まるものとすれども、先天論者は外に綜合的に新結論を生ずるの力ありとなす。また彼のブラッドレー氏ボザンケ氏等の新論理學者が三段論法を批難するは畢竟其の形式一邊に流れたるを弊とし、之れに內容を加へんとせるものにして、內容の要求の種々なるに從ひ、推理の形式も種々ならざるべからずといふを其の立脚地とす。たゞ論理學が研究すべき知識運轉の理法は別にこれありて、三段論法は之れを應用したる一例本たり。ブラッドレー氏が「一方に三段論法が推理の普遍なる模型にあらざるを知らに、之れと同時に、他方に其の推理の原則を示すべき一形式たるをも承認せざるべからず」("The Principles Logic"—Bradley) といへるは、一歩を進めて、啻に原則を示すべき一形式たるのみならず、最も好都合に之れを示すものといふを得べし。

歸納的といふも、嚴にいふときは、一部を以て全體を推すところに或る飛躍あり。此の飛躍に先天的直觀の力を假らざる限りは、推論は成立せず。されどもまた單に全體を經驗して全體の理を得るのみにては、推論の價値極めて薄し。ヒューム(Hume)等の經驗論は此の缺陥に立脚して生ぜしものなること、人の知るところなり。而して斯くの如く、一部の經驗より全體の理に飛躍すること、部分推論によりて經驗以外の新知識を加ふることといふ根柢を論ずるはやがて哲學なり。

演繹と歸納とは、嚴にいふときは別れて存立すべきものならず。分解といへば綜合を意味し、綜合といへば、分解を意味し、此の兩面は畢竟一作用の表裏なり。分かつといへば、分かちて之れを同じもの丶み分類する兩者を含み、綜ぶといへば、異なれる者を分ち出だすといふ義を含めばなり。故に此の二者の別は全體の上においてするの別なり。即ち歸納とは特殊の智識より發足するもの、演繹とは普通の理より發足するといふの外なし。

盛者必衰の理なりと推知するは歸納的推論なり。而して此の如き推論が若し事實に於いて一切の事を盛者必衰と經驗したる後に出づるものとせば、是れたゞ經驗によりて既知となれる知識をさらに總括して抽象するに過ぎず、推論によりて全く別なる知識を得るに非ず、隨つて斯くの如き意味にては既知より未知に移るに非ず、知識たるの價値少なしといふの批難を蒙ることあるべし。されども歸納の價値は決して之れに盡きず。吾人は到底限りある力を以て一切の事を經驗し得べきにあらざるが故に、歸納の材料は僅かに一局部に限らるゝも以て推論の根據たるの資格を失ふこと無し。今日までに吾人が經驗し得たる事實によりて、「火は凡て熱し」といふ推論をなし得とせば、吾人は明かに此の推論によりて「今日までの火は熱かりき」といふことゝ「凡て火は熱し」といふことゝの差だけ、新知識を加へ得たるなり。一部を推して全體に及ぼすなり、單に個々の直觀的智識を統括し抽象するのみにあらず。之れを類推的(Analogical)知識ともいふべし。次に演繹的とは、例へば「我れはすべて實在物なり」といふ判斷を疑ふべからざる直觀的知識と假定せんにこれを本として、「心は我れなり、故に心は實在物なり」といふが如き推論をなすを謂ふ。是れまたたゞ既知以內の事を論證するに止まりて、新知識を加ふるものにあらずといふの批難あれども、前提の中より開展し來りたるを結論をば、縱し其の性質が前提に含まるべきものなりとするも、現に吾人の心內に知り得ざりしものある限りは、之れを新知識といひて不可なし。歸納的推論を既知よりして既知以上の未知に移るものとせば、演繹的推論は、既知よりして既知以下の未知に移るもの、一は上進法にして一は下進法、一は類推的にして、一は論證的、一は分解的にして、一は綜合的なるの差なるのみ、既に在るものより未だ在らざりしものに達するに於いては一なり。之れを知識の發展といふべし。

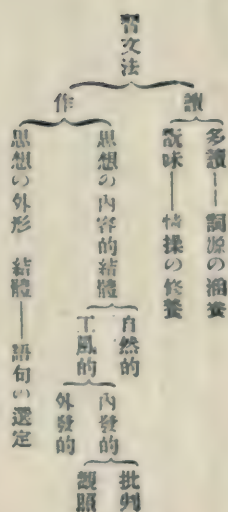
（參照）演繹歸納の名は從來の論理學に於いて人のよく知る所なり。希臘のアリストートルが首唱せしものを演繹的とし、英のベー

の區別にして單なるものを判斷といひ、複なるものを推理といふに過ぎざれば、吾人はさらに別の方面より抽象的知識の分類をなさゞるべからず。其の一は內容よりするものにして、其の二は方法よりするものなり。內容よりする知識の分類は大體に於いて客體の知識と主體の知識との二となすを得べし。客體の知識とは卽ち物に關する知識にして、主體の知識とは我れに關する知識なり。此の點の詳細は玆に要なき限り煩を厭いて說かざるべし。方法よりする分類には、直接的と間接的及び演繹的と歸納的といふ二面の區別法あるを得。直接的とは、其の知識と我れとの距離の直接なるもの、卽ち他の論據を要せずして直ちに信ぜらるゝ最底最後の知識にして、直觀的（Intuitive）といふもの是れなり。直觀的知識には、上下の二端ありて、下端は前にいへる具象的知識の一部なる個々の感覺的知識に外ならず。感覺的知識は我れの之れを眞實と信ずること全く直接的直識的といふべし。上端は之れに反して、吾人の智識の最上に經驗以外なる一大普遍の知識ありて、吾人は先天的に之れを眞實と信認し得。（但し此の方面は尙ほ哲學上の大問題として未決の點多く、遽かに是れが存在を斷言しがたき事情あれども、こゝには便宜のため、假定の論を立つ。一切の哲學は實に此の一問を解決せんとするものともいふべし。）すなはち同じく直觀的なる所以なり。要するに下よりする直觀と上よりする直觀と、一を經驗的直觀といはゞ、他は先天的直觀といふべく、一は最底となり一は最頂となり、一切の知識は其の中間に連亙す。而して間接的知識とは、件の中間の知識を謂ふ。或は下端の直觀より推及し、或は上端の直觀より反求して、始めて認知し信賴するを得るなり。故にまた之れを推論的（Inferential）といひ、中について推論の方法を二つとなすを得。演繹的と歸納的とこれなり。歸納的とは、經驗的直觀の智識よりして理を歸納し來たるの謂ひ、演繹的とは、先天的直觀の知識よりして理を演繹し來たるの謂ひ。例へば花の開落、人の榮枯をしばしば經驗すとせんに、此等の經驗が一々眞實にして虛妄ならざるは直觀的なり、是れよりして、一切の本、

いて、世人は技術をも學問と稱するなり。而して學習といふことは知識作用に外ならず。科學の原理、哲學の眞理といふが如きものまた皆之れを得るの經過に學問の本意あるべし。更に精しく論ずるときは、原理といひ眞理といふものみづからも、知識作用の上にあらはるゝ一現象に外ならざれば、結局學問とは知識作用の謂なり。

されども知識作用の範圍は廣し。吾人が火上に手をかざして熱しと知るも知識なり。眼を擧げてかしこに松あり、かしこに柳ありと知るも知識なり。はた月に暈あるを見て雨を想ひ、諸物の墜落する事實によりて地中の引力を知るたぐひ、ひとしく智識に外ならず。今吾人は、此等の知識を大別して、具象的と抽象的との二つとするを得べし。彼の感覺といひ、知覺といひ、心象といひ、想像といふたぐひは、皆具象的と見るべく、概念となり判斷となり推理となるものは、皆抽象的といふべきこと、前に一言せるが如し。而して正しくいふところの學問には、具象的知識は與らず。其のたま〱是れあるは、たゞ材料としてのみ、發足點としてのみ。過程として若しくは歸着點として具象的知識を取り扱ふこと無し。諸種の科學に於いて實驗を要する場合の如きは、實驗そのものを目的とするにあらずして、たゞ之れによりて抽象的なる理法に一層の信念を伴はしめ、若しくは一層の明確を加へんとする手段に外ならざること勿論なり。要するに學問は主として抽象的知識に關するものといふべし。

抽象的知識は知識の本領にして、個々特殊の象より普遍必然の理に移るを本意とす。個々特殊の象より脱するは卽ち抽象にして、之れをして普遍必然ならしむるの根柢はおのづから別にこれあるを要すれども、今論ずべからず。而して形の上より抽象的知識を見るときは、心理上にいはゆる概念、判斷、推理の三種に分かつを得べし。中に就いて概念は一個單獨のものとしては完全の智識を成さゞるが故に、結局抽象的知識の形は判斷と推理との二つに歸すべし。されども此はたゞ外形上

せるものなり。なほ論結を明かにせんため、下に要點を表示す。

第二項　知識の種類

學問と知識――抽象的知識――其外形別――其內容別――其方法別――直觀と推理――歸納と演繹――三段論法の價値

總じて學問とは如何なることをいふか。我が邦に學術といふ熟語あるにても知らるゝ如く、先づ實際の方面には技術といふ名が含める概念をもこれに合したり。また究理の方面にては、吾人が經驗を基礎として歸納し得る種々の原理、若しくは之れに到達する過程をも學問と稱し、此等の原理研究の奥に横たはりて、之れに價値を與ふる最後の眞理、若しくは之れに到達する過程をも學問と稱す。所謂科學と哲學とこれなり。斯くの如く技術といひ科學といひ哲學といふものがみな一様に學問と解せられし所以のものは蓋し三者に共通せる一の性質あるがためなるべし。其は此等のものが何れも未知より既知の狀態に移るを主眼とすればなり。未知より既知に移るとは、知識の謂なり、吾人の知力的方面に於ける作用の順序なり。習ふといひ學ぶといふ語の本意は、概して知力作用を催起するにあり、知識を得しむるにあり。技術といふも、嚴にいふ時は技術そのものが學問には非ずして、技術を習得する點に學問の本色あるなり。少なくとも學習して得たるものといふ義に於

することはなきも、一旦發出したるものを、みづから批判して、如何なる點に工風を要すべきかを定むるを第一段とす。而して後、之れを如何に是正すべきかを、瞑目して靜に觀照するなり。之れを觀照といふは、一層活如たる其象を腦裏に映出せしめんと反求するの態度なればなり。知力に由るにあらざればなり。之れを內に發する工風の第二段とす。而して之れが根本となるものは前に舉げたる審美的情操に外ならず。

以上は主として思想の發展すなはち前に表示したる內容的修辭過程の上の觀察なれど、尙は此の他に外形的すなはち言語の表情を利用する上の修辭あり。作文の遲速巧拙は之れにも關す。言語の表情を利用するの途は、思想の求むるがまゝ、たやすく雜多の語句を提起して、其の中より最も情趣多きものを選擇し採用するにあり。通俗には之れと思想の結構、思想の內容的結體等とを混同すれども、其の間區別なかるべからず。口調惡しきがため、語句の雅馴又は適切ならざるがため、などいふ理由の下に文辭を改竄するは、吾人の最も多く經驗するところにして、此等は槪して言語の表情を善用せんとするに基づけるものなり。夫の全然譬喩を改め、描法を改むるが如き場合と、根本を異にするを知るべし。而して斯くの如き外形的修辭に上達するの方法は、前にいへる詞源の涵養と、之れを選定すべき審美的批判とにあり。審美的批判はやがて審美的情操に起こるものなること、內發的工風の場合と同じ。尙ほ批判と情操との關係は後の論題たり。

文章に推敲といふことあるの理も、上來の論によりて明かなりと信ず。卽ち其の中には種々の意義あるべく、之れを賤むものと貴ぶものと、必ずしも同一物についていふにあらざること多し。自然的と工風的との長短は作家の風格にもよれど、十分に習まば、兩面を兼ぬるに如くは無し。工風其のものは決して排すべきことにあらず。工風はすなはち推敲の起こる所以なり。『文體明辨』に「北齊顏之推曰、學爲文章、先謀親友、得其評論者、然後出手、愼勿師心自任取笑旁人也」といひ「宋呂本中曰、近世歐陽公作文、先貼於壁時加竄定、有終篇不留一字者」といひ「宋歐陽修曰、疵病不必待人指摘、多作自能見之」といへるが如き、みな文章の三昧地に推敲を要と

時としては全く之れを失ふの危險あり。安全とは、工風のあまり其の思想の結體を、破壞するの危險なきなり。思想の結體とは、前にもいへる如く、情によりて思想を結束し具象せしむるの謂なれば、あまりに長く同一思想に停滯し、之れを反覆思念するときは、心理上の法則によりて、其の情の力疲弊し去るの傾きあると共に、工風はやがて知力的思案に陷り、思想の結體は之れがために分解せらるゝに至るべし。文章に氣なく力なきは、槪して此れより來たるの弊なり。此の危險を避けんとせば、思想の結體を自然的ならしむるを便とす、思念を避くるなり、細査を避くるなり。『讀書作文譜』に「陳眉公曰、文章只要單刀直入、最忌絡密周緻。密則神氣拘迫、疎則天眞爛漫。史記之佳處在疎、漢書之不如史記、在密。畫亦然。元畫疎、宋畫密。氣運生死皆判于此」といへるは、稍や弊あれども、意は思想の自然的結體を說かんとせるにあるべし。次に工風的結體の長所は、精熟を極めて遺憾なきを得るにあり。自然的結體をのみ重んずるものは、其の思想が果たして十分の發展をなせるものか否かを顧みるを嫌ひ、往々にして不醇のもの、未熟のものを文辭にするの弊あり。此の弊を避くるの途は、工風はあり。工風といふにも二義ありて、初めより語句の形式を定め置き、之れによりて思想の發展を導かんとするものあり。また單に空中より拈出せんと、さながら腦漿を絞るが如き態度にて、内に反求するものあり。前者は外よりするものにして、後者は内よりするものなり。一は既成の語句を口ずさみながら之れを巧みに應用せんとし、他は頻りに取り觀照して景象の活現し來たるを待つの趣きあり。文章の初級なるものは多く前者にあり、漸く熟するに從ひて後者に移る。思想の語句に役せらるゝの境より、語句の思想に征せらるゝの境に入るなり。されど如何なる老練の文章家といへども、或る程度までは、語句の爲に役せらるゝことあるを免れず。殊に長篇の文章にありては、中間、氣餒へ情衰ふるにあたり、外形より入りて文勢を補ふことあるは、何人も經驗するところの事實なり。

さて斯くの如くして外發の工風より内發の工風に移るものとすれば、内發の工風は、工風的結體の醇なるものなるが、これまたおのづから二段の順序を經るに似たり、一は批判にして他は觀照なり。即ち内より發するものなるが故に、豫め道へて之れを模型に投

くはなし。審美的翫味はやがて文學なり。結局文才涵養の法は、詞源の充實と情操の修養とに歸して、一は多く文章を讀み且つ記するに成り、他は之れを文學として翫味するに成る。さらば更に此等の條件を活用して文を作るの工風は如何。

古來作文家に遲速の二傾向あるは人の知るところ。『文體明辨』に「大明王世貞曰、才有工而速者、如淮南王、禰正平、陳思王、王子安、李太白之流是也。然鸚鵡一揮、子虛百日、煮豆七歩、三都十年、不妨兼美。」といへるは卽ち是れなり。思ふに文の遲速といふには種々の意味あるべく、作文家みづからも其の理由を知らずして、すべて我が才の遲速とのみ稱し居ること多かるべし。例へば或る者は思想の現實的發展すなはち思想の結構をも莅く紙に蒞み筆を採りたる後に工風するの習慣あるため、然らざるものに比して文の成ること一層遲く、また或る者は思想の理想的發展すなはち思想の結體を紙に莅みたる後に於いて工風するの習慣あるがため、之れを豫め工風し置くものよりも文の成ること概して遲きが如き、皆文才の遲速といふ中に包含せらるゝなり。されど是等は天稟の文才に遲速あるが爲といふよりも、むしろ作文上の習慣に屬するものたり。殊に第一者の如きは、全然作文の過程より別かちて論ずべきものなるべし。禰衡が『鸚鵡賦』の一揮にして成り、司馬相如が『子虛賦』の百日を累ねて漸く成れりといふたぐひは、最も多く其の思想結構の遲速に基づけるに似たり。思想結構の巧拙遲速また天才の一面たるには相違なきも、修辭の工風に關するものとは、全く別と見ざるべからず。よし實際に於いては、兩者密に相接することありとするも、硏究の上にては、相分かちて論ずべきものたり。

たゞ思想の結體に人爲の工風を要する場合と、工風を待たずして殆んど自然に結體し來たる場合とあり。是等固より比較上の論にして、自然といふも絕對的に工風を排する神祕のものにはあらず。また同一の人にても、時によりて工風を要するの度一ならざるは言ふまでもなし。されど概して言はゞ、人によりて工風的なるものと自然的なるものとの二大傾向ありとなるを得べし。工風的なるものは遲く、自然的なるものは速し。これ文才遲速の眞の意義なり。而して此は其の人の天性に關し、習練を以て左右しがたきものたり。得失よりいふときは、自然的なるものは、安全なれども粗雜に終はるの嫌ひあり。工風的なるものは、精熟を極め得ると共に、

（參照）　美辭學の目的旣に能文の術を授くるに非ずとせば、文章は畢竟如何にして習熟すべきか。是れ何人の心にも生ずる疑問なり。而して文章家は多く文章練磨の工風を實習にありとなす。實習といふには、他人の文を讀むと自ら作るとの二義あるべく、其の極致は熟するにありといふ『讀書作文譜』に「文入妙來無過熟。樸學士嘗問歐公爲文之法。公曰、於吾姪豈有吝惜、只是要熟耳、變化姿態皆從熟處出也。又毛稚黃曰、讀書作文總妙在一熟、熟則無不得力。或謂文亦有生而佳者。答曰、此必熟後之生也熟後而生、生必佳、若未熟之生、則生疎而已矣、焉得佳乎。是熟一字爲作文第一法也。」といひ、「所作之文工拙、必本於所讀之文之工拙」といひ、「文章讀之極熟、則與我爲化、不知是人之文我之也、作文時、吾意所欲言、無不隨吾所欲應筆而出、如泉之湧、滔々不竭。文成之後、自以爲辭意皆已出也。他人觀之、則以爲句々皆從他文脫胎也。非熟之至、能如此乎」といへるたぐひ、見るべし。單に熟すとのみいひて已めるは、非科學的の論なれども、要するに文章修養の法が讀むと作るとの實習の外なきをいへるなり。而して讀むの目的は、之れによりて我が記憶の語句を豐にし、且つ其の用に應じて湧起し結合するを容易ならしむるにあるが如し。此の點よりいふときは、他人の文を讀むは、たゞ多く讀み多く諳んずるを可とすべし。何となれば之れによりて我が詞源を富ましむるを得ればなり。思ふに文章習練の上の一要件は此にあり。されども此の派の著者はまた多讀を排せり。曰はく「凡讀文貪多者、必不能深造。能深造者、必不貪多。此理宜深悟也。嘗讀一篇、能求名人指點、剖悉精微、從而細加審覈、則讀十可以當百。若不求名人指點、更不精研細閱、雖平淺之文、尙不能窺其所以、何況精深者、雖讀百不如十也。無知、淺人不知深造之益、只務貪多、此篇尙讀未竟、又欲更讀他篇、究之、讀過之文於妙精微、了無所得」と。こゝにては、文章の審美的趣味若しくは批評的硏究を主張せるものと見るべく、前の詞源を富ますといふものと異なり。思想結體の所以を知るを目的とす。思想結體の所以を知るは、之れによりて自家の思想を結體せしむるに便ぜんとすればなるべし。されども若し之れを批評的硏究の意なりとすれば、知力的に思想結體の法則を知ることは、直接に自家の思想の結體を資くるものに非ず。思想結體の唯一方法は情を增進せしむるにあればなり。情を增進せしむるの途は、根本的にはたゞ吾人の情操を養ふにあり。情操を養ふに文章の審美的趣味に着

することによりて果たして能く斯くの如き上達を期し得べきか否かといふことなり。このうち第一點は古人が熱心に論ぜし所なれど、第二點に對しては殆んど疑議の必要を認めざりしものゝ如し。されど吾人の見る所によれば、輕重の分全く顚倒せるものといふべし。」("Elements of Rhetoric"—Whately)といへるもの是れなり。所謂第一點の論は、前にも一言せる如く、夫のアリストートル等古代の美辭學者が、修辭を以て外形の學即ち理の眞妄、事の善惡いづれにも應用せらるべきものと見て、其の惡事謬論に資するの害と之れを破するものに資するの利と、修辭の利害如何といふ問題に行き惱みたるより生ぜしものにして、今日より見るときは、深く論ずるの價値なし。今日の問題は、美辭學の研究は益ありや害ありやといふにあらずして、むしろ如何なる種類の益あるかといふに歸す。而して美辭學を技術と見るものは、直ちに答へて「美辭學を修むれば二大利益あり。一は之れによりて他人の文章を鑑識するを得べし。他は之れによりて己れの思想を最も力強く言ひ表はし得べし。」("Composition and Rhetoric"—Quackenbos)といふ。思ふに文章鑑識の能否はしばらく措き、美辭學によりて思想を有力に發表するを得とは、果たしては事實なるか。換言すれば、區々たる規則を授くるがために幾何か文章の上達を期し得べき。舊來の美辭學を修むることによりて、果たして名文出づべきか。美辭學者はすべて能文家なるか。事實はむしろ之れに反するを如何にせん。ホエートリーが第二の論點は實に此の事實に出發せるなり。即ちこゝに至れば、單に美辭學の效益如何を論ずるに止まらずして、規則を教ふるは美辭學の本意なりや否やといふ根本問題に達す。而して語法學の場合に於けると同じく、こゝにも吾人は、美辭學をして、技術より科學の域に進ましめんとするものなり。技術として、作文修辭の規則を授くるものとしては、其の立つべからざるものなること、事實に徵して明けし。文章の才は規則の習得によりて上達するものにあらざればなり。然らば科學とは何ぞ。

美辭學の本領に關し、最後に一考すべきは其の研究法なり。美辭學は科學(Science)なりやはた技術(Art)なりや。隨つて之を修むるより生ずる效益如何。アリストートル、クォンチーリアン等を始めとし、在來の學者は之れを技術若しくは技術と科學との兩面を兼ねたるものと解せるが如し。近時にては、米のバスコム氏の書に美辭學の定義を下して、「吾人は美辭學を定釋して作辭の規則を敎ふるの技術となす。作辭とは、一定の目的を遂せんがため思想感情を言語に表はすの謂なり」("Philosophy of Rhetoric"—Bascom) といへる類、明かに此の意を示せるものにして、美辭學は修辭の規則を授くるを目的とするなり。また廣く讀まるゝといふ夫の米のヒル氏の書にて「美辭學とは人を動かすに足るべき議論の法則の學なり」("Science of Rhetoric"—Hill) といふ。茲に法則の學といへるが、若し科學といふの義なりとせば、此の說は前者と反對の地にあるものなり。されども其の書また美辭學が內容に關せざるの意を述べんとして、「美辭學は觀察し發見し分類するものに非ずして、寧ろ此等の結果を我れより他者の心に傳ふるの方法を示すものなり。美辭學は智識を智識として用ふるにあらず、力として用ふるなり」。などいへるため、全體の傾向はなほ技術說にありと見られ、ヒンスデール氏の書をして「然り、されども美辭學は修辭そのものゝ過程を觀察し發見し分類す」("Teaching the Language arts"—Hinsdale) といはしむるに至れり。要するにヒル氏は學といふの義を應用化學などいふ範圍に求めて、汎く技術と科學との兩面を混じたる者と見るべく、「凡て價値ある議論は對者の心に或る變動を與へんと期す。(中略)。一切の心の變動は一定の法則に因るものにして、美辭學は技術としては、此等の法則に從ひて思想を傳へ、科學としては、此等の法則を發見し定立す。」といへるもの、最も其の本意なるべし。

更に美辭學が規則を敎ふるもの卽ち技術なりといふに疑を挿めるは、早くホエートリーあり。「美辭學の效用に關してはおのづから二問題を生ず。第一は修辭の上達が一般に世の益をなすか害をなすかといふことなり。第二は人巧的なる規則を編成

こゝに至りて具象の度最も高く、結體的發展最も完全に、人を動かすの力最も大なるを認むべし。

理の具象に關して、前段第一第二の場合に相當すと見るべきものはヴント氏の説なり。氏は想念發展の過程をまづ單複の二段に分かち、單なるものには關係と比較との二面あり、複なるものには、關係に應ずべき綜合と比較に應ずべき分解とありとせり。而して綜合的發展は想像となり、分解的發展は理解となる。想像は卽ち具象的にして、理解は抽象的なり。理解の過程に概念、判斷、思索等あり。此の種概念的のものは、其の中に幾多の事例を概括するが故に「其の概念の代表者として單一の想念を選出するの必要を生ず。斯くすれば其の概念は著るしく明確のものとなる。但しこれと共に其の一想念はたゞ代表者たるに過ぎずといふ意識附帶す此の意識は概して一種特殊なる情の性質を帶び、其の裏面には、他の同資格の諸想念が漠然群起して記憶のまゝ意識内に入り來らんとするの事實あるを見る。而して代表的想念が其の概念の具象的心象なるときは、此の情はますます強きを致す。たとへば人といふ概念に對して或る特殊の個人を代表者とするが如きこれなり。之れに反して代表的想念の內容が其の概念の示す物と全くことなるときは件の情は全く消え去る」と。("Outlines of Psychology"—Wundt.)

第四節　美辭學の科學的地位

第一項　美辭學の效用

美辭學は技術なるか——修辭の利害——規則と法則——美辭學の效益——能文術にあらず——文章修養論の諸意義

尙ほ吾人は前來の論によりて、美辭學の第三の定義を得べし。曰はく、美辭學は辭の美なる所以を研究するの意也。辭とは思想に言語を裝着せるもの也。辭の美なる所以とは、修辭的現象によりて情を刺戟するの謂なりと。されば本書に於ける研究の中心は、修辭的現象にあり。而してこれが結果は必然、情の刺戟によりて美に到達し得るの理を證すれば足る。

逐次に點檢せんとす。これ論理思想の特色にして、其の結果は同を比べ異を分かち、類によりて再び之れを統一するに至る。いはゆる理これなり。されども理は遂に結體の用をなさず。統一は結體と同じからず。統一の理致ある思想が、之れ無きものに比して一層多く人の知力を滿足せしむるは言ふまでもなけれど、これたゞ知るといふの單位のみ、無記のみ。所謂認知の境にして未だ會得の域に入らざるものなり。例へば「人世悲慘の事あるを免れず」といふときは、抽象的なる理を舉げて、極めて明白なり。されど斯くの如く一理に歸納したるがために、「貧人饑に泣く」といひ「善人にして短命なるものあり」といふが如き、一層特殊的なる個々のものよりも、多く人を動かすといふべからず。隨つて玆には未だ此の思想を結體せしむべき修辭的現象の見るべきものもあらず。若しこれを「人世涙多し」といふときは、「悲慘の事」を「涙」とし「あるを免れず」を「多し」としたるため、換喩法、誇張法等の修辭的現象を生ずると共に、抽象的思想の中に種々の情緒を含有し來たり、吾人の注意を惹くこと強くして、單に「人世悲慘の事あるを免れず」といふよりも一層多く結體せるものとなるなり。されば論理的分解的なる思想の結體するにあたりては、或は其の理中の一部たる特殊具象の事例が浮び來たりて之れに合することもあるべく、或は漠然たる情が種々の方面より聚まり來たりて之れを體化せしむることもあるべく、結體の方法と結果とは一ならざらんも、而も等しく具象たるをば失はず。たゞ漠然たる感情の蝟集し來たるのみの境にあるものは、定着したる象を具へんとして未だ具へ得ざるものなるが故に、之れを具へ得たるものに比して、具象の度低きのみ。之れを一層多く展せしむるときは遂に全き具象となるべきなり。隨つて此の場合に於ける具象の特色は、分かちて三段となすを得べし。第一は理が相當の情を帶へる種々の具象想念を、漠然と湧起せしめ居る狀態にして、第二に漠然湧起するものゝ中より明かに一つを具象したるものとして理中に定着せしめたれど、而も尙ほ例として採用したるに過ぎざる場合なり。是等はいづれも中具象と見るべきものにして、彼らにはなほあらはに理が形を存し理中の情といふが如き地位を保つ。第三は此の順序を顚倒して、情中に理を結體せしめ了りたるものといふべく、漠然たる象、乃至實例としての象以上、一種別箇の新具象を結撰し來たり、之れに理を具せしむるなり。

content）とす。しかのみならす、內容の情をば更に個々の想念そのものゝ情（Presentative emotion）と此等が相作用する關係の情(Emotion of relation)とに分かちたれば、結局氏に取りては、情は形式的、內容的、關係的の三と見らるゝなり。("Handbook of Psychology" Vol. II,—Baldwin)

思想の結體分解といふことゝ、具象抽象といふことゝの關係については一言を要するものあり。思想とはもと個々幾多の想念の團結し連續せるものにして、抽象具象の目は、此等個々の想念にも、はた想念團若しくは想念脈たる思想にも應用せらる。卽ち前にも記せる如く、想念の抽象的なるものは槪念の類にして、其が具象的なるは再現的知覺もしくは心象なり。しかも抽象といひ具象といふは、相移るべき程度上の名にして、注意の燒點明かなるがために、意識面の印象の極めて活如たるを具象といひ。其の燒點の亂るゝに從ひ、特殊なる印象の漸次消え去れるを抽象といふ。而して意識に注意の燒點あると否とは、直ちに其が結體の程度に應ず。但し吾人の意識は、一方よりいふときは、皆或る度まで結體して一團の形をなし、注意の燒點的關係によりて、絕えず流轉し行く。苟くも意識し得らるゝ限りの想念は、凡て結體せるものなり。たゞ其の結體の度の極めて微薄なるもの、換言すれば其が一團たるの結束力を失ひて、更に下級なる成分に分解せんとする想念を抽象的といひ、分解的といふのみ。また想念と思想との間には、無限に分合單複の關係あり。具象的結體的なる意識は、常に空間的に多くの想念を一意識の燒點に結束せんとし、「月」といふ一想念を一空間に充たさしむるは勿論、進んでは「月人を照す」といふ二個の複合想念となるも「松風吹きて月人を照す」といふ三箇四箇の複合想念となるも、すべて之れを一眼界に展觀せんとするの傾あり。之れと同時に、漸次單純となるもまた同じく、二箇となれば二箇の想念、一箇となれば一箇の想念を、皆意識の全局に擴充し、一團の形に結體せしめざれば已まず。結體するに堪えざる程貧しき內容のものに達すれば、抽象となり、分解して其の缺を補はんとす。之れより以下、分解の過程に入りたる抽象的意識は、前來のものと相反して、知力の要求する順序により、時間的に注意の燒點を推轉するの性あり。其の推轉の方向はむしろ內に向かひて、一思想の成分を

文章小技也然精神不聚則不工」といへるたぐひ古來文章の研究に心を潛むるものが如何に多く氣といひ精神といふに重きを置けるかを見るべし。氣といひ精神といふは、歸するところ文中の情にして、之れが爲に注意力ますく集中し來たり、盛んに煥發し實現せんとする意識の狀態に外ならず。

而して文章の情といふにも種々ありて、若し之れを分かたば、內容的と形式的との二列を立つるを得べし。內容的とは、個々の思想その者に附隨する情にして形式的とは、其が全般の形式に共通する情なり。例へば「顏ばせ月の如し」といふとき、「月の如し」といふによりて其の顏色の曇りなく輝かしきに應ずる情を刺戟するは、內容的なり。顏容そのものゝ本來有する情なればなり。されど之れと共に、日と顏とを對比して、甚しく懸絕せるものゝあひだに類同點を見出だしたるは、知力活動の形式上、快感を伴ふべき條件にかなへるものにして、形式的なり。而して堰かれし水の流るゝときは、其の勢一層盛んなるが如く、其の比較物の差甚しければ甚しきほど、一種の快感情を之れに帶着し來たるを智識活動の本來とす。其の他論理に合するより生ずる情、目的に合するより生ずる情など、すべて內容の何物たるを問はず、所謂形式の如何によりて生ずる情は、形式的感情と見るべきものなり。是等は後の詳論を要すれども、修辭は是等の中何れかを刺戟して、注意をこゝに呼び意識の結體を完全にせんとするものなり。

（參照）ボールドキン氏は情緒を分かちて先づ特殊的と共通的とにし、殊特的とは、普通いふところの種々の情緒を指し、共通的とは、此等の情緒の根柢に橫はりて、常に存する者、關心の情(Interest)實在の情(Reality-feeling) 信念の情(Belief) 等を指すとせり。而して後さらに其一特殊の情緒を、ヘルバルト派心理學の爲す如く形式的と內容的とに區分し、想念の作用そのものゝ如何によりて生ずるを形式的すなはち活動の情(Emotion of activity)といひ、其の作用する想念の如何によりて生ずるを、內容の情 (Emotion of

を得べし。而して此の情を刺戟するの手段としては、注意の焼點を定むるため論理の明白を要するは勿論、決して單に論理の明白にのみ止まるべからずして、之れに對する注意を深切ならしむるの方法なかるべからず。此の條件にして具備せざる限りは、千萬の論理も以て信念の伴生を必すべからざるなり。信念の伴はざる論理思想は、たゞ空なる饒舌に止まりて、論者が辭を作れる當初の目的にすら違背するに至るべし。心理學者のいふ所に從ひて、智識に二樣ありとせば、一は單なる認知(Apprehension)なり、他は一歩を進めたる會得(Apperception)なり。文章の目的が認知に止まる限りは修辭的現象あるべからず。會得の境に至らしめんとする時始めて修辭の必要を生ず。會得とは、意識上に注意の焼點確立し、結體的關係の極めて顯著なる謂なり。斯くの如き狀態が其の度を進むるときは、信念に達し得べし。世人往々談理の文に特殊の事例又は比喩等を用ふるを以て論理のためなりと解す。されども此は論理の發展と會得の淺深とを混同したるものにして、比喩事例等の修辭的現象は、決して論理そのものを助け長ずるものにあらず、たゞ既に在るの論理を一層明かに會得せしむるの力あるのみ。而して會得は論理の精粗に關するものならず、むしろ想念に情を加へて注意の焼點を茲に呼ぶか、然らずんば、他の平易なる理喩によりて焼點を新たに定むるかの方法に出るものなるを見る。換言すれば談理に修辭的現象あるは一層多く思想を結體せしめんがためなり。論理的分解的なるの極、散漫無統一に流れて注意の焼點を失ふの弊あらんことを恐れ、或は具象の例により、或は既知爛熟の理により、其の過度なる分解若しくは散漫を制して意識を結束せんとするものなり。要するに一切の修辭は、思想の結體を圓滿にせんとするの工風にして、結體せる思想はやがて情を帶ぶること多き思想なり。韓退之の「論佛骨表」が論文として人を動かすの力ありとすれば、其は論理の精密なるがためにあらずして、注意の焼點に情の聚まること強ければなり。『讀書作文譜』に「杜牧之曰、文以氣爲主」といひ「武叔卿曰、文者心之精也、而神所爲也」といひ「袁坤儀曰、

春夜の夢といへば一種艶麗富贍の情を伴ふ、之れを「脆れるもの」といふに合して、最も人の好愛する所のもの、一旦にしてはかなく消ゆといふに、言ひがたき感慨の情を寄せたるなり。結局情の増進を目的とするものに外ならず。また「イデァが個々物の上に現ずるや、唯一時そが覺束なき影を宿せるのみ、圓滿にそが眞相を宿すこと能はざるを以て、個々物は常に變化流轉の中に漂ふなり。」といふときは、「覺束なき影を宿す」といひ、「變化流轉の中に漂ふ」といふことに修辭的現象あり。其の結果は、「覺束なき影を宿す」といひて、此の句が背景として帶着し來たる「月影かすかに水に宿る」などいふ具象の景と之れに伴ふ一種の情趣とを、イデァの個々物に現ずる理に加へ、以て一團の意識を結體せしむるを得るにあり。若しくは「變化流轉の中に漂ふ」といひて、「變化流轉」といふ語が「人世無常」などいふ意味と相連なりて起こす一種の感情と、「漂ふ」といふ語が齎らす具象の景趣たとへば「水の流るゝ中に月影漂ふ」などいふ情意とを、個々物の生滅常なき理に加へて、意識の結體を目的とせるなり。清の唐彪が「讀書作文譜」に「文章既得情理、必兼有跌宕、然後神情搖曳、姿態橫生、不期然而閱者心喜矣、如作樂然。樂之能動人者、非以聲也、以音也、又非僅以音、以餘韻也、樂有聲而無音、有言而無餘韻、能令人快耳爽心否乎。文章亦然、無餘情餘韻使丰神搖曳、則一盇然死板之耳。安能令人心喜哉、故跌宕爲文章最佳境也。」などいへるも、修辭の工風が情趣を先にするにあるの理を道へるものと見るべく、人心の喜びに合すといふにおのづから所謂美の本意を摸索し得たるなり。

修辭の目的を論理の明白に置かんとする論者も、其の意を推せば、情の刺戟を目的とするに外ならざりしことを認むべし。蓋し論理の明白を欲すといふことは、其の思想をして疑似曖昧の嫌ひなからしめんとするの意なり。疑似曖昧を嫌ふは其の思想をして信念に伴はしめんがためにして、疑似といひ曖昧といふときは、意識の不明瞭、卽ち確たる注意の焦點無き狀態を示す、所謂散漫の意識これなり。信念(Belief)といふことにつきては、論を要するもの多けれど、許するに一種の情といふ

目的を情に置かんとす。修辭的現象とは文章の情を增進せんがために生じたる特殊の辭法なり。

（參照）アリストートルは修辭に三種ありとし以爲へらく、一は勸考的(Deliberative)にして、其の職は推奬と諫止とを主とす。次は判決的(Judicial)にして、其の職は告發と辯護とを主とす。最後は論證的(Demonstrative)にして、其の職は賞揚と貶下とを主とすと。("Rhetoric"—Aristotle) 其の見の廣かりしを見るべし。されど要するに奬勵といひ告發といひ賞揚といふたぐひ、根柢に道德的傾向を有するものたるは爭ふべからざるに似たり。

また『文體明辨』に「宋、周惇頤曰、文辭藝也、道德實也。篤其實而藝者、書之、美則愛、愛則傳焉。故曰言之無文、行文不遠」といへるは、道德を實とするの特徵あるにも拘らず、むしろ美の情を主とする修辭觀ともいふべし。

第三項　文章の情附美辭學の第三定義

文章の情と論理の明白――認知と會得――信念――情の內容と形式的――情の分類――具象、抽象と結體、分解

修辭的現象の歸結は情の刺戟にあり。情の刺戟とは、文章をして成るべく多く情趣を帶着せしむるなり。文章に多く情あるは、思想に多く情ある所以にして、思想に多く情あるは、やがて其の思想の一層多く結體したるものなることを證す。思想の結體とは、意識が一團の形を成すにあたり、一層多く實現的となるの謂にして、修辭は言語の範圍にありて最も完全に其の思想を實現するの道なり。

「驕れるもの久しからず、たゞ春の夜の夢の如し」といふときは、「たゞ春の夜の夢の如し」といへるに修辭的現象ありて、其の趣意とする所は、「久しからず」といふ一想念に對する情を強烈ならしめんが爲め、春の夜の夢の短きに伴ふ情を之れに附加したるにあり。尙ほこまかに言へば、此の修辭的現象の價値は、短きものゝ中にて春の夜の夢を擇び出でたるにあり。

ホエートリーが論議（Argument）を文の主眼とし修辭を論理の支派（Off-shoot from Logic）と斷ぜるは、最もよく此の派の見を代表せるものにして、論理的とも名づくべし。今日にては、一切の修辭を論理的なりとは何人も言ふを得ざるべく、現に論理を沒して却りて妙なるの文あるは人の知るところなり。されど文の一種として論理の明白を目的とするものあるも事實なり。哲學者科學者などが普通に用ふる文辭、乃至一般に論文と稱せらるゝものゝ大部は此の目的によりて成る。たゞ斯くの如きは文辭そのものゝ目的にして、決して修辭の目的にあらず。此の點、舊來の修辭論者が動もすれば論結を混亂せしめて、誤謬の結論に陷るの端たり。修辭が其の文の目的によりて左右せらるゝは、言ふまでもなきことなれど、此は文章の究竟的方面ともいふべきものにして、其の中の論理的なるものは、直ちに修辭上の消極を意味し無記を意味す。消極たり無記たるものが修辭上の價値を有すとは、一見矛盾なるが如くにして、實は然らず。消極たり無記たることが、却りてよく其の文の目的に合するときは、吾々はたゞ其の目的に合すといふ一點に立ちて、之れが價値を批判す。即ち此の場合に於いては論理的たり、無記たり、消極たるがために價値あるにはあらずして、斯くの如きものが最もよく目的に適合せりと見るより生ずる情に、修辭的價値の根原を有するなり。通常世人は論理的に文章の整へることを以て直接なる修辭上の價値と考ふるの傾きあれど、此は深く思はざるの弊に基ゐす。尙ほ此の點は後の修辭論に於いて詳述すべし。證するところ、論理に訴ふといふことは、修辭の目的にあらず。

第三は、修辭の目的を以て、美學上いふところの美にありとするの說なり。但し俗に文章の美などいふときは、啻に美學上の美のみならず、善、正などいふ意味をも含みたる場合多けれど、學說としては、ブレイア、ケームズ等の見地之れに近し。審美的ともいふべし。吾人もまた修辭上の結論を美學に求めんとするものなれど、茲には論の順序として、先づ修辭の

之れによりて人を勸說することあらば、修辭は人世に有害のものとなるの恐れなきか。此の疑問よりして更に修辭有用無用の論を生じ、アリストートルをして、「題案の善にして眞なる方面は概しておのづから論を立つること容易に、延いて人を勸說するにも一層大なる力を有し得べし」("Rhetoric"—Aristotle)と斷ずるに至らしめたり。要するに此のたぐひの見地よりするときは、修辭はおのづから倫理的意義を帶び來たるの傾あるを免れず。支那の學者等が文章を見るもまた之れに近く、明の徐師曾が『文體明辨』に「宋、葉適曰、爲文不關世敎、雖工何益」といへる類、修辭の目的を道德に歸せんとするものなるを見るべし。支那はしばらく措き、歐洲の古代に此の種の思想の發生せるは、前にもいへる如く、修辭といふことが、主として演說說敎の類に限られしの致すところにして、固より異しむに足らず。されども翻りて意に訴へ意を動かすとは如何なる意義なりや、また如何なる方法によりて此の目的を達せんとするかと尋ぬるに及べば、勸說論は遂に立脚地を失ふに至る。蓋し意志といふものゝ心理上の解釋は、今日未だ全く確乎不動なりとは言ひがたきも、欲望といひ決意といふが如きものゝ、密に情と連續せるは爭ひがたき事實にして、是等を總稱する所の意志は、ただ人心の活動力の方面、すなはち情の強まるにつれて一步々々現實に移り行く傾斜の謂なりと見るを、最も當たれるの見とするを得べし。少なくとも、外より意志を刺戟せんとするにあたり、直接に交涉し得るものは情にして、意志の變動はただ其が結果に過ぎず。一般に最も情の強きものが最も多く意を動かすは、之れまた明白の事實たり。是れに因りて觀れば、意に訴ふといふことは、獨立せる修辭の目的にあらずして、情を主とするの文に合せらるべきものなり。換言すれば修辭の目的は勸說にありとは言ふべからず、言ふは不可なしといへども、間接の目的なることを忘るべからず。此の意味にての直接目的は、情を動かすにありといふを至當とす。

第二は修辭の目的、論理にありとするの說なり。論理は知を主とするものにして、論理明白なるを辭の上乘なるものとす。

り。而も形式的論理學には形式的論理學の價値あり。美辭學に至りては全く之れと類を異にし、模型を說くの意を以て外形的形式的とはいふを得ざるを見る。修辭の立脚が內容の發展に跨れるの理は、前に述べたる所によりて明かなりと信ず。

第二項　修辭的現象と美

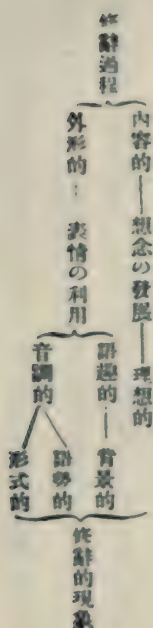
辭の目的――修辭の目的――三樣の見解――勸說的――論理的――審美的――情を主とす

美といふことは、後編に於いて解決すべき重要問題なり。ただ此所にて吾人の假定し得るところは、美とは修辭的過程の目的若しくは結果に外ならずといふことなり。精確にいへば美とは修辭的現象に對する時吾人が感ずる一種の狀態ならざるべからず。美なる文章を分解的に見る時は、修辭的現象を得べし。果たして然りとせば、斯くの如き意義にての美とは如何なる狀態なるか。辭の目的は如何、辭の目的は自己の思想を他に傳へんとするにありとは、何人も唱ふるところなれど、單に自己の思想を傳ふるのみにて辭の目的了はるとはいふべからず。如何に之れを傳ふるかといふ問題に達して始めて修辭學の發足點を得るなり。辭そのものゝ目的と修辭の目的とはおのづから區別あり。古來此の點に關して說をなせるもの尠なからざれども、大凡三樣の見地に歸するを得べし。第一は專ら聽者讀者の意力に訴ふべしと唱へられたるものにして、修辭の目的は他を勸誘し說得するにありとするなり。他の意志を動かすを主とするなり。されば此の種の說を勸說的とも名づくべし。古代の修辭論者は多く此の方面に立脚し、勸說(Persuasion)といふことを修辭の唯一目的とせり。アリストートルは最も博大の見を抱ける人なれども、而も其の學說の全體の傾向は、依然として勸說に重きを置けり。此に於いてか辭と其の所含の意義との關係について種々の疑問を生じ、結局論理と同じく內容の如何に關せずとの論に到達せるは、前にいへる所の如し。而して斯く內容の如何に關せずとするときは、善人が善なる思想を辭にするには不可なきも、惡人が惡なる思想を辭にし、

（參照）　辭の內容外形といふにも種々の解釋あるべきこと、蠢の想と辭との場合に同じ。漠然之れを用ふるにあたりては、想と辭との關係を直ちに內容外形といふこともあり、思想と言語の關係を直ちに內容外形といふこともあり。また是等以外、前來論じたる修辭の方面をすべて外形と見、之れに對するものを內容と見るの意味もあり。修辭に對するものとは、想の現實的發展なり、前にもいへる如く、想の縱に深く發展するを理想的發展卽ち修辭的過程とすれば、其が横に廣く發展するを現實的發展と稱して之れに對せしむるを得べし、平易にいへば、現實的發展とは材料脚色の謂にして、理想的發展とは其が描寫法なり、具現法なり、技巧なり。尙は此の兩面が美術上の關係は最も研究すべき價値あるものと信ずれば、後の條に論ずべし。

古來修辭學は內容の學なりや外形の學なりやといふことに關して學者間に論を立てしもの尠なからず。されど歸するところは、外形の學にして如何なる內容にも適し得るを其の特色とすといふにあり　たとへばアリストートルの「されば美辭學は一箇特殊の題目に熟通するものに非ずして、論理學と同じく、あらゆる題目に適應せられ得べく、而して其の必要のものなることは明かなり。」といひ、「他の凡ての藝術は自家の結論に矛盾を有し得るもの無きに反し、ひとり論理學と美辭學とのみは、之れを有し得。何となれば二者ともに相矛盾せる說に平等に用ひられ得ればなり。」（"Rhetoric"——Aristotle）といへる類、其の一斑を窺ふべし。されどかゝる場合に於て如何なる題目にも通ずといふには、本來二樣の意義あり。一は理法として如何なる題目にも通ずるなり、他は模型すなはち形式として如何なる題目にも通ずるなり。物體はすべて地心の引力によりて吸ひ寄せらるゝといふは理法なり。思想はすべて三段論法によりて運轉すといはゞ模型なり。一は實存の形の如何を問はずして、むしろ種々なる形式の中に吾人か歸納し得る共通法則の存するを主とし、他は實存の形に一定の模範あるを要す。此の意味より見るときは、後者のみは外形的形式的といふを得れど、前者は外形のみの事に非ず、內外の別は前者の場合に要なきなり。而して在來の形式的論理學が近時の學者によりて批難せらるゝ重なる理由の一は此の外形的なる點にあり。思想をあまりに其の內容より分かちて見んとするがために、事實と遠ざかりたるものを生ずるな

に「よくってよ」「いゝわ」などいふ語を加へて、其の少女の身分性質年齢等を背後に髣髴せしめんとするが如きは、此の例なるべし。此の種の表情法は、本來言語の用例特徴等に根ざすものなれば、或は其の根據のあまりに特別的なりしがため、作家の本意通じがたき弊に陥ることもあるべく、或は特別の範圍を脱して既に定着せる語義となれるものもあるべく、又他の音調的表情乃至想念の發展等と混じ易き場合もあるべけれど、本領の別に存することは明かなり。次に語勢的と形式的との二者は、音調的表情に屬するものにして、語勢的とは其の聲音が有する表情の、他の一面なる意義を補助するものなり。語の意義と表情との合致する場合なり。意義が當然帶着すべき情趣と聲音の表情と相結托する例なり。前に「泥」といふ語について言へるところ此の意に外ならず。形式的とは、聲音の表情が意義より離れて、別に聲音の性質配合のみにて一種の形式美を構成し、之れによりて其の語の意義感情を幇助するものにして、文章の口調といひ、詩の律格といふが如きものは皆これに屬す。これまた修辭上には極めて重要の意味を有す。

修辭そのものに內容的外形的の二面ありて、一は想念の發展に因り、他は表情の利用に因ること以上の如し。修辭の動もすれば誤解せらるゝが如き空虚のものにあらざるを知るべし。而して此等の種々なる過程方式に應ずる現象を修辭的現象といふ。美辭學が研究するところは修辭的現象にありといふべし。次の論に入るに先だち、前來の論緒を概括すること下の如し。

此は一に言語の表情に頼るものにして、表情の利用ともいふべし。之れを外形的といふは、修辭過程すなはち思想の發展中、言語を待つにあらざれば實現するを得ざるの階級に屬すればなり。而して言語の表情は、聲音の性質組織によるものと言語みづからの聯想によるものとの二より成ること前に一言せるが如し。更に精しく言へば、言語の表情は其の方法より見て音調的と語趣的とに分かつを得べく、其の效果より見て、語勢的、形式的、背景的といふが如く分かつを得べし。音調的表情とは、前に言語の性質の條下に於いて細論せる如く、音の性質、分量等に由るものにして、語趣的表情とは言語が言語として正當に有する意義と感情との外に、其の語の特殊なる用例等より一種離しがたき聯想を伴ひ、其の聯想は漠然たる情の姿となりて之れに附隨するなり。言語が其の使用によりて自然に添へ得るの光澤なり、由緒なり、趣致なり。これが聲音の表情と異なるは、彼れにありては、聲音が獨立して自家の表情を有し、此れにありては、聲音の表情を離れ、言語として自家の表情を有するにあり。根本については、前者は音調と感情との一致若しくは聯絡に起こり、後者は言語と之れが用例との聯想に起こる。例へば「泥」といふ語の表情は、其の「どろ」といふ音が「どろ〱」「どべ〱」「ぬら〱」などいふ語と相通ずる一種の情趣を有するにあり、故に音調的表情なり。また語趣的表情は俗に野卑なる語、雅致ある語などいふ中の大部分を指すものにして、「ごはん」といへば上品なれど「おまんま」といへば野に感ぜられ、進歩、文明などいふ語は今日多く用ひらるれど、獨り「文明開化」と熟せしめたる語は、意義上極めて雅健なるにも拘らず、一種陳腐といふが如き情趣を伴ふの嫌ひありて、用ふるもの稀れになれるたぐひ、修辭上には重要の意義を有するものなり。

　さらに效果よりいふときは、背景的とは主として語趣的表情の力によるものにして、文章の表面の意義感情には、直接に關するところなけれど、之れが背景に一種漠然たる情趣を隱約せしめて、其の情味を增加せんとするものなり。少女の言葉

といふ情の二大調子をも沒して相聯絡すといふことは、絕えて無し。若しこれあらば、そは特別なる他の目的を有するがためか、或は全く根柢より思想の變轉する場合かの一ならざるべからず。見るべし結體的發展の原理は情の一貫、少なくとも情調の一貫にあることを。而して更に之れを第六項に論ぜし文章の分解と比當するときは、其の關係ますます瞭然たらん。

斯くの如く見來たるときは、思想の發展といふうち、現實的なるものと修辭過程とは直接に相關することなし。たゞ其が既定事實すなはち素材として、論理的因果的といふが如き法則に合せりや否やといふことが、修辭上の最低標準すなはち少なくともいふ消極的條件として彼を修辭過程の一端に交ふるのみ。之れに反して理想的發展は修辭の最高標準なり、積極條件なり。修辭といふ技巧が素材の上に加はるの始めは此にあり。而して理想的發展はすなはち想念結體の順序、廣くいへば直ちに心界に於ける物象の發育なり。漠然として散漫に近き狀態より、一層特性ありて結體せる狀態に進むなり。又は貧弱なるものより富强なるものに進むなり。一層情の力强く、一層燒點的關係完全に、要するに一層結體の度高き狀態に到達するなり。結體の度の高きは、卽ち一團の思想として力强き所以にして一團の思想として力强きものは、最も實現し易く、また最も人を動かし易し。されば苟くも辭に移さんとする程の思想は、特別の事情あるにあらざる限り、之れを言語に定着するに先だちて、如上の發展をなさしむるの要あり。辭を作るに缺くべからざる條件、換言すれば是れなくして完全の辭を成しがたき條件、想をして必ず之れを經由せしむべき條件といふべし。此の意味よりいふときは、想の發展は直ちに修辭の要件なり。吾人は之れを修辭の內容的方面といふべし。

內容的修辭に對して外形的修辭とは如何なることをいふか。他なし、思想發展の頂上に加ふべき言語をして、其が標示する想念的意義の外に感情をも逸せざらしむるの作用なり。啻に逸せざらしむるのみならず、增加せしめんとするの作用なり。

次に第二段なる理想的發展とは如上の想念がさらに或る目的に向かひて發展するの謂にして、現實界に於けるが如く、理を追ひ因果を追ひて横ざまに廣く展開するに非ず、むしろ縦に高く展開するなり。而して其の發展原理は情の一貫といふことなり。論理的關係因果的關係の如何は直接に問ふ所ならずして、情の一貫といふを唯一の軌道とし、同一情趣内にありては、或は現實界に見るを得ざるが如き現象をも呈出せんとす。是れ畢竟其の想念を及ぶ限り現實的に具現せんとする心理上の傾向、すなはち結體作用の理に本づくものにして、想念に停まりて而も現實と其の結體の度を比べんとするの結果は、却りて現實的法則なる論理律因果律をも破らんとするに至るなり。

さて情はもと其の性定着しがたく、隨つて理論の上にても、また事實の上にても、論理律因果律等の如く劃然指摘しがたき事情あれども、其の最廣限界は明かに定め得べし。卽ち快感と苦感と是れなり。快感といひ苦感といふ中に於いても、驚愕の情は恐怖の情に異なり、歡喜の情は愛慕の情に異なるが如き細目あれど、此は實際に於いてすら必ずしも一定せず。諸種の想像と稱するものに就いて見るときは、此の理明白なり。「雪繽紛たり」といふを變じて「雪は鵞毛に似て飛んで散亂す」といふときは、「鵞毛に似て」といふは發展し增加したる思想なれども、其の隨意無方の增減にあらざるは、鵞毛の白く輕き點に對する情と、雪の白く輕きに對する情との聯絡あればなり。されど細かにいふときは、一は寧ろ暖く潔く快しといふ意味を帶び、他は寒く潔く快しといふ意味を帶び、必ずしも全く一致せず、而も其の潔し快しといふ點のみの關係に一貫の軌道を求めて彼此相つらなるを妨げざるなり。更に進みては、其の潔しといふ點すら共通せざるに至り、單に快しといふ一面に聯絡を求め、開展し行く場合あり。「諂笑蜜の如し」などいふときは諂笑と蜜と、情緒の上に聯絡あるはたゞ我れに快しといふ點に止まると見るべく、他に多少微細の類似はありと見得るも、重なるは此の一點なり。されど此の範圍を超え、快苦

托す。甲は論理的關係といふことを唯一の軌道とし、乙は因果的關係といふことを唯一の軌道とす。吾人が日常の思想は此の兩者の何れかによりて進行すべし。これ前にいへる抽象想念と具象想念との活動方式の相違なり。而も兩者みな想念の發展たるに於いては一なり。例へば具象的發展にありて、「我れ明日上野に行くべし」といふ一想像ありとせんに、吾人は更に之れを展開せしめて「我れ明日上野に行き花を見て歸路根岸の友を訪ふべし」と想像するを得べし。されとも若し之れを改めて「我れ明日大阪に行くべし」とし、または「我れ明日上野に行き歸路大阪の友を訪ふべし」とするときは、同一想念の發展にあらずして變換若しくは破壞なり。何とならば同一因果の軌道外に逸出すればなり。また「運命は盲目なり」といふ一抽象思想ありとせんに、之れを變じて「運命は禍福を濫りにするが故に盲目なり」といふときは、是れ論理的發展なり。されど若し之れを「運命は聰明なり」とし又は「運命は禍福を誤らざるが故に盲目なり」とするときは、或は變換となり或は破壞となりて同一軌道内の發展とはいひ難きに至る。

（參照）　論理律と因果律との對照は、一は人知活動の理法にして、他は智識經驗の上に現じ來たる自然の理法なりとの義にして可なり。因果律といふには尙ほ多くの論を要すれども、玆にはむしろ蓋然律（Probability）といふ程の意味なり。吾人が事物の進行を自然なりと感ずる時の根據たり。此の理に關してはホエートリーの言に吾人の意を得たるものあり。曰はく「固よりして果を推定する蓋然律の一種は詩人小說家等の目標とするところたり。而して此等の場合には往々自然的（Natural）といふ語を以て之れを表す。詩人小說家等は、必ずしも他の信念を喚起するを要せざるが故に、原因をば己が欲する儘に自由に立つるを得れども、之れが結果をば必ず自然的に生起せしむるを要す。卽ち或る人物を描きたるのち之れをして種々の事件を惹き起こさしむるの次第は其が現實界にありて、必ず實か成り行くべしと推定せられ得るが如きものならざるべからず」と。（"Elements of Rhetoric"——Whately）

移らざる狀態より移り了れる狀態とならんとする經過作用を主とす。前者を靜的といはゞ、後者は動的といふべく、一は結果若しくは材料すなはち素材について研究し、他は之れが手段すなはち技巧について研究す。

辭とは想の一層定着せる形を裝へる者に外ならざるが故に、想の辭に移る過程はまた想の發展なりと謂ふを得べし。想は吾人の意識內にありて幾段にも發展するを得べく、また其の如何なる階段に於いても、之れを言語文字に定着するを得。而して想に知的方面すなはち想念と、情的方面すなはち感情との二つあることは前に述べたり。想の發展は想念の上に其の經過を指摘し得べく、或る原理に本づける想念の單複がこれに相當するなり。玆に或る原理といへる所以は、若し單純なる想念が複雜となれりといふのみにて、是れに一定の理法なくんば、吾人の想念は隨意に變轉して、以て發展なるか變換なるかを分かちがたければなり。發展とは同一物が一定の軌道內に於いて一定の原理によりて變じ行くものなること勿論たり。

またこゝに想念の單複といへるは、單純の想念が複雜の想念に變ずるの謂にして、たとへば「運命は盲目なり」といふときは、「運命」「盲目」「なり」の三想念を有するのみなれど、「運命は禍福を濫りにするが故に盲目なり」といふときは、「運命」「禍福」「濫りにす」「盲目なり」といふが如く、想念の數增加して原意は同一ながらも異なる想となれるの類、これなり。其の他想念と感情との二面より成る所の想の發展を、單に想念の面のみより見るといふは、畢竟感情そのものを想念より別かちて研究することの殆んど不可能事たるによると、事實又二者は相結びて進退し、一を考ふれば他はおのづから之れによりて知らるゝとの理由による。さて此の點より見るに想念の發展といふに二段あり。第一は現實的にして第二は理想的ともいふべし。先づ第一段なる現實的發展より見んに、現實的とは事實に合すべき性質を有するの謂にして、之れを細別すれば、さらに抽象的と具象的との二となるべし。抽象的なるものは發展の原理を論理律に托し、具象的なるものは之れを因果律に

展して複雜となれるもの、第一は第二の具象的なるまゝ發展して複雜となれものなり。而して第三に對するときの辭は第一に等しく、第二第四に對して辭といふときは、言語の外さらに想の發展したる部分をも之れに含め「鷺毛に似て」「鶴氅を着て」「盛んに」「雪を被て」などをも辭の部に屬せしむるなり。此等概してみな一分の眞理を有せる見なれども、研究の精しからざるため混亂を生ずるを常とす。尙ほ辭の內容外形といふときは、さらに別種の意義を帶び來たるが故に、次に併せて之れを明かにすべし。

第三節　辭の美

第一項　內容と外形

研究の三方面――想の發展が卽辭也――想念發展の二面――想念の發展と表情の利用――表情の三種――修辭的現象

美辭學の研究するところは、辭の美にして、辭は思想を內容とし言語を外形とする兩面の結合なりといふ。そもそも辭の美とは如何なるものなるか。美辭學が研究せんとす目的物は何ぞ。單に辭の美といふときは、詩歌小說の類みな辭にして、ひろく是等の美を研究するも美辭學の領域たるに至るべし。美辭學は批評と異なり、また美辭學は美學にあらず。思ふに辭の內容外形といふに尙ほ若干の論あるべし。

辭の美を研究するに三方面あり、一は辭を其のまゝ一團不可分の製作品と見、之れについて其の美を研究するものなり。次は辭中より想のみを取り出でゝ研究するなり。而して想といふには種々の意義ありて、通例極めて漠然と唱らるゝ研究導せらるゝ研究法に屬す。されども兎も角かくの如き一種の研究方面ありと假定せば、之れと第一者とは、共に美學的といひて不可なかるべし。之れに對して最後なるを美辭學的といはんか。範圍は想の辭に移る過程そのものにあり。美學的研究方面は未だ辭に移らざる、むしろ辭より引き放ちたる狀態、もしくは辭に移り了りたる狀態を主とし、美辭學的研究方面は、未だ

詮ずるに美辭學が材とするところの辭とは想を包含したるもの、すなはち内容あるものなり。此に於いてか吾人は美辭學の第二の定義に到達す。曰はく美辭學は辭の美なる所以を研究するの學也。辭とは思想に言語を裝着せるもの也。とさらば美辭學は想を支配するものなるか、內容の學なるか。これ次の節に於いて答ふべき問題なり。

（參照）辭と想との眞の關係は前來の論の如し。されど世上普通に辭といひ想といふ意味ば甚だ雜多なり。試に下に其の重なるものを擧げんに、例へば茲に「雪は鷺毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を着て立つて徘徊す」といふ文章ありとせんか。第一は此の文章其のまゝの想念感情を我が腦中に描き取り、之れを想と稱して、辭とはたゞ之れを實にする言語のみとするにあり。此の場合の想は「雪の鷺毛のやうに降りしきつてゐる中を人が鶴の羽衣でも着たやうになつて立ちもとほつてゐる」といふにありて辭と想との差はたゞ定着したる言語の有無のみに止まる。裝體と裸體との差なり。第二は所謂落想着想といふが如きものにして、第一の想の中より更に其の皮肉を去りて、骨格のみを取るなり。「雪の降りしきる中を人が眞白になつてさまよふ」といふにありて、雪の降りしきるさまを鷺毛の如しと見、人の眞白に雪を蒙れるさまを鶴氅を着たりと見るが如き思想の働きなきなり。此の場合に於ける辭と想との差は啻に言語の有無のみならず、原初の單純なる思想と、發展したる複雜の思想との別に基く。而して單純と複雜との境界の如きは漫然として定め難きなり。以上はなほ未だ具象的たるを失はざれど、第三、更に第一者を分解して裸體をたゞ四肢五體の集合としてのみ見る場合あり。第一者は具象的裸體想なれども、此に到れば抽象的裸體想となるなり。文字のまゝの意義のみを空に取り出でゝ、其の文の想と稱するなり。第四は之れより一歩を進めて、抽象的裸體のまゝ其の枝葉を去り根幹に歸せんとせるなり。最も單純にして而も空に知の上にて知るのみのものとなる。たとへば人が雪の盛んに降る中を雪を被て徘徊すると知るのみにて、目のあたり其の景趣を思ひ浮ぶるにあらざる理知の上の狀態は第三に當り、さらに之れが論理的に單純にし、「雪降り人徘徊す」といふ命題のみとするときは、これ第四者なり。第四は抽象的理知的の落想にして、第二は之れが具象的になれるもの、第三は第四の抽象的なるまゝ發

辭に移るの際は、不隨意的にあらずして隨意的なることを忘るべからず。此は前に思想の言語に連なる方法の必然的ならずして偶然的なることを論ぜると相關するの事實にして、之れにも二方面あり。吾人は隨意に其の想もしくは漠然たる辭の狀態に停留して、殊更に之れを辭とするの要なき場合あると共に、また隨意に、何時たりとも之れを辭に移すことをも得べし。これ隨意不隨意といふ一面の意義なり。但し此所には、隨意なるの底に、自然の傾向として、其の想を成るべく辭にせんとするの不隨意的の現象もこれあり。此は思想の情の強まると共に、之れを發動神經に移して實現せんとする心理上の法則によりて說明せらるべきもの、固より異しむに足らず。次に隨意不隨意といふ他の一面は、想の辭となるにあたり、裝着すべき言語が、想の自然に溶解し出づるが如き不隨意的必然的のものにあらずして、隨意に其の人の思量選擇を容るゝの餘地あることとなり。これまた隨意的といふも、よりて以て逆に想を變更し破壞して可なりといふにはあらず。標準は飽くまでも想に置きて、一々之れに反照し、甲乙幾多の辭法言語中、最も其の想に適すと信ずるものを商量し來たるの自由ありといふなり。時としては、想がさながら或る神祕の關係によりて、おのづから言語に連なるが如く感ぜらるゝこともあれど、これただ情素多く、意識の結體力盛んにして勞を要せずして輕重前後の別明かに、其の重きもの前なるものより順次に發現し來たるの謂にして、心理上如法の事實のみ、其の際に思量を要すると要せざるとは、度の差たるに止まる。されば世人が往々にして修辭上に懷ける一大偏見は、想を貴びて辭を後にすといふ名の上に、辭を想の必然不隨意の發表とし、一は上の如く一は諺の如く說く點にあれども、これ一は凡て思想の實現に傾かんとすといふ事實を誤り認めたるもの、一は結體の度高き想が商量選擇を要せずして比較的容易に實現すといふの事實を誇張したるものに過ぎざるなり。尙は是等の論は後に明かなるべし。

ち辭を得、想と辭とは前後の關係によりて對立せしむるを得べし。ひとり抽象的想念にありては、初めより言語なきの思想あるを得ざるが故に、辭想の對立なきなり。約言すれば、辭と想とは、別かち得る場合と分かち得ざる場合とあり。漫然之れを思ふとき、吾人が辭と想とを分かちて處理し得るが如く感ずることゝ、之れに反して兩者の間には分かつべからざる關係あるが如く感ずることゝの矛盾せる二思想を有するは暗に此の二面の事實に觸れたるなり。

されど論はこゝに止まるべからず。此の二面はまた一に歸す。抽象的想念の場合に於いて、吾人が言語と思想と初めより相即せりといふ者も、實はたゞ、是れ無ければ何事をも思議し得ざるがため、假りに材料とし符號として之れを用ひたるに止まり、極めて漠然の辭たるを免れざるなり。若し之れを口にし又は筆にせんとするにあたりては、更に其の漠然たる辭を、整へる辭に琢磨せんことを欲す。琢磨せられて整へる辭を成すに至り、はじめて眞の辭たりといふべし。之れを具象的想念の例に比するに、前者の整へる辭といふもの正に後者の普通に辭といふものと相當し、前者の漠然たる辭は、未だ辭たるの資格無きこと後者の想と名づくるものに異ならず。たゞ異なる所は、一に言語といふ符號を思想の材料とし、他は符號を藉らずして直ちに心象を之れが材料とせるにあるのみ。正しくいふ所の辭と、正しくいふ所の想もしくは漠然たる辭との間には、明かに區界あり。一より他に移るの工風を修辭作用ともいふべく、移りたる後のものを辭と稱す。但しこれまた必ずしも實地に口に發し筆に上すを要すといふにあらず。口に發し筆に上せば、記憶を資けて、眼界一段明瞭なるを得るの便宜はあれど、想を辭に移すといふの意義は想像的のものを實現的のものにすとの謂ひに非ず。實の聲を假らず、實の字を假らずして、辭の存立し得るは勿論なり。

辭の想とが劃然區別し得らるゝものなることは上の如くなれど、美辭學上に於ける兩者の關係は尙ほ之れに盡きず。想の

の其の下に徘徊する樣をも思ひ浮べ得べし。而して後「雪降り人徘徊す」といふ辭を作る。卽ち言語あるに先だちて、裸體なる思想の存立するを知るなり。故に若し之れを辭以外の想と見るときは、辭と想とはおのづから區分せらる。吾人には先づ想ありて、而して後之れを辭に移すなり。これを尋いで注意すべき事實となす。

されど普通に辭と想とを分かつといふときは、二重の意義を有す。一は左右に、空間的に之れを分かちて、想なき辭と、辭なき辭と初めより併立し、二者を貼合するに及びて僅かに文章を成すとするなり。他は之れを前後に、時間的に、まづ辭なき裸體の想ありて、而してのち之れに語の衣服を裝着するとき、文章をなすとするなり。前者は本書の立脚地よりいふときは矛盾の說となる。何とならば、辭とは言語と思想とを合したるものにして、之れが更に空虛なる外形のみとして存立するの理なければなり。左右に、空間的に併立し得るものは、思想と言語とのみなること、上來の論によりて知らる。後說は正し。たゞ裸體のまゝなる思想に裝着せしむるものは言語もしくは語にして、決して辭ならざるを忘るべからず。若し誤りて想に辭を裝着すと考ふるときは、忽ち前說の弊に復りて、理論の混雜を來たすべし。要するに思想先づあり、之れに言語を裝ひて、こゝに始めて辭をなす。未だ言語を裝はざるの前の思想を取りて辭と對立せしむるときは、想と辭とは前後の關係となる。想よりいふときは辭無き想に非ずして、辭を成さゞるの想あり。辭よりいふ時は想無き辭といふものゝ存せざるは勿論、未だ想を成さゞるの辭といふものもあるべき理無し。辭と想との別は、服裝せる身體と裸體との關係の如し。辭はただ裝へる想のみ。裸體と之れを裝ふべき衣服、乃至袷の裏と表との如き關係にはあらず。是等はむしろ思想と言語との對立に比すべきものなり。

以上の論を約りて前の二事實に配せんに、具象的想念はよく此の理にかなひて、初めに裸なる想あり、次いで裝へる想卽

第八項　美辭學上の辭と想附美辭學の第二定義

抽象的想念に裸體なし――具象的想念と言語――想と辭との二面的關係――漠然の辭と想――辭想の隨意關係――修辭上の謬見――第二定義

辭は言語と思想との貼合せられたるものなること、前段の論によりて明かなり。すなはち、辭といへば既に其のうち想を含みて、重ねて辭と想、外形と內容といふが如き對偶は存し得ざるの理なり。而も事實に於いては、世人の文章を論ずるにあたり、辭と想とを分かちて、批判の標準を二にせんとするの傾きあり。思ふに美辭學上に於ける辭と想との關係論は、言語と思想との別のみに盡きざるものあるべし。

吾人は思想に抽象的想念と、具象的想念との二面あることを言へり。而して其の抽象的想念には心象の描くべきもの絕無もしくは極めて微薄なるがため、之れを明かに思念せんとするにあたりては、一々直ちに之れが標目たり符號たる言語を倣ひ來たらざるを得ざるの理も、人々の經驗するところなり。この際に於ける我が意識界は、さながら言語名目の離合なるが如き感あり。言ひ換ふれば、言語と思想とは全く一にして、言語なければ以て思想を運轉し得ざるなり。言語以外に思想なく思想以外に言語なきなり。固よりこゝに言語といへるは、必ずしも之れを口に發し筆に上すを要せず、中樞部のみにて聽き得る、想像上の言語に止まりて不可なし。はた口にし筆にするも、內より自然に漏れ出づる獨語體のものなるべし。さて斯くの如くして、抽象的想念には、初めより全く言語なく外形なき裸體のまゝのもの無しとするときは、こゝには辭と想との別は立つべからざるを見る。これまづ注意すべき一事實なり。

具象的想念に至りては、前者と趣きを異にす。吾人は言語名目の助けを藉らずして、直ちに雪の降る樣をも思ひ浮べ、人

第五、されば言語と思想との相應ずる場合は、言語が章を成したる時に限る。此の場合にありては、思想即ち言語にして、言語即ち思想なり、内容と外形とは分かちて言ふべからず。是れを辭と稱す。

第六、辭の内容たる思想についてはたゞ、知力的論理的なるものを最も言語といふ外形に結合せしめ易しとす。換言すれば、辭は知力的論理的なるを普通とすべく、之れに感情的方面を加へ得るの度に從ひて、完全に近きものとなる。言語と思想とは辭の範圍に於いて相即せんとするの傾ありといふべし。

（參照）論理的思想は、言語の助を藉らずしては、完全に發展せしめ難し。吾人が日常心の中に運轉する思想にても、殆んど言語その者と區別なく、意識は直ちに言語の團體なるかの如く感ぜらるゝものあるは、竟畢其の思想の知力的概念的なるが故にして、具象的想念に近づくに從ひ、言語を忘れて實物に接するが如く思ひなさるゝに至るを例とす。

マクス、ミュレルが「凡そ一定の意義ある諸觀念が相寄りて列をなすに當り、全く獨立して別に聲音の列を成せるものゝ來たるを待ち、こゝに言語と思想と相觸すといふが如きことはあることなし。……思想はそが推理的なる限り言語若しくは符號無くしては成立するものならず。」("The Science of Language"――Max Müller)といへるは、論理思想の場合に相當すと見るべし。ホイトニー氏の論はむしろ之れが反對の方面を言へるものにして「言語はたゞ口によりて思想を傳ふるの一手段たるに過ぎず。言語は思想にあらず。また思想は言語にあらず。また兩者の間ことさらに神祕不思議の關係あること吾人の心身の際などの如きものにあらず。隨つて一は他によるに非ざれば存立し發現し得ずといふものならず。言語學者哲學者などの往々言語と思想とを相即不二と見るは、此の上も無き誤謬にして且つ繆たり。」("Languages and Study of Language"――Whitney)といへるは、言語と思想との必然的關係を排するの意と、思想なき言語、言語によらざる思想の存し得ることゝを明かにせんとせるものなり。

て、一の重要問題とせり。されども言語が思想の表出機(The vehicle of thought)なることは、何人も拒まざる所にして、固より當然の事たり。たゞ其の思想を如何に發表するかといふこと、隨つて思想卽ち言語也といふを得べきか否かといふことを論の中心とす。此等の點に關しては、前數項の論におのづから其の端緒を得たりと信ずるがゆゑに、こゝに、之れを概括して、兩者の關係を瞭然たらしめんとするなり。

第一、思想と言語との間には、必然的關係なし。「松」といふ思想の活動につれて、必然發し出でたるものが「まつ」といふ聲音なるにあらざれば、隨つて「まつ」といふ語によりて何れの國何れの時代の人にも同一思想を懐かしめ得べしといふべからず。是れ言語の起原論が證せるところ。此の意義よりいへば、言語は直ちに思想にあらざるなり。

第二、思想中には身振、繪畫などによりて直ちに表せらるゝものありて、吾人が之れを思念するとき必ずしも言語の助を要せざることあり。卽ち言語と思想とは範圍の大小を異にし、思想あるところには必ず言語ありといふべからず。此の意味より見るも、思想卽ち言語にはあらざるなり。

第三、思想といふにも種々の方面あること、これまた前に論ぜしところなり。假りに之れを知、情の二面とするときは、言語は普通たゞ知的方面の符號たるに止まりて、抽象的たるを免れず。隨つて完全なる思想の發表機といふべからず。此の意味よりいふも、思想と言語とは相卽せしむべきものにあらず。

第四、言語といふにも單語の場合と文章の場合とありて、語は思想を有せず。蓋し吾人の思想は前にいへる如く、必ず或る度まで複合して存立す。故に眞に思想を表出せんとせば、其の言語また必ず團結的ならざるべからず。此の意味よりいふときは、思想に應ずるの言語は章にして、語はたゞ章の下に思想を表し得る材料たるに過ぎず。

以て我が國語に擬しがたきものあり。語の一致とは、語の性、數、時、人稱等の前後相一致する謂なれども、我が國語には其の場合少なし。語の支配とは、一語が他語の格を左右するの謂なれども、是れまた我れにありては、洋語と趣を異にすること多し。語の順序とは主語は動詞の前に列し、客語は動詞の後に列すなどいふ順序にして、固より我が國語にも或る度まで一定の順序なきにあらざれど、其の内容は全く異なれり。其の最も著るしきは、彼れにありては客語の前に動詞來たり、名詞の前に前置詞來たり、我れにありては、客語の後に動詞來たり、名詞の後に前置詞來たるなどの類なること、何人も知るところなり。たゞ我が國にては名詞と動詞との順序極めて自由に、殆んど一定の習慣的法則を成さゞるが如き觀あり。例へば「僕は大阪へ行かう」といふも、「行かう僕は大阪へ」といふも、「僕は行かう大阪へ」といふも、「大阪へ僕は行かう」といふも「行かう大阪へ僕は」といふも「大阪へ行かう僕は」といふも、勿論其の間多少の熟不熟はあれど、句法のみよりいへば、凡て自由なり。是れ一方よりいふときは、我が國語に修辭上の利ある所以にして、一は語尾又は助語の變化豐かなるの結果たるべし。言ひかふれば、此の際言語の順序に依頼して意義を區別するの習慣則を要すること少なく、順序は如何に轉倒するも、語みづからの變化によりて意義を明示し得ればなるべし。此の例は曲折に富める獨逸語などの場合にも幾分か見るを得べく、英語は最も此の便宜を缺くに似たり。是れ主として前にセース氏の言に見えたる、英語の分解的性質の然らしむる所にして、分解的といふも、此の點よりいふときは、孤立的なる支那語などの多數と擇ぶところなきなり。即ち意義は偏へに語の位置順序によりて定まるが故に、一たび其の順序を變ずれば原意全く辨れがたきに至るの恐れあり。

第七項　思想と言語

言語は思想の表出機也── 思想即ち言語に非ざる四理 ──言語即ち思想なる二理── 辭

思想と言語との關係については、由來言語學者も之れを論じ、修辭學者も之れを論じ、心理學者論理學者みな之れを論じ

が文體論の初めに英の言語學者レーサムの言を引きて「レーサム博士が世に行はるゝリンドレー、マルレーの教科を批難して、訛語粗音は避くべき弊なれども、之れを避くるの途は習慣によりて得らるべくして、規則によることなしと言へるは至當の言也」(“Philosophy of Style” ——H. Spencer)といへる、又米のヒンスデール氏がホイトニー氏の英語法の序に「英語法研究の主要目的が英語を正しく使ふことを教ふるにありとするは、思ふに謬見にして漸次棄てられつゝあるの說なり。之れに代はりて根據ある說と見るべきは、語法を以て言語の省察的研究とするにあり。而して其の研究によりて得る所は一ならんも、訛誤なき文を作るといふが如きは、むしろ第二位に立つべき一小目的にして、不必要といふには非ざるも間接に得らるべきものたり」といへるを引き、語法研究の利は觀察力の養成と論理的習練とにありなどいへる、(“Teaching the Language” ——Hinsdale) 皆謬とすべし。

英語法の文章論としては英のベイン氏の說きかたを見るに、先づ文章とは完全の意義を成せるものなりと解し、文章の普通且つ整然なる形式は一事物を肯定し又は否定するにありとして論理的說明に近づき、隨つて文章を主部從部に分かつこと例の如く、此の兩部が唯一つの主語と一つの定動詞とより成るを單文章(Simple sentence)とし、此の外に定動詞の數の加はるものを混文章 (Complex sentence)とし、二つ以上の單文章の結合せるものを複文章 (Compound sentence)とし、其の他主句從句を說き緊縮文章、省略文章等を說くことも普通の文法書と異ならざれど、文章の複雜になり行く次第を叙して、一名詞と一動詞とのみなるを裸文章(Naked sentence)とし、次には客語を塡裝せるもの、次には主語客語を形容詞によりて擴張せるもの、次には副詞、副詞句によりて定動詞を擴張せるものといふが如き、叙法を取れるは簡明也。又文章の修理要件としては、マルレーなどにある如く、語の一致、語の支配を說ける外語の順序といふことをも加へたり。(“A Higher Grammar” ——Bain)

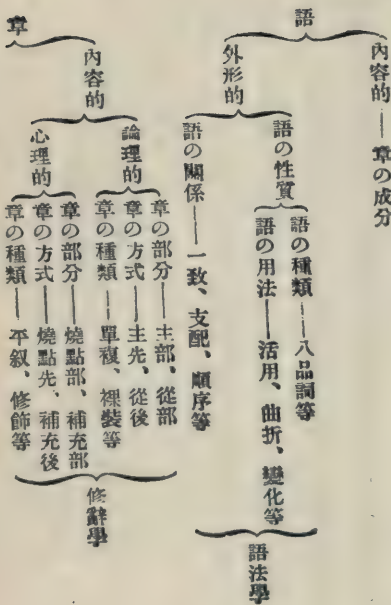
吾人が取るところの文章の解說は、尙ほ後の本論に於いて論ぜべけれど、以上の說によりて其の論理的方面を窺ふを得べし。ひとり語の一致、語の支配、語の順序等は、詞論すなはち國語の習慣に因るもの多きこと上にいへるが如くなれば、直ちに英米の理法を

（外形的——語の結合

要するに語法學上より言語を見るときは、國語の習慣法則に合したるものといふに歸す。美辭學は或る程度まで之れを措定して立つべきなり。

（參照）西洋にて語法學の祖は羅馬のダイオニシアス、スラックス（Dionysius Thrax）と稱す。降りて同じく羅馬の修辭學者クヰンチリアンも語法學について論じたり。語法學を正しく談話するの術と解し又思想の範圍にまで入れるは早く此の頃よりのことにして、クヰンチリアンは「語法には正しく話すの術と詩人の說明（詩文の作法）との二部あるのみならず、更に其の裡に正しく讀むの法及び判斷の作用をも包含す」（"Institutes of Oratory"——Quintilian）といへり。今より百年前後に於いて英米の語法界に最も行はれたりしリンドレー、マルレーの語法書の如き、冒頭まづ英語法を釋して「妥當に英語を話し及び書くの術」といひ、而して語法を綴字論（Orthography）詞論（Etymology）文章論（Syntax）詩形論（Prosody）の四部に分かてり。綴字論とは字音、綴音、語音を精確にするの法を說き、詞論は語の種類、活用、變化を說き、文章論は語を文に結合して誤りなき排列をなすの法を說き、詩形論は、讀法を正し、詩句を作るの法を說くとの解釋なり。さればクヰンチリアンが正しく話すの術といひ詩文の作法と正しく讀むの法といへるは、以てマルレーが語法學の全部を掩ふを得べく、後の語法學が語法を言語上の論理學に外ならずなどいふは、クヰンチリアンが判斷の作用をも包含すといへるに合す。マルレーはまた語法學を一般的と特殊的とに分かち一般的語法（Universal grammar）は凡ての國語に通ずる原理を說き特殊的語法（Paiicular grammar）は之れを一國語に應用するの術を教ふとせり。（"English grammar" Vol. I.——Lindley Murray）マルレー以後に於ける舊式の語法書は大抵之れと組織を同じくし、夫のクワツケンボス（Quackenbos）の語法書などに一々規則を擧げたる者あるが如き、其の例なり。此の種の語法反對して科學的態度を取らんとせるは、言語學者などの中に多く、例へばスペンサー氏

ふ論法思想の形式に基くものと混入するに至る。されば語法學の領域を嚴にせんとせば、文章論中の一部を詞論に還附し、一部は之れを修辭學に歸入せしむべし。在來の語法學は自家の職能以外の事を爲したるものなり。若し文章論の大要を攝取するの要あらば、其はたゞ補助學、參照學としての範圍なるべし。思ふに上の如き混同の生ぜし所以は、主として日常平凡の言語が、多く論理的、平叙的なるため、平凡と法則とを混じて、論理的のものを直ちに言語の法則なるかの如く思惟せるに因る。言語の法則は決して論理的形式を以て擬すべからず。言語研究の一半は國語的習慣によるべし、語法學是れなり。他の一半は心理的法則に基くところの美辭學に相當す。而して前者が一段を踰ゆれば言語學の素材となり得ると同じく、後者の還沒するところは美學ならざるべからず。

下に前來の所説を圖示すれば

やがて結體の度の弱き所以にして、結體の度の弱きものは一層分解し易く、動もすれば知力的、論理的態度に入らんとす。此に於いてか、日常平凡の思想には、概して知力的形式行はれ、心理的法則よりすれば「寝やう僕は」といふべきを、「僕は寝やう」といひて異しまざるなり。英語などの例に見るときは、此の理ます〳〵いちじるし。日本語にては、論理的よりもむしろ心理的に傾くの趣ありて、一人稱の言語など、必ずしも主格を要せず、直ちに燒點部たる「寝やう」といふ語のみを擧げて、よく通ずるを見る。而もなほ「僕寝やう」「我れ行くべし」等の語を、「僕」といひ「我れ」といふに重きを置くの意ならずして用ふることもあるなり。而して此等話談の場合には、通例音度音長等の表情を利用して燒點部の所在を示し得れども、文章の場合には、此の便利なきが故に、往々語義の明瞭を缺くのためしあり。之れを避くるの工風はすなはち修辭のつかさどる所に外ならず。又何れを燒點部と見定むべき特殊の修辭的現象もなくたゞ論理的順序に從ひて平叙せられたるのみの言語文章に對しては、心理的法則よりいふときは、前列たる主部に重きを置くを當然とすれども、事實は卻りて後列なる從部に燒點を求むるの習ひあり。此は初め主部從部の別判然せざるにあたり、吾人の意識が前後の關係を回顧して、意義の上より其の一章の最要部、すなはち目的を包含する部分に注意を集めんとするの結果にして、約言すれば特別の事情あるほか、從部が常に其の辭の結論、すなはち到達點を示し、主部はたゞ其が發足點を示すを例とするに因れり。是れに因りて之れを觀るに、論理上の主部、從部乃至その排列方式と心理上の燒點部補充部及びその排列方式とは常に相一致せざるのみならず、全く轉倒せんとするの傾向すらあるなり。

從來の語法書中、文章論と稱する一節は、實に文章に論理的研究を援助して、之れに前の語法中の一部を加へたる者なり。此に於いてか、文章論中には詞の一致、支配、順序といふが如き、國語上の習慣則と、主部、從部、單文章、複文章などとい

か。論理思想の言語にあらはるゝ形式は、げに主部從部の排列なるべし。されども唯これ思想の一部のみ。吾人が有する言語文章の大半は、此の意味よりいへば非論理的なり。主部なくして從部のみなる章あり、從部なくして主部のみなる章あり。是等を一々主部從部の省略せられたるもの、不完全のものとして主部從部完具の體に引き比べんとするが如きは、是れ取りも直さず形式的論理學の爲すところにあらずや。語法學が此の際に言ひ得るところはたゞ、章には主部、從部あることあり、其の一を缺くことありといふに止まる。而も此れすらすでに國語そのものゝ習慣にはあらずして廣く論理思想の形式より打算したるものなり、論理の語に攀緣して僅に言ひ得るものなり。

又心理的に章を研究するときは、部分に燒點部と補充部との別を得べく、方式は必ず燒點部を前にして補充部を後にすといふを得べく、種類は平叙的修飾的といふが如く大別するを得べし。燒點部とは前にもいへる如く、一團の想合中注意の燒點に立てるものを表するの言語なり。補充部とは、燒點に隷屬して一團の思想を成す諸想念の稱なり。之れが言語にあらはれて章をなすの方式に、燒點部を前とし補充部を後とせるは、心理上の語法に基けるものにして、普通注意力の強きところには情念の伴ふこと強く、情念の強きものは最も早く發動神經に移らんとするの傾向あればなり。例へばこゝに「雪降る」といふ思想ありとせんに、若し冬の日の場合ならば「雪」といふよりも「降る」といふに注意傾きて、單に「降つて來た」又は「降つて來た雪が」などいふべし。之れに反して其の事若し夏の日にてもあらば、「降る」といふよりも「雪」といふに注意を惹きて、單に「雪が」又は「雪が降つて來た」などいふべし。これ皆心理上の法則なり。

然るに注目すべきは、心理的と論理的との相交渉する場合なり。情念の強きもの、即ち結體の度の大なるものに、如上の心理的法則の行はるゝは言ふまでもなけれど、日常は却りて情念の強からざる意識を有すること多し。情念の強からざるは

前者は心理上の事實を一旦解き放ちて別なる自家の尺度に照さんとし、後者は事實のまゝの理法を研究せんとす。而して心理上の事實とは、凡て想念が注意の焦點的關係により一團に結體せる狀態をいふものにして、吾人が日常の思想は強弱に拘らず、皆かくの如く結體して存するなり。細かくいへば、注意を惹くことの最も強き想念が、最も明かに意識の中心となり焦點となりて、以下之れを補充する幾多の想念が、強弱の度に從ひ相次第して之れに結體し、こゝに一團の思想を成す、中にも、興味深く、情素の強きものは焦點的結體の最も密なるもの、即ち注意を惹くことの最も強烈なるものにして、情素の薄弱なるに從ひ、注意散漫となり稀少となりて焦點の結體力を減ず。されば心理上の事實を分解すといふときは、結體力たる焦點的注意を引き去り、之をして個々の成分想念に解體せしむるの謂なり、焦點的よりもむしろ散點的に注意を分布するなり、諸想念をして、階級的よりも同列的に結合せしむるなり。而して此の同列的結合の過程はすなはち形式論が示すところの、知力的方式に外ならず。たとへば「三つ番だ」といふは心理的原理にかなへる語にして、よく結體せる意識の焦點を示せるものなれども、論理的にいふときは之れを知力の上に分解して「三つ番は近火の警報なり。彼の鐘聲は三つ番なり。故に彼の鐘聲は近火の警報なり」といふを以て最もよく其の要求に會せるものとせざるべからず。

此の理より見て、章を論理的に分かつときは、部分として主部、從部の別を立つるを得べく、之れが排列方式として、主部は必ず前に、從部は必ず後に列すべしといふを得べく、此等の關係より生ずる種類としては、單複、複雜等の別を生ずべし。これ論理思想の形式が言語に發し來たるの狀態にして、命題と稱するものなり。されば形式的論理學が命題を說くとともに、在來の語法學また之れに由準し、文章論中に主部從部の關係を說けり、其の混同の證明かなりといふべし。若し言語に見はるゝものなるかの爲に之れを說くといはゞ、何故に特に論理的命題の式を主として、心理的命題といふを得ば之を說かざる

文章論中には無用のものと曖昧のものとを含む。前にいへる習慣律と論理則との併存は卽ち此の混雜より胚胎し來たるものなり。語法學の敎ふる所は習慣律を以て掩ふを得べし。論理則を要するはやがて其の語法外に出でたるを證するものに外ならず。

語を單位とするときは、研究はおのづから語の性質と語の關係との二面に分かるべし。語の性質に關しては、其の種類より見たる詞品の分類、其の用法より見たる曲折、活用、變化等、在來の詞論が說けるところ之れにあたれり。語の關係に就いては、在來の文章論中、語の一致(Concord)語の支配(Government)語の順序(Order)と稱せるもの之れに應ず。卽ち二語以上相寄る場合に於ける性、數、時、人稱等の一致といひ、格の支配といふ、名詞動詞等の排列法といふが如きものこれなり。是等すべて純然たる國語上の習慣より來たるものにして、各々其の國特殊の性質を有すると共に、其の國語の範圍内にありては、概して之れに合するを正格とし甚しく之れに違ふときは、習慣に背くの故を以て不通となるの恐れすらあるものなり。而して此等が章としての理法にあらざるは、是等を缺くことあるも以て章たるを妨げざるに見て知るべし。

章を單位とするの研究には、論理的と心理的との二面あり。蓋し章は前にいへる如く思想によりて成立す。之れを支配するものは思想の理法ならざるを得ざるなり。換言すれば章は一國民の習慣といふが如きものに限られずして、廣く人心の根本に存する理法に基かざるべからず。これ其の論理と心理との二方に出入する所以なり。論語的と心理的との區別は尙ほ後に論ずるの要あれども、要するに、一は分解的論證的にして、他は結體的具現的なるにあり。こゝに論理といへるは固より形式的論理を指せるものにして、一團の思想を其の成分に分解し、而して吾人が懷ける知力の統一形式に引きあて引き直して正否を論證せんとするものなり。心理的とは意識上の現象を結體せるがまゝに具現したるものとして解釋せんとするなり。

棒」と叫びし場合の如き、形は語なるも、實は「泥棒なり」「泥棒來たれり」などの意なるの類なり。これ後にも論ずる如く、吾人の思想が本來必ず或る度までは複合的すなはち一團的のものにして、單位の語に適するが如き孤立の思想なきに由る。換言すれば、思想の單位が一團的のものなるため、之れを標示する言語の單位も、一團的のものなるなり。而して一團的の言語は章に外ならず。更に他語にて言はゞ、形式の上にては、語のみ單位的獨立的存在の價値を有し、章はたゞ其が語法的關係により結合せる語彙たるに過ぎず。また內容の上にては、章のみ單位的獨立的存在の價値を有し、語はたゞ其が材料たる元素に外ならず。蓋し言語といふに內容たる思想と相卽せるものと分かれたるものとの二義ありて、思想と相合したるものをば、本書之れを辭と呼べること前に述べたる所なり。此の用語例によるときは、語は言語の單位にして、章は辭の單位なり。尙ほ此の理は事實に見ば明かならん。「松」といふ語は、語としては一定固有の形體を有し、如何なる場合にも其の形體のまゝ思想發表の具として用ひらるれど、「松は常磐木なり」といふ章に至りては、章そのものに何の一定せる形體もなく、たゞ斯くの如き思想を現はす場合にのみ臨時結成せらるゝものなり。卽ち形體よりいへば、語は實存物なれども、章はたゞ空しき名にして、獨立して存するものにはあらず。隨つて之れを逆にして、內容よりいふときは、章のみ實在物にして、語はたゞ其の章の成分たる限り實在的價値を有すること、例へば「飲を恣にす」といふとき「飲」といふ語に「飲酒」といふ特殊の內容を有せしめ得るは、たゞ其の章の成分たる限りなるの類なり。思ふに從來の語法學は、此の區別を明かにせざりしため、雜駁模稜のものとなれるに非ざるか。

吾人の見るところを以てすれば、語法學はたゞ語を單位とすべし。章を單位とすべからず。言語を材料とすべく、辭を材料とすべからず。是れ實に語法學と修辭學との踰越すべからざる界域なりとす。別言すれば語法學はたゞ詞論に止まるべし、

の根據を知らんと欲するなり。此の點を補ふものとして論理の方面を見んか。

語法學の根據を論理に求めんとするの說も、しばしば見るところなり。殊に近時の科學的語法論者は、多く走つてこゝに歸趨せんとす。スチュアルトミルが「しばらく語法學の何たるかを思へ。語法學とは、論理學の初步のみ、思索分析の初段のみ。語法學の原理法則とは、言語をして思想の普遍的形式に合せしむるの方法のみ」といへるは、此の意を發揮して遺憾なし。然れども此の論また前にいはゆる主部從部の正體の場合などに適して、變體には既に適せず。「僕は大阪へ行かう」といふときは論理の形式に合すべけれど「行かう大阪へ」といふときは、之れを修正するに非ざる限りは論理の形式に合すといふべからざればなり。而かも決して後者の文章を破格なりとはいふを得ず。等しくこれ正當なる日本の國語法なり。また假りに此の場合は論理といふの意義を舊來の形式觀に限らずして、正變みな論理的形式なりと見るとせんも、動詞活用等の場合は遂に言語の論理的形式を表するものといふべからず。詮ずる所習慣といひ論理といふが如き根據は、從來互に相幷びて語法學上に作用せるものなるを知るべし。

さらば兩者は如何なる關係をなし、如何なる範圍に於いて作用するものなるか。又兩者の併存するは當を得たるものなりや。吾人は之れに答ふるに先だちて、語法學が硏究するところの材料、すなはち言語の單位といふことを一言せざるべからず。言語の單位とは、其の最單純の一言語として、分析硏究を加ふるものゝ謂なり。之れに二つあり。一は語（Word）にして一は章（Sentence）なり。而して語と章とには二重の相違あり。語は元素にして、章は之れを組み合はせたるもの、卽ち單と複との相違、これ一なり。次に語はたゞ非實用的空虛的なる、智識上の目的物として存在を認むるのみ、實際には單語を思想發表の用に供すること絕えて無し。固より語を章の意味にて用ふる場合はあれども、語としては獨立せず。例へば「泥

某の格には云々の「てには」を添ふといふが如きは、げに一方よりいふときは、當代の文章として其の外に出でがたき一貫の理法なるべし。されども文章には必ず主部あり從部ありといふが如きは、全くこれと場合を異にす。何となれば必ずしも主部なきを得るの文章あればなり。或は主部あるも一體にして、主部なきも一體なりといはんか、是れ事實なるべしといへども、理法としては雜駁に過ぐるの嫌ひあり。しかのみならず常識の判斷また動詞活用の例と主部從部の例とは趣を異にす。前者の場合にありては、明かに其の一理到底なることを是認し、之れに違ふものをば破格とするに躊躇せざれど、後者の場合にありては、暗に二樣の判斷を有す。一は主部從部の揃へるものをも主部の缺けたるものをも正當の國文なりと是認するの傾きあると共に、一は主部從部の揃へるを正體とし、主部の缺けたるを變體にして是正し得べきものとするの傾きあり。以て兩者の根本に何ものかの相違あるを見るべし。吾人は之れを語法學者の説に求めて、二種の根據に達し得たり。習慣と論理と是れなり。

語法が一國の言語的習慣なることは早くより人の唱ふるところ、語法學が示せる理法といふものも、歸する所は、其の國語に存する習慣律に外ならず。ホイトニー氏が「英語法とは現時最上の文章家話談家が用ふる英國語の慣用例に外ならずといふを得べし」といへるは此の種の意見を表せるものなり。されども此はたゞ前にいへる動詞活用などの場合にのみ適して、主部從部等の場合に適せず。文章に主部あり從部ありといふが如きは一國語の慣例に基くといふよりも、一層廣き意義を有すればなり。日本文は主部なくして普通の場合に行はるゝの慣例なりといふか。これ慣例がたゞ慣例といふ事實として提出せられたるのみにして、傍らにはこれを正體に引き直して完全の文章となし得べき略言體なりといふが如き見をも挿み得べし。若し之をも慣例的理法といふを妨げずとせば、少なくとも更に一を正といひ完全といひ他を變といひ、省略といふ、其

美辭學上、言語の性質に關して研究すべき最後のものは語法なり。言語はすべて國語法によりて支配せらる。國語法の修辭に對する關係は如何。

語法學(Grammar)の範圍にありては論ずべきこと多し。細目の論は專門家に待つべきものなれど、大體に於いて、まづ語法學を一の技術と見たりし舊式の觀方より、之れを說明科學と見る新式の觀方に及ぶまで、根本に自然の變遷あり。舊說の代表者としては通例リンドレー、マルレーを擧ぐ。其の意によれば、國語法とは妥當に其の語を口にし若しくは筆にするの術なり。此の說に從へば語法學を修めしものは皆妥當の文を綴り得ざるべからず。語法學が示せる規則は破ることを得ざるものならざるべからず。而も事實は必ずしも然らざるが故に、近時の學者は、語法學に對する根本の要求を一變し、たゞこれによりて國語の種々なる理法を研究せんとす。されば研究の結果おのづから間接に國語を正しく筆舌にし得ることはあるべきも、初めより國語の規則を一定せんとはせざるなり。國語を正しく筆舌にせんとせば、語法學を修むるよりもむしろ筆舌に馴れよ、語法學はたゞありのまゝなる諸法則を分類し整理するのみにて足るといふなり。

然らば語法學が求むるところの理法とは如何なるものか。曰はく今日の詞論(Etymology)文章論(Syntax)等が示すところは、其の例なり。之れによるときは、文章に主部從部ありといふが如き、語に詞品あり活用ありといふが如き、みな語法學上の理法なり。而して是等はなほ一國語の範圍に止まれども、之れを材料として廣く諸國語諸時代語の上に比較し研究するときは、こゝに別種の語法學、又は言語學に到達するを得べし。

單に斯くの如く言ひて已まん限りは、論なきに似たれど、吾人はなほ根本に未了の問題を有す。今の語法學が示して以て理法となすところのものには、如何なる根柢ありやといふこと是れなり。之れを事實に見よ。某の動詞には云々の活用あり、

見て是等の點よりして、言文一致體は古文に參酌するところあるべきなり。要するに言文一致今後の問題は、如何に今語法を補正すべきか、如何に今言を、裝飾すべきか、而して如何に言以上に修辭的特色を有する文體を創すべきかといふにあり。

美辭學の論ずるところが言なるか文なるかといふことは、古來學者の論ぜし所、之れを歷史に見るに、古代の美辭學者は專ら言に重きを置き、降るに及びておのづから文が其の中心となれるの趣あり。蓋し古人の言を重んぜるは、多く公衆の前に立ちて演說する場合、他人と相對して一事の理非を辯論する場合等を目標とせるに因るものにして、文字の用普ねからざる世にありては、假令之れを筆にして文字にすることはあるも、なほ言と文との別今日の如く著るしからず。後世のいはゆる文にあらずして、僅かに言の記錄、演說筆記のたぐひに過ぎざりしものなるべく、美辭學は常に之れより打算せられたりしなり。換言すれば、古代の美辭學は主として能辯法なりき。羅馬のクヰンチーリアンが「如何にして巧みに話すべきかの學」といへるは、よく此の意を示せり。されど前にいへる如く、保存、流布、推敲等の必要上、言の文に移るは自然の勢にして、一切の事を談話、演說、辯論によりて運びし風の漸く衰ふると共に、美辭學の研究題目また文章詩歌の上に偏りしは、已むを得ざるの數といふべし。すなはち中心は文章の上にありといへども、修辭は必ずしも文にのみ限るものならず。演說話術の類はいふに及ばず、日常の談話にすら、修辭の素は存するものなれば、是等みな美辭學の材料たるべし。ただ文の主とするところは修辭の表情にありて、言の主とするところは音調身振等の表情にあるの差あるのみ。

第六項　言語の性質(丁)

語法學の根本的變遷——語法學上の疑——語法の二種類——習慣と論理——語と章——節章——語と詞論——章と論理的及心理的——語法學と修辭學——語法學の概觀

基本とする限りは、「流るゝ」「人なり」を古體といひて不可なし。而して此等古體の死語廢語とならずして保存せられたる所以のものは、古體に捨てがたき長所あるが故にあらずして、社會上歷史上の或る事情に因れるなりとせば、其の事情の去れる今日、言文の一途に歸るべきは論を須たず。其の孰れを去りて孰れに就くべきかといふが如きは、殆んど言を須ひずして明かなり。即ち今日は言文一致にあらずしてむしろ文を廢し言に歸るべき時なり。古體即ち文章體を棄てゝ、今體即ち口語體に合すべき時なり。されども其の言に歸るは、最終點にあらずして發足點なることを忘るべからず。吾人は之れよりして二條の針路を見いだすべし。一は修辭の力によりて更に言を離れ文に入らんことなり。しかも其の文は前の古文なるべかざるや論なし。二は古體の語法、修辭中より、或るものを拔き留むるの必要あることなり。蓋し文が雅馴を表し言が粗俗を表するは、如何なる國といへども免れざるところにして、二者相觸るゝがために、言は常に文の影響によりて其の腐敗の幾分を防ぎ得るの理なるに、我が邦にては、言文の懸隔甚しかりしため、言の文に救はるゝこと少なく、訛誤はます〳〵訛誤を重ね、粗俗はいよ〳〵粗俗に流れたるもの、決して些々にあらず。假りに今の東京語の大部を我が標準語と見るも、これに補正を要すべきもの、必ずや多かるべし。其の標準はしばらく聲音學などが示す所に照して、言語變遷の通則に逆へるものゝ中より、改め得べきを改め、復古し得べきを復古するの外なからん。外國語との混合語法（Mixed grammar）といふことは、或る例外の外、學理上あるべからざることゝすれど、我が邦の場合はたゞ新舊語法の混合なり。例へば「流るる」の「流れる」となりしたぐひは、聲音經濟の道理上正しき變遷なるべきも、「くわ」と「か」、「し」と「ひ」の混合の如きは是認すべきものなるか。ホイトニー氏は之れを盲目的變遷とし、たゞ容易と便宜とのみより打算したる聲音上の經濟は破壞的濫費的なることありといへり。吾人はむしろ「くわ」の「か」となれる類を聲音上の吝嗇とし、無用の語の長まれる場合を濫費といふべし。而して吝嗇と濫費とは共に節せらるべきものなり。又「なり」は廢すべしとするも、「である」といふ語は、果たして聲音經濟の理にかなへるものなるか。今の關東語に多き「だ」の音の如きは、宜しく和ぐべきものにあらざるか。漢語はなほ多く、章に攝取せらるべき必要あるべし。

るものは、之れを眼前に据えて、修整し裝飾するに便なれども、瞬間的なるものは、一々之れを記憶に顧みざるべからざるが故に、到底完全の修辭的結果を得難し。

之れを要するに、言と文との利弊は直ちに其の材の利弊なり。言の材は隨時の標現に適して、之れを客觀化するに適せず。文の材は之れを客觀化するに適して、隨時の標現に適せず。此の相違よりして、言と文とはおのづから形を異にするに至る。非修辭的と修辭的と、言文の差はこれのみ、雅馴と粗俗といひ、醇正と訛誤といひ簡淨と冗繁といひ、統一と散漫といふが如きも皆之れに副ひて生ずるの別なり。其の他文の保存に適し流布に適するも皆そが材の定着性に基す。美辭學の主として論ずるところは、彼の隨時的なるものに非ずして此の定着的なるものにあり。これ美辭學は文章の學也といふ所以。

（參照）　此時我が文壇に於いて論ぜらるゝ言文一致說には、種々の意義あり。其の重なる一は本書前來の論と相觸れて、言と文とは全く一なるべしといふ。文はたゞ言の記錄に過ぎずと見るなり。其の結果は、文章を日常話談の筆記と同一にするに至る。口に語るまゝを記すれば、文章の能事了るなり。されど斯かる文章が、完全なる思想の發表にあらざるは言ふまでもなし。他の一は言文關係論と離れて、我が文學の特殊の現象に基づき、文章中の口語體と文章體とを統一せんとするなり。之れを我が邦に於ける正當なる言文一致論の發足點とす。而して之れに二面あり。語法的と修辭的とこれなり。兩面ともに今は口語體と文章體とに分かるれども、其の淵源をたづぬれば、古體と今體との別に外ならず。古語法と今語法とを一致せしめんといふは語法的言文一致論なり。古言と今言とを一致せしめんといふは修辭的言文一致論なり。「流れる」と「流るゝ」とは、口語體と文章體といふといへども、實に古語法と今語法との別のみ。「人なり」と「人である」ともまた口語體と文章體といふといへども、其の實古言との別のみ。言文一致は、古今一致といふに歸す。勿論今日の狀態にては、文章體も現に文章として行はるゝ以上、古體とのみにいひ難き事情なきにあらざれど、話談の言語を

ひ得るの途ある所以は下の論によりて明かなり。思ふに文をして表情すなはち感情の發揮を十分ならしめんとせば、文が標し得るところの、音數、音別、音次といふが如き客觀的條件の上に、之れを負荷せしむるを最好方便とすべし。換言すれば音度音幅等が標する微妙の情趣をも、及ばん限り音別、音數等の結構によりて表出せんとするなり。たとへば「見事だ」といふ一語も、口づから之れをいふときは、音調によりてよく感動の深きを表し得れども、單に文字のまゝとして見るときは、殆んど何の感動もなし。この缺點を補はんがためには、之れに「實に」又は「なあ」などの語を加へて「實に見事だ」「見事だなあ」などいふべし。次には新たに意義を加へて此の缺を補ふの手段もあり。「花のやうに見事だ」「星のやうに見事だ」などいふの類なり。是等要するに主觀的なるものを客觀化して文字の上に定着せしむるの法といふべく、讀みたるまゝにても、情趣は必然之れに伴ひ來たる。表情の意義の上に結體せしむるなり。感情を想念の上に具象せしむるなり。修辭といふことの大部分は此の工風に存す。如何にせば最もよく感情を客觀に體現せしめ得べきか、要は此の一案にあるなり。而して此の考案の必要なるは最も言を文にする際にありとせば、修辭が言を後にして文を先とするの理また知るべし。但し言の場合といへども、全く是等の工風を要せざるにはあらず。日常の話談には、音度音幅等の利用十分ならざるもの多ければ、之れを補はんとして知らず識らずのあひだ種々の修辭法を用ひ、以て其の情趣を平板なる叙説以上に客觀化し出ださんとするなり。ただ文に至りて此の要ます〳〵大なるを見るのみ。詮するに吾人は修辭の方便によりて、文の言に及ばざる點を充たし得べし。

而して之れを成すの便否よりいふときは、文は言に勝れり。言の材とするところは聲音にあるが故に、時間的なると共に、瞬間的なり、しばらくも定住しがたし。文は之れに反して字形を材とするが故に、空間的なると共に定住的なり。定住的な

感納に厚薄あるによりて朗讀素讀の別生するのがためのみ。隨つて朗讀の表情は、文章そのもの丶表情といふよりも、むしろ朗讀者の所感といふべく、原文の本意と時に相違することあるかも未だ知るべからざるなり。歸するところ、上に述べたる第一點にかへりて、文は言の表情を大半沒却し去るものといふべし。

（參照）　朗讀の論は、之れた擴めて演說、話術、臺詞の事にまで及ぼし得ざるに非ざれど、單に朗讀といへば、少しく是等のものと異なりて、一種特殊の意味を有するもの丶見るを得べし。詩歌の吟誦など丶相并びて、讀誦法中、最も複雜にして且つ趣味あるものといふべし。昔はしばらく措き、近時の我が文壇にては、數年坪内逍遙、關根正直、饗庭篁村の諸氏之れを首唱し、且つ雜誌『早稻田文學』、『國民之友』等に之れを論じたるものあり。また外山正一氏は自家の新體詩を朗讀體と稱せり。蓋しことさらに律格を定めずして、散文體の長句短句を、一種の朗讀法によりて吟誦するを主としたればなり。

前來感納の上より論ぜるところ、裏面よりいへば、また直ちに述作の上に於ける言と文との得失となるべし。言には聲音の表情を假りて意をつくすの利あれども、文には此の便宜殆んど全く缺けたり。さればこの一事のみを以てするときは、文は到底言と竝びて榮え行くべきものに非ず。然るに事實は全くこれに反し、言語のますます發達するにつれて、文章の勢力もまたこれに伴ひ、終に駕して上らんとするの趣あり、言文の得喪は未だ遽かに判ずべからざるなり。

文の社會に勢力ある一大理由は、いふまでもなく、其の保存、流傳、弘布等の利用に於いて、遙かに言に勝るものあるによる。今日社會の文明は、大半文字あるがために存立し得るなり。されども、此等利用の外にありて、文が必ずしも言に劣らざるの事實なほ多く存するを見る。言といへども、すべて皆十分の表情を有する名話談たるをば期しがたきと同じく、文にも拙惡のものあること勿論なれば、是等は論のほかとするも、一般に文が上にいへる如き缺點を有するに拘らず、之れを補

つて言語聲音あり、之れに由準せざるを得ざるなり、不自由なるなり。この他意を用ひずして摸倣的に讀誦し話談する場合もあれど、用意以外の事はこゝに述ぶるの要なからん。

さて、暗讀、素讀、朗讀の説明、上の如しとせば、之れが言文の關係に對する結論は明かなり。暗讀は言ふに足らず。普通に音讀といひ讀誦といふものは主として素讀を指すに似たれど、素讀によりて補ひ得るものは、たゞ默讀の缺點のみに止まりて、音別音數などの上に多少の明白を感じ之れがため讀過の後に極めて微薄なる情趣の標現を味ひ得るのみ。而かも是れすら甚だ多く恃むに足らず。少しく誦讀に熟せる場合には、音讀そのことは殆んど何の注意にも値ひせず、讀みながら自ら其の聲を忘るゝこと屢々なればなり。要するに素讀は文字が示すところ以上には、何物をも補ふこと能はず。別言すれば、文は依然として意義以上に多くの表情を有し得ず、たゞ言の半ばを記するに止まるなり。

朗讀は他人をして聞かしむるに利ありて、朗讀者みづからは多く之れが爲に益せらるゝことなし。蓋し朗讀とは、文の情意を咀嚼したる後に及びて之れを讀誦に標するの謂なり。されば聲音の上に音數、音別等の客觀的要件は勿論、音度、音幅等の主觀的要件をすら標出するを得て、言の表情を補ふの效は、朗讀固より素讀にまされども、こはただ讀誦方が話談に近づけりといふのみにて、文そのものが朗讀者に及ぼす效力の增せるにはあらず。明らさまに之れを聲となすため、素讀の場合と同じく、幾分は讀過の後、または讀誦の際に感觸の切なるものあるを得べしといへども、それらは多くいふに足らざるなり。

論じて玆に至れば、讀誦といふことが文の足らざるを補ひて言に合せしむるの利は極めて些少なるを見る。默讀たると音讀たるとの差は、言文の關係上にさして重きをなさゞるなり。これ朗讀、素讀の別によりて感納に厚薄あるにあらずして、

質を究むるは、之れを話談の場合に比するにあり。話談は或る特別の場合の外、みな自家の思想より直接に發聲機關に連なる。思想の直ちに溶解して流れ出づるが如き感あるは其の證なり。讀誦も口に語を發する點は話談と異ならず。されども其の手續は頗る趣を異にし、讀誦は常に受發の二面を有す。話談のたゞ内より發するのみなるに比して、讀誦は必ず受けて而して發す。其の心理的經過をいはゞ、最初、心に來たるものは文字によりて刺戟せらるゝ眼感にして、眼感は直ちに言語すなはち耳感に聯結し、耳感が想念を提起して、玆に始めて受動的方面の過程を全くす。而して此の想念が未だ別なる次の想念に移らず、換言すれば其の想念に對する我れの態度意見を定むるに及ばずして、受けたる想念のまゝに停住し、之れを直ちに發聲機關に發動せしむるときは、讀誦をなす。約言すれば耳より受けたるまゝを發するが讀誦なり。されば耳より受けて口に發するの狀態により讀誦を二別するを得べし。甲は耳感の聲音のみが、未だ十分の想念を提起するに及ばずして、直ちに發動神經に漏るゝ場合にして、暗讀といふべし。兒童の意義を解せずして書を誦ずるが如きは此の例なり。乙は現に聲音感が聯念に助けられて想念を提起すると共に、其の聲音感の發動神經に向かひて實現し來たるもの、吾人は讀み且つ解し行くを得るなり。之れを素讀といふべし。されば素讀の特色は、暗讀の如く單に發音感の直受するところのみを口に發するにあらずして、同時に想念にも接するにあり、意義を解するにあり。されど此の場合に於ける讀誦は、ただ想念の意義を理解するに止まりて、其の情趣を味ひて後發したるものにはあらず。猶ほ大いに受けて發する路程の單純なるものなり。反射的、復誦的たるを免れざるものなり。丙に至りて受發の關係一變す。之れを朗讀とも稱すべし。朗讀とは一まづ想念に入りて之れを味ひたる後、言に發するの謂なり、されば一面には話談と軌をおなじくすると共に、異なる所は、話談にありては全く自由に、創始的に自家の思想が擇ぶまゝの言語を口に發するを得れども、朗讀にありては、一方になほ初めの文字あり、隨

如しとせば、其の結果はいふまでもなく文に於ける表情的要件の缺乏となる。言に意義と表情とあること前にいへるが如く、而して文は言そのまゝの記號にあらず、たゞ其の半面たる意義をのみ記して表情の面は殆んど全く遺却せらるゝなり。これを文卽言といふべからざるの第一點とす。

第二、されども吾人は或る度まで、讀むことによりて自ら補ふを得ざるか。おもへらく、今日の讀むといふことは、大抵默讀を意味す。若し順序よりいふときは、文字を眼に見たるの感覺より、其の言語を耳に聞きたるの感覺に及び、而しての ち始めて思想に聯續すべき理なれども、事實は必ずしも斯くの如き經過を一々に意識することなく、恰も文字より直接に思想に及ぶが如く感ぜらる。之れを默讀の性質となすべし。此の點より見れば、今日の文字は、音符より出でゝ、却りて意符に還らんとすといふも不可なし。これが結果は、音數、音別のごときものすら、文に於いては、言語と同一の作用をなさず、言語とは全く別なる一の標示法の如く思ひなさるゝに至るなり。言と文との範圍ます〳〵相一致せざるを見るべし。之れを第二點とす。

第三、默讀はされども變態なり。吾人が文字より直接に思想に聯絡する如く思ふは、注意を之れに集めざるがためにして、少しく心を傾くるときは、默讀の裡にも髣髴とし聲音あるを認むべく、聽感の微かに感應するをおぼゆべし。これ畢竟文字と思想との間に言語聲音の感覺を介するの聯想過程が暫時意識の閾以外に逸せんとしたりしものを、注意力によりて引き戻したるの致すところ、一歩を進めては、覺えず自ら微聲を發して口ずさむに至る。卽ち默讀が一時の變態を脫して、音讀といふ本來の地位に復歸せんとするなり。この意味よりいへば、本位として論ずべきは音讀にあるに似たり。さらば、言と文とが人に與ふる印象の差錯は音讀によりて塡補せらるべきか。こゝに觀察を要するものは、讀誦といふことなり。讀誦の性

は筆を加へ諧ふるの義にして、支那文字に音字の原理が古くより混用せられたる一證と見るべくたとへば九といふ字を單に音のみ假りて鳥といふ字に加へ、鳩といふ字を作りて之れを「きう」の音に合せしめんとしたるの類なり。假借、轉註は要するに音に假り、義に假りて、字を轉用するの謂ひ。音に假るはこれまた音字の原理を混ずるの證にして、音の通ずる限り必ずしも一字に一定の意義ありとは見られざるに至るなり。支那の文字が早くより音符原理を混生せるを見るべし。されどもたゞこれ混生のみ、一切の漢字より意義を引き離さゞる限りは、未だ音字の域に入れりといふべからず。

支那字の太古に結繩の文字ありしと同じく南米ペルーの發見當時結繩の文字(Quippos)ありて、色、數、結び方等により意義を分かてりといふ。メキシコまた然りきといふ。其の他メソポタミヤの楔形文字の事等は人の知る所なり。

文章はただ字記の言語たるに過ぎざるか。これ吾人が前に遺したる問題にして、言と文との關係論なり。答はおのづから事實の研究によりて得らるべし。

其の感納の方面より見んに、第一、言に聲音の屬性種々ありて主觀的と客觀的とに別かれ得べきことは、前にもいへり。而して文はこのうちたゞ客觀的要件を標し得るのみ。音數、音次、音別、音長、及び音度これなり。しかも即ち抑揚の如きは、今日の我が文には之れを標するの方式すら定まらず。外國語といへども、日常の場合には之れを標することなし。文の比較的精確に標示し得るものは、僅かに音數、音次、音別等に過ぎず。たとへば他人の話談を筆記するに當りても、話者が巧みに使用する音の抑揚、音長の伸縮等は其の談話をして前後釣合ひを得しめ、意義の強弱、注意の焦點を示す等に缺くべからざるものなるにも拘らず、筆記文は之れを標し得ざるが故に、談話の味の一半は沒却せられ大抵遲徐乾燥のものとなるの類なり。蓋し最も情の標現に適したる主觀的要件乃至その他のものは或は例外のほかに直接に文に標せられざること斯くの

創するものはあらざりしが如し。

秦は支那文字史の上には重要の地位を占むる國にして、小篆の外、隷書といふもの出でたり。創始者は程邈といふものにして獄中の工風に成ると稱せらる。始皇喜びて、徒隷にて書を佐くるの功を賞し、隷書と名づくと傳へらる。これまた同一字脈に屬して字體を變じたる者には相違なけれど、玆に至りて漢字は一新紀元を開けりといふも不可なし。蓋し古文大小篆は、いづれも未だ象形文字の域を去ること遠からず。之れを畫くには細心を以てすべきほどのものなりしが、隷書に及びて、始めて筆のまゝに揮毫し得る今日の漢字體をなせり。こは筆墨の性質が變ぜるにも基くべけれど、支那文字が象形の遺殼を脫して、記號字の本領に入れる界限と見るを得べし。已に隷書となりてよりは、字體の發達容易にして、續いて王次仲といふもの、八分(はつぷん)出づ。これ後の楷書の始めなり。次には草書出でたり。草書の起こりについては一定の說なし。或は漢の孝元帝の時史游之れを創せりともいひ、或は後漢の章帝の時杜伯度といふものに命じて作らしめ之れを章草と稱すともいひ、同じき後漢の張芝といふもの更に之れを今草に變じたりともいふ。(『書斷』『書史會要』)要するに前後漢百年餘のあひだに於いて發育したるものと見ば大差なからん。支那文字は草書に至りて形字の體を變ずること其の極に達したり。當時、筆力飛動、神變無極とたゝへられしも宜べなり。最後に出でたるものは行書にして、後漢の劉德昇といふもの之れをはじめたりと。行とは楷草の間を流行するの義なりなどいふ。兎に角草體のあまりに省略に過ぎたるを避けて、揩草の折衷を試みたるものとおぼし。尙は楷行草みな實際にはさらに古今の變遷あること勿論なり。

終りに臨みて、支那に文字發達の理論を說けるもの早く存せしことを一言すべし。之れを六書と稱す。六書とは始めて『周禮』(この書『僞書考』には出于四漢之末とあり)に見えたる語にして、同書には他にも六藝六義等の目を好みて用ひたるが、六書の何ものなるかを註せるは、後漢の鄭玄に始まる。鄭玄は之れを象形、處事、會意、諧聲、假借、轉註の六とせり。象形とは形に象どるの義にして象形文字の原理。處事(又は指事)とは形なきものを標するの義にして、記號文字の原理。會意とは上の二原理の複合せる者。諧聲を

て足れりとす。

「さてその假字の一體の出きたるも、書く人の心々に物せるから、用ふる假字もとり〴〵に定まらず、又その字體もおのづから筆の勢にまかせなどして、うちよむに煩はしく、はたまぎらはしきかたも有りぬべきを、いまだ下ざまのものに及ぶばかりあまねく文字の行はれざる世なりければ女のわらはなどはさらにて、ふみよみ文字かく道に疎き、下ざまのものなどの、うちまかせて用ふべきにあらざりけむを、空海僧都、その草體の假字にもとづきて、さらに目安くなだらめ引きて四十七音のもじのさまをつくり定めて、已が尊べる佛法のこゝろをのべて、いろはにほへと云々の讚歌を作りとゝのへ、書きつけて、文字しらぬものどもに其の歌をその假字にあてゝ讀習はしめ書習はしめたるものになむありける。」(『假字本末』)尙は種々の考證を立て、弘仁十年高野寺建立の際、空海が大工等に授けたるものなることの考據をも引けり。

漢字の支那に發生せし起原は、明かに知り難し。結繩の政にかへたりと稱せらるゝ伏羲の文字が或る學者のいへる如く、周易の卦なりしか、はた別に是れありしか、今日得て稽ふべからず。稽ふべき支那文字の始めは、黃帝の臣蒼頡といふものゝ作れりといふ古文なり。漢の許愼が『說文』によるに所謂科斗の文字なり。なほ大いに繪畫的なるを見る。然るについで現れる文字は、周の宣王の史臣籀が創せりといふ大篆にして、字脈は全く古文と同じく、たゞ其の體を少變したるのみ。史を案ずるに蒼頡の時代と史籀の時代とは、其間殆んど二千年を隔つ。而も『說文』によれば古文と大篆と大同小異なりといふ。此の間稍々疑ふべき者あるが如し。されば最も精確なる支那文字の源は、周初に遡るに止めて不可なかるべし。こゝにはたゞ史籀の頃漢字はじめて整頓したりと見て已まん。時に神武紀元前二百五六十年なり。爾來周末の文字は、其の世を移るまで如何なる變遷を經たりとも知られず。秦に及びて李斯新たに字體を定めたりと傳へらる。小篆是れなり。されどこれ亦必ずしも李斯一人の獨創にはあらずして、たゞ周末傳來の文字を少變し、一層繪畫的、科斗的の性質を脫したりといふに過ぎず。以下今日に及ぶまで漢字の脈は一定して遂に動かざりしなり。全く新字脈を

心の紀念に外ならず。萬葉假名の工風すでに生じたる上は、我が文字事業は緒に就けるものといふべく、之れより片假名となり平假名となるは、流れに沿ひて下るよりも容易なり。まづ楷書のまゝ畫を省き形を略して字記に便せんとしたるものを片假名の發端とす。假名の工風は恐らく社會全體が其の功を分かつべきものなるべけれど、之れを整理し增補し、且つ音韻上に不滅の大功績を建てたるは、世にいふ吉備眞備なるべし。固より五十音圖が今日の智識に照して不備の點あるは事實なるべけれど、千二百年の昔、彼れが如きものを我が文學に貢げるは、縱し外國に得たる智識なるにもせよ、尋常のことにあらず。我が邦の文物は、概して自然の發達を貴び、理數を後にしたるもの多きが中に、理路の精密を以て、一種特異の光彩を史上に放つもの、五十音圖の如きは其の最なるべし。尙は片假名の製作をすべて吉備眞備の手に歸せんとするは伴信友などの說なり。其の言

「そのかみ唐國に天竺より傳はりたりつる悉曇の法を受習ひ來て、それに倣ひて皇國の正しき音聲にうつし、音位をかへて、新に五十音圖を作り、さて其の對譯に用ふべき漢字音のまち〳〵にして、同じからざるが故に、更に當時皇國通用の字音またよみをも假りて、姑く對譯のために四十五字を定め、其の字の偏旁點畫を省きなどして、簡約なる一體の字をつくりたまへるが、いはゆる片假字にて、かく設け置きて、學生に便よく音韻反切を習はしめ、又漢籍のよみざまどもをも、かつ〳〵字旁に注し置きなどもして敎へたまへるものにぞあるべき。」(『假字本末』——伴信友)

また片假名は遙かに後れて平假名以後の製作なるべしといふ說あり。帆足萬里が「吾が邦の五十文字なども定めて弘法師以後の作なるべし。全く悉曇にならひしゆへなり」(『假名考』——帆足萬里)といへる類是れなり。

平假名は草書より出でたるもの、而して、草書は、畢竟支那人が字體の繁なるを厭ひて漸次に損畫し來たれる極點を示すものにして、日本人は、之れを一層極度まで節略にすると共に、其の内容たる意義を拔きすてたるなり。されば、支那の古文字より順を追ひて我が平假名に及び、字體變遷と、字發達と相伴ひて其の經路を全うせるものといふべし。平假名發生のことは伴信友が說を引くを以

字の如きは、音を有するが故に綴音的の音字なりとはいふべからず。音字と意字との區別原理は、上にいへる如く其の意義の動かすべからざると否とにありて、音の分かつべからざると否とは言ふに足らざればなり。字に意ありや否や、これ最も重要の點なり。字母的とはすなはち歐米語の字母の如きをいふ。綴音字を更に子母音に分解せるものにして、現存する音字の最も精密便利なるものと稱せらる。

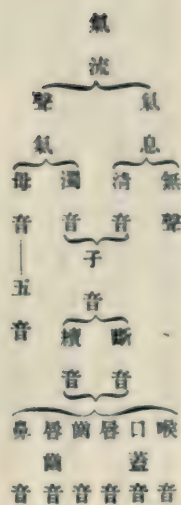
現時我が邦にて使用する文字は意字なる漢字と綴音字なる假名との混用にして、支那は意字、歐米は字母字なること人の知るところなり。而して漢字はいふに及ばず、我が假名、英の字母、みな其の字體の源を象形に發したるは、文字發達の自然の理を說明したるものといふべし。字母の源は羅馬にして、羅馬字は希臘より來たり、希臘はフェニシアより來たり、フェニシア字は埃及より出づ。埃及にては其の文字既に音意兩用なりけれど、初めは純然たる象形文字なりきといふ。我が片假名が漢字楷書體の省畫より來たり、平假名が同じき草書體の省畫より來たりしはいふまでもなし。漢字の發端が象形にありしも明かなり。

（參照）日本文字の起原に關しては種々の說あり。神代に文字ありきとは、平田篤胤の『神字日文傳』などが唱ふるところなれど、信じがたし。今日に遺れる文字の始めは漢字なり。漢字の我が朝に渡來せしは、神武紀元九百四十四年、應神帝の代百濟の博士王仁が『論語』『千字文』を獻ぜしに始まるといふ。而してのち三百年ばかり。聖德太子前後より其の用やうやく廣く、『懷風藻』などに見ゆる漢詩の如きものすら出で、太安麿の『古事記』に至りて、當時漢字を使用せし狀態の一斑を最も明かに吾人に傳へたり。即ち『古事記』中の漢字は大半すでに意字の範圍を脫して、純然たる音字に移れるもの、同一字體が意字より音字に蟬蛻せんとするの過渡を示せるなり。同じき適例は『萬葉集』にも見るべし。所謂萬葉假名とは、古人が知らず知らずの間、文字發展の原理を追ひて進まんとせる、苦

せり。此に於いてか、彼等は眼に見しところ、心に思ひしところを、其のまゝ圖畫にして他人に示し、以て思想交通の具となしぬ。これ文字の始めにして、象形的(Hieroglyphic)といふべきものなり。されども使用のやうやく繁多なるに從ひ、一々物象を圖して繪の如くならしむるの煩に堪えず。原畫を損して愈々象形の本意に遠ざかり、遂に全く一の記號たるに至る。之れを記號的(Symbolic)といふ。文字はこゝに至りて一段の進歩をなせるなり。而して是等みな自家の意中を文字にそのまゝ寄着したるものなるが故に、總稱して意符的(Ideographic)もしくは意字といふを得べし。されば意字中に於ける象形字と記號字との別は、前者は何人が之れを見るも一見其の義の解し易きを特色とすれども、後者は之れに反して、形象にたよるの利を捨て、單に慣例の力によりて世に解せられんとす。彼れ此れ全く流行の根據を異にせり。

意字について來たれるは、音符的(Phonetic)すなはち音字なり。音字の特色はいふまでもなく字より固有の意義を抜き去り、單なる音のみの符號となしたるにあり。字即意といふが如き性質を脱して字即意となれるにあり。嚴にいふときは、文字の用漸く熟すると共に、意字も早く字即意といふ狀態より一歩して、字即語ともいふべき方向に進み、半ば音字の資格を有して、文字を言語の符號とするに至るを常とすれど、音字に及びては、全く此の傾向を實にし、文字とは畢竟言語を符號にするものに外ならずとせらるゝに至るなり。此の理よりいふときは、文章とは字記の言語に過ぎざるなり。されども論は果たして之れに盡くべきか。

音字はさらに分かちて綴音的(Syllabic)と字母的(Alphabetic)との二となす。綴音的には我が假名文字の如く、一字を以て一綴字を示す者乃至二三綴音にも及ぶ者あるを得べきなり。我が邦にて「カ」といへば洋字のkといふ子音とaといふ母音との綴合音を指し、「ヿ」といへば「コト」の二綴音を表す。されども精しくいふときは、我が邦の「ヿ」「ヰ」「ヱ」又は今日多數の漢

如く口蓋に觸れて出づるもの、齒音とはツ、ヅ、ルの如く齒に妨げらるゝもの、唇音とはプ、ブの如く唇によりて塞がるゝもの、唇齒音とはフ、ヴの如く上齒と下唇との作用によるもの、鼻音とは聲氣の鼻に出づるもの、ン又は關東人のガ音の如きをいふ。最後に母音また口の開かれたる程度によりアエオにイウの次第をなす。今是等の諸音を表示せんに

第五項　言語の性質（丙）

文字の始――其の分類――日本文字――支那文字――言と文――讀誦法の二類――文の勢力ある所以――言文の別

吾人は前項に於いて、言語に意義と表情とあることを述べたり。されども其のいはゆる言語は口に發するまゝを主とせるなり、話談の言語なり。其の他身振の言語、字記の言語等あるべき由は、これまた前にいへるが、美辭學ありて必要なるは字記の言語なり。すなはち話談の言語に對して、以下少しく字記の言語を論ぜんとす。所謂言と文との異同之れによりて明かなるを得べし。

今日文字といふときは、直ちに言語の符號なりと解せらる。事實また然りといふを妨げず。されども起原に遡るときは、決して文字は言語の符號として生じたるにあらず。言語と相并びて、別に一源を成せしなり。即ち人は聲音によりて思想を表するを知ると共に、象形によりて思想を傳ふるの途をも知れり。口より耳に傳ふると共に、手より眼に傳ふるの方法をも解

聲音の種々なる所以にして、結局聲の變動は情の變動に外ならず。といひて已むべきなり。

斯くの如く研究し來たるときは一語一言の末にも多大の含蓄あり。辭の上乘なるものは詮するところ最もよく是等の諸要件を統一し調理し若しくは超越したるものなり。

（參照）英のケームスは言語の表情を分析して、音の美、意義の美及び此の二者相合するの美とせり。（"Elements of Criticism"—Lord Kaimes）

聲音の區別法は種々あり。まづ其の發聲機關の上より見んに、肺より出づる氣流か氣管を通じて喉口(Glottis)まで來たれるとき、こゝに二箇の節筋(Ligaments)より成りて開閉自在なる聲帶(Vocal chords)といふものあり。聲帶全く開け、氣流に何の故障もなきときは、氣息(Breath)を成し、聲帶狹まりて氣流これがためにかするゝときは、聲氣(Voice)を成す。而してこの氣息と聲氣との別により、聲音はおのづから二大別せらる。氣息若し口に入りて何ものにも妨げられず其のまゝ唇外に流れ出づれば、全く聲音を成さゞれども、聲氣が其のまゝ唇外に出づれば母音(Vowels)を成す。アイウエオの如き是れなり。また氣息若し口內にて口蓋、唇、舌、齒等に妨げらるゝときは、硬音(Hard)卽ち淸音(Surd)となり、聲氣が是等によりて妨げらるゝときは軟音(Soft)卽ち濁音(Sonant)となる。クとグ、プとブ、フとヴ、スとズ等の如し。凡て子音(Consonants)なり。さらに口內に於ける是等諸音の變化の次第を見るに、舌、唇等によりて氣息又は聲氣の妨げらるゝ程度に基づくものを斷音(Momentary)續音(Contiruous)の別とし、其の局部の別に基づくものを、喉音(Gutturals)口蓋音(Palatals)齒音(Dentals)唇音(Labials)唇齒音(Labio—dentals)鼻音(Nasals)等とす。舌、唇等が一旦全く氣息を塞ぎて、而して後放てばク、プ、ツ等となり、聲氣を塞ぎて後放てばグ、ブ、ヅ等となる。瞬間にして斷絕するものなるが故に斷音といふなり。舌唇等が氣息又は聲氣を塞ぐの程度十分ならずして、辛うじて漏るゝ時は、ス、フ、ム、ル又はズ、ヴ等となる。前者に比して稍々繼續し得るが故に續音といふなり。喉音とはク、グの如く喉邊に觸れて出づるもの、口蓋音とはス、ズの

意義の上に抑揚に情趣の伴ふが如き事例は極めて乏し。抑揚の表情は最後の歌謠の場合に見るべし。音數の表情は、概して音數多きだけ、停滯、緩漫、悠々、沈着といふが如き情に適し、音數少なき語句は、其の反對を示す。語句の長短乃至其の配合といふことが文辭の上に如何に重要の關係あるかは、少しく修辭の經驗あるものゝ知るところなり。尙ほ此等の點は後の修辭論に於いて評論すべし。音次また情の表出に大なる關係を有す。同一間斷を隔てゝ同一音を反覆すれば一種快適の情を生じ、等しく濁音の如き滑かならざる音にても、前後に之れを和ぐべき音を加ふれば語路を婉曲ならしむるを得る等、皆修辭論上の題目たり。音別に至りては、其の種類の多きため一々明かに某音は某の情を表し、某音は某の情を表すと指示しがたきもの多けれど、特殊なる音が特殊の感情を表出するは爭ふべからず。例へば濁音のおほむね粗野、激烈、騷擾などいふ情に連なり、母音の空虛、永遠、廣大、「か」行音の硬固、堅實、鋭利、「な」行音の柔佞、婉曲「さ」行音の淸爽、寒凉「ら」行音の進轉、活動、「は」行音の輕浮、飛揚、「た」行音の定着、通徹、溫熱等、最もいちじるしきものなるべし。固より是等多少は人により、時代により、國によりて相違あるべく、また例外もなきにあらざるべく、場合によりては此の種の標現を打ち消し得ることあるべしと雖も、大體に於いて、音別に固有の表情あることは明かなり。

一切の音すでに表情を有すとせば、如何なる生理的過程によりて吾人の感情が聲音を動かすを得るか。神經系統の情的過程が發聲機關に影響する順序如何。これについて起こるべき問題なれど、本書は精しく之れに言ひ及ぶ能はず。且つ心理の生理的研究は、今日極めて重んぜらるゝにも拘らず、なほ甚だ不備未定のもの多し。今の場合、吾人はしばらくスペンサー氏が三四十年以前の言を假りて、凡て烈しき情の力が筋部を動かし、筋部輙ち發聲機關を動かすは、何の場合も同一なるが故に、其の情の種々なるに從ひて筋部及び發聲機關の活動、また種々ならざるを得ず。發聲機關の活動の種々なるはやがて

示するの用をなすものなり。尙ほ抑揚のことは、後の律格論に於いて別論すべし。音長が言語の客観的要件となる場合は多し。外國語はいふに及ばず、日本語にても、「空氣」と「茎」「多く」と「奥」「櫓」と「牢」、「濛々」と「桃」の類、音の長短によりて其の意義を異にするを見るべし。「濛々」、「空氣」などの支那を撰せるものはしばらく措き、和語の長音と見ゆるものには、本來二音なりしが多けれど、今日の發音にては、只長音と見るを至當とすべし。多くの「おーく」にあらずして「おほく」なりし、「然う」の「そー」にあらずして「さう」なりし、「申す」の「もーす」にあらずして「まをす」なりし「今日」の「きょー」にあらずして「けふ」なりし等一々枚擧すべくもあらず。また促音といふことあり。同一子音の二つ重なりて一音につゞまらんとせるものにして、長短の外にある一種の音長と見るべし。これまた意義の上に特殊の區別を有して、「躍起」と「焼き」、「はっし」と「はし」等の語を成す。音に於ける音數、音次が言語の要件なるはいふまでもなし。同一音にても「子」と「弦」とは音數のために意義を異にし、「熊」と「幕」とは音次のために意義を異にす。最後に音別に至りては言語の最要條件ともいふべきものにして、字母二十六音といひ、「いろは」四十七字といふものが、音數、音次と相まちて、言語をして千態萬狀ならしむるの根本たるは、何人も認むるところなり。

音長、音度、音數、音次、音別は、一面斯くの如くして、言語の意義と離るべからざる關係を有すると共に、他面に表情を有すること、前にいへるが如し。其の次第を案ずるに、音長音度が言語に定着したるかたはら有するところの表情は、其の量は極めて微なれども、而も獨立したる場合と同調子の情を帶び得ること明かなり。「大いなる」といふときは、「おー」といふ長音のために、廣大永遠といふ表情を作り易く、「ぎっくり」「ばったり」などは、促音あるがために、事物の衝激に會する情を惹起し、長音の表情に俟つところあるなり。抑揚に關しては、元來日本語そのものが、之れによること稀れなるため、

篇の趣意目的に歸趨せしめたるものは能辯なり。當代の俳優團十郎が臺詞の「めりはり」、落語家圓朝が人情話の呼吸等は深く此の點に於いて會得せしところあるに似たり。要するに語音變化の主觀的方面は、感情を表するに於いて最も必要なると共に、最も捕捉しがたく調理しがたきもの、殊に文字に標出する言語に至りては、殆んど全く之れを具現するを得ざるものといふも不可なし。言と文とが相違する主要件の一はこゝにあり。されば是等はむしろ話術の上に研究に讓るべきなり。

（參照）音の表情に關しては、主として音樂的方面より之れを論ぜるもの、獨のヘルムホルツ（"Die Lehre von den Tonempfindungen, als physiologische Grundlage für die Theorie der Musik"—Helmholtz,）を始めとし、英のスペンサー氏（"Essays, Scientific, Political, and Speculative" Vol. II.—H. Spencer.）アレン氏（"Physiological Aesthetic"—Allen）など、其の人鮮なからず。就中スペンサー氏は音樂の起原及び職能を論ずる文に於いて、純粹なる音樂の部面を離れ、語音の表情にも論じ及びたり。蓋し其の趣意、聲樂すなはち歌は音樂に先だつものにして、聲音の表情を換するより音樂生じたりといふにあり。而して言語の聲が如何に自然に人間の感情を表出するかを論じ、音幅、音度、音色、間斷、配合等の各方面より一々其の特性を擧示せんと試みたり。之れに對して併せ讀むべきはロバート、ダーヰンの論（"Expressions of the Emotions in Man and Animal"—R. Darwin）なり。氏は種々の實例を擧げて、一面スペンサー氏の説をたしかむると共に、他面必ずしも聲音と感情との關係の一定し居らざる例をも擧げ、聲が感情を表する事實たれども、如何なる聲は必ず如何なる感情に相當すとは定めがたきこと多しとせり。

音性の客觀的方面ともいふべきものに就いて先づ其の言語としての有樣を見んに、音度は言語に定着して抑揚（二六三）となる。されども我が國の言語は、人も知る如く、抑揚を用ふること比較的に少なく、「客」と「橋」、「神」と「上」、または一部に於ける疑問辭の語尾などの例の外、多く之れによりて意義を殊にすることなし。洋語に抑揚のきはめて嚴しく、支那語に平仄四聲の別の煩はしきは人の知るところ、要するに是等はすべて、感情といふよりもむしろ思想の知的方面を一層精密に標

る程度まで一層よく其の特色を發揮し、音幅の小なるものと音度の大なるものと結合する場合また然り。而して此等の調攝をなすは、絃器にありては絃の長さ、太さ等によるの外なし。三味線に感所、一の絲、二の絲などゝいふものあるは此の理なり。俳優淨瑠璃語り等の聲は多年の修練によりて音度音幅の調和度に適へる者と見るべく、今の俳優團十郎の聲と菊五郎の聲とを比ぶれば、大體に於いて前者は音幅に勝り後者は音幅に勝るの趣あり。音色に至りては、最も主觀的にして、言者みづからすら、自在に之れを變ずるを得ず。音色は直ちに其の人となりともいふべし。且つ之れと前二者とは密に結合して存す。されどまた其の間決して區別なきにはあらず。同一音度同一音度の聲にても、吾人は明かに其の聲柄によりて何人なるかを知り得。或はその言ひまわしに特色あるが爲ならずやといふ者あれど、母は小兒が唯一聲の泣聲によりても我が兒なるか否かを判別し得るなり。世俗に黄いろき聲齒の浮くやうなる聲、意氣なる聲、なまめいたる聲などいへる中には、音幅音度の混ぜるものあれど、聲色最も其の重きをなすべし。最後に音長(主觀的方面)が情の表出者となる場合は、語り物謠ひ物其の他すべて情の勝てる言語に見るを得べし。是れまた單に長短の二つに止まるが故に、其の標現に微細の別をなすこと能はざれども、總じて音を長むるときは、優揚、緩舒、沈靜、閒逸、永遠、廣大、敬虔等の情につらなり、音をちゞむるときは、促迫、急激、噪擾、繁多、短縮、狹小、喜謔等の情につらなるを例とす。

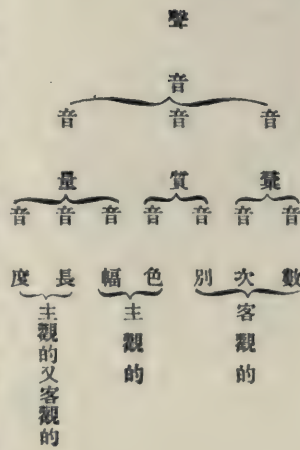
以上主觀的要件はみな言者が隨時隨意に用ふるの外なく、他の客觀的要件の如く一々之れを言語の上に定着せしめ置くを得ざるものなれども、稀れには特別の手段を以て之れを言語に結合せるものなきにあらず。固より不完全たるをば免れざれども、我が邦の謠ひ本などに種々節づけせる類、また進みて西洋式の樂譜の如きこれなり。是等は聲音の主觀的條件を、或る度まで客觀化せるものといふべし。斯くの如くして、多數の主觀的要件を巧みに調理し、之れに變化錯綜の工風を加へ一

は一面客觀的要件となり、他面に主觀的要件となる。二重の用方あるものといふべし。

巧妙なる演說を聞き、又は表情術に熟したる俳優の白を聞くときは、吾人は著るしく其の言語が人を動かすの力あるを感ずべし。されど若し他人をして之れを反覆せしむるときはたとひ一音をも違へずとするも、決して初めと同一の感銘をば人に與へざるべし。縱し本人をして再び之れを繰りかへさしむるも、其の氣分の變動につれては、全く初めと同一の結果を生ずるを保しがたし。是れ前にもいへる如く言語が本來智識の標示にして、吾人の思想中、感情に屬する部分は殆んど一も其の表面に帶着せられざるがため、此の缺を補はんとして、上に主觀的要件といへる、音色、音幅、音度等を語音の上に寓し（身振を以て之れを助くるはいふまでもなし）たるが故なり。聲音の表情を借れるが爲なり。音幅音度の如きは、言者みづからといへども常に同一の狀態を保ちがたければなり。

今此等の諸要件につきて見るに、まづ音幅の表情に關して、最も著るしきは、廣き音が概して强し、男らし、逞し廣し大いなりといふ感に伴ふことにして、莊嚴偉大なる景情を表する場合には、演說音樂等多く此の種の音を擇ぶ。夫の謠曲の如きは此の好例なり。謠曲の聲は其の莊重の情味を保たんが爲、最も音幅の大なるを貴ぶ。之れに反して音度（主觀的方面）は、高き音却りて女性部の聲に近づき、澄みたり、淸し、徹す、快活なり等の情を表す。夫の女子が電話交換手の職に適するは其の聲の音度高きを利用せんが爲なること人の知る所なり。されども音度高きに過ぐれば苛聲となるべし。此の場合の標現は苛烈鯀薄等なり。若し音度の高きと音幅の廣きとが結合するときは、雷聲などの如く猛烈といふ表情となる。音樂にては夫の大陸聲の類この例たり。但し普通、音幅と音度とは相逆比例するの傾を有し、同一絃上に同一程度の撥撃を與へたりとすれば、振幅大なれば振度少なく、振幅小なれば振度多き理なり。卽ち音幅の大なるものと音度の小なるものと相結合すれば或

り。斯かる弊を避くるは修辭上の一工風にして、便宜よりいへば、摸聲又は嘆聲に起原を有する語最もこの煩ひ少なく、おのづからにして表情と意義と相合するの傾あり。但し現在の言語は、多數は起原上の相違、變遷上の相違よりして、摸聲、嘆聲の痕迹を留むるもの稀れなり。

さて聲音が表情を有するに至る次第を、更にこまかに觀察するに先だち、前に述べたるところを概括すれば、聲音の研究方面およそ左圖の如くなるべし。

この中音數、音次、音別の三者は、いづれも言語の客觀的要件といふべきものにして、或る度まで言語そのものに固着し、何人にも通用し得るの性を帶べり。意義と密着して離るべからざるの關係あるものなり。之れを變ずれば言語の根本の意義隨つて變ずるものなり。然るに音幅、音色の二者に至りては、全く主觀的ともいふべく、言者が隨時の態度により、若しくは言者の生理的、心理的犧牲によりて一ならざるを得るものなるが故に、言語そのもの丶固着性とはなり得ざるなり。卽ち普通には、この二者は言語の意義を助くるよりも、むしろ言者みづからを表するものとせらる丶なり。最後に音度と音長と

容を富ましめんとす。吾人が發聲の表情と稱するもの卽ちこれなり。

聲音の表情とは、結局聲音が情を表出するの謂なり、言語の意義に情をも併せて發表せんとする一工風なり。之れに兩途あり。感覺が直ちに相當の感應を呈するは所謂感覺的感情にして、單に其の音が耳に快なり苦なりといふに止まる。されども感覺はこゝに止まらずして、言語の意義以外、其の感覺の性質が最も聯なり易き、別なる方向に走り、こゝに新想念を組織し、新感情を提起せんとす。此の場合に於いては、感覺は想念の一屬性として其の中に入るがゆゑ、兩途は合して一となるなり、たゞ斯くして生ずる想念は、本來言語の副產物若しくは寄生者たるに過ぎざれば、其の主人たる言語の想念を害するものなるべからざるは勿論、勢力また彼を主とし、此れの想念は不判明なるを免れず。隨つて吾人の意識にはたゞ一種の漠然たる情とし感ぜらる。聲音の表情は漠然たるものなり。

さらに例を以ていはんに、「おどろく」といふ、四音の組みあはせは、言語として直ちに「愕く」といふ想念を標示す。されども吾人は之れと共に四音中の主要音たる「どろ」といふ二音を中心として「轟く」といふが如き狀態より、心臟の鼓動はげしき狀態にわたりたる、漠然たる一種の想念若しくは感情を想ひ浮ぶるを得。これ此の語が有する聲音の表情なり。而してこの場合には、「胸とゞろく」といふが如き表情と、「愕く」といふ言語本來の意義と、幸にも相融和して、思想の情の方面が一段よく發揮せらるゝを感ず。表情の妙なるものといふべし。さりながら、凡ての言語斯くの如しとはいふべからず。語の意義と音の表情と相扞格する場合あるべきなり。此に於いてか、之れを疎通するの道は普通たゞ主なる意義を重しとして、聲音の表情を壓排し去るにあり。されど往々にして主なるもの輕く、從なる聲音の重きことあれば兩者の扞格依然として存するが故に、滑稽或は不快の結果を生ず。夫の初めて英語を學ぶものが、「ゴッド」などいふ語に一種の可笑しみを感ずるは、此の理な

て符號たりといふも不可なし。

さらば續いて疑ふべきは、斯くの如くして音と想念との聯結成りし後の感覺は如何なる地位あるかといふことなり。『き』といふ音の感覺と「木」といふ想念と聯結するときは、聯結したる後の吾人が意識中には、始めの感覺は消えて跡なかるべきか。心界の法則は、すべて同一事を反覆するごとに、經過ます〳〵滑かになりて、全く注意を其の過程に費するを要せざるに至る。注意を要せざるは卽ち意識の燒點より遠ざかる所以にして言語の場合の如き、すなはち此の例なり。始めの音殆んど全く獨立せる感覺たるの價値を失ひ、音そのものは、さながら感覺なくして直ちに想念に聯なるが如く感ぜらる。此の意味よりいへば、言語は皆符號なり聯想的なりといふの、分析に過ぎて却りて事實に遠きが如きを見る。

斯くして發音は全く言語の上に感覺的地位を失ふを常とすれど、更に考ふべきは言語の思想に對する價値なり。言語は果たして思想の充分なる發表者といふを得べきか。吾人の思想は冷かなるを知のみにあらず。單に「木」といひ「月」といふ想念のみを提擧せらるゝを以て、思想の標示了れりとするは大なる誤謬にして、むしろ思想の價値は之れと密に纏綿せる情の方面にあり、若しくは此等のすべてを一團とせる其のまゝの全意識にあり。之れを傳ふるにあらざれば、思想發表の任全しといふべからず。しかも言語の意義は主として想念の一面に偏せり。固より想念が更に之れを傳へられたるものゝ心中に感情の反應を喚起するは事實なれども、此は單に讀者聽者の主觀に屬し、普通平凡の抽象的想念のみにては確たる感情を起こし得べしと定まらず。而して他に一も直接に之れを刺戟すべき客觀的條件なし。是れ言語の不完全なる所以にして、此の缺を補はんとするの工風は、一面、修辭上の根本問題なりといふべし。吾人は言語の範圍に於いて、及ばん限り多く此の缺を補はんと力む。此に於いてか、曩に無用なりとして意識外に逐はれんとせし音の感覺は、再び蘇生して別なる方面より言語の內

で獨立して人間の感情を代表しまた刺戟し、而して之れに相當する言語の性質と結合して存するを斷言して不可なきなり。例へば「濁れるおほ浪」といふよりも「濁浪」といふを以て一層よく我が思想を表現せるが如く感じ、「太洋」といふよりも「おほうな原」といふを以て更に適切に我が思想に合せるが如く感ずるの類みな然り。斯くの如きは、言語の音樂的方面ともいふべく、嚴にいへばすでに言語學聲音學の範圍を出でゝ音樂的響學音的研究に入れるものなり。聲音そのものゝ表情を論ぜんとするなり。

「き」といふ一音が「木」といふ意義を標示し、「つき」といふ二音が「月」といふ意義を標示するに至れば、玆に聲音が意義を有すといひ、言語となれりといふ。意義とは心理上にいはゆる想念の義なり。主として知的標示を指すなり。されば吾人は玆にまづ二種の標現あるを認むべし。一は「き」といひ「つき」といふ聲音そのものが、單なる感覺として吾人に與ふるの意義なり。たゞ「き」といひ「つき」といふ音として感知するに止まるなり。他は、件の音の感覺が別に枝葉あり綠葉紅花ある「木」といふ想念、宵ごとに中天に輝く「月」といふ想念を伴ふにあり。約言すれば感覺と想念と、知的方面に於いて二重の意義あるべき理なり。而も言語としての價値は、言ふまでもなく其の想念を標示する上にあり。然らば單なる音の感覺が言語として一定の想念を標示するに至れる次第は如何。是れ吾人が前來の論に於いて知り得たる言語の起原語によりて解釋せらるべき問題なり。摸聲と嘆聲と符號音と、此の三理由によりて、遂に其の音は如何なる場合にも初め摸したる音の本體、嘆ずるに至りし想念、符號音の實物を聯想するに至り、こゝに始めて想念の標示といふもの生ずべし。言語の言語たる所以は、起原の摸聲たり歎聲たり、符號音たるあらずして、此等のものがいかによく聯想化せられたるかにあり。音と其の標する者との聯結が常住化せらるゝ點に、言語の生命はあるなり。此の意味はといへば、言語はすべて聯想に成るといふも不可なし。凡

とは絃の振動の模樣によるものにして、月琴の音と三味線の音とは、同一音度のものにても截然別なるを知るべし。此は畢竟振子そのものゝ物質、大小、單複等によるものにして、略ぼ其の振動の形狀を測量したるものなりとてマクス、ミュレルの書中に載せたる圖を見るに下の如し

音色のおのづから聯想せらるゝを見るなり。

由來言語學聲音學等に於ける聲音の研究は、主として發聲の原則、子母音の性質乃至言語の變遷に伴ふ言語の變化などに重きを置けど、今の場合に趣味ある題目は却りて語音が其の容るゝ所の思想と如何に相類似するかにあり。普通に言語を解して、言ひ廻しある音(Articulated sound)なりといふ。今若し其の言ひ廻しといふを廣く解して、啻に抑揚開閉配合等の語法的言語學的條件のみならず、音幅音色等をも是れに加へ、而して歷史的研究より現に吾人が使用しつゝある發達せる言語の上に此等諸條件の及ぼす影響を研究するを得ば、美辭學上益するところ多かるべし。前にもいへる如く、吾人は言語の起原に於いて、早く已に言語と其が包容する思想との間に、或る必然の關係あるを知れり。摸聲に出でたる言語ありとせば、其が原形と原意との幾分たりとも併せて保存せらるゝ限り、其の言語は思想が含む物體の一屬性たる音を、原形のまゝに表するなり。また嘆聲に基せる言語ありとすれば、其が含む感情と其の語音とは生理上必ず何等かの離るべからざる關係なかるべからず。假りに、此等の關係は後の聯想作用に基づけるものにして、初めよりありしに非ずとするも、而もなほ現在の事實に於いて、音と人心との間に至密の關係あるは爭ふべからず。卽ち少なくとも今日より見て、聲音そのものが或る程度ま

語を組織する唯一の要素にして、之れが今日の和熟せる言語を成す趣を見るに、樂器などに比して音の種別の精細複雜なるため、これによりて一々異なる思想を標するを得るの便あるはいふまでもなく、是等の單音を組みあはせて殆んど無限に言語の變化を豐にするを得、「エ」と「オ」、「キ」と「コ」みな意義を殊にし、四十七音の「いろは」二十六音の字母、樣々に配合せられて幾萬の語をなす次第は人の知るところなり。されどもこれのみにては未だ聲音の利を盡くせるものといふべからず。語數いたづらに繁多となり、語音ますます冗長に流れて、而も標現の十分ならざる恐れあるが故に、更に聲音の他の性質を利用して、言語の變化を自在ならしむ。音の高低すなはち音度(Pitch)音の長短すなはち音長(Length)是れなり。又或る場合に用ひらるゝものとしては音度、音長の外に、音幅(Loudness)すなはち音の廣狹、音色(Colour of Tone)すなはち音の模樣等あり。音幅とは俗に太き聲細き聲などいふものにして、音色とは甲の人と乙の人と聲の模樣を異にするの類なり。而も音幅と音色とは全く定着したる言語の條件となるを得ず。思ふに此の點最も言語を聲音の面より研究するに於いて趣味ある所なるべし。其の他二音以上相寄れるものとしては、音の位次音の數等は最もいちじるしき言語の要件たり。

(參照)　音に度、長、幅、色あるは、其の空氣を振動せしむべき振子の狀態に由るものにして、之れを絃器にたとへんに、絃の彈ぜられて左右又は上下に振動する幅を振幅といひ、振幅の廣狹によりて音に廣狹を生ず。これ音幅なり。絃の一定時間に於ける振動度數如何によるものを振度の觀念によりて音の高低を生ず。音度是れなり。音度の高低については古來種々の試驗をなせるものあり。人耳に入り得る最低音は一秒間に三十往復振を要し、最高度一秒間四千往復振を超ゆれば聞きわけ難きに至ると稱せらる。音長とは同一音の繼續する時間の長短をいふものにして、何れの音も皆多少の長さを有せざるはなけれど、取りわけて長く繼續し得る音と、一定時の後には一旦斷絕せざるを得ざる音と、おのづから二種に分かつを得べし。人聲の母音と子音の發音との如きこれなり。音色

めて「ぶつすわる」を「猛烈にすわる」と解すを要せざるなり。「ぶつ」といふ音より直ちに「猛烈」に聯なり得るなり。縱し中間に「打つ」の媒介を要すと假定するも、しかもなほ「ぶつ」の音が殆んど音そのものゝ本性と見ゆるまで密接に「猛烈」といふ情と聯なれるは事實なり。尙は此の點の心理的說明は後に讓りて、さしあたりこれだけの保證をだに得ば、聲音の表情を論ずるに於いて不足なし。何んとならば今日吾人が用ふる言語の音は、皆其の語の意義以外に表情を有し得ればなり。其の表情を有するに至りし方法の聯想なると否とは問ふ所にあらざればなり。また世間の言語が其の表情を意義の上に利用し一致せしめたると否とに拘らず、利用し一致せしめて不可なるの理なければなり。尙ほ嚴にいへば、言語の表情といふにも二義あり。一は言語が言語として本來の意義及びこれに伴ふ感情以外別に聯想作用の結果として漠然引率し來たる感情なり。言語が使用によりて自然に帶び得たる光澤ともいふべきものなり。他は言語を聲音に分解したる上の表情にして卽ち聲音の表情といふべきものたり。聲音の表情は次にこれを論ずべし。言語みづからの表情は後章に於いて硏究せん

第四項　言語の性質(乙)

音響の二別――聲音の性質――意義表情の心理的說明――表情的要件――音幅――音度――音色――音長――音數――音次――音別――表情の生理的說明

言語の組織は、一に聲音の質、量、彙等の變化に基づくといふを得べし。固より今日の言語が聲音の變化と共に直ちに意義の變化を來たすといふに非ざるも、聲音が語形變化の材料たるは事實なり。而して聲音は天地間諸多の音響の一類たるに外ならず。凡て音響は噪音(Noise)諧音(Tone)の二に分かつを例とす。噪音とは車の軋る音、雷の鳴る音、湯の沸く音すべて物音と稱せらるゝたぐひをいふなり。諧音とは、人聲、樂聲、禽蟲の鳴聲などをいふなり。其のうち人聲すなはち聲音は、言

によりて、直ちに初めより斯くの如くなりきと斷ずるも非なるべし。されどなほ吾人は音の表情を主張するに不可なきなり。多くの論者は言語を記號として見る場合と聲音として見る場合とを混ずるに似たり。言語には二通の標現あるを得て、記號としての意義と聲音としての表情とは必ずしも一致するを須ひざるや論なし。而も一致せざるものあるが事實なると共に、一致するものあるも事實なり。而して聲音に表情ある所以を思ふに、第一、起原についていふも、今日にては其の聲音と情と何の關係なきが如くなるものすら、初めは之れに言外の情の籠りしものあるを得べし。何となれば聲音には音別、抑揚等の稍々變化少なきものを始めとし、音幅、音色等の微妙にして而も後に殘りがたき幾多の屬性あり。是等が其の思想の調子を助くる力に至大なれば、之れを失ひ若しくは變じたる普通の言語は已に此の點のみにても原形にあらざるものといふを得べければなり。約言すれば言者は自家の情を表せんとして發したる叫聲も、再傳三傳するに及びては既に其の聲音の性質が初め表したる情と遠ざかり居ること多かるべし。第二、語の變遷上、初めは其の聲音と思想と近似したる點なかりしものが、後に至りて音の増減または變化によりて、却りて近似し來たることあるは、一方よりいへば、不完全なるものゝ一層完全となれるにて、ますく\音に一種の表情あることをたしかむるものなり。例へば初めは單に「なぐる」「すわる」とのみ言ひしものが、其の情の烈しき態を表せんとして「ぶんなぐる」「ぶつすわる」などいふに至れるたぐひ「ぶつ」といふ接頭辭は必ずしも「打つ」の原意にあらず。また「うちながむ」などの古言の派詞の變ぜるものとのみも見るべからず。「ぶつ」といふ音そのものに一種特殊の表情あるを知るべし。此の場合に「すわる」「なぐる」といふ想念が猛烈なる情趣を聯想するために、却りて之を「ぶつ」の音の上に移らせたるものなりといはゞ論を成さゞるの言となるべし。猛烈なる情趣を表せんが爲に「ぶつ」の音を附加すといふが事實なり。第三、彼は上の場合に「ぶつすわる」「ぶんなぐる」は「ぶつ」の音に表情あれども、其の源たる「打つ」には未だ表情なかりしを、打つことの猛烈さと「ぶつ」といふ音と相聯れて、始めて「ぶつ」の音に猛烈といふ表情ありと見んか。少なくとも「ぶつすわる」「ぶんなぐる」の域に於いては既に獨立せる音の表情あるなり。「ぶつ」より「打つ」を聯想し「打つ」より「猛烈」を聯想し始

是等の趣意によりて早くより摸聲説を「ばうわう」説(Bow-wow theory)といひ歎舞説を「ぷー〱」説(Pooh-pooh theory)といへり。即ち一は犬の鳴聲にして一は賤しみの意を表せる間投詞なり。("The Science of Language" Max Müller)。我が邦にていはゞ一は「わん〱」と名づくるの類なり。他は「ぴい〱」説といふべし。他を侮蔑して少女が「ぴいぴい」説ともいふべし。小兒が犬を指して「わん〱」をなすといふの類なり。ホイトニー氏は、此の名によりて、マクス、ミュレルは全く兩説を輕侮し排斥するものなりとしおもへらく「全く兩説を排拒したる後、伯林のハイセ教授が説に同じ、全天地には一貫の法則ありて、萬物すべて打てば響くとし、其の物其の質によりて特殊の音あるが如く、人間また本然の機能によりて、心中の理念を言ひ洒しある言語に表するの性ありとせり。之れを前例にならひて呼ばゞ「ちんどん」説(Ding-dong theory)ともいふべし」と。("Languages and Study of Language"――Whitney) 吾人の此所に至りて想ひ起こすは、韓愈が「送孟東野序」に「大凡物不得其平則鳴」といへる思想なり。尙ほマクス、ミュレルは後の著書に於いて「ばうわう」説といひ「ぷー〱」説といふ名が必ずしも嘲笑の意に非ざりし由を辯じて、本意を誤解せられたりといへり。

言語が表情を有すとの說に關しては、種々の論と論點とあり。ホイトニー氏は言語を社會の產物なりとするの立脚地より、表情說を斥けておもへらく「言語は各人が外より得たる記號のみ、他より學びたる習慣のみ。たゞ一種の記號によりて心內の作用を他に知らしむることを習得したるのみ」。言語と思想と同一物に非ざる限りは、一致するの理なしと。("Languages and Study of Language"――Whitney) また英のピール氏が說は「吾人はしば〱語が其の意味に適すると否とを音によりておのづから知り得るが如く思惟するの傾あり。たとへばグローン(Groan＝唸る)といへば、自然に深く重き聲をあらはし、スクリーム(Scream＝叫ぶ)といへば銳き聲をあらはすといふが如し。されども斯かる場合にさる聯想を音に伴はしむるは、想念の作用にして、その音がその想念を標する限り然るなり」と。("Philology"――J. Peile)

思ふに一切の言語が情を表するの音より發達したりとするは非なるべし。また今日其の音が情を表する如く感ぜらるゝのみの理由

殆んど完全の想念をなさず、漠たる感情に過ぎざるべければ、吾人は之れを表情といはん。表情的元素によりて明かなる意義の標示を作る。表情的元素とは聲音なり、意義の標示とは言語なり。但し重ねていふ、是れ言語の全體にあらず偶然的なるものゝ混入と、後世の變化變遷とは、表情的言語をして、僅かに一面の成立原理たるに過ぎざらしめしこと、當然の理勢といふべし。

又此の如くして或る程度まで出來上がれる言語が、言語として更に發展する次第を、通例分ちて三段となす。第一は孤立語(Isolating)すなはち各語が個々に一定の意義をなしたるまゝ、何の變化もなく、また「てには」「係り結び」などの媒介をも借らずして寄り集まれるもの、支那語の多數の如き是れなり。第二は貼合語(Agglutinative)すなはち個々の語を別なる一個獨立の聯結語によりて貼合せるもの、此は各國語中にもなほ其の形を存するもの多し。第三は曲折語(Inflectional)すなはち語尾の曲折によりて種々なる語法的關係を表し、貼合語の獨立せるものなきに至れるもの、今日の多數文明國の語は此の域にあるなり。されども往々にして文明國の語中、第一期の孤立語に類する語法存在することあり。此に於いてか英のセース氏の如きは、之れを以て曲折語の更に進みたるものと見、こゝに第四期、分解語(Analytical)といふを立てたり。("Principles of Comparative Philology."——Sayce)卽ち一旦曲折語まで發達せるものが、再び分解して語々孤立のまゝ、文章の前後の關係のみによりて曲折の意をあらはすに至れるものとするなり。此の點に關しては尙ほ後にいふことあるべし。

(參照) 英のマクス、ミュルは擬聲說に關し諧謔の一例話を引きて曰はく、嘗て一英人の支那に赴けるもの、卓上の皿に肉の盛らるゝを見て、その何肉なるかを知らんとすれども言語通ぜず。家鴨の肉なるかとの意を表せんがために肉を指して「くわく〳〵」(Quack-quack)といへるに、支那人立地に答へて「ばうわう」(Bow-wow)と。すなはち皿中なるは、犬肉なりしことを知り得たりと。又氏は

の言語ならざるものを立て、他は初めより直ちに言ひ廻しある言語の狀態を生ずとするにあるのみ。又一方よりいふときは第一說と第二說とも合するを得べし。獨のジーアェルス氏が、一は自然物の聲を摸し他は人間の聲を摸するの差のみといひ、米のホイトニー氏が、嘆聲說は摸聲說の結果なりといへるの意これなり。最後に以上の諸說と異なりて、偶然無關係の音を或る事物に附加したるものが、漸く廣く行はれて言語の性質を帶び來たれるもの、是れ言語の起原なりとする說あり。

蓋し此の中第三說の一部を除きては、いづれも言語の起原として相作用すべきものなるべし。小兒の場合若しくは今日に殘れる或る種の言語に徵するも、第一說が必ず幾分言語の起原を助けしは疑ふべからず。第二說はた、東西全く種族を異にし歷史を異にしたる國民の言語にして、往々相似たるものあるの例を思ひ、而して其の必ずしも人種の關係を尋ね、言語の分脈を尋ぬるを要せずして、人心の根柢に相合すべきものあるを思ひ、また吾人日常の言語中嘆聲より變化したりと想像せらるゝもの少なからずして、而も其の必ずしも吾人が逆へ觀るの誤のみにあらざるを思へば、嘆聲が言語の起原に與りしものなることは爭ひがたきに似たり。第四說は今日迹の追ふべきなしといへども、人聲の粗にして變化乏しかりし代にありては、必ずや前二說の事實を助くるに此の說の意を以てして、言語の起原を豐富にしたるなるべし。其の他少數の語が變化し變遷し分合して雜多の新語を成せる經路は、こゝに論ずるの要なし。たゞ吾人は上來の諸說を二大別して、言語に必然的と偶然的との二源あることを記憶すれば足る。必然說とは摸聲說嘆聲說天賦說の皆に通ずる特色として、言語そのものが意義と必然の關係を有すと見るの說なり。偶然說とは、言語と意義とたゞ偶然の結合に基くと見る第四の說なり。言語と意義とを必然の關係に基くとするは、言語が言語たるの前すでに意義を有すといふなり。而して言語たる以前の言語はたゞこれ聲音にあらずや。別言すれば聲音まづ意義あり標示ありて、はじめて言語となるなり。此の場合に於ける聲音の標示は、未だ

言語の研究は主として言語學の掌るところなれども、玆にはたゞ思想乃至辭といふものとの關係を明らむるに必要なる限り、先づ言語の起原、聲音の性質、其が音としての價値及び國語の結構等について一瞥すべし。すなはちおのづから言語學、(Glottology or Philology)發音學(Phonetics)の範圍より音響學(Acoustics)乃至語法學(Grammar)の範圍に及ぶなり。而してのち言語の變形たる字記の言語すなはち文に及び、言と文との地位を明かにせんとす。斯くの如くしてはじめて思想と言語との確たる關係を知るを得べし。

言語の起原については、古來種々の說あること、人の知るところなり。其の中の重なるは下の四なるべし。一に曰はく、言語はもと人間が鳥獸の聲其の他百般の音を摸したるより起こると。例へば杜鵑の鳴く音を「ほとゝぎす」と摸したるが移りて其の鳥の名となれりと見るの類なり。この說また摸聲說(Onomatopocial theory)と呼ばる。次の說は摸聲を斥けて、人間が情の自然の發動に伴へる嘆聲を言語の起原と見んとす。人間は必ずしも劣等なる鳥獸蟲魚乃至風聲水音の非情物に言語を習ふを要せず。自家が有する發聲機關によりて自家の情を言ひ出づるこそ當然なる言語の始めなるべけれといふなり。この說は嘆聲說(Interjectional theory)と稱せらる。これと似たるは第三の天賦說なり。人間は其が有する高尙なる發聲機關の發育によりて、生まれながら自家の思想を言表し得ること猶ほ金石の打てば響くが如きものなるべしと。されど第二說とても、嘆聲其のまゝを言語と見るにはあらず。嘆聲はたゞ言ひ廻しなき言語(Inarticulate language)たるに過ぎざれば、之れに飾をつけ言ひ廻しを加ふるに至りて、はじめて眞の言語となるものなり。而して此の飾づけ、言ひ廻しは、或は發聲機關の模樣により、或は偶然の摸倣によるものとせば、結局兩說は調和すべきものたり。たゞ異なるところは、一は發端に嘆聲といふ、眞

のことゝ聯想せざる前のことゝを混同せるもの、蓋し類同を認めて一旦隣接せしめたるものが再び相隣接して生ずといふと、斯くの如きものが更に新しき類同者を提起し來たるといふとは別なり。類同によりて聯想すといふことは、類同によりて曾て隣接せしめたりしものを再び隣接せしむるといふに過ぎずして、曾て隣接したるが故に今また隣接すといふを主とし、類同なるが故に隣接すといふことは聯想の場合に重きをなさゞるなりと。但し氏等は必ずしも聯想律を以て心の全局なりとするにはあらず。むしろ聯想律以外に意識の領域は尚は廣きを認めたり。("Psycholohgy, Descriptive and Explanatory"――Ladd)

ヴント氏の意、在來の聯想法は下の二點より見て根本的に批難せらるべし。(一)聯想派の心理學者は聯想といふことを單に想念の上にのみ限り感覺、知覺をば此の法則以外なる不可分の單位となせども、事實上さる事なし。一見單位と見ゆる感覺、知覺も仔細に分析すれば皆さらに單純なる成分の聯想法によりて復合せるものなるを知るべし。卽ち從來考へたりしよりも一層元素的なる聯想法の存在を認むるなり。(二)聯想といへば必然そが成分たる想念の再生といふことを豫定するものなるが、是れまた在來の說の如く、想念が保存せられて其のまゝ再現すとはいふべからず。實際に徵するも再生三生したりと思ひし想念の決して舊のまゝにあらずして、其の間他の想念又は感覺知覺より、種々の異元素を混合し來たるを見るべし。卽ち再生にあらずして實は新元素を加へたる新想念の生起せるなり。されば(一)の事情よりして、元素的聯想といふものゝあるをたしかめ得べく、(二)よりして在來の聯想といふ者が實は元素的聯想の結果たるに外ならざるを知るべし。斯くの如き意味にての聯想によりて得たる想念は空間的、同時的なり。通例聯想と呼び來たれるもの、卽ち時間的繼起的に想念の聯合するものは、薄弱なる一法たるに過ぎず。此の外に想念の融合(Fusion)といふものあり。これによりてこそ最も緊密たる想念の聯合は成し得らるべけれど。("Outlines of Psychology"――Wundt)

第三項　言語の性質(甲)

用ありて、雜多の刺戟をば常に一定の法則により一に統括せんとするの傾向あり。必ずしも過去の隣接のみを本とせず、却りて習慣上の隣接よりいふときは至密の關係あるものをも、別の方面より見て、分離すべきもの隣接せしむべからざるものと定むる場合もあるなり。知識といひ思索といふものに此の傾向あるは何人も否み得ざる所なるべし。

されば上來の論を結束して、思想とは論理上、心理上、殊に思索的と聯想的との一切を包有するものなりといふも不可なし。たゞ其の如何に包有するかといふ心理上の根本問題及び心理、論理の兩面が正當に占むべき地位關係等に至りては、後に別に之れを細論せざるべからず。こゝにはたゞ通じ易き說を假用せるのみ。

（參照）　論理的法則と聯想的法則との關係は重要の問題たり。前にもいへる如く一面論理學が近時やうやく研究の方面を轉ずると共に、心理學またヴント氏等が提唱するところの新心理學（New Psychology）と呼ばるゝものありて、主として從來の聯想派すなはち想念派心理學の埒外に立たんとす。恰も新論理學が個々なる思念の聯合よりも其の一團となるところに重きを置くと同じく、新心理學も個々なる想念の聯合よりも、其が相連なりて全體の意識として流れ行くところに重きを置くの趣あり。此等みないかほどまで從來の說と相背馳すべきかは、吾人の研究を要する點なれども、細論は後に讓りて、下に聯想法に關する說一二を抄すべし。これまた多くは隣接、類同、對照の三を擧ぐるを普通とし、或は單に隣接、類同の二のみを取り或は之れに因果（Cause and Effect）の一則を加ふるものなどあり。其の他手段と目的との聯想（Means and End）記號と實物との聯想（Sign and Things signified）等たら數へたるものあり。隣接、類同、對照の三はアリストートルの昔よりありしところ。近時はむしろ之れを同時（時間的及び空間的）の一つに約するを進める觀方とするに似たり。

ラッド氏はおもへらく、是等の聯想律は要するに隣接の一に合せしむるを得べし。對照とは畢竟類同を限定したる後のことにして、類同といふことなれば不同といふことなく不同といふことなければ對照といふいとなし。而類同を聯想の原則とするは聯想したる後

なる想念の離合のみの如く觀たるの弊あり。成立し居る知識をば一團として、其の一團內に如何に必然なる展開法則の行はれ居るかを見るを可とす。實際の判斷には必ずしも主辭なきことあり、賓辭なきことあり。而も皆必然なる知識すなはち眞實世界の法則の宿れるものたるを妨げずと。("The Essencials of Logic"——Bosanquet)

之れを要するに論理上よりいふの思想は、心理上にいはゆる思索なり、抽象作用に屬する一系の思想なり。今兩者の關係を考ふるに、まづ範圍に於いて種々の異同あり。一見論理上の思想は心理上の思想よりも狹きは言ふ迄もなきが如くなれど、必ずしも然らず。夫の一切の心理現象を知力的なる想念の作用に基づくとし、想念の離合する方式を論理に求めて、論理的活動を心理學の根柢となさんとする學派に取りては、論理的といふことは直ちにすべての思想の本性にして、直接間接これに漏るゝの思想は無きなり。されども今日此の種の說の勢力なきは事實にして、偏するところあるを嫌へばなり。吾人の心內には必ずしも論理的法則に合せざる思想の生滅起伏するものあること爭ふべからず。たゞ意識の根柢に統一性ある事實と相關して、想念分合に一部の斯くの如き法則もあるは明かなり。しかも其の法則が如何なる根據によりて必然的なるかは別の問題たるべし。尋いでは英國其の他近世の心理學界に多く行はれたる聯想的心理學派あり。知力的なる想念の離合を以て一切の根本となすは前者と同一なれど、異なるは其の想念離合の法則を論理的と見ずして、聯想的と見るにあり。聯想的とは嘗て相隣接して起こりし想念は、後日必ず相尋ぎ若しくは相竝びて生起し來たるものとするより發する法則にして、あらゆる思想は一として此の法則に合せざるものなしとするなり。この派の見地よりするときは、論理も畢竟一種の聯想法に外ならず、一歩を進めては、天地間の眞理と稱せらるゝ原因結果の理法の如きをすら、ヒュームと共にたゞ我が聯想上の習慣の、客觀に移れるものに過ぎずとするを得るなり。されども是れまた心作用の全面を蔽へるものとなし難し。吾人の心に統一作

り。主部とはその命題の發足點となれる概念にして、「紫はさめ易きものなり」といふときの「紫」に相當し、從部とは主部に對して關係を判斷せらるゝ概念「さめ易きもの」といふに相當す。繋部とは主從の兩部を關繫せしめ交渉せしむるものにして、此の場合に於ける「なり」といふ判定辭に外ならず。

　概念が判斷に進むの順序ほゞ上の如し。而も思想の論理的發展はこゝに止まらず。二個以上の命題が複合して新たなる別の判斷を生ずるときは、之れを推理といふ。たとへば「此の帛の色は紫なるが故にさめ易し」といふときは、單に「紫はさめ易し」といふに比して複雜なる判斷を示せるものなり。若し之れを單純なる判斷に分かつときは、「此の帛の色は紫なり」といふ判斷と「此の帛の色はさめ易し」といふ判斷との二つを含む。而も二者は「故に」といふ一辭によりて相關繫し、後者は前者より推し測られたるものなることを表す。「紫なり」といふより推して「さめ易し」と判斷せるなり。之れを推理といふ。されば此の推理の關係を論理的に十分明瞭ならしめんとせば、先づ「凡て紫はさめ易きものなり」(大前提Major Premise)といふ一判斷を立て、次に「此の帛の色は紫なり」(小前提Minor Premise)といふ判斷を立て、而して後はじめて「故に此の帛の色はさめ易し」(斷案(Conclusion)といふ判斷に達すべきものなり。斯かる推論の方式を三段論法(Syllogism)と稱す。

(參照)　こゝに論理といへるは所謂形式的論理なり。されども近時西歐の學問界には舊來の形式論理を甚だ價値なきものとし、新方面に向かひて研究の地を拓かんとするの氣運あり。たとへば英のブラッドレー氏、ボザンケ氏等の如きも此の潮流に棹せるものと見るべし。ボザンケ氏が書中の意、まづ知識を心内に展開せる眞實の世界なりとし、而して此の眞實世界に必然の關屬法則あり、之れを論理と名づく。されば論理とは在來の說の如く空なるものにあらず。形式的といふの故を以て如何なる思想をも其の同一模型に入れんとするは非なり。或る度までは內容によりて變化せらるゝ事實とす。從來はあまりに知識そのものゝ統一的構成を外にし、個々

によりても知らるべし。すなはち「紫はさめ易きものなり」といふは、「紫といふ概念中にはさめ易きものといふ概念を含めり」といふを簡にせると異ならざればなり。此の意味よりいふときは判斷はたゞ既知の知識を論證するのみにして、全く新しき知識を作り出だすものにはあらず。之れを概念の展開ともいふべし。されども之れに種々の方式要件あり。精しくはこゝに論ずべからざれど、前掲の例によりて知らるゝ如く、「さめ易きものなり」といふと「さめ易きものならず」といふと、判斷の方式に相違あり。前者は「紫」といふ中より「さめ易きもの」といふ概念を取り出だし改めてたしかに之れを附與したる所に判斷論證の價値あり。紫がさめ易き色なることを殊さらに肯定したるなり。之れを肯定命題(Affirmative proposition)または肯定判斷(Affirmative judgement)といふ。後者はすなはち「紫」といふ概念中より「さめ易きもの」といふ概念を取り出だして、斯くの如く兩者を結合せしむるは誤謬なれば分離せしむべしと論證せるなり。之れを否定命題(Nagative propositon)または否定判斷(Nagative judgement)といふ。また別の方面より見るときは、「紫はさめ易きものなり」といふと「紫ならばさめ易かるべし」といふとは判斷の形式異なり。前者は規定命題(Categorical proposition)といふべく、後者は假定命題(Hypothetical proposition)といふべし。また若し「紫はさめ易きものなり」といふと「紫は紅と青とより成る」といふとを比ぶれば、「さめ易き」とは紫といふものより離れて存立すべからざる附屬物卽ち屬性を取り出だせるに外ならざれど、「紅と青」とは紫の屬性にあらず、成分なり、獨立しても存し得るものなり。故に前者はむしろ「紫」といふ中より既知の一屬性を抽象し分析したるものと見るべく、後者は新たに紅と青との二成分を紫といふ概念に綜合して複雜ならしめたりと見るべし。一を分析的判斷(Analytic judgement)といひ他を綜合的判斷(Synthetic judgement)といふは此の故なり。

判斷若しくは之れが表現たる命題の成立する要件は、通例三とせらる。主部(Subject)從部(Predicate)繫部(Copula)これな

之れに知力的、審美的、道德的等の種類あり。情の發展は此に至りて極まる。意の方面にては、發意が或る目的に向かひて運動を起こさんとするの衝動といひ、おのづから自衛の趣意にかなひて殆んど反射的に運動を起こすを本能といひ、或る事物を明かに欲求するを欲望といひ意志に至りて其の發展の極に達す。意志とは明かに或る事物を目的として、之れに向かひ相當の運動を開始せんと決心し努力するの謂なり。

以上は大要を摘めるのみにして重要なる心理上の問題は皆此の外にあるや論なし。(" Psychology. Descripive and Explanatory "
——Ladd)

論理上より思想を解するは、やがて純粹なる知力作用の上より之れを觀るなり。これまた假りに從來の論理學が示すところによりて之れを說明せんに、上の心理的說明について言へば、概念、判斷、推理等の範圍これのみ。此の種思索の形式が果たして論理學のみの論ずべきものなるか。或は心理學も人心の必然作用の一部なりとして之れに與かるべき者なるかも問題なれど、精しき論は後に讓りてラッド氏の如きは、論理學も畢竟心理學の一部に外ならずして當然之れを心理學の領分なりとしたれど、獨のヴント氏の如きは、寧ろ思想の形式は心そのものゝ法則にあらずして其の內容たる外界の法則に外ならずとせんとせり。さて論理學者は、まづ概念すなはち抽象的なる想念を其の第一步とし、これに判斷を加へて言語に表し命題(Proposition)を作る。例へば此所に「紫」といふ一概念ありとせんに、吾人はこれに「さめ易きもの」といふ他の概念を結合して、「紫はさめ易きものなり」といふ判斷を下だすを得べし。又或は「紫はさめ易きものならず」ともいふを得べし。同じく判斷なり命題なり。而して此等の場合に「さめ易きもの」といふ概念は畢竟「紫」といふ始めの概念が已に含み居れるを、唯取り出だして兩者の關係を明かにせんとせるものなること、「紫はさめ易きものなり」「紫はさめ易きものならず」などの口吻

意識の根本要件となり、判斷は進みて知識の發展する必要條件となるとせり。さて心理要素即ち意識の最も單純なるものは、感覺にして、之れと殆んど分かちがたけれども而も別なる原始的意識は感情なり。感情に快苦といふ二大性あり。次に同じく最單純の意識として擧ぐべきは、發意(Conation)なるべし。此は殆んど前にいへる注意と密に相接して、感覺や感情や一切の心的現象の根本力の謂なり。意識の發動力の方面より見たるものなり。以上三者、すなはち感覺と感情と發意とは、前にいへる意識の三要素、知情意の最初級にして、言ふまでもなく實際には是等皆相結び相依りて吾人の心に存す。たゞ研究上便宜のために之れを引き離せるのみ。更に進みては、第一に注意すべきもの、想念(Idea)あり。想念とは感覺、感情、發意は勿論、其の他あらゆる個々なる意識の再現せるものを總稱するの名にして、意識の再現作用(Representation)に基づけるなり。又この想念に聯想作用(Association)ありて、諸多のもの相聯合するを得。此に於いてか知覺を生ず。知覺とは外よりの刺戟に應じたる感覺を本とし、再現感覺即ち想念の聯合して一團となるの謂なり。また記憶 Memory)といふものあり、想念が保持せられ、再現せられ而して其の過去に起こりしものなることを再認せらるゝの謂なり。之れと似たるものを想像とす。たゞ必ずしも其の過去に起こりしものなることを認知するを要せず、種々なる想念が或は漫然、或は整然組成せらるゝをいふ。思索とは概念、判斷、推理(Reasoning)の三段を總稱するものにして、概念とは想念の類似せるものが屢々反復せらるゝにつれ、其の共通點のみ殘留したる抽象的想念に外ならず。判斷とは前にいへる原始的判斷の進みたるものにして、概念と概念とを綜合し其の關係を定むるものなり。推理とは判斷と判斷とを綜合して其の關係を定むるものなり。以上は主として知の方面の發展なるが、更に情の方面より見るときは、前に言へる單純なる感情が數多結合し且つ其のために全く新たなる者をすら生じ又は想念、思想等と種々複雜なる聯合をなして、こゝに情緒または情念(Passion)を生ず。情念とは要するに情緒の反復せられて習慣となり、意志の力によりて支持せらるゝもの即ち鞏固なる情緒に外ならず。情緒はまた數多相結合して別なる情緒を現ずることあり。次に情の最も複雜なるものを情操(Sentiment)とす。情緒の一層多く知的要素を加へたるものにして、

み。吾人は紅白を視、寒熱を感ずると共に、之れが快苦の調子をも感ず。感情とは是れのみ。吾人の喜怒好惡など稱するものは情緒なり。吾人の花を見、山を見、聲を聞き、物を弄するとき、明かに其の當體の、心に描き出ださるゝは知覺なり。腦中のみにて、知覺の作り出ださるゝは想念なり。知覺の上に統同辨異の作用加はりて、同一普通の形體のみ心に留まるは概念なり。二個以上の概念を或る關係によりて連結するは思索なり。饑えて食はんことを欲し、倦みて遊はんことを望むは欲望なり。此の欲望を實行し若しくは實行せざらんと決心するは意志なり。種々なる過去の感覺、知覺等を喚起して之れを或る關係に結合するは想像なり。廣く思想といふときは、斯くの如く雜多なる意識的現象の幾何づゝか相聯結せる狀態を示す。尙ほ便宜のため之れを概括すれば、知情の兩面ともいふべし。知情意と三分するも不可なけれど、意は必ずしも獨立せしむるの必要なし。また感覺といひ知覺といふは、直接外界につらなるの想念にして、概念といひ思索といふは、想念内の別種の作用に外ならざれば、想念といふを廣く解して知的方面の一切の心念を指すものとし、情的方面はた、感情情緒を合して廣く感情といふときは、一切の思想は想念と感情とに盡くともいふべし。此の場合に於ける意的方面は、すべて兩者の中に合せしめたるものと知るべし。

（參照）　尙ほ此等の諸現象が發生する次第を說明すれば、趣意一層明かなるを得べしといへども、心理の科學的說明は、本書が半ば據りて以て立脚地となさんとするものなるが故に、後段に於いてほゞ吾人の取るところを別論すべし。こゝには後の參照のため、現今の心理學者中むしろ公平を以て勝れりと信ぜらるゝ米のラッド氏が所說の大要を下に拔萃すべし。

氏は先づ意識の分類に於いて、在來の知情意三別法を取り、是等の複雜なる意義の發生する根本には、注意（Attention）と判斷（Judgement）と（卽ち外界の刺戟を受くるの力と之れを判別するの力）との極めて原始的なるものなかるべからずとし注意は凡ての

平易にいへば、思想とは人心内の現象なり。之れが性質を研究するの法こゝには四面あり。其の一は哲學的にするもの、卽ち吾人が知識の根本性質を研究するものにして、所謂認識論の範圍に屬す。其の二は論理的にするもの、主とするところは、これまた人心の知に關する方面にして、若し認識論が題案とするところを知識の內容なりとせば、是れは專ら其の外形よりするものなり。卽ち知識の運轉せらるゝ形式よりして思想の性質を研究す。其の三は心理的といふべし。重に心理學が示すところの經過により、思想の成立する次第、及び其の成分を硏究す。其の四は修辭的にするもの、前三面より論定したる一般普通の思想が、美辭學上如何の條件を帶び來たるかを明かにす。以上四方面の中、哲學的方面はこゝに審かに論ずるを得ず、また論ずるの必要なしと信ずるが故に、下にまづ論理的及び心理的の兩面について、思想とは如何なるものなるかを究め、之れが言語との關係を密にしたる後、美辭學上の要件に及ばんとす。

心理上より思想の範圍を觀るときは、いはゆる意識的現象のすべてを之れに包括す。意識的現象とは、吾人の心內に起伏する一切の思念を總稱する者にして、假りにまづ舊來の心理學が說くところに從はんに其の極めて微なる者は、衝動(Impulse)本能(Instinct)注意(Attention)などより感覺(Sensation)感情(Feeling)情緖(Emotion)欲望(Desire)意志(Wille)知覺(Perception)想念(Idea)概念(Conception)思索(Thoughts)想像(Imagination)の如きに至るまで、すべて意識の範圍內にあり。吾人若し心の中に、一事を思ふとき、之れに伴ひて何とも言ひ知らぬ一種の活動、たとへば衝き出でんとするが如き傾向を感じたりとせば、是れ衝動なり。吾人は生まれながらにして、母乳を吸ひ、危害を避くるの心あり。之れを本能といふ。吾人は隨意に一事を考へまたは考へざるを得。なはち注意を一より他に轉ずるなり。吾人は日常眼に紅白を視、肌に寒熱を感ず。感覺とは是れの

なも成さず文をも成さゞるは勿論、言あり文ありと假定するも、而もなほ漫なる痴人の囈語、空なる鸚鵡の人語と擇ぶところなきなり。痴人の囈語、鸚鵡の人語には、其の語が普通標示する所の意義と、言者が當時の思想とに一致の目的なく意志なし。故に若し是等のものを美辭として取扱はんとせば、言者の思想を離れて、別に言辭そのものが表出する思想をこれに引きあてざるべからず。玆に至ればすでに思想無きにあらざるなり。結局思想無きところには眞の言語なしといふべし。

また思想あるも、之れを言語に標すと限らざるときは、啞者の手眞似も思想を標するものたり、演說家、俳優等の身振も思想を標するものたり、繪畫彫刻音樂の類皆然らざるなし、特に辭といふ者と是等との區別なきに至らん。言語が辭の必要條件たるや明かなり。但し吾人が普通に言語と稱するものゝ中には、多少身振、手眞似、繪畫音樂等の分子を混ぜざるにあらざるも、其の主とする所は聲音字記にあり。

（參照）英のマイルス氏が平易なる言語學上の近著に言語の種類を列擧して、（一）身振の語、此の中には手足身體眼口等の動作より此等の動作を復寫したりとも見るべき繪畫彫刻の類までをも含む。（二）音樂の語、此は音樂によりて意を述ぶる場合なり。（三）音のみの語、此は思想をなさゞる嘆聲などの場合なり。（四）音なき語、此は文字に記したるものゝ如きをいふ。とし、而して此等の多數が常に結合して實際の用をなすことを說明せり。在來の說を網羅して、初學者の一覽に便なり。（"How to Learn Philology."—Miles）

斯くの如くして、辭が外面に對する關係、すなはち辭と辭ならざるものとの範圍を劃定し得たりとせば、吾人は更に內面にむかひて辭中の區分を觀るの要あり。其の一は思想の性質に基くものなり。其の二は言語の差別に基くものなり。前者は辭の內容的區分に屬し、後者は其の外形的區分に屬す。

第二項　思想の性質

學也といふの、殆んど同辭を繰りかへすに似たるも、これがためのみ。

されども、少しく仔細に考ふるときは、この形式的定義中に、幾多の複雜なる問題が、なほ解決を得ずして包含せらるゝを見るべし。辭の美なる所以といふも、第一、この場合に於ける辭とは如何なるものなりや。第二、美とは如何なる狀態なりや。第三、學といふにも幾やうかの解釋あらざるか。吾人はこれらの疑問を解釋することによりて、漸次一層明瞭なる美辭學の定義に到達すべし。

（參照）希臘のアリストートル曰はく、「吾人は美辭学を下の如く定義すべし、曰はく一切の題目に共通して、勸說のあらゆる手段を考察する技能なりと。蓋し他のすべての技術は皆それぞれに司る所の特殊の題目ありて、之れを敎へもし勸說もするを主とすれば美辭學の爲す所をば爲す能はず」と。("Rhetoric"——Aristotle.)

英のホエートリーの定義に曰はく、「一事を證明するに恰當なる諸論法を索むること、及び其を巧みに整理すること、是れを措きては美辭學の本領なしといふべし」と。("Elements of Rhetric"——Whately.)

第二節　辭とは何ぞ

第一項　辭の要件

辭の二要件——想なければ空也——言語に非ざれば辭を成さず——語の種類

辭とは如何なる者なりや。之れを解釋するは卽ち美辭學の材とし對境とする所を明かにするなり。吾人はまづ大體に於いて下の如く言ふを得べし。曰はく、辭とは人間の思想を聲音若しくは字記に標せるものなりと。すなはち辭といふ中には人間の思想と、其を聲音若しくは字記に限り標することゝの二件を含む。蓋し聲音若しくは字記あるも、思想なきときは、言

第二章　美辭學とは何ぞ

第一節　美辭學の第一定義

形式的定義――學術の名――辭と美の學

美辭學の定義を求むるは、また美辭學とは何ぞやと問ふに等し。今若し之れに答へて、定義といふものゝ往々にして然るが如く、極めて形式的なる一解を下ださば、次の如くなるべし。曰はく、美辭學とは辭の美なる所以を研究するの學也と。然れども是れ第一の定義のみ。吾人は未だ之れを以て滿足すべからず。

思ふに、今日の我が學問界は、百事草創に屬して、學術の名の如き、多くは全然之れを新設するの必要あり。隨つて歐米の學者等が、何百年來の歷史によりて、已むなく曖昧不便の舊名を襲用し、間々名と實と相副はざるの弊に惑ふが如きは、我が邦に無き所とす。此の一事、やがて學術の定義法に幾多の影響を及ぼす所以なり。エスセチックス(Aesthetics)の、初めは感に關すといふ義に過ぎざりしもの、獨のバウムガルチン以後、うつりて美學といふ名に用ひられ、ケミストリー(Chemistry)の、本來は煉金術といふ語なりしもの、終に化學といふ一科の學術の名に轉じたるが如きは、皆歐米に於ける學術の起原と歷史とを提示するの好例たること、人の知る所に屬す。定義の必要も、概ね是等の事情に由れり。レトリックの、古へ能辯術すなはち演說法といふ義なりしもの、今は移りて寧ろ能文學といふ義に解せらるゝに至れるも、またこれに他ならず。されば今日我が邦にありて、エスセチックスを美學又は審美學と譯し、レトリックを美辭學と譯するときは、其の間既に許多の解釋と工夫とを含みて名は直ちに定義を示すまでに簡明適切のものとなるなり。美辭學とは辭の美なる所以を研究するの

本にては流暢といひ、懸河の辯といひ快辯流るゝが如しといひ、淀みなしといひ、たて板に水などいへる類、すべて水の淀みなく流るゝ姿と辭の滾々として盡きざる姿とは、古今東西にわたりて、淺からざる因緣を有するなり。

尙ほ、往時にありては美辭學は只一の能辯術たるに止まり、其の領域の甚だ狹隘なりしこと、前段に掲げたる話術の名によりて推知するを得べし。然るに、年處を經ると共に、能辯術以外、能文術の一面やうやく頭をもたげ來たり、遂に美辭學の主要部は、これによりて占めらるゝに至れり。されば、斯の學の本領には、おのづから古今の變遷あるものといふべし。精しくは後節に於いて明かならん。

プレイア博士はこれを應用美學の一部とし、さながら批評法の如く說きなせり。セレミン博士はこれを倫理學に屬せしめて能辯な一の德のやうに論ぜり（"Science of Rhetoric"――Hill.）

兹に美辭學とは、英語にレトリック（Rhetoric）といへるを意譯せるなり。此の譯名、何人の創意に成れるかは穿鑿の限りにあらざれど、熟語としては、支那、魏の曹植が「辯道論」に「溫顏以誘之、美辭以導之」などいへる、よく其の意にかなへり。近く初めてこれを書名に用ひたるは、高田早苗氏の「美辭學」にして、尋いでは坪内雄藏氏の「美辭論稿」などあり。其の他、修辭學といふ名亦一般に用ひらる。通俗なる點に於いては此の名稱を却りて優れりとするに似たれど、要するに皆未定の案たるを免れず。修辭といへる語は、何人も知る如く、「易」の乾卦、文言の條に、「君子進德修業。忠信所以進德也。修辭立其誠、所以居業也」とあるを始めとし支那にても早くより熟して用ひられ、之れを書名にしては、「修辭鑑衡」など名づけたるあり。我が邦にても、一種の語法書に、「修辭通」など命名したるものあるを見る。されども、本書は、定義を立つる上の便宜と精確とより打算して、しばらく美辭學の名を襲用せり。支那にては、文則、文筌等の名目また略ぼ同じき場合に用ひられたれど、美辭學、修辭學等の精確なる稱呼に如かざるや萬々。

西洋に於いては、レトリックの稱呼あること久し。其の語原は希臘語のレオ（ῥέω）に基づくといふ。レオはもと水などの流るゝ義にして、人間の談話がさながら思想の流れ出づるに似たりとの聯想より、遂に移りて、此の語に「話す」といふ義を生じ、「レオの術」すなはちレトリックは、直ちに「話術」の義と解せらるゝに至れるなり。また單にこれをオレトリー（oratory）と呼ぶことあり。オレトリーとは、演說又は能辯術の謂にして、話術といふと大差なく、語原はた其の「レ」といふ音を殘せる點に於いて同一なるを見る。その他近世の英語にても、能辯を形容してフローイング（flowing）流るゝ、溢るゝといひ、目

第一編　緒論

第一章　美辭學の名稱

美辭學は文章の美を研究するもの也——文章は一の美術也——美辭と修辭——レトリック——能辯と能文

美辭學また修辭學とも稱す。辭を修飾して美ならしむる理を說くもの卽ち一箇の文章學なり。而して文章は一面の美術なり。

蓋し美辭學といふ名は未だ全く熟したる者に非ず。隨つて世上なほ其の意義を疑ふ者あるべく殊に美學、語法學など稱する者との關係に至りては極めて明かならざるものあるべし。是れ必ずしも今日の日本に於てのみ然るに非ず。斯の學が美學、論理學、倫理學等に對する關係は、古來彼の地にありても專門の學者等が屢々論ぜし所、現になほ美辭學研究の途に橫はれる一大題案たらずんばあらず。吾人亦後に於いて此の點に言ひ及ぶべしといへども、要するに文章は一面の美術なるが故に、之れが理を論ずるの美辭學は、直ちに一箇の美術論ならざるべからず。而して美術論より歸納し得るものは美學なり。されば本書の計畫は、美辭學によりて文章の上にあらはれたる美を研究し、以て之れを美學の系統に納めんとするにあり。

（參照）米國のヒル氏曰はく、「ホエートリー博士は美辭學を論理學の一部とし、辯論の地步を見出し、及び其を序づるの術となせり。

凡例

一美論は本書の究極に關するものなれども、別の一科とせざれば、意のある所を悉しがたし。されば其の叙するところ、吾人が今日までに於ける研究の計畫と結論を舉げたる上に止まる。殊に美の科學的方面に關する一節と、前人の説の批評に關する一節とは、著者が外遊の期に迫られて、粗中の粗に流れたるもの、他時の補修と別書の細論とを期して、讀者の寛恕を得んとす。

一若し夫れ美論の要旨に至りては、當時に於ける著者一家の見を本とす。補綴以外、世の教を請ふべきものあるを信ずるなり。

一書中用ふるところの文章は、雅文體によれり。是れ目下に於ける我が標準文體のなほこゝにあればなり。

一修辭論上の用語、文例の出所等に關しては、坪内逍遙先生の教を受けたるもの多し。こゝに特書して感謝の意を留む。

明治三十五年三月

著者識

凡例

一此の書、全卷の結構を緒論、修辭論、美論の三編に分かち、淺く廣きものよりして、順次深奥の所に達せんと試みたり。されば緒論に於いては、論理學、心理學、言語學、語法學等、およそ基礎となるべき諸方面にわたりて、概般の知識を備へ、且つ穩當を旨として、必ずしも新意の多きを欲せず、在來諸學者の説中、宗とするに足るものを選びて、專ら之れを援引するに力めたり。論中拔鈔の多きは此の故にして、衒耀の嫌ひを避けず、一々出所を擧示したるも、初學者をして便宜其の源に溯るを得しめんがためのみ。

一但し基礎たるべき諸方面に關する吾人の見も、必要なる限りは、併せて提起するを怠らざりき。全體の組織、根本の原理、分類批判の立脚地等に至りては、すべて新意に則れり。此の點に關しては、敢て大方識者の是正を得んとするものなり。

一修辭論はむしろ趣味を重しとし、以て讀者を科學的分解の煩累と相忘れしめんとせり。文例の多きと長きとを厭はざりしは、此の意に基づく。讀者之れを以て一種の美文集と見るも可、古人を活剝して倣ふ所に資せしの罪は、みづから甘んずる所なり。

一修辭論の材料は、大抵嘗て東京專門學校文科講義錄に掲げしものを襲用せり、彼にありては、たゞ古來歐洲の美辭學者が組織し來れる系統を折衷し研究の材を我が文學に集めんとせるに過ぎず。本書これが組織を改むるにあたり、材の上にも全く新たなる分解説明を加へんと期せしが、意を果たさゞりしもの十の八九に及べり、漫然臚列の弊に陷れるもののあるは是れが爲めなり。他日の更訂に待つの外なし。

序

沈思精研の餘に成れる抱月君が新美辭學一篇は我が國に於ては空前の好修辭論たり、彼方の類著に比するも周到なる修辭法に兼ぬるに創新なる美辭哲學を以てしたる、證例の東西雅俗にわたりて富贍なる、その例空し、斯學に志すの士は此の書にすがりて益する所いと多かるべし

本篇印刷の半にして著者は外遊の途に上りぬ、代りて校正の餘れるを卒ふるとて端書す

三十五年五月　逍遙

新美辭學

抱月全集第四巻目次　終

第三編　美論

第三章　文體論……一九九

第二編　修辭論

抱月全集第四卷目次

新美辭學目次

第一編　緒論

凡例

一、本集は故島村抱月氏の文藝上の業績を永久に傳へるため編纂したものである。

二、本集はすべて　卷、第一卷及第二卷『文藝評論』第三卷『美學及歐洲文藝史』第四卷『新辭美學及文學概論』第五卷『飜譯』第六卷『創作』第七卷『文藝雜纂』第八卷『隨筆日記書簡』の順序である。

三、本集全體の編輯について金子馬治氏を顧問とし中村吉藏、片上伸、相馬昌治、中村將爲、本間久雄の五名各その勞を分つた。

但し第一卷所載の『抱月島村瀧太郎先生小傳』は相馬昌治の筆になつたものである。

又第三卷の編輯は本間久雄主としてこれに當つた。

四、本集の出版については高田早苗、坪内雄藏兩先生を始め、早稻田大學出版部、春陽堂、新潮社、金尾文淵堂、南北社、忠誠堂等の厚意を受けたところが多い。こゝに明記して謝意を表す。

五、本集の裝幀は抱月氏の令孃君子の手に成つたものである。

第四卷『新美辭學』及『文學概論』の編纂について

島村先生の『新美辭學』は明治三十五年五月に早稻田大學出版部(當時東京專門學校出版部)から出版されたもので、先生の學者的著述として最も經つたものゝ第一である。そしてこの書が、いかにわが學界に重要な位置を持つてゐるかは、坪内逍遙先生の序文によつても明かであらう。實際この書の如き永久に傳へらるべきわが學界屈指の名著であると信ずる。

『新文章論』は嘗つて雜誌『文章世界』に連載されたもの、『文章雜考』中の諸編も、其の當時各種の雜誌に載せられたもの、何れも文章に關する先生の見解を示したものであるといふ意味から、この一卷に收めることとしたのである。

『文學概論』は嘗つて早稻田大學出版部發行の文學科の講義錄に載つたもの、第三卷所載の『文藝概論』及び『歐洲文藝思潮』と併せ讀まるべきものである。

本卷の口繪「敎室に於ける島村先生」は早稻田大學文學科敎室に於いて先生が美學を講義されてゐるところの撮影で、大正三年度同大學文學科卒業のアルバから轉載したものである。

大正八年九月十五日

本間久雄

教室に於ける抱月氏

抱月全集
第四巻